



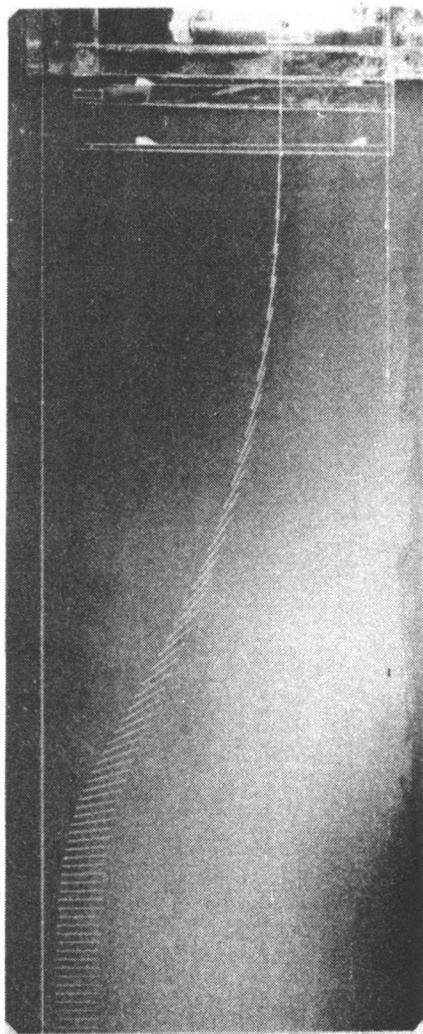
Title	流体中における線状体の運動に関する研究
Author(s)	千葉, 訓司
Citation	大阪大学, 1980, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/2331
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

流体中における線状体の運動に関する研究



昭和 55 年 5 月

千葉 訓 司

目 次

第1章 緒 論	7
第2章 静止流体中における線状体の運動	7
2.1 緒 言	7
2.2 静止流体中における線状体の運動に関する理論	8
2.2.1 基礎理論	8
2.2.2 線状体の運動への適用	12
2.2.3 線状体の運動の数値計算	16
(1) 線状体に作用する外力および回転モーメントの計算	16
(2) 計算条件および方法	19
2.3 線状体長さの影響	21
2.3.1 線状体の落下軌跡	21
2.3.2 線状体重心の速度および加速度	25
2.3.3 線状体の姿勢および角速度	28
2.4 線状体直径の影響	29
2.4.1 線状体の落下軌跡	29
2.4.2 線状体重心の速度および加速度	30
2.4.3 線状体の姿勢および角速度	32
2.5 初期角度の影響	33
2.5.1 線状体の落下軌跡	33
2.5.2 線状体重心の速度および加速度	35
2.5.3 線状体の姿勢および角速度	37
2.6 線状体比重量の影響	38
2.6.1 線状体の落下軌跡	38
2.6.2 線状体重心の速度および加速度	40
2.6.3 線状体の姿勢および角速度	41
2.7 流体の温度の影響	42
2.7.1 線状体の落下軌跡	42

2.7.2	線状体重心の速度および加速度	44
2.7.3	線状体の姿勢および角速度	47
2.8	空気中における線状体の運動	49
2.8.1	線状体の落下軌跡	49
2.8.2	初期角度の影響	52
2.8.3	線状体直径の影響	59
2.8.4	線状体長さの影響	62
2.9	静止流体中における線状体の落下実験	66
2.9.1	実験装置および方法	66
2.9.2	写真面上から真の落下運動を求める方法	69
	(1) 落下運動の読み取りおよび初期位置決定方法	69
	(2) 被写体距離の変化に対する修正方法	70
2.9.3	線状体の落下特性を求める方法	72
2.10	線状体長さの影響	74
2.10.1	線状体の落下軌跡	74
2.10.2	線状体重心の速度および加速度	77
2.10.3	線状体の姿勢および角速度	82
2.10.4	最終落下位置での線状体の配向	84
2.11	線状体直径の影響	85
2.11.1	線状体の落下軌跡	85
2.11.2	線状体重心の速度	87
2.11.3	線状体の姿勢	89
2.12	初期角度の影響	90
2.12.1	線状体の落下軌跡	90
2.12.2	線状体重心の速度	92
2.12.3	線状体の姿勢	92
2.12.4	最終落下位置での線状体の配向	93
2.13	線状体比重量の影響	94
2.13.1	線状体の落下軌跡	94
2.13.2	線状体重心の速度	95

2.13.3	線状体の姿勢	97
2.14	流体の温度の影響	98
2.14.1	線状体重心の速度	98
2.14.2	線状体の姿勢	99
2.15	空気中における線状体の運動	100
2.15.1	初期角度の影響	100
2.15.2	線状体直径の影響	104
2.15.3	線状体長さの影響	106
2.16	結 言	108
第3章	静止流体中における線状体群の運動	111
3.1	緒 言	111
3.2	静止流体中における線状体回りの流れ	112
3.2.1	実験装置および方法	112
3.2.2	線状体回りの流れ特性	115
3.2.3	姿勢の変化に対する流れ状態の変化	118
3.2.4	線状体直径の影響	124
3.2.5	線状体比重量の影響	126
3.3	静止流体中における線状体群の落下実験	127
3.3.1	実験装置および方法	128
3.4	複数の線状体の落下特性	134
3.5	初期角度の影響	141
3.5.1	$\alpha = 20^\circ$ の場合	141
3.5.2	$\alpha = 40^\circ$ の場合	143
3.5.3	$\alpha = 60^\circ$ の場合	145
3.6	初期位置における線状体の相対位置の影響	151
3.6.1	$\alpha = 20^\circ$ の場合	151
3.6.2	$\alpha = 60^\circ$ の場合	153
	(1) 相対距離 L_0 の影響	157
	(2) 条件1および条件2の影響	158
3.7	線状体直径の影響	159

3.7.1	$d=0.571(mm)$, 条件1の場合	160
3.7.2	$d=0.571(mm)$, 条件2の場合	164
3.7.3	$d=0.571(mm)$ の線状体がカルマン渦の影響を受ける場合	167
3.8	線状体本数の影響	171
3.8.1	$d=0.915(mm)$ の場合	171
3.8.2	$d=0.571(mm)$ の場合	178
3.9	線状体が集団で運動する場合の落下特性	183
3.9.1	運動中における水平方向移動距離および姿勢の分布	185
3.9.2	最終落下位置での線状体の配向および落下点分布	189
3.10	結 言	192
第4章	矩形管内流れ中における線状体の運動	194
4.1	緒 言	194
4.2	矩形管内流れ中における線状体の落下実験装置	195
4.3	矩形管内流れ特性	196
4.3.1	矩形管内流れの流速分布測定方法	196
4.3.2	矩形管内流れの流速分布算出方法	198
4.3.3	矩形管内流れの流速分布測定結果	199
4.3.4	矩形管内流れの流速分布の数値計算	201
4.4	矩形管内流れ中における線状体の落下実験方法	209
4.4.1	線状体の落下実験方法	209
4.4.2	写真面上から真の落下運動を求める方法	213
4.5	初期角度の影響	215
4.5.1	線状体の落下軌跡	215
4.5.2	線状体重心の速度	216
4.5.3	線状体の姿勢	219
4.6	線状体長さの影響	221
4.6.1	線状体の落下軌跡	221

4.6.2	線状体重心の速度	222
4.6.3	線状体の姿勢	226
4.7	線状体直径の影響	227
4.7.1	線状体の落下軌跡	227
4.7.2	線状体重心の速度	228
4.7.3	線状体の姿勢	230
4.8	線状体比重量の影響	230
4.8.1	線状体の落下軌跡	231
4.8.2	線状体重心の速度	232
4.8.3	線状体の姿勢	233
4.9	流速の影響	234
4.9.1	線状体の落下軌跡	234
4.9.2	線状体重心の速度	235
4.9.3	線状体の姿勢	238
4.10	結 言	239
第5章	ノズル内流れ中における線状体の運動	242
5.1	結 言	242
5.2	ノズル内流れ中における線状体の落下実験装置	243
5.3	ノズル内流れ特性	244
5.3.1	ノズル内流れの流速分布測定方法	244
5.3.2	ノズル内流れの流速分布算出方法	246
5.3.3	ノズル内流れの流速分布測定結果	248
5.4	ノズル内流れ中における線状体の落下実験方法	250
5.4.1	線状体の落下実験方法	250
5.4.2	写真面上から真の落下運動を求める方法	253
5.5	線状体の落下特性	254
5.6	初期角度の影響	258
5.6.1	線状体の落下軌跡	259
5.6.2	線状体重心の速度	259
5.6.3	線状体の姿勢	263

5.7	線状体長さの影響	265
5.7.1	線状体の落下軌跡	265
5.7.2	線状体重心の速度	267
5.7.3	線状体の姿勢	270
5.8	線状体直径の影響	272
5.8.1	線状体の落下軌跡	272
5.8.2	線状体重心の速度	273
5.8.3	線状体の姿勢	276
5.9	線状体比重量の影響	277
5.9.1	線状体の落下軌跡	277
5.9.2	線状体重心の速度	278
5.9.3	線状体の姿勢	279
5.10	流速の影響	280
5.10.1	線状体の落下軌跡	280
5.10.2	線状体重心の速度	281
5.10.3	線状体の姿勢	283
5.11	$\beta = 45^\circ$ の場合の落下特性	284
5.12	結 言	289
第6章	管内流れ中における線状体の運動に関する理論 解析	291
6.1	緒 言	291
6.2	流れ中における線状体の運動に関する理論	292
6.3	管内流れ中における線状体の運動の数値計算	298
6.3.1	線状体に作用する外力および回転モーメント の計算	298
6.3.2	流速分布の計算および数値計算の条件と方法	301
	(1) 一様流れ中における場合	301
	(2) 矩形管内での十分に発達した流れ中における 場合	303
	(3) 矩形管内での流れの助走域における場合	310

(4) ノズル内流れ中における場合	314
6.4 一様流れ中における線状体の運動	319
6.4.1 線状体の落下軌跡	319
6.4.2 線状体重心の速度および加速度	325
6.4.3 線状体の姿勢および角速度	331
6.5 矩形管内での十分に発達した流れ中における 線状体の運動	335
6.5.1 線状体の落下軌跡	335
6.5.2 線状体重心の速度および加速度	342
6.5.3 線状体の姿勢および角速度	357
6.6 矩形管内での助走域における線状体の運動	366
6.6.1 線状体の落下軌跡	366
6.6.2 線状体重心の速度および加速度	373
6.6.3 線状体の姿勢および角速度	390
6.7 ノズル内流れ中における線状体の運動	398
6.7.1 線状体の落下軌跡	398
6.7.2 線状体重心の速度および加速度	409
6.7.3 線状体の姿勢および角速度	439
6.8 結 言	454
第7章 回転流体中における線状体の運動	458
7.1 結 言	458
7.2 回転流体中における線状体の落下実験装置	459
7.3 回転円筒中の流れ特性	460
7.4 回転流体中における線状体の落下実験方法	462
7.4.1 線状体の落下実験方法	462
7.4.2 写真面上から真の落下運動を求める方法	465
7.4.3 線状体の落下特性を求める方法	467
7.5 線状体長さの影響	470
7.5.1 線状体の落下軌跡	470
7.5.2 線状体の姿勢	476

7.5.3	糸状体の配向	479
7.6	糸状体直径の影響	482
7.6.1	糸状体の落下軌跡	482
7.6.2	糸状体の姿勢	487
7.6.3	糸状体の配向	489
7.7	糸状体比重量の影響	492
7.7.1	糸状体の落下軌跡	492
7.7.2	糸状体の姿勢	495
7.7.3	糸状体の配向	496
7.8	初期角度の影響	498
7.8.1	糸状体の落下軌跡	498
7.8.2	糸状体の姿勢	502
7.8.3	糸状体の配向	502
7.9	初期位置の影響	503
7.9.1	糸状体の落下軌跡	503
7.9.2	糸状体の姿勢	506
7.10	円筒回転数の影響	507
7.10.1	糸状体の落下軌跡	507
7.10.2	糸状体の姿勢	509
7.11	結 言	511
第8章	結 論	514
	参 考 文 献	522
	記 号	524
	謝 辞	

第7章 緒 論

衣料や産業資材の原料として広く用いられる繊維は、長さとおさの比が数百以上と非常に大きく、形態は直線状のものから曲がったものまであり、断面形状は円形とは限らず複雑な形をした線状体であり、さらに、直径あるいは太さが長さに比べてきわめて小さいため小さい力でも容易に変形するという特性をもっている。

このような特性は、大きい変形性や多孔性を要求される各種製品を作るうえできわめて有利である反面、繊維を処理する工程においてその取扱いが困難である。なぜなら、製品中における繊維の配列が製品の品質を左右するため、工程においてこの形態的に不安定な個々の繊維の運動や姿勢をコントロールしなければならないからである。

繊維の処理を目的とした代表的な工程は紡績であり、そのプロセスは複雑であるが、要するに分離、輸送、集束の3つの単位操作に分類できる。実際の工程では、分離操作は多段階にわたって実施され、繊維塊はしだいに小塊に分離されながら輸送される。この分離と輸送の両工程で、繊維は空気中で運動することになる。また、集束操作では何回かの「ダブリング」とドラフト作用が繰返され、最終的に糸が形成される。このように、紡績においては工程の前半部で、繊維の流体中における運動を利用する部分が多い。

繊維あるいは繊維集団を流体で処理する技術は、繊維塊の分離工程、輸送工程に関連して繊維工業の各種工程で広く応用されている基本技術の1つであり、また、生産性を向上させる目的および自動化、省力化を進めるためにも、有用な技術として広く応用されているものである。さらに、繊維が流体中で運動する現象は、気流を用いた紡績（空気紡績）、不織布の製造、植毛加工、繊維状塵埃の吸引、抄紙などの工程および

繊維複合プラスチックの製造においても多く見られる基本現象の一つである。

流体中での繊維の運動に関しておこなわれた基礎的研究はあるが、それらは、繊維が姿勢、速度などを変化させながら運動した結果、最終的に運動状態がどのようなになったかを論じたものが多く、繊維の運動状態に着目して、姿勢、速度などの運動特性がどのように変化するかなど、この現象の基本的事項を詳細に検討したものは少ない。

このように、実際には広く利用されているにもかかわらず、流体中における繊維の基本的運動特性についてはほとんど“解明されていないのが現状であり、新しい技術の開発や機械の改良のために解明すべき多くの問題が残っている。そこで、本論文では、繊維のように長さと太さの比の大きい線状体の流体中における運動に関して基礎的研究をおこない、その基本的運動特性を明らかにすることとした。

従来の研究の概要

静止流体中における繊維の運動に関する研究には、空気中で繊維を自由落下させて落下時間および落下速度に対する繊維度と繊維長の影響を調べ、その結果にもとづいて繊維を水平気流中に自由落下させた場合、繊維度別に分離することが可能であることを示した守野ら^{1),2)}の研究があるが、落下中の速度および姿勢の変化については調べていない。

また、直管内流れ中での繊維の運動を取扱った研究としては、オープンエンド精紡機のコーミングローラとロータ入口間の繊維供給管内を空気輸送される繊維の速度を調べた Ripka³⁾の研究、縮小管を使用して流れ方向に繊維を配列させる方法に関する Edberg⁴⁾の研究があり、縮小管内の高速気流により繊維を流れ方向に配列させることができるという結果を得ている。

しかし、この場合にも、繊維の軌跡および姿勢の変化など、この現象の基本的事項についてはほとんど検討されていない。同じく縮小管の代りに、主流を横断する空気ジェットを用いて繊維の配列化を計った Bangert⁵⁾の研究があり、空気ジェットを用いることにより比較的低速の気流中でも主流方向に繊維を配列させることができることを示している。また、気流によって運ばれる繊維の速度および姿勢の変化など、その挙動に関する宇野⁶⁾の研究があり、両者ともにマルチストロボ撮影により繊維の運動状態をとらえ、計算結果と比較検討している。

いっぽう、回転流体中における繊維の運動に関する研究としては、強制渦流内における線状体の2次元運動を理論解析し、曲管内を空気輸送される線状体の運動状態を実験により調べ、両者を比較した塩見⁷⁾の研究、および繊維を非常に軽い粒子と考えて吸い込みのある渦流や分岐管中での繊維の軌跡を求めた Feldman⁸⁾の研究がある。しかし、前者は重力と浮力の影響を無視し2次元的に運動を取扱っており、後者の場合、粒子と繊維は本質的に形態が異なるので、得られた結果の妥当性について問題が残る。

また、繊維集団の流体中での運動については、気流中を飛走している繊維束の大きさ、繊維の流動形状および速度を調べた福田⁹⁾、黒崎¹⁰⁾の研究、タンクと矩形管路からなる装置を用いてタンク内および管路内での繊維群の配向を調べた美馬¹¹⁾の研究、さらに、空気輸送管内での繊維塊の速度について述べた鈴木¹²⁾の研究を挙げることができる。しかし、それらはいずれも繊維あるいは繊維集団が姿勢、速度などを変化させながら運動した後、速度、流動形状あるいは配向がどうなったかを論じたものであり、運動状態の詳しい変化については述べられていない。

本研究の目的と論文の構成

本研究は、細長比（長さと直径の比）の大きい線状体の流体中における運動を取扱ったものであって、従来ほとんど研究されていなかった分野を理論的および実験的に明らかにし、線状体の流体力学的な処理に対する指針を与えようとしたものである。繊維工業で使用される繊維の多くは、形態的異方性がいちじるしく、しかも、実際の工程では集団で相互に干渉し合いながら運動するため、その運動はきわめて複雑である。

そこで、本研究では、実際の現象を取扱う前に、理論解析可能な所まで現象をモデル化あるいは抽象化することにした。まず、形態的なばらつきを除去する目的で繊維のもっとも簡単なモデルとして直線の線状体（以下、本論文では、単に線状体という場合には、長さと直径の比の大きい円形断面をもつまっすぐな物体を意味する。）を考えた。また、繊維群の運動を複数（2本あるいは3本）の線状体の運動にモデル化した。この場合でも、後方の線状体は、前方の線状体の運動によって生ずる流れの影響を受けて運動するため、理論解析は困難である。そこで、さらにモデル化を計り、実際の現象のもっとも簡単なモデルとして、線状体が単一で運動する場合を考え、これ

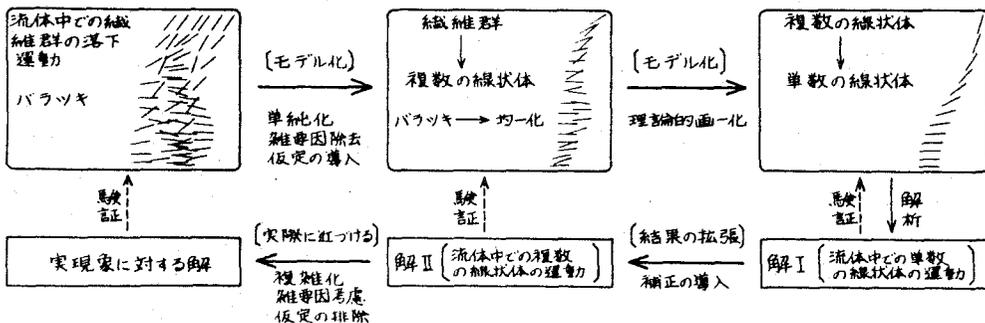


図 1.7 実際の問題を理論的に取扱うときの考え方の関連図

について理論解析と実験をおこない、その比較からこの現象の根底となる事項を把握した。そして、この結果をもとにして順次複雑な場合に解析を拡張していくこととした。

本研究では、実際の繊維の運動をモデル化し、繊維のように細長比の大きい線状体が単一で静止流体中、矩形管内流れ中、ノズル内流れ中および回転流体中で運動する場合、さらに、静止流体中を線状体が複数あるいは集団で相互に干渉し合いながら運動する場合に対し、その運動状態に着目して、線状体の軌跡、速度および姿勢の変化などの基本的運動特性を実験的あるいは理論的に明らかにした基礎的研究であり、得られた結果は、広く繊維を取扱う領域に適用でき、新しい技術の開発および工程や機械の改良に役立つと考えられる。

本論文は8章より成り、その概要を示せばつぎの通りである。

第1章では、本研究で対象とした繊維の概念および本研究の背景にある繊維の処理工程の特徴について述べ、流体中における繊維の運動に関して、従来の研究を概観するとともに本研究の目的、立場および論文の構成を示した。

第2章では、実際の現象のもっとも簡単なモデルとして、線状体が単一で静止流体中を自由落下する場合を考え、すでにLambが理論解析をおこなっている静止流体中での物体の運動を基礎とし、その考え方を適用することにより線状体の運動を解析した。そして、水中および空気中での場合について数値計算と実験をおこない、その比較からこの現象の根底となる事項を把握し、あわせて諸要因の影響を調べた。

第3章では、第2章のモデルより実際の現象に近いモデルとして、静止流体中を線状体が複数で同時に自由落下する場合と連続的に自由落下する場合について実験をおこない、単一で運動する場合と比較して、線状体が相互に干渉し合いながら落下するとき、運動状態がどのように変わるかを調べ、さらに、諸要因の影響を明らかにした。また、線状体が単一で運動する

とき、その運動に伴なって発生する流れ状態を観察した。

第4章では、線状体が単一で低速の矩形管内流れ中を自由落下する場合の運動特性および諸要因の影響を実験により調べ、静止流体中での線状体の運動と比較して矩形管内流れ中での運動特性を明らかにした。

第5章では、単一の線状体が低速のノズル内流れ中を自由落下する場合について実験的研究をおこない、矩形管内流れ中での運動と比較してノズル内流れ中での運動特性および諸要因の影響を調べた。

第6章では、静止流体中における物体の運動に関する Lamb の解析結果を流れ中における物体の運動に拡張することにより、線状体が単一で流れ中を運動するときの理論解析をおこなった。そして、一様流れ中、矩形管内での十分に発達した流れ中、矩形管内での助走域およびノズル内流れ中の場合に対して数値計算をおこない、第4章、第5章の実験結果とあわせて、実験と計算の両面から線状体の基本的運動特性を明らかにし、かつ諸要因の影響を調べた。

第7章では、低速で回転する円筒中を線状体が単一で自由落下する場合について実験的研究をおこない、静止流体中での線状体の運動と比較して、回転流体中での運動特性および諸要因の影響を調べた。

第8章では、各章において得られた研究結果を総括し、結論を述べた。

第2章 静止流体中における線状体の運動

2.1 緒言

流体中での繊維の運動は繊維工業の各種工程で重要な基本現象の一つである。ところが、この現象に関する基礎的研究は少なく、静止空気中での単繊維の落下時間および落下速度に関する研究^{1),2)}、さらに、繊維集団の空気輸送速度に関する研究¹²⁾がおこなわれているに過ぎない。また、それらは主として実験によるものが大部分であり、繊維の落下運動に関する理論解析はほとんどなされていない。

実際の繊維は、長さ、太さ、形態などにかなりの差異があり、また、流体中での運動も単一ではなく集団で相互に干渉し合いながら運動することが多い。

本章では、以上のような複雑な運動を解析する前に、もっとも簡単なモデルとして、直線の線状体が単一で静止流体中を自由落下する場合を考え、これについて理論解析と実験をおこない、その比較からこの現象の根底となる事項を把握する。

ここでは、Lambにより、すでに理論解析がなされている静止流体中での物体の運動¹³⁾を基礎とし、その考え方を適用することにより線状体の運動を解析する。繊維を取扱う各種工程では、繊維は空気中あるいは水中で運動をおこなうが、線状体の運動の観察、実験は水中の方が容易であることから、主に水中での場合について数値計算と実験をおこない線状体の落下特性および諸要因の影響を調べる。そして、雰囲気流体が変わった場合落下特性がどのように変化するかを調べるため、空気中での場合について数値計算と実験をおこない、水中での結果と比較する。

2.2 静止流体中における線状体の運動に関する理論

2.2.1 基礎理論

摩擦のない静止流体中での物体の運動は，Thomson, Tait として Kirchhoff によって解かれている。これらの手法の基本的な特徴は，物体と流体を一つの力学系として取扱うことにより，物体表面に働く圧力の効果の面倒な計算が避けられる点にある。

まず，単一の物体が無限に広がった流体中で運動する場合，流体の運動はすべて物体の運動によるものであり，したがって，渦なしで循環がないものとする。

この問題を解くには，図2.1に示すように剛体の力学の中で Euler が導入した方法に従い，物体に固定しそれとともに運動する直交座標系 Ox ， Oy ， Oz をとるのが便利である。もし，任意の瞬間における物体の運動をこの座標系の原点の並進速度成分 u ， v ， w および座標軸回りの角速度成分 p ， q ， r で定義すれば，流体の運動を特徴づける速度ポテンシャル ϕ は

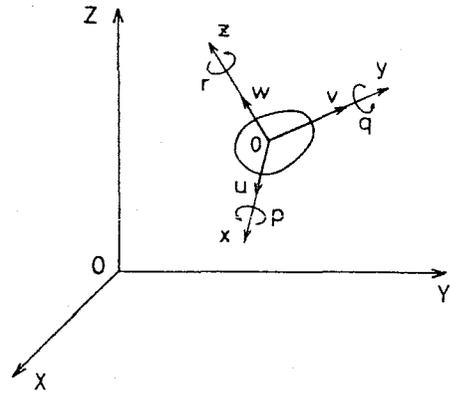


図2.1 運動座標系

$$\phi = u\phi_1 + v\phi_2 + w\phi_3 + p\chi_1 + q\chi_2 + r\chi_3 \quad (2.1)$$

と書ける。ここで， ϕ_1 ， ϕ_2 ， ϕ_3 ， χ_1 ， χ_2 ， χ_3 は x ， y ， z で表わされた物体表面の形状で決まる。この表面の任意の点での外向き法線方向余弦を l_1 ， m_1 ， n_1 とすると，表面では流体の法線方向速度は物体のそれと等しいので，

$$\begin{aligned} \partial\phi/\partial n = & l_1(u + \beta z - \gamma y) + m_1(v + \gamma x - \rho z) \\ & + n_1(w + \rho y - \beta x) \end{aligned} \quad (2.2)$$

であり, (2.1)式を代入すると,

$$\left. \begin{aligned} \partial\phi_1/\partial n = l_1, \quad \partial\phi_2/\partial n = m_1, \quad \partial\phi_3/\partial n = n_1 \\ \partial x_1/\partial n = n_1\gamma - m_1\beta, \quad \partial x_2/\partial n = l_1\beta - n_1\gamma, \quad \partial x_3/\partial n = m_1\beta - l_1\gamma \end{aligned} \right\} \quad (2.3)$$

となる。

つぎに, 流体の運動エネルギーについて考える。

$\partial\phi/\partial n$ は流体の内向き法線速度を表わし, いっぽう, $-\rho\phi$ は運動を生じさせるために必要な撃圧力である。撃力によってなされる仕事は, その作用点の初速度と終速度の撃力方向の成分の和 $\partial\phi/\partial n$ の $1/2$ と撃力 $-\rho\phi$ の積で表わされる。したがって, 流体の運動エネルギー T_1 は,

$$2T_1 = -\rho \iint \phi \partial\phi/\partial n \cdot ds \quad (2.4)$$

で表わされる。ここで, 積分は運動する物体の全表面にわたってとる。(2.1)式, (2.2)式を(2.4)式へ代入すれば,

$$\begin{aligned} 2T_1 = & A_1 u^2 + B_1 v^2 + C_1 w^2 + 2A_1' uv + 2B_1' wu + 2C_1' uv \\ & + P_1 \rho^2 + Q_1 \beta^2 + R_1 \gamma^2 + 2P_1' \beta\gamma + 2Q_1' \gamma\rho + 2R_1' \rho\beta \\ & + 2\rho(F_1 u + G_1 v + H_1 w) + 2\beta(F_1' u + G_1' v + H_1' w) \\ & + 2\gamma(F_1'' u + G_1'' v + H_1'' w) \end{aligned} \quad (2.5)$$

を得る。

(2.5)式の中の21個の係数 $A_1, B_1, C_1, \dots, H_1''$ は x, y, z で表わされた物体表面の形状と流体の比質量 ρ によって決まる定数である。たとえば, A_1, A_1', P_1 については,

$$A_1 = -\rho \iint \phi_1 \partial \phi_1 / \partial n \, ds = -\rho \iint \phi_1 l_1 \, ds$$

$$A'_i = -\frac{1}{2} \rho \iint (\phi_2 \partial \phi_3 / \partial n + \phi_3 \partial \phi_2 / \partial n) \, ds$$

$$= -\rho \iint \phi_2 \partial \phi_3 / \partial n \, ds = -\rho \iint \phi_3 \partial \phi_2 / \partial n \, ds$$

$$= -\rho \iint \phi_2 n_i \, ds = -\rho \iint \phi_3 m_i \, ds$$

(2.6)

$$P_i = -\rho \iint \chi_i \partial \chi_i / \partial n \, ds = -\rho \iint \chi_i (n_i \gamma - m_i \varepsilon) \, ds$$

となる。

いっぽう、物体自身の運動エネルギー T_2 は、

$$2T_2 = m(u^2 + v^2 + w^2)$$

$$+ P_2 \rho^2 + Q_2 \beta^2 + R_2 \gamma^2 + 2P'_2 \beta \gamma + 2Q'_2 \gamma \rho + 2R'_2 \rho \beta$$

$$+ 2m\{\alpha(v\gamma - w\beta) + \beta(w\rho - u\gamma) + \gamma(u\beta - v\rho)\}$$

(2.7)

であり、

したがって、この運動系の全エネルギー $T_1 + T_2$ を T で表わすと、たとえば次式となる。

$$2T = Au^2 + Bv^2 + Cw^2 + 2A'vw + 2B'wu + 2C'uv$$

$$+ P\rho^2 + Q\beta^2 + R\gamma^2 + 2P'\beta\gamma + 2Q'\gamma\rho + 2R'\rho\beta$$

$$+ 2\rho(Fu + Gv + Hw) + 2\beta(F'u + G'v + H'w)$$

$$+ 2\gamma(F''u + G''v + H''w)$$

(2.8)

(2.8)式は複雑である。以下では、物体の運動の物理的意味のは握を容易にするため、この運動エネルギーの式を簡単化する。一般形のもっとも対称な書き方は

$$2T = Au^2 + Bv^2 + Cw^2 + 2A'vw + 2B'wu + 2C'uv$$

$$+ P\rho^2 + Q\beta^2 + R\gamma^2 + 2P'\beta\gamma + 2Q'\gamma\rho + 2R'\rho\beta$$

$$\begin{aligned}
&+ 2LUP + 2MV\delta + 2NWY \\
&+ 2F(vY + w\delta) + 2G(wP + UY) + 2H(u\delta + vP) \\
&+ 2F'(vY - w\delta) + 2G'(wP - UY) + 2H'(u\delta - vP)
\end{aligned} \tag{2.9}$$

である。

$A', B', C' = 0$ となるように座標軸の方向を選び, また, 原点を移動させることによって $F', G', H' = 0$ とし, 21個の係数を15個に減らすことができる。

さらに, 物体がもつ対称面の数によって, 一般形を簡単化する。

1). 物体が対称面を1つもつ場合

対称面を x y 面にとれば, w, ρ, δ の符号を変えても運動エネルギーは不変でなければならないから, $P', Q', L, M, N, H = 0$ となり, 運動エネルギーの式は次式となる。

$$\begin{aligned}
2T &= AU^2 + BV^2 + CW^2 \\
&+ P\rho^2 + Q\delta^2 + RY^2 + 2R'\rho\delta \\
&+ 2F(vY + w\delta) + 2G(wP + UY)
\end{aligned} \tag{2.10}$$

2) 物体が1)の対称面と直交する第2の対称面をもつ場合

第2の対称面を x z 面にとると, v, ρ, Y の符号を変えても運動エネルギーは不変でなければならないから, $R', G = 0$ となり,

$$\begin{aligned}
2T &= AU^2 + BV^2 + CW^2 + P\rho^2 + Q\delta^2 + RY^2 \\
&+ 2F(vY + w\delta)
\end{aligned} \tag{2.11}$$

となる。

3) 物体が前2つに直角な第3の対称面をもつ場合

第3の対称面を y z 面にとれば, この場合には $F = 0$ となるの

で、

$$2T = AU^2 + BV^2 + CW^2 + P\rho^2 + Q\dot{\theta}^2 + R\dot{\gamma}^2 \quad (2.12)$$

となる。

2.2.2 線状体の運動への適用

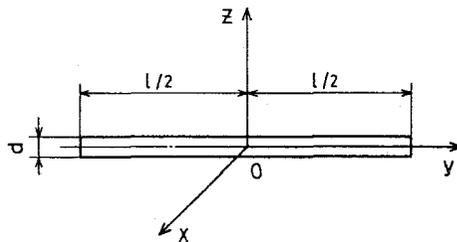
線状体の運動を理論的に考えるため、つぎの仮定を設ける。

- (1) 線状体は長さ l と直径の比の大きいまっすぐな円柱物体とする。
- (2) 線状体の軸の回りの回転運動は考えない。
- (3) 線状体は一平面内で運動する。

なお、仮定(2)、(3)は実験で確かめられている。

仮定(1)から、線状体は軸を含む直角な2面と軸に直角な面の合計3つの対称面をもつから(2.12)式が適用できる。

ここで、図2.2に示すように座標系を定めると、仮定(2)から $\dot{\theta} = 0$ となり、線状体が運動をおこなう平面を xy 面と考えると、仮定(3)から $w, \rho = 0$ となるので、この運動系の全運動エネルギー T は、



$$2T = AU^2 + BV^2 + R\dot{\gamma}^2$$

(2.13) 図2.2 線状体に固定した座標系

となる。

A, B, R を流体の運動エネルギーに関する項 A_1, B_1, R_1 と線状体の運動エネルギーに関する項 A_2, B_2, R_2 に分けて計算する。

(a) A_1 の計算

直径 d 、長さ l の円柱が軸に直角な方向に速度 u で運動するときの速度ポテンシャルは、

$$\phi = - (u d^2 / 4 r) \cos \theta \quad (2.14)$$

となる。したがって、(2.1)式から

$$\phi_1 = - (d^2 / 4 r) \cos \theta$$

となり、方向余弦は、

$$l_1 = \begin{cases} \cos \theta & ; \text{円柱面上} \\ 0 & ; \text{円柱端面} \end{cases}$$

であるから、(2.6)式より

$$\begin{aligned} A_1 &= \rho (d^2 / 4) l \int_0^{2\pi} \cos^2 \theta \, d\theta \\ &= \rho \pi d^2 l / 4 \end{aligned} \quad (2.15)$$

したがって、 A_1 は円柱と同体積の流体の質量となる。

(b) B_1 の計算

円柱が軸方向に速度 v で運動するときの流体の運動エネルギーは、

$$2T = -\rho v^2 \iint \phi_2 m_1 \, dS \quad (2.16)$$

となり、方向余弦 m_1 は円柱面上で 0 、円柱端面で ± 1 となるので、これは直径 d の円板が面に垂直な方向に速度 v で運動する場合と同じであり、

$$\begin{aligned}
 2T &= 4\rho v^2/\pi \int_0^{d/2} \sqrt{(d/2)^2 - r^2} \cdot 2\pi r \cdot dr \\
 &= \rho d^3 v^2/3
 \end{aligned}$$

となり，したがって，

$$B_1 = \rho d^3/3 \quad (2.17)$$

となる。

(C) R_1 の計算

円柱が z 軸回りを角速度 γ で回転するときの流体の運動エネルギーは， A_1 の結果を利用して，

$$\begin{aligned}
 2T &= \rho\pi d^2/4 \int_{-d/2}^{d/2} (\gamma y)^2 dy \\
 &= \frac{l^2}{12} (\rho\pi d^2 l/4) \gamma^2
 \end{aligned}$$

したがって，

$$R_1 = \frac{l^2}{12} (\rho\pi d^2 l/4) \quad (2.18)$$

となる。

(d) A_2, B_2, R_2 の計算

A_2, B_2 は線状体の質量， R_2 は z 軸回りの慣性モーメントであるから，

$$\left. \begin{aligned}
 A_2 &= B_2 = \rho_b \pi d^2 l/4 \\
 R_2 &= \frac{l^2}{12} (\rho_b \pi d^2 l/4)
 \end{aligned} \right\} \quad (2.19)$$

となる。

したがって、(a)~(d)の結果から A, B, R は線状体の比質量； ρ_b ，流体の比質量； ρ ，線状体の形状（直径； d ，長さ； l ）で決まる定数であり，それぞれ次式で表わされる。

$$\left. \begin{aligned} A &= (\rho + \rho_b) \pi d^2 l / 4 \\ B &= \rho d^3 / 3 + \rho_b \pi d^2 l / 4 \\ R &= (\rho + \rho_b) \pi d^2 l^3 / 48 \end{aligned} \right\} \quad (2.20)$$

いま，図2.3に示すように線状体とともに運動する座標軸を Ox, Oy ，その原点（線状体の重心）の座標を (X, Y) とし， x 軸と X 軸とのなす角度を θ とする。以下では θ を線状体の回転角と呼ぶ。

そこで，運動方程式は，

$$\left. \begin{aligned} \frac{d}{dt}(\partial T / \partial u) &= \gamma(\partial T / \partial v) - \delta(\partial T / \partial w) + X \\ \frac{d}{dt}(\partial T / \partial v) &= \rho(\partial T / \partial w) - \gamma(\partial T / \partial u) + Y \\ \frac{d}{dt}(\partial T / \partial r) &= v(\partial T / \partial u) - u(\partial T / \partial v) \\ &\quad + \delta(\partial T / \partial \rho) - \rho(\partial T / \partial \delta) + N \end{aligned} \right\} \quad (2.21)$$

と書ける。ここで， X, Y は線状体に作用する外力の x, y 方向成分であり， N は回転モーメントである。

(2.21)式に(2.13)式を代入して，線状体の運動方程式

$$\left. \begin{aligned} A du/dt &= \gamma B v + X \\ B dv/dt &= -\gamma A u + Y \\ R dr/dt &= (A - B) u v + N \end{aligned} \right\} \quad (2.22)$$

が得られる。

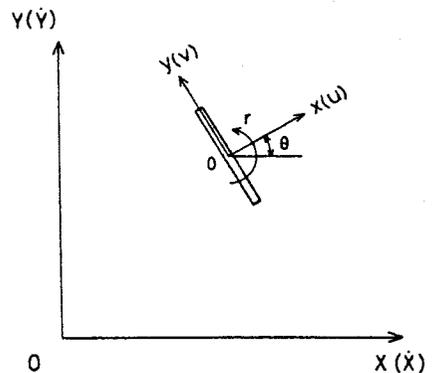


図2.3 座標系

いっぽう，線状体重心の X, Y 方向速度は次式で表わされる。

$$\left. \begin{aligned} \dot{X} &= u \cos \theta - v \sin \theta \\ \dot{Y} &= u \sin \theta + v \cos \theta \end{aligned} \right\} \quad (2.23)$$

また，加速度 \ddot{X}, \ddot{Y} は(2.23)式を時間 t で微分して求まり，

$$\left. \begin{aligned} \ddot{X} &= (du/dt) \cos \theta - (dv/dt) \sin \theta - (u \sin \theta + v \cos \theta) \gamma \\ \ddot{Y} &= (du/dt) \sin \theta + (dv/dt) \cos \theta + (u \cos \theta - v \sin \theta) \gamma \end{aligned} \right\} \quad (2.24)$$

となる。

2.2.3 線状体の運動の数値計算

この項では，数値計算する際に必要となる線状体に作用する外力および回転モーメントを計算する。さらに，計算条件および計算方法について述べる。

(1) 線状体に作用する外力および回転モーメントの計算

まず， X 軸， Y 軸をそれぞれ水平方向および鉛直方向に定める。

図2.4に示すように，線状体の端面に直角に働く抗力を $D\alpha$ ，その端面以外の部分が流体から受ける抗力の x, y 方向成分をそれぞれ Dx, Dy ，また，重力と浮力の差による外力を Fg とし，さらに，線状体重心の速度を U とすると， u, v は負となり， Dx, Dy および $D\alpha$ は正の向きに作用し， Fg の x, y 方向成分は負の向きに作用する。したがって，外力 \dot{X}, \dot{Y} は次式で表わされる。

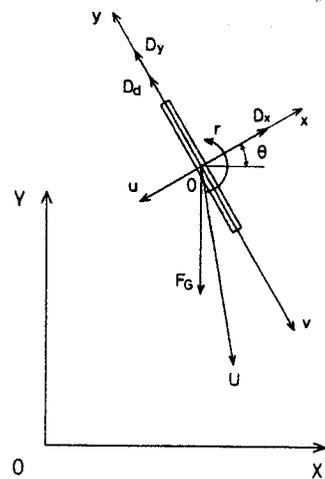


図2.4 線状体に作用する外力

$$\left. \begin{aligned} X &= D_x - F_G \sin \theta \\ Y &= D_y + D_d - F_G \cos \theta \end{aligned} \right\} \quad (2.25)$$

なお,

$$F_G = (\rho_b - \rho) g \pi d^2 \ell / 4 \quad (2.26)$$

となる。

線状体は角速度 γ で回転運動しているので、 Z の位置によって X 方向の速度は変化する。そこで、線状体を几个の微小要素に分け、その長さを $\Delta \ell$ 、 i 番目の要素の重心の位置を z_i とすると、この点での X 方向速度は、

$$u_i = u - z_i \gamma \quad (2.27)$$

となる。

ここで対象としている線状体は長さ ℓ と直径 d の比が非常に大きいので、軸方向とある角度で運動する線状体回りの流れに対して独立の原理が適用できると仮定する。すなわち、 XZ 面に平行な面内の流れは、 Z 方向の流れと無関係であるが、 Z 方向の流れには軸に直角な面内での流れが関係すると考えると、 D_x は、

$$D_x = \sum_{i=1}^n \frac{1}{2} \rho d \cdot \Delta \ell \cdot C_{di} (-u_i)^2 \quad (2.28)$$

で表わされる。ただし、総和記号の中の各要素の値は、 $-u_i$ と同一の正負の符号をとる。

抗力係数 C_d は $-u_i$ を代表速度とするレイノルズ数

$$Re = | -u_i | d / \nu \quad (2.29)$$

の関数であり、 Re の範囲により次式を用いることにする。

$$C_d = (8\pi/Re) / (2.0022 - \ln Re) , (Re < 1) \quad (2.30a)$$

$$C_d = -4.078 + 16.631 Re^{-0.3778} , (1 \leq Re \leq 5) \quad (2.30b)$$

$$C_d = (0.707 + 3.42 Re^{-1/2})^2 , (5 < Re < 37) \quad (2.30c)$$

$$C_d = 0.95 + 4 Re^{-1/2} , (37 \leq Re < 200) \quad (2.30d)$$

(2.30a)式は Lamb¹⁴⁾ が Oseen 近似により得た式であり、(2.30c)式は今井¹⁵⁾ の式であり、それぞれの Re の範囲で実験値と良く一致するが、範囲外では一致しないので、 $1 \leq Re \leq 5$ では $Re=1$ 、 5 で接線勾配がそれぞれ (2.30a)式および (2.30c)式と一致し、 $Re=1$ で (2.30a)式の値と一致するようにして求めた (2.30b)式を用いる。また、 Re が増加すると、 C_d は 0.95 から 1.2 の範囲で変化する。円柱の摩擦抗力係数は、 $30 < Re < 10^4$ で $4 Re^{-1/2}$ で表わされ¹⁶⁾、ここで必要な Re の範囲は高々 200 であるから、 $37 \leq Re < 200$ では (2.30d)式を用いる。

いっぽう、 D_y は摩擦抗力のみであり、その軸方向が流れに傾いて置かれている柱状体の回りの軸方向の流れを表わす式は、流れに直角に置かれている同一形状の柱状体の回りのプラントル数 $Pr=1$ の場合の強制対流熱移動を表わす式と相似となり、軸方向の摩擦抗力は、表面における $Pr=1$ の場合の熱移動と相似となるので、

$$D_y = \sum_{i=1}^N \pi \rho V (-v) \cdot \Delta l \cdot Nu_i \quad (2.31)$$

¹⁷⁾ で表わされる。ただし、 ν は流体の動粘性係数である。

ヌッセルト数 Nu は Re の関数であり、 $Pr=1$ に対する Re と Nu の関係が求められれば、(2.31)式から D_y が計算できる。しかし、 $Pr=1$ の場合の関係は求まっておらず、空気 ($Pr=0.71$) に対する実験式が次式のように求められており¹⁸⁾、ここでは、この式を用いる。

$$Nu = 0.36 + 0.48 Re^{1/2}, \quad (0.7 < Re < 10^3) \quad (2.32)$$

ただし, Re は (2.29) 式から求める。

また, 端面に働く抗力 Dd は, 抗力係数を 1 とすると

$$Dd = 1/2 \rho (\pi d^2/4) v^2 \quad (2.33)$$

で表わされる。

最後に, 線状体に作用する回転モーメント N は, x 方向の抗力に基づくものであり,

$$N = - \sum_{i=1}^n 1/2 \rho d \cdot \Delta l \cdot C_{di} (-u_i)^2 \cdot z_i \quad (2.34)$$

となる。ただし, $(-u_i)^2$ は $-u_i$ と同一の正負の符号をとる。

(2) 計算条件および方法

(1) で述べた方法で X , Y および N を求め, 線状体の運動方程式 (2.22) 式と重心の速度を表わす (2.23) 式の連立微分方程式を電子計算機用として記憶容量を少なくし, また, 丸め誤差の累積を制御するようにくふうした *Runge-Kutta-Gill* の方法で数値計算し, 線状体重心の軌跡 (X, Y), 速度 (\dot{X}, \dot{Y}), 加速度 (\ddot{X}, \ddot{Y}) および線状体の姿勢 θ , 角速度 γ を求めた。

数値計算は, まず, 静止流体として水を考え, 線状体の比重量 ρ_b , 長さ l , 直径 d および初期角度 α を変化させておこなった。初期角度とは初期位置での軸方向と鉛直線のなす角度である。表 2.7 にこの場合の試料条件および初期条件を示す。

No. 1 試料, No. 2 試料はそれぞれ実験で用いた鉛筆の芯, ピアノ線に相当し, ρ_b, d の値は実験で用いた試料の平均値を採用し, l は公称長さとした。また, $d = 0.391 \text{ (mm)}$, $l = 30 \text{ (mm)}$ の No. 1 試料の場合だけ $\alpha = 1^\circ, 10^\circ, 20^\circ, 30^\circ$ の 4 種類変化させ

表2.1 試料条件および初期条件

試料番号	線状体直径 d (mm)	線状体長さ l (mm)	線状体比重 ρ_s (g/cm ³)	初期角度 α (°)	初速度 U_0 (mm/s)	初速度 V_0 (mm/s)	初期角速度 Γ_0 (rad/s)
1	0.391	30 60	1.766	1	-1.0×10^{-2}	-1.0×10^{-2}	1.0×10^{-4}
	0.571	15 30	1.702	10°			
		45 60		20°			
	0.722	30	1.622	30°			
0.915	30	1.539					
2	0.310	30 60	7.242				

* d=0.391 (mm), l=30 (mm) の NO.1 試料に対してのみ $\alpha=10, 20$ および 30 (°) の数値計算をおこなう。

て α の影響を調べ、他の場合には $\alpha=1^\circ$ で数値計算した。さらに、水の物性値は、実験時の平均水温 29 (°C) に対する値 $\rho=1.016 \times 10^{-7}$ (g³/mm⁴)、 $\nu=0.819$ (mm²/s) とした。

つぎに、流体の温度の影響を調べる目的で、 $d=0.571, 0.915$ (mm)、 $l=60$ (mm) の NO.1 試料に対して、水温 $T_w=10, 15, 20, 30$ (°C) の4種類変化させて数値計算した。そのときの水の物性値を表2.2に示す。なお、初期角度は $\alpha=1^\circ$ とし、他の初期条件は表2.1と同一とした。

表2.2 水の物性値

水温 T_w (°C)	ρ ($\times 10^{-7}$ g ³ /mm ⁴)	ν (mm ² /s)
10	1.019	1.307
15	1.019	1.139
20	1.018	1.004
30	1.015	0.801

これまでは、線状体が水中で運動する場合であるが、流体が変わった場合、落下特性がどのように変化するかを調べるため、空気中における線状体の運動を表2.3に示す試料条件および初期条件のもとで数値計算した。この場合、長さ l 、直径 d および初期角度 α の影響を調べた。なお、空気の

表2.3 試料条件および初期条件

試料番号	線状体直径 d (mm)	線状体長さ l (mm)	線状体比重 ρ_s (g/cm ³)	初期角度 α (°)	初速度 U_0 (mm/s)	初速度 V_0 (mm/s)	初期角速度 Γ_0 (rad/s)
1	0.391	30	1.766	10	-1.0×10^{-2}	-1.0×10^{-2}	1.0×10^{-4}
				1 10			
				20 30			
				10			
0.571	30	1.702					
			60				
0.915	30	1.539					
			60				

物性値は実験時の平均室温 $27.5 (^{\circ}\text{C})$, 気圧 $752.4 (\text{mmHg})$ に対する値 $\rho = 1.187 \times 10^{-10} (\text{g s}^2/\text{mm}^4)$, $\nu = 15.96 (\text{mm}^2/\text{s})$ とした。

以上の数値計算により、線状体の比重量、長さ、直径、初期角度および流体の温度が重心の軌跡、速度、加速度および姿勢、角速度におよぼす影響を調べることができた。さらに、水中での結果と空気中での結果を比較することにより、主に流体の比重量の違いにより落下特性がどのように変わるかを調べることができた。

以下では、その結果について報告する。その際、落下特性はそれぞれつぎのように表現する。

- ① 軌跡は重心の水平方向移動距離 X と鉛直方向移動距離 Y の関係で示す。
- ② 速度は回転角 θ と重心の水平方向速度 \dot{X} および鉛直方向速度 \dot{Y} の関係で示し、加速度も同様に θ と \ddot{X} および \ddot{Y} の関係で示す。
- ③ 姿勢は落下時間 t と回転角 θ の関係で示す。
- ④ 角速度は回転角 θ と角速度 γ の関係で示す。

なお、数値計算では Y , \dot{Y} は負となるが、鉛直方向下向きを正の向きとして図示するもので、図では正の値になっている。

2.3 線状体長さの影響

この節では、 $d = 0.571 (\text{mm})$, $l = 15, 30, 45, 60 (\text{mm})$ の No.1 試料に対する計算結果から、線状体長さが落下特性におよぼす影響を調べる。

2.3.1 線状体の落下軌跡

$l = 30, 60 (\text{mm})$ の落下軌跡を図 2.5 に示す。図中の線状体

の時間間隔は、 $l=60(\text{mm})$ の場合、 $\Delta t=0.4(\text{s})$ であり、 $l=30(\text{mm})$ の場合、 $t \leq 2.0(\text{s})$ に対し $\Delta t=0.4(\text{s})$ 、 $t > 2.0(\text{s})$ に対し $\Delta t=0.6(\text{s})$ である。

姿勢が水平近くなるまで回転した場合 ($l=30(\text{mm})$ の場合) を見ると分かるように、重心の軌跡は変曲点 ($X=78(\text{mm})$, $Y=310(\text{mm})$ 付近) をもつ曲線となり、最終的に θ は 90° に漸近し、しかも、線状体は水平方向にはほとんど移動しなくなり、鉛直方向に一定速度で落下する。

姿勢が水平方向に漸近するときの重心の速度成分は、 θ と \dot{X} の関係 (図 2.8) および θ と \dot{Y} の関係 (図 2.9) から、 \dot{X} は 0 に近づき、 \dot{Y} は一定値になることが分かる。

落下軌跡の接線勾配 dY/dX は、

$$dY/dX = \dot{Y} / \dot{X} \quad (2.35)$$

となり、 dY/dX が最小になるときこの曲線は変曲点をもつ。表 2.4 に変曲点での dY/dX の値とそのときの θ の値を示す。

dY/dX が最小になるのは $d^2Y/dX^2 = 0$ 、すなわち

$$\dot{Y} / \ddot{X} = \ddot{Y} / \dot{X} \quad (2.36)$$

が成立するときである。

(2.36) 式から、重心の軌跡の変曲点は、重心の運動方向と加速度の方向が一致する点であることが分かる。

加速度の方向は、落下開始直後では重力と浮力の差による外

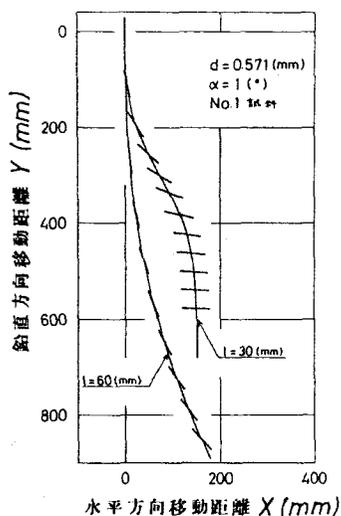


図 2.5 落下軌跡におよぼす長さの影響

カによりほぼ鉛直方向下向きである。その後、線状体の運動に伴ない抗力が作用するため、 \ddot{X} は増大するが、 \ddot{Y} は減少し負の値になるので、加速度の方向は反時計回りに回転する。やがて、 \ddot{X} も減少して負の値となり、重心の運動方向と加速度の方向が一致する。ただし、両者の向きは逆になる。その後も、加速度の方向は回転し続け水平方向に漸近する。加速度の方向は、重心の運動方向と加速度の方向が一致するまでの領域では、重心を水平方向に増大させる方向となり、一致した後の領域では、逆に減少させる方向になるため、重心の軌跡は図2.5に示したような曲線となる。

表2.4から、重心の軌跡は、 θ が 60° から 65° の範囲内のとき変曲点をもち、また、そのときの θ の値は、同一直径の場合にも、同一長さの場合にも細長比 l/d が大きいほど小さくなる。いっぽう、 dY/dX の値は、同一長さの場合、 l/d が大きいほど大きいが、同一直径の場合、No.1試料とNo.2試料では l/d がおよぼす影響が異なり、No.1試料では l/d が大きいほど小さくなり、No.2試料では大きくなる。また、 $d=0.391(mm)$ のNo.1試料と $d=0.310(mm)$ のNo.2試料の場合を比較すると、 l/d の大きいNo.2試料の方が θ の値は大きく、 dY/dX の値は小さいことが分かる。

なお、比重量および直径が、変曲点での dY/dX および θ の値におよぼす影響は、長さの影響より大きい。

つぎに、図2.5から同一回転角に対する X 、 Y の値は、長さが大きい方が大きくなることが分かる。これを明確にするため、 θ と X の関係および θ と Y の関係を図2.6、2.7に示す。

表2.4 軌跡の変曲点における接線勾配と回転角の値

試料番号	線状体特性		得られた結果	
	直径 d (mm)	長さ l (mm)	dY/dX	θ (°)
1	0.391	30	1.928	59.5
		60	1.911	59.3
	0.571	15	1.803	63.2
		30	1.794	61.9
		45	1.781	61.6
	0.722	30	1.772	61.4
		0.915	30	1.611
2	0.310	30	1.456	65.9
		60	1.622	62.9
		60	1.633	62.2

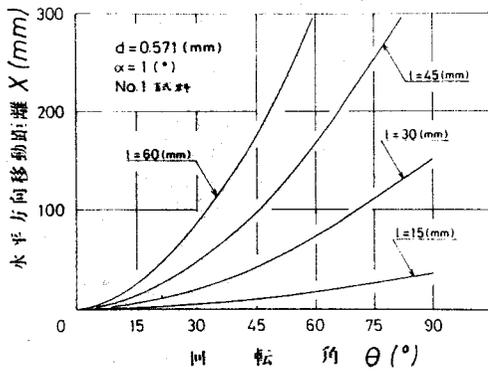


図 2.6 水平方向移動距離におよぼす長さの影響

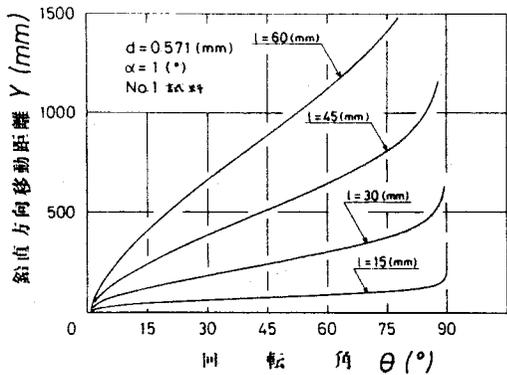


図 2.7 鉛直方向移動距離におよぼす長さの影響

θ と X の関係は下に凸の曲線となり，落下開始直後，線状体は鉛直方向に急激に加速されるため， θ と Y の関係は上に凸の曲線で始まり， θ が 40° から 45° の範囲内のとき変曲点をもち， $\theta = 90^\circ$ の線に漸近する。また，ある回転角に対するこれらの曲線の接線勾配 $dx/d\theta$ ， $dy/d\theta$ および X ， Y の値は， l が大きいほど大きいことが分かる。

接線勾配 $dx/d\theta$ ， $dy/d\theta$ は，

$$\left. \begin{aligned} dx/d\theta &= \dot{X}/r \\ dy/d\theta &= \dot{Y}/r \end{aligned} \right\} \quad (2.37)$$

となる。

θ と \dot{X} の関係 (図 2.8) および θ と \dot{Y} の関係 (図 2.9) から，長さが， θ と \dot{X} の関係におよぼす影響は，二二でおこなった計算の範囲内ではわづかであり，また， θ と \dot{Y} の関係におよぼす影響は，とくに θ の小さい領域で現われ， \dot{Y} は l が大きいほど大きい，その後， θ の増加に伴ない長さの影響を受けなくなる。ところが， θ と r の関係 (図 2.13) から， l が大きいほど r は小さくなる。したがって，(2.37) 式から， $dx/d\theta$ ， $dy/d\theta$

は、 l が大きいほど大きくなる事が分かる。

2.3.2 線状体重心の速度および加速度

図2.8において、 \dot{X} は $\theta=1^\circ$ のとき0で、 40° から 50° の範囲内まで加速され、最大となり、その後減少し、線状体の姿勢が水平方向に近づくと、線状体には水平方向の外力が作用しなくなり、 $\theta=90^\circ$ で0となる。いっぽう、図2.9において、 \dot{Y} は落下開始直後に重力と浮力の差による外力により急激に加速され、 θ が 5° 以下の範囲内で最大となり、その後抗力の増大により、 θ の増加に伴ない単調に減少する。 θ が 90° に近づくと鉛直方向に働く抗力と、重力と浮力の差による外力が釣り合うため、 \dot{Y} は一定値となる。

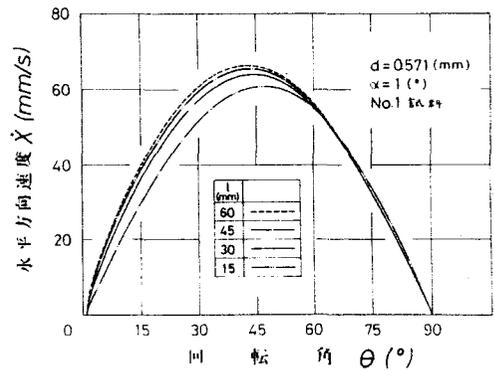


図2.8 水平方向速度におよぼす長さの影響

また、 θ が約 65° 以下の領域では、 \dot{X} 、 \dot{Y} ともに l が大きいほど大きいが、これ以上の領域では、 \dot{X} は l が小さい方が大きくなる。しかし、 \dot{X} におよぼす長さの影響は、 65° 以下の領域での場合と比較して無視しうるほど小さくなり、 \dot{Y} は長さの影響を受けない。

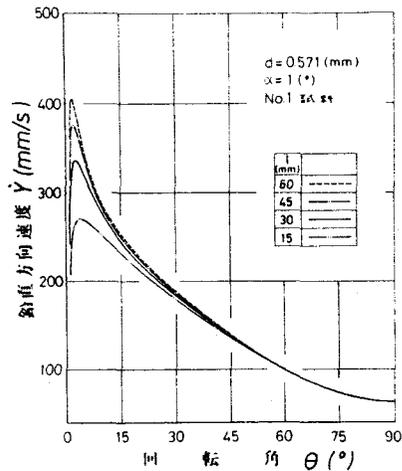


図2.9 鉛直方向速度におよぼす長さの影響

表2.5に \dot{X} 、 \dot{Y} の最大値とそのときの θ の値を示す。 \dot{X} 、 \dot{Y} が最大になるときの θ の値は、同一直径の場合にも同一長さの場合にも、 l/d が大きいほど小

さくなる。

つぎに、長さが重心の加速度におよぼす影響を調べる。

図2.10において、 $\alpha = 1^\circ$ の場合、線状体は落下開始の瞬間に主に重力と浮力の差にもとづく外力 F_G により、水平方向に約 $26 \text{ (mm/s}^2\text{)}$ の加速度をもち、 \ddot{X} は減少して $\theta = 1.02^\circ$

程度で極小(約 $23 \text{ (mm/s}^2\text{)})$ となり、その後増大する。落下開始の瞬間から \ddot{X} が減少してゆく様子は、2.5.2 項に記載する初期角度が \ddot{X} におよぼす影響を表わす図2.29において、 $\alpha = 10^\circ \sim 30^\circ$ の場合明確に現われている。増大し始めた \ddot{X} は、 $3^\circ < \theta < 15^\circ$ のとき最大となり、減少して $40^\circ < \theta < 50^\circ$ のとき正の値から負の値へ移り、 $65^\circ < \theta < 70^\circ$ のとき最小となり、 $\theta = 90^\circ$ でふたたび0となる。 \ddot{X} は $40^\circ < \theta < 50^\circ$ のとき0となるが、そのときの θ の値は、表2.5 に示した \ddot{X} が最大になるときの θ の値である。

表2.5 重心速度の最大値とそのときの回転角の値

試料番号	線状体直径 d (mm)	線状体長さ l (mm)	水平方向速度の最大値 \dot{X} (mm/s)	θ ($^\circ$)	鉛直方向速度の最大値 \dot{Y} (mm/s)	θ ($^\circ$)
1	0.391	30	44.85	41.8	280.4	1.77
		60	45.91	41.2	320.8	1.38
	0.571	15	60.89	46.8	270.0	4.03
		30	63.99	44.3	336.5	2.66
		45	65.50	43.4	377.2	2.09
		60	66.39	42.8	406.3	1.88
0.722	30	78.73	46.5	350.7	3.45	
0.915	30	94.35	48.4	356.0	4.37	
2	0.310	30	165.04	45.2	756.0	3.78
		60	167.00	43.7	925.7	2.44

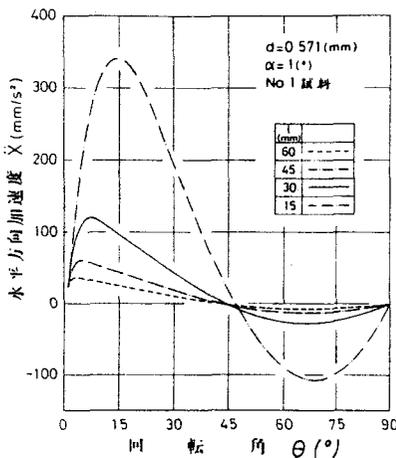


図2.10 水平方向加速度におよぼす長さの影響

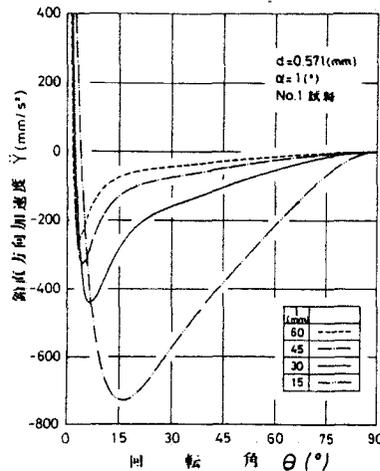


図2.11 鉛直方向加速度におよぼす長さの影響

いっぽう，図 2.11 において， \ddot{Y} は落下開始の瞬間に約 4050 (mm/s^2) であり，急激に減少して θ が 5° 以下の範囲内のとき正の値から負の値へ移り， $3^\circ < \theta < 17^\circ$ のとき最小となり，増大して $\theta = 90^\circ$ でふたたび 0 となる。 \ddot{Y} は $\theta < 5^\circ$ のとき 0 となるが，そのときの θ の値は，表 2.5 に示した \dot{Y} が最大になるときの θ の値である。

表 2.6 に \ddot{X} の最大値と最小値， \ddot{Y} の最小値とそのときの θ の値を示す。最大値および最小値の絶対値とそのときの θ の値は，同一直径の場合にも同一長さの場合にも l/d が大きいほど小さくなり， $d = 0.391 (\text{mm})$ の NO. 1 試料と $d = 0.310 (\text{mm})$ の NO. 2 試料の場合を比較すると， l が大きい NO. 2 試料の方が，これらの値は大きいことが分かる。

ここで，長さ l が \ddot{X} ， \ddot{Y} におよぼす影響について考察する。図 2.8 から，長さ l が θ と \ddot{X} の関係におよぼす影響はわづかであり，また，図 2.9 から θ と \ddot{Y} の関係におよぼす影響は，とくに θ の小さい領域で現われ， \ddot{Y} は l が大きいほど大きいが，その後長さの影響を受けなくなる。ところが， θ と \dot{Y} の関係（図 2.13）から， l が大きいほど \dot{Y} は小さく線状体が回転するのに要する時間は長い。したがって， l が大きいほど加速あるいは減速される時間は大きくなる。また，長さ l が線状体の回転におよぼす影響は，速度におよぼす影響より大きい。したがって， l

表 2.6 重心加速度の最大値，最小値
とそのときの回転角の値

試料番号	線状体直径 d (mm)	線状体長さ l (mm)	水平方向加速度の最大値 \ddot{X}_{max} (mm/s^2)	θ ($^\circ$)	水平方向加速度の最小値 \ddot{X}_{min} (mm/s^2)	θ ($^\circ$)	鉛直方向加速度の最小値 \ddot{Y}_{min} (mm/s^2)	θ ($^\circ$)
1	0.391	30	30.16	2.81	-8.56	64.6	-193.1	3.21
		60	26.59	1.00	-2.21	63.8	-86.6	1.88
	0.571	15	341.09	14.35	-107.13	68.4	-728.4	16.23
		30	119.89	7.19	-27.82	66.8	-441.0	6.81
		45	60.81	4.64	-12.80	65.9	-326.5	4.47
		60	36.98	3.22	-7.35	65.7	-256.1	3.50
		722	30	221.34	10.98	-55.52	68.1	-548.1
0.915	30	350.78	13.58	-103.81	70.5	-596.2	15.02	
2	0.310	30	497.86	9.43	-101.67	66.4	-1249.0	9.76
		60	153.64	4.17	-25.43	65.1	-748.8	4.80

が大きいかほど、 $\ddot{\gamma}$ の絶対値は小さくなる。

2.3.3 線状体の姿勢および角速度

落下中の姿勢の変化を表わす t と θ の関係および θ と γ の関係を図 2.12, 2.13 に示す。

t と θ の関係は、下に凸の曲線で始まり、 θ が 10° から 20° の範囲内のとき変曲点をもち、 $\theta = 90^\circ$ に漸近するような曲線になる。すなわち、 γ は $10^\circ < \theta < 20^\circ$ まで加速されるが、これ以上の領域では減速され、最終的に、姿勢は水平方向に漸近する。姿勢が水平方向に近づくと線状体に作用する外力は釣合うようになるので、水平な姿勢がもっとも安定した状態である。

また、図 2.13 から、 l が小さいほど γ は大きく、線状体が回転するのに要する時間は短い。 t と θ の関係を表わす曲線が変曲点をもつときの θ の値は、 γ が最大になるときの θ の値である。表 2.7 に γ の最大値とそのときの θ の値を示す。 γ の最大値は、同一直径の場合にも同一長さの場合にも、 l/d が小さいほど大

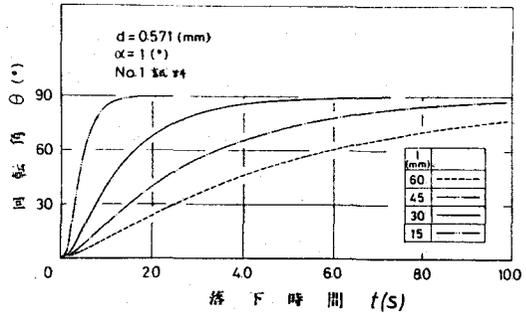


図 2.12 姿勢におよぼす長さの影響

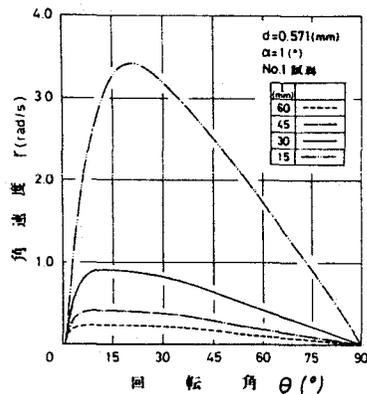


図 2.13 角速度におよぼす長さの影響

表 2.7 角速度の最大値とそのときの回転角の値

試料番号	線状体直径 d (mm)	線状体長さ l (mm)	角速度の最大値	
			γ (rad/s)	θ (°)
1	0.391	30	0.3114	18.2
		60	0.0796	17.6
	0.571	15	3.4260	20.5
		30	0.9152	13.0
		45	0.4097	12.0
		60	0.2328	12.6
2	0.722	30	1.5192	13.7
	0.915	30	2.1146	16.7
2	0.310	30	1.4376	12.4
		60	0.3555	7.1

きく、また、 $d=0.391(\text{mm})$ のNO.1試料と $d=0.310(\text{mm})$ のNO.2試料の場合を比較すると、 θ の大きいNO.2試料の方が大きい。なお、 θ の値は、長さおよび直径に対して一定の傾向を示さない。

2.4 線状体直径の影響

この節では、 $l=30(\text{mm})$ 、 $d=0.391, 0.571, 0.722, 0.915(\text{mm})$ のNO.1試料に対する計算結果から、線状体直径が落下特性におよぼす影響を調べる。

2.4.1 線状体の落下軌跡

$d=0.391, 0.915(\text{mm})$ の落下軌跡を図2.14に示す。図中の線状体の時間間隔は、 $d=0.391(\text{mm})$ の場合、 $\Delta t=0.6(\text{s})$ であり、 $d=0.915(\text{mm})$ の場合、 $t \leq 1.0(\text{s})$ に対し $\Delta t=0.2(\text{s})$ 、 $t > 1.0(\text{s})$ に対し $\Delta t=0.4(\text{s})$ である。

重心の軌跡は、すでに2.3.7項で説明したように、変曲点をもつ曲線となり、表2.4から、変曲点での接線勾配 dY/dX の値は、 d が大きいほど小さく、そのときの θ の値は大きいことが分かる。すなわち、重心の運動方向と加速度の方向が一致するときの運動方向と線状体の姿勢は、直径が大きいほどより水平に近くなる。

また、図2.14から、同一回転角に対する X, Y の値は、 d が小さい方が大きくなることが分かる。これを明確にするため、 θ と X の関係および θ と Y の関係を図2.15, 2.16に示す。

これらの図から、ある回転角に対す

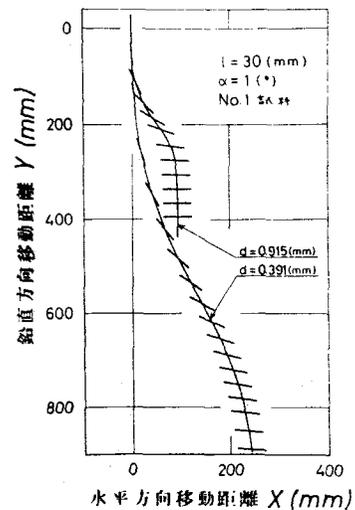


図2.14 落下軌跡におよぼす直径の影響

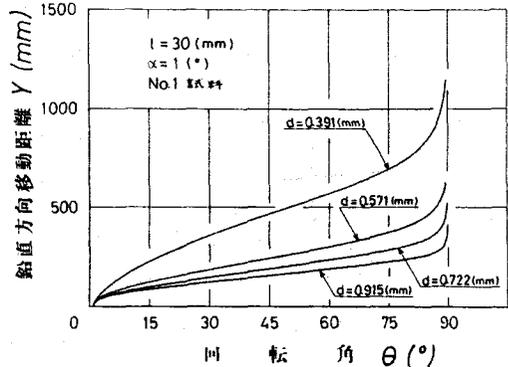
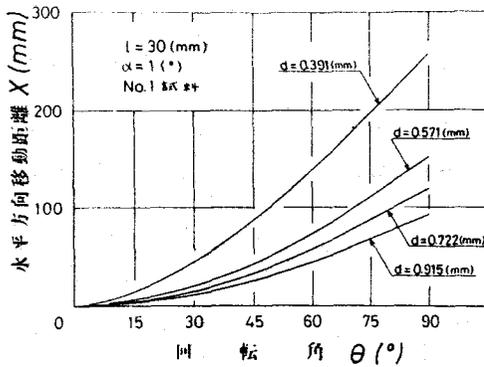


図 2.15 水平方向移動距離 X (mm) におよぼす直径の影響

図 2.16 鉛直方向移動距離 Y (mm) におよぼす直径の影響

る曲線の接線勾配 $dX/d\theta$, $dY/d\theta$ および X , Y の値は, d が小さいほど大きいことが分かる。

θ と \dot{X} の関係 (図 2.17) および θ と \dot{Y} の関係 (図 2.18) から, d が大きいほど \dot{X} , \dot{Y} は大きく, $d=0.391$ (mm) と $d=0.915$ (mm) の最大値を比較すると, \dot{X} , \dot{Y} に関してそれぞれ約 2.1 倍, 約 1.3 倍となる。いっぽう, θ と Y の関係 (図 2.22) から, d が大きいほど Y は大きく, 同様に $d=0.391$ (mm) と $d=0.915$ (mm) の場合を比較すると約 7 倍となる。したがって, $dX/d\theta$, $dY/d\theta$ を表わす (2.37) 式から, $dX/d\theta$, $dY/d\theta$ は, d が小さいほど大きくなることが分かる。

そこで, 長さの影響を表わす図 2.6, 2.7 と直径の影響を表わす図 2.15, 2.16 を比較すると, ある回転角に対する X , Y の値は, 長さ, 直径にかかわらず l/d が大きいほど大きくなることが分かる。したがって, l/d のもっとも大きい線状体の姿勢が水平になるのに十分な高さで, 線状体を自由落下させれば, 最終落下位置で l/d の値により線状体を分類することができる。

2.4.2 線状体重心の速度および加速度

図 2.17, 2.18 において, 線状体は, θ が 40° から 50° の範囲内

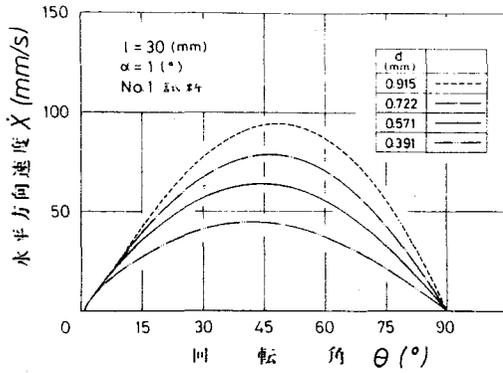


図2.17 水平方向速度におよぼす直径の影響

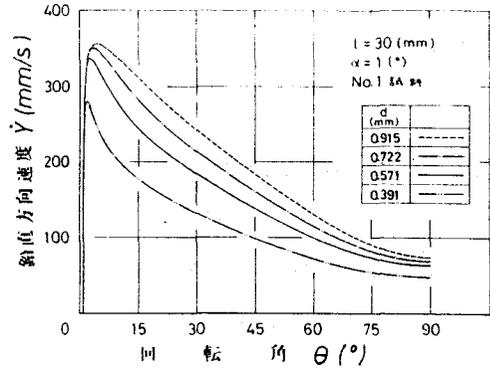


図2.18 鉛直方向速度におよぼす直径の影響

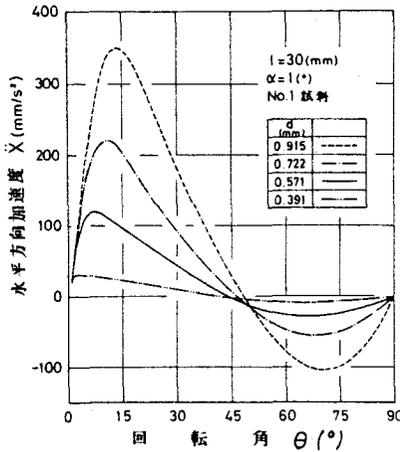


図2.19 水平方向加速度におよぼす直径の影響

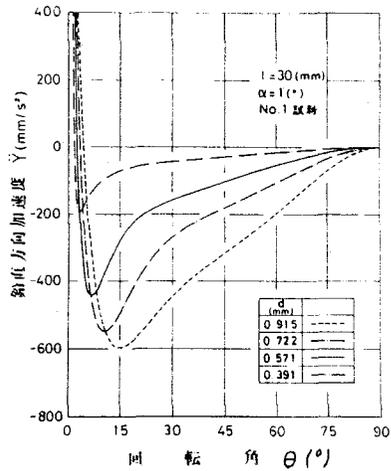


図2.20 鉛直方向加速度におよぼす直径の影響

まで水平方向に加速され、また、 θ が 5° 以下の範囲内まで鉛直方向に加速される。さらに、 θ の全領域($1^\circ \sim 90^\circ$)で \dot{X} 、 \dot{Y} ともに直径が大きいほど大きくなる。

直径が重心の加速度におよぼす影響を表わす図2.19、2.20において、 \ddot{X} 、 \ddot{Y} はそれぞれ $40^\circ < \theta < 50^\circ$ および $\theta < 5^\circ$ のとき0になるが、そのときの θ の値は、 \dot{X} 、 \dot{Y} が最大になるときの θ の値であり、 d が大きいほど大きくなる。表2.5から、 \dot{X} 、 \dot{Y}

が最大になるときの θ の値は、同一直径、同一長さの場合、 l/d が大きいほど小さいが、この θ の値におよぼす影響は直径の方が長さより大きいいため、直径、長さにかかわらず l/d が大きいほど小さくなるとは言えない。

つぎに、図2.19, 2.20から、 \ddot{X} は $3^\circ < \theta < 15^\circ$ のとき最大、 $64^\circ < \theta < 77^\circ$ のとき最小となり、 \ddot{Y} は $3^\circ < \theta < 16^\circ$ のとき最小となる。また、これらの最大値および最小値の絶対値とそのときの θ の値は、 d が大きいほど大きくなる。上述したように、 θ の全領域で \ddot{X} , \ddot{Y} ともに d が大きいほど大きく、また、 θ と γ の関係(図2.22)から、 d が大きいほど線状体はより短い時間で回転するので、加速あるいは減速される時間が小さくなる。したがって、 d が大きいほど \ddot{X} , \ddot{Y} の絶対値は大きい。

また、表2.6から、 \ddot{X} , \ddot{Y} が最大あるいは最小になるときの θ の値は、同一直径、同一長さの場合、 l/d が大きいほど小さいが、長さ、直径にかかわらず l/d が大きいほど小さくなるとは言えない。

2.4.3 線状体の姿勢および角速度

α と θ の関係および θ と γ の関係を図2.21, 2.22に示す。

α と θ の関係は、下に凸の曲線で始まり $10^\circ < \theta < 20^\circ$ のとき変曲点をもち、 $\theta = 90^\circ$ に漸近するような曲線になる。すなわち、 γ は落下開始直後に加速され、 $10^\circ < \theta < 20^\circ$ のとき最大となり、その後、 γ および重心速度の軸に直角な方向成分 u の増大に伴ない、線状体の回転を押える向きに作用する回転モーメント N が増大し角加速度は負になるので、 γ は減少し、 $\theta = 90^\circ$ で0となる。また、直径が大きいほど角速度は大きく、線状体が回転するのに要する時間は短い。

したがって、2.3.3項の結果をあわせて考えると、同一直径、同一長さの場合、 l/d が小さいほど γ は大きいという結果を得る。そこで、長さが姿勢および角速度におよぼす影響を表わ

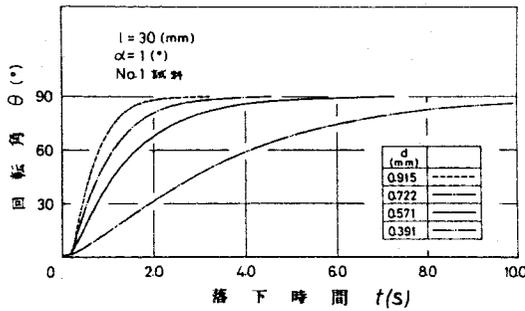


図2.21 姿勢におよぼす直径の影響

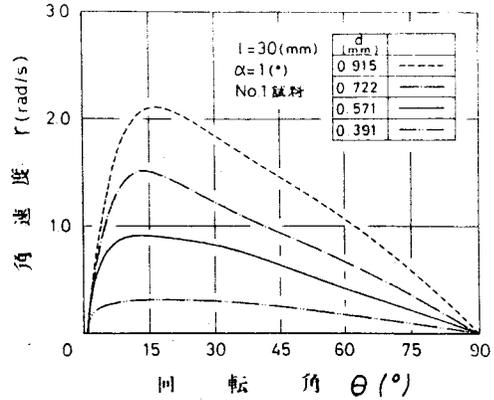


図2.22 角速度におよぼす直径の影響

す図2.12, 2.13と直径の影響を表わす図2.21, 2.22を比較すると, $d=0.571(mm)$, $l=45(mm)$ の場合と $d=0.391(mm)$, $l=30(mm)$ の場合を除いて, 長さ, 直径にかかわらず l/d が小さいほど γ は θ の全領域で大きくなり, 線状体が回転するのに要する時間は短くなるが, この2つの場合には前者が $l/d=78.8$, 後者が76.7と前者の方が l/d が大きいにもかかわらず γ は大きくなるため, 長さ, 直径にかかわらず l/d が小さいほど角速度は大きいとは言えない。

2.5 初期角度の影響

この節では, $d=0.391(mm)$, $l=30(mm)$ のNO.1試料に対する $\alpha=7^\circ, 10^\circ, 20^\circ, 30^\circ$ の計算結果から, 初期角度が落下特性におよぼす影響を調べる。

2.5.1 線状体の落下軌跡

$\alpha=7^\circ, 30^\circ$ の重心の軌跡と0.6(s)ごとの姿勢の変化を図2.23に示す。

初期角度により線状体が運動をおこなう位置が異なるが, 重心の軌跡は変曲点をもつ曲線になり, 最終的に姿勢は水平方

向に漸近し，水平方向にはほとんど移動しなくなり，鉛直方向に一定速度で落下する。また，落下開始後しばらくの間， $\alpha=30^\circ$ の方が X は大きく， Y は小さいため，同一鉛直方向移動距離での X の値は大きい，最終的には $\alpha=1^\circ$ の方が X の値は大きくなることが分かる。

表2.8に軌跡が変曲点をもつ位置(X, Y)と変曲点での dY/dX とそのときの θ の値を示す。

初期角度が大きいほど変曲点をもつ位置(X, Y)は小さくなるが，変曲点での dY/dX および θ の値は初期角度にかかわらず一致する。したがって，図2.23で $\alpha=30^\circ$ の軌跡を X, Y 軸に沿って変曲点同志が重なる位置まで平行移動すると， $\alpha=1^\circ$ と $\alpha=30^\circ$ の軌跡は一致することが予想される。

そこで，これを調べるため， θ と X の関係および θ と Y の関係を図2.24, 2.25に示す。

ある回転角に対する X, Y の値は， α が小さいほど大きい， $\alpha=10^\circ\sim 30^\circ$ の曲線を X 軸あるいは Y 軸に沿って平行移動すると，落下開始直後の θ にして約 5° の領域を除いて $\alpha=1^\circ$ の

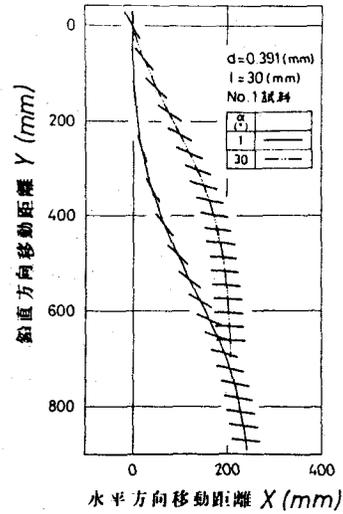


図2.23 落下軌跡におよぼす初期角度の影響

表2.8 軌跡が変曲点をもつ位置とこの点での接線の勾配と回転角の値

初期角度 α ($^\circ$)	接線勾配		水平方向 移動距離 X (mm)	鉛直方向 移動距離 Y (mm)
	dY/dX	θ ($^\circ$)		
1	1.928	59.5	136.7	567.4
10	1.928	59.5	129.5	399.7
20	1.928	59.5	113.9	296.6
30	1.928	59.5	92.2	212.4

$d=0.391$ (mm), $l=30$ (mm), No.1 試料

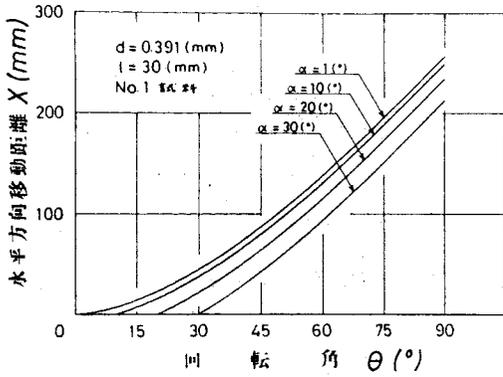


図2.24 水平方向移動距離におよぼす初期角度の影響

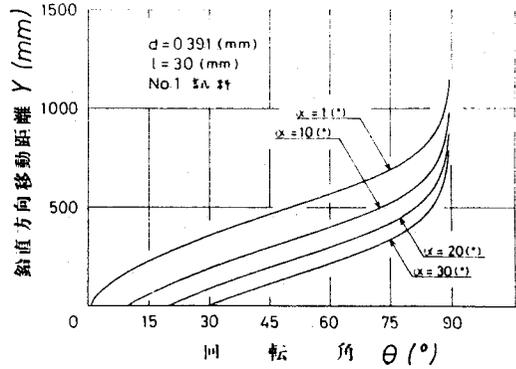


図2.25 鉛直方向移動距離におよぼす初期角度の影響

曲線と一致することが分かる。これは、 θ と \dot{X} の関係(図2.27)および θ と \dot{Y} の関係(図2.28)と θ と \dot{r} の関係(図2.31)から、 $\alpha = 10^\circ \sim 30^\circ$ のこれらの曲線が、落下開始直後の θ にして約 5° の領域を除いて $\alpha = 1^\circ$ の曲線と一致することから(2.37)式を考慮すれば明らかとなる。

したがって、 $\alpha = 10^\circ \sim 30^\circ$ の軌跡は、 X, Y 軸に右って θ が等しくなる位置まで平行移動すると、落下開始直後の θ にして約 5° の領域を除いて $\alpha = 1^\circ$ の軌跡と一致する。

図2.26に $\alpha = 30^\circ$ の軌跡を平行移動した後の $\alpha = 1^\circ$ と 30° の軌跡を示す。 $\alpha = 1^\circ$ の軌跡が分かれば $\alpha > 1^\circ$ の軌跡は落下開始直後の領域を除いてすべて分かる。

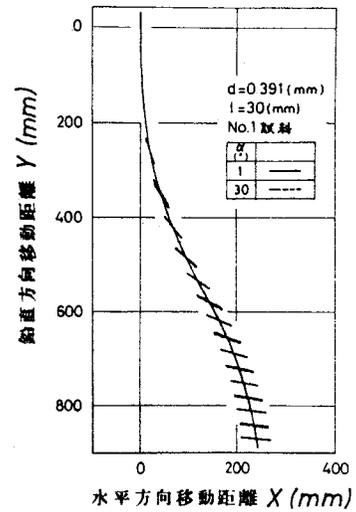


図2.26 落下軌跡におよぼす初期角度の影響

2.5.2 線状体重心の速度および加速度

図2.27, 2.28において、 $\alpha = 10^\circ \sim 30^\circ$ の \dot{X}, \dot{Y} は、落下開始直後急激に加速され $\alpha = 1^\circ$ の曲線に近づき一致する。また、 $\alpha = 1^\circ$

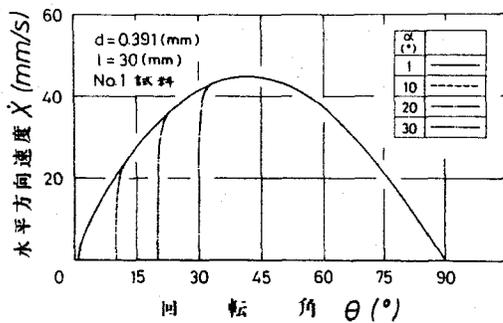


図2.27 水平方向速度におよぼす初期角度の影響

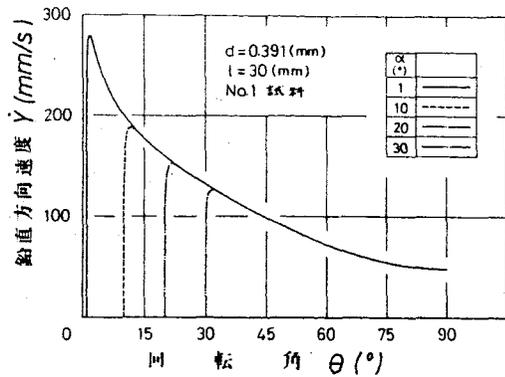


図2.28 鉛直方向速度におよぼす初期角度の影響

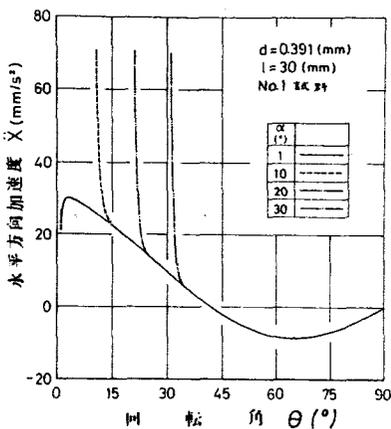


図2.29 水平方向加速度におよぼす初期角度の影響

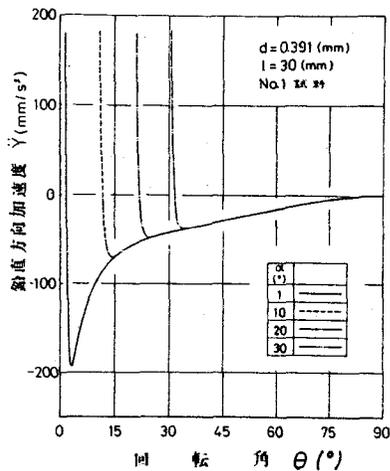


図2.30 鉛直方向加速度におよぼす初期角度の影響

の曲線と一致するまでに線状体が回転する角度は、 $\alpha=10^\circ, 20^\circ, 30^\circ$ の場合、 \dot{X} に関しては $5.5^\circ, 5.0^\circ, 4.7^\circ$ となり、 \dot{Y} に関しては $4.8^\circ, 4.3^\circ, 3.6^\circ$ となる。

つぎに、初期角度が重心の加速度におよぼす影響を調べるため、 θ と \ddot{X} の関係および θ と \ddot{Y} の関係を図2.29, 2.30に示す。

すでに2.3.2項で述べたように、線状体は落下開始の瞬間に主に重力と浮力の差にもとづく外力 F_G により水平方向に加速

度をもち、 \ddot{X} は減少して線状体が微小回転した後極小となる。落下開始の瞬間から \ddot{X} が減少する様子は、 $\alpha=10^\circ\sim 30^\circ$ の場合明確に現われている。

落下開始の瞬間では、初期角度が大きいほど F_G の x 方向成分は大きく、 y 方向成分は小さいので、軸に直角な方向の加速度 du/dt の絶対値は大きく、軸方向の加速度 dv/dt の絶対値は小さくなり(du/dt , dv/dt は負の値である。), 加速度を表わす(2.24)式を考慮すれば、 \ddot{X} は大きく、 \ddot{Y} は小さくなる。すなわち、 $\alpha=1^\circ, 10^\circ, 20^\circ, 30^\circ$ の場合、 $\ddot{X}=26.7, 261.4, 491.2, 661.8$ (mm/s^2), $\ddot{Y}=4261, 4215, 4082, 3879$ (mm/s^2)となる。しかし、 $\alpha=10^\circ\sim 30^\circ$ の \ddot{X} , \ddot{Y} は落下開始直後急激に減少して $\alpha=1^\circ$ の曲線に近づき一致する。

2.5.3 線状体の姿勢および角速度

姿勢および角速度の変化を図2.31, 2.32に示す。 ψ と θ の関係は変曲点をもち $\theta=90^\circ$ に漸近するような曲線になる。この曲線が変曲点をもちときの θ の値は、 $\alpha=1^\circ, 10^\circ, 20^\circ, 30^\circ$ の場合、 $\theta=18.2^\circ, 18.2^\circ, 23.3^\circ, 32.5^\circ$ であり、この θ の値は、 r が最大になるときの値であるから、角速度が最大になるまでに線状体が回転する角度は α が大きいほど小さくなる。

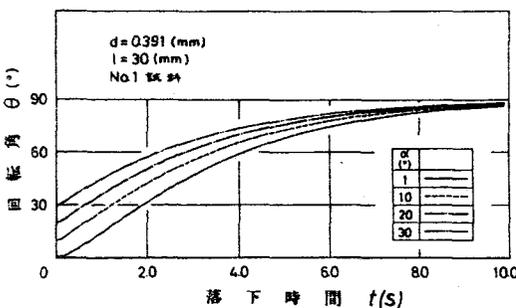


図2.31 姿勢におよぼす初期角度の影響

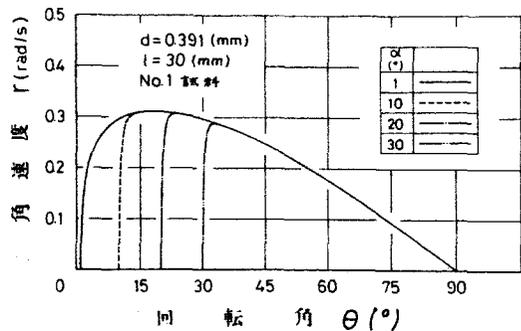


図2.32 角速度におよぼす初期角度の影響

また、 $\alpha = 10^\circ \sim 30^\circ$ の曲線を横軸（落下時間軸）に沿って平行移動すると、落下開始直後の θ にして約 5° の領域を除いて $\alpha = 7^\circ$ の曲線と重なることが分かる。これは、図2.32において、 $\alpha = 10^\circ \sim 30^\circ$ の γ が、落下開始直後急激に加速され $\alpha = 7^\circ$ の曲線に近づき一致することから明確に分かる。なお、 $\alpha = 7^\circ$ の場合と一致するまでに線状体が回転する角度は、 $\alpha = 10^\circ, 20^\circ, 30^\circ$ の場合、 $5.8^\circ, 5.7^\circ, 4.5^\circ$ となる。

以上の結果から、落下開始直後の急激な加速領域を除き、初期角度は運動状態に影響をおよぼさず、姿勢が同じであれば初期角度に関係なく運動状態は同一になる。

2.6 線状体比重量の影響

この節では、 $d = 0.391 (mm)$ 、 $l = 30, 60 (mm)$ のNO.1試料と $d = 0.310 (mm)$ 、 $l = 30, 60 (mm)$ のNO.2試料に対する計算結果から、線状体比重量が落下特性におよぼす影響について調べる。なお、NO.1試料とNO.2試料では直径も異なるため、2.4節で述べた直径の影響の結果も考慮する必要がある。

2.6.1 線状体の落下軌跡

$l = 30 (mm)$ のNO.1試料とNO.2試料の落下軌跡を図2.33に示す。線状体の時間間隔は、NO.1試料の場合、 $\Delta t = 0.6 (s)$ 、NO.2試料の場合、 $\Delta t = 0.3 (s)$ である。

重心の軌跡は変曲点をもつ曲線になり、おの大きいNO.2試料の方が同一回転角での速度は大きく、線状体が回転するのに要する時間は短いことが分かる。また、軌跡が変曲点をもつ位置は、NO.1試料、NO.2試料でそれぞれ $(136.7, 567.4)$ 、 $(148.3, 531.2)$ であり、2.3.1項に記載した表2.4から、NO.2試料の方が変曲点での $d\gamma/d\alpha$ の値は小さく、そのときの θ の値は大きくなる。

すでに述べたように、直径が大きいほど変曲点での dY/dX の値は小さく、 θ の値は大きくなる。したがって、同一直径で重さが異なる場合、加速度の方向と一致するときの重心の運動方向、およびそのときの線状体の姿勢は、重い方がより水平に近くなる。

つぎに、図 2.33 から同一回転角に対する Y の値は、 l の大きい No.2 試料の方が小さいが、 X の値に関しては分かりにくい。そこで、これを明確にするため、姿勢の変化に対する X 、 Y の変化を図 2.34、2.35 に示す。

図 2.34 から、 $l=30$ (mm) の場合、ある回転角に対する X の値は、 $\theta < 63.5^\circ$ の領域では No.1 試料の方が大きい、これ以上の領域では No.2 試料の方が大きい。なお、この図には現われていないが $l=60$ (mm) の場合、 $\theta < 59.5^\circ$ の領域で No.1 試料の方が大きくなる。

また、図 2.35 から、 Y の値は落下開始直後の θ の小さい領域のみで No.2 試料の方が大きくなる。この θ の値は $l=30, 60$ (mm) の場合、 $2.0^\circ, 4.5^\circ$ である。

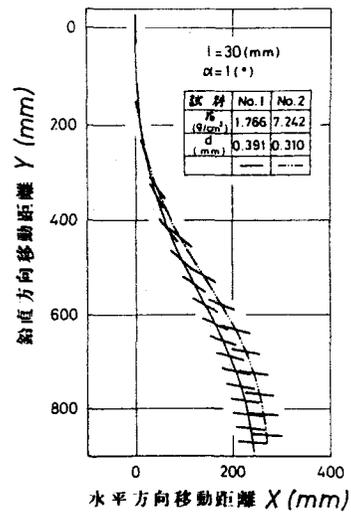


図 2.33 落下軌跡におよぼす比重量の影響

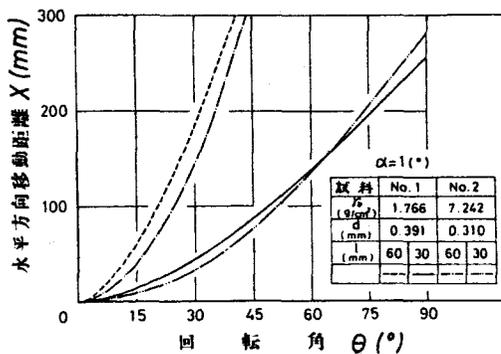


図 2.34 水平方向移動距離におよぼす比重量の影響

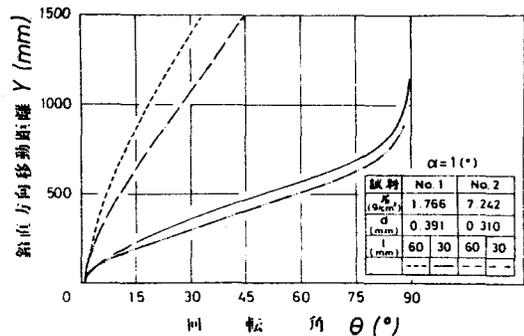


図 2.35 鉛直方向移動距離におよぼす比重量の影響

同一回転角における X , Y の値は, 直径が大きいほど小さいので, No.1試料と同一直径のNo.2試料の場合, X , Y は図示した値より小さくなり, No.1試料の方が大きくなる θ の領域は拡大される。したがって, No.1試料と同一直径のNo.2試料の場合, 重心の軌跡は図2.33に示す軌跡を X , Y 方向に縮小したものになる。

2.6.2 線状体重心の速度および加速度

姿勢の変化に対する重心の速度の変化を図2.36, 2.37に示す。線状体は, $\theta = 40^\circ \sim 50^\circ$ の範囲内まで水平方向に加速され, また, $\theta < 5^\circ$ まで鉛直方向に加速される。さらに, θ の全領域で \dot{X} , \dot{Y} ともに ρ の大きいNo.2試料の方が大きくなる。2.3.2項に記載した表2.5から, \dot{X} , \dot{Y} が最大になるときの θ の値はNo.2試料の方が大きくなる。なお, No.2試料の \dot{X} , \dot{Y} の最大値はNo.1試料の約3.7倍, 2.8倍である。

\dot{X} , \dot{Y} の値およびそれらが最大になるときの θ の値は, 直径が大きいほど大きい。したがって, 同一直径で重さが異なる場合, これらの値は重い方がいっそう大きくなる。

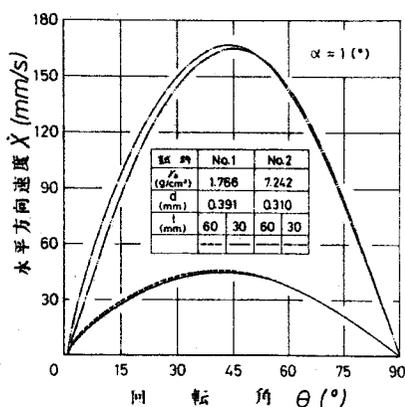


図2.36 水平方向速度におよぼす比重量の影響

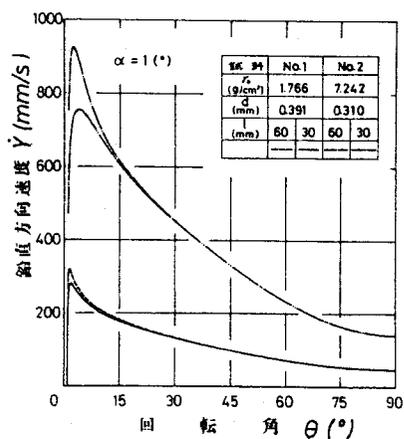


図2.37 鉛直方向速度におよぼす比重量の影響

また、これらの図で $l=60(mm)$ と $l=30(mm)$ の場合の差を比較すると、 \dot{X} 、 \dot{Y} とともに NO.2 試料の方が大きく、 γ_0 が大きい方が長さの影響を受け易い。

つぎに、表 2.6 から \ddot{X} の最大値および最小値の絶対値、 \ddot{Y} の最小値の絶対値とそのときの θ の値は、 γ_0 の大きい NO.2 試料の方が大きくなる。上述したように、 θ の全領域で \dot{X} 、 \dot{Y} とともに NO.2 試料の方が大きく、また、 α と θ の関係 (図 2.38) から、NO.2 試料の方が短い時間で回転するのだから加速あるいは減速される時間が小さくなる。したがって、NO.2 試料の方が \ddot{X} 、 \ddot{Y} の絶対値は大きい。

ここで、直径の影響を考慮すると、同一直径で重さが異なる場合、上述の値は重い方がいっそう大きくなる。

2.6.3 線状体の姿勢および角速度

姿勢の変化を図 2.38 に示す。 γ_0 の大きい NO.2 試料の方が角速度は大きく、線状体が回転するのに要する時間は小さい。また、 $l=30(mm)$ の NO.1 試料の曲線と $l=60(mm)$ の NO.2 試料の曲線はかなり似た形になる。

2.3.3 項に記載した表 2.7 から、NO.2 試料の方が \dot{Y} の最大値は約 4.5 倍大きく、 \dot{Y} が加速される θ の領域は小さいことが分かる。ここで、直径が大きいほど角速度は大きくなることを考慮すると、同一直径で重さが異なる場合、重い方がいっそう大きくなる。

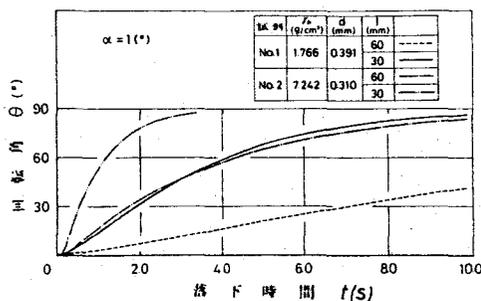


図 2.38 姿勢におよぼす比重量の影響

2.7 流体の温度の影響

この節では、 $d=0.571, 0.915$ (mm), $l=60$ (mm)のNo.1試料に対して、水温を $T_w=10, 15, 20, 30$ (°C)と変化させた場合の落下特性を調べる。各水温に対する水の物性値は表2.2に示した通りである。水温が変化すると、比質量の変化はわづかであるが、動粘性係数が大きく変わる。

2.7.1 線状体の落下軌跡

$d=0.571$ (mm), $T_w=10, 30$ (°C)の重心の軌跡と0.4(s)ごとの姿勢の変化を図2.39に示す。

水温により重心の軌跡は異なり、同一鉛直方向移動距離での X の値は、 $T_w=30$ (°C)のときの方が大きい。この図には示していないが計算によれば、 $T_w=30$ (°C)のときの方が X の値が大きいのは、 Y が2040 (mm)以下の範囲内であり、最終的には $T_w=10$ (°C)の方が X の値は大きくなる。(図2.42参照) また、この図から線状体が回転するのに要する時間は $T_w=30$ (°C)のときの方が小さいことが分かる。なお、図示していないが、 $T_w=15, 20$ (°C)の重心の軌跡は $T_w=10$ (°C)と 30 (°C)の軌跡の間に位置する曲線になる。

表2.9に軌跡が変曲点をもつ位置(X, Y)と変曲点での dY/dX とそのときの θ の値を示す。

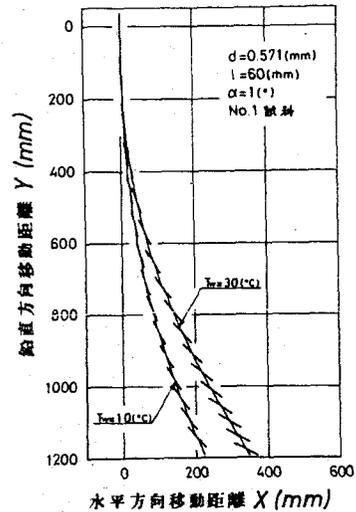


図2.39 落下軌跡におよぼす水温の影響

表2.9 軌跡が変曲点をもつ位置とこの点での接線勾配と回転角の値

線状体直径 d (mm)	水温 T_w (°C)	接線勾配 dX/dY	θ (°)	水平方向 移動距離 X (mm)	鉛直方向 移動距離 Y (mm)
0.571	10	1.912	59.4	363.8	1476.3
	15	1.888	60.0	339.3	1349.2
	20	1.861	60.0	316.5	1241.5
	30	1.756	61.5	316.2	1140.8
	10	1.718	62.1	199.6	731.4
0.915	15	1.631	62.8	204.1	712.1
	20	1.556	63.4	207.8	696.7
	30	1.433	64.4	213.5	672.7

$l=60$ (mm), No.1試料

$d=0.571, 0.915$ (mm) とともに, T_w が大きいほど dY/dX の値は小さく, θ の値は大きくなる。すなわち, 水温が高いほど, 加速度の方向と一致するときの重心の運動方向, およびそのときの線状体の姿勢はより水平に近くなる。ところが, 変曲点をもちつ位置は, 直径により異なる傾向を示し, $d=0.571$ (mm) の場合, T_w が大きいほど X, Y の値は小さくなるが, $d=0.915$ (mm) の場合, T_w が大きいほど Y の値は小さくなるが, X の値は逆に大きくなる。

つぎに, 水温が X, Y におよぼす影響を調べるため, θ をパラメータとして, $d=0.571$ (mm) の T_w と X の関係および T_w と Y の関係を図示した。

図2.40, 2.41において, 水温の変化に対する X, Y の変化を表わす曲線は下に凸となり, 同一回転角に対する Y の値は, T_w が 10 (°C) から 30 (°C) の範囲内では, θ の全領域で T_w が大きいほど小さいが, X の値は $\theta \leq 70^\circ$ では T_w が大きいほど小さいが, $\theta = 80^\circ$ の場合, $T_w = 30$ (°C) の値は $T_w = 20$ (°C) の値より大きくなる。そこで, これを調べるため, $T_w = 10, 20, 30$ (°C) の θ

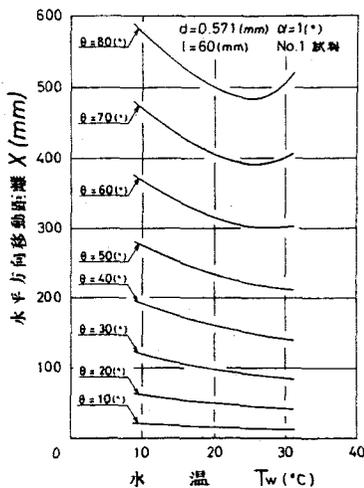


図2.40 水平方向移動距離におよぼす水温の影響

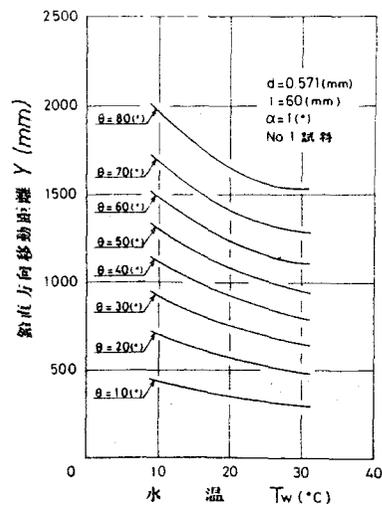


図2.41 鉛直方向移動距離におよぼす水温の影響

とXの関係を図2.42に示す。この図から、 $\theta < 79^\circ$ ではXの値は $T_w=20$ ($^\circ\text{C}$)の方が大きい。これ以上の領域では $T_w=30$ ($^\circ\text{C}$)の方が大きくなる。この原因について考える。

θ と γ の関係(図2.50)から $T_w=30$ ($^\circ\text{C}$)の場合、 $\theta=35^\circ$ 付近から 50° 付近までの領域で γ が急激に減少し、 $T_w=20$ ($^\circ\text{C}$)の曲線に近づき、 $\theta > 50^\circ$ ではこれらの差はあぶかとなる。ところが、 θ とXの関係を表わす図2.43ではこのような現象は見られない。したがって、(2.37)式の第1式、 $dX/d\theta = X/\gamma$ を考慮すれば、 γ の急激な減少によって $T_w=30$ ($^\circ\text{C}$)の接線勾配 $dX/d\theta$ が $T_w=20$ ($^\circ\text{C}$)のそれより大きくなり、その結果 $\theta > 79^\circ$ で上述の現象が生じたと考えられる。なお、 γ が急激に減少する原因については2.7.3項で述べる。

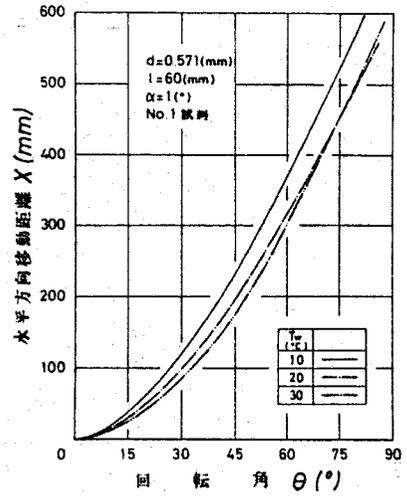


図2.42 水平方向移動距離におよぼす水温の影響

2.7.2 線状体重心の速度および加速度

$d=0.571$ (mm), $T_w=10, 20, 30$ ($^\circ\text{C}$)の θ と \dot{X} の関係および θ と \ddot{X} の関係を図2.43, 2.44に示す。

線状体は $\theta=40^\circ \sim 45^\circ$ の範囲内まで水平方向に加速され、また、 $\theta < 2^\circ$ まで鉛直方向に加速される。さらに、 θ の全領域で \dot{X} , \ddot{X} ともに T_w が大きいほど大きい。

表2.10に \dot{X} , \ddot{X} の最大値とそれときの θ の値を示す。

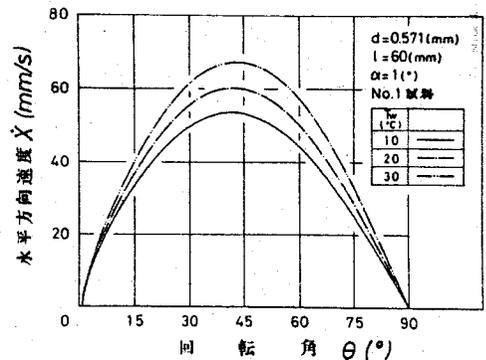


図2.43 水平方向速度におよぼす水温の影響

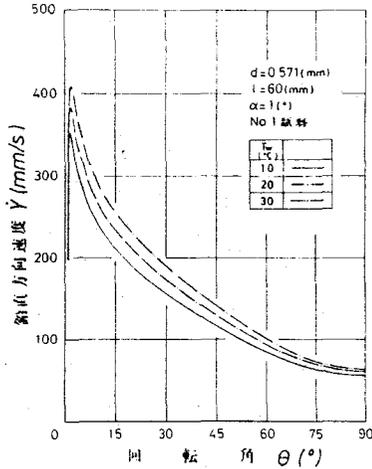


図2.44 鉛直方向速度におよぼす水温の影響

表2.10 重心速度の最大値とそのときの回転角の値

径	水温	水平方向速度の最大値	鉛直方向速度の最大値
d (mm)	$T_w (^{\circ}C)$	$\dot{X}_{max} (mm/s)$	$\dot{Y}_{max} (mm/s)$
0.571	10	53.56	353.0
	15	56.85	369.1
	20	60.24	383.7
	30	67.30	408.4
0.915	10	75.85	410.0
	15	82.65	421.1
	20	89.52	431.6
	30	102.97	450.5

l=60 (mm), No.1 試料

\dot{X} , \dot{Y} が最大になるときの θ の値は T_w が大きいほど大きく, $T_w = 15, 20, 30 (^{\circ}C)$ の \dot{X} , \dot{Y} の最大値は, $T_w = 10 (^{\circ}C)$ の値のそれぞれ, 1.06, 1.12, 1.27 倍 (\dot{X} , $d=0.571 (mm)$), 1.05, 1.09, 1.16 倍 (\dot{Y} , $d=0.571 (mm)$), 1.09, 1.18, 1.36 倍 (\dot{X} , $d=0.915 (mm)$), 1.03, 1.05, 1.10 倍 (\dot{Y} , $d=0.915 (mm)$) となる。

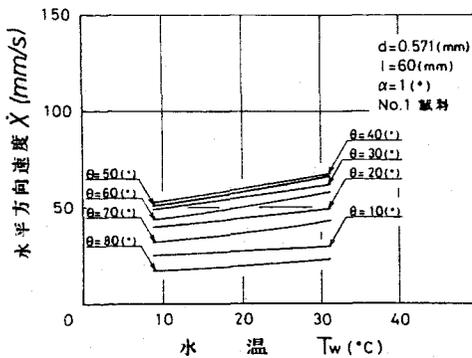


図2.45 水平方向速度におよぼす水温の影響

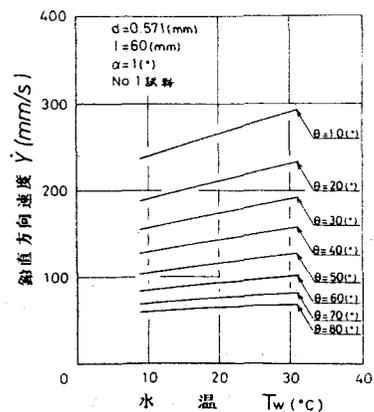


図2.46 鉛直方向速度におよぼす水温の影響

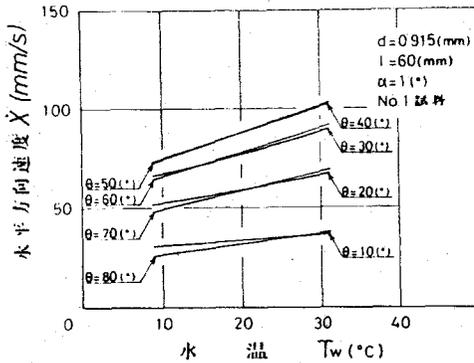


図 2.47 水平方向速度におよぼす水温の影響

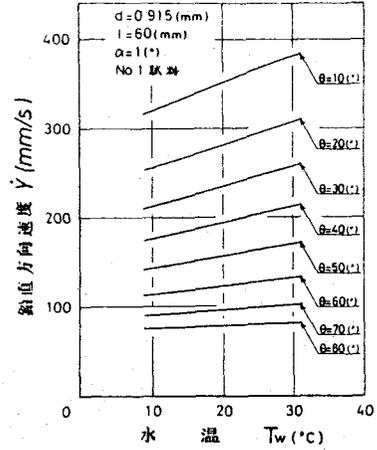


図 2.48 鉛直方向速度におよぼす水温の影響

つぎに、水温が変化すると \dot{X} , \dot{Y} がどのように変わるかを調べるため、 θ をパラメータとして T_w と \dot{X} の関係および T_w と \dot{Y} の関係を図示した。

$d=0.571, 0.915$ (mm) とともに、 T_w と \dot{X} の関係および T_w と \dot{Y} の関係はほぼ直線関係となり（厳密に言えば、 \dot{X} は下に凸、 \dot{Y} は上に凸になる。）、 \dot{X} に関しては減速領域での方が直線の勾配は大きく、 \dot{Y} に関しては θ の増加に伴ないその勾配は小さくなる。また、 $d=0.571$ (mm) と $d=0.915$ (mm) の勾配を比較すると、 \dot{X} , \dot{Y} とともに $d=0.915$ (mm) の方が大きい。

表 2.11 重心加速度の最大値、最小値とそのときの回転角の値

球径は直径 d (mm)	水温 Tw (°C)	水平方向加速度の最大値		水平方向加速度の最小値		鉛直方向加速度の最小値	
		\dot{X}_{max} (mm/s ²)	θ (°)	\dot{X}_{min} (mm/s ²)	θ (°)	\dot{Y}_{min} (mm/s ²)	θ (°)
0.571	10	22.05	1.00	-4.56	64.2	-135.9	2.45
	15	21.53	1.95	-5.51	64.6	-167.0	2.72
	20	26.51	2.71	-6.58	64.6	-200.4	3.04
	30	38.41	3.29	-7.60	65.5	-260.9	3.77
0.915	10	72.56	5.86	-15.82	66.2	-324.1	5.39
	15	87.16	6.06	-18.85	66.6	-352.6	6.06
	20	102.89	6.73	-22.14	66.8	-377.2	6.73
	30	137.59	7.24	-29.39	67.2	-409.9	7.24

l = 60 (mm), No. 1 試料

表2.11に \ddot{X} の最大値および最小値， \ddot{Y} の最小値とそのときの θ の値を示す。最大値および最小値の絶対値と θ の値は， T_w が大きいほど大きくなる。なお，表中の $d=0.571(\text{mm})$ ， $T_w=10(^{\circ}\text{C})$ の \ddot{X} の最大値は落下開始の瞬間での値であり，この場合，落下開始の瞬間から \ddot{X} は増大することなく減少し続ける。また， $T_w=15(^{\circ}\text{C})$ の \ddot{X} の最大値は，極小の状態から増大した後の値であり，落下開始の瞬間での値はこれより大きい。

2.7.3 線状体の姿勢および角速度

$d=0.571(\text{mm})$ ， $T_w=10, 20, 30(^{\circ}\text{C})$ の姿勢および角速度の変化を図2.49, 2.50に示す。

γ と θ の関係は変曲点をもつ曲線になり， T_w が大きいほど γ は大きく，線状体が回転するのに要する時間は短い。

これらの曲線が変曲点をもつときの θ の値は， γ が最大になるときの θ の値であり， γ の最大値とそのときの θ の値を表2.12に示す。 T_w が大きいほど θ の値は小さく， $T_w=15, 20, 30(^{\circ}\text{C})$ の γ の最大値は， $T_w=10(^{\circ}\text{C})$ の値のそれぞれ $d=0.571(\text{mm})$ の場合，1.16, 1.33, 1.70倍， $d=0.915(\text{mm})$ の場合，1.15, 1.29, 1.47倍となる。

つぎに，図2.50において $T_w=30(^{\circ}\text{C})$ の場合， $\theta=35^{\circ}$ 付近から 50° 付近までの領域で γ が急激に減少し， $T_w=20(^{\circ}\text{C})$ の曲線

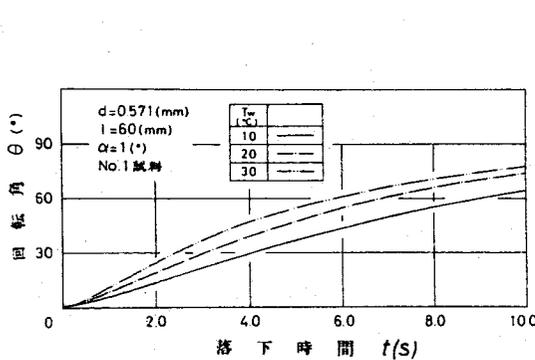


図2.49 姿勢におよぼす水温の影響

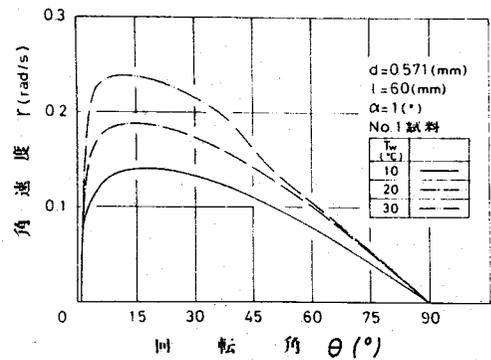


図2.50 角速度におよぼす水温の影響

に近づく現象が見られる。この原因について考える。

2.2.3項で述べたように、抗力係数 C_d の式は、 Re の範囲により異なり $5 < Re < 37$ では(2.30c)式、 $Re \geq 37$ では(2.30d)式である。

ところが、(2.30c)式と(2.30d)式は $Re = 37$ で前者の方が接線勾配が大きく、両曲線は滑らかにつながっていない。これは、従来、実験によっても確かめられており、円柱に対する C_d は Re の増加に伴ない減少するが、 $Re = 40$ 程度を境として減少の割合が変わる。 $Re > 40$ の範囲では C_d の減少割合が $Re < 40$ の範囲に比べて非常に小さくなる。

線状体に作用する外力および回転モーメントを計算する際、線状体を N 個の微小要素に分けたが、線状体の運動方向と回転方向から、線状体の後端($\gamma = \ell/2$)に近い要素ほど、その Re は大きく、 $T_w = 30(^{\circ}\text{C})$ の場合、 $\theta = 35^{\circ}$ 付近で後端にもっとも近い要素の Re が37を越え、この要素に作用する D_x を計算するときには(2.30d)式を用い、その他の要素に対しては(2.30c)式を用いることになる。ところが、(2.30c)式の方が接線勾配が大きいため、 $Re \geq 37$ では(2.30d)式を用いた方が C_d の値は大きく、したがって、 D_x が大きくなり、全要素の Re が37以下であったときに比べて回転モーメント M の減少率が急に小さくなる。 M は回転を押える向きに作用するので角加速度 $d\gamma/dt$ (< 0)の絶対値は急に大きくなり、 γ は急に減少する。この状態は先端($\gamma = -\ell/2$)にもっとも近い要素の Re が37以上になる($T_w = 30(^{\circ}\text{C})$ の場合、約 52°)まで続く。

$T_w \leq 20(^{\circ}\text{C})$ の場合、 $T_w = 30(^{\circ}\text{C})$ の場合に比べて u 、 γ は小さく、 ν が大きいため、 θ の全領域で $Re < 37$ となるので γ の

表2.12 角速度の最大値とそのときの回転角の値

線状体直径 d(mm)	水温 $T_w(^{\circ}\text{C})$	角速度の最大値	
		γ (rad/s)	θ ($^{\circ}$)
0.571	10	0.1408	17.5
	15	0.1638	16.1
	20	0.1878	14.9
	30	0.2387	12.3
0.915	10	0.4491	10.9
	15	0.5144	10.7
	20	0.5771	10.0
	30	0.6599	9.5

$l = 60$ (mm), No.1 試料

急激な減少は生じない。したがって、水温が高い場合、動粘性係数が小さくなり、線状体の軸方向の位置によって $Re > 37$ の所と $Re < 37$ の所が存在するため、上述のように角速度が急激に減少する現象が見られる。

以上、この節の結果から流体の温度は落下特性に大きな影響をおよぼすので、実験の際には流体の温度に十分注意する必要がある。

2.8 空気中における線状体の運動

これまでは、線状体が水中で自由落下する場合の落下特性および諸要因の影響を調べたが、この節では、空気中で運動する場合の落下特性および諸要因の影響を調べ、水中での結果と比較して主に流体の比重量の違い（水の比重量は空気の比重量の約900倍）により落下特性がどのように変わるかを明らかにする。

2.8.1 線状体の落下軌跡

$d = 0.571$ (mm), $\alpha = 10^\circ$, $l = 30, 60$ (mm) および $l = 30$ (mm), $\alpha = 10^\circ$, $d = 0.571, 0.915$ (mm) の重心の軌跡と 0.2 (s) ほどの姿勢の変化を図 2.51, 2.52 に示す。

水中での場合、線状体はほとんど鉛直方向に運動し始めるが、姿勢が除々に水平方向に回転するにつれて、水平方向速度も除々に増大し始める。そして、重心の軌跡は、 $\theta = 60^\circ \sim 65^\circ$ のとき変曲点をもつ曲線になり、最終的に、姿勢は水平方向に漸近し、しかも、線状体は水平方向にはほとんど移動しなくなり、鉛直方向に一定速度で落下する。

これに対し、空気中での場合、線状体が回転して水平な姿勢に近づくが、水平な姿勢になっても回転は止まらず $\theta > 90^\circ$ の状態になり、ふたたび逆向きに回転して水平方向に近づく。この

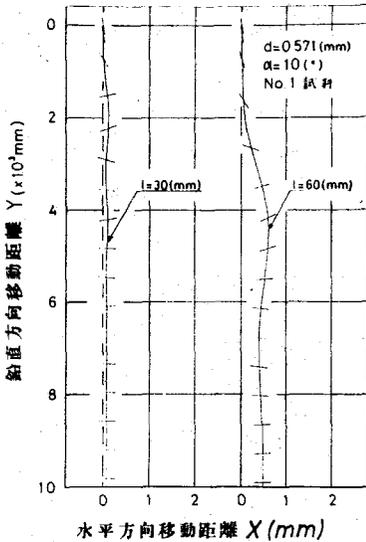


図2.51 落下軌跡におよぼす長さの影響

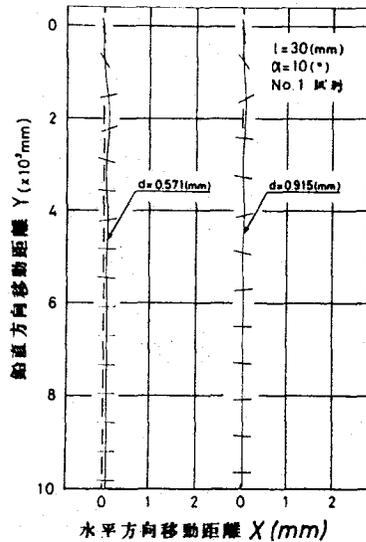


図2.52 落下軌跡におよぼす直径の影響

ように姿勢は水平方向を中心にして振動しながら除々に水平方向に漸進する。すなわち、水平方向を中心にして減衰振動する現象が見られる。姿勢の変化に応じて水平方向速度の向きが変化するため、重心の軌跡も変動し、軌跡にはいくつかの変曲点が見られる。そして、水平な姿勢に漸進するにつれて水平方向速度も0に近づくので、軌跡の変動の振幅は除々に減少し、最終的に、線状体は鉛直方向に一定速度で落下する。

このように、重心の軌跡が変動するのは、空気の比重量が水の比重量の約1/900であるため、線状体に作用する抗力が水中での場合に比べて非常に小さいことが原因していると考えられる。空気中での場合、軌跡が変動するけれども最終落下位置（線状体が水平方向に移動しなくなり、鉛直方向に一定速度で落下しているとき）での水平方向移動距離Xは、同一直径、同一長さの場合ともに、細長比 l/d が大きい方が大きくなり、これは水中での結果と一致する。また、 l/d が大きい方が姿勢の変動周期が長いため、軌跡が変動する周期は長くなり、同一

直径の場合、その振幅は大きいことが分かる。いっぽう、同一長さの場合、 X の変化を表わす図 2.67 を見れば分かるように、直径が小さいほど X は急激に減衰するので、落下開始後しばらくは直径が小さいほど軌跡の変動の振幅は大きくなるが、やがて、直径が大きい方がその振幅は大きくなる。

つぎに、初期角度の影響を調べる。水中での場合、姿勢の変化に対する重心速度の変化および角速度の変化は、落下開始直後の θ の小さい領域を除いて初期角度の影響を受けないことから、 $\alpha = 10^\circ \sim 30^\circ$ の軌跡を X, Y 軸に沿って θ が等しくなる位置まで平行移動すると、落下開始直後の急激な加速領域を除き $\alpha = 1^\circ$ の曲線に一致するという結果が得られている。

しかし、空気中での場合、軌跡が変動しその周期はほとんど初期角度の影響を受けないが、振幅は初期角度の影響を受け α が小さいほど大きくなるため、上述の結果は得られない。さらに、 α が小さいほど変動の振幅が大きいため、最終落下位置での水平方向移動距離は、 $\alpha = 1^\circ, 10^\circ, 20^\circ, 30^\circ$ の場合、約 57.6, 77.2, 90.7, 95.5 (mm) と α が小さいほど小さくなり、この結果は水中での場合と逆になる。

空気中での場合、最初に θ が 90° 以上になるとき X は最大になる。ここで、両者の X の最大値を比較すると、空気中での場合の方が X の最大値は非常に大きい。短時間のうちに X は負の値になるため、 X の最大値は水中での場合の方が大きくなる。また、空気の方が比重量が小さく、線状体に作用する抗力が小さいため、 Y の値は水中での場合に比べて 10 倍以上大きくなる。したがって、 X が最大になるまでの時間は短い。そのときの Y の値は水中での場合より数倍大きい。たとえば、 $\alpha = 0.915$ (mm), $l = 30$ (mm) の場合、 X の最大値およびそのときの Y の値は、水中では、約 93, 400 (mm)、空気中では、約 66, 1780 (mm) である。

なお、ここで用いた条件の範囲内では、空気中において重心

の軌跡が変動する状態を実験的に確かめるためには、1周期分の変動を観察するにも最低3(m)程度の高さが必要であり、この高さは長さが大きいほど、また、直径が小さいほど大きくする必要があることが分かった。

以上のように、線状体が空気中で運動する場合、姿勢は水平方向を中心にして減衰振動するため、この変動に応じて水平方向速度の向きが変化し、重心の軌跡が変動する現象が生ずる。したがって、以下では重心速度の変化および姿勢の変化におよぼす要因の影響について述べるが、その際水中での場合と異なり、落下時間に伴って重心の速度、加速度および角速度がどのように変化するか、また、その変化の状態に要因がいかなる影響をおよぼすかを調べる。

2.8.2 初期角度の影響

$d=0.571(mm)$ 、 $l=30(mm)$ の線状体が水中において $\alpha=7^\circ$ で運動する場合、落下開始時から角速度 γ は急激に加速され、約0.4(s)で最大になり、その後減速されるが、姿勢が水平方向に近づくにつれて角加速度 $d\gamma/dt (<0)$ の絶対値が減少するので $\gamma > 0$ の状態を保ったまま0に漸近する。これに対し、空気中での場合、図2.54に示す $\alpha=7^\circ$ の曲線を見れば分かるように、空気の比重量が小さいため、落下開始直後の領域では角加速度

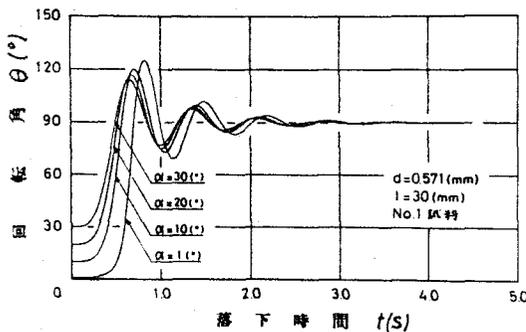


図2.53 姿勢におよぼす初期角度の影響

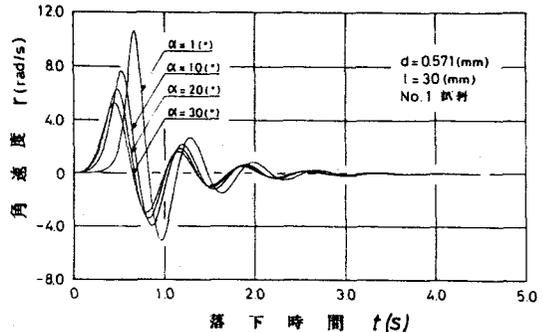


図2.54 角速度におよぼす初期角度の影響

$dr/dt (>0)$ の値が非常に小さく、 γ はほとんど増大しない。やがて、線状体の軸方向速度の急激な増大に伴ない γ は急激に加速され始める。したがって、 $t < 0.44$ (s) 程度の領域では、水中での場合の方が γ の値は大きく、また、 $t < 0.56$ (s) ($\theta < 20^\circ$) 程度の領域では、同一落下時間における姿勢は水中での場合の方がより水平に近くなる。そして、 γ の増大に伴ない線状体の回転を押える向きに作用する回転モーメント N が増大し、 $\theta = 72^\circ$ 程度で γ は最大となり、その後急激に減速される。しかし、角速度は、水中での場合、 $\theta = 13^\circ$ 程度まで加速されるのに対し、空気中での場合、水平に近い姿勢になるまで加速されることおよび回転モーメント N の値が γ が大きい割には小さいため、水平な姿勢になっても γ は大きく、図 2.53 を見れば分かるように $\theta > 90^\circ$ の状態になる。その後も γ は急激に減少し続け、 $t = 0.82$ (s) 程度で $\gamma = 0$ 、 θ が最大、約 125° になる。このとき線状体は水平方向に対して約 35° 傾いており、 $dr/dt (<0)$ の絶対値は大きく γ は 0 でとどまらず負の値になるので、今までは逆向きに回転し始める。そして、 $\gamma (<0)$ の絶対値の増大に伴ない回転を押える向きに作用する回転モーメント N が増大し、 $\theta = 99^\circ$ 程度で γ は最小となり、その後増大するが、水平な姿勢になっても γ の絶対値は大きくそのまま回転し続けて $\theta < 90^\circ$ の状態になる。その後も γ は増大し続け、 $t = 1.14$ (s) 程度で $\gamma = 0$ 、 θ が極小、約 69° になるが、線状体は水平方向に対して傾いており、 γ は 0 でとどまらず正の値になるので、ふたたび今までは逆向きに回転し始める。すなわち、空気中での場合、線状体は急激に回転して $\theta > 90^\circ$ の状態になり、逆向きに回転して水平な姿勢に近づくが、水平な姿勢でとどまらず $\theta < 90^\circ$ となり、ふたたび逆向きに回転するというように、水平な姿勢を中心にして振動する現象が生ずる。また、線状体の運動に伴なって、 γ の極大値および極小値は 0 に近づき、 θ の極大値および極小値は 90° に近づく。このように、角速度は 0 を中心

にして、また、姿勢は水平方向を中心にして減衰振動する。

したがって、零空気流体に関係なく水平な姿勢がもっとも安定な姿勢であり、流体は水平な姿勢になるまでの状態に影響をおよぼすことが分かる。さらに、初期角度は、姿勢および角速度の変動周期には影響をおよぼさず、変動の振幅に影響を与え、初期角度が小さいほど振幅は大きくなることが分かる。なお、この周期は約0.7(s)である。

また、図2.53から、落下開始後 γ は急激に加速され $\theta > 90^\circ$ となり、その後、 θ は 90° を中心にして減衰振動するため、同一姿勢における γ の値(α と θ の関係を表わす曲線の接線勾配)は、 α が小さいほど大きく、水中での場合のように、落下開始直後の急激な加速領域を除き α にかかわらず同一姿勢での γ の値が等しくなる現象は、空気中での場合見られない。

ここで、初期角度が姿勢および角速度の変動の振幅に影響をおよぼす状態を調べる。線状体の比重量は空気の比重量の1400倍程度であるため、落下開始直後の領域では、線状体が流体から受ける抗力は小さく運動にはほとんど影響せず、線状体は重力と浮力の差にもとづく外力の作用を受けて運動をおこなう。このため、 α が小さいほど軸方向速度 v (< 0)の絶対値は大きくなるが、軸に直角な方向速度 u (< 0)の絶対値は小さく、しかも、 α による差は u の方が大きくなるので、 α が小さいほど u の値は小さい。いっぽう、抗力が小さいため線状体の回転を押える向きに働く回転モーメント N は、角加速度 $d\gamma/dt$ の変化にはほとんど影響しない。したがって、角加速度を表わす(2.22)式の第3式から、 $d\gamma/dt$ は α が小さいほど小さくなることが分かる。その後、 α が小さい場合、主に線状体が軸方向に急激に加速されるため u の値は増大し、 γ は急激に加速され始める。これに対し、 α が大きい場合、主に軸に直角な方向に急激に加速されるため、 γ は増大する。そして、 u は水平な姿勢になるまで加速されるが、 v は水平な姿勢に近づく

につれて急激に減速されるが、 α が大きいほど線状体が加速される時間が短いので、やがて γ の増大に伴ない回転モーメント N が増大し、より短時間のうちに γ は減速され始める。したがって、 γ の最大値は α が大きいほど小さくなる。このため、 γ が減速している領域では、 α が小さいほど回転モーメント N が大きいことが原因となって、 $dr/dt (< 0)$ の絶対値は大きくなり、 γ はより急激に減速される。また、 α が小さいほど γ の最大値は大きいので、 θ の最大値も大きくなる。これ以後の姿勢および角速度の変化状態にも初期角度の影響が残り、初期状態がもっとも安定な状態（水平な姿勢）から大きく離れるほど変動の振幅は大きくなる。

つぎに、水中での場合と空気中での場合の姿勢の変化の違いについて考える。角加速度を表わす(2.22)式の第3式は減衰振動の方程式に類似した形になっている。すなわち、 $(A-B)\mu\psi$ が姿勢をもっとも安定な状態にひきもどす力であり、回転モーメント N が姿勢の変化を押える抵抗力に相当する。ここで、水中での場合と空気中での場合の各項のオーダーを比較する。(2.20)式から、空気中での $(A-B)/R$ の値は水中での約 $1/540 (=1.6/860)$ であり、また、水中での場合と比べて線状体に作用する抗力が小さいので、両者の μ 、 ψ の最大値を比べると、空気中での値は水中での約70倍、15倍となる。なお、 μ が最大になるときの姿勢と ψ が最大になるときの姿勢は異なる。したがって、 $(A-B)\mu\psi/R$ の値は、空気中での場合と水中での場合で同程度になることが分かる。いっぽう、回転モーメント N は軸に直角な方向に作用する抗力にもとづくものであり、(2.34)式から、両者の μ および γ が等しい場合、両者の N の値の比率は比重量の比となるので、空気中での N/R の値は水中での約 $1/540$ となる。以上の結果から、水中での場合は減衰振動の中で抵抗力が大きい場合に相当し、空気中での場合は抵抗力が小さい場合に相当する。したがって、両者の姿勢の変化状態は異なり、

水中での場合，振動することなくもっとも安定な水平な姿勢に漸近するのに対し，空気中での場合，水平な姿勢を中心にして振動しながら漸近する現象が生ずる。

以上のように，空気中での場合，姿勢が水平方向を中心にして減衰振動するので，この姿勢の変化に応じて水平方向の運動の向きが変わり，図2.55, 2.56に示すように水平方向速度 \dot{X} および加速度 \ddot{X} は0を中心にして減衰振動する。いっぽう，図2.57, 2.58において，鉛直方向の運動の向きは変わらないが，姿勢の変動に応じて鉛直方向速度 \dot{Y} は変動しながら一定値に漸近し，加速度 \ddot{Y} は変動しながら0に漸近する。

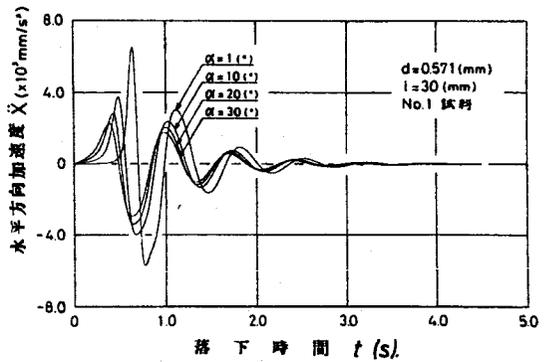
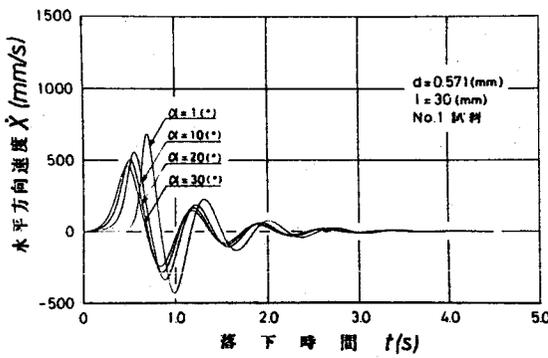


図2.55 水平方向速度におよぼす初期角度の影響 図2.56 水平方向加速度におよぼす初期角度の影響

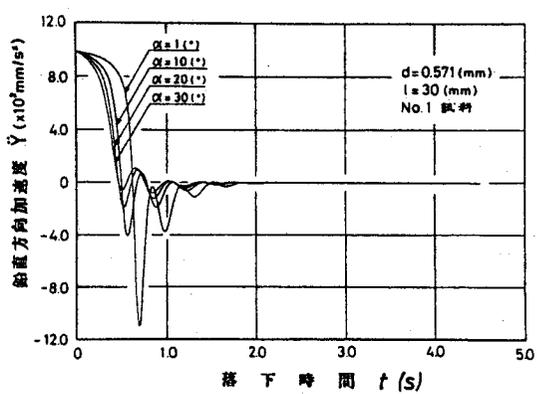
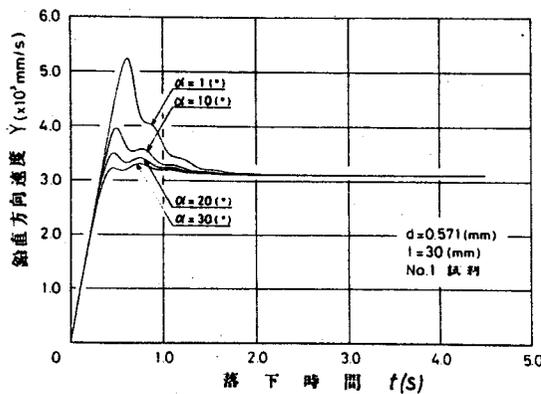


図2.57 鉛直方向速度におよぼす初期角度の影響

図2.58 鉛直方向加速度におよぼす初期角度の影響

これに対し， $d=0.571(mm)$ ， $l=30(mm)$ の線状体が水中において $\alpha=7^\circ$ で運動する場合， \ddot{X} は $0.3(g)$ 程度で最大となり，その後，減少して $1.1(g)$ 程度で負の値になるので， \dot{X} は加速されて $1.1(g)$ 程度で最大となり，その後，減速されるが，姿勢が水平方向に近づくにつれて $\ddot{X}(<0)$ の絶対値は減少して 0 に漸近するので $\dot{X}>0$ の状態を保ったまま 0 に漸近する。

すでに述べたように，空気中での場合，その比重量が小さいため，落下開始直後の領域では姿勢がほとんど変化しない。このため， \ddot{X} の増大は水中での場合より小さく，同一落下時間における \dot{X} および \dot{Y} の値は，それぞれ $c<0.42(g)$ および $c<0.53(g)$ の領域で水中での場合の方が大きくなる。いっぽう， \ddot{Y} は落下開始時から急激に減少し， $0.2(g)$ 程度で負の値となり， $c=0.3(g)$ 程度で最小になる。その後除々に増大して姿勢が水平方向に近づくにつれて 0 に漸近する。したがって， \dot{Y} は落下開始時から急激に増大し， $0.2(g)$ 程度で最大となり，その後減速され水平な姿勢に近づくにつれて一定値に漸近する。また，空気の比重量が小さいため，線状体に作用する抗力が小さく，同一落下時間における \dot{Y} の値は空気中での場合の方が大きくなる。

ここで， $\alpha=7^\circ$ の場合を例にとりて， \dot{X} ， \ddot{X} および \dot{Y} ， \ddot{Y} が変動する状態を調べる。

空気中での場合，線状体に作用する抗力が小さいため，落下開始直後の領域では \ddot{X} の増大および \ddot{Y} の減少は小さく，角速度 θ が急激に増大し始めてから \ddot{X} の増大および \ddot{Y} の減少は大きくなる。このため，線状体は， $c=0.62(g)$ 程度($\theta=43^\circ$ 程度)まで鉛直方向に加速され， \dot{X} は $c=0.64(g)$ 程度で最大となり，その後減少して水平な姿勢になる直前で負の値になる。すなわち，線状体は水平な姿勢になる直前まで水平方向に加速され， \dot{X} は最大となり，その後減速される。したがって， $\theta>90^\circ$ の状態になっても線状体はしばらくの間今までと同じ向きに運動し続ける。いっぽう，軸方向速度 v の向きは，水平な姿勢に

なった直後から今までと逆向きになり増大して、 θ が最大になってふたたび減少し始めた直後、 $t = 0.84(s)$ 程度で極大になる。このときから、 \dot{X} は負の値になる。すなわち、今までと逆向きに運動し始める。そして、 θ がふたたび 90° に近づくにつれて $\dot{X} (< 0)$ は減少し、水平な姿勢になる直前で最小になる。いっぽう、 $t = 0.62(s)$ 程度から \dot{Y} は減少し始めるが、 \ddot{Y} は水平な姿勢になる前、 $t = 0.69(s)$ 程度($\theta = 81^\circ$ 程度)で最小となり、その後増大するので、 \dot{Y} の減少割合は低下する。そして、水平方向の運動の向きが今までと逆向きになる直前に、 $\ddot{Y} (< 0)$ は極大となり、 \dot{Y} は変曲点をもつ。なお、 $\alpha \geq 10^\circ$ の場合、 \dot{Y} の値は $\alpha = 7^\circ$ の場合に比べて小さく、鉛直方向の抗力が小さいため、 \dot{Y} が最小になった後増大して正の値になる。すなわち、ふたたび鉛直方向に加速される現象が見られる。

以上のように、姿勢の変動に応じて X 、 \dot{X} および Y 、 \dot{Y} が変動し、水平な姿勢になる直前に \dot{X} は極大あるいは極小になり、水平方向の運動の向きが変わる直前に \dot{Y} は極大になり、 $\alpha = 7^\circ$ の場合、 \dot{Y} は変曲点をもつ。また、 θ が極大あるいは極小になった直後に水平方向の運動の向きが変わる。

さらに、初期角度は、重心の速度および加速度の変動周期には影響をおよぼさず、変動の振幅に影響を与え、初期角度が小さいほど振幅が大きいことが分かる。なお、この周期は、 X 、 \dot{X} に関しては θ 、 γ の場合と同一の約 $0.7(s)$ となり、 Y 、 \dot{Y} に関しては、運動の向きが変わるごとに \dot{Y} は極大になるので、 X 、 \dot{X} の場合の半分の約 $0.35(s)$ になる。

また、空気中での場合、 X 、 Y の最大値は水中の場合の約10倍、20倍となり、線状体は非常に早い速度で運動するので、水中での場合に比べて運動の観察は困難になることが分かる。

2.8.3 線状体直径の影響

姿勢の変化および角速度の変化におよぼす直径の影響を図2.59, 2.60に示す。線状体は細長比 l/d が大きいので, (2.20)式から $(A-B)/R$ の値は同一長さの場合, 直径にかかわらずほぼ同じになる。ところが, u, v の絶対値は直径が大きいほど大きいので, 前項で述べた姿勢をもっとも安定な状態に引きもどす力 $(A-B)u, v/R$ は, 直径が大きいほど大きくなる。いっぽう, 抗力係数 C_d および回転モーメント M を表わす (2.30)式, (2.34)式から, M の値の比率は d の比以下であるので, 姿勢の変化を押える抵抗力 M/R は, 直径が大きいほど小さい。したがって, 直径が大きいほど姿勢が変動する周期は短く, その振幅は大きいことが分かる。なお, 周期は, $d=0.391, 0.571, 0.915$ (mm) の場合, $0.96, 0.70, 0.52$ (s) である。直径が大きいほど姿勢が短時間のうちに変化するという結果は水中での結果 (図2.21) と一致する。

つぎに, 直径が姿勢の変動に伴って変動する重心の速度にどのような影響をおよぼすかを調べる。図2.61, 2.62において, \dot{X} は O を中心にして減衰振動し, \dot{Y} は減衰振動しながら一定値に漸近する現象が見られる。また, その周期は直径が小さいほど大きく, しかも早く減衰することが分かる。

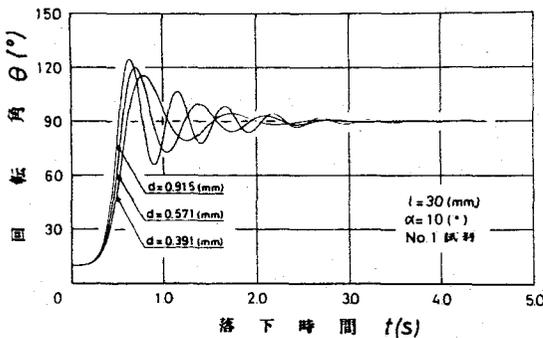


図2.59 姿勢におよぼす直径の影響

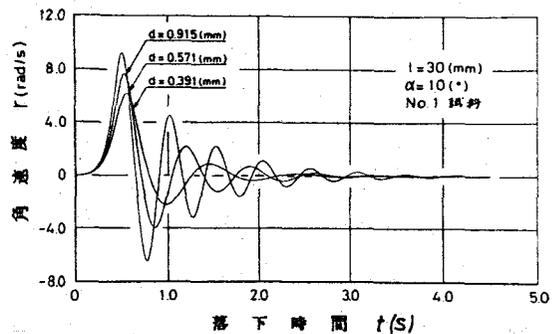


図2.60 角速度におよぼす直径の影響

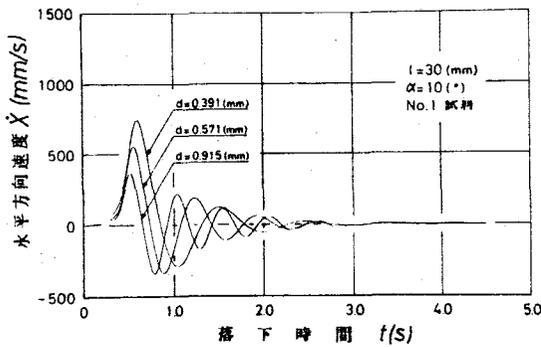


図2.61 水平方向速度におよぼす直径の影響

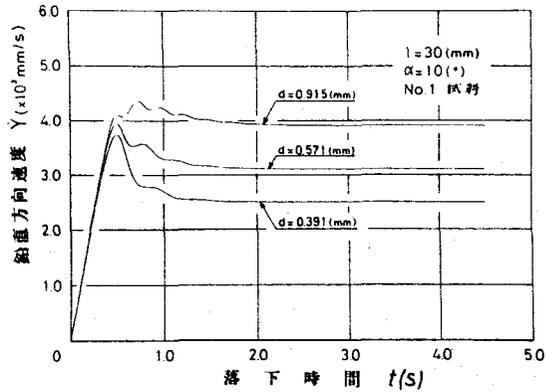


図2.62 鉛直方向速度におよぼす直径の影響

(2.28)式, (2.30)式から, 軸に直角な方向に作用する抗力 D_x の比は α の比以下であるので, (2.20)式, (2.25)式から, 軸に直角な方向の外力 X に関して, $X/A (<0)$ の絶対値は α が大きいほど大きくなる。いっぽう, 軸方向に作用する摩擦抗力 D_y の比も α の比以下であるので, 軸方向の外力 Y に関して, $Y/B (<0)$ の絶対値は α が大きいほど大きい。したがって, 運動方程式(2.22)式を考慮すると, 軸に直角な方向および軸方向の加速度 $du/dt, dv/dt (<0)$ の絶対値は α が大きいほど大きいことが分かる。 u, v の値はともに負であるので, 直径による du/dt の差の方が dv/dt の差より大きく, α が大きいほど u, v の絶対値は大きくなるが, 大きくなる割合は u の方が大きいので, (2.23)式から, $\dot{X} (>0)$ は α が小さいほど大きく, $\dot{Y} (<0)$ の絶対値は α が大きいほど大きくなることが分かる。ただし, \dot{Y} に関しては符号を逆にして図示しているので, 図2.62では正の値になっている。やがて, u の絶対値および A が増大するため, dv/dt の絶対値は α が小さいほど大きくなる。したがって, v の絶対値も α が小さいほど大きくなり, $t=0.4(s)$ 程度から軸方向に減速され始めるが, 減速割合は α が大きいほど大きいので, この状態が水平な姿勢になるまで続く。いっぽう, u は

水平な姿勢になるまで加速され続けており、 α が大きいほどその絶対値は大きいので、 $\dot{\alpha}$ は α が小さいほど大きく、 $\dot{\gamma}$ の絶対値は α が大きいほど大きい状態が水平な姿勢になるまで続く。

$\dot{\alpha}$ は、水平な姿勢になる直前に最大になるが、この姿勢は α が大きいほどより水平に近い。そして、 $\theta > 90^\circ$ の状態になった直後から θ の向きが変わり、軸方向に加速され始める。 $d\theta/dt$ は α が大きいほど大きく、この加速状態は、 θ が最大となりふたたび 90° に近づき始めた直後まで続き、このときの θ の値は α が大きいほど大きくなる。このため、その後の軸方向の減速は α が大きいほど大きいけれども、 θ がふたたび 90° に近い値になったときの θ の値は、 α が大きいほど大きく、 $\dot{\alpha}$ の最小値の絶対値は大きくなる。そして、これ以後の $\dot{\alpha}$ の極大値、極小値は α が大きいほど大きくなる。このように、 $\dot{\alpha}$ の最大値は、直径が小さいほど大きいが、それ以後の $\dot{\alpha}$ の振幅は、直径が大きいほど大きく、直径が小さいほど $\dot{\alpha}$ は早く減衰することが分かる。

いっぽう、 $\dot{\gamma}$ は最大になった後減速されるが、 $\theta > 90^\circ$ の状態になった直後から軸方向に加速され始め、この加速は α が大きいほど大きいので、より短時間のうちに $\dot{\gamma}$ がふたたび増大する現象が生ずる。その後も $\dot{\gamma}$ は加速と減速を繰返しながら一定値に漸近する。なお、 $\dot{\alpha}$ の場合と同様、直径が小さいほど $\dot{\gamma}$ は早く減衰する。

また、前項で述べたように、 θ が極大あるいは極小になった直後に水平方向の運動の向きが変わるが、この時間的なづれは、直径が大きいほど小さく、 $d = 0.915$ (mm)の場合、これらの現象はほとんど同時に起こる。さらに、運動の向きが変わる直前に $\dot{\gamma}$ は極大になるが、この時間的なづれは、直径の影響をほとんど受けない。

ここで、水中での結果と比較する。水平方向速度が最大になるまでの領域において、水中での場合と異なり、同一落下時間

における ω の値は直径が小さいほど大きくなる。これは、空気中での場合、その比重量が小さいため、線状体に作用する抗力が小さく、したがって、軸に直角な方向にも軸方向^と同程度加速されるからである。たとえば、 $d=0.915(mm)$ 、 $l=30(mm)$ の場合、空気中では ω は $\omega=0.38(S)$ 程度まで加速されるが、減速され始めてから間もなく $\omega=0.44(S)$ 程度($\theta=48^\circ$ 程度)で ω の値の方が大きくなる。これに対し、水中では線状体に作用する抗力が大きいので、 ω は $\omega=0.2(S)$ 程度まで加速され、その後減速されるが、軸に直角な方向の加速度が小さいので、 $\omega=1.17(S)$ 程度($\theta=76^\circ$ 程度)で ω の値の方が大きくなる。

また、空気中での場合にも、直径が大きいほどより水平に近い姿勢になるまで鉛直方向に加速され($d=0.397, 0.577, 0.915(mm)$)の場合、それぞれ約 $50^\circ, 58^\circ, 77^\circ$)、これは水中での結果と一致する。

以上の結果をまとめると、直径は、姿勢および重心速度の変動周期および振幅に影響をおよぼし、直径が小さいほど周期は長く、しかも早く減衰する。

2.8.4 線状体長さの影響

$d=0.577, 0.915(mm)$ 、 $l=60(mm)$ の姿勢および角速度の変化を図2.63, 2.64に示す。 $l=30(mm)$ の結果、図2.59, 2.60と比較して、長さが大きい方が変動の周期は長く、各周期ごとの θ 、 γ の極大値、極小値は、 $\theta=90^\circ$ あるいは $\gamma=0$ に近い値になるが、これらの値が減衰するのに要する時間は長いことが分かる。

$(A-B)/R$ の値は同一直径の場合、長さが大きいほど小さい。また、長さが大きいほど軸方向の加速は大きいが、軸に直角な方向の加速が小さいので、落下開始直後では ω の値は長さにかかわらずほぼ同じであるが、やがて、長さが大きい方がこの値は小さくなる。したがって、姿勢をもっとも安定な状態に

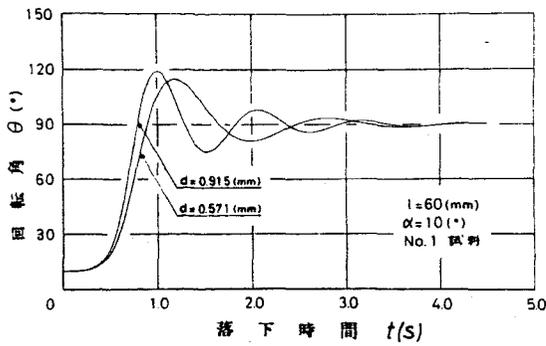


図2.63 姿勢におよぼす長さの影響

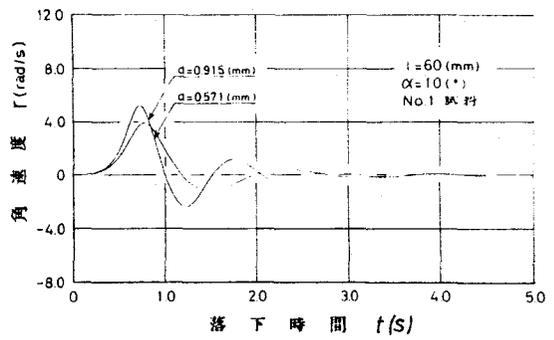


図2.64 角速度におよぼす長さの影響

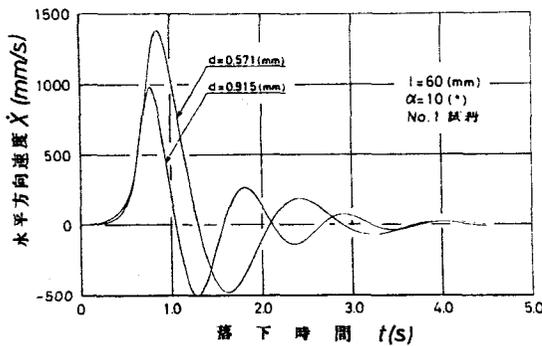


図2.65 水平方向速度におよぼす長さの影響

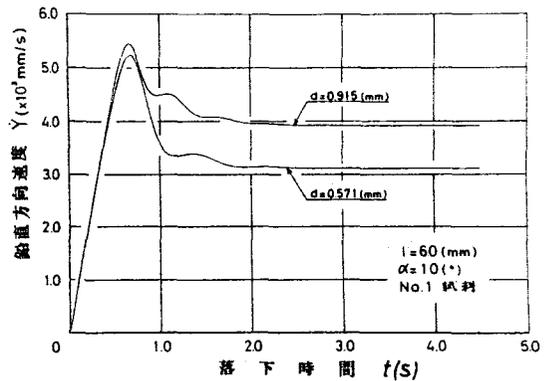


図2.66 鉛直方向速度におよぼす長さの影響

ひきもどす力 $(A-B) \propto l/R$ は長さが大きい方が小さくなる。いっぽう、回転モーメント N の比率は l^3 の比以上であるので、姿勢の変化を押える抵抗力 N/R は長さが大きい方が大きい。したがって、長さが大きい方が姿勢が変動する周期は長く、しかも、各周期ごとの振幅は小さいことが分かる。なお、 $l=60$ (mm) の周期は、 $d=0.571, 0.915$ (mm) の場合、 $1.62, 1.10$ (s) であり、 $l=30$ (mm) の場合の2倍以上になる。

長さが大きい方が姿勢が変化するのに要する時間が長くなるという結果は、水中での結果(図2.12)と一致する。

つぎに、 $l=60$ (mm) の重心速度の変化を表わす図2.65, 2.66

と $l=30(\text{mm})$ の結果，図 2.61, 2.62, を比較すると，その周期は，姿勢および角速度におよぼす影響と同様に，長さが大きい方が長くなるが，その振幅は，長さが大きい方が大きいことが分かる。

落下開始直後の領域では，線状体に作用する抗力は小さく，ほとんど重力と浮力の差にもとづく外力により運動をおこなうので，姿勢がより鉛直に近いほど軸方向の加速は大きく，軸に直角な方向の加速は小さくなる。したがって，長さが大きい方が， $\psi(<0)$ の絶対値は大きく， $\mu(<0)$ の絶対値は小さい。しかし， θ の値は長さが小さい方が大きいので，同一落下時間における $\dot{\chi}$ の値は長さが小さい方が大きく， $\dot{\gamma}(<0)$ の絶対値はわずかに小さくなる。ところが，長さが大きい方が姿勢の変化が小さいので， μ ， ψ は長い時間におわたって加速され続け， $\dot{\gamma}$ が最大になるときの μ ， ψ の絶対値 および $\dot{\chi}$ が最大になる（ $\dot{\chi}$ は水平な姿勢になる直前に最大になる。）ときの ψ の絶対値は長さが大きい方が大きくなる。したがって， $\dot{\chi}$ ， $\dot{\gamma}$ の最大値は，長さが大きい方が大きくなる。その後も長さが大きい方が姿勢の変化が小さいので，重心速度の変動振幅はより大きくなり，減衰するのに要する時間は長い。このように， $\dot{\gamma}$ の最大値は長さが大きい方が大きくなるが，最終的に漸近する値は長さにかかわらず同一になる。

また， θ が極大あるいは極小になってから水平方向の運動の向きが変わるまでの時間 および $\dot{\gamma}$ が極大になってから運動の向きが変わるまでの時間は，長さが大きい方が長くなる傾向にある。

ここで，水中での結果と比較する。落下開始後しばらくの間，同一落下時間における $\dot{\chi}$ の値は，長さが小さい方が大きくなる。この結果は水中での結果と一致するが，空気中での場合，線状体に作用する抗力が小さいので，長さが $\dot{\chi}$ の最大値におよぼす影響は，水中での場合に比べて非常に大きい。さらに，空

気中での場合にも，長さが小さい方がより水平に近い姿勢になるまで鉛直方向に加速され ($l=30(mm)$ の場合，約 77° ， $l=60(mm)$ の場合，約 55°)，これは水中での結果と一致する。

以上の結果をまとめると，長さは，姿勢および重心速度の変動周期および振幅に影響をおよぼし，長さが大きいほど周期は長く，しかも，減衰するのに要する時間が長い。

2.9 静止流体中における線状体の落下実験

線状体の運動の観察は水中の方が容易なため、主に水中で要因を変化させて実験をおこない、あわせておこなった空気中での実験では要因の変化は最少限にとどめた。

実験では、落下特性として、重心の軌跡、速度、加速度および姿勢、角速度の他に最終落下位置での線状体の配向も項目として選んだ。また、落下特性に影響をおよぼす要因は、線状体の比重量、長さ、直径、初期角度および流体の温度とした。

2.9.1 実験装置および方法

水中での落下実験では鉛筆の芯 (NO.1 試料) とピアノ線 (NO.2 試料) の2種類の試料を用いた。これらの試料条件および実験条件を表2.13に示す。

この実験では、線状体の比重量 ρ 、長さ l 、直径 d および初期角度 α の影響を調べた。なお、 $d=0.391$ (mm)、 $l=30$ (mm) の NO.1 試料の場合だけ $\alpha=1^\circ, 10^\circ, 20^\circ, 30^\circ$ の4種類変化させ、他の場合には $\alpha=1^\circ, 10^\circ$ とした。

つぎに、流体の温度の影響を調べる目的で、水中での落下実験を $d=0.571, 0.915$ (mm)、

$l=60$ (mm) の NO.1 試料を用いて、水温を $T_w=12.4, 29.9$ (°C) の2種類変化させておこなった。

これまでは、線状体が水中で運動をおこなう場合であるが流体が変わった場合 (主に流体の比重量が変わった場合)、落下特性がどのように変化するかを調べるため、空気中で $d=0.571, 0.915$ (mm)、 $l=30, 60$ (mm) の NO.1 試料を用いて、 $\alpha=10^\circ, 20^\circ$

表2.13 試料条件および実験条件

試料番号	試料名	線状体直径 d (mm)	線状体長さ l (mm)	線状体 比重量 ρ (g/cm ³)	初期 角度 α (°)
1	鉛筆の芯	0.391	30 60	1.766	1
		0.571	15 30	1.702	10
			45 60		20°
		0.722	30 60	1.622	30°
		0.915	30 60	1.539	
2	ピアノ線	0.206	30 60	7.089	1
		0.310	15 30	7.242	
			45 60		10
		0.411	30 60	7.322	
		0.512	30 60	7.440	

注) $d=0.391$ (mm)、 $l=30$ (mm) の試料に対してのみ $\alpha=20^\circ$ および 30° の落下実験をおこなう

、30°変化させて落下実験をおこなった。

試料は切断後、長さのばらつきを小さくする目的とその端面を軸に直角にする目的(予備実験から、軸に対する端面の傾きは線状体の運動に大きな影響をおよぼすことが分かった。)で端面を研磨布で仕上げ、万能投影機で50倍に拡大して端面の状態を調べるとともに、ランダムに抽出した10本の試料の直径を測定した。同様に、10本の試料の長さをノギスで測定し、その平均値をもってそれらの値とした。また、比重量は同じ10本の試料の重量を直示天秤で測定し、次式から求めた。

$$\gamma_b = 4W / \pi d^2 l \quad (2.38)$$

図2.67に実験装置の概要を示す。水中、空気中の実験ともにこの実験装置を用いた。線状体の落下運動を調べるため、水槽⑥の正面と側面の直角2方向からのマルチストロボ撮影によりNO.1カメラ③とNO.2カメラ④の2枚のフィルム面上に落下状態を記録した。予備実験から、線状体はほぼ一平面内で運動することが分かったが、それを確認する目的でNO.2カメラでの撮影もおこなったわけである。

撮影をおこなう水槽の2面は透明アクリル板で製作し、背景となる残りの2面には、ストロボランプ⑤の光が反射して線状体の落下状態が不鮮明にならないように、つや消し黒色塗装した。また、台座⑦の間には落下点測定用グラフ⑧を取付け、線状体の最終落下位置を調べた。なお、本実

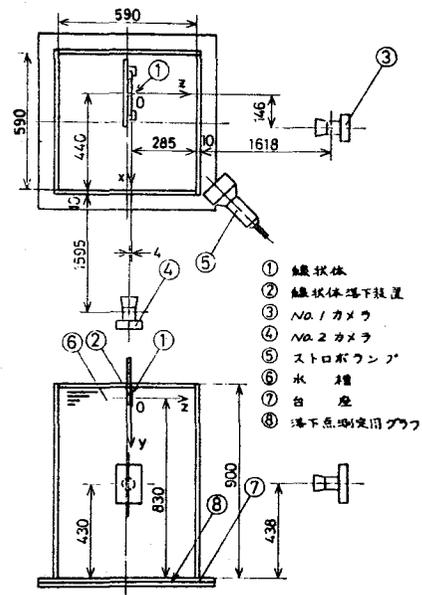


図2.67 実験装置概要

実験装置の座標系としては、初期位置での線状体⑦の重心を原点(0)とし、落下装置②の線状体設定面に平行な鉛直面内で水平方向NO.2カメラの向きにx軸、鉛直方向下向きにy軸、さらに、xy面に垂直な方向NO.1カメラの向きにz軸を定めた。

撮影では、実験室全体を暗室とし線状体の落下時間を考慮して、落下状態が十分わかるような写真間隔を得るため、実験条件によりストロボ発光数を $S = 240 \sim 2100$ (cpm)の範囲で変化させた。

図2.68に線状体落下装置の概要を示す。2枚の透明塩化ビニール板⑥(立面図でハッチングを入れた部分)の間には初期角度設定用円グラフ③が取付けられており、線状体の設定はこの板を枠から取出しておこなう。まず、円グラフにより所要の初期角度 α に線状体⑦を設定し、ピンセット取付け用ネジ①を締めて設定面⑤上に固定する。つぎに、この板を枠の中へ入れピンセット押上げ用ネジ②を回し、ピンセット④を押上げて線状体を落下させた。

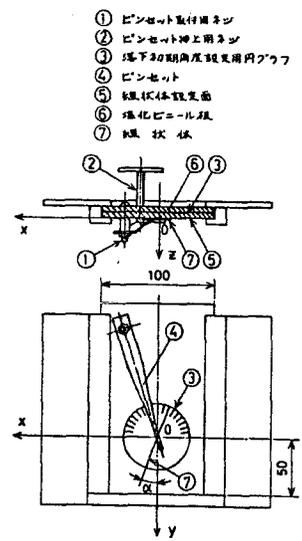


図2.68 線状体落下装置概要

実験では、各実験条件につき15本程度の線状体を落下させ、最終落下位置での線状体重心の水平方向移動距離の平均値を求め、その値に近い実験を2個ないし3個選び、それらの写真から線状体両端の座標を読取る。ここで、運動をおこなう平面がy方向につれる場合、運動に伴ない被写体距離が変化するため、写真を真の運動の正射影と考えることはできない。そこで、被写体距離の変化に対する修正をおこなった後の両端の座標から、以下で述べる方法で落下特性を求め、それらを図示し、検討した後その中の1つを実験データとして採用した。

以下では、被写体距離の変化に対する修正の方法および線状体の落下特性を求める方法について述べる。

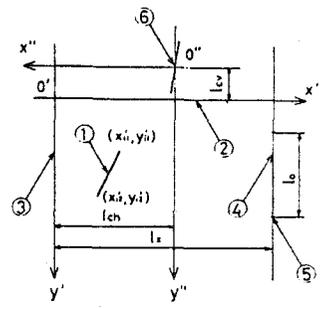
2.9.2 写真面上から真の落下運動を求める方法

実験から、 α を 10° 以上に設定すると、線状体はほぼスリ面内で運動するが、 $\alpha = 7^\circ$ の場合、角度が小さいため初期状態のみでは運動面がスリ面に決まらざる方向にずれる場合があった。この場合、運動に伴ない被写体距離が変化するので、この変化に対して修正をおこなう必要がある。ここでは、写真から真の落下運動をスリ面に引き直して求める方法について説明する。

(1) 落下運動の読取りおよび初期位置決定の方法

写真から線状体の落下運動を求めるには、この写真に x, y 座標を表わす目印となるものを同時に撮影しておく必要がある。図 2.69 に落下運動の写真の概要を示す。

この写真には、線状体とともに線状体設定面と同一平面上に設けた水平方向基準線②と長さの基準になる目印⑤を付けた鉛直方向基準線④および線状体が衝突しないように設定面から少し離して設けた鉛直方向基準線③が撮影されている。ここで、基準線②と③を x' 軸、 y' 軸とし、線状体両端の座標を読取り、それぞれ (x'_{i1}, y'_{i1}) , (x'_{i2}, y'_{i2}) とする。



- ① 線状体
- ② 水平方向基準線
- ③ 鉛直方向基準線 1
- ④ 鉛直方向基準線 2
- ⑤ 目印
- ⑥ 初期位置

図 2.69 線状体の落下運動写真概要

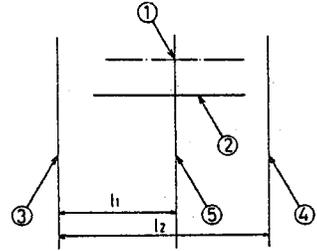
この座標は、初期位置での線状体重心を原点 (O'') とする座標系 (x'', y'') に変換する必要があり、写真面上での x', y' 方向の補正值をそれぞれ l_{ch} , l_{cv} とする。突刺した水平方向基準線と初期位置の距離を $H_1 (=58.5 \text{ (mm)})$, 鉛直方向基準線 2 上の目印の間隔を $H_0 (=300 \text{ (mm)})$ とし、写真面上でのこの間隔

を l_0 とすると,

$$l_{cv} = (H_1/H_0) l_0 = 0.195 l_0 \quad (2.39)$$

となる。

いっぽう, l_{ch} は図 2.70 にその概要を示す初期位置設定用写真を用いて求める。この写真には, 鉛直方向基準線 1, 2 の他に初期位置に設けた鉛直方向基準線⑤が撮影されており, これらの基準線間の距離 l_1, l_2 と落下運動の写真(図 2.69)面上の基準線間の距離 l_x から



$$l_{ch} = (l_1/l_2) l_x \quad (2.40)$$

- ① 初期位置
- ② 水平方向基準線
- ③ 鉛直方向基準線 1
- ④ 鉛直方向基準線 2
- ⑤ 鉛直方向基準線

となる。

したがって, 座標系 (x'', y'') での線状体両端の座標は,

図 2.70 初期位置設定用写真概要

$$\left. \begin{aligned} x''_{ij} &= l_{ch} - x'_{ij} \\ y''_{ij} &= l_{cv} + y'_{ij} \end{aligned} \right\} \quad (j=1, 2) \quad (2.41)$$

で表わされる。

(2) 被写体距離の変化に対する修正方法

図 2.71 に示すように, 被写体距離が異なるとフィルム面上の像の大きさに差が生ずる。すなわち, 初期平面および線状体の端の被写体距離を L_1, L_2 とすると, 同一高さ H のフィルム面上での高さはそれぞれ h_1, h_2 となり, つぎの関係で表わされる。

$$h_1/h_2 = L_1/L_2 \quad (2.42)$$

(2.41)式で表わされる (x''_{ij}, y''_{ij}) は写真面上での座標であり、写真の倍率 l_0/H_0 を考慮すると、被写体距離の変化に対する修正をおこなう前の両端の座標 (x''_{ij}, y''_{ij}) は、

$$\left. \begin{aligned} x''_{ij} &= (H_0/l_0)(lch - x'_{ij}) \\ y''_{ij} &= (H_0/l_0)(lcv + y'_{ij}) \end{aligned} \right\} \quad (2.43)$$

となる。

ここで、図2.72に示すように、線状体両端の真の位置を (x_{ij}, y_{ij}, z_{ij}) とし、初期位置③とNo.1カメラ⑤のレンズ中心の水平方向および鉛直方向距離をそれぞれ $X_0 (=146(\text{mm}))$, $Y_0 (=398(\text{mm}))$ とすると、(2.42)式から

$$\left. \begin{aligned} X_0 - x_{ij} &= \frac{L_1 - z_{ij}/n}{L_1} (X_0 - x''_{ij}) \\ Y_0 - y_{ij} &= \frac{L_1 - z_{ij}/n}{L_1} (Y_0 - y''_{ij}) \end{aligned} \right\} \quad (2.44)$$

となる。ただし、 n は流体の空気に対する屈折率である。

また、線状体はほぼ一平面内で運動するので、最終落下位置②での線状体重心の座標を (x_{co}, z_{co}) とすると、

$$z_{ij} = (x_{co}/z_{co}) x_{ij}$$

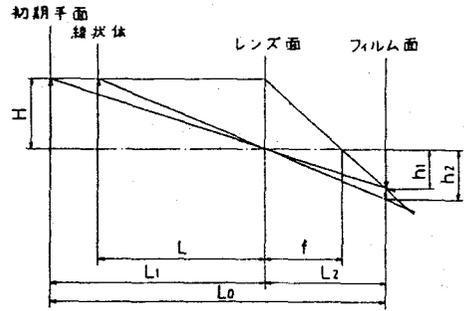
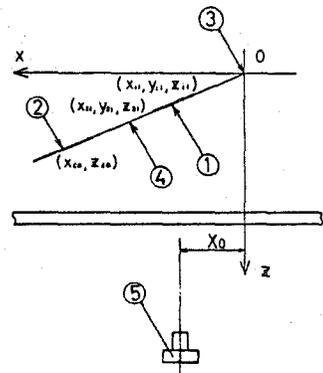


図2.71 被写体距離と像の大きさの関係



- ① 線状体
- ② 最終落下位置
- ③ 初期位置
- ④ 運動平面
- ⑤ No.1カメラ

図2.72 線状体の落下運動概要

となり、(2.44)式から

$$\left. \begin{aligned} X_{ij} &= \frac{X''_{ij}}{1 - \frac{1}{nL_1} \frac{Z_{co}}{X_{co}} (X_0 - X''_{ij})} \\ Y_{ij} &= Y_0 - \left(1 - \frac{1}{nL_1} \frac{Z_{co}}{X_{co}} X_{ij}\right) (Y_0 - Y''_{ij}) \end{aligned} \right\} \quad (2.45)$$

を得る。

線状体の水平方向移動距離 X_{ij} とその正射影 X''_{ij} の間には、

$$X_{ij} = \left(\sqrt{X_{co}^2 + Z_{co}^2} / X_{co} \right) X''_{ij}$$

の関係があり、鉛直方向移動距離 Y_{ij} とその正射影 Y''_{ij} は等しい。したがって、写真から被写体距離の変化に対する修正をおこなない、 α 子面に引き直して求めた線状体両端の座標は、

$$\left. \begin{aligned} X_{ij} &= \frac{\sqrt{X_{co}^2 + Z_{co}^2}}{X_{co}} \frac{X''_{ij}}{1 - \frac{1}{nL_1} \frac{Z_{co}}{X_{co}} (X_0 - X''_{ij})} \\ Y_{ij} &= Y_0 - \left\{ 1 - \frac{X''_{ij}}{(X''_{ij} - X_0) + nL_1 \frac{Z_{co}}{X_{co}}} \right\} (Y_0 - Y''_{ij}) \end{aligned} \right\} \quad (j=1, 2) \quad (2.46)$$

となる。

2.9.3 線状体の落下特性を求める方法

前項で述べた方法により、被写体距離の変化に対する修正をし、 α 子面に引き直して求めた線状体両端の座標 (X_{i1}, Y_{i1}) 、 (X_{i2}, Y_{i2}) から、線状体の落下特性を求めた。

(1) 線状体重心の座標

重心の座標 (X_i, Y_i) は、重心の軌跡、速度および加速度を知る上で必要であり、次式から求まる。

$$\left. \begin{aligned} X_i &= (X_{i1} + X_{i2}) / 2 \\ Y_i &= (Y_{i1} + Y_{i2}) / 2 \end{aligned} \right\} \quad (2.47)$$

(2) 線状体の回転角

回転角 θ (軸方向と鉛直線のなす角度) は、線状体の姿勢および角速度を知る上で必要であり、次式から求まる。

$$\theta_i = \tan^{-1} \{ (X_{i1} - X_{i2}) / (Y_{i1} - Y_{i2}) \} \quad (2.48)$$

(3) 重心の速度

重心の速度は、水平方向と鉛直方向に分けて求める。図 2.73 に示すように、 i 番目にマルケストロポが撮影された線状体の水平方向および鉛直方向速度 \dot{X}_i, \dot{Y}_i は、 $i-1, i+1$ 番目に撮影された重心の座標 $(X_{i-1}, Y_{i-1}), (X_{i+1}, Y_{i+1})$ を用いて次式から求める。

$$\left. \begin{aligned} \dot{X}_i &= S (X_{i+1} - X_{i-1}) / 2 \\ \dot{Y}_i &= S (Y_{i+1} - Y_{i-1}) / 2 \end{aligned} \right\} \quad (2.49)$$

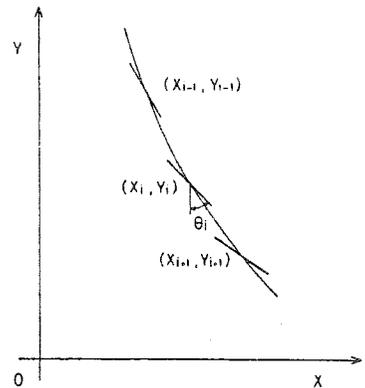


図 2.73 マルケストロポ撮影された線状体

ただし、 S はストロボ発光数である。

(4) 線状体の角速度および重心の加速度

角速度とは、落下時間 t と回転角 θ の関係を図示し、その曲線の接線勾配から求めた。

また、重心の加速度 \ddot{X} , \ddot{Y} は、回転角 θ と重心の速度 \dot{X} , \dot{Y} の関係を表わす曲線の接線勾配 $d\dot{X}/d\theta$, $d\dot{Y}/d\theta$ とそのときの角速度 $\dot{\theta}$ から、次式により求めた。

$$\left. \begin{aligned} \ddot{X} &= (d\dot{X}/d\theta) \dot{\theta} \\ \ddot{Y} &= (d\dot{Y}/d\theta) \dot{\theta} \end{aligned} \right\} \quad (2.50)$$

なお、被写体距離の変化に対する修正から(3)の重心の速度を求めるまでの計算は、写真面上で読取った両端の座標 (x_{ij}, y_{ij}) から電子計算機を用いておこなった。

以上述べた線状体の落下実験により、諸要因が落下特性におよぼす影響を調べることができた。以下では、その結果について報告し、同時に数値計算結果と比較検討する。その際、落下特性は、2.2.3項(2)の①～④と同一の表現方法を用いる。なお、表および図中の長さは公称長さで記載する。

2.10 線状体長さの影響

この節では、 $d=0.571$ (mm), $l=15, 30, 45, 60$ (mm)のNo.1試料に対する実験結果から、線状体長さが落下特性におよぼす影響を調べる。

2.10.1 線状体の落下軌跡

$l=30, 60$ (mm)の落下軌跡を図2.74に示す。図中の線状体の時間間隔は、 $l=30$ (mm)の場合、 $\Delta t=1/3$ (s), $l=60$ (mm)の場合、 $\Delta t=0.5$ (s)である。

姿勢が水平近くになるまで回転した場合($l=30$ (mm)の場合)を見ると分かるように、重心の軌跡は変曲点をもつ曲線となり、最終的に θ は 90° に漸近し、しかも、線状体は水平方向にはほとんど移動しなくなり、鉛直方向に一定速度で落下する。

姿勢が水平方向に漸近するときの重心の速度成分は、 θ と \dot{X} の関係(図2.77)および θ と \dot{Y} の関係(図2.78)から、 \dot{X} は0となり、 \dot{Y} は一定値($\dot{Y}=70$ (mm/s))になることが分かる。

重心の軌跡の接線勾配 dY/dX が最小になるときこの曲線は変曲点をもつ。姿勢の変化に対する重心速度の変化を表わす曲線を用いて(2.35)式から計算した変曲点での dY/dX の値とそのときの θ の値を表2.14に示す。この表には比較のため、計算結果も併記してある。実験結果では、軌跡は θ が 55°

から 65° の範囲内のとき変曲点をもち、 dY/dX の値は、同一直径の場合にも同一長さの場合にも、 l/d が大きいほど大きく、計算結果と一部異なる傾向を示すが、計算結果と同様に dY/dX の値におよぼす長さの影響は、直径の影響に比べて小さい。また、全体的に計算結果の方が θ の値は大きく、 dY/dX の値は小さいが、実験結果とほぼ一致する。

また、図2.74において、長さの小さい $l=30$ (mm)の線状体が水平方向に加速されている領域($Y < 410$ (mm))では、 l が

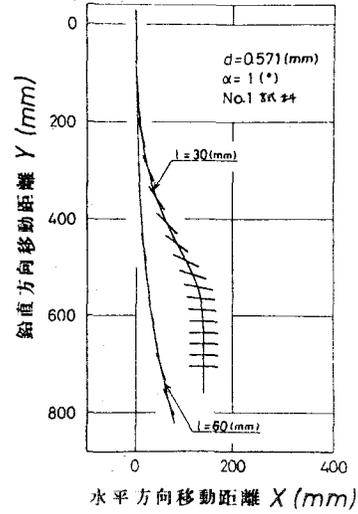


図2.74 落下軌跡におよぼす長さの影響

表2.14 軌跡の変曲点における接線勾配と回転角の値

試料 番号	線状体属性		数値計算結果		実験結果	
	d (mm)	l (mm)	dY/dX	θ (°)	dY/dX	θ (°)
1	0.391	30	1.928	59.5	2.24	60
		60	1.911	59.3	—	—
	0.571	15	1.803	63.2	1.83	58
		30	1.794	61.8	1.92	60
		45	1.781	61.5	1.98	58
		60	1.772	61.4	—	—
0.722	30	1.611	63.7	1.74	62	
0.915	30	1.456	65.9	1.52	62	

大きい方が同一鉛直方向移動距離での dY/dX の値は大きくなる。この領域では l が大きい方が同一の Y での θ の値は小さい。図2.77から、加速領域では θ が小さいほど X は小さく、また、図2.78から、 θ が小さいほど Y は大きくなり、したがって、(2.35)式を考慮すれば、 l が大きい方が dY/dX は大きくなること分かる。

さらに、図2.74から、同一回転角に対する X 、 Y の値は l が大きい方が大きいことが分かり、この結果は計算結果と一致する。

ここで、重心の軌跡の計算結果(図2.5)と実験結果を比較すると、同一鉛直方向移動距離での X の値は、計算結果の方が大きく、軌跡の曲線自身は実験結果と一致しないが、その傾向は良く一致していると考えられる。

つぎに、長さが X 、 Y におよぼす影響を明確にするため、 θ と X の関係および θ と Y の関係を図2.75、2.76に示す。

図2.75において、 θ と X の関係は下に凸の曲線で始まり、 $50^\circ < \theta < 55^\circ$ のとき変曲点をもち上に凸の曲線となり、図2.76において、落下開始直後、線状体は鉛直方向に急激に加速される

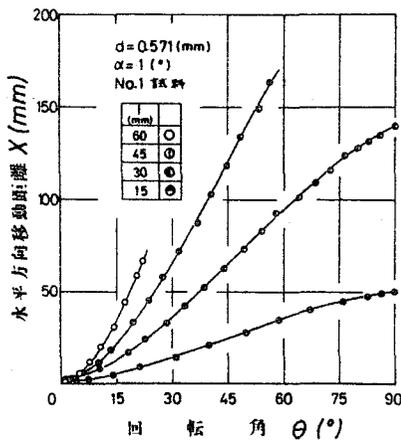


図2.75 水平方向移動距離におよぼす長さの影響

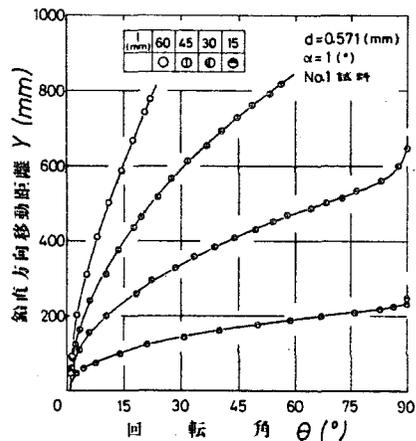


図2.76 鉛直方向移動距離におよぼす長さの影響

ため、 θ と Y の関係は、上に凸の曲線で始まり、 $65^\circ < \theta < 75^\circ$ のとき変曲点をもち、 θ が 90° に近づくと、 \dot{Y} は一定値となり Y は 0 となるため、 $\theta = 90^\circ$ の線に漸近する。また、ある回転角に対するこれらの曲線の接線勾配 $dx/d\theta$ 、 $dY/d\theta$ は、 l が大きいほど大きく、すでに述べたように、 θ がある値になるまでに重心が移動する距離 X 、 Y も l が大きいほど大きくなる。

図2.77、2.78から、長さ l が θ と X の関係におよぼす影響はわづかであり、また、 θ と Y の関係におよぼす影響は、とくに θ の小さい領域で現われ、 \dot{Y} は l が大きいほど大きいが、その後、 θ の増加に伴ない長さの影響を受けなくなる。ところが、 θ と Y の関係(図2.82)から、 l が大きいほど Y は小さくなる。したがって、(2.37)式から $dx/d\theta$ 、 $dY/d\theta$ は l が大きいほど大きくなることが分かる。

ここで、計算結果と比較すると、ある回転角に対する X 、 Y の値は、 θ のほとんど全領域で実験結果の方が大きくなる。この主な原因は、計算結果の方が Y の値が大きい(計算結果の方が大きくなる θ の領域は長さにより異なるが $\theta < 45^\circ \sim 70^\circ$ である。)ためであると考えられる。しかし、 $\theta > 45^\circ \sim 70^\circ$ では計算結果の方が Y の値は小さく、その結果、 $l = 30(\text{mm})$ の場合を比較すれば分かるように、 θ が 90° に近づくと計算結果の方が X の値は大きくなる。

以上のように、計算結果と実験結果は数値的には異なるが、長さ l が姿勢の変化に対する X 、 Y の変化におよぼす影響は一致する。

2.10.2 糸状体重心の速度および加速度

図2.77、2.78において、 X は $\theta = 7^\circ$ のとき 0 で、 40° から 50° の範囲内まで加速され、最大となり、その後減少し、糸状体の姿勢が水平方向に近づくと糸状体には水平方向の外力が作用しなくなり、 $\theta = 90^\circ$ で 0 となる。いっぽう、 \dot{Y} は、落下開始

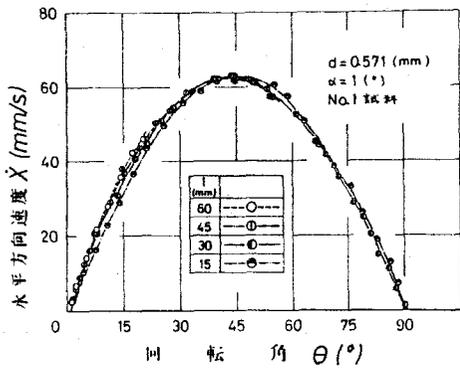


図2.77 水平方向速度におよぼす長さの影響

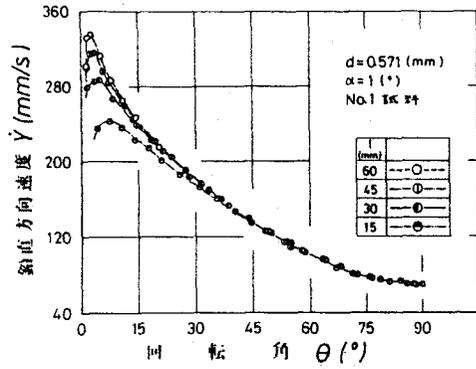


図2.78 鉛直方向速度におよぼす長さの影響

直後に重力と浮力の差による外力により急激に加速され、 θ が 8° 以下の範囲内で最大となり、その後、抗力の増大により、 θ の増加に伴ない単調に減少する。 θ が 90° に近づくと鉛直方向の外力は釣合うため、 \dot{Y} は一定値($\dot{Y}=70(\text{mm/s})$)となる。また、 \dot{X} は加速領域では l が大きいほど大きいが、減速領域では逆に l が大きいほど小さくなる。しかし、長さの影響は、加速領域での場合より小さい。いっぽう、 \dot{Y} は、 θ が約 50° 以下の領域では l が大きいほど大きいが、これ以上の領域では長さの影響を受けない。

表2.15に \dot{X} 、 \dot{Y} の最大値とそのときの θ の値を示す。 \dot{X} の最大値は、長さにかかわらずほぼ一定となるが、そのときの姿勢は 40° から 50° の範囲内で l が大きいほどより鉛直に近くなる。また、 \dot{Y} が最大になるときの姿勢も l が大きいほどより鉛直に近い。

l が大きいほど \dot{Y} の最大値が

表2.15 重心速度の最大値とそのときの回転角の値

球半径 d (mm)	球径長さ l (mm)	水平方向速度の最大値		鉛直方向速度の最大値	
		\dot{X}_{max} (mm/s)	θ ($^\circ$)	\dot{Y}_{max} (mm/s)	θ ($^\circ$)
0.391	30	41	41.5	215	4.5
	60	—	—	247	2
0.571	15	63	46	243	7.5
	30	63	43.5	288	6.5
	45	62.5	43	315	3
	60	63	43	335	2
0.722	30	83	44	338	5
	60	83	41	402	2.5
0.915	30	100	44.5	358	7.5
	60	102	43	454	3.5

No.1 試料

大きくなる原因について考える。落下開始直後の急激な加速領域での姿勢は、 ℓ が大きいほど鉛直に近い。同一速度の場合、線状体の軸方向に作用する抗力は、軸に直角な方向に作用する抗力より小さく、線状体に作用する外力の鉛直方向成分は、重力、浮力および抗力であり、これが0となる時 \dot{Y} は最大になる。したがって、 ℓ が大きいほど \dot{Y} の最大値は大きくなる。

ここで、計算結果と比較すると、長さ ℓ 、 \dot{Y} におよぼす影響は、 \dot{X} の最大値が長さにかかわらずほぼ一定となることを除いて一致する。また、数値的には、 \dot{X} 、 \dot{Y} が最大になる時の θ の値は、 \dot{X} に関しては計算結果とほぼ一致するが、 \dot{Y} に関しては計算結果の方が少し小さい。さらに、 \dot{X} の最大値は ℓ が大きい場合には、計算結果の方が少し大きいが、逆に、 $\ell=15$ (mm)の場合のように小さくなると実験結果の方が少し大きくなる。しかし、実験誤差を考慮するとほぼ一致していると考えてよい。いっぽう、 \dot{Y} の最大値は、 ℓ が大きいほど計算結果の方が大きく、実験結果との差は、 $\ell=15, 30, 45, 60$ (mm)の場合、それぞれ約27, 48, 62, 71(mm/s)となる。また、 $\theta < 55^\circ$ 程度では、 \dot{Y} は計算結果の方が大きく、この傾向はとくに θ の小さい領域でいちじるしい。

計算結果と実験結果で差が生ずる原因について考察する。原因として、

- ① 実験では、落下開始直後の領域で線状体が設定面上を滑るため、摩擦力が作用し \dot{Y} の増大を妨げる。
- ② 計算では、抗力係数 C_d ((2.30)式)として無限長の円柱に対する値を使用した。
- ③ ヌッセルト数 Nu ((2.32)式)は $Pr=0.77$ に対する結果であり、 $Pr=1$ の場合には少し大きくなる。

などが考えられる。

以上のように、計算結果と実験結果は数値的に異なる場合も

あるが、数値計算により姿勢の変化に対する速度の変化を十分に表わすことができる。

つぎに、長さが重心の加速度におよぼす影響を調べるため、 θ と \ddot{X} の関係および θ と \ddot{Y} の関係を図2.79, 2.80に示す。

計算結果(2.3.2項)ですでに述べたように、落下開始の瞬間に線状体は水平方向に約 $26(\text{mm}/\text{s}^2)$ の加速度をもち、 \ddot{X} は減少して極小となり、その後増大する。図2.79において、増大し始めた \ddot{X} は $6^\circ < \theta < 17^\circ$ のとき最大となり、減少して $40^\circ < \theta < 50^\circ$ で正の値から負の値へ移り、 $65^\circ < \theta < 75^\circ$ のとき最小となり $\theta = 90^\circ$ でふたたび0となる。 \ddot{X} は、 $40^\circ < \theta < 50^\circ$ のとき0となるが、そのときの θ の値は、表2.15に示した \ddot{X} が最大になるときの θ の値である。いっぽう、図2.80において、 \ddot{Y} は落下開始の瞬間から急激に減少して $\theta < 8^\circ$ で正の値から負の値へ移り、 $5^\circ < \theta < 30^\circ$ のとき最小となり増大して $\theta = 90^\circ$ でふたたび0となる。 \ddot{Y} は、 $\theta < 8^\circ$ のとき0となるが、そのときの θ の値は、表2.15に示した \ddot{Y} が最大になるときの θ の値である。

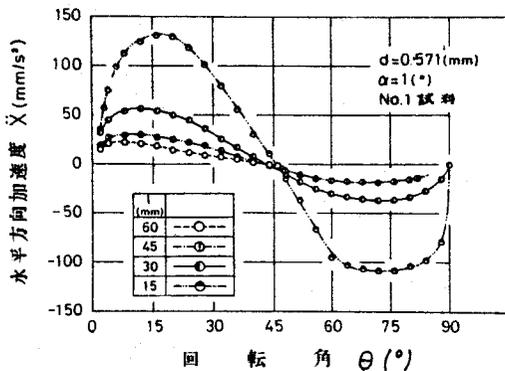


図2.79 水平方向加速度におよぼす長さの影響

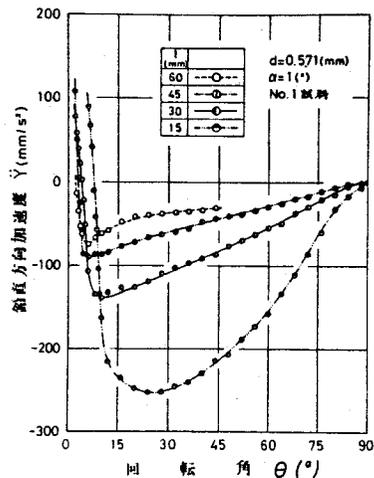


図2.80 鉛直方向加速度におよぼす長さの影響

表2.16 重心加速度の最大値, 最小値
とそのときの回転角の値

線状体長さ l (mm)	水平方向加速度の最大値		水平方向加速度の最小値		鉛直方向加速度の最小値	
	\ddot{X}_{max} (mm/s ²)	θ (°)	\ddot{X}_{min} (mm/s ²)	θ (°)	\ddot{Y}_{min} (mm/s ²)	θ (°)
15	132	16.5	-108	73	-252	26
30	57	12	-37	73	-138	10.5
45	31	11	-18	69	-90	6.5
60	23	6.5	—	—	-74	6

d=0.571(mm), No.1 試料

表2.16に \ddot{X} の最大値および最小値, \ddot{Y} の最小値とそのときの θ の値を示す。最大値および最小値の絶対値とそのときの θ の値は, l が大きいかほど小さくなる。この傾向は計算結果でも認められ, θ と \ddot{X} の関係および θ と \ddot{Y} の関係を表わす曲線の傾向も計算結果と一致する。しかし, 表2.6と表2.16を比較すれば分かるように, θ の値は実験結果の方が大きく, \ddot{X} の最大値および \ddot{Y} の最小値の絶対値は計算結果の方がそれぞれ1.6~2.6倍, 2.9~3.7倍大きく, \ddot{X} の最小値の絶対値は実験結果の方が1.0~1.4倍大きい。

この原因について考える。図2.8と図2.77 (θ と \ddot{X} の関係)および図2.9と図2.78 (θ と \ddot{Y} の関係)を比較すると, θ と \ddot{X} の関係を表わす曲線の接線勾配 $d\ddot{X}/d\theta$ は, θ の全領域で計算結果と実験結果でほとんど差がないが, θ と \ddot{Y} の関係を表わす曲線の接線勾配 $d\ddot{Y}/d\theta$ は, \ddot{Y} が最小になるときの θ の値付近では計算結果の方が大きくなる。また, 角速度 γ は, $\theta < 45^\circ \sim 70^\circ$ では計算結果の方が大きく, これ以上の領域では小さい。したがって, \ddot{X} , \ddot{Y} を表わす(2.50)式を考慮すれば, 計算結果と実験結果で差が生ずる原因として, \ddot{X} に関しては γ の値に差があるためであり, \ddot{Y} に関しては $d\ddot{Y}/d\theta$ と γ の値に差があるためと考えられる。

2.10.3 線状体の姿勢および角速度

姿勢および角速度の変化を図2.81, 2.82に示す。すでに計算結果(2.5.3項)で述べたように, t と θ の関係は落下開始直後の領域を除き初期角度にかかわらず同一曲線で表わされるので, 図2.81には $\alpha = 7^\circ, 10^\circ$ のデータをプロットしている。

t と θ の関係は, $t=0$ での接線勾配がほとんど0の下に凸の曲線で始まり, $30^\circ < \theta < 40^\circ$ のとき変曲点をもち, $\theta = 90^\circ$ に漸近するような曲線になる。すなわち, 角速度 γ は $30^\circ < \theta < 40^\circ$ まで加速されるが, これ以上の領域では γ および軸に直角な方向の速度 U の増大に伴ない, 線状体の回転を押える向きに作用する回転モーメントが増大するため, 減速され最終的に線状体の姿勢は水平方向に漸近し,

もっとも安定した姿勢になる。また, 図2.82において, l が小さいほど γ は大きく, 線状体が回転するのに要する時間は短くなる。この傾向は計算結果でも認められ, 姿勢の変化を表わす曲線の傾向も計算結果と一致する。

t と θ の関係を表わす曲線が変曲点をもつときの θ の値は, γ が最大になるときの θ の値である。表2.17に γ の最大値とそのときの θ の値を示す。

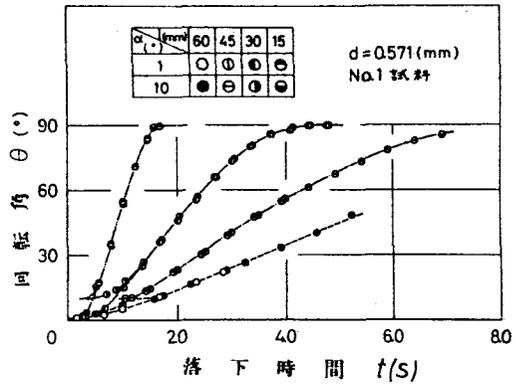


図2.81 姿勢におよぼす長さの影響

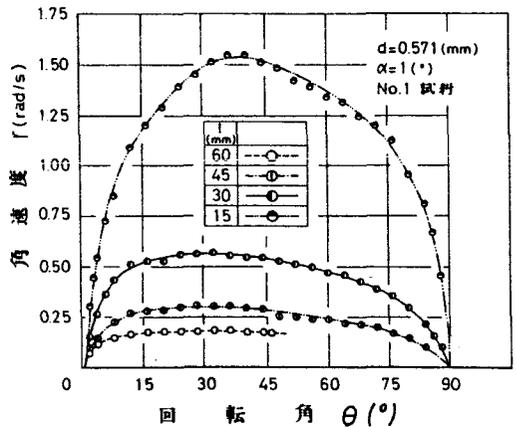


図2.82 角速度におよぼす長さの影響

表2.7に示した計算結果と比較すると、 γ の最大値は計算結果の方が $\ell=15, 30, 45, 60$ (mm)の場合、約2.2, 1.6, 1.3, 1.3倍大きく、そのときの θ の値は、実験結果の方が大きい。

また、 θ と γ の関係を表わす図2.13と図2.82を比較すると、

γ は $\theta < 45^\circ \sim 70^\circ$ では計算結果の方が大きく(とくに、 θ の小さい領域でいちじるしい。)

、これ以上の領域では小さい。計算結果の方が γ の値が大きくなる θ の領域は、 ℓ が小さいほど広くなり、 $\ell=15, 30, 45, 60$ (mm)の場合、約 $69^\circ, 55^\circ, 45^\circ, 45^\circ$ である。この原因について考える。

前項で述べたように、 $\dot{\gamma}$ は $\theta < 55^\circ$ 程度では計算結果の方が大きい。とくにこの傾向は θ の小さい領域でいちじるしい。いっぽう、 \dot{X}, \dot{Y} を表わす(2.23)式から、

$$\left. \begin{aligned} u &= \dot{X} \cos \theta + \dot{Y} \sin \theta \\ v &= -\dot{X} \sin \theta + \dot{Y} \cos \theta \end{aligned} \right\} \quad (2.57)$$

となり、したがって、 u, v の値は計算結果の方が大きく、線状体の角加速度を表わす(2.22)式の第3式を考慮すると、とくに θ の小さい領域で γ は計算結果の方が大きくなることが分かる。

したがって、前項で述べた①~③の原因が主なものであるが、その他にも、線状体が有限長であることに起因する後端部から発生する自由渦およびこの自由渦に引きずられるように後端部付近の境界層厚さが増大することなど、線状体回りの流れ(3.2.2項参照)についても考慮する必要がある。

表2.17 角速度の最大値とそのときの回転角の値

試料番号	線状体直径 d (mm)	線状体長さ l (mm)	角速度の最大値	
			$\dot{\gamma}$ (rad/s)	θ (°)
1	0.391	30	0.35	25
		15	1.54	38
	0.571	30	0.57	30
		45	0.31	29
		60	0.18	30
	0.722	30	0.71	40
0.915	30	0.94	45	

以上のように、数値計算により姿勢の変化の傾向を表わすことができる。

2.10.4 最終落下位置での線状体の配向

繊維を取扱う実際の工程において、繊維が運動した後、最終的にどのように配向するかは製品品質との関連から非常に重要である。そこで、実験では、50本程度線状体を落下させ、最終落下位置での配向状態を調べた。

配向の評価はつきかのようにしておこなった。まず、図2.67に示す実験装置に設定した x 軸と最終落下位置での線状体の軸方向のなる角度を β とした。以下では β を配向角と呼び、 β の範囲は $-90^\circ \leq \beta \leq 90^\circ$ (反時計回りを正)とし、 10° ごとの相対度数を求め、 $\beta=0^\circ$ 近くに分布している場合ほど配向度が良いと評価した。

$l=30, 60$ (mm) の $\alpha=1^\circ$ および 10° の場合の配向度を図2.83, 2.84 に示す。

$\alpha=1^\circ$ の場合、最終落下位置での線状体は $-50^\circ < \beta < 70^\circ$ の範囲にほぼ一様に分布し、配向度は非常に悪い。これに対し、 $\alpha=10^\circ$ の場合、ほとんどの線状体が $-10^\circ < \beta < 10^\circ$ の範囲に分布しており、配向度は良い。また、 $l=60$ (mm) の方が幾分

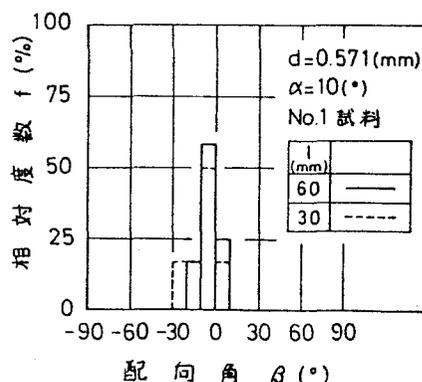
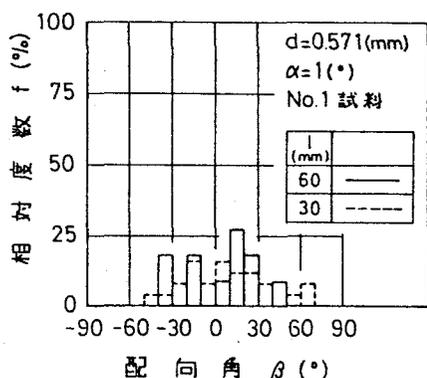


図2.83 配向におよぼす長さの影響 図2.84 配向におよぼす長さの影響

配向度は良いように思える。しかし、長さの影響は、初期角度の影響に比べて無視しうるほど小さい。 $\alpha=7^\circ$ の場合、配向度は悪いが図2.85に示す $l=60$ (mm)の線状体の最終落下位置での状態を見れば分かるように、その軸方向はスズ座標の原点、すなわち、初期位置の方向に向いており、本実験で用いたような直線の線状体は、静止流体中では一平面内で運動すると考えてよい。以上の結果から、初期角度を 10° 以上に設定すると線状体はほぼスズ面(図2.67参照)内で運動するが、 $\alpha=7^\circ$ の場合、角度が小さいため、初期状態のみでは運動面がスズ面に決まらずる方向につれる場合が多いことが分かる。

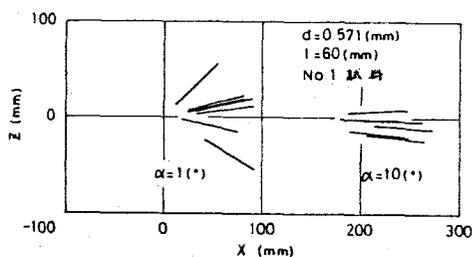


図2.85 最終落下位置での線状体の状態

2.11 線状体直径の影響

この節では、 $l=30, 60$ (mm)、 $d=0.391, 0.571, 0.722, 0.915$ (mm)のNo.1試料に対する実験結果から、線状体直径が落下特性におよぼす影響を調べる。

2.11.1 線状体の落下軌跡

$d=0.391, 0.915$ (mm)の落下軌跡を図2.86に示す。図中の線状体の時間間隔は、 $d=0.391$ (mm)の場合、 $\Delta t=4/7$ (s)、 $d=0.915$ (mm)の場合、 $\Delta t=0.2$ (s)である。

重心の落下軌跡は変曲点をもつ曲線となり、表2.14から変曲点での接線勾配 dY/dX の値は、 d が大きいほど小さくなる。すなわち、加速度の方向と一致するときの運動方向は、直径が大きいほどより水平に近くなる。この傾向は計算結果と一致し、全体的に計算結果の方が θ の値は大きく、 dY/dX の値は小

さいが実験結果とほぼ一致する。

また、図2.86から、同一回転角に対する Y の値は、 α が小さい方が大きい
が、 X の値に関しては分かりにくい。
しかし、最終落下位置での X の値は、
 α が小さい方が大きくなる。

ここで、重心の軌跡の計算結果(図
2.14)と実験結果を比較すると、同
一鉛直方向移動距離での X の値は、 α
 $= 0.915$ (mm) に対する計算結果で姿
勢が水平近くになった後の領域(この
領域では、実験結果の方が X の値は大
きい。)を除いて、計算結果の方が大
きく、軌跡の曲線自身は実験結果と一致しないが、その傾向
は良く一致していると考えられる。

つぎに、直径が X 、 Y におよぼす影響を調べるため、 $l=30$
(mm) の場合の θ と X の関係および θ と Y の関係を図2.87、2.
88に示す。

θ と X の関係および θ と Y の関係を表わす曲線は、それぞれ
 $45^\circ < \theta < 50^\circ$ 、 $65^\circ < \theta < 80^\circ$ で変曲点をもち、変曲点での $dX/d\theta$ 、 $dY/d\theta$ の値は、 $\alpha=0.391, 0.571, 0.722, 0.915$ (mm)の
場合、152, 118, 123, 115 (mm) ($dX/d\theta$)、330, 206, 155, 115
(mm) ($dY/d\theta$)となり、 α が小さいほど変曲点での接線勾配は
大きい。ある回転角に対する $dX/d\theta$ 、 $dY/d\theta$ および X 、 Y の
値は、直径に対して一定の傾向を示さない。

姿勢の変化に対する重心速度の変化を表わす図2.89、2.90か
ら、 α が大きいほど \dot{X} 、 \dot{Y} は大きく、 $\alpha=0.571$ (mm)と 0.915
(mm)の最大値を比較すると、 \dot{X} 、 \dot{Y} に関して約1.6倍、1.2倍
となる。いっぽう、 ψ と θ の関係(図2.91)から、 α が大きい
ほど ψ は大きく、同様に両者の最大値を比較すると約1.7倍と

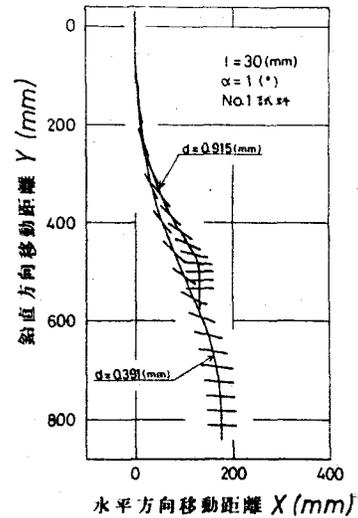


図2.86 落下軌跡におよぼす
直径の影響

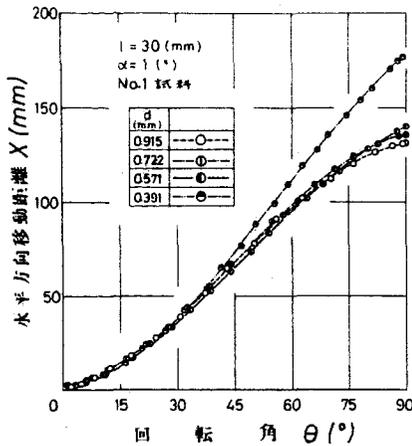


図 2.87 水平方向移動距離に
およぼす直径の影響

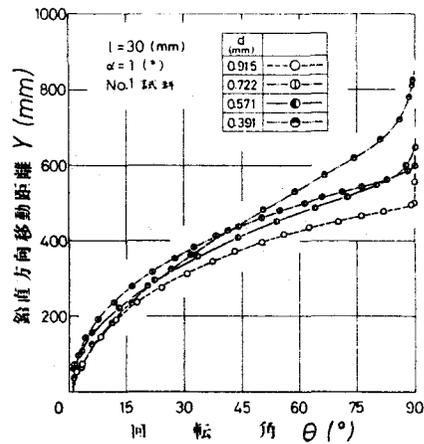


図 2.88 鉛直方向移動距離に
およぼす直径の影響

となり、直径が速度および角速度におよぼす影響は同程度である。したがって、(2.37)式を考慮すれば、直径が θ と X の関係および θ と Y の関係におよぼす影響が明確に現われないことが分かる。しかし、 θ が 90° に近づくと X 、 Y ともに d が小さいほど大きくなる。

計算結果では、直径の影響が明確に現われ、 d が小さいほど $dX/d\theta$ 、 $dY/d\theta$ および X 、 Y の値は大きくなった。この主な原因としては計算結果の方が Y におよぼす直径の影響が大きいためと考えられる。

ここで、計算結果と比較すると、 $d=0.391$ (mm)のように直径が小さい場合、ある回転角に対する X 、 Y の値は計算結果の方が大きく、直径が大きい場合、逆に実験結果の方が大きくなる事が分かる。

2.11.2 糸状体重心の速度

図 2.89, 2.90 には $l=30, 60$ (mm) のデータをプロットしている。糸状体は水平方向に $40^\circ < \theta < 45^\circ$ まで加速されるが、鉛直方向に加速されるのは $\theta < 8^\circ$ である。また、 θ の全領域

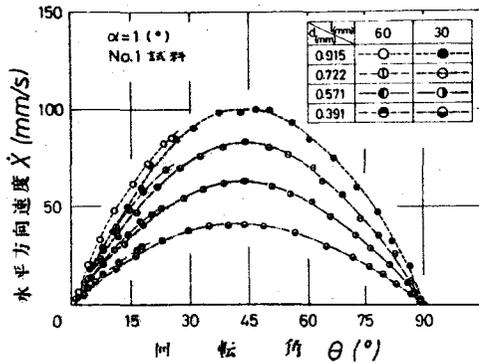


図2.89 水平方向速度におよぼす直径の影響

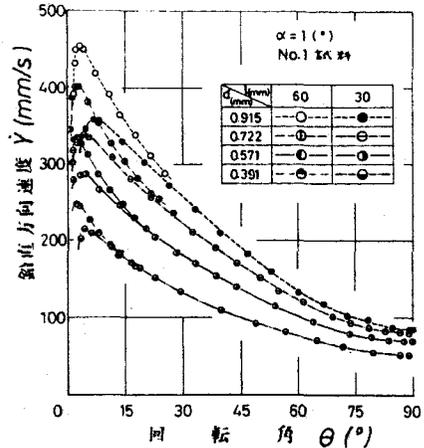


図2.90 鉛直方向速度におよぼす直径の影響

($1^\circ \sim 90^\circ$)で \dot{X} , \dot{Y} ともに直径が大きいほど大きくなる。さらに, 同一直径での $l=60$ (mm)と 30 (mm)の場合の差は, \dot{X} , \dot{Y} ともに α が大きいほど大きく, \dot{Y} は α が大きいほど θ のより広い領域で長さの影響を受ける。すなわち, \dot{X} , \dot{Y} ともに直径が大きいほど長さの影響を受け易くなる。

2.10.2項に記載した表2.15から, \dot{X} , \dot{Y} が最大になるときの θ の値は, α が大きいほど大きく, 2.10.2項の結果を考えあわせると同一直径, 同一長さの場合, l/d が大きいほどより鉛直に近い姿勢で速度成分が最大になることが分かる。しかし, 長さ, 直径にかかわらず l/d が大きいほどより鉛直に近い姿勢で \dot{X} , \dot{Y} が最大になるとは言えない。

直径が \dot{X} , \dot{Y} におよぼす影響の傾向は, 計算結果と一致するが, \dot{X} , \dot{Y} が最大になるときの θ の値は, \dot{X} に関しては計算結果の方が少し大きく, \dot{Y} に関しては少し小さくなる。また, \dot{X} の最大値は, 直径が小さい場合, 計算結果の方が大きい。逆に, $d=0.915, 0.722$ (mm)の場合のように大きくなると実験結果の方が大きくなる。しかし, 実験誤差を考慮すれば両者はほぼ一致していると考えてよい。いっぽう, \dot{Y} の最大値は, 直

径が小さいほど計算結果の方が大きく、実験結果との差は、 $l = 30 \text{ (mm)}$, $d = 0.391, 0.571, 0.722, 0.915 \text{ (mm)}$ の場合、約65, 48, 13, -2 (mm/s) ($d = 0.915 \text{ (mm)}$ の場合、実験結果の方が大きい。)となる。

以上のように、計算結果と実験結果は数値的に異なる場合もあるが、数値計算により姿勢の変化に対する速度の変化におよぼす直径の影響を十分に表わすことができる。

2.11.3 線状体の姿勢

$l = 30 \text{ (mm)}$ の ψ と θ の関係を図2.91に示す。図には $\alpha = 1^\circ, 10^\circ$ のデータをプロットしている。線状体の回転は $25^\circ < \theta < 45^\circ$ まで加速されるが、その後減速され、姿勢は水平方向に漸近する。また、直径が大きいほど角速度は大きく、線状体が回転するのに要する時間は短くなる。

したがって、2.10.3項の結果を考えあわせると、同一直径、同一長さの場合、 l/d が小さいほど γ が大きいという結果が得られる。そこで、長さの影響を表わす図2.81と直径の影響を表わす図2.91を比較すると、 $d = 0.571 \text{ (mm)}$, $l = 45 \text{ (mm)}$ の場合と $d = 0.391 \text{ (mm)}$, $l = 30 \text{ (mm)}$ の場合を除いて、長さ、直径にかかわらず l/d が小さいほど γ は θ の全領域で大きく、線状体が回転するのに要する時間は短くなるが、この2つの場合、前者が $l/d = 76.9$ 、後者が 78.1 と後者の方が l/d が大きいにもかかわらず γ はわずかに大きくなるので、長さ、直径にかかわらず l/d が小さいほど角速度は大きいとは言えない。

以上の傾向は計算でも確かめられており、 ψ と θ の

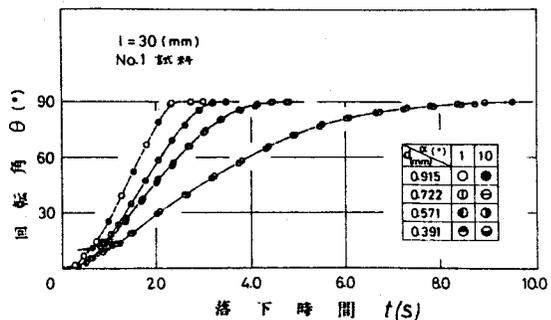


図2.91 姿勢におよぼす直径の影響

関係を表わす曲線の傾向も計算結果と一致する。しかし、 γ の最大値とそのときの θ の値を示す表2.7と表2.17を比較すると、 γ の最大値は、計算結果の方が $\alpha=0.391, 0.571, 0.722, 0.915$ (mm)の場合、約1.1, 1.6, 2.1, 2.2倍大きく、そのときの θ の値は実験結果の方が大きい。

以上のように、実験結果とは差が生ずるが、数値計算により姿勢の変化におよぼす直径の影響の傾向を表わすことができる。

2.12 初期角度の影響

この節では、 $\alpha=0.391$ (mm)、 $l=30$ (mm)のNo.1試料に対する $\alpha=1^\circ, 10^\circ, 20^\circ, 30^\circ$ の実験結果から、初期角度が落下特性におよぼす影響を調べる。

2.12.1 線状体の落下軌跡

計算結果で述べたように、 $\alpha=10^\circ, 20^\circ, 30^\circ$ の重心の軌跡は、X、Y軸に沿って θ が等しくなる位置まで平行移動すると落下開

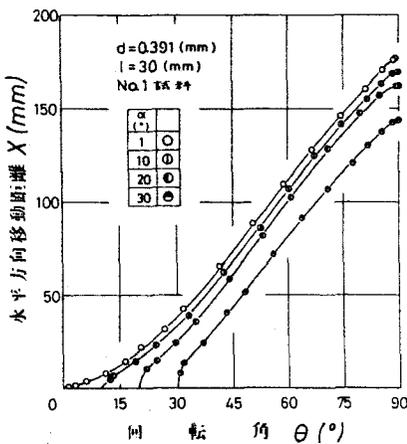


図2.92 水平方向移動距離に
およぼす初期角度の影響

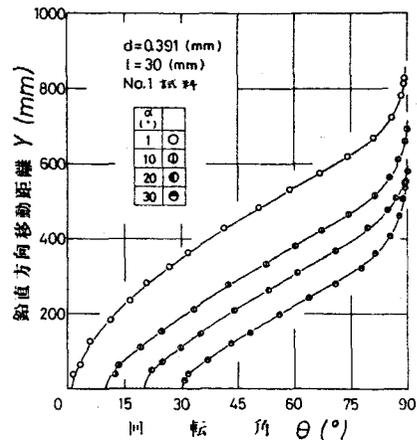


図2.93 鉛直方向移動距離に
およぼす初期角度の影響

始直後の θ にして約 5° の領域を除いて $\alpha=7^\circ$ の軌跡と一致する。(2.5.7項参照)

これを実験結果でも確かめるため、姿勢の変化に対する X , Y の変化を図2.92, 2.93に示す。

ある回転角に対する X , Y の値は, α が小さいほど大きいか, $\alpha=10^\circ\sim 30^\circ$ の曲線を X 軸あるいは Y 軸に沿って平行移動すると, 落下開始直後の急激な加速領域を除いて $\alpha=7^\circ$ の曲線とほぼ重なることが分かる。

θ と X の関係(図2.95)から, $\alpha=10^\circ\sim 30^\circ$ の曲線は多少差があるが落下開始直後の θ の小さい領域を除き $\alpha=7^\circ$ の曲線とほぼ一致し, θ と Y の関係(図2.96)から, $\alpha=10^\circ\sim 30^\circ$ の曲線が $\alpha=7^\circ$ の曲線に一致するまでに線状体が回転する角度は, α が小さいほど大きく $\alpha=10^\circ$ の場合, 約 10° となる。また, t と θ の関係(図2.97)から, $\alpha=10^\circ\sim 30^\circ$ の曲線は, 落下開始直後の θ にして約 4° の領域を除き $\alpha=7^\circ$ の曲線に一致する。したがって, (2.37)式を考慮すれば上述のことは明らかとなる。

以上の結果から, 計算結果の場合と同様に実験結果でも, $\alpha=10^\circ\sim 30^\circ$ の軌跡を θ が等しくなる位置まで平行移動すると落下開始直後の θ の小さい領域を除き $\alpha=7^\circ$ の軌跡と一致することが分かる。

図2.94に $\alpha=30^\circ$ の軌跡を平行移動した後の $\alpha=7^\circ$ と 30° の重心の軌跡と4/7(3)ごとの姿勢の変化を示す。 $\alpha=7^\circ$ の軌跡が分かれば, $\alpha>7^\circ$ の軌跡は落下開始直後の領域を除きすべて分かる。

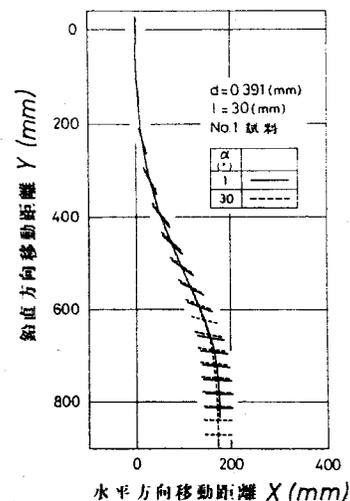


図2.94 落下軌跡におよぼす初期角度の影響

2.12.2 線状体重心の速度

図2.95において、 $\alpha=10^\circ\sim30^\circ$ の \dot{X} は落下開始直後急激に加速され $\alpha=7^\circ$ の曲線に近づくが、 α の増大に伴ない θ のより広い領域で $\alpha=7^\circ$ の場合より小さくなる。しかし、 $\alpha=30^\circ$ の場合でもその差は最大2.5 (mm/s)程度であり、実験誤差を考慮すれば落下開始直後の急激な加速領域を除き $\alpha=7^\circ$ の曲線に一致すると考えてよい。

いっぽう、図2.96において、 $\alpha=10^\circ\sim30^\circ$ の \dot{Y} も落下直後急激に加速され $\alpha=7^\circ$ の曲線に近づき一致する。また、一致するまでに線状体が回転する角度は、 α が小さいほど大きく、 $\alpha=10^\circ, 20^\circ, 30^\circ$ の場合、約 $10^\circ, 5^\circ, 2^\circ$ となる。したがって、初期角度が重心の速度におよぼす影響は計算結果と一致する。

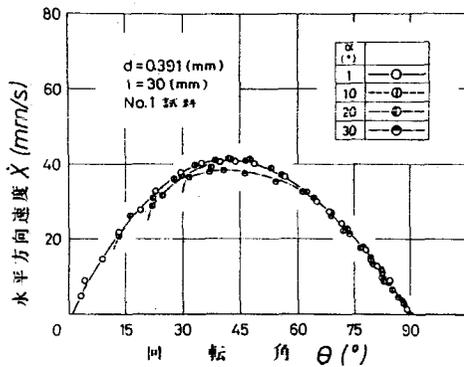


図2.95 水平方向速度におよぼす初期角度の影響

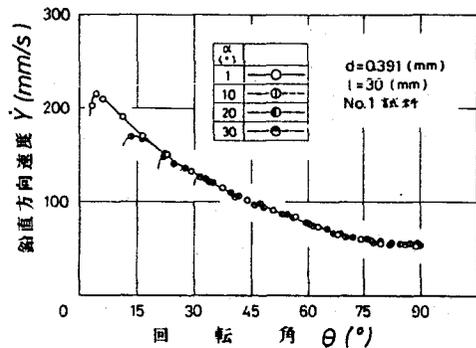


図2.96 鉛直方向速度におよぼす初期角度の影響

2.12.3 線状体の姿勢

図2.97において、 $\alpha=7^\circ$ の場合、線状体の回転は $\theta=25^\circ$ 付近まで加速されるが、その後減速され、姿勢は水平方向に漸近する。また、 $\alpha=10^\circ\sim30^\circ$ の曲線を横軸に沿って平行移動すると、落下開始直後の θ にして約 4° の領域を除いて $\alpha=7^\circ$ の曲線に

重なる。図2.97は平行移動した後の図である。

したがって、 $\alpha = 1^\circ$ の α と θ の関係が分かれば、 $\alpha > 1^\circ$ の場合については落下開始直後の領域を除きすべて分かる。以上の結果は計算結果と一致する。

これまでの結果から、初期角度は、落下開始直後の急激な加速領域における運動にのみ影響を与え、それ以後の領域では、姿勢が同じであれば初期角度に関係なく運動状態は同一になることが実験的にも確かめられた。

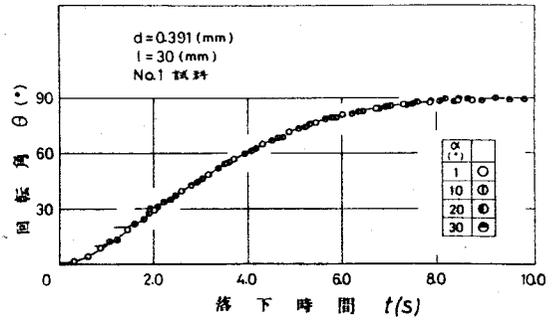


図2.97 姿勢におよぼす初期角度の影響

2.12.4 最終落下位置での線状体の配向

$\alpha = 1^\circ, 10^\circ$ の配向度を図2.98に示す。 $\alpha = 1^\circ$ の場合、最終落下位置での線状体は β のほとんど全領域に分布し、配向度は非常に悪い。これに対し、 $\alpha = 10^\circ$ の場合、約70(%)の線状体が $-10^\circ < \beta < 10^\circ$ の範囲に分布し、配向度は良い。

したがって、 α を 10° 以上に設定すると、線状体はほぼエミ面内で運動するので線状体設定面の方向に非常に良く配向することが分かる。

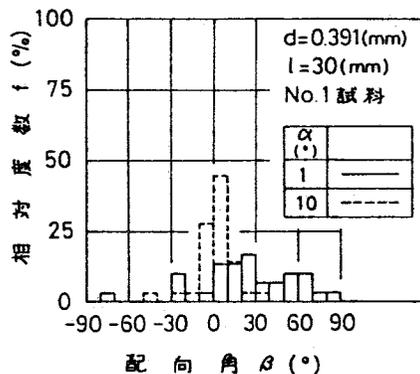


図2.98 配向におよぼす初期角度の影響

2.13 線状体比重量の影響

この節では、主に $d=0.391$ (mm), $l=30, 60$ (mm) の NO.1 試料と $d=0.310$ (mm), $l=30, 60$ (mm) の NO.2 試料に対する実験結果から、線状体の比重量が落下特性におよぼす影響を調べる。なお、NO.1 試料と NO.2 試料では直径も異なるため、2.11 節で述べた直径の影響の結果も考慮する必要がある。

2.13.1 線状体の落下軌跡

ここでは落下軌跡は示さないが、重心の軌跡の変曲点での接線勾配 dY/dX とそのときの θ の値は、 $l=30$ (mm) の NO.1 試料、NO.2 試料の場合、それぞれ $dY/dX = 2.24, 1.82$, $\theta = 60^\circ, 61^\circ$ であり、おの大きい NO.2 試料の方が dY/dX の値は小さくなる。この傾向は計算結果と一致する。また、すでに述べたように、直径が大きいほど変曲点での dY/dX の値は小さい。したがって、同一直径で重さが異なる場合、加速度の方向と一致するときの重心の運動方向は、重い方がより水平に近くなる。つぎに、比重量が X, Y におよぼす影響を調べるため、姿勢

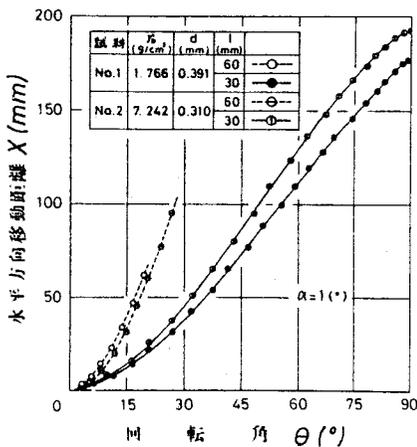


図 2.99 水平方向移動距離に
およぼす比重量の影響

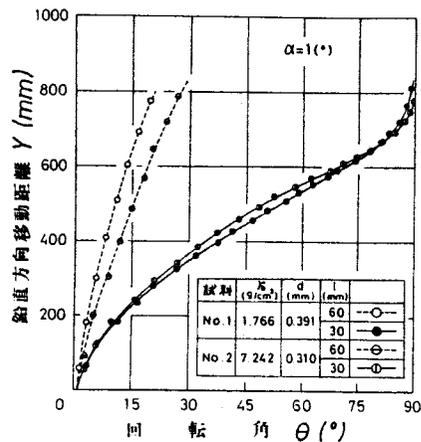


図 2.100 鉛直方向移動距離に
およぼす比重量の影響

の変化に対する X , Y の変化を図 2.99, 2.100 に示す。

図 2.99 において, ある回転角に対する X の値は, $l=30$ (mm) の場合, θ の全領域で No.2 試料の方が大きくなるが, $l=60$ (mm) の場合, 実験の範囲内では No.1 試料の方が大きい。

また, 図 2.100 において, Y の値は, $l=30$ (mm) の場合, $\theta < 80^\circ$ 程度の領域ではわずかに No.2 試料の方が大きい, これ以上の領域では No.1 試料の方が大きくなる。いっぽう, $l=60$ (mm) の場合, 実験の範囲内では Y の値は No.1 試料の方が大きい。

2.13.2 線状体重心の速度

姿勢の変化に対する重心速度の変化を図 2.101, 2.102 に示す。図には $l=30, 60$ (mm) のデータをプロットしている。

\dot{X} は $40^\circ < \theta < 45^\circ$ まで加速され, \dot{Y} は $\theta < 6^\circ$ まで加速される。また, θ の全領域で \dot{X} , \dot{Y} とともに ρ の大きい No.2 試料の方が大きくなる。

表 2.18 に No.2 試料の \dot{X} , \dot{Y} の最大値とそのときの θ の値を示す。2.10.2 項に記載した表 2.15 と表 2.18 を比較すると, \dot{X} , \dot{Y} が最大になるときの θ の値は No.2 試料の方が大きい

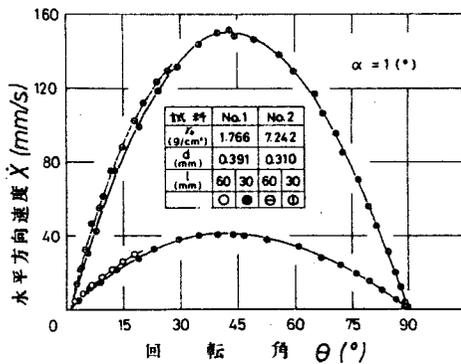


図 2.101 水平方向速度におよぼす比重量の影響

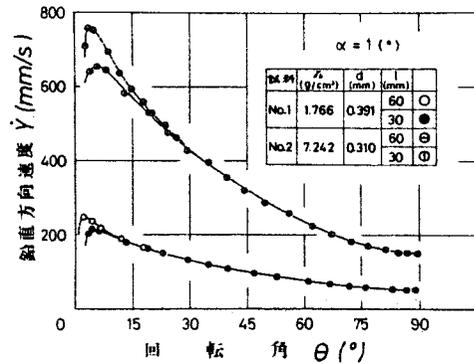


図 2.102 鉛直方向速度におよぼす比重量の影響

ことが分かる。なお、 $d=0.310$ (mm)のNO.2試料の \dot{X} , \dot{Y} の最大値は、 $d=0.397$ (mm)のNO.1試料の約3.7倍, 3.7倍になる。

\dot{X} , \dot{Y} の値およびそれらが最大になるときの θ の値は直径が大きいほど大きい。したがって, 同一直径で重さが異なる場合, これらの値は重い方が大きくなる。

また, 図2.101, 2.102において, $l=60$ (mm)と 30 (mm)の場合の差は, \dot{X} , \dot{Y} ともにNO.2試料の方が大きく, さらに, \dot{Y} が長さの影響を受ける θ の領域も, NO.2試料の方が大きい。ここで, 直径の影響を考慮すると, 同一直径の場合, 重い方が長さの影響を受け易いことが分かる。

以上実験によって得られた比重量の影響は計算結果と一致する。

ここで, NO.2試料に対して実験結果と計算結果を比較する。 \dot{X} , \dot{Y} の最大値は計算結果の方が大きく, 実験結果との差は, \dot{X} に関しては $l=30$ (mm)の場合, 15 (mm/s), \dot{Y} に関しては $l=30, 60$ (mm)の場合, $101, 168$ (mm/s)となる。また, \dot{X} が最大になるときの θ の値は計算結果の方が大きく, \dot{Y} に関しては逆に小さくなる。以上のように数値的には異なるが, 姿勢の変化に対する速度の変化の傾向は一致する。

また, 表2.18から, NO.2試料の場合にもNO.1試料と同様に, \dot{X} の最大値は直径が大きいほど大きい, 長さにかかわらずほぼ一定となり, \dot{Y} の最大値は, 同一直径, 同一長さの場合ともに, l/d が大きいほど大きい。さらに, \dot{X} , \dot{Y} が最大になるときの θ の値は, 同一直径, 同一長さの場合ともに, l/d が大きいほど小さい。

表2.18 重心速度の最大値とそのときの回転角の値

球状体直径 d (mm)	球状体長さ l (mm)	水平方向速度の最大値		鉛直方向速度の最大値	
		\dot{X}_{max} (mm/s)	θ (°)	\dot{Y}_{max} (mm/s)	θ (°)
0.206	30	85	43	465	3.5
	60	—	—	545	2
0.310	30	150	42.5	655	6
	60	—	—	758	4
0.411	30	245	45	845	7.5
	60	—	—	1066	4
0.512	30	316	48	1008	9
	60	314	42.5	1222	5.5

No.2 試料

2.13.3 線状体の姿勢

姿勢の変化を図2.103に示す。図には $l=30, 60(\text{mm})$ と $\alpha=7^\circ, 10^\circ$ のデータをプロットしている。

γ の大きい NO.2 試料の方が角速度は大きく、線状体が回転するのに要する時間は短くなる。また、 γ の最大値とそのときの θ の値は NO.1 試料の場合、 $l=30, 60(\text{mm})$ でそれぞれ $\gamma=0.35, 0.11(\text{rad/s})$ 、 $\theta=25^\circ, 18^\circ$ 、NO.2 試料の場合、 $\gamma=1.00, 0.38(\text{rad/s})$ 、 $\theta=22^\circ, 11^\circ$ であり、NO.2 試料の方が γ の最大値は、2.9~3.5倍大きく、そのときの θ の値は小さくなる。

ここで、直径が大きいほど γ は大きいことを考慮すると、同一直径で重さが異なる場合、 γ は重い方が大きくなる。これは、同一形状の場合、重い方が速度は大きく線状体に対する流体の相対速度が大きくなり、したがって、線状体を回転させる向きに作用するモーメントが大きくなるためと考えられる。

以上の傾向は計算結果でも認められ、数値的には異なるが γ と θ の関係を表わす曲線の傾向も計算結果と一致する。

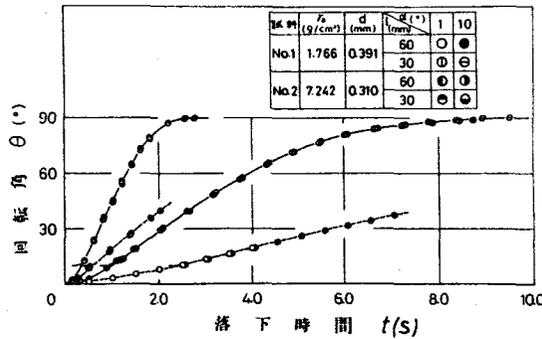


図2.103 姿勢におよぼす比重量の影響

2.14 流体の温度の影響

この節では、 $d=0.571, 0.915$ (mm), $l=60$ (mm)のNo.1試料を用いて水温を $T_w=12.4, 29.9$ (°C)の2種類変えた場合、落下特性とくに重心の速度および姿勢がどのように変化するかを調べる。なお、各水温に対する水の物性値は、 $T_w=12.4, 29.9$ (°C)の場合、それぞれ $\rho=1.019 \times 10^{-7}, 1.016 \times 10^{-7}$ (gS²/mm⁴), $\nu=1.226, 0.819$ (mm²/s)である。

2.14.1 線状体重心の速度

$d=0.571, 0.915$ (mm), $T_w=12.4, 29.9$ (°C)の姿勢の変化に対する重心速度の変化を図2.104, 2.105に示す。

$\alpha > 7^\circ$ の場合の θ と \dot{X} の関係および θ と \dot{Y} の関係を表わす曲線は、落下開始直後の領域を除き $\alpha=7^\circ$ の曲線と一致することが分かっているため、 $T_w=29.9$ (°C)の場合、 θ と \dot{X} の関係を表わす曲線は、 $\alpha=7^\circ$ と 10° の曲線を重ね合わせて求め、 θ と \dot{Y} の関係を表わす曲線は、 $\alpha=7^\circ$ と 10° の曲線と $\theta > 50^\circ$ の $l=30$ (mm)の曲線を重ね合わせて求めた。 $\theta > 50^\circ$ の領域で、 $l=$

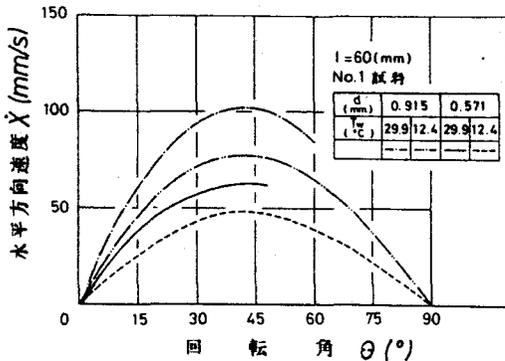


図2.104 水平方向速度におよぼす水温の影響

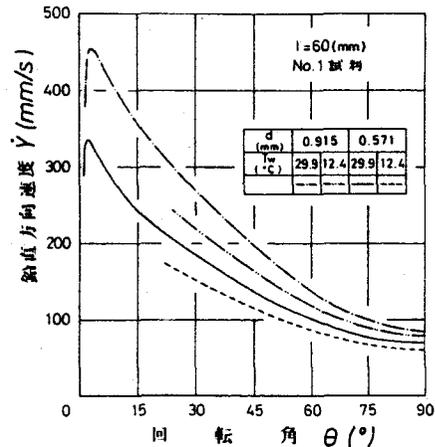


図2.105 鉛直方向速度におよぼす水温の影響

60 (mm) のデータが得られなかったため、すでに \dot{Y} はこの領域で長さの影響を受けないことが分かっているため、 $l=30$ (mm) の曲線を用いた。

また、 $T_w=12.4$ ($^{\circ}\text{C}$) の場合、 \dot{X} 、 \dot{Y} とともに $d=0.571$ (mm) では $\alpha=20^{\circ}$ 、 40° 、 60° の曲線を重ね合わせ、 $d=0.915$ (mm) では $\alpha=20^{\circ}$ 、 60° の曲線を重ね合わせて求めた。

\dot{X} は $40^{\circ} < \theta < 45^{\circ}$ まで加算され、また、水温が高い方が動粘性係数は小さく、したがって線状体に作用する抗力が小さいので、 \dot{X} 、 \dot{Y} とともに θ の全領域で T_w が高い方が大きくなる。この傾向は計算結果と一致する。

表 2.19 に \dot{X} の最大値とそのときの θ の値および $\theta=45^{\circ}$ 、 90° のときの \dot{Y} の値を示す。 T_w が高い方が、より水平に近い姿勢になるまで水平方向に加速される。この傾向は計算結果でも認められた。また、 $T_w=29.9$ ($^{\circ}\text{C}$) の \dot{X} の最大値および $\theta=90^{\circ}$ の \dot{Y} の値は、 $T_w=12.4$ ($^{\circ}\text{C}$) の値の約 1.3 倍、1.2 倍 ($d=0.571$ (mm) の場合)、約 1.3 倍、1.1 倍 ($d=0.915$ (mm) の場合) となる。

表 2.19 \dot{X} の最大値とそのときの θ の値および $\theta=45^{\circ}$ 、 90° のときの \dot{Y} の値

線状体直径 d (mm)	水温 T_w ($^{\circ}\text{C}$)	水平方向速度の最大値		鉛直方向速度 \dot{Y} (mm/s)	
		\dot{X}_{max} (mm/s)	θ ($^{\circ}$)	$\theta=45$ ($^{\circ}$)	$\theta=90$ ($^{\circ}$)
0.571	12.4	48	42	137	70
	29.9	63	43	115	60
0.915	12.4	78	42.5	164	79
	29.9	102	43.5	197	85

$l=60$ (mm), No. 1 試料

2.14.2 線状体の姿勢

$d=0.571$ 、 0.915 (mm)、 $T_w=12.4$ 、 29.9 ($^{\circ}\text{C}$) の姿勢の変化を図 2.106 に示す。

t と θ の関係を表わす曲線は、横軸 (落下時間軸) に沿って平行移動すると落下開始直後の領域を除き α にかかわらず一致することが分かっているため、 $T_w=29.9$ ($^{\circ}\text{C}$) の場合、 $\alpha=1^{\circ}$ と

10°の曲線を重ね合わせ、
 $T_w = 12.4 (^{\circ}\text{C})$ の場合、前項
 で重心の速度を求めたとき
 と同じ α の曲線を重ね合わ
 せて求めた。

水温が高い方が同一回転
 角に対する γ の値は大きく
 、線状体が回転するのに要
 する時間は短い。この傾向
 は計算結果と一致する。また、 γ の最大値は $T_w = 29.9 (^{\circ}\text{C})$ の場
 合、 $d = 0.571, 0.915 (\text{mm})$ で $\gamma = 0.18, 0.32 (\text{rad/s})$ 、 $T_w =$
 $12.4 (^{\circ}\text{C})$ の場合、 $\gamma = 0.15, 0.28 (\text{rad/s})$ である。

前項の結果から、水温が高い方が α, γ は大きい。したがっ
 て、(2.57)式から u, v は T_w が高い方が大きくなり、線状
 体の角加速度を表わす(2.22)式の第3式を考慮すれば、 γ は
 水温が高い方が大きくなることが分かる。

2.14.1項、2.14.2項の結果から、数値的には異なるが水温
 が落下特性におよぼす影響は、実験結果と数値計算結果で一
 致する。

2.15 空気中における線状体の運動

これまで、線状体が水中で自由落下する場合の落下特性お
 よび諸要因の影響を調べたが、この節では、空気中で運動
 する場合の落下特性および諸要因の影響を調べ、水中での結
 果と比較して主に流体の比重量の違いにより落下特性がどの
 ように変わるかを明らかにする。

2.15.1 初期角度の影響

計算結果によると、線状体が空気中で運動する場合、姿勢
 が水平方向を中心にして減衰振動するため、この変動に応じて

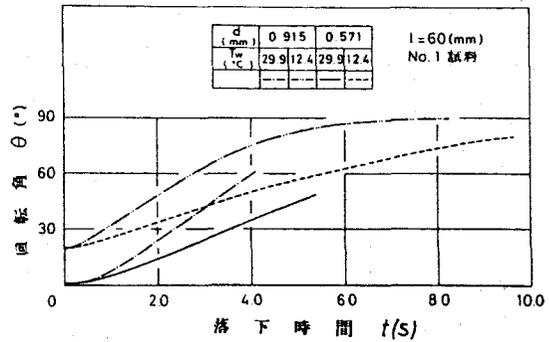


図2.106 姿勢におよぼす水温の影響

重心の速度が減衰振動し、とくに水平方向速度の向きが変化するため、重心の軌跡が変動する現象が生ずることが分かった。なお、1周期分の軌跡の変動を観察するにも最低3(m)程度の高さが必要であり、ここでは、高さ800(mm)程度で実験をおこなっているため、重心の軌跡が変動する現象を観察することができなかった。しかし、実験から得られた落下開始後の急激な加速領域における運動状態と計算結果を比較検討することにより、姿勢、重心の速度および軌跡が変動する可能性があることを推察することができた。

また、計算結果からも分かるように、水中での場合に比べて運動方向は鉛直に近い。したがって、800(mm)程度の高さでは水平方向に移動する距離が小さいので、ここでは落下軌跡は記載せず、落下時間に伴って姿勢および重心の速度がどのように変化するか、さらに、その変化の状態に要因がいかなる影響をおよぼすかを調べる。

姿勢の変化を表わす図2.107において、空気の比重量が小さいため、落下開始直後の領域では角速度がほとんど増大しない。やがて、重力と浮力の差による外力の作用を受けて線状体の軸方向速度が急激に増大するため、姿勢は急激に水平方向に回転し始める。そして、 $\alpha = 10^\circ \sim 30^\circ$ のすべての場合、角速度が加速されている状態で線状体が底面に到達することが分かる。

水中での場合、角速度の変化に初期角度の影響が現われるのは落下開始直後の θ にして約 4° の領域であり、これ以後の領域では姿勢の変化に対する角速度の変化は初期角度の影響を受けない。

空気中での場合、図2.107からは明確に分からないが、計算によると同一姿勢にお

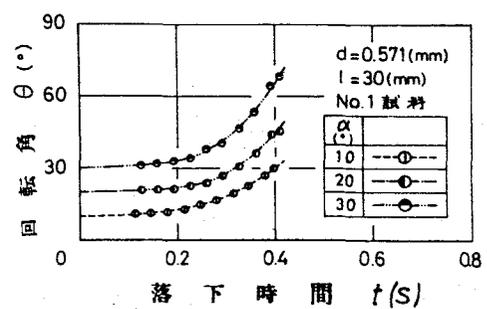


図2.107 姿勢におよぼす初期角度の影響

る角速度の値は、 α が小さいほど大きいという結果が得られており、実験でも、 $\alpha=0.915(mm)$ 、 $\ell=30(mm)$ の場合、 $\alpha=0.571(mm)$ の場合より姿勢の変化が大きいのでこの傾向がわづかではあるが見られる。

また、水中では、図2.82から $\alpha=0.571(mm)$ 、 $\ell=30(mm)$ 、 $\alpha=1^\circ$ の場合、角速度 γ は $\theta=30^\circ$ 程度で最大、約 $0.57(rad/s)$ 、になっており、上述の結果から $\alpha=30^\circ$ で実験をおこなった場合、 $\theta=32^\circ$ 程度で γ は最大となり、それ以後の領域では $\alpha=1^\circ$ の曲線と一致すると考えられる。ところが、空気中での場合、 $\alpha=30^\circ$ の曲線を見れば分かるように、 θ が 70° 近くになっても角速度は加速され続けており、しかも、水中での場合に比べてその値は非常に大きい。

つぎに、計算結果と比較する。 $\alpha=30^\circ$ の場合、計算結果と実験結果は良く一致しており、たとえば、 $\theta=70^\circ$ になるのに要する時間およびそのときの角速度は、計算では、 $t=0.42(s)$ 、 $\gamma=5.7(rad/s)$ 、実験では、 $t=0.42(s)$ 、 $\gamma=5.2(rad/s)$ である。落下開始後の急激な加速領域で、実験結果と計算結果が一致することから、高さを大きくして実験をおこなった場合、姿勢が水平方向を中心にして減衰振動し、この変動に応じて重心の速度および軌跡が減衰振動する現象が観察できると考えられる。

重心の速度の変化を図2.108、2.109に示す。空気中での場合、その比重量が小さいので、落下開始直後の領域では線状体に作用する抗力が小さく、ほとんど重力と浮力の差にもとづく外力により運動をおこなう。したがって、その方向はほとんど鉛直方向であるので、鉛直方向には急激に加速されるが、水平方向の加速は小さい。そして、角速度が急激に増大し始めてから水平方向加速度は増大する。同一落下時間における角速度は、初期角度が大きいほど大きいこと、および落下開始時からその運動方向はわづかではあるが初期角度が大きいほど鉛直方向に

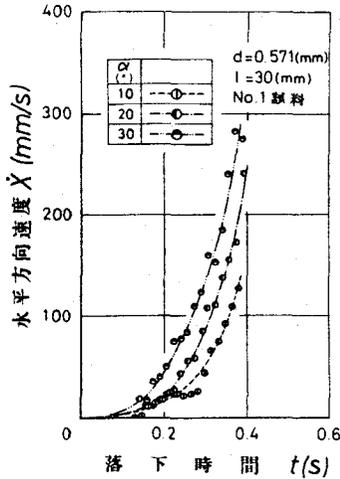


図2.108 水平方向速度におよぼす初期角度の影響

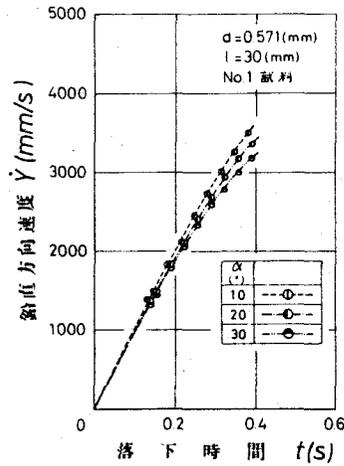


図2.109 鉛直方向速度におよぼす初期角度の影響

対して傾いていることから、 X は短時間のうちに増大し始め、同一落下時間における値は、初期角度が大きいほど大きい。いっぽう、初期角度が大きいほどその姿勢は水平方向に近いため、鉛直方向に作用する抗力が大きく Y は小さくなる。しかし、その抗力は小さいので初期角度による差はわずかであり、水平な姿勢に近づくにつれて除々にその差が明確に現われる。以上の結果は計算結果と一致する。

なお、計算によると、線状体は水平な姿勢になる直前まで水平方向に加速され、初期角度が大きいほど水平な姿勢になるのに要する時間が短いため、 X の最大値は小さいという結果が得られているが、実験では、 $\alpha=30^\circ$ の場合でも線状体は $\theta=70^\circ$ 程度で底面に到達するので、加速され続けており、この初期角度の影響を確かめることはできない。また、 $\alpha=30^\circ$ の場合、計算によると $\theta=81^\circ$ 程度まで鉛直方向に加速されており、実験では、底面に到達するまで線状体は鉛直方向にも加速され続けていることから、この計算結果は妥当であると考えられる。

また、水中での場合、落下開始直後の急激な加速領域を除き、

姿勢の変化に対する重心の速度の変化は、初期角度の影響を受けない。これに対し、空気中での場合、線状体に作用する抗力が小さいため、 \dot{X} 、 \dot{Y} は水中での場合に比べて水平に近い姿勢になるまで加速されるので、実験の範囲内ではつねに初期角度の影響が現われており、同一姿勢における \dot{X} 、 \dot{Y} の値は初期角度が小さいほど大きい。これは計算結果と一致する。

したがって、姿勢の変化および重心速度の変化におよぼす初期角度の影響を考慮すると、軌跡を X 、 Y 軸に沿って θ が等しくなる位置まで平行移動しても、水中での場合と異なり、初期角度にかかわらず軌跡が一致するということはない。なお、 \dot{X} 、 \dot{Y} は水中での場合に比べて非常に大きくなる事が分かる。

2.15.2 線状体直径の影響

姿勢の変化および重心速度の変化におよぼす直径の影響を図2.110～2.112に示す。

軸に直角な方向の速度 u および軸方向の速度 v にもとづく線状体を水平方向に回転させるモーメントと慣性モーメントの比 $(A-B)u^2/R$ は、直径が大きいほど大きい。いっぽう、軸に直角な方向に作用する抗力にもとづく回転を押える向きに働く回転モーメントと慣性モーメントの比 N/R は、直径が大きいほど小さい。したがって、同一落下時間における角速度は、直径が大きいほど大きく、線状体が回転するために要する時間は短い。角速度の値は空気中の方がはるかに大きいけれども、この結果は水中での結果と一致する。

また、同一落下時間における u 、 v の値は、直径が大きいほど大きい、大きくなる割

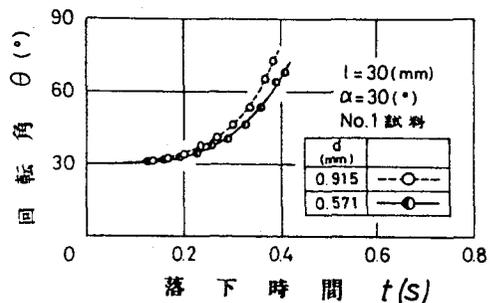


図2.110 姿勢におよぼす直径の影響

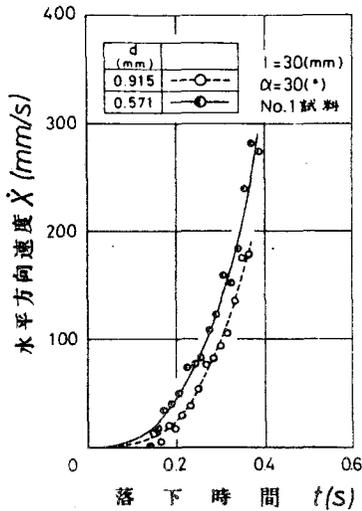


図2.111 水平方向速度におよぼす直径の影響

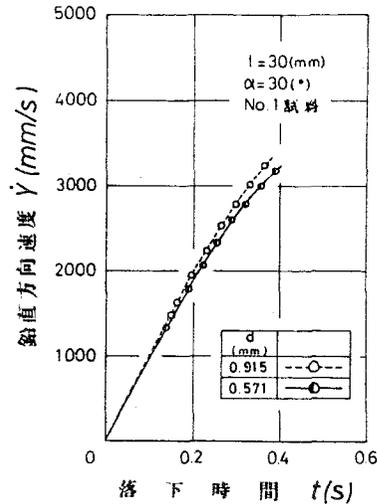


図2.112 鉛直方向速度におよぼす直径の影響

合は ω の方が大きいいため、 \dot{X} は直径が小さいほど大きく、 \dot{Y} は直径が大きいほど大きくなることが分かる。しかし、図2.112を見れば分かるように \dot{Y} の差はわずかである。

水中での場合、姿勢の変化に対する重心速度の変化および姿勢の変化を表わす図2.89~2.91から、 \dot{X} 、 \dot{Y} が減少し始めてしばらくすると直径が小さいほど同一落下時間におけるこれらの値が大きくなる領域が存在するが、これまでの領域では直径が大きいほど \dot{X} 、 \dot{Y} の値は大きい。したがって、 \dot{Y} に関しては空気中での結果と水中での結果は一致するが、 \dot{X} に関しては逆になる。これは、空気中での場合、その比重量が小さいため線状体に作用する抗力が小さいことが原因で、軸に直角な方向にも軸方向と同程度加速されるからである。

以上述べた実験により得られた落下開始後の急激な加速領域における姿勢の変化および重心速度の変化におよぼす直径の影響は、計算結果と一致する。また、実験では、線状体が底面に到達するときの θ の値は約73°であり、角速度および重心速度は加速されている。計算では、 $d=0.915$ (mm)、 $l=30$ (mm)、

$\alpha=10^\circ$ の場合でも、 γ および $\dot{\gamma}$ は、 $\theta=77^\circ$ 程度まで加速されており、しかも、 α が大きいほどより水平に近い姿勢になるまで加速されること、および $\dot{\gamma}$ は水平な姿勢になる直前まで加速されることから、本実験程度の高さのもとでは、加速状態のまま線状体が底面に到達することが分かる。

2.15.3 線状体長さの影響

姿勢の変化および重心速度の変化におよぼす長さの影響を図2.113~2.115に示す。

軸に直角な方向の速度 u および軸方向の速度 v にもとづく線状体を水平方向に回転させるモーメントと慣性モーメントの比 $(A-B)uv/R$ は、長さが大きいほど小さい。いっぽう、軸に直角な方向に作用する抗力にもとづく回転を押える向きに働く回転モーメントと慣性モーメントの比 M/R は、長さが大きいほど大きい。したがって、同一落下時間における角速度は長さが大きいほど小さく、線状体が回転するために要する時間は長い。この結果は水中での結果と一致する。

また、落下開始直後の領域では、線状体に作用する抗力は小さく、ほとんど重力と浮力の差にもとづく外力により運動をおこなない、長さが大きい方が姿勢がより鉛直に近いので、同一落下時間における u の値は小さく、 v の値は大きい。しかし、 θ の値は長さが小さい方が大きいので、同一落下時間における $\dot{\gamma}$ の値は長さが小さい方が大きく、 $\dot{\gamma}$ の値は小さくなることが分かる。しかし、図2.115を見れば分かるように $\dot{\gamma}$ の差はあつかである。

水中での場合、姿勢の変化に対する重心速度の変化を表

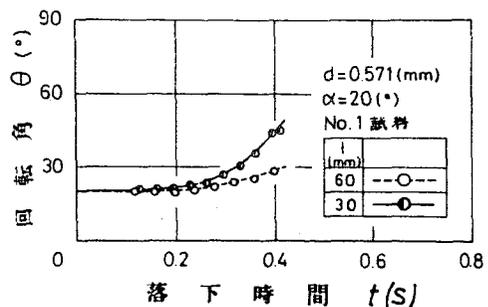


図2.113 姿勢におよぼす長さの影響

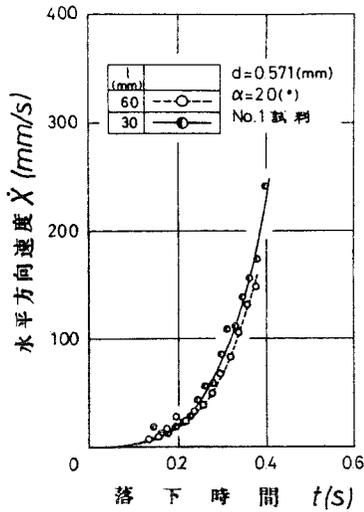


図2.114 水平方向速度におよぼす長さの影響

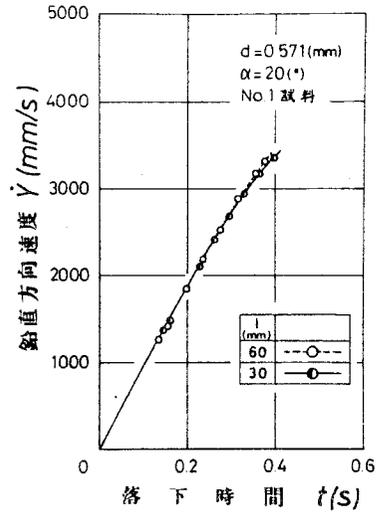


図2.115 鉛直方向速度におよぼす長さの影響

わす図2.77, 2.78 および姿勢の変化を表わす図2.81から, \dot{X} に関しては落下開始後しばらくの間, 同一落下時間における値は, 長さが小さいほど大きく, 逆に \dot{Y} はつねに長さが大きいほど大きいことが分かり, 空気中での結果と一致する。

また, 計算結果および水中での実験結果によると, 落下開始後しばらくの間, \dot{X} は長さが小さい方が大きいが, やがて逆の状態になり, \dot{X} の最大値は長さが大きい方が大きくなる。ところが, 空気中での実験では, $l = 30$ (mm) の場合でも, 線状体が底面に到達するときの姿勢は $\theta = 45^\circ$ 程度であり, \dot{X} は水平な姿勢になる直前まで加速されるので, まだ加速状態にあり, この長さの影響を確かめることはできない。しかし, 長さが大きい方が姿勢の変化が小さく, 長い時間におわたって水平方向に加速されることから, \dot{X} の最大値は長さが大きい方が大きくなると考えられる。

2.16 結 言

本章では、直線の線状体が単一で静止流体中を自由落下する場合について理論解析をおこなった。そして、水中および空気中での場合に対して数値計算と実験をおこない、その比較からこの現象の根底となる事項をは握した。また、同時に水中での場合、線状体の比重量、長さ、直径、初期角度および水温などの要因が落下特性におよぼす影響を調べた。さらに、水中での結果と空気中での結果を比較して、主に流体の比重量の違いにより落下特性がどのように変化するかを調べた。

得られた結果を要約すると、つぎの通りである。

- (1) 水中での場合、線状体は、ほとんど鉛直方向に運動し始めるが、姿勢が徐々に水平方向に回転するにつれて、水平方向にも運動し始める。そして、重心の軌跡は、 $\theta = 60^\circ \sim 65^\circ$ で変曲点をもつ曲線になり、最終的に、姿勢は水平方向に漸近し、しかも、線状体は水平方向にはほとんど移動しなくなり、鉛直方向に一定速度で落下する。
- (2) 線状体は、 $\theta = 40^\circ \sim 50^\circ$ まで水平方向に加速され、その後減速される。いっぽう、落下開始直後急激に鉛直方向に加速されるが、その後 θ の増加に伴ない単調に減速され、水平な姿勢に近づくにつれて \dot{X} は0に近づき、 \dot{Y} は一定となる。
- (3) 角速度は、 $\theta = 10^\circ \sim 20^\circ$ まで加速されるが、その後減速され、最終的に、線状体の姿勢は水平方向に漸近する。
- (4) 線状体の比重量、長さ、直径および流体の温度は、軌跡の形に影響を与える。また、軌跡をX軸、Y軸において同じ姿勢になる位置まで平行移動すると、落下開始直後の急激な加

速領域を除き初期角度にかかわらず落下軌跡は一致する。したがって、姿勢が同じであれば初期角度に関係なくその運動状態は同一になる。

(5) 重心の速度におよぼす長さの影響は、 $\theta < 65^\circ$ 程度の領域で現われ、 \dot{x} 、 \dot{y} ともに長さが大きいほど大きい。また、比重量、直径および流体の温度の影響は、 θ の全領域で現われ、これらの値が大きいほど \dot{x} 、 \dot{y} は大きくなる。

(6) 長さが小さいほど、また、比重量、直径および流体の温度が大きいほど角速度は大きく、線状体が回転するのに要する時間は短い。

(7) 最終落下位置での線状体の配向におよぼす長さの影響はほとんど見られず、初期角度が大きいほど配向度は良い。また、直線の線状体は静止流体中では一平面内で運動すると考えてよい。

(8) 計算で得られた落下特性の傾向および諸要因の影響は、実験結果とかなり一致した。

(9) 線状体が空気中で運動する場合、姿勢が水平方向を中心に減衰振動するので、水平方向の運動の向きが変わり、 \dot{x} は0を中心に減衰振動する。いっぽう、 \dot{y} も変動しながら一定値に漸近する。したがって、重心の軌跡が減衰振動する現象が生ずる。

また、初期角度は、姿勢および重心の速度の変動周期には影響をおよぼさず、振幅に影響を与え、長さおよび直径は、周期と振幅の両方に影響をおよぼす。

(10) 重心の軌跡，速度および姿勢が変動する現象を観察することはできなかったが，実験から得られた落下開始後の急激な加速領域における運動状態と計算結果を比較検討することにより，落下特性が変動する可能性があることを推察することができた。なお，空気中での場合，その比重量が小さいため，線状体に作用する抗力が小さいことが原因となってこの現象が生じたと考えられる。

第3章 静止流体中における線状体群の運動

3.1 緒言

流体中での繊維の運動は、繊維工業の各種工程で重要な基本現象の一つである。実際の繊維の多くは曲がった形態をもち、断面形状は円形とは限らず、長さとおさの比は数百以上と非常に大きく、また、長さ、おさ、形態などにかかなりの差異があり、さらに、繊維を取扱う各種工程での運動も単一ではなく集団として相互に干渉し合いながら運動する。このため、その運動は複雑であり、繊維の基本的挙動はほとんど解明されていない。

いっぽう、この現象に関する基礎的研究としては、静止空気中での単繊維の落下時間および落下速度に関する宇野^{1),2)}の研究、オープンエンド精紡機の繊維供給管内を飛動している繊維束の大きさおよび繊維の流動形状を調べた福田³⁾の研究、さらに、タンクと矩形管路からなる装置を用いてタンク内および管路内での繊維群の配向を調べた美馬⁴⁾の研究などがあるが、それらはいづれも繊維が姿勢、速度などを変化させながら運動した結果として落下速度、流動形状あるいは配向がどうなったかを論じたものであり、繊維の運動そのものに着目した研究ではない。

第2章では、この複雑な運動を解析する前に、もっとも簡単なモデルとして直線の線状体が単一で静止流体中を自由落下する場合を考え、これについて理論解析と実験をおこない、線状体の落下特性および諸要因の影響を明らかにした。

本章では、第2章のモデルより実際の現象に近いモデルとして直線の線状体が複数あるいは集団で静止流体中を自由落下する場合を考え、線状体が相互に干渉し合いながら運動するときの落下特性および諸要因の影響を実験により調べ、単一で運動する場合と比較して、線状体同志の相互干渉が姿勢の変化お

よび運動状態にどのような影響をおよぼすかなど，この現象の基本的事項を明らかにする。なお，線状体の運動の観察は水中の方が容易であることから，実験は水中でおこなうことにした。

3.2 静止流体中における線状体回りの流れ

線状体が複数あるいは集団で静止流体中を自由落下する場合，前方の線状体の運動に伴って発生する流れの影響を受けて，後方の線状体は単一の場合とは異なった運動をおこなう。すなわち，複数あるいは集団で運動する場合，線状体同志が相互に干渉し合いながら運動することが特徴である。そこで，線状体の落下実験をおこなう前に，線状体が単一で運動するときの線状体回りの流れ模様を調べる必要がある。

3.2.1 実験装置および方法

線状体回りの流れを調べるために，流れの可視化をおこなった。白色水彩絵具をPVAで溶かし線状体の表面に薄く塗布し乾燥させた後，線状体を水中で落下させると，絵具が徐々に溶解して線状体を離れ，線状体回りの流れを鮮やかに可視化することができる。そして，その状態を撮影することにより線状体回りの流れを調べた。

実験装置の概要を図3.1に示す。撮影は水槽⑦の正面および側面の直角2方向からNO.1カメラ⑤，NO.2カメラ⑥によりおこなった。水槽は第2章の線状体の落下実験に用いたものと

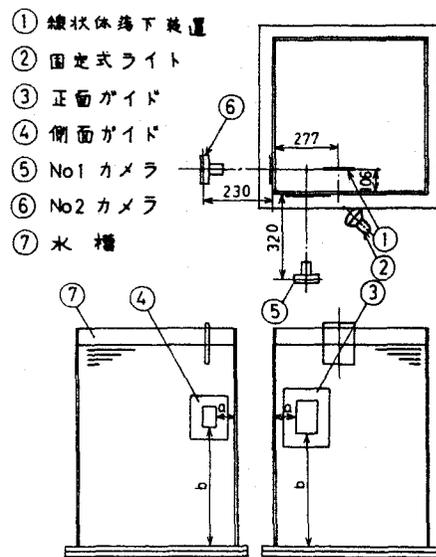


図3.1 実験装置概要

同じで、撮影をおこなう2面は透明アクリル板で製作しており、背景となる2面にはつや消し黒色塗装がしてある。また、撮影位置を明示するため、透明アクリル板上にガイド③、④を取付け、このガイドに合わせてカメラを移動させた。なお、カメラには小槽まで達するカバーを取付けて照明の光が直接カメラに入らないようにした。

本実験に用いた線状体落下装置は、単数の線状体の落下実験に用いた装置を少し改良したもので、線状体全体を設定面⑤上に接触させる型式ではなく、設定面上に先端のとがった突起物を2個取付け、この突起物とピンセット④で線状体を軽く保持する型式にした。これは、線状体全体を設定面に接触させると線状体に塗布したPVAが水中で溶解して、線状体が設定面から離れにくくなるからである。なお、初期角度 α の設定は円グラフ③によりおこなない、白色水彩絵具が溶け始めてからピンセットを押上げて線状体を落下させた。(図2.68参照)

つぎに、試料条件および実験条件について説明する。その軸が流れに対して直角に置かれている円柱回りの流れは、直径 d を代表長さ、流速 U を代表速度とするレイノルズ数 $Re = U \cdot d / \nu$ に応じて変化¹⁹⁾する。その変化の様子を図3.2に示す。(1)は Re が非常に小さい場合を表わす。このとき流線の形は流れの方向に対して対称であるばかりでなく、前後方向にも対称である。 Re

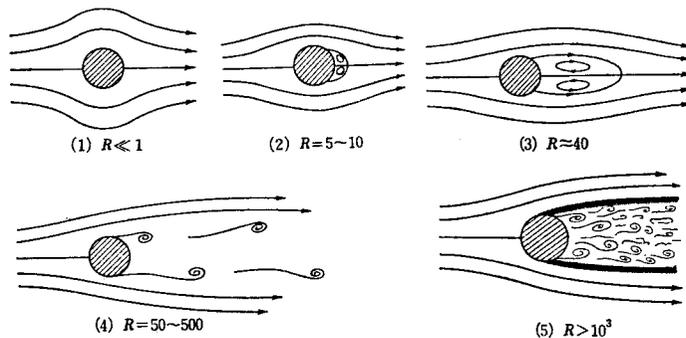


図3.2 円柱回りの流れ状態の変化

を上げていくと、この前後の対称性がしだいに破れ、 Re が5程度になると、円柱の下流側に閉じた流線の領域、いわば“渦の目玉”ができる。この状態が(2)である。 Re を増加すると、渦の目玉の領域はしだいに長さを増し、 $Re \approx 40$ で長さは円柱の半径の数倍程度になる。 Re が40程度を越えると、渦の目玉は上下方向に振動し始め、上下対称性が破れる。さらに、成長した目玉は主流に乗って流されていく。このように円柱の背後の上側と下側から交互に生み出された渦の目玉は、規則正しく並んで2列の渦列(カルマンの渦列)を構成する。カルマンの渦列は(4)に示すように、 $Re = 50 \sim 500$ 程度の流れで見られる。さらに、 Re が 10^3 程度になると円柱背後の領域では乱流状態が現われる。

したがって、線状体の場合にも静止流体中で運動するときその回りの流れ状態は、直径を代表長さ、軸に直角な方向の重心速度 u を代表速度とする $Ren = u \cdot d / \nu$ に応じて大きく変化すると考えられる。そこで、第2章の単数の線状体の落下実験結果を基にして、 Ren が50を越える場合と越えない場合、すなわちカルマン渦が発生する場合と発生しない場合の試料条件を予測し、前者を代表する試料として $d = 0.915$ (mm)のNO.1試料(鉛筆の芯)、後者を代表する試料として $d = 0.571$ (mm)のNO.1試料を選んだ。また、両者の中間程度の Ren を有する試料として $d = 0.310$ (mm)のNO.2試料(ピア線)を用いることにした。なお、長さはすべて $l = 30, 60$ (mm)とした。

また、単数の線状体の落下実験から、重心の速度の水平方向および鉛直方向成分 u, Y は、落下直後の急激な加速領域を除き、初期角度 α には無関係に線状体の姿勢 θ によって決まることおよび線状体の移動距離と姿勢は α に依存することが分かっていく(2.5節, 2.12節参照)ので、初期角度と撮影位置を適当に組合わせて、 $\theta \leq 90^\circ$ の範囲で7種類程度の姿勢にお

ける線状体回りの流れを撮影した。以上のようにして、運動に伴って変化する線状体回りの流れを3次元的に調べることができた。

3.2.2 線状体回りの流れ特性

2.7節および2.14節から、水温が変わると比重量、動粘性係数が変化するため、線状体の運動に影響をおよぼすことが分かっている。

線状体回りの流れ状態を撮影した際の水温は16(°C)であり、流れを評価する際の代表値としてレイノルズ数

$$Re_n = |u| \cdot d / \nu, \quad Re_c = |v| \cdot l / \nu \quad (3.1)$$

を用いるが、そのためには線状体重心の軸に直角な方向の速度 u 、軸方向速度 v を知る必要がある。 u 、 v は流れの可視化の実験から求めることはできないが、回転角 θ は求められる。 θ が既知であれば、線状体の落下実験から θ と \dot{X} の関係および θ と \dot{Y} の関係が分かり、次式より u 、 v が求められる。

$$\left. \begin{aligned} u &= \dot{X} \cos \theta - \dot{Y} \sin \theta \\ v &= -\dot{X} \sin \theta - \dot{Y} \cos \theta \end{aligned} \right\} \quad (3.2)$$

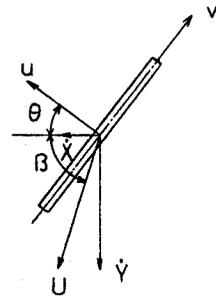


図3.3 重心の速度

ただし、 u 、 v 、 \dot{X} 、 \dot{Y} とともに図3.3の向きを正とする。

ところが、線状体の落下実験の際の水温は $T_w = 12.4, 29.9$ (°C) であり、重心の速度は水温の影響を受けるため、これらの結果を直接使用することはできない。そこで2.7節の数値計算結果と2つの実験結果から流れの可視化の実験における重心の速度を推定する。数値計算結果と実験結

果は完全に一致しないので推定はつぎのようにしておこなった。数値計算は、 $T_w = 10, 15, 20, 30$ ($^{\circ}\text{C}$) についておこなっているため、落下実験時の水温 $T_w = 12.4, 29.9$ ($^{\circ}\text{C}$) および可視化実験時の水温 $T_w = 16$ ($^{\circ}\text{C}$) に対する数値計算値を比例配分により求め、それぞれ $\dot{X}_{N1}, \dot{X}_{N2}, \dot{X}_N$ とする。いっぽう、落下実験から得られた $T_w = 12.4, 29.9$ ($^{\circ}\text{C}$) に対する水平方向速度を $\dot{X}_{E1}, \dot{X}_{E2}$ とし、 $T_w = 16$ ($^{\circ}\text{C}$) に対する推定値 \dot{X}_p は

$$\dot{X}_p = (\dot{X}_{E2} - \dot{X}_{E1})(\dot{X}_N - \dot{X}_{N1}) / (\dot{X}_{N2} - \dot{X}_{N1}) + \dot{X}_{E1} \quad (3.3)$$

から求めた。

なお、 \dot{Y}_p も同様の方法で求めた。また、 \dot{X}_p および \dot{Y}_p から重心の運動方向 β (図3.3参照) を計算した。

以下では、線状体回りの流れ特性および姿勢、直径、比重量が流れ特性におよぼす影響について述べる。

図3.4に撮影された線状体回りの流れ状態の1例を示す。これは、 $d = 0.915$ (mm), $l = 60$ (mm) の NO.1 試料の場合であり、 $\theta = 30^{\circ}$, $\beta = 71.7^{\circ}$, $Re_n = 41.8$, $Re_t = 1.35 \times 10^4$ である。また、

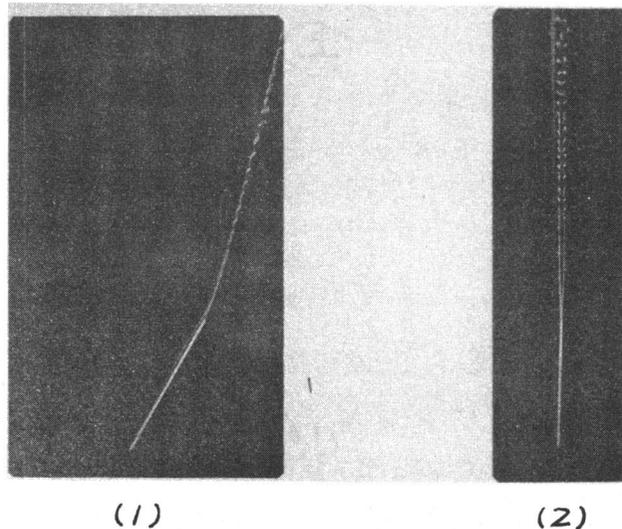


図3.4 線状体回りの流れ状態

(1)が正面から撮影された写真(No.1カメラ), (2)が側面から撮影された写真(No.2カメラ)である。線状体は軸方向とある角度をなして運動するために, 線状体の近傍には軸対称な境界層が発生するのではなく, 線状体が軸方向に運動する場合に発生する軸対称な境界層と軸に直角な方向に運動する際, 背後に生ずる伴流が重なり合った状態の流れが発生している。すでに述べたように, 伴流の状態は Re_n の大きさによっては線状体の後方にカルマン渦が発生する場合もある。また, 線状体の両端面は軸に直角であるから, とがった後縁が存在し, 翼両端から発生するような一對の自由渦が後端部の両側から後方に流れることが分かる。この自由渦は後端のとがった円周部から多数生ずるが, これらの渦は不安定なため, さうに後方ではしだいに巻込まれて一對の自由渦になる。この現象は, 図3.4(2)において, 線状体の後方に遠ざかるに従い渦が大きくなり, その状態がより明確になることから分かる。また, この渦の向きは, 線状体回りの流れの模式図, 図3.5に示すように, 渦列の外側から内側しかも上方から下方である。さらに, この自由渦の幅りは, 線状体の後端部の直後でいったん減少し, その後徐々に広がって後方ではほぼ一定になる。なお, 自由渦が左右対称になっていることから, 線状体はその軸の回りで回転しないことが分かる。

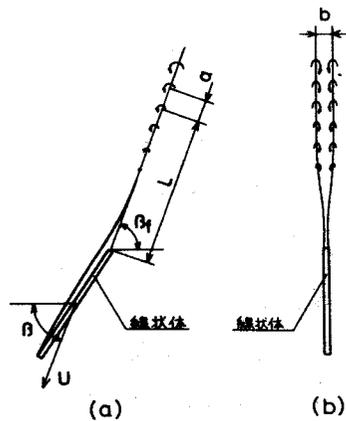


図3.5 線状体回りの流れの模式図

ここで, 線状体の後方に流れる自由渦の方向, 図3.5の ψ , を写真から測定した結果を図3.6に示す。この図は, 線状体重心の運動方向 β と自由渦の方向 ψ を比較したもので, 両者は長く一致することが分かる。また, 自由渦に引きずられるように, 後

端部付近の境界層厚さが少し大きくなるという現象も現われている。

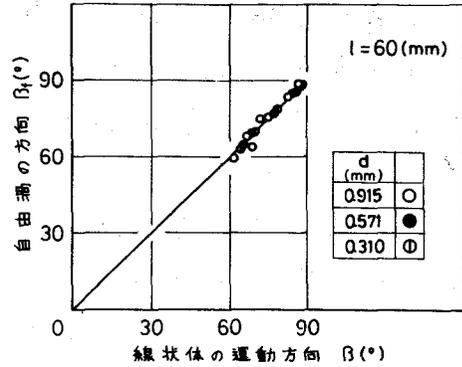


図3.6 自由渦の方向

3.2.3 姿勢の変化に対する流れ状態の変化

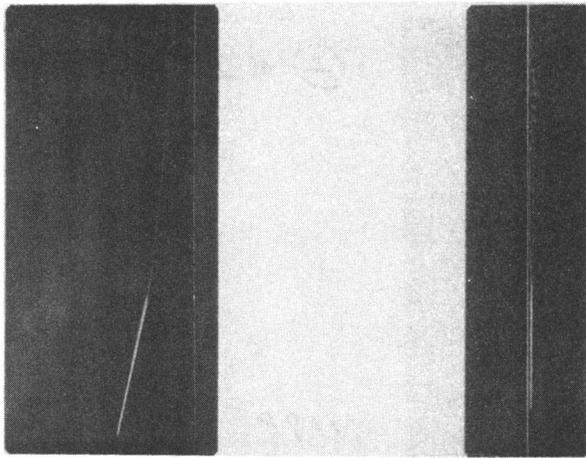
線状体の運動に伴って、姿勢および重心の速度が変化するため、線状体回りの流れ状態も変わる。ここでは、もっとも顕著に流れ状態の変化が現われた $d=0.915$ (mm), $l=60$ (mm) の No.1 試料の場合を例にとって、姿勢が変化することによって流れ状態がどのように変わるかを調べる。

図3.7(a)~(h)に各姿勢における流れ状態を示す。また、そのときの運動状態、すなわち姿勢 θ 、速度 u 、 v 、レイノルズ数 Ren 、 Ret 、運動方向 β を表3.1に示す。

(a)のように θ が小さい場合、 Ren は小さく、線状体の背後に生ずる渦の目玉(双子渦)の領域の長さは小さい、しかも Ret が大きいいため軸方向の境界層厚さは薄く、したがって、この両者が重なった線状体の背後の流れの領域は非常に小さなものとなる。また、後端部から後方に

表3.1 線状体の運動状態

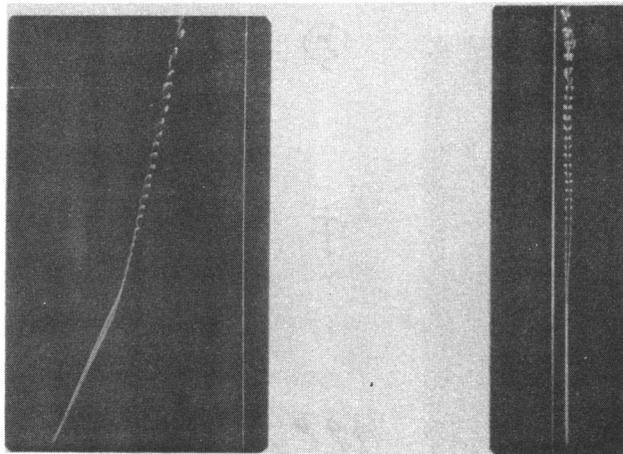
d (mm)	No. 回番号	θ (°)	u (mm/s)	v (mm/s)	Ren	Ret	β (°)
0.915	a	12.9	32.1	334.8	27.0	1.87×10^4	82.6
	b	24.5	43.1	262.3	36.5	1.48	74.8
	c	30.0	49.6	240.1	41.8	1.35	71.7
	d	36.6	56.2	214.0	47.6	1.21	68.1
	e	39.8	58.9	201.5	49.6	1.13	66.5
	f	68.7	75.7	89.7	63.6	0.50	61.5
	g	78.5	79.5	51.1	66.8	0.29	68.8
	h	88.6	80.4	6.8	67.8	0.04	86.6
0.571	a	9.2	21.4	244.8	11.2	1.33	85.8
	b	24.2	35.2	175.8	18.0	0.93	77.1
	c	40.4	45.5	132.0	23.1	0.70	68.6
	d	88.7	63.3	3.5	32.3	0.02	88.1
0.310	a	55.3	126.6	226.5	34.7	1.12	63.9
	b	88.8	146.4	8.6	39.8	0.04	87.8



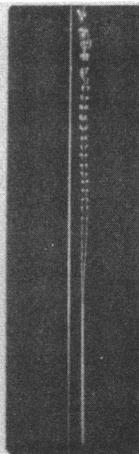
(a₁)



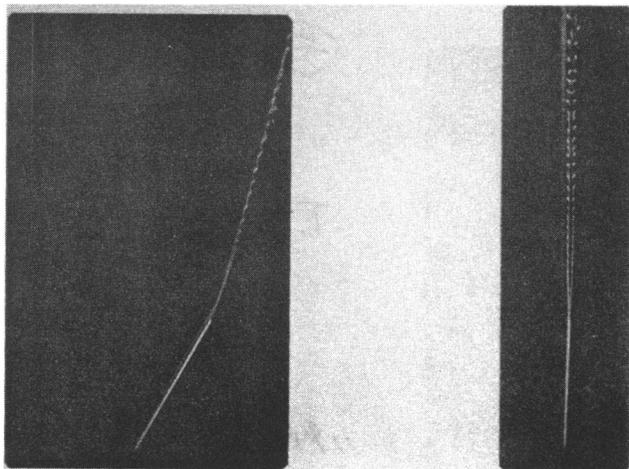
(a₂)



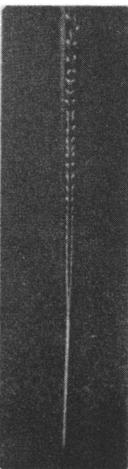
(b₁)



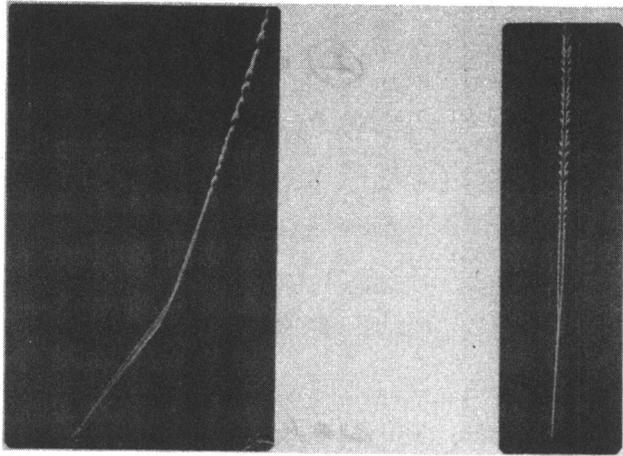
(b₂)



(c₁)

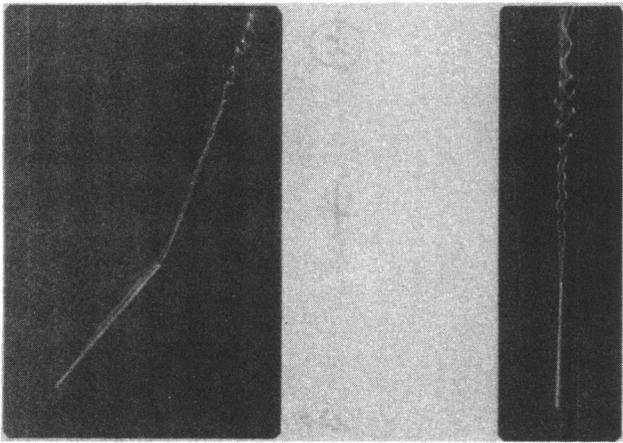


(c₂)



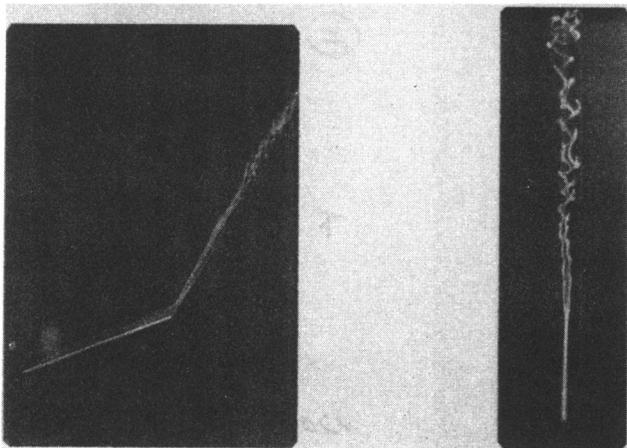
(d₁)

(d₂)



(e₁)

(e₂)



(f₁)

(f₂)

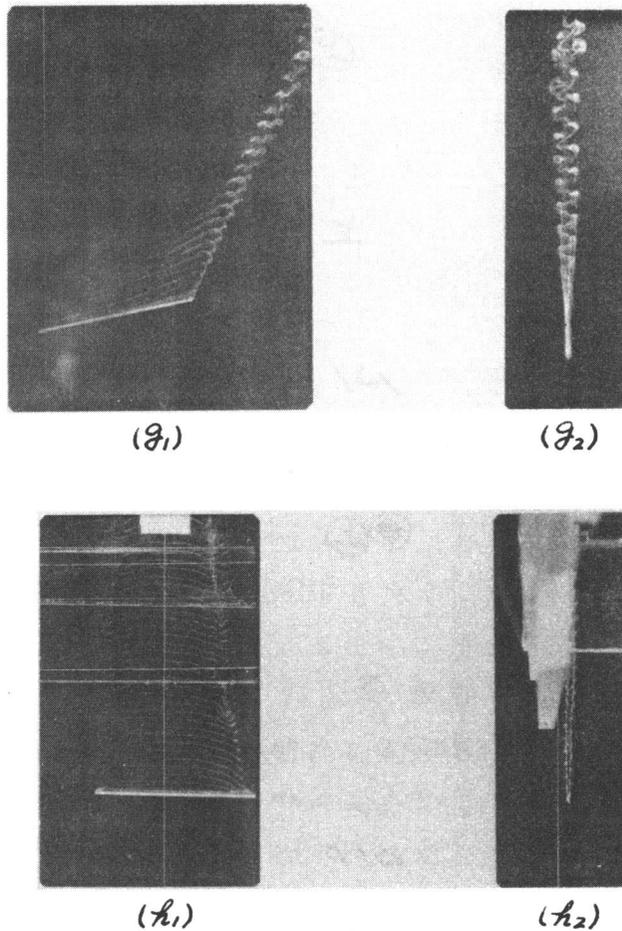


図 3.7 線状体回りの流れ状態の変化

流れる自由渦の大きさも小さい。ところが、(b)~(d)のようにしだいに θ が増加すると、 Re_n は増し Re_t は減少するため、双子渦の領域は大きくなり、軸方向の境界層厚さも増すので、線状体背後の流れの領域は除々に大きくなる。また、自由渦の大きさおよび渦の幅 b は、 θ が増すにつれて大きくなる傾向にあり、(b)の場合、約 2.6 (mm)、(d)の場合、約 4.4 (mm)となる。さらに、 θ が増加し、 Re_n が 50 程度になると (e) のように、(a)~(d)では見られなかった流れが発生する。すなわち、線状体の背後にはカルマン渦が構成され、この渦列は、線状体がまだかな

りの速度で軸方向にも運動しているため軸方向に流され、やがて線状体の後端部から後方に流される自由渦と重なり合って後方に流される。このため、今まで見られたような左右対称に並んだ自由渦は見られなくなり、左右に交互に並んだカルマン渦の目玉を右、左、右、左というふうに渡っていく。また、(f)、(g)のように姿勢がさらに水平方向に近づくとき、線状体の軸方向速度は低下し、軸に直角な方向の速度は増大するため、カルマン渦は線状体の軸に直角な方向にも流されるようになり、線状体の背後の領域にはカルマン渦の中心が階段状の縞模様になって現われる。なお、(e)~(g)を比較すれば分かるように、姿勢が水平方向に近づくにつれて、 Re_n が増大するためカルマン渦は線状体により近い領域でしかも明確に現われる。最後に、線状体の姿勢がほとんど水平になると、(h)に見られるようにカルマン渦の中心はほぼ等間隔の縞模様を形成し、渦列の幅もほぼ一定となる。また、線状体は有限長であるので端面の影響が現われ、両端部付近には線状体の中央部に回り込む流れが発生し、この流れにカルマン渦が引き込まれている状態が見られる。

つぎに、図3.5(a)に示すように、線状体の後端部から後方に流れる自由渦あるいはカルマン渦の方向に沿って測った距離を

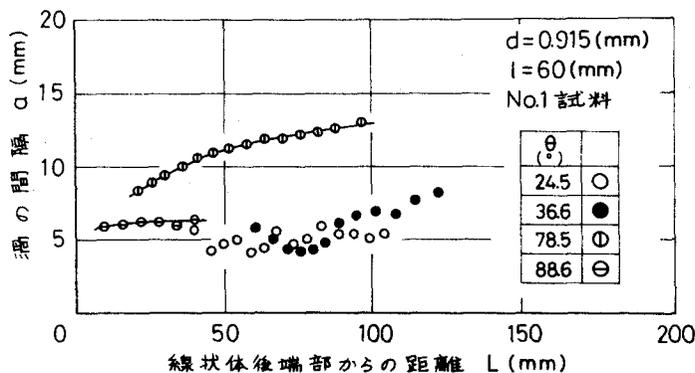


図3.8 渦の間隔の変化

を L ，渦の間隔を α ，
 2らに(b)に示すように
 ，自由渦の場合には向
 い合う渦の中心間距離
 ，カルマン渦の場合に
 は交互に並んだ2列の
 渦の中心間距離を渦の
 幅 b とし，渦の間隔お
 よび幅が線状体の姿勢
 あるいは L によって
 どのように変化するか

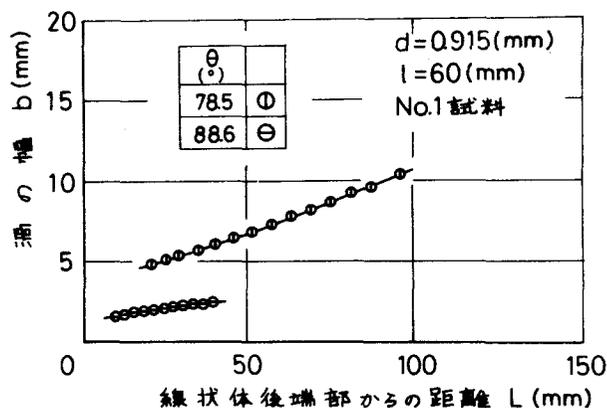


図3.9 渦の幅の変化

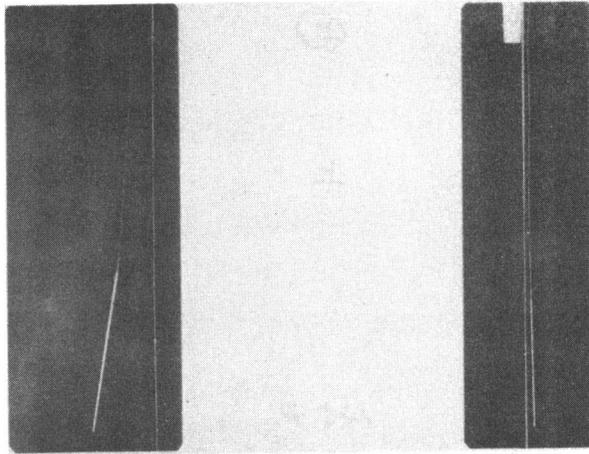
を調べる。図3.8に θ をパラメータとした L と渦の間隔 α の関
 係および図3.9に L と渦の幅 b の関係を示す。線状体が軸方向
 にも運動している場合($\theta \leq 78.5^\circ$ の場合)，自由渦，カルマ
 ン渦にかかわらず L が増加するにつれて，渦の間隔は増大傾向
 にあることが分かる。ところが，姿勢がほとんど水平になり，
 線状体がほとんど軸方向に運動しなくなると，渦の間隔はほぼ
 一定となる。また，カルマン渦の方が間隔は広くなることが分
 かる。いっぽう，渦の幅は，自由渦の場合すでに述べたように
 ， L が大きくなるとほぼ一定となり， $\theta = 24.5^\circ$ の場合，約2.6
 (mm)， $\theta = 36.6^\circ$ の場合，約4.4 (mm) となり， θ が増加する
 につれて大きくなる傾向にある。また，カルマン渦の場合，図
 3.9から，渦の幅は L の増加に伴ない増大することが分かる。
 この傾向は $\theta = 78.5^\circ$ の場合に顕著に現われ， $L = 20 \sim 100$ (m
 m)の範囲で b は5 (mm)程度から11 (mm)程度までほぼ直線
 的に増大し， $\theta = 88.6^\circ$ の場合，線状体に近い領域では b はわ
 づかに増大する傾向が見られるが，線状体から遠ざかるにつれ
 て b はほぼ一定となる。

以上のように，姿勢の変化に伴って運動状態が変わるため
 ，線状体回りの流れ状態も変化し， Re_n が50程度を越えると

カルマン渦が発生し流れ状態が大きく変わることが分かった。また、この Ren の値は円柱を流れに直角に置いた場合にカルマン渦が発生するレイノルズ数と一致することが確認できた。さらに、後端部から後方に流れる自由渦の幅は高々5(mm)程度であり、カルマン渦の幅は姿勢によっては10(mm)程度になることも分かった。

3.2.4 線状体直径の影響

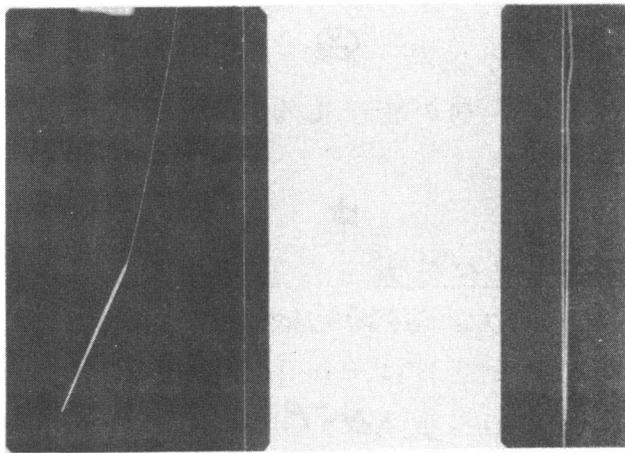
$d=0.571$ (mm)のNO.1試料の各姿勢における線状体回りの流れ状態を図3.10(a)~(d)に示す。また、そのときの運動状態は表3.1に示してある。(a)~(d)のどの姿勢においても $d=0.915$ (mm)の場合見られたカルマン渦の発生は見られない。これは、第2章で述べたように、重心の速度成分 \dot{X} 、 \dot{Y} は θ の全領域で直径が小さいほど小さくなり(2.4節, 2.11節参照)、したがって Ren が小さく、表3.1において姿勢がほとんど水平の場合でも約32であることから、カルマン渦が発生する Ren の範囲まで到達していないためである。また、 $d=0.571$ (mm)の場合、軸方向に沿って発達する境界層と線状体の背後に生ずる伴流とが重なり合った流れの領域も $d=0.915$ (mm)の場合に比べて小さく、線状体の後端部から発生する自由渦には、 $d=0.915$ (mm)の場合見られたような明確な渦の目玉は見られない。ただし、(a)~(c)において、 θ が小さい場合((a)の場合)、自由渦は後端部から発生するものが1列見られるだけであるが、 θ が増すにつれて((b),(c)の場合)2列、3列と増加することが分かる。(c)の場合、自由渦は3列見られるが、2列が後端部から生じそれらの間に先端部から生じた1列が位置している。また、その姿勢がほぼ水平である(d)の場合、その Ren から考えて線状体の背後には双子渦が発生しており、(d₂)から線状体の後方には渦が流されていく状態は見られない。したがって、双子渦は線状体とともに運動していることが分かる。



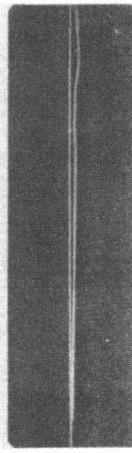
(a₁)



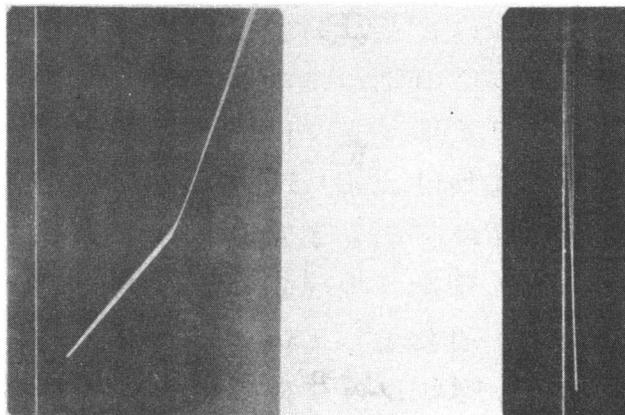
(a₂)



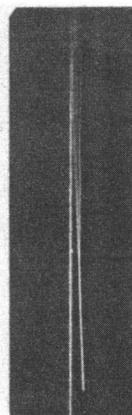
(b₁)



(b₂)



(c₁)



(c₂)

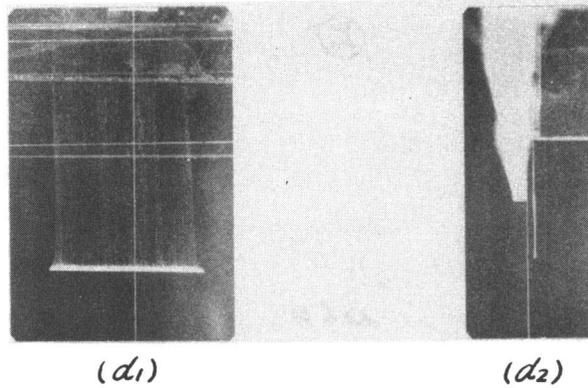


図3.10 線状体回りの流れ状態の変化

以上， $d=0.571$ (mm) の場合と $d=0.915$ (mm) の場合の比較から， $d=0.571$ (mm) の場合，姿勢の変化に対する流れ状態の変化は少なく，カルマン渦が発生しないため流れ状態は単純である。

3.2.5 線状体比重量の影響

$d=0.310$ (mm) の NO.2 試料の結果を図3.11 (a), (b) に示す。この場合，表3.1 を見れば分かるように， $d=0.571$ (mm) の NO.1 試料の場合と比べて Re_t は非常に大きい， Re_n は少し大きい程度であり，しかも Re_n はカルマン渦が発生する範囲まで達していないので，線状体回りの流れ状態は $d=0.571$ (mm) の NO.1 試料の場合とほとんど同じである。すなわち，線状体の後端部から発生する自由渦には明確な渦の目玉は見られない。しかし，自由渦は波打つように細かく変動していることが分かる。この細かい変動は $d=0.571$ (mm) の NO.1 試料の場合にはほとんど見られなかった。また， θ が増すにつれて自由渦が1列，2列，3列と増加する現象がこの場合にも見られる。(a) の場合，自由渦が3列発生している。さらに，(b) からその姿勢がほぼ水平の場合，線状体の背後に発生した双子渦は線状体から離れず，線状体とともに運動することが分かる。また，

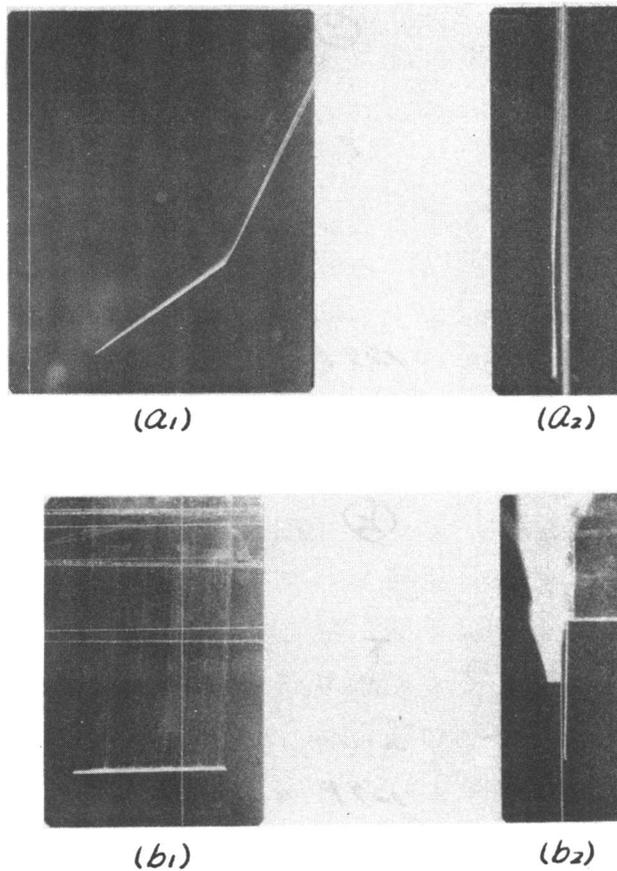


図3.11 線状体回りの流れ状態の変化

この場合にも端面の影響が現われ、両端部付近で線状体背後の流れはわずかに縮小される。

なお、線状体長さが重心の速度におよぼす影響は θ の値の小さい領域で現われる(2.3節, 2.10節参照)が、直径あるいは比重量の影響に比べて小さく、 $l=30(mm)$ の線状体回りの流れ状態は、 $l=60(mm)$ の場合とほとんど同じであることが分かった。

3.3 静止流体中における線状体群の落下実験

静止流体中を線状体が単一で運動するとき、線状体の背後に

は、軸方向に沿って発達する境界層と伴流とが重なり合った流れの領域が発生し、さらに線状体の後端部から自由渦が生ずる。また、 Re_n が50程度を越えろと伴流は双子渦からカルマン渦へと変化し、流れの状態が大きく変わる。したがって、線状体が複数あるいは集団で運動する場合、主に前方の線状体の運動に伴なって発生する自由渦およびカルマン渦の影響を受けて、後方の線状体は単一の場合とは異なった運動をおこなうと考えられる。

そこで、実験は複数(2本, 3本)の線状体を同時落下させる場合と100本程度の線状体を集団で連続的に落下させる場合についておこない、落下特性として、複数の線状体の実験では重心の軌跡、速度および姿勢、集団で落下する場合には姿勢の分布および最終落下位置での線状体の配向と落下点分布を考え、初期位置での線状体の位置関係、初期角度、直径および線状体の本数が落下特性におよぼす影響を調べた。

3.3.1 実験装置および方法

線状体回りの流れ状態を調べた結果、 $d=0.915(mm)$ のNO.1試料の場合、カルマン渦が発生し、 $d=0.571(mm)$ のNO.1試料および $d=0.310(mm)$ のNO.2試料の場合、カルマン渦の発生は見られなかった。そこで、本実験では、後方の線状体がカルマン渦の影響を受ける場合と受けない場合に大別して、前者を代表する試料として $d=0.915(mm)$ のNO.1試料、後者の代表として $d=0.571(mm)$ のNO.1試料を選び、この2種類の試料を用いた。なお、長さは $l=60$ (mm)とした。これらの試料条件を表3.2に示す。

試料は長さのばらつきを小さくする目的とその端面を軸に直角にする目的で端

表3.2 試料条件

試料番号	試料名	線状体直径 $d(mm)$	線状体長さ $l(mm)$	線状体比重 $\gamma_b(g/cm^3)$
1	鉛筆芯	0.571	60	1.702
		0.915		1.539

面を研摩布で仕上げた。また，長さ，直径，比重量はランダムに抽出した10本の試料に対して測定をし，その平均値をもってそれらの値とした。

(1) 実験条件

複数の線状体を同時落下させる場合の初期角度 α および初期位置での2本あるいは3本の線状体の相対位置について説明する。

単数の線状体の落下実験結果から，線状体重心の水平方向速度 \dot{X} は θ が 40° から 50° の範囲内まで加速されることが分かっているため，前方の線状体の運動に伴って発生する流れの影響を受けて，後方の線状体の姿勢が水平方向に回転するとき \dot{X} が加速される場合と減速される場合を考え， $\alpha = 20^\circ, 60^\circ$ とし，さらにこれらの中間の場合として $\alpha = 40^\circ$ を選んだ。なお，2本あるいは3本の線状体は同じ初期角度に設定することにした。

また，初期位置での線状体の相対位置は，線状体の後端部から発生する自由渦の方向が重心の運動方向と一致するという結果にもとづいて，つぎに述べる方法により決定した。図3.12に示すように，自由渦の方向に沿って測った前方の線状体後端から，自由渦の方向が後方の線状体と交わる点までの距離 L_0 を基準として，後方の線状体の先端部が自由渦に長さ l_0 だけ入った場合と後端部が自由渦から長さ l_0 だけ出る場合の2種類を考え， $l_0 = 15 \text{ (mm)}$ ， $L_0 = 30, 70 \text{ (mm)}$ と $\alpha = 20^\circ, 40^\circ, 60^\circ$ に対して線状体重心の相対位置 (a, b) を計算し実験条件にした。表3.3に初期位置での2本の線状体の相対位置を示す。なお，表中の条件1は先端部が自由渦に 15 (mm) 入る場合であり，条件2が後端部が 15 (mm) 出る場合である。ま

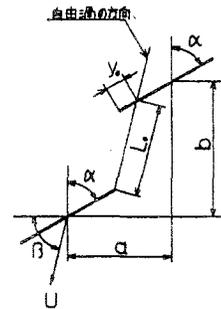


図3.12 線状体の相対位置

た、表3.3は2本の場合であるが、3本の場合には同じ相対位置でもう1本線状体を後方に設定すればよい。

2本の線状体の落下実験は、 $d=0.915$ (mm) の場合、表3.3に示したすべての実験条件についておこなない、 $d=0.571$ (mm) の場合、 $\alpha=20^\circ, 60^\circ$ の条件でおこなった。この実験

では、線状体の相対位置、初期角度 α および直径 d の影響を調べた。また、カルマン渦の影響を受けて線状体が運動する場合、直径によりその運動状態がどのように変わるかを調べるために、前方の線状体が $d=0.915$ (mm) で後方が $d=0.571$ (mm) の場合の実験を条件1の $\alpha=60^\circ, L_0=30$ (mm) でおこなった。つぎに、線状体本数の影響を調べるために、3本の場合につき $d=0.571, 0.915$ (mm) とともに $\alpha=60^\circ, L_0=30$ (mm)、条件1, 2で実験をおこなった。

また、100本程度の線状体を集団で連続的に落下させる実験では、初期角度を $\alpha=1^\circ, 20^\circ, 60^\circ$ の3種類変化させた。

(ii) 実験装置と方法

図3.13に実験装置の概要を示す。複数の線状体の落下実験では、線状体の運動を調べるため、水槽⑥の正面と側面の直角2方向からのマルチストロボ撮影によりNO.1カメラ^③とNO.2カメラ④の2枚のフィルム面上に運動状態を記録した。側面から撮影した目的は、複数の線状体がほぼ同一平面内で運動しているかどうかを確かめるためであり、あでに述べたように自由渦およびカルマン渦の幅は狭く、線状体が運動する平面が大きく離れている場合、後方の線状体は流れの影響を受けない可能性がある

表3.3 初期位置での2本の線状体の相対位置

条件	相対距離 L (mm)	30	70
	初期角度 α ($^\circ$)		
1	20	(22, 71)	(31, 110)
	40	(41, 62)	—
	60	(54, 49)	(74, 83)
2	20	(12, 44)	(20, 83)
	40	(22, 39)	—
	60	(28, 34)	(48, 68)

示したグラフが取付けられている。線状体の設定はスライド部全体を固定枠①から取出しておこなう。

まず、押え棒を持上げ、グラフにより所要の初期角度 α および初期位置に線状体を設定し、押え棒をおろすと回転部⑤に装着してあるバネの力で線状体は固定される。つぎに、押上げ用ボルト⑦を回し、押え棒を押上げて線状体を同時に落下させる。

つぎに、線状体を集団で連続的に落下させる実験に用いた落下装置の概要を図3.15に示す。この場合、スライド部②に線状体収納部③が初期角度設定用ボルト⑥で取付けられており、初期角度 α の設定は収納部全体を回転させておこなう。

まず、バネ⑧で押付けられている押え板④と収納部の間のテーパ部に線状体⑨を100本程度収納する。つぎに、押上げ用ボルト⑤をゆっくり回し押え板を収納部から離すと、線状体は隙間から集団でしかも連続的に落下する。

なお、この実験における座標系として、収納部と押え板の隙間の先端を原点(0)とし、収納部に平行な鉛直面内で水平方向にx軸、鉛直下向きにy軸、x-y面に垂直な方向にz軸を定めた。

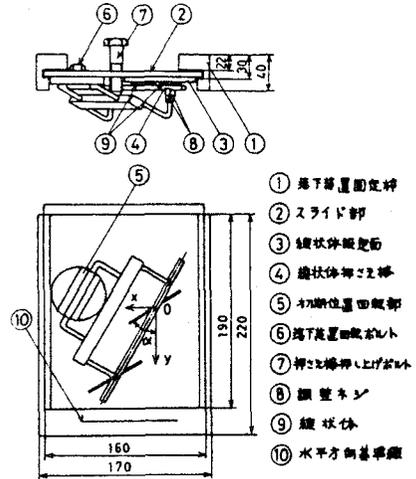


図3.14 落下装置概要

- ① 落下装置固定枠
- ② スライド部
- ③ 線状体収納部
- ④ 線状体押し板
- ⑤ 初期位置回転部
- ⑥ 落下装置回転ボルト
- ⑦ 押し棒押し上げボルト
- ⑧ ばね
- ⑨ 線状体
- ⑩ 水平方向基準線

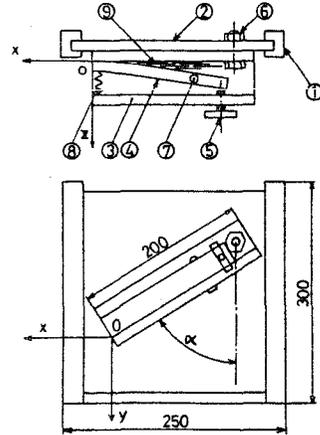


図3.15 落下装置概要

複数の線状体の落下実験では、各実験条件で15回程度線状体を落下させ、最終落下位置での線状体重心の水平方向移動距離の平均値を求め、その値とマルチストロボ撮影した写真を参考にして、その実験条件を代表すると考えられる実験を2個ないし3個選び、それらの写真から線状体両端の座標を讀取る。そして、写真の倍率を考慮してこの座標から実際の両端の座標を求め、2.9.3項“線状体の落下特性を求める方法”の(1)~(3)の方法で線状体重心の座標(X, Y)、回転角 θ (軸方向と鉛直線のなす角度)および重心の速度の水平方向成分 \dot{X} と鉛直方向成分 \dot{Y} を計算し、それらを図示し、検討した後その中の一つを実験データとして採用した。なお、線状体が運動する平面が Z 方向につれた場合(ただし、本実験では初期角度 α が大きいので線状体はほぼ XY 面内で運動することがほとんどであった。)には、2.9.2項“写真面上から真の落下運動を求める方法”で述べた方法で被写体距離の変化に対する修正をおこなった。

以上、複数の線状体の落下実験により、初期位置での線状体の相対位置、初期角度、直径および線状体の本数が重心の軌跡、速度、姿勢におよぼす影響を調べることができた。以下ではその結果について報告する。その際、落下特性はつぎのように表現する。

- ① 軌跡は、重心の水平方向移動距離 X と鉛直方向移動距離 Y の関係で示す。
- ② 速度は、落下時間 t と重心の水平方向速度 \dot{X} および鉛直方向速度 \dot{Y} の関係で示す。
- ③ 姿勢は、落下時間 t と回転角 θ の関係で示す。

速度の表現方法を単数の線状体の運動の場合と変えたのは、線状体が複数で運動する場合、流れの影響を受けるため、単一で運動する場合と異なりその姿勢だけでは速度が決まらず、落下時間に伴って大きく変化するからである。

なお，表および図中の長さは公称長さで記載する。また，線状体が集団で運動する場合の落下特性の求め方は，3.9節でその結果について報告するときあわせて説明する。

3.4 複数の線状体の落下特性

この節では，以下で諸要因が落下特性におよぼす影響を述べる前に，線状体の落下特性の概要について説明する。

線状体が複数で運動するとき，後方の線状体は，前方の線状体の運動に伴って生ずる流れの領域内で運動する場合と流れの領域外で運動する場合の2通りがある。領域外の場合，流れの影響を受けないので，後方の線状体も単一で運動するときと同じ運動をおこなうことになり，各姿勢に応じた速度 \dot{x} ， \dot{y} をもつ。ところが，領域内の場合，姿勢だけでは速度は決まらず，単一で運動する場合の速度に流れの影響が加わった形で速度が決まると考えられる。

そこで，単一で運動する場合の姿勢および重心の速度の変化を基準にして，線状体回りの流れが線状体の運動におよぼす影響を調べた。なお，この姿勢および速度の変化を表わす曲線を“基準曲線”と呼ぶことにする。

(i) 基準曲線

複数の線状体の落下特性を説明する前に，基準曲線について述べる。 $\alpha=0.571, 0.915$ (mm)， $l=60$ (mm)のNO.1試料を用いて $\alpha=20^\circ, 40^\circ, 60^\circ$ 変化させて複数の線状体の落下実験と同時にこなった単数の線状体の実験結果を図3.16～図3.20に示す。

θ と \dot{x} の関係および θ と \dot{y} の関係は，落下直後の領域を除き α の影響を受けないことが分かっているので，これらの曲線は $\alpha=20^\circ\sim 60^\circ$ のデータを重ね合わせて求めた。なお，図3.16，

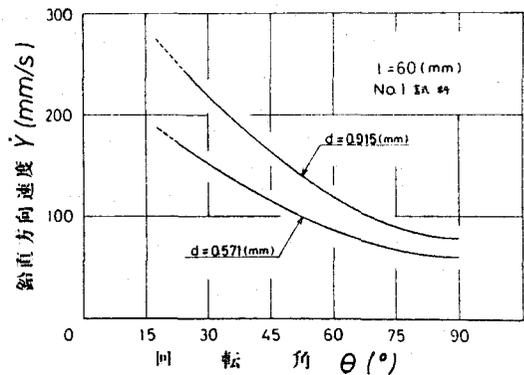
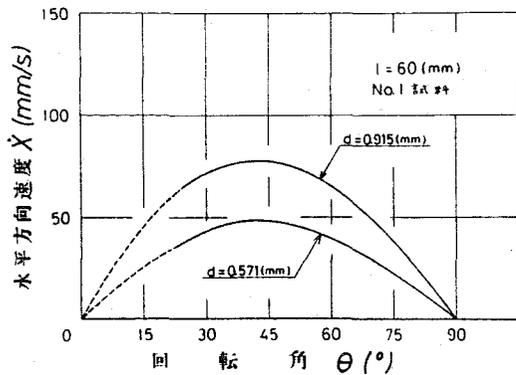


図3.16 水平方向速度の基準曲線 図3.17 鉛直方向速度の基準曲線

3.17には落下直後の急激な加速状態は省略しており，破線部は推定曲線である。

線状体は $\theta = 40^\circ \sim 45^\circ$ まで水平方向に加速され，姿勢が水平になると \dot{X} は0になる。また， \dot{Y} は θ の増加に伴って単調に減少し一定値に近づく。

いっぽう，姿勢の変化を表わす α と θ の関係も，落下時間軸に沿って平行移動すると落下直後の領域を除き α にかかわらず一致するので， $\alpha = 20^\circ \sim 60^\circ$ のデータを重ね合わせて求めた。角速度は落下後の小さい領域で加速されるが，その後は減速され続け，線状体の姿勢は除々に水平方向に近づく。

つぎに，図3.16～図3.18を用いて， α と \dot{X} の関係および α と \dot{Y} の関係を求めた。 \dot{X} は $\theta = 40^\circ \sim 45^\circ$ に達するまで加速され，その後は減速され，最終的に0に漸近する。また， \dot{Y} は減速され続け一定値に漸近する。 α と重心の速度の関係を表わす曲線の接線勾配は加速度 \ddot{X} ， \ddot{Y} を表わすが， \ddot{X} ， \ddot{Y} ともにその絶対値は直径が大きい方が大きい

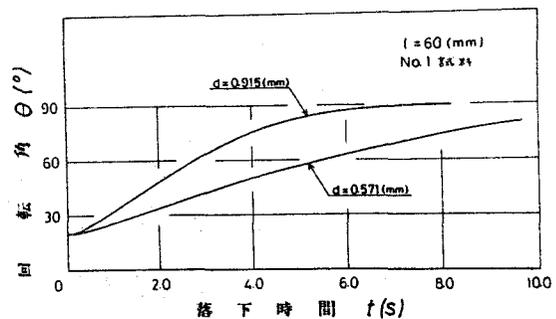


図3.18 姿勢の基準曲線

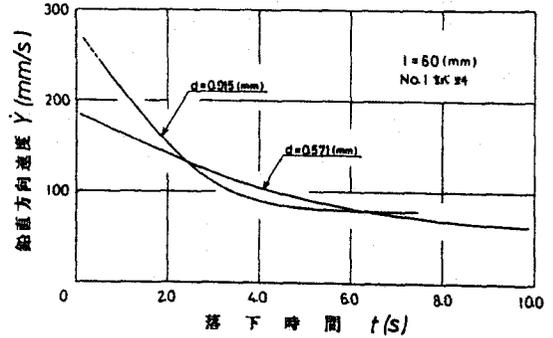
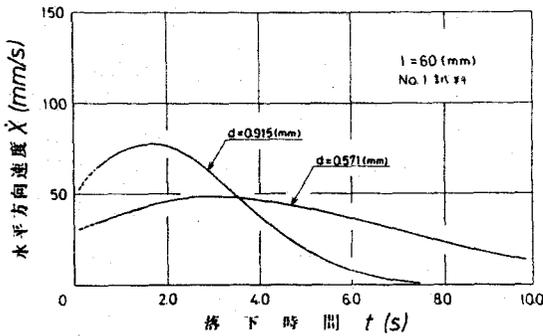


図3.19 水平方向速度の基準曲線

図3.20 鉛直方向速度の基準曲線

ことが分かる。

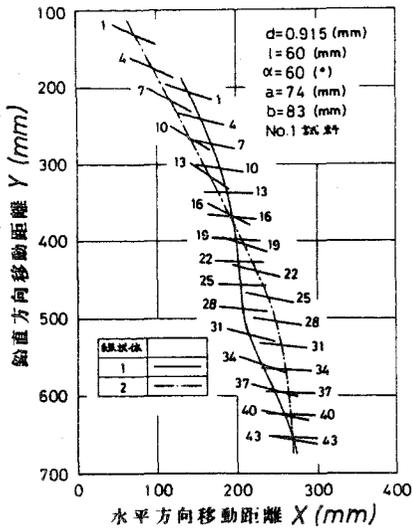
(ii) 落下特性

複数の線状体の落下特性の概要について説明する。

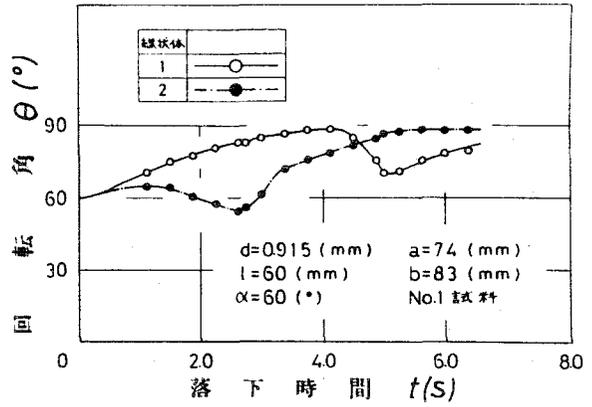
なお、初期位置においてもっとも前方に位置する線状体から順番に番号を付け線状体1 (Slender body 1 を略して S.B.1) , 線状体2 (S.B.2) および線状体3 (S.B.3) とし, その回転角 θ および重心の速度 \dot{X} , \dot{Y} には添字 1, 2, 3 を付記し, θ_1 , \dot{X}_1 , \dot{Y}_1 , ... , θ_3 , \dot{X}_3 , \dot{Y}_3 のように表わす。また, 複数の場合, 線状体同志の相対位置により姿勢および速度が大きく変化するため, 線状体の軌跡, 姿勢, 速度を別々に調べるのではなく, 3者を同時に調べながらその運動状態を考察する。

図3.21に $d=0.915(mm)$, $\alpha=60^\circ$, 2本の線状体の相対距離 $L_0=70(mm)$, 条件1 (後方の線状体の先端部が流れに入る場合) の結果を示す。

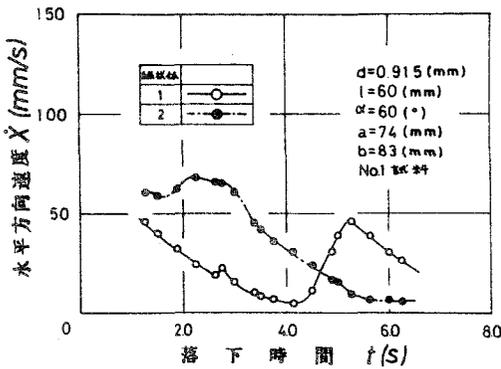
落下軌跡の図(a)には線状体に番号が付記してあり, これは何番目のストロボの発光によって撮影された線状体であるかを表わしており, 同時刻での S.B.1 と S.B.2 の位置関係が容易に分かるようにしてある。なお, 図中の線状体の時間間隔は $\Delta t = 3/8(s)$ である。以下記載する線状体本数2の落下軌跡の図における線状体の時間間隔は, すべて $d=0.571(mm)$ の場合, $\Delta t =$



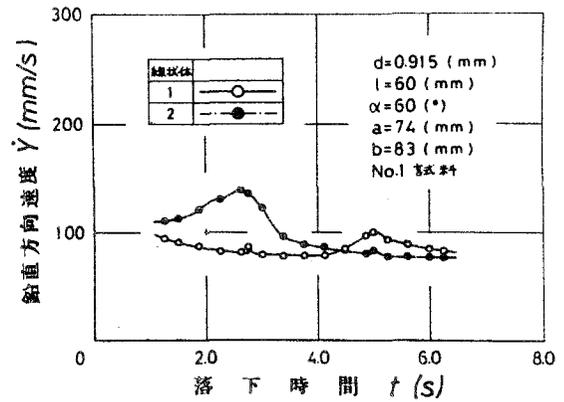
(a)



(b)



(c)



(d)

図3.21 複数の線状体の落下特性

$$d=0.915 \text{ (mm)}, \alpha=60^\circ$$

$$L_0=70 \text{ (mm)}, \text{条件 1}$$

0.4 (s), $d=0.915 \text{ (mm)}$ の場合, $\Delta t=3/8 \text{ (s)}$ である。また, 図 (b) が姿勢の変化, 図 (c), (d) がそれぞれ重心速度の水平方向成分および鉛直方向成分の変化を表わしている。

図3.21において, S.B.2の先端部はS.B.1の後端から発生する自由渦の領域に入っているが, 相対距離 L_0 が大きいため自由

渦の影響が小さく、落下開始後の領域で S.B.2 の角速度 $\dot{\gamma}_2$ は正になり、その姿勢は水平方向にゆっくり回転するが、わづかでも自由渦の影響を受けているので、 $\dot{\gamma}_2$ は S.B.1 の角速度 $\dot{\gamma}_1$ より小さく $\theta_1 > \theta_2$ の状態になる。しかも、 $\theta_2 \geq 45^\circ$ であるから、 \dot{x}_1, \dot{y}_1 とにも S.B.2 の方が大きくなり、S.B.2 は S.B.1 に近づく。このため、自由渦の誘導速度により θ_2 を減少させる向きに作用する回転モーメントは大きくなり、 $t = 1.2$ (s) 程度からその姿勢は鉛直方向に回転し始める。 θ_2 は 65° 程度から減少するため \dot{x}_2, \dot{y}_2 とともに増大し、いっぽう、S.B.1 の速度は θ_1 の増加に伴って減少し続けている。したがって、S.B.2 は S.B.1 に近づき 14 番目の撮影位置付近で S.B.1 の先端部寄り（先端から約 21 (mm) の位置）に衝突する。衝突位置が比較的重心に近いため θ_1 の衝撃的な変化は小さく、わづかに減少する程度である。しかし、重心の速度 \dot{x}_1, \dot{y}_1 は衝撃的に増大する。

なお、10 番目の撮影位置付近から \dot{x}_2 は減少し始め、 \dot{y}_2 は急激に増大し始めること、さらに、S.B.1 の Re_n が約 59 であり、S.B.1 の後方にはカルマン渦が発生していることから、この付近でカルマン渦の影響を受け始めていると考えられる。

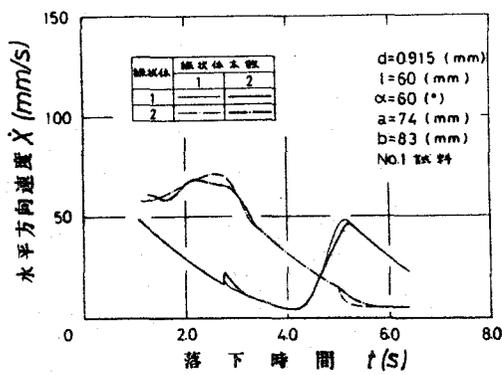
衝突後、S.B.2 が S.B.1 を追い抜き始めると、S.B.2 の先端付近の一部を除いて後端部を含めた大部分が S.B.1 の後方に発生しているカルマン渦の領域に入るため、カルマン渦によって θ_2 を増大させる向きの回転モーメントが作用し、 θ_2 は急激に増大し、 \dot{x}_2, \dot{y}_2 はともに急激に減少する。しかし、まだ $\dot{x}_1 < \dot{x}_2, \dot{y}_1 < \dot{y}_2$ であるので、S.B.2 は 20 番目の撮影位置付近で完全に S.B.1 の前方に出て運動し始める。その後も $\dot{x}_1 < \dot{x}_2, \dot{y}_1 < \dot{y}_2$ の状態が続き、S.B.2 の後端から発生する自由渦は S.B.1 の後端部の比較的重心に近い部分におよぶ。いっぽう、S.B.2 の Re_n は約 58 であるから、S.B.2 の後方にはカルマン渦が発生しており、このカルマン渦の領域に S.B.1 の先端部も含めた大部分が入っている。したがって、この相対位置関係の場合、自由渦

およびカルマン渦はそれぞれ θ_1 を増大および減少させる向きの回転モーメントを作用させるが、それらが釣合った状態になっているため、S.B.1は単数の場合と同じ運動をおこなない、26番目の撮影位置付近($t=4.2$ (s)程度)でS.B.1の姿勢はもっとも水平に近づき約 88° となる。この付近では、自由渦も先端部分の比較的重心に近い位置におよんでおり、先端部分はすべてカルマン渦の領域に入っているため、両方の影響を受けて、S.B.1の姿勢は急激に鉛直方向に回転し始める。

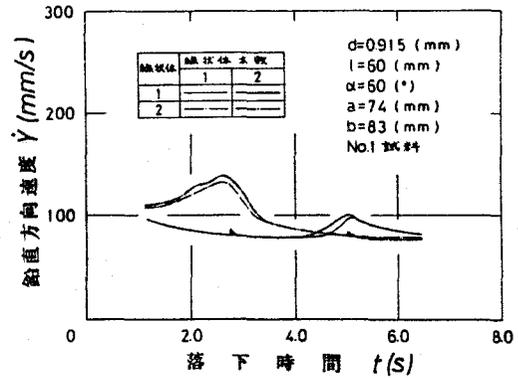
θ_1 の減少およびS.B.2の流れの影響を受けて、S.B.1の速度 \dot{X}_1, \dot{Y}_1 は増大し、 \dot{X}_2, \dot{Y}_2 は減少し続けているため、27~28番目の撮影位置付近($t=4.4$ (s)程度)で $\dot{Y}_2 < \dot{Y}_1$ となり、29番目付近($t=4.7$ (s)程度)で $\dot{X}_2 < \dot{X}_1$ となり、S.B.1はS.B.2に急激に近づいて32番目の撮影位置付近でS.B.2の後端部分(後端から約20(mm)の位置)に衝突する。衝突位置が比較的重心に近いいため θ_2 の衝撃的な変化は小さく、わずかに増大する。しかし、 \dot{Y}_2 は衝撃的に増大し、 \dot{X}_2 は θ_2 の変化の影響で減少する。その後、S.B.1とS.B.2は42番目の撮影位置付近まで交差し運動を続けるが43番目付近($t=6.4$ (s)程度)でS.B.1が完全にS.B.2の前方に出て運動し始める。40番目付近でのS.B.1の Re_n は約58であり、S.B.1の後方にはカルマン渦が発生しているが、この領域にS.B.2の重心を中心とした部分が入っているため、カルマン渦の影響を受けて θ_2 が減少あるいは増大する現象は見られない。

(iii) 基準値との比較

前方の線状体の回りの流れが後方の線状体の重心速度におよぼす影響を調べるため、各姿勢に対応する速度を基準曲線から求め、この基準値の変化と複数で線状体が運動するときの速度の変化を比較する。図3.22において、細い線で描かれている曲線が基準値の変化を表わしている。



(a)



(b)

図3.22 重心速度の基準値との比較

前方を運動している線状体が後方の線状体に完全に追い抜かれるまでの範囲（ただし，衝突現象は除く），この実験の場合にはS.B.1に関しては $t \approx 3.6$ (s)程度，S.B.2に関しては $t = 3.6 \sim 6.2$ (s)程度の領域では，単一で運動する場合と同じ運動をするので当然，基準値の変化と一致する。いっぽう，後端から発生する自由渦あるいは後方に生ずるカルマン渦の影響を受けて回転角 θ が減少している領域，S.B.2の $t = 1.2 \sim 2.8$ (s)程度の領域およびS.B.1の $t = 4.3 \sim 5.1$ (s)程度の領域では， \dot{X} は基準値より小さい値となり， \dot{Y} は基準値より大きい値になる。線状体は自由渦あるいはカルマン渦に引き込まれるように運動するため， \dot{X} ， \dot{Y} は増大するが，線状体の先端部分が流れの領域に入っているため，回転モーメントは先端部分に作用し，線状体の回転中心は後端部分に位置するので，回転によって重心は X の負の方向および Y の正の方向へ移動する。したがって， \dot{X} は渦に引き込まれることによって増大するにもかかわらず，線状体自身の回転によって減少させられるため基準値より小さくなる。いっぽう， \dot{Y} は回転によっても増大させられるため，いっそう大きくなる。

逆に，流れの影響を受けて θ が増大している領域，S.B.2の

$t = 2.8 \sim 3.4$ (s) 程度の領域では、 \dot{X} 、 \dot{Y} ともに基準値より大きい値になる。この場合、 θ が減少する場合と異なり回転モーメントは後端部分に作用するため、 \dot{X} も基準値より大きくなる。

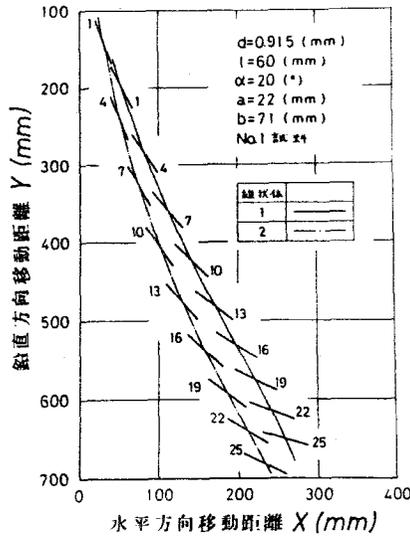
以上述べたように、線状体が複数で運動する場合、前方を運動する線状体回りの流れの影響を受けて、姿勢および速度を大きく変えながら後方の線状体が近づき、衝突し、追い抜くというように相対位置を時々刻々変化させ、相互に干渉し合いながら運動を続ける。

3.5 初期角度の影響

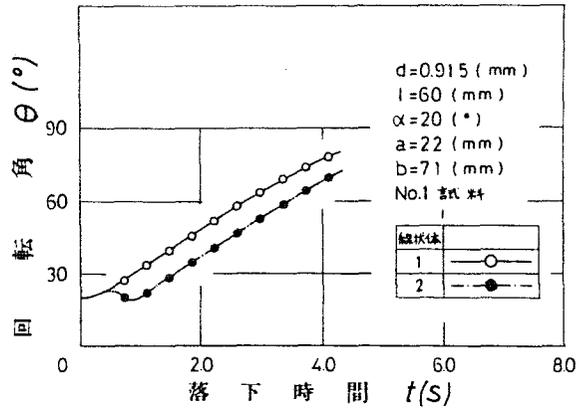
この節では、 $\alpha = 0.915$ (mm)、2本の線状体の相対距離 $L_0 = 30$ (mm)、条件1 (後方の線状体の先端部が流れに入る場合) で $\alpha = 20^\circ, 40^\circ, 60^\circ$ 変化させたときの実験結果から、初期角度が落下特性におよぼす影響を調べる。

3.5.1 $\alpha = 20^\circ$ の場合

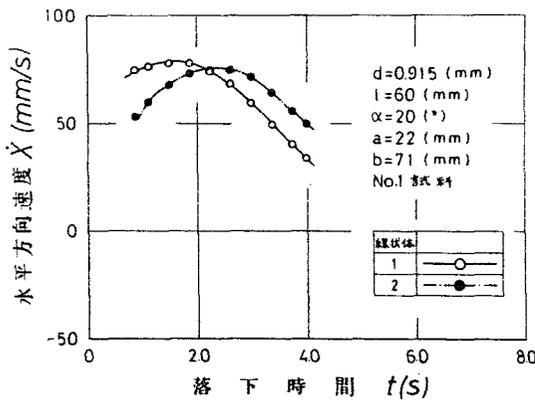
図3.23に $\alpha = 20^\circ$ の落下特性を示す。落下開始後間もなく、S.B.1の後端から発生する自由渦の誘導速度により、S.B.2には回転角 θ_2 を減少させる向きの回転モーメントが作用し、その姿勢は鉛直方向に回転し始める。 θ_2 は 23° 程度から減少するため、 \dot{X}_2 は減少し、 \dot{Y}_2 は増大する。したがって、S.B.2はS.B.1の発生する自由渦の領域から抜け出し、流れの影響を受けなくなり、単数の場合と同じ運動をする。S.B.2がS.B.1の流れの影響を受ける領域は3番目の撮影位置付近 ($t = 1.0$ (s) 程度) までである。なお、落下開始後間もなく θ_2 が減少するため、S.B.2はやがてS.B.1の下方を運動するようになる。しかし、両者の相対位置関係から、S.B.1はS.B.2の運動に伴って発生する流れの領域には入っていないので、両者ともに単数の場合と同じ運動をおこなう。



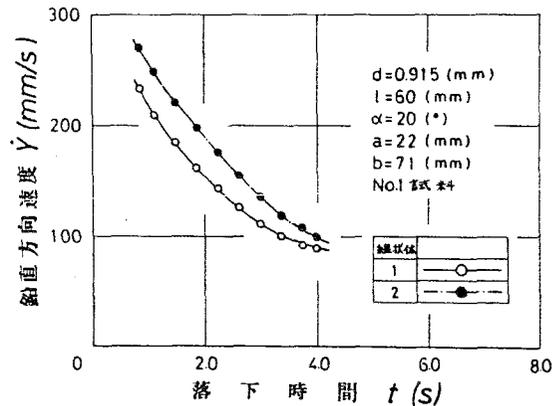
(a)



(b)



(c)



(d)

図 3.23 複数の線状体の落下特性 (初期角度の影響)

$$d=0.915 \text{ (mm)}, \alpha=20^\circ$$

$$L_0=30 \text{ (mm)}, \text{条件 1}$$

ここで、S.B.1 と S.B.2 の重心の速度を比較すると、落下開始後間もなく、 θ_2 が減少し始めるため、同一落下時間での \dot{X} の値は S.B.1 の方が大きい。しかし、S.B.2 が S.B.1 の流れの領域から抜け出すと θ_2 が増加し始めるため、 \dot{X}_2 も増大し始め (\dot{X} は $\theta=40^\circ \sim 45^\circ$ で最大になる。)、落下開始後 2.2 (s) 程度経過す

ると J.B.2 の方が大きくなる。いっぽう、 \dot{Y} はつねに $\theta_2 < \theta_1$ であるため同一落下時間では J.B.2 の方が大きくなる。

つぎに、J.B.2 が J.B.1 の流れの領域内で運動しているときの J.B.2 の重心速度の変化と基準値の変化を比較する。図 3.24 から、流れの影響を受ける時間は短く、しかも自由渦の方向は鉛直に近いので、 \dot{X} は基準値とほぼ一致し、 \dot{Y} は基準値よりわずかに大きくなることから分かる。これは 3.4 節で述べた原因によるが、 $\alpha = 20^\circ$ の場合、自由渦の方向が鉛直に近いので、渦に引き込まれることによる \dot{X} の増大と線状体自身の回転による \dot{X} の減少が相殺するので、基準値とほぼ一致したと考えられる。

以上のように、 $\alpha = 20^\circ$ の場合、落下開始後の小さい領域で流れの影響を受けるだけであり、その後は相互に干渉することなく単一で運動する場合と同じ運動をおこなう。

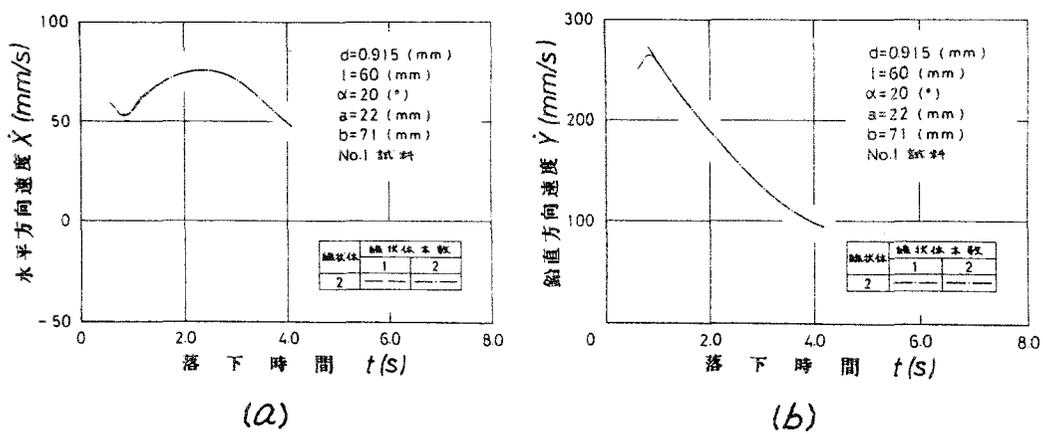
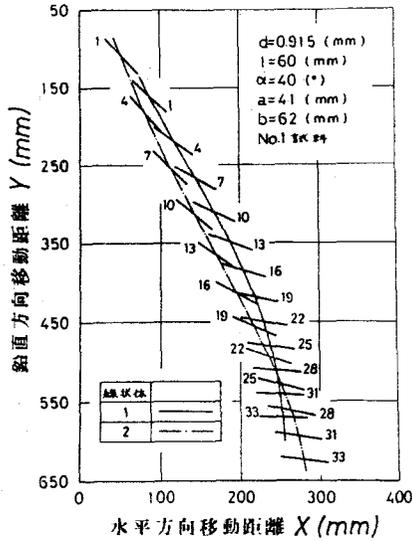


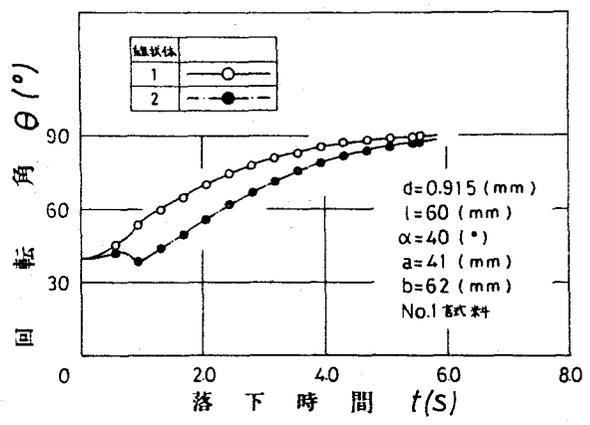
図 3.24 重心速度の基準値との比較 (初期角度の影響)

3.5.2 $\alpha = 40^\circ$ の場合

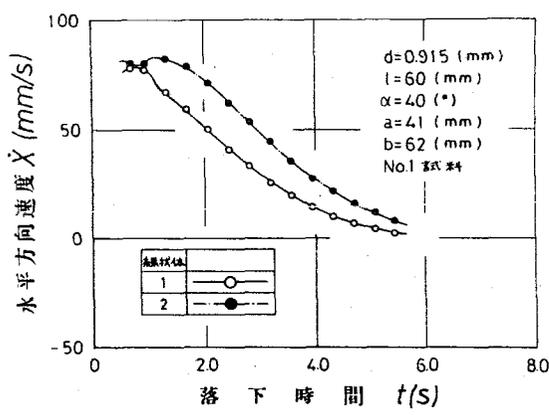
$\alpha = 40^\circ$ の落下特性を図 3.25 に示す。落下開始後間もなく (0.7 (s) 程度経過後)、J.B.1 の後端から発生する自由渦の影響を受けて J.B.2 の姿勢は鉛直方向に回転し始める。 θ_2 は 43° 程度から減少するため \dot{X}_2 は減少し、 \dot{Y}_2 は増大するが、J.B.1



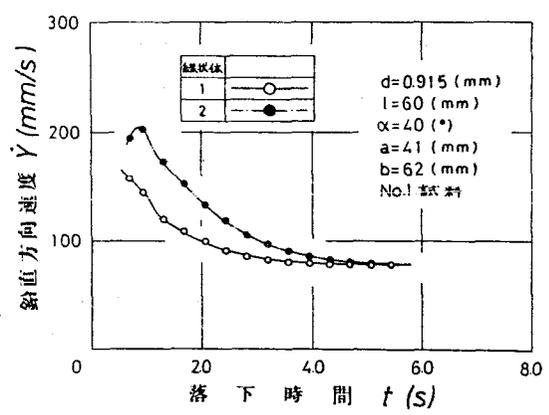
(a)



(b)



(c)



(d)

図 3.25 複数の線状体の落下特性 (初期角度の影響)

$$d = 0.915 \text{ (mm)}, \alpha = 40^\circ$$

$$L_0 = 30 \text{ (mm)}, \text{ 条件 1}$$

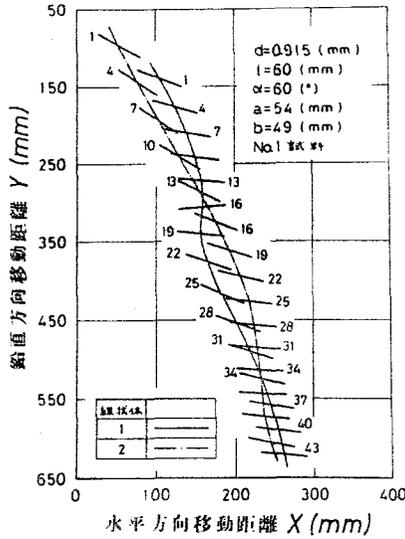
の回転角 θ_1 が 50° 程度であるため、 \dot{X}_2 の方が同程度か少し大きくなり、また、 \dot{Y} は S.B.2 の方が 55 (mm/s) 程度大きくなる。したがって、S.B.2 は S.B.1 に急激に近づき、4 番目の撮影位置 ($t = 1.0 \text{ (s)}$ 程度) で S.B.1 の後端部分 (後端から約 10 (mm) の位置) に衝突し、 θ_1 は衝撃的に増大する。このため、

衝突直後の領域で $S.B.1$ の速度 \dot{X}_1, \dot{Y}_1 は急激に減少する。なお、この領域での $S.B.1$ の Re_{eff} は約 57 であるから、 $S.B.1$ の後方にはカルマン渦が発生しているが、 $S.B.2$ は $S.B.1$ の後端に近い位置を通過して追い抜くので、カルマン渦の影響を受けることはほとんどない。そして、6 番目の撮影位置付近で $S.B.2$ が $S.B.1$ の下方を運動し始める。しかし、両者の相対位置関係から、 $S.B.1$ は $S.B.2$ の流れの領域には入っていないので、両者ともに単数の場合と同じ運動をしはらくするがその後も、 $\dot{X}_1 < \dot{X}_2, \dot{Y}_1 < \dot{Y}_2$ の状態が続き、 $S.B.2$ は $S.B.1$ の前方を運動するようになり、28 番目の撮影位置付近で $S.B.2$ の後端から発生する自由渦が $S.B.1$ の後端部におよび始める。このため、 $S.B.1$ は流れの影響を受けて運動するはずであるが、図 3.25 を見れば分かるように $S.B.1$ は $S.B.2$ の流れの影響を受けずに運動している。そこで、側面から撮影した写真を調べると、衝突後 $S.B.1$ と $S.B.2$ は除々に Z 方向にづれながら運動していることが分かった。なお、最終落下位置での両者の重心間距離は、 Z 方向で約 17 (mm) であった。したがって、渦の幅を考慮すれば、 $S.B.1$ が流れの影響を受けずに運動したのは、衝突によって両線状体が Z 方向にづれたことが原因である。

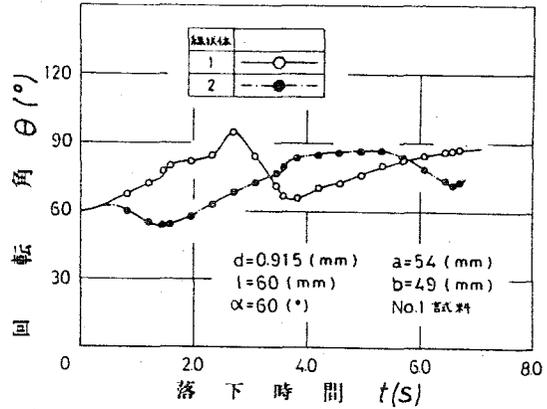
以上のように、 $\alpha = 40^\circ$ の場合、 $\alpha = 20^\circ$ では見られなかった衝突現象が見られたが、 $S.B.2$ が $S.B.1$ の流れの影響を受けなくなつてから逆に $S.B.1$ が $S.B.2$ の流れの領域で運動し始めるまでには長い時間を要する。ただし、本実験の場合、両線状体が Z 方向にづれたため、 $S.B.1$ は流れの影響を受けなかったが、もし Z 方向にづれる現象が生じなかった場合約 3 (s) 要する。

3.5.3 $\alpha = 60^\circ$ の場合

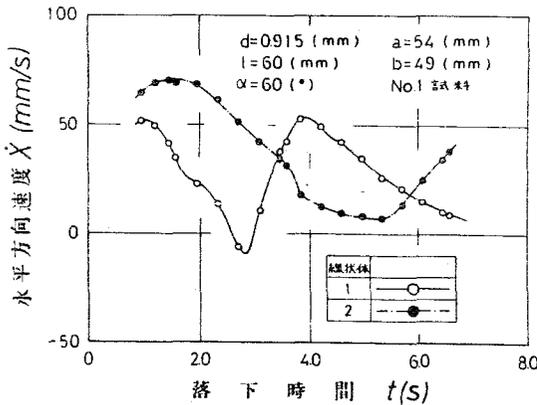
$\alpha = 60^\circ$ の落下特性を図 3.26 に示す。落下開始から 0.5 (s) 程度経過後、 $S.B.1$ の後端から発生する自由渦の影響を受けて、 $S.B.2$ の姿勢は鉛直方向に回転し始める。 θ_2 が 62° 程度から



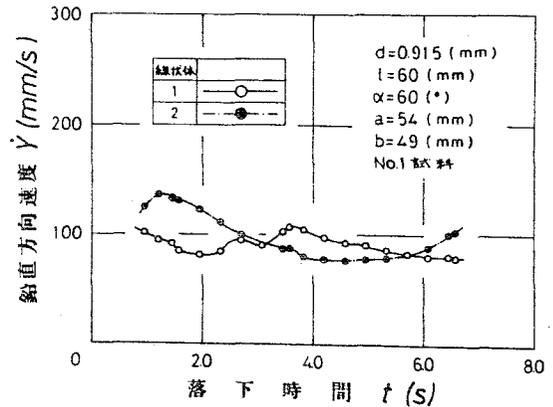
(a)



(b)



(c)



(d)

図3.26 複数の線状体の落下特性 (初期角度の影響)

$$d = 0.915 \text{ (mm)}, \alpha = 60^\circ$$

$$L_0 = 30 \text{ (mm)}, \text{条件 1}$$

減少するため、 \dot{X}_2, \dot{Y}_2 はともに増大し、S.B.2はS.B.1に急激に近づき6番目の撮影位置付近 ($t=1.5$ (s)程度)でS.B.1の後端部分 (後端から約14 (mm)の位置)に衝突し、 θ_1 は衝撃的に増大する。このため、衝突直後の領域で \dot{X}_1, \dot{Y}_1 は急激に減少する。その後、S.B.1とS.B.2は11番目の撮影位置付

まで交差して運動を続けるが、12番目付近 ($t=2.2$ (s) 程度) で J.B.2 は J.B.1 を完全に追い抜く。7番目から11番目の撮影位置付近までの範囲では、J.B.1 の Re_n は約59であり、J.B.1 の後方にカルマン渦が発生しているが、J.B.2 は J.B.1 の後端に近い位置を通して追い抜くのでカルマン渦の影響を受けることはほとんどない。その後も $\dot{X}_1 < \dot{X}_2$, $\dot{Y}_1 < \dot{Y}_2$ の状態が続き、13番目の撮影位置付近から、J.B.2 の後端から発生する自由渦に J.B.1 の後端が入り始めるため、 θ_1 は急激に増大し始める。 θ_1 は14~15番目の撮影位置付近 ($t=2.5$ (s) 程度) で 90° を越えるため、 \dot{X}_1 は負となり、J.B.1 と J.B.2 は互いに離れていく。したがって、J.B.2 の後端から発生する自由渦が J.B.1 におよぶ位置は、後端部から徐々に重心の方へ移り、また、J.B.2 の Re_n は約56であり、後方にカルマン渦が発生しており、この領域に J.B.1 の中央部分が入るため16番目の撮影位置付近で最大 (約 95°) になる。

その後も、しばらく $\dot{X}_1 < \dot{X}_2$ の状態が続くため、J.B.2 の自由渦が J.B.1 におよぶ位置は重心から先端部の方へ移り、J.B.2 の後方に発生しているカルマン渦の領域に J.B.1 の先端部分が入るため、 θ_1 は急激に減少し始め $t=2.9$ (s) 程度で 90° より小さくなる。 θ_1 の減少および J.B.2 の流れの影響を受けて、 \dot{X}_1 , \dot{Y}_1 は増大し、 \dot{X}_2 , \dot{Y}_2 は減少し続けているため、19~20番目の撮影位置付近 ($t=3.2$ (s) 程度) で $\dot{Y}_2 < \dot{Y}_1$ となり、21~22番目付近 ($t=3.4$ (s) 程度) で $\dot{X}_2 < \dot{X}_1$ となり、J.B.1 は J.B.2 に急激に近づき23番目の撮影位置付近 ($t=3.6$ (s) 程度) で J.B.2 の後端部分 (後端から約18 (mm) の位置) に衝突し、 θ_2 は衝撃的に増大する。1回目の衝突 (J.B.2 が J.B.1 に衝突した場合) が、重心速度および角速度に大きな差があったため生じたのに対し、今回の衝突は重心速度の差は小さく角速度に大きな差があったため生じたものである。

θ_2 が衝撃的に増大するため、衝突直後の領域で \dot{X}_2 , \dot{Y}_2 は急

激に減少する。また、衝突前の J.B.1 の角速度 γ_1 の絶対値は大きかったため、衝突後も 24~25 番目の撮影位置付近まで θ_1 は減少し続ける。その後、J.B.1 と J.B.2 は 30 番目の撮影位置付近まで交差して運動を続けるが、31 番目付近 ($\theta = 4.6$ (3) 程度) で J.B.1 は J.B.2 を追い抜く。この場合にも、前回の衝突後の運動と同様に、J.B.1 は J.B.2 の後端に近い位置を通過して追い抜くので J.B.2 の後方に発生しているカルマン渦の影響を受けることはほとんどない。しかし、J.B.2 に接触していることが原因と思われるが、J.B.1 の接触位置が先端部から後端部に移るにつれて角速度 γ_1 は減少し、J.B.2 を追い抜く 31 番目付近で θ_1 は滑らかにつながらず。すなわち、後端部が接触するようになるにつれて線状体は水平方向に回転しにくくなり、接触が終了するとふたたび角速度は増大する。この現象は前回の衝突の際にも見られたが、今回ほど明確には現われなかった。

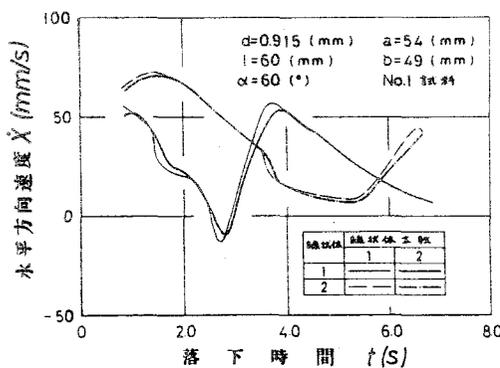
その後も $X_2 < X_1$, $Y_2 < Y_1$ の状態が続き 34 番目の撮影位置付近から、J.B.1 の後端から発生する自由渦に J.B.2 の後端が入り始めるが、J.B.1 の Re_n は約 60 であり、J.B.1 の後方にカルマン渦が発生しており、この領域に先端付近の一部を除き J.B.2 の大部分が入っているため、以前に見られたような θ_2 の急激な増大は見られず、ゆるやかに増大していく。この範囲における角速度 γ_2 は単数の場合のそれより小さい。これはカルマン渦が θ_2 を減少させる向きの回転モーメントを与えているためと考えられる。

その後も、 $X_2 < X_1$ の状態が続くためカルマン渦が J.B.2 におよぶ領域が先端部の方へ徐々に移り、37 番目の撮影位置付近で θ_2 は最大 (約 87°) となる。

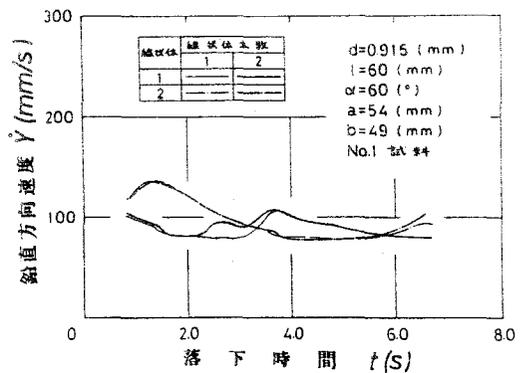
このときカルマン渦の領域には、後端付近の一部を除き J.B.2 の先端部を含めた大部分が入っているため、J.B.2 の姿勢は徐々に鉛直方向に回転し始める。 θ_2 の減少および J.B.1 の流れ

の影響を受けて、 \dot{X}_2, \dot{Y}_2 は増大し、 \dot{X}_1, \dot{Y}_1 は θ_1 の増加に伴なって減少し続けているため、S.B.2はS.B.1に急激に近づき、46~47番目の撮影位置($t=6.5$ (s)程度)でS.B.1の先端部分(先端から約11(mm)の位置)に衝突する。この場合の衝突は、1回目と同様に重心速度および角速度に大きな差があったために生じたものである。

つぎに、前方の線状体の運動に伴なって発生する流れの領域内で運動しているときの後方の線状体の重心速度の変化と基準値の変化を比較する。図3.27から、流れの影響を受けて回転角 θ が減少している領域、S.B.2の $t=0.5 \sim 1.5$ (s)、 $t=5.3 \sim 6.5$ (s)程度の領域およびS.B.1の $t=2.3 \sim 3.6$ (s)程度の領域(ただし、 $t=2.3 \sim 2.7$ (s)の領域では、S.B.1は水平な姿勢を越えて鉛直方向に回転している。)では、 \dot{X} は基準値より小さく、 \dot{Y} は基準値より大きい。ただし、S.B.1の $t=2.3 \sim 2.7$ (s)の領域では、 \dot{X} は負となるためその絶対値で比較して基準値より小さくなる。これは、3.4節で述べたように、自由渦およびカルマン渦に引き込まれるため、 \dot{X}, \dot{Y} は増大するか、線状体自身の回転によって \dot{X} は減少し、 \dot{Y} は増大するためであり、 \dot{X} と \dot{Y} では異なる傾向が現われる。また、S.B.1の $t=2.3 \sim 3.6$ (s)



(a)



(b)

図3.27 重心速度の基準値との比較(初期角度の影響)

程度の領域での場合と他の流れの影響を受けている領域での場合を比較すると、基準値との差は θ の減少が急激なほど（前者の場合）、すなわち自由渦、カルマン渦のおよぼす影響が大きいほど大きくなる。

以上のように、 $\alpha=60^\circ$ の場合、流れの影響を受けて前方を運動している線状体に近づき、衝突し、両線状体はしばらく（0.8 (S)程度）交差して運動続けるが、完全に追い抜くとすぐに後方の線状体に影響をおよぼし始める。このため、運動中の両線状体の相対距離は小さく、衝突によって Σ 方向にづれ始めてもこの距離が小さいうちに流れの影響を受けるので、 $\alpha=40^\circ$ の場合見られたような、 Σ 方向にづれたために流れの領域をはずれるという現象は見られず、つねに相互に干渉し合いながら運動し続ける。

ここで、初期角度の影響を調べる。3.5.1～3.5.3項の結果から、 \dot{X} が最大になるときの回転角（ $\theta=40^\circ\sim 45^\circ$ ）より初期角度が小さい場合（ $\alpha=20^\circ$ の場合）、落下開始後間もなく θ_2 が減少するため、 $\dot{X}_2 < \dot{X}_1$ 、 $\dot{Y}_1 < \dot{Y}_2$ となり、J.B.2はJ.B.1の流れの領域から抜け出し、その後両線状体の相対距離は大きくなり、相互に干渉することなく単一の場合と同じ運動をおこなう。いっぽう、 α が \dot{X} が最大になるときの θ の値と同程度の場合（ $\alpha=40^\circ$ の場合）、 θ_2 の減少に伴ない \dot{X}_2 の方が同程度か少し大きくなり、 $\dot{Y}_1 < \dot{Y}_2$ になるため、J.B.2はJ.B.1に衝突し、J.B.1の下方で運動し始めるが、図3.25と図3.26の重心速度を比較すれば分かるように、衝突後のJ.B.2のJ.B.1の速度の差は、 $\alpha=40^\circ$ の方が \dot{X} に関しては小さく、 \dot{Y} に関しては大きいので、J.B.1の一部がJ.B.2の流れの領域に入るまでに要する時間は長くなり、両線状体の相対距離は大きくなる。しかも、衝突後の θ_2 は、 $\alpha=60^\circ$ の場合より小さく、したがって、J.B.2の後方に生ずる流れの領域は小さい。以上2つの原因によって、 $\alpha=40^\circ$ の場合、衝突後の領域で後方の線状体は前方の線状体から発生

する流れの影響を受けにくくなる。また、 α が \dot{X} が最大になるときの θ の値より大きい場合 ($\alpha=60^\circ$ の場合)、衝突後の領域において、衝突した線状体と衝突された線状体の速度差は、 \dot{X} に関しては α が小さい場合より大きく、 \dot{Y} に関しては α が小さい場合より小さくなり、さらに衝突した線状体の姿勢はより水平に近い。そのため後方に生ずる流れの領域は広く、衝突後追いつくとすぐに後方の線状体はこの流れの影響を受け始める。したがって、この場合両線状体はあまり離れることなく、後方の線状体の一部あるいは大部分がつねに前方に位置する線状体の流れの領域内に入っており、相互に干渉し合いながら運動する。

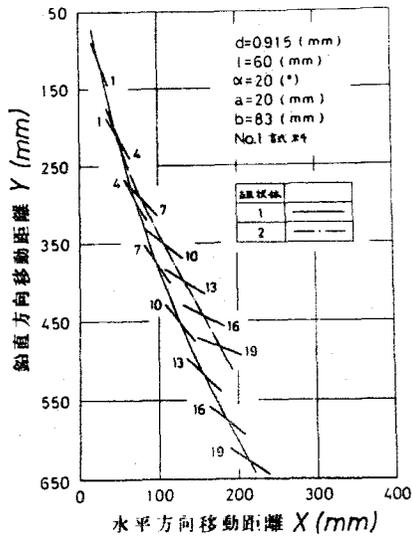
以上のように、 \dot{X} が加速される θ の領域、 \dot{X} が最大になるときの θ の値と同程度、あるいは \dot{X} が減速される θ の領域のどの領域に初期角度があるかによって、両線状体の運動状態は大きく変わり、初期角度が大きいほど両線状体が相互に影響をおよぼし合う度合は強くなり、したがって運動中の姿勢の変化および速度の変化は大きく、その運動状態は複雑になる。

3.6 初期位置における線状体の相対位置の影響

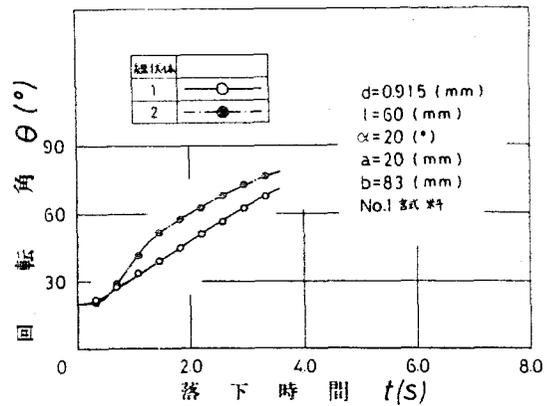
この節では、 $\alpha=0.915$ (mm)、2本の線状体の相対距離 $L_0=70$ (mm)、条件2 (後方の線状体の後端部が流れに入る場合) で $\alpha=20^\circ, 60^\circ$ のときの実験結果について述べ、3.4節および3.5節の結果と比較して、線状体の相対距離 L_0 および後方の線状体の先端部あるいは後端部のどちらが流れに入っているか (条件1, 2) など初期位置での両線状体の相対位置が落下特性におよぼす影響を調べる。

3.6.1 $\alpha=20^\circ$ の場合

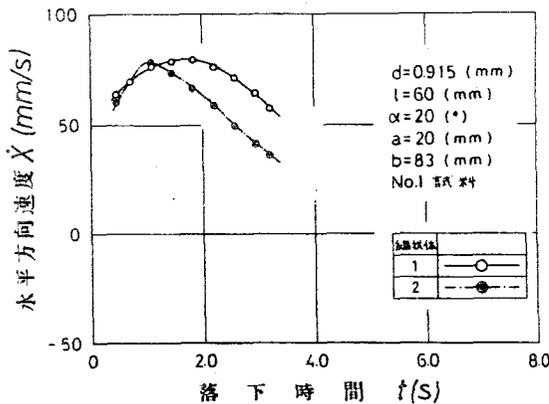
図3.28に $\alpha=20^\circ$ の落下特性を示す。落下開始後間もなく、S.B.1の後端から発生する自由渦がS.B.2の後端部におよぶた



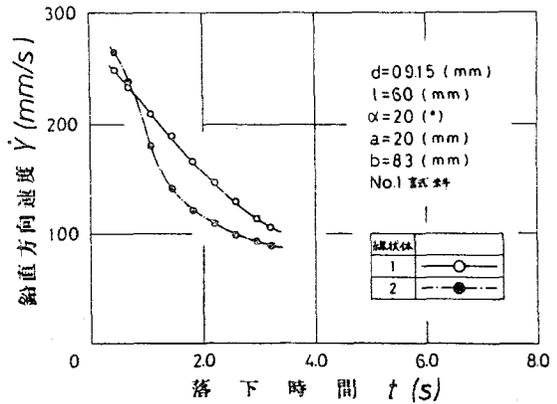
(a)



(b)



(c)



(d)

図3.28 複数の線状体の落下特性 (相対位置の影響)

$$d=0.915(\text{mm}), \alpha=20^\circ$$

$$L_0=70(\text{mm}), \text{条件2}$$

め、J.B.2には回転角を増大させる向きの回転モーメントが作用し、その姿勢は水平方向に急激に回転し始める。 θ_2 は 22° 程度から増大するため、 \dot{X}_2 は増大し、 \dot{Y}_2 は減少して $\dot{X}_1 < \dot{X}_2$ 、 $\dot{Y}_2 < \dot{Y}_1$ の状態になり、J.B.2とJ.B.1は離れていき、10番目の撮影位置付近($t=1.4(\text{s})$ 程度)でJ.B.2はJ.B.1の発生す

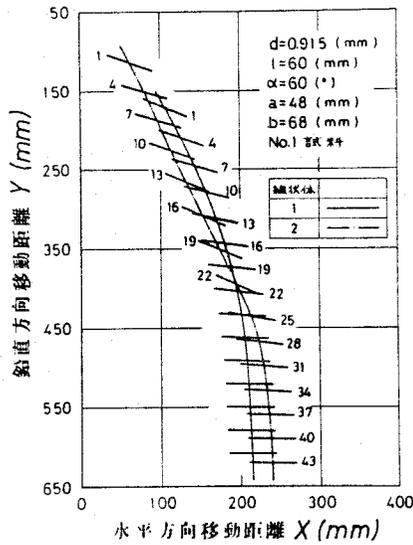
る自由渦の領域から抜け出し、単数の場合と同じ運動をおこなう。

\dot{X}_2 は 7 番目の撮影位置付近 ($z=1.1(s)$, $\theta=42^\circ$ 程度) で最大となりその後減少し、 \dot{X}_1 は増大し続けているため、8 番目以後の領域では $\dot{X}_2 < \dot{X}_1$ となり、 \dot{X}_1 は 12 番目の撮影位置付近 ($z=1.7(s)$, $\theta=43^\circ$ 程度) で最大となる。いっぽう、落下開始後間もなく θ_2 が増大し始めるため、 $\theta_1 < \theta_2$ となり、 $\dot{Y}_2 < \dot{Y}_1$ の状態が続く。S.B.2 はつねに S.B.1 の上方で運動する。また、両線状体は徐々に離れていくため、S.B.2 が S.B.1 の流れの領域から抜け出した後、ふたたび流れの影響を受けることはなく両者ともに単数の場合と同じ運動をおこなう。

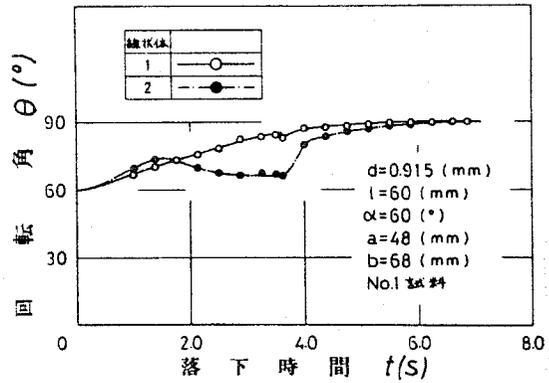
ここで、3.5.1 項の結果 ($L_0=30(mm)$, 条件 1) と比較すると、 \dot{X} が最大になるときの回転角より初期角度が小さい場合、条件 1, 2 にかかわらず流れの影響を受けるのは落下開始後の小さい領域だけであり、その後は相互に干渉することなく単で運動する場合と同じ運動をおこなう。しかし、条件 1 の場合、初期位置において後方に位置していた線状体は、やがて前方に位置していた線状体の下方で運動するようになるが、条件 2 の場合、つねに上方で運動し続ける。これは、線状体が単で運動するときの落下特性、すなわち線状体は $\theta=40^\circ \sim 45^\circ$ の範囲内まで水平方向に加速され、鉛直方向には θ の増加に伴ない単調に減速されるという落下特性、が原因している。

3.6.2 $\alpha=60^\circ$ の場合

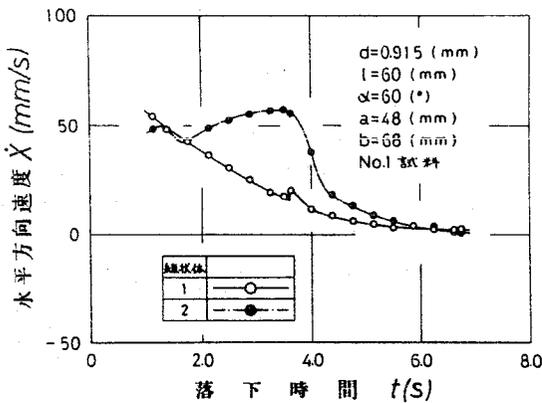
$\alpha=60^\circ$ の落下特性を図 3.29 に示す。落下開始後間もなく S.B.1 の後端から発生する自由渦の影響を受け始めるが、S.B.2 と S.B.1 の相対距離が大きいため、S.B.2 の角速度 ω_2 は ω_1 よりわずかに大きく $\theta_1 < \theta_2$ の状態で回転角は徐々に増大する。 θ が 60° から増大するため $\dot{X}_2 < \dot{X}_1$, $\dot{Y}_2 < \dot{Y}_1$ となり S.B.1 と S.B.2 は離れていき、S.B.1 の後端から発生する自由渦がおよぶ位置



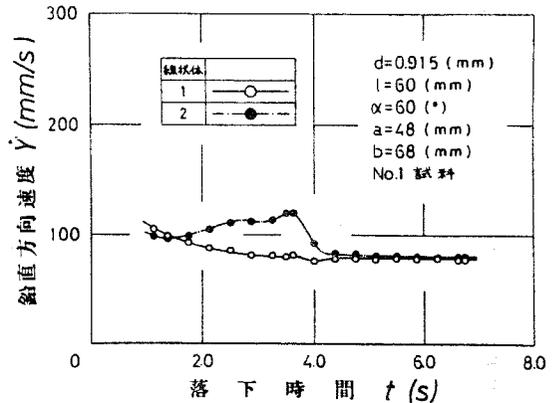
(a)



(b)



(c)



(d)

図 3.29 複数の線状体の落下特性 (相対位置の影響)

$$d = 0.915 \text{ (mm)}, \alpha = 60^\circ$$

$$L_0 = 70 \text{ (mm)}, \text{条件 2}$$

が S.B.2 の後端部から除々に重心の方へ移り, 5 番目の撮影位置付近 ($t = 1.5 \text{ (s)}$ 程度) で θ_2 は極大 (約 74°) となる。

S.B.1 の Re_n は約 60 であるから, S.B.1 の後方にカルマン渦が発生しており, この領域に S.B.2 の重心から先端部の方へ少

し寄った部分が入るため θ_2 は除々に減少し始める。 θ_2 の減少および $S.B.1$ の流れの影響を受けて \dot{X}_2, \dot{Y}_2 は増大し, $\dot{X}_1 < \dot{X}_2, \dot{Y}_1 < \dot{Y}_2$ の状態となって $S.B.2$ は $S.B.1$ に近づくが、16番目の撮影位置付近から $S.B.1$ の自由渦は $S.B.2$ の後端部分におよんで、 θ_2 を増大させる向きの回転モーメントを与える。いっぽう、 $S.B.1$ の後方に発生しているカルマン渦の領域に $S.B.2$ の先端部も含めて大部分が入るため、 θ_2 を減少させる向きの回転モーメントを与える。また、 $S.B.2$ 自身は θ_2 を増大させる向きの回転エネルギーをもっているが、これらの3者が釣合った状態となり、 θ_2 がほとんど変化しない状態が続き、21~22番目の撮影位置($t=3.6$ (s)程度)で $S.B.2$ は $S.B.1$ の先端部分(先端から約3(mm)の位置)に衝突し、 θ_1 は衝撃的に減少し \dot{X}_1, \dot{Y}_1 は衝撃的に増大する。とくに、 \dot{X}_1 が増大する割合が大きい。

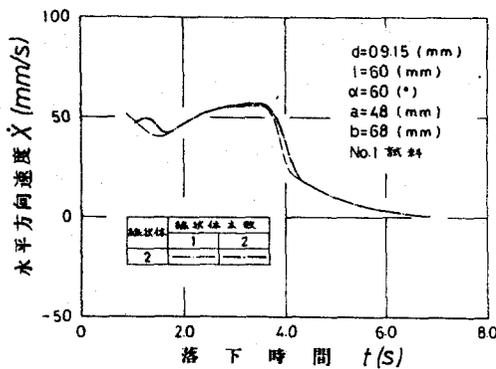
衝突後、 $S.B.2$ が $S.B.1$ を追い抜き始めると、 $S.B.2$ の先端付近の一部を除き後端部も含めた大部分が $S.B.1$ の後方に発生しているカルマン渦の領域に入るため、 θ_2 を増大させる向きの回転モーメントが作用し、 θ_2 は急激に増大し、 \dot{X}_2, \dot{Y}_2 はともに急激に減少する。 $S.B.2$ は26番目の撮影位置付近($t=4.2$ (s)程度)で完全に $S.B.1$ の前方に出て運動し始める。

その後も、 $\dot{X}_1 < \dot{X}_2, \dot{Y}_1 < \dot{Y}_2$ の状態が続き、 $S.B.1$ と $S.B.2$ は離れていき、相対位置関係から $S.B.2$ の後端から発生する自由渦は $S.B.1$ の後端部分の比較的重心へ近い部分におよぶ、いっぽう、 $S.B.2$ の Re_n は約63であるから、 $S.B.2$ の後方にカルマン渦が発生しており、この領域に $S.B.1$ の先端部も含めた部分が入っているため、 $S.B.1$ は $S.B.2$ の流れの影響を受けて運動をおこなう(θ_1 が減少する。)はずであるが、流れの影響を受けずに単独の場合と同じ運動をおこなっている。

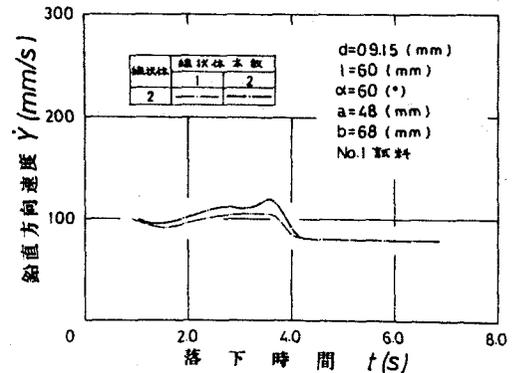
そこで、側面から撮影した写真を調べると、衝突後 $S.B.1$ と $S.B.2$ は除々に Σ 方向にづれながら運動していることが分かった。なお、最終落下位置での両者の重心間距離は Σ 方向で

約5 (mm)であった。3.2.3項に記載した図3.9を見れば分かるように、S.B.2の姿勢は水平に近いので、自由渦およびカルマン渦の幅は小さく約2 (mm)であり、またS.B.1とS.B.2の相対距離が近いので渦の幅のより小さい領域にS.B.1が位置している。したがって、S.B.1がS.B.2の流れの領域外に位置したため、単数の場合と同じ運動をおこなったということが分かる。

つぎに、前方の線状体の流れの影響を受けている領域における後方の線状体の重心速度の変化と基準値の変化を比較する。図3.30において、流れの影響を受けて θ が増大している領域、S.B.2の $t < 1.5$ (s)、 $t = 3.6 \sim 4.2$ (s)程度の領域では、 \dot{X} は渦に引き込まれることによって増大し、しかも線状体自身の回転によっても増大するため基準値より大きくなる。また、流れの影響を受けているが θ がほとんど変化しない領域、S.B.2の $t = 2.9 \sim 3.6$ 程度の領域では、 \dot{X} は渦に引き込まれるように運動することによってのみ増大するため、基準値よりわずかに大きい値になる。さらに、 θ が減少しているS.B.2の $t = 1.7 \sim 2.9$ (s)程度の領域では、前述の θ が増大している場合と異なり、線状体自身の回転によって \dot{X} が減少するため、渦に引き込



(a)



(b)

図3.30 重心速度の基準値との比較 (相対位置の影響)

まれることによる \dot{X} の増大が相殺される。ただし、この場合 θ_2 の減少はゆるやかであり、回転による \dot{X} の減少が小さかったため基準値とほぼ一致したと考えられる。いっぽう、 \dot{Y} は渦に引き込まれることによって、線状体自身の回転によっても増大するので、流れの影響を受けている全領域(とく4.2(s)程度)で基準値より大きくなる。

ここで、初期位置における線状体の相対位置が落下特性におよぼす影響を調べる。

(1) 相対距離 L_0 の影響

3.4節に記載した $L_0=70(mm)$ の結果(図3.21)と3.5.3項の $L_0=30(mm)$ の結果を比較すると、落下開始直後の領域において相対距離が大きい方が、S.B.2が受けるS.B.1の流れの影響は小さく θ_2 が減少し始めるまでの時間は長くなり($L_0=30(mm)$ の場合、約0.5(s)、 $L_0=70(mm)$ の場合、約1.2(s))、 θ_2 が減少している領域における角速度 γ_2 の絶対値は小さいことが分かる。なお、当然のことながら、S.B.1に衝突するまでの時間も長くなる。(約1.5(s)と約2.8(s))したがって、S.B.2に衝突される直前のS.B.1の回転角 θ_1 は、 $L_0=30(mm)$ の場合、約 75° 、 $L_0=70(mm)$ の場合、約 83° 、と L_0 が大きい方が大きくなり、S.B.1の後方に発生しているカルマン渦の領域は広くなるので、衝突以前にカルマン渦の影響を大きく受ける。このため、衝突直前のS.B.2とS.B.1の速度差は $L_0=70(mm)$ の場合の方が大きく、S.B.2はS.B.1のより先端に近い位置($L_0=30(mm)$ の場合、後端から約14(mm)の位置、 $L_0=70(mm)$ の場合、先端から約21(mm)の位置)に衝突する。したがって、 $L_0=70(mm)$ の場合、衝突後両線状体が交差し運動を続ける領域($t=2.8\sim 3.4(s)$ 程度)において、S.B.2の後端部を含めた部分がS.B.1の後方に発生しているカルマン渦の領域に入るため、 θ_2 は急激に増大し、 \dot{X}_2 、 \dot{Y}_2 はともに

急激に減少する現象が見られる。しかし、 $L_0=30$ (mm)の場合、 $S.B.2$ は $S.B.1$ の後端に近い位置を通過して追い抜くので、この現象は見られない。また、重心速度の変化を示す図(C),(d)から、 $L_0=30$ (mm)の場合、落下直後の加速領域から $S.B.1$ の流れの影響を受け始めるが、 $L_0=70$ (mm)の場合、この加速領域を過ぎ速度が減少し始めてから $S.B.1$ の流れの影響を受け始めることが分かる。

以上の結果をまとめると、相対距離が大きい方が、落下開始直後の領域で後方の線状体が受ける前方の線状体の流れの影響は小さい。また、1回目の衝突において、相対距離が大きい方が、前方の線状体より先端に近い位置に衝突する傾向がある。

(2) 条件1および条件2の影響

3.4節に記載した条件1(線状体の先端部が流れに入っている場合)の結果(図3.21)とこの節に記載した条件2(線状体の後端部が流れに入っている場合)の結果(図3.29)を比較する。両者ともに $L_0=70$ (mm)と相対距離が大きいので、落下開始直後に $S.B.2$ が受ける $S.B.1$ の流れの影響は小さい。

条件2の場合、落下開始後間もなく $S.B.1$ の流れの領域に $S.B.2$ の後端部が入るため、 θ_2 は除々に増大し始める。このため、 $X_2 < X_1$ 、 $Y_2 < Y_1$ となり、 $S.B.1$ と $S.B.2$ の相対距離は初期位置での場合より大きくなる。その後、 $S.B.2$ の重心から先端部へ少し寄った部分が $S.B.1$ のカルマン渦の領域に入るため、 θ_2 は除々に減少し始める。減少し始めの領域における角速度 ω_2 の絶対値は条件1の場合とほぼ同じであるが、 $S.B.2$ が $S.B.1$ に近づくにつれて条件1の場合と異なり、先端部を含めた大部分がカルマン渦の領域に入るため、 θ_2 がほとんど変化しない状態が続き、 $S.B.2$ と $S.B.1$ の速度差が原因で衝突する。いっぽう、条件1の場合の衝突は、速度および角速度の両方に

大きな差があったために生じたものである。

条件2の場合、いったん θ_2 が増大し、その後減少してJ.B.2がJ.B.1に衝突するため、衝突直前の θ_2 は約 66° であり、条件1(約 55°)より大きく、衝突するまでに要する時間も長い。(条件1の場合、約2.8(s)、条件2の場合、約3.6(s))また、衝突以前にJ.B.2がカルマン渦の影響を受ける領域は、条件1の場合、 $t=2.2\sim 2.8$ (s)程度の領域であるのに対し、条件2の場合、 θ_2 が減少し始めるときから影響を受け始め、 $t=1.5\sim 3.6$ (s)程度の領域となる。したがって、条件2の場合の方がJ.B.2はカルマン渦の影響を大きく受け、J.B.2はJ.B.1のより先端に近い位置(条件1の場合、先端から約2(mm)の位置、条件2の場合、先端から約3(mm)の位置)に衝突する。このため、衝突後両線状体が交差して運動を続ける領域(条件1の場合、 $t=2.8\sim 3.4$ (s)程度、条件2の場合、 $t=3.6\sim 4.2$ (s)程度)において、J.B.2の後端部を含めた部分がJ.B.1の後方のカルマン渦の領域に入り、 θ_2 は急激に増大し、 \dot{X}_2 、 \dot{Y}_2 はともに急激に減少する現象が、条件1、2ともに見られるが、条件2の場合の方がJ.B.1のより先端に近い位置に衝突するため、この姿勢および速度の急激な変化は大きくなる。

以上の結果をまとめると、後方の線状体の後端部が流れに入っている場合(条件2)の方が、1回目に衝突するまでに後方の線状体が受けるカルマン渦の影響は大きく、前方の線状体のより先端に近い位置に衝突する傾向がある。

3.7 線状体直径の影響

この節では、 $d=0.571$ (mm)、 $\alpha=60^\circ$ 、2本の線状体の相対距離 $L_0=70$ (mm)、条件1および条件2の実験結果について述べ、3.4節および3.6節の $d=0.915$ (mm)の結果と比較して、後方の線状体がカルマン渦の影響を受ける場合($d=0.915$

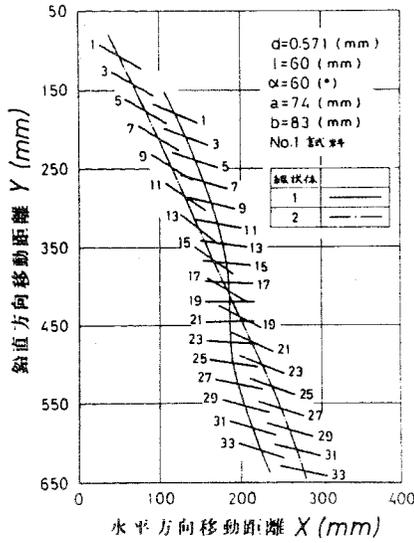
(mm))と受けない場合 ($\alpha=0.571$ (mm))で落下特性がどのように異なるかを調べる。さらに、前方の線状体が $\alpha=0.915$ (mm)、後方が $\alpha=0.571$ (mm)、 $\alpha=60^\circ$ 、 $L_0=30$ (mm)、条件1の実験結果について述べ、両線状体ともに $\alpha=0.915$ (mm)の場合と比較して、カルマン渦の影響を受けて線状体が運動する場合、直径によりその運動状態がどのように変わるかを調べる。

3.7.1 $\alpha=0.571$ (mm)、条件1の場合

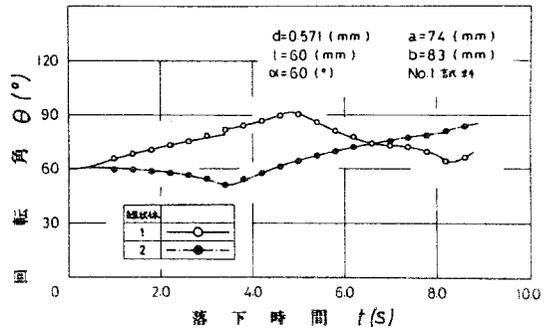
$\alpha=0.571$ (mm)、条件1の落下特性を図3.31に示す。落下開始後間もなくS.B.2はS.B.1の後端から発生する自由渦の影響を受け始めるが、S.B.2とS.B.1の相対距離が大きいため自由渦の影響が小さく、自由渦による θ_2 を減少させる向きの回転モーメントとS.B.2自身の θ_2 を増大させる向きの回転エネルギーがほぼ釣り合った状態、すなわち θ_2 がほとんど変化しない状態が続く。しかし、 θ_1 は増加し続けているので $\theta_2 < \theta_1$ となり、 $\dot{x}_1 < \dot{x}_2$ 、 $\dot{y}_1 < \dot{y}_2$ となる。したがって、S.B.2はS.B.1に近づき自由渦の影響を大きく受けるようになり、角速度 γ_2 を除々に増大させながら(γ_2 は負であり、 γ_2 の絶対値が除々に増大する)、S.B.2の姿勢は鉛直方向に回転し始める。

θ_2 の減少および流れの影響を受けて \dot{x}_2 、 \dot{y}_2 は増大し、いっぽう、S.B.1の速度は θ_1 の増加に伴って減少し続けているため、S.B.2はS.B.1に近づき13番目の撮影位置付近($t=3.4$ (s)程度)でS.B.1の後端部分(後端から約22(mm)の位置)に衝突し、 θ_1 は衝撃的に増大し \dot{x}_1 、 \dot{y}_1 はわずかに減少する。

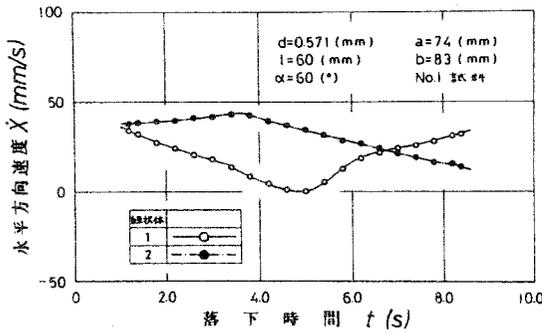
単一で運動する線状体回りの流れ状態を調べた結果から、 $\alpha=0.571$ (mm)の場合、後端から自由渦は発生するが、線状体の後方にはカルマン渦は発生しないことが分かっている。したがって、前方の線状体が後方の線状体の運動に影響をおよぼす流れは自由渦だけであり、前方の線状体に近づいたとき、自由渦とカルマン渦の両方の影響を受ける場合、たとえば $\alpha=$



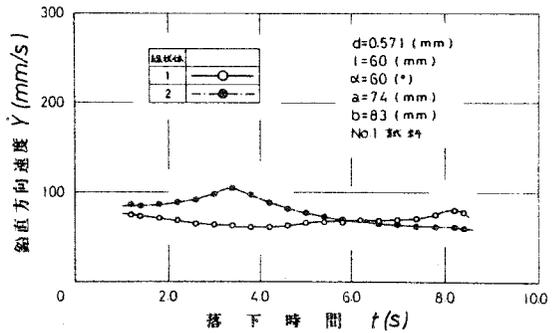
(a)



(b)



(c)



(d)

図 3.3/ 複数の線状体の落下特性 (直径の影響)

$$d=0.571(\text{mm}), \alpha=60^\circ$$

$$L_0=70(\text{mm}), \text{条件} 1$$

0.915 (mm), $\alpha=60^\circ$, $L_0=70(\text{mm})$, 条件 1 (図 3.21) の $t=2.2 \sim 2.8(\text{s})$ 程度の領域と比較して, 角速度 γ_2 の絶対値は小さく, $d=0.915(\text{mm})$ の場合見られたような $\dot{\gamma}_2$ の減少および $\dot{\gamma}_2$ の急激な増大 (この現象はカルマン渦によって生じたものと考えられる。) は見られず, $\dot{\gamma}_2, \dot{Y}_2$ とともに除々に増大して S.B.1 に衝突する。

衝突後，J.B.2がJ.B.1を追い抜き始めると，J.B.1の自由渦がJ.B.2の後端部分におよぶため， θ_2 を増大させる向きの回転モーメントが作用し，単一で運動する場合より γ_2 はわずかに大きくなるが，この領域においても自由渦とカルマン渦の両方の影響を受ける $\alpha=0.915(mm)$ の場合（たとえば，図3.21の $t=2.8\sim3.4(s)$ 程度の領域，この場合衝突位置が比較的先端に近いので，J.B.2の後端部を含めた大部分がカルマン渦の領域に入っている。）に見られたような γ_2 の急激な増大現象は生じない。したがって， \dot{X}_2, \dot{Y}_2 も急激に減少することなく除々に減少する。そして，J.B.2は18番目の撮影位置付近（ $t=4.4(s)$ 程度）で完全にJ.B.1の前方に出て運動し始める。

J.B.2がJ.B.1を完全に追い抜いた直後から，J.B.2の後端から発生する自由渦にJ.B.1の後端部分が入るため，J.B.1は角速度 γ_1 を増大させながら水平方向に回転し，19番目の撮影位置付近（ $t=4.6(s)$ 程度）で θ_1 は 90° を越える。 $\dot{X}_1 < \dot{X}_2$ の状態にあるため，J.B.2はJ.B.1から離れていきJ.B.2の自由渦がJ.B.1におよぶ位置は後端部分から除々に重心の方へ移り20～21番目の撮影位置付近（ $t=4.9(s)$ 程度）で θ_1 は最大（約 92° ）となる。その後も，しばらく $\dot{X}_1 < \dot{X}_2$ の状態が続くため，J.B.2の自由渦がおよぶ位置が重心から先端部の方へ移る。このため， θ_1 は減少し始め21～22番目の撮影位置付近（ $t=5.1(s)$ 程度）で 90° より小さくなる。

θ_1 の減少およびJ.B.2の流れの影響を受けて \dot{X}_1, \dot{Y}_1 は増大し， \dot{X}_2, \dot{Y}_2 は減少し続けているので， \dot{Y}_1 は26番目の撮影位置付近（ $t=6.0(s)$ 程度）で \dot{Y}_2 より大きくなり， \dot{X}_1 は29～30番目付近（ $t=6.7(s)$ 程度）で \dot{X}_2 より大きくなり，J.B.1はJ.B.2に近づいて37番目の撮影位置付近（ $t=8.2(s)$ 程度）でJ.B.2の後端部分（後端から約 $13(mm)$ の位置）に衝突する。なお，J.B.2に衝突する直前の領域（ $t=7.8\sim8.2(s)$ 程度）で θ_1 は急激に減少し， \dot{Y}_1 は急激に増大する現象が見られる。

また、J.B.1が鉛直方向に回転し始めてからJ.B.2に衝突するまでの領域で、 $d=0.915(mm)$ の場合($\alpha=60^\circ$, $L_0=30(mm)$)、条件1、図3.26の $t=2.7\sim3.6(s)$ 程度の領域)と比較すると、カルマン渦の影響を受けない場合の方が、 $\dot{\gamma}$ の絶対値ははるかに小さく、J.B.1は除々に鉛直方向に回転しながらJ.B.2に近づく。したがって、 $d=0.915(mm)$ の場合見られた、 θ_1 が減少し始めると同時に \dot{X}_1 , \dot{Y}_1 が急激に増大する現象は見られず、衝突するまでの時間も長い。($d=0.571(mm)$ の場合、約3.3(s), $d=0.915(mm)$ の場合、約0.9(s))

つぎに、前方の線状体の流れの影響を受けている領域における後方の線状体の重心速度の変化と基準値の変化を比較する。図3.32において、自由渦の影響を受けて回転角 θ が減少している領域、J.B.2の $t\approx3.4(s)$ 程度およびJ.B.1の $t=4.9\sim8.2(s)$ 程度の領域では、 \dot{X} は渦に引き込まれることによって増大するが、線状体自身の回転によって \dot{X} は減少するため、 \dot{X} の増大が相殺される。ただし、 θ の減少がゆるやかであり、回転による \dot{X} の減少が小さいため、 \dot{X} は基準値にほぼ等しいかあるいは少し小さい値になる。いっぽう、 \dot{Y} は渦に引き込まれることによって、線状体自身の回転によっても増大するめで、基準値より大きくなる。しかし、 \dot{X} , \dot{Y} ともに基準値との差はわずかであり、 $d=0.915(mm)$ の場合に比べて小さい。

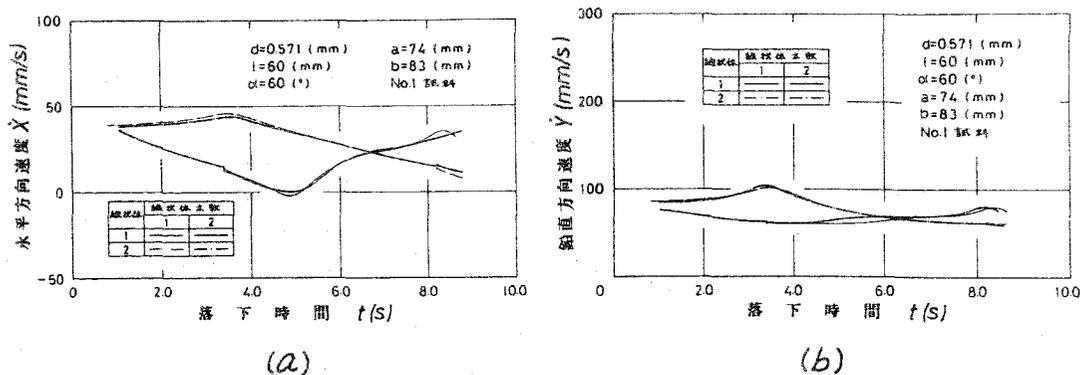


図3.32 重心速度の基準値との比較 (直径の影響)

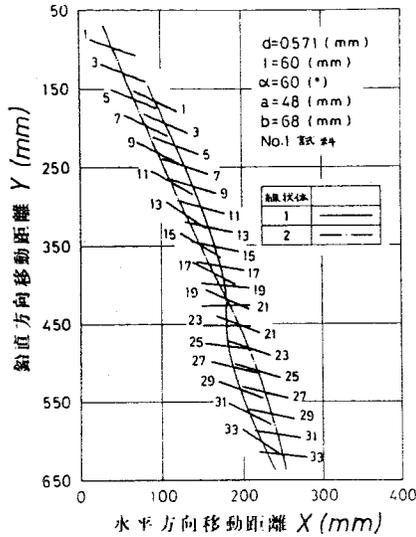
3.7.2 $\alpha=0.571(mm)$, 条件2の場合

$\alpha=0.571(mm)$, 条件2の落下特性を図3.33に示す。落下開始後間もなくS.B.2の後端部分がS.B.1の後端から発生する自由渦に入っているため, S.B.2の角速度 $\dot{\gamma}_2$ は $\dot{\gamma}_1$ より大きく $\theta_1 < \theta_2$ の状態では回転角は増大する。 θ が 60° から増大するため $\dot{X}_2 < \dot{X}_1$ となり, S.B.1とS.B.2は離れていき, S.B.1の後端から発生する自由渦がおよぶ位置がS.B.2の後端部から徐々に重心の方へ移り, 1番目の撮影位置付近($t=1.0(s)$ 程度)で θ_2 は極大(約 70°)となる。

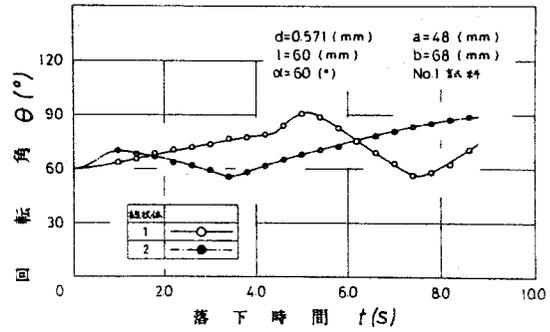
線状体回りの流れの可視化から, $\alpha=0.571(mm)$ の場合, 回転角が増すにつれて, 自由渦が3列発生することが分かっている。すなわち, 2列が後端から生じ, それらの間に先端から発生する1列が位置する。(3.2.4項参照) 1番目の撮影位置付近では, S.B.1とS.B.2の相対位置関係から, S.B.1の後端から発生する自由渦はS.B.2の重心付近におよび先端から発生する自由渦には先端部の方へ少し寄った部分が入るため, θ_2 は徐々に減少し始める。

θ_2 の減少およびS.B.1の流れの影響を受けて $\dot{X}_2, \dot{\gamma}_2$ は増大し, S.B.2はS.B.1に近づき13番目の撮影位置付近($t=3.4(s)$ 程度)でS.B.1の後端部分(後端から約 $25(mm)$ の位置)に衝突する。衝突位置が比較的重心に近いので, θ_1 および $\dot{\gamma}_1$ がわずかに増大する。そして, S.B.2は16番目の撮影位置付近($t=4.0(s)$ 程度)で完全にS.B.1の前方に出て運動し始める。

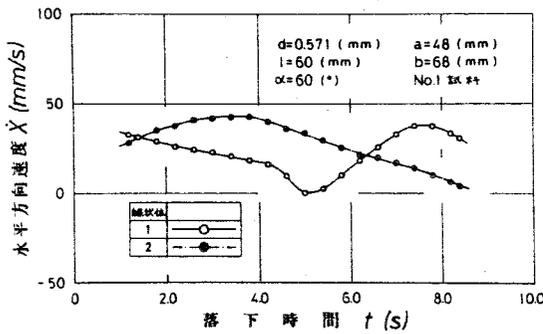
S.B.2がS.B.1を完全に追いついた後も $\dot{X}_1 < \dot{X}_2, \dot{\gamma}_1 < \dot{\gamma}_2$ の状態が続くため, 18番目の撮影位置付近($t=4.4(s)$ 程度)からS.B.2の後端から発生する自由渦にS.B.1の後端部分が入るため, θ_1 は急激に増大し始め, 20~21番目($t=4.9(s)$ 程度)で 90° を越える。 $\dot{X}_1 < \dot{X}_2$ の状態にあるため, S.B.2はS.B.1から離れていき, S.B.2の自由渦がおよぶ位置はS.B.1の後端部から重心の方へ移り21~22番目($t=5.1(s)$ 程度)で θ_1 は最大(約 92°)



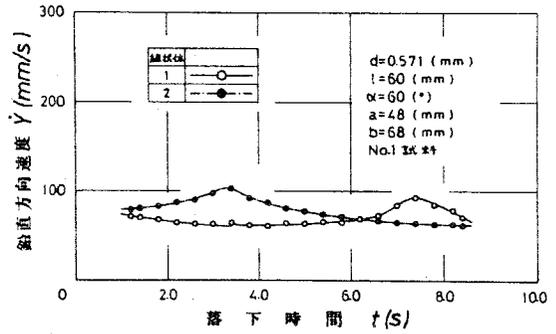
(a)



(b)



(c)



(d)

図 3.33 複数の線状体の落下特性 (直径の影響)

$$d = 0.571 \text{ (mm)}, \alpha = 60^\circ$$

$$L_0 = 70 \text{ (mm)}, \text{条件 2}$$

となる。

この付近から、S.B.2の後端から発生する自由渦は、S.B.1の重心から後端部へ少し寄った位置におよび、先端から発生する自由渦は、先端に近い位置におよぶため、S.B.1は鉛直方向に回転し始める。その後も、しばらく $X_1 < X_2$ の状態が続くため、この流れの領域がおよぶ位置は先端部の方へ移り、 θ_1 は減

少し続ける。

θ_1 の減少およびS.B.2の流れの影響を受けて \dot{X}_1 , \dot{Y}_1 は増大し, \dot{X}_1 は28番目付近($t=6.4$ (s)程度)で \dot{X}_2 より大きくなり, \dot{Y}_1 は27番目付近($t=6.2$ (s)程度)で \dot{Y}_2 より大きくなり, S.B.1はS.B.2に近づき33番目の撮影位置付近($t=7.4$ (s)程度)でS.B.2の重心に衝突する。しかし, θ_2 , \dot{X}_2 , \dot{Y}_2 はほとんど変化しない。衝突後, S.B.1がS.B.2を追い抜き始めると, S.B.2の後端から発生する自由渦がS.B.1の後端部分におよぶため, θ_1 を増大させる向きの回転モーメントが作用し, 単一で運動する場合より γ は大きくなる。

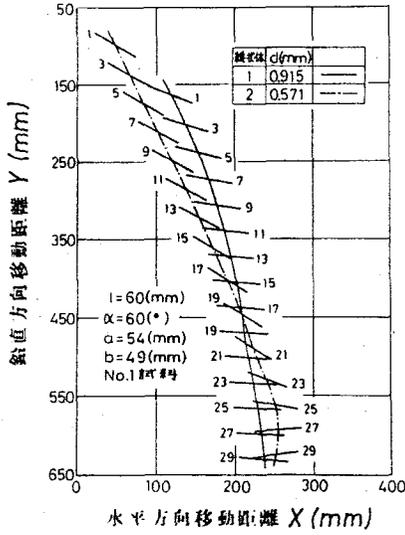
ここで, 後方の線状体がカルマン渦の影響を受ける場合($\alpha=0.915$ (mm))と受けない場合($\alpha=0.571$ (mm))の落下特性の違いについてまとめると, 後方の線状体が前方の線状体に近づく領域で, カルマン渦の影響を受ける場合, 後方の線状体の角速度および重心の速度は急激に変化し, 前方の線状体に急激に近づいて衝突する。いっぽう, カルマン渦の影響を受けない場合, 角速度および重心の速度は除々に変化し, 前方の線状体にゆっくり近づいて衝突する。したがって, 後方の線状体が鉛直方向に回転し始めてから衝突するまでの時間は, カルマン渦の影響を受ける場合の方が短い。また, 複数で運動する場合の重心速度と基準値の差は, \dot{X} , \dot{Y} ともにカルマン渦の影響を受ける場合の方が大きい。

なお, 以上の結果が, カルマン渦の影響によるものか, あるいは単一で運動する場合にも見られる直径が異なることによる落下特性の違い(3.4節に記載した姿勢および重心速度の基準曲線, 図3.18~3.20から $\alpha=0.915$ (mm)の方が, 姿勢および重心速度の変化は急激である。)によるものかは, 以下で述べる $\alpha=0.571$ (mm)の線状体がカルマン渦の影響を受けて運動する場合の結果から明確になると考えられる。

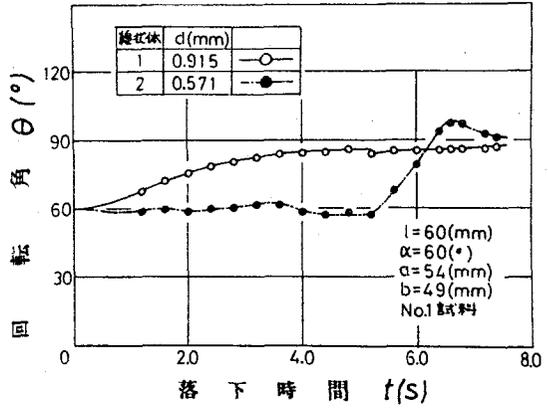
3.7.3 $d=0.571(mm)$ の線状体がカルマン渦の影響を 受ける場合

S.B.1が $d=0.915(mm)$ 、S.B.2が $d=0.571(mm)$ の落下特性を図3.34に示す。図(a)中の線状体の時間間隔は $\Delta t=0.4(s)$ である。落下開始直後、S.B.1の後端から発生する自由渦の影響を受けてS.B.2は鉛直方向に回転し始める。しかし、S.B.1の方が直径が大きいため、 $\dot{X}_2 < \dot{X}_1$ 、 $\dot{Y}_2 < \dot{Y}_1$ の状態が3番目の撮影位置付近($t=1.6(s)$ 程度)まで続き、S.B.1はS.B.2から離れていく。なお、3番目の撮影位置での両線状体の重心間距離は、水平方向が約70(mm)、鉛直方向が約65(mm)(初期位置での重心間距離は、 $a=54(mm)$ 、 $b=49(mm)$ であった。表3.3参照)である。このため、自由渦の影響は小さくなり、自由渦による θ_2 を減少させる向きの回転モーメントはS.B.2自身の θ_2 を増大させる向きの回転エネルギーよりわずかに小さく、1~3番目付近の領域で θ_2 はわずかに増大する傾向を示す。いっぽう、S.B.1の角速度 ω_1 は大きく、したがって、 \dot{X}_1 および \dot{Y}_1 の減速も大きいので、落下開始から1.6(s)程度経過すると $\dot{X}_1 < \dot{X}_2$ 、 $\dot{Y}_1 < \dot{Y}_2$ の状態になる。しかし、両線状体の速度差はあまり大きくない(とくに、 \dot{Y} の差が小さい)ので、S.B.2はS.B.1に徐々に近づく。したがって、S.B.2が受ける自由渦およびカルマン渦の影響は小さく、 θ_2 はほとんど変化しないかあるいはわずかに増大する状態が12番目の撮影位置付近($t=3.4(s)$ 程度)まで続く。この位置での重心間距離は、水平方向が約45(mm)、鉛直方向が約50(mm)であり、S.B.1の後方に発生しているカルマン渦の領域にS.B.2の先端から重心近くまでの部分が入るため、S.B.2は鉛直方向に回転し始め、重心速度も徐々に増大し始める。そして、カルマン渦の領域に重心を含めた先端部が入るようになり、13番目の撮影位置付近から θ_2 は大きく減少し始める。

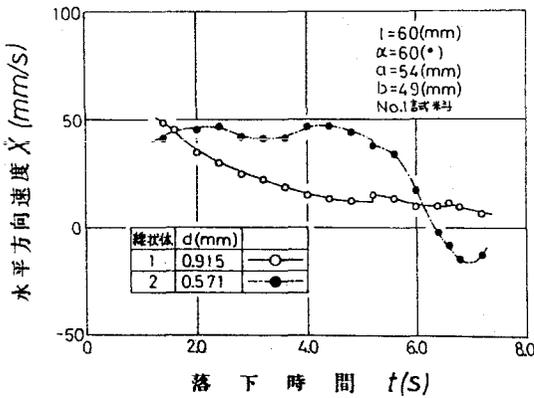
θ_2 の減少およびS.B.1の流れの影響を受けて \dot{X}_2 、 \dot{Y}_2 は急激に



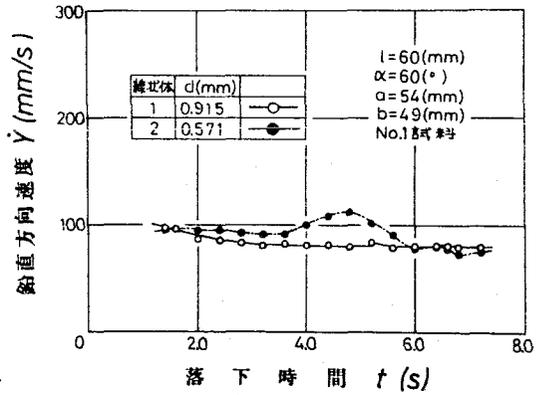
(a)



(b)



(c)



(d)

図3.34 複数の線状体の落下特性 (直径の影響)

$$d = 0.915, 0.571 \text{ (mm)}, \alpha = 60^\circ$$

$$L_0 = 30 \text{ (mm)}, \text{条件1}$$

増大し, S.B.2はS.B.1に近づくが, 17着目の撮影位置付近から, S.B.2の後端付近の一部を除き大部分がカルマン渦の領域に入るため, カルマン渦による θ_2 を減少させる向きの回転モーメントとS.B.2自身の θ_2 を増大させる向きの回転エネルギーが釣

合った状態になり、 θ_2 がほとんど変化しない状態が続き、21番目の撮影位置付近($t=5.2$ (s)程度)でS.B.2はS.B.1の先端に衝突し、 θ_2 は衝撃的に減少し、 \dot{X}_1 、 \dot{Y}_1 はともに衝撃的に増大する。なお、この衝突はS.B.2とS.B.1の速度差によって生じたものである。また、衝突する前に、S.B.2がすべてS.B.1の後方に発生しているカルマン渦の領域に入って運動する現象は、S.B.1とS.B.2の直径がともに $d=0.915$ (mm)で $\alpha=60^\circ$ 、 $L_0=70$ (mm)、条件2(図3.29)の $t=2.9\sim 3.6$ (s)程度の領域でも見られ、S.B.2はS.B.1の先端部分(先端から約3(mm)の位置)に衝突した。この場合、条件2(S.B.2の後端部が流れに入る場合)であるため、落下開始後間もなくS.B.1はS.B.2から離れていき、相対距離は初期位置での場合より大きくなり、その後、S.B.2の重心から先端部へ少し寄った部分がカルマン渦の領域に入るため、 θ_2 は除々に減少し始める。いっぽう、S.B.2の直径が $d=0.571$ (mm)の場合、落下開始後間もなくS.B.1とS.B.2の直径の差によって生ずる速度差のため、S.B.1はS.B.2から離れていき、相対距離は初期位置での場合より大きくなり、しばらくしてから θ_2 は減少し始める。以上のように、両実験において、落下開始後の領域でのS.B.1とS.B.2の運動状態が似ているため、上述の現象が見られたと考えられる。

S.B.2がS.B.1に衝突した後、 $\dot{X}_1 < \dot{X}_2$ 、 $\dot{Y}_1 < \dot{Y}_2$ の状態は続いているので、S.B.2は水平方向にはS.B.1から離れていき、鉛直方向には近づくが、S.B.2の直径がS.B.1のそれより小さいため、両線状体の速度差は小さく、S.B.2はS.B.1を追い抜くことはできない。しかし、S.B.2が水平方向に離れていくため、S.B.2の先端付近の一部を除き、後端部を含めた部分がS.B.1の後方のカルマン渦の領域に入る。したがって、 θ_2 を増大させる向き回転モーメントが作用し、 θ_2 は急激に増大し、 \dot{X}_2 、 \dot{Y}_2 はともに急激に減少する。そして、26~27番目の撮影位置付近で θ_2 は 90° を越え、 \dot{X}_2 は負となり、S.B.2はS.B.1

に近づき28番目付近($t=6.6$ (s)程度)でJ.B.1の後端部分(後端から約18(mm)の位置)に衝突する。しかし、 \dot{Y}_1 と \dot{Y}_2 はほぼ等しいため、 θ_1 はほとんど変化しない。

衝突後も、 $\dot{X}_2 < 0$ 、 $\dot{X}_1 > 0$ であるため、J.B.2はJ.B.1に水平方向には近づくが、 \dot{Y}_1 と \dot{Y}_2 はほぼ等しいため、鉛直方向には一定の間隔を保ったままである。このため、ふたたびカルマン渦の領域に入るJ.B.2の部分が増加し始め、角速度 ω を減少させながらJ.B.1の姿勢は水平方向に近づく。

ここで、1回目の衝突後の領域、すなわちカルマン渦の影響を受けてJ.B.2の姿勢および速度が急激に変化する領域において、J.B.2の直径が $d=0.915$ (mm)の場合の結果(図3.29)と $d=0.571$ (mm)の場合の結果を比較する。 $d=0.915$ (mm)の場合、 $t=3.6$ (s)程度で衝突するが、J.B.1とJ.B.2の直径が同じであるので、そのときのJ.B.2とJ.B.1の速度差は、 \dot{X} に関しては約35(mm/s)、 \dot{Y} に関しては約40(mm/s)と大きく、J.B.2はJ.B.1を追い抜き始める。その際、J.B.2の先端付近の一部を除いた部分がカルマン渦の領域に入るため、 θ_2 は急激に増大し、 \dot{X}_2 、 \dot{Y}_2 はともに急激に減少する。そして、 $t=4.2$ (s)程度でJ.B.2はJ.B.1の前方に出て運動し始める。これに対し、 $d=0.571$ (mm)の場合、衝突時のJ.B.2とJ.B.1の速度差は、 \dot{X} 、 \dot{Y} に関してそれぞれ約30(mm/s)、約20(mm/s)と $d=0.915$ (mm)の場合より小さく、J.B.2はJ.B.1の前方に出ることはできず、カルマン渦の影響を受け続けるため、姿勢および速度は大きく変化し続ける。このように、 $d=0.915$ (mm)と $d=0.571$ (mm)の運動状態に差が現われるのは、単一で運動する場合に見られる、直径が異なることによる速度差、すなわち同じ姿勢の場合、直径が大きいほど速度は大きいことが原因している。

つぎに、この項で述べた $d=0.571$ (mm)の線状体がカルマン渦の影響を受けて運動する場合の落下特性と3.7.1項および3.7.2項で述べたカルマン渦の影響を受けないで運動する場合

の結果(図3.31, 3.33)を比較する。衝突する前に流れの影響を受けて、後方の線状体の姿勢がほとんど変化しない状態が続き、一定の姿勢を保ったまま衝突する現象および衝突後流れの影響を受けて急激に姿勢および速度が変化する現象は、カルマン渦の影響を受けない場合には見られない。さらに、カルマン渦の影響を受けない場合、衝突からつぎの衝突までに要する時間は4~5(s)であるのに対し、カルマン渦の影響を受ける場合、2.5(s)程度である。また、複数で運動する場合の重心速度と基準値の差は、 \dot{X} , \dot{Y} ともにカルマン渦の影響を受ける場合の方が大きいことも分かった。

以上の結果から、後方の線状体の直径が異なると運動状態は多少異なるが、後方の線状体の角速度および重心の速度が急激に変化することおよび衝突からつぎの衝突までの時間が短いことなど、線状体の運動状態が大きく変化するのは、単一で運動する場合にも見られる、直径が異なることによる落下特性の違いによるのではなく、カルマン渦の影響によるものであることが明確になった。

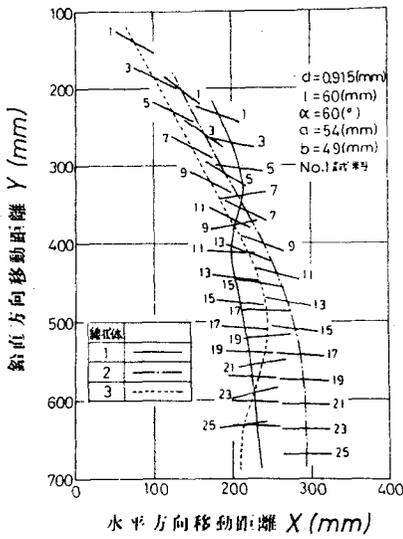
3.8 線状体本数の影響

3.5節~3.7節では、線状体の本数が2の場合について、初期角度、相対位置および直径が落下特性におよぼす影響を調べた。

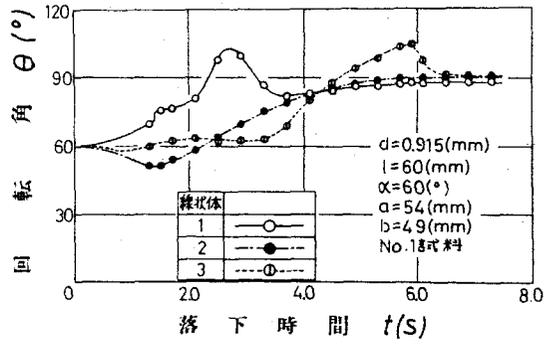
この節では、 $d=0.571, 0.915(mm)$, $\alpha=60^\circ$, $L_0=30(mm)$, 条件1(後方の線状体の先端部が流れに入る場合)で本数が3の場合の実験結果について述べ、本数2の結果と比較して本数を増した場合、落下特性がどのように変わるかを調べる。

3.8.1 $d=0.915(mm)$ の場合

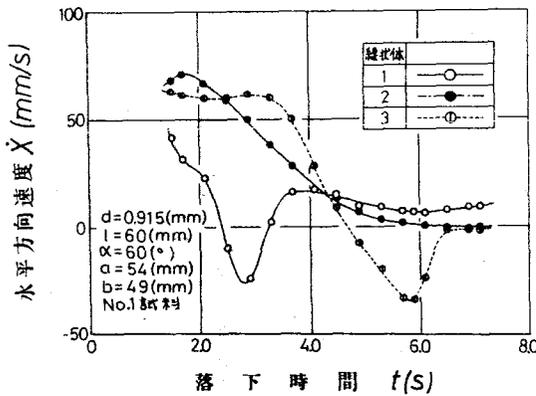
(i) 本数3の落下特性



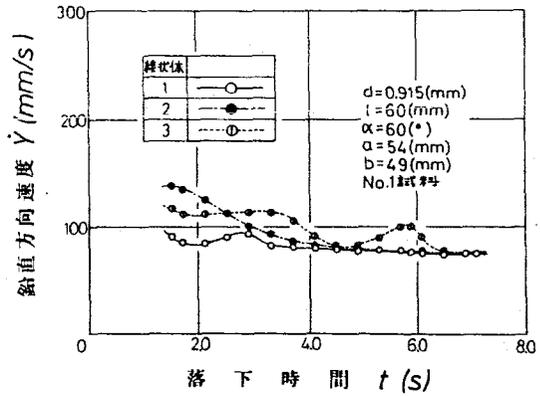
(a)



(b)



(c)



(d)

図3.35 複数の線状体の落下特性 (本数の影響)

$$d = 0.915 \text{ (mm)}, \alpha = 60^\circ$$

$$L_0 = 30 \text{ (mm)}, \text{条件 1}$$

$d = 0.915 \text{ (mm)}$ の落下特性を図3.35に示す。図(a)中の線状体の時間間隔は $\Delta t = 0.4 \text{ (s)}$ である。落下開始後間もなく S.B. 1 の後端から発生する自由渦の影響を受けて, S.B. 2 の姿勢は鉛直方向に回転し始める。 θ_2 が 60° から減少するため, \dot{X}_2, \dot{Y}_2

ともに増大し， $J.B.2$ は $J.B.1$ に急激に近づき，7~2番目の撮影位置付近（ $t=1.4(s)$ 程度）で $J.B.1$ の後端部分（後端から約 $\delta(mm)$ の位置）に衝突し， θ_1 は衝撃的に増大する。このため，衝突直後の領域で \dot{X}_1 ， \dot{Y}_1 は急激に減少する。

いっぽう， $J.B.3$ は， $J.B.2$ の後端から発生する自由渦の影響を受けて，鉛直方向に除々に回転し始めるが， $J.B.1$ の自由渦の影響で \dot{X}_2 ， \dot{Y}_2 が増大し， $\dot{X}_3 < \dot{X}_2$ ， $\dot{Y}_3 < \dot{Y}_2$ の状態になるため， $J.B.2$ が $J.B.3$ から離れていくので $J.B.2$ の自由渦の影響は小さくなる。したがって，自由渦による θ_3 を減少させる向きの回転モーメントより $J.B.3$ 自身の θ_3 を増大させる向きの回転エネルギーの方がわづかに大きくなり， $J.B.3$ は除々に水平方向に回転し始める。しかし， $J.B.2$ の角速度 γ_2 の方が γ_3 より大きいため，ふたたび， $J.B.3$ の先端部分が $J.B.2$ の自由渦の領域に大きく入るようになり，上述の回転モーメントと回転エネルギーが釣り合った状態になるため，6~10番目の撮影位置の範囲で θ_3 はほとんど変化しなくなる。

$J.B.2$ が $J.B.1$ に衝突した後， $J.B.2$ は $J.B.1$ の後端を通過して追い抜くので $J.B.1$ の後方に発生しているカルマン渦の影響を受けることなく，4番目の撮影位置付近（ $t=1.9(s)$ 程度）で完全に追い抜く。追い抜くとすぐに， $J.B.2$ の後方に発生しているカルマン渦（ $J.B.2$ の Re_n は約52である。）の領域に $J.B.1$ の後端部が入るため， $J.B.1$ は急激に水平方向に回転し始め， \dot{X}_1 は急激に減少し， \dot{Y}_1 は増大し，6~7番目付近で θ_1 は 90° を越え \dot{X}_1 は負となる。 $\dot{X}_1 < 0$ ， $\dot{X}_2 > 0$ ， $\dot{Y}_1 < \dot{Y}_2$ であるから， $J.B.1$ は $J.B.2$ に水平方向には近づくが，鉛直方向には離れるため， $J.B.2$ に衝突することはない。しかし， $J.B.1$ が水平方向負の向きに運動するため， $J.B.2$ の後方のカルマン渦の領域に入る部分が後端部から除々に重心の方へ移り，8番目の撮影位置付近（ $t=2.7(s)$ 程度）で θ_1 は最大（約 103° ）になる。その後も， $\dot{X}_1 < 0$ ， $\dot{X}_2 > 0$ の状態が続くため，カルマン渦の領域に

S.B.1の先端部分が入るようになり， θ_1 は急激に減少し始め， $t=3.2$ (s)程度で 90° より小さくなり， \dot{X}_1 は正になる。 θ_1 の減少および流れの影響を受けて \dot{X}_1 は増大するが，まだ $\dot{X}_1 < \dot{X}_2$ の状態にあるため，S.B.2はS.B.1から離れていき，13番目の撮影位置付近($t=3.7$ (s)程度)から，S.B.1はS.B.2の流れの領域外で運動し始める。

これまでのS.B.1とS.B.2の運動には，S.B.3はまったく影響をおよぼさないので，上述した，S.B.2がS.B.1に衝突し，追い抜き，その後カルマン渦の影響を受けてS.B.1の姿勢および速度が急激に変化するという運動状態は，他の条件が同じである線状体本数2の場合(図3.26の $t < 3.6$ (s)程度の領域)にも見られた。ただし，本数3の場合の方が，S.B.2がS.B.1に衝突した位置が後端に近かった(本数2の場合，後端から約14(mm)，本数3の場合，約8(mm))ため，衝突後S.B.1とS.B.2が交差して運動することなく，短時間のうちにS.B.1はカルマン渦の影響を受け始めるので，S.B.1の姿勢および速度の急激な変化は，本数2の場合より大きく(本数2の場合， θ_1 の最大値は約 95° ， \dot{X}_1 の最小値は約 -10 (mm/s)，本数3の場合，約 103° と -25 (mm/s))，したがって，S.B.2とS.B.1の距離は離れ，S.B.1はS.B.2の流れの領域外で運動し始める。これに対し，本数2の場合，流れの領域内で運動し続けるため，S.B.1は鉛直方向に急激に回転しながらS.B.2に近づき衝突する。以上のように，細かい点では多少異なるが，S.B.1とS.B.2の運動の概要は一致する。

いっぽう，S.B.3は6~10番目の範囲で姿勢をほとんど変化させないで運動を続けていたが，S.B.2の後方のカルマン渦の影響を受けて， \dot{X}_3 が負となり，S.B.1がS.B.3の下方に位置するようになるため，11番目の撮影位置付近($t=2.3$ (s)程度)からS.B.3はS.B.1の後方に発生しているカルマン渦の影響を受け始め，急激に水平方向に回転し始める。したがって， \dot{X}_3 ，

$\dot{\gamma}_3$ は急激に減少する。しかし、 $\dot{X}_1 < \dot{X}_3$ 、 $\dot{\gamma}_1 < \dot{\gamma}_3$ であるので、S.B.3はS.B.1に近づき、カルマン渦の領域にS.B.3の重心から後端にかけての部分が入るため、 θ_3 は増大し続け18番目の撮影位置付近で 90° を越え、 \dot{X}_3 は負になる。したがって、ふたたびカルマン渦の領域に入るS.B.3の部分が増加し始め、 \dot{X}_3 の絶対値および $\dot{\gamma}_3$ が増大するため、S.B.3はS.B.1に急速に近づき、23~24番目の撮影位置($t=5.8$ (s)程度)でS.B.1の後端付近を通り抜ける。S.B.3がS.B.1に衝突していないと考えたのは、そのときの θ_1 に衝撃的な変化が見られなかったからである。S.B.3の姿勢および速度が急激に変化している領域において、その相対位置から22番目の撮影位置付近まで、S.B.2の自由渦あるいはカルマン渦が、S.B.3の先端部分におよんでいたと考えられるが、S.B.3との距離はS.B.1の方が近いことおよびS.B.1のカルマン渦の領域にS.B.3のより多くの部分が入っていたことが原因で、S.B.1の後方の流れの影響を強く受けて、S.B.3は上述のような運動をおこなったと考えられる。また、この領域におけるS.B.3の角速度 $\dot{\gamma}_3$ および $\dot{\gamma}_3$ とS.B.2の流れの影響を受けて θ_1 が急激に増大した領域($t=1.9\sim 2.7$ (s)程度の領域)における $\dot{\gamma}_1$ および $\dot{\gamma}_1$ を比較すると、角速度はS.B.1の方が大きく、 $\dot{\gamma}_1$ はS.B.3の方が大きいことが分かる。これは、S.B.3の場合、S.B.2の流れが先端部分におよんでいるため、 θ_1 を減少させる向き回転モーメントが作用し、 θ_3 の増大を妨げたことおよびS.B.2の流れによって、S.B.3がさらに鉛直方向に引き込まれるように運動したことが原因している。

S.B.3がS.B.1の後端付近を通り抜け始めると、S.B.3の先端部分がS.B.1の後方のカルマン渦の領域に入るため、S.B.3は急激に水平方向に回転し、26番目の撮影位置付近でS.B.1の下方に位置し、S.B.1とほとんど離れず運動する。

いっぽう、S.B.1は $t=3.7$ (s)程度からS.B.2の流れの領

域外で運動し続けていたが、 X_1 の方がわずかに大きい状態が続いていたため、ゆっくり $S.B.2$ に近づき、28番目の撮影位置付近 ($t=6.7$ (s) 程度) から $S.B.2$ の後方のカルマン渦の領域に先端部が入り始めるため徐々に鉛直方向に回転し始める。

(ii) 本数3の場合と2の場合の落下特性の比較

3本の線状体が相互に干渉し合いながら運動する状態を詳細に述べた。以下では、本数3の場合と2の場合で運動状態がどのように変わるかを調べる。

本数3の場合、 $S.B.1$ が $S.B.3$ の流れの影響を受ける領域は、 $S.B.3$ が $S.B.1$ の下方に位置する26番目の撮影位置以後の領域 ($t>6.3$ (s) 程度) であるが、 $S.B.1$ と $S.B.3$ はほとんど離れないで運動するので、その影響は無視しうるほど小さい。いっぽう、 $S.B.2$ は $S.B.3$ の流れの影響をまったく受けない。したがって、 $S.B.1$ と $S.B.2$ の運動は、すでに述べたように他の条件が同じである本数2の場合 (図3.26) の運動と細かい点で多少異なるが、その概要は一致する。この場合の運動状態の違いは、 $S.B.2$ が $S.B.1$ に衝突する位置が少し異なったことが原因しており、 $S.B.1$ がカルマン渦の影響を受けて急激に鉛直方向に回転した後、本数3の場合、 $S.B.1$ が $S.B.2$ の流れの領域外で運動し始めるのに対し、本数2の場合、鉛直方向に回転しながら、 $S.B.1$ が $S.B.2$ に衝突するため、これ以後の両者の運動状態に差が見られる。しかし、本数3の場合にも、28番目の撮影位置付近 ($t=6.7$ (s) 程度) から $S.B.1$ の先端部が $S.B.2$ のカルマン渦の領域に入り始めるため、やがて、 $S.B.2$ に近づき衝突する現象が見られると考えられる。

つぎに、 $S.B.2$ と $S.B.3$ の運動について考える。落下開始後間もなく $X_3 < X_2$ 、 $Y_3 < Y_2$ の状態になるため、 $S.B.3$ が受ける $S.B.2$ の流れの影響は小さく $S.B.3$ の姿勢がほとんど変化しない状態が10番目の撮影位置付近まで続くが、11番目付近から

S.B.1の後方に発生しているカルマン渦の影響を受け始め、S.B.3は急激に水平方向に回転し始め、上述したような運動をおこなう。ここで、11番目以後の領域でS.B.1が無かったと仮定した場合、S.B.2とS.B.3の運動状態がどのようになるかを考える。

7番目の撮影位置付近から $\dot{X}_2 < \dot{X}_3$, $\dot{Y}_2 < \dot{Y}_3$ の状態になるため、 θ_3 はほとんど変化しないがS.B.3はS.B.2にゆっくり近づいており、S.B.3が受けるS.B.2の流れの影響は除々に増大する。したがって、S.B.3は鉛直方向に回転し始め、重心速度も除々に増大し始める。そして、S.B.2の後方のカルマン渦の領域に重心を含めた先端部が入るようになり、 θ_3 は急激に減少し始める。 θ_3 の減少およびS.B.2の流れの影響を受けて \dot{X}_3 , \dot{Y}_3 は急激に増大し、S.B.3はS.B.2に近づくが、S.B.3の後端付近の一部を除き大部分がカルマン渦の領域に入るため、カルマン渦による θ_3 を減少させる向きの回転モーメントとS.B.3自身の θ_3 を増大させる向きの回転エネルギーが釣り合った状態になり、 θ_3 がほとんど変化しない状態が続く。S.B.3はS.B.2の先端付近に衝突する。ここまでの領域では、S.B.2とS.B.3は、3.7.3項で述べた前方が $\alpha = 0.915$ (mm)の線状体、後方が $\alpha = 0.571$ (mm)の線状体の場合(図3.34)と良く似た運動をおこなうと考えられる。図3.34の場合にも、落下開始後間もなくS.B.1はS.B.2から離れていき、相対距離は初期位置での場合より大きくなった。

衝突後、S.B.3がS.B.2を追い抜き始めると、S.B.3の先端付近の一部を除き後端部を含めた大部分がS.B.2の後方のカルマン渦の領域に入るため、 θ_3 を増大させる向きの回転モーメントが作用し、 θ_3 は急激に増大し、 \dot{X}_3 , \dot{Y}_3 は急激に減少する。しかし、 $\dot{X}_2 < \dot{X}_3$, $\dot{Y}_2 < \dot{Y}_3$ の状態が続いているので、S.B.3はS.B.2の前方に出て運動し始める。S.B.3がS.B.2から離れていくと、S.B.3の後方に発生しているカルマン渦の領域にS.B.

2の先端部分が入るようになり、S.B.2は急激に鉛直方向に回転し始め、 \dot{x}_2 、 \dot{y}_2 とも急激に増大してS.B.3に近づき衝突する。

後方の線状体の姿勢がほとんど変化しない状態が続き、前方の線状体に衝突した後の領域では、S.B.2とS.B.3は、 $d=0.915$ (mm)、 $\alpha=60^\circ$ 、 $L_0=70$ (mm)、条件2の結果(図3.29)と良く似た運動をおこなうと考えられる。ただし、図3.29の場合、S.B.2がS.B.1に衝突した後、 x 方向につれるため、S.B.1はS.B.2の流れの領域外で運動し始め、S.B.1がS.B.2に衝突する現象は見られなかった。

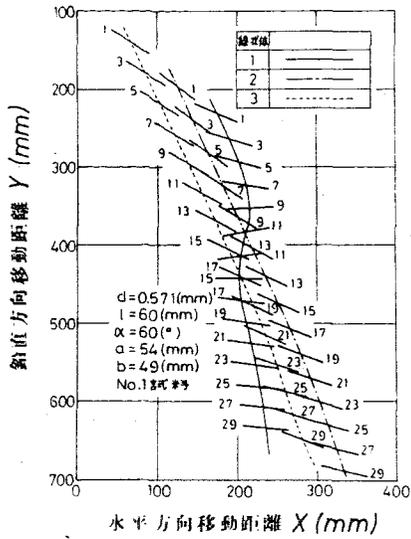
以上のように、11番目の撮影位置以後の領域で、S.B.3がS.B.1の流れの影響を受けないと仮定した場合、S.B.2とS.B.3の運動は、落下開始後間もなく前方の線状体が離れていき、相対距離が初期位置での場合より大きくなった後、後方の線状体が鉛直方向に回転し始めるような運動をおこなう場合の本数2の運動状態と良く似たものになると考えられる。

以上の結果から、線状体本数3の場合、S.B.1とS.B.2の運動状態は、本数2の場合とほとんど一致し、本数の影響を受けるのはもっとも後方に位置するS.B.3であり、落下開始後間もなくS.B.2が離れていくため、その姿勢はほとんど変化しない状態が続き、その後、S.B.1とS.B.2の両方の流れの影響を受けるようになり、S.B.1の流れの影響の方が強いため、S.B.1に近づく。このようにS.B.3は本数2の場合とまったく異なる運動をおこなう。

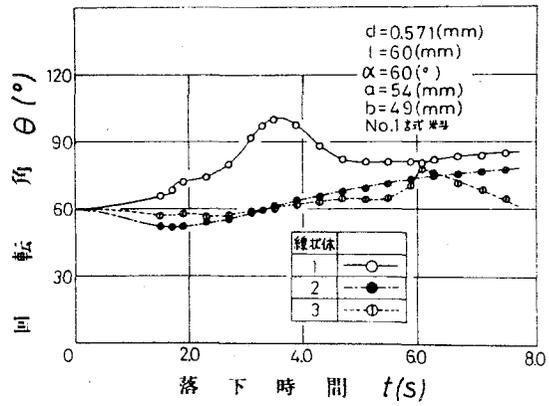
3.8.2 $d=0.571$ (mm)の場合

(i) 本数3の落下特性

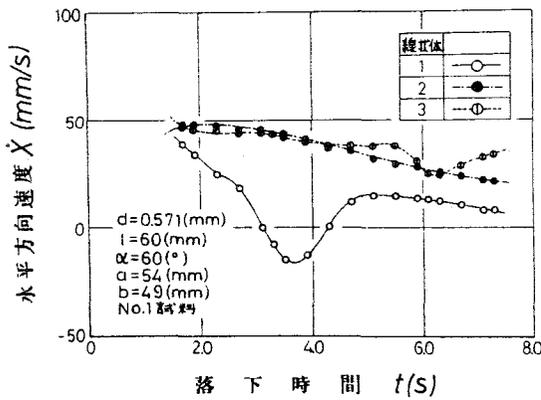
$d=0.571$ (mm)の落下特性を図3.36に示す。図(a)中の線状体の時間間隔は $\Delta t=0.4$ (s)である。落下開始後間もなくS.B.1の後端から発生する自由渦の影響を受けて、S.B.2は鉛直方



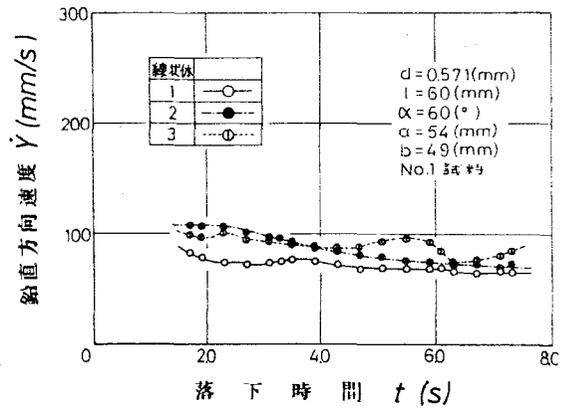
(a)



(b)



(c)



(d)

図3.36 複数の線状体の落下特性 (本数の影響)

$$d=0.571(\text{mm}), \alpha=60^\circ$$

$$L_0=30(\text{mm}), \text{条件1}$$

向に回転し始める。そのため、 \dot{X}_2, \dot{Y}_2 ともに増大し、S.B.2はS.B.1に近づき2番目の撮影位置付近 ($t=1.7(\text{s})$ 程度)でS.B.1の後端部分(後端から約4(mm)の位置)に衝突し、 θ_1 は衝撃的に増大する。

衝突後、J.B.2は4番目の撮影位置付近でJ.B.1を完全に追い抜き、追い抜くとすぐにJ.B.2の先端から発生している自由渦が、J.B.1の後端部におよぶため、 θ_1 を増大させる向きの回転モーメントが作用し、J.B.1は水平方向に急激に回転し始め、 \dot{X}_1 は急激に、 \dot{Y}_1 は徐々に減少し、J.B.2はJ.B.1にふたたび近づく。いっぽう、 θ_1 は9番目付近で 90° を越え、 $\dot{X}_1 < 0$ となり、J.B.1は水平方向負の向きに運動し始め、9~10番目の撮影位置($t=3.2$ (s)程度)でJ.B.2の後端部分(後端から約9(mm)の位置)に衝突する。その後も、 $\dot{X}_1 < 0$ 、 $\dot{X}_2 > 0$ 、 $\dot{Y}_1 < \dot{Y}_2$ の状態が続くため、J.B.1とJ.B.2は離れていき、J.B.2の後端から発生する自由渦がJ.B.1の後端部分におよび、先端から発生する自由渦が先端部分におよぶようになり、12番目の撮影位置付近($t=3.7$ (s)程度)で θ_1 は最大(約 100°)になる。

J.B.1は水平方向負の向きに運動し続けるので、J.B.2の後端から発生する自由渦がおよぶ位置が重心から先端部分の方へ移るため、J.B.1は急激に鉛直方向に回転し始め、 $t=4.3$ (s)程度で θ_1 は 90° より小さくなり、 \dot{X}_1 は正になる。 θ_1 の減少および流れの影響を受けて \dot{X}_1 は増大するが、まだ、 $\dot{X}_1 < \dot{X}_2$ の状態にあるため、J.B.2はJ.B.1から離れていき、19番目の撮影位置付近($t=5.1$ (s)程度)から、J.B.1はJ.B.2の流れの領域外で運動し始める。

$\alpha=0.571$ (mm)の場合、線状体の後方に発生する流れは自由渦だけであるのに対し、 $\alpha=0.915$ (mm)の場合、自由渦とカルマン渦が発生することおよび単一で運動する場合にも見られる、直径が異なることによる落下特性の違いによって、姿勢および速度の変化は定量的には、同一条件の $\alpha=0.915$ (mm)の場合(図3.35)と差が生ずるが、これまでのJ.B.1とJ.B.2の運動状態は定性的には良く一致している。

いっぽう、J.B.3は、J.B.2の後端から発生する自由渦の影響を受けて鉛直方向に徐々に回転し始めるが、J.B.1の自由

渦の影響で \dot{X}_2, \dot{Y}_2 が増大し、 \dot{X}_1, \dot{Y}_1 よりわづかに大きくなるため、J.B.2がJ.B.3からゆっくり離れていくので、J.B.2の自由渦の影響は小さくなる。したがって、自由渦による θ_3 を減少させる向きの回転モーメントとJ.B.3自身の θ_3 を増大させる向きの回転エネルギーが釣り合った状態を経て、8番目の撮影位置付近($t=2.9$ (s)程度)から回転エネルギーの方が大きくなり、 θ_3 は除々に増大する。やがて、J.B.2の流れの影響を受けて、J.B.1が水平方向負の向きに運動してJ.B.3の下方に位置するようになるため、17番目の撮影位置付近($t=4.7$ (s)程度)から、J.B.1の先端から発生する自由渦がJ.B.3の後端部分の重心寄りにおよぶようになる。いっぽう、 $t=4.3$ (s)程度から $\dot{X}_2 < \dot{X}_3, \dot{Y}_2 < \dot{Y}_3$ の状態になり、J.B.3はJ.B.2に近づき、自由渦の影響が増大しているので、J.B.1、J.B.2の自由渦による回転モーメントおよびJ.B.3自身の回転エネルギーの3者が釣り合い、 θ_3 がほとんど変化しない状態が $t=4.7 \sim 5.5$ (s)程度の範囲で続く。この間、 \dot{X}_3 はほとんど変化しないが、J.B.3が両方の自由渦に引き込まれるように運動するため、 \dot{Y}_3 は増大する。このため、J.B.3はJ.B.1およびJ.B.2に近づき、J.B.1の先端から発生する自由渦がおよぶ位置は重心から後端部の方へ移り、J.B.2の後端から発生する自由渦は先端部から重心の方へ移るため、 θ_3 を増大させる向きの回転モーメントの方が大きくなり、21番目の撮影位置付近($t=5.5$ (s)程度)からJ.B.3は水平方向に急激に回転し始め、 \dot{X}_3, \dot{Y}_3 は減少し、24番目の撮影位置付近($t=6.1$ (s)程度)で、J.B.3の後端部分がJ.B.1の先端部分に衝突する。この衝突は、主にJ.B.3の急激な回転によって生じたものである。このため、 θ_1 は衝撃的に減少する。

衝突後、J.B.3はJ.B.1の流れの影響を受けなくなり、J.B.2の自由渦の影響のみを受けるため、すぐに鉛直方向に回転し始め、 \dot{X}_3, \dot{Y}_3 は急激に増大する。いっぽう、J.B.1は28番目

付近でS.B.3に完全に追い抜かれるが、衝突によってZ方向に
づれるため、S.B.3の流れの影響を受けない。

ここで、前項で述べた $\alpha=0.915(mm)$ の結果(図3.35)と比
較する。落下開始から θ が急激に増大し始めるまでの領域(
 $\alpha=0.571(mm)$ の場合、 $t < 5.5(s)$ 、 $\alpha=0.915(mm)$ の場合、
 $t < 2.3(s)$ 程度の領域)におけるS.B.3の運動状態は、定性
的には $\alpha=0.915(mm)$ の場合と一致する。しかし、S.B.1とS.
B.2の両方の流れの影響を受けて、S.B.3が水平方向に急激に
回転し始めてからの運動状態は、自由渦とカルマン渦では後方
の線状体の運動におよぼす影響の大きさに差があることおよび
急激な回転を始めたときのS.B.3とS.B.1の距離が $\alpha=0.571$
(mm)の場合の方が小さく、短時間のうちにS.B.3がS.B.1に
衝突した($\alpha=0.571(mm)$ の場合、約 $0.7(s)$ 、 $\alpha=0.915(mm)$
の場合、約 $3.5(s)$)ため、S.B.1の流れの影響を受ける時間が
短かったことが原因で、 $\alpha=0.915(mm)$ の場合と異なる結果に
なった。すなわち、 $\alpha=0.915(mm)$ の場合、S.B.3はS.B.2の
流れの領域外で運動するようになったが、これに対し、 $\alpha=$
 $0.571(mm)$ の場合、S.B.2の流れの領域内で運動し続ける。

(ii) 本数3の場合と2の場合の落下特性の比較

前項の $\alpha=0.915(mm)$ の場合と同様に、S.B.1とS.B.2の運
動にはS.B.3の後方の流れはほとんど影響をおよぼさない($t >$
 $6.9(s)$ 程度の領域でS.B.3はS.B.1の下方に位置する。)ので
、S.B.1とS.B.2の運動は、 $\alpha=0.571(mm)$ 、 $\alpha=60^\circ$ 、 $L_0=70$ (
 mm)、条件1、本数2の結果(図3.31)と細かい点で多少異な
るが定性的には一致する。両者の運動状態の違いは、S.B.2が
S.B.1に衝突する位置が異なる(本数2の場合、後端から約 22
(mm)の位置、本数3の場合、後端から約 $4(mm)$ の位置)こと
に起因しており、S.B.1が自由渦の影響を受けて急激に鉛直方
向に回転した後、本数3の場合、S.B.1がS.B.2の流れの領域

外で運動し始めるのに対し、本数2の場合、J.B.1は流れの領域内で運動し続け、やがてJ.B.2に衝突する。

つぎに、J.B.3の運動について考える。落下開始後間もなく $X_3 < X_2$ 、 $Y_3 < Y_2$ の状態になるため、J.B.2の流れの影響は小さく、J.B.3の姿勢がゆっくり変化する状態が続き、 $t=4.7$ (s)程度からJ.B.1とJ.B.2の両方の流れの影響を受け始め、J.B.1の流れの影響の方が強いため、J.B.3はJ.B.1に衝突するが、J.B.1を完全に追い抜くとJ.B.2の流れの影響のみを受け始めるため、急激に鉛直方向に回転しながらJ.B.2に近づく。ここで、 $t > 4.7$ (s)の領域でJ.B.1が無かったと仮定した場合、J.B.3はJ.B.1の流れの影響を受けないため、もっと早くに鉛直方向に回転し始め、J.B.2に近づいて衝突すると考えられる。したがって、 $d=0.915$ (mm)の場合と同様に、 $d=0.571$ (mm)の場合にも、本数の影響を受けるのは、もっとも後方に位置するJ.B.3である。

以上の結果をまとめると、条件1(後方の線状体の先端部が流れに入る場合)、線状体本数3の場合、J.B.1とJ.B.2の運動状態は、本数2の場合と定性的にはほとんど一致し、本数の影響を受けるのはもっとも後方に位置するJ.B.3であり、落下開始後間もなくJ.B.2が離れていくため、その姿勢はほとんど変化しない状態が続き、やがて、J.B.1とJ.B.2の両方の流れの影響を受け始め、その運動はいっそう複雑になる。このように、本数3の場合、2本の線状体の後方に発生している流れの影響を同時に受けて運動することが特徴である。

3.9 線状体が集団で運動する場合の落下特性

前節までの結果から、100本程度の線状体を集団で連続的に落下させた場合、線状体は前方を運動している線状体群の流れの影響を受けて、姿勢および速度を大きく変えながら近づき、

衝突し、追い抜くというように相対位置を時々刻々変化させ、相互に干渉し合いながら運動するが、その運動状態は本教2あるいは3の場合よりはるかに複雑になることが予想される。

そこで、線状体が集団で運動する場合には、複数の線状体の運動を調べたときのように個々の線状体の姿勢および速度の変化に着目するのではなく、落下装置から水槽底面までの領域で運動しているある瞬間における線状体全体の状態に着目して、相互に干渉し合いながら運動することにより、同じ距離だけ鉛直方向に移動したとき、水平方向移動距離 X および姿勢 θ がどのように分布するかを調べる。さらに、相互に干渉し合いながら運動した結果、最終落下位置（水槽底面）で線状体がどのように配向するか、また、どのように分布するかを調べる。なお、繊維を取扱う実際の工程において、繊維が集団で運動した後、最終的にどのような配向および分布状態になるかは、製品品質との関連から非常に重要である。

つぎに、落下特性を求める方法について述べる。

(1) 運動中における水平方向移動距離および姿勢の分布

瞬間撮影した写真から、上方、中央部および下方の3種類の Y の値を中心にして、鉛直方向の幅 $20(mm)$ の領域にその重心が位置する線状体の水平方向移動距離 X および姿勢 θ を読取り、 X に関しては $10(mm)$ あるいは $20(mm)$ ごと、 θ に関しては 10° ごとの相対度数を求める。ただし、 $\alpha=7^\circ$ の場合、 Z 方向にも大きく広がるため、直角 Z 方向から撮影した2枚の写真上で、どれとどれが同一の線状体であるかを判断することが困難であり、 X 、 θ の読取りに誤差が大きく入るため、読取りはおこなわなかった。また、 $\alpha=20^\circ$ 、 60° の場合でも、 Z 方向に大きくづれた線状体は除外した。

(2) 最終落下位置での線状体の配向および落下点分布

本実験装置に設定した x 軸(図3.15)と最終落下位置での線状体の軸方向とのなす角度を配向角 β とし、 $-180^\circ < \beta \leq 180^\circ$ (反時計回りを正)の範囲で 5° あるいは 10° ごとの相対度数を求め、 $\beta = 0^\circ$ 近くに分布している場合ほど配向度が良いと評価する。また、落下点分布は、 x 軸と水槽底面との交点を中心にして、 $10(\text{mm})$ ごとに同心円を描き、同心円と同心円の間に位置する線状体重心の個数から求める。

以上のようにして落下特性を求め、同時におこなった単数の線状体の実験結果と比較して、単数の線状体の運動状態が、線状体が集団で運動する場合の平均的な運動状態と一致するかどうか、すなわち、集団の場合、運動状態は単数の場合の運動状態の回りではらっているだけなのか、あるいは、まったく別の状態になるのかも合わせて調べる。

3.9.7 運動中における水平方向移動距離および姿勢の分布

$d=0.571(\text{mm})$, $\alpha=60^\circ$ の線状体群の運動状態を図3.37に示す。線状体は前方を運動している線状体群の流れの影響を受けて、相対位置を時々刻々変化させ、相互に干渉し合いながら運動するため、その運動状態は、本数2あるいは3の場合よりはるかに複雑であり、鉛直方向に同じ距離だけ移動したときの水平方向移動距離 X および姿勢 θ は非常にばらついている。とくに、水槽の中央部で運動している線状体の姿勢が大きくばらついており、しかも、下方の領域で運動している線状体の姿勢より傾いていることが分かる。これは、前方を運動し

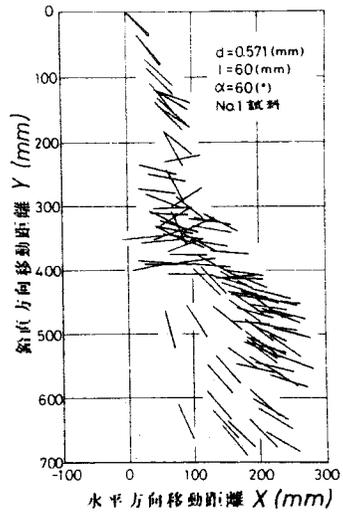


図3.37 線状体群の運動状態

ている線状体の本数が、下方の領域での場合に比べて中央部での場合の方が多いため、線状体群が運動することによって発生する流れの影響をより大きく受けるからである。

そこで、線状体群が相互に干渉し合いながら運動することにより、同じ距離だけ鉛直方向に移動したとき、水平方向移動距離 X および姿勢 θ がどのように分布するかを調べる。

図3.38に $d=0.571(mm)$ 、 $\alpha=60^\circ$ の結果を示す。この図には、線状体が単で運動するときの落下軌跡と線状体を集団で連続的に落下させた場合の X と θ の分布が併記されている。なお、 X と θ の分布を求めた位置 Y は一点鎖線で表わしてある。

線状体が集団で運動する場合の運動状態と比較するため、単数の線状体の落下実験は図3.15に示した集団の落下実験で用いた落下装置を用いておこなっているため、線状体の先端部分が落下装置の収納部から離れるにつれて、自重によりその姿勢は徐々に鉛直方向に回転する。したがって、線状体が落下装置から完全に離れたときの姿勢は、初期角度より小さくなっており、 $d=0.571(mm)$ 、 $\alpha=60^\circ$ の場合、約 40° である。このため、落下開始直後の運動状態は、第2章で述べた単数の線状体の運動状態と異なり、重心の運動方向がいったん鉛直方向に近づいた後、水平方向に回転し始める。しかし、その後の運動状態は同じであり、重心の軌跡は変曲点をもつ曲線になり、姿勢は徐々に水平方向に近づき、これに伴ない水平方向および鉛直方向の速度は減速される。

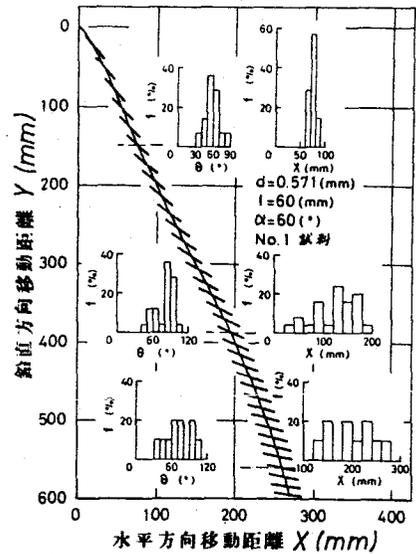


図3.38 水平方向移動距離および姿勢の分布

これに対し，線状体が集団で運動する場合，鉛直方向に同じ距離だけ移動したときの X および θ の値はばらついており，その分布の範囲は，中央部（ $Y=390(mm)$ 程度）での場合が下方の領域（ $Y=560(mm)$ 程度）での場合よりわずかに広く，上方の領域（ $Y=150(mm)$ 程度）での場合がもっとも狭い。

上方の領域で運動している線状体は，前方の線状体群の流れの影響を受け始めてからの時間が短いためばらつきが小さく，いっぽう，下方の領域で運動している場合，その前方を運動している線状体の本数が中央部での場合と比べて少ないため，流れの影響を受けている時間が長い割にはその影響が小さく， X および θ が分布する範囲が中央部での場合と比べてわずかに狭くなったと考えられる。

このような傾向は， $d=0.571(mm)$ ， $\alpha=20^\circ$ の結果，図3.39および $d=0.915(mm)$ ， $\alpha=60^\circ$ の結果，図3.40において，初期角度および直径が異なる場合にも見られる。

つぎに，線状体が集団で運動する場合の X および θ の平均値

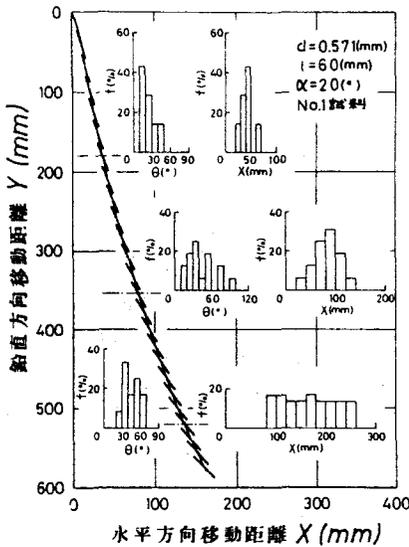


図3.39 水平方向移動距離および姿勢の分布

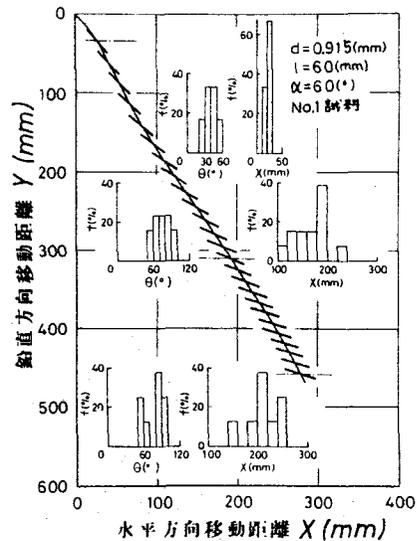


図3.40 水平方向移動距離および姿勢の分布

と単数の場合の X および θ の値を比較する。表3.4から、同一鉛直方向移動距離に対する θ の値は、直径、初期角度にかかわらず、集団で運動する場合の方が大きいことが分かる。したがって、 X の値は初期角度の影響を受け、 $\alpha=20^\circ$ のとき、集団で運動する場合の方が大きい、 $\alpha=60^\circ$ のとき、逆に単数の場合の方が大きくなる。これは、つぎの原因による。

単数の場合、重心の水平方向速度 \dot{x} は $\theta=40^\circ\sim 45^\circ$ まで加速され、これ以上の領域では減速される。このため、 $\alpha=20^\circ$ (落下装置から線状体が完全に離れたときの姿勢は約 15° である。)の場合、加速状態にあり、 θ が大きい方が \dot{x} は大きくなり、 $\alpha=60^\circ$ (落下開始直後の姿勢は約 40° である。)の場合、すぐに減速状態に入るため、 θ が大きい方が \dot{x} は小さくなるからである。

以上のように、集団で運動する場合、線状体は線状体群の流れの影響を受けて運動するため、その平均的な運動状態は単数の場合の運動状態と一致しない。

また、集団で運動する場合の各位置における姿勢の差と単数の場合のそれを比較すると、集団の場合、上方の領域から中央部へ移動する間の姿勢の変化は、単数の場合より大きく、逆に、中央部から下方の領域へ移動する間の変化は小さい。さらに、各位置における集団の場合と単数の場合の姿勢を比較すると、両者の差は中央部における場合がもっとも大きい。これらの結果からも、中央部で運動している線状体が、前方の線状体群の流れの影響をもっとも大きく受けていることが分かる。

表3.4 集団の場合の X , θ の平均値と単数の場合の X , θ の値の比較

線状体直径 d (mm)	初期角度 α ($^\circ$)	集 団		単 一	
		\bar{X} (mm)	$\bar{\theta}$ ($^\circ$)	X (mm)	θ ($^\circ$)
0.571	20	40.6	24.2	36.3	20.8
		84.1	42.3	80.2	27.9
		161.6	45.3	136.9	39.1
	60	72.4	59.4	74.8	47.5
		122.8	81.0	193.7	67.2
		198.4	71.3	259.7	80.8
0.915	20	18.0	14.0	15.3	15.6
		92.4	36.5	93.4	32.1
		222.1	63.1	176.9	47.6
	60	22.0	39.4	27.1	40.7
		168.0	75.4	192.5	67.3
		213.0	77.8	280.5	72.9

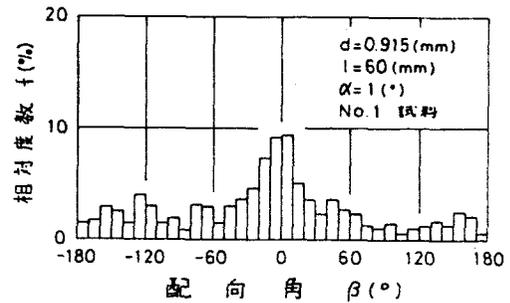
l = 60 (mm), No. 1 試料

3.9.2 最終落下位置での線状体の配向および落下点分布

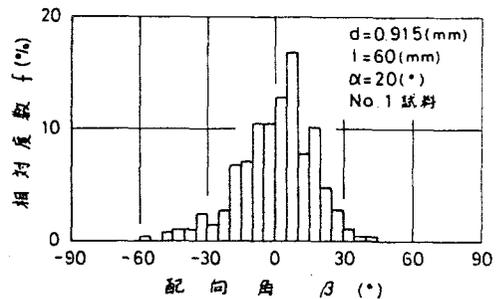
$\alpha = 0.915$ (mm), $\alpha = 1^\circ, 20^\circ, 60^\circ$ の配向度を図3.41(a)~(c)に

示す。 $\alpha = 1^\circ$ の場合, $\beta = 0^\circ$ 付近 ($\beta = 0^\circ$ は x 軸方向であり, この方向に α だけ傾けて線状体を落下させた。)にもっとも多く分布するが, 分布する範囲は全円周におよんでいる。これに対し, $\alpha = 20^\circ, 60^\circ$ の場合, この範囲は $-50^\circ < \beta < 50^\circ$ 程度に狭くなる。ことが分かる。この結果は $\alpha = 0.571$ (mm) の場合にも得られている。

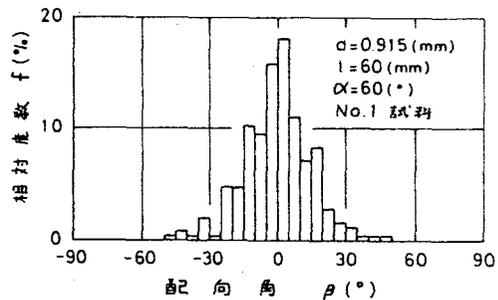
このように, $\alpha = 1^\circ$ の場合, 配向度は非常に悪いが, 図3.43に示す最終落下位置での線状体の状態を見れば分かるように, その軸方向は x y 座標の原点, すなわち, 初期位置の方向にほとんど向いている。なお, $\alpha = 20^\circ, 60^\circ$ の場合にも同様の結果になる。したがって, 本実験で用いたような直線の線状体が静止流体中において集団で運動する場合にも, 線状体はほぼ一平面内で運動すると考えてよい。そして, 初期角度が小さい場合, 初期状態のみでは運動面が決まらないため配向度が悪くなり, 初期角度が大きくなるにつれて, 運動面が x y 面に決まり易くなるため, その方向に良く配向するようになると思われる。



(a)



(b)



(c)

図3.41 線状体の配向(実験結果)

この結果は、線状体が単一で運動する場合にも得られており、この場合、他の線状体の運動に伴なって発生する流れの影響を受けないので、集団の場合に比べて配向度は良い。

表3.5に配向角 β の平均値および標準偏差を示す。初期角度が大きいほど β のばらつきは小さく、配向度が良くなることおよび直径が大きい方があつかに配向度が良いことが分かる。

また、 β の分布はガウス分布に従うと考えられるので、表3.5の値を用いて各区間における確率を計算した。その結果を図3.42(a)~(c)に示す。図3.41と図3.42を比較すれば分かるように実験結果と計算結果はほぼ一致する。

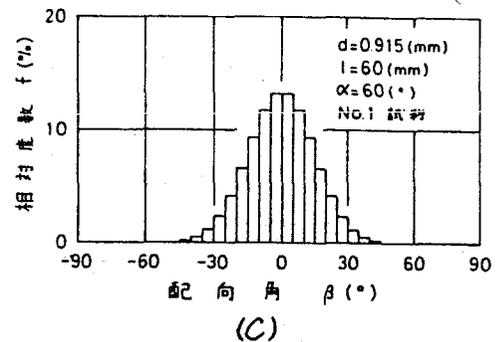
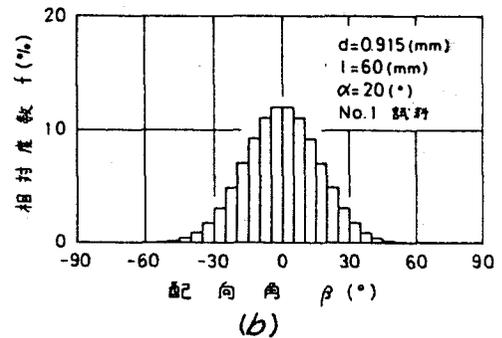
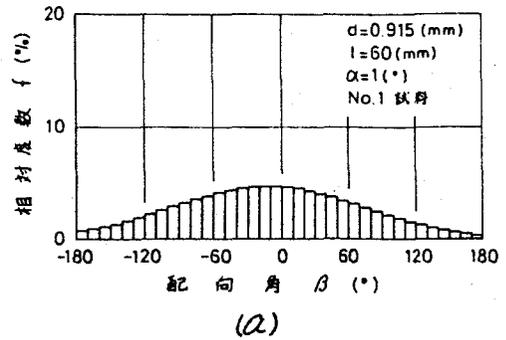


図3.42 線状体の配向 (計算結果)

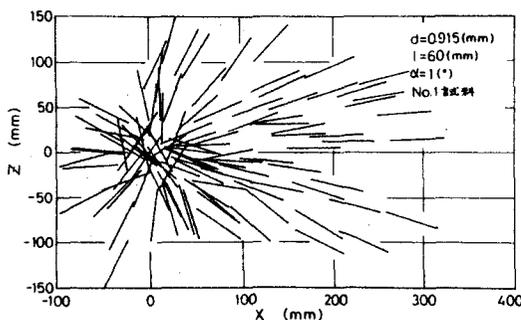


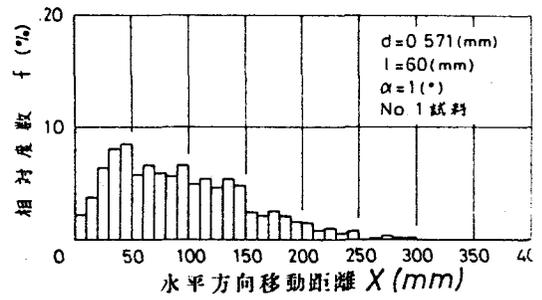
図3.43 線状体の落下状態

表3.5 X, θ の平均値と標準偏差

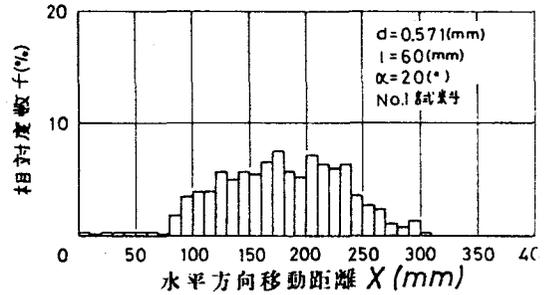
線状体直径 d (mm)	初期角度 α (°)	水平方向移動距離		配向角	
		平均値 \bar{X} (mm)	標準偏差 σ_x (mm)	平均値 $\bar{\beta}$ (°)	標準偏差 σ_β (°)
0.571	1	93.2	57.4	-12.8	92.6
	20	178.0	54.2	0.3	17.5
	60	196.1	76.5	5.8	16.9
0.915	1	120.0	79.3	-11.5	84.3
	20	234.9	52.9	0.4	16.3
	60	—	—	-0.1	14.7

$l = 60$ (mm), No. 1 試料

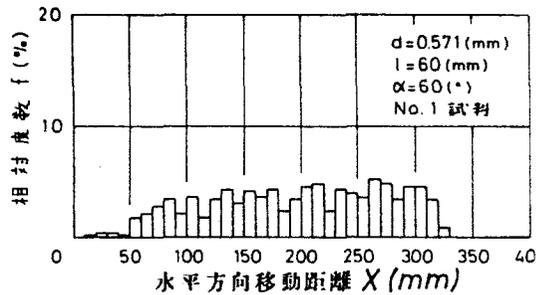
つぎに、 $d=0.571(mm)$ 、 $\alpha=1^\circ$ 、 20° 、 60° の落下点分布を図3.44 (a)~(c)に示す。上述の結果から、初期角度が大きくなるにつれて線状体が運動をおこなう平面のばらつきが小さいので、線状体群が運動することによって発生する流れの影響を大きく受けるようになる。したがって、落下点分布は、初期角度が大きくなるにつれて一様な分布に近づく傾向が見られ、 $\alpha=60^\circ$ の場合、 $X=100\sim 320(mm)$ 程度の範囲でほぼ一様な分布になる。また、表3.5から水平方向移動距離 X の標準偏差は、直径あるいは初期角度に対して一定の傾向を示さないことが分かる。



(a)



(b)



(c)

図3.44 糸状体の落下点分布

3.10 結 言

本章では、静止流体中を直線の線状体が、複数(2本あるいは3本)で同時に自由落下する場合と100本程度集団で連続的に自由落下する場合について実験的研究をおこない、単一で運動する場合と比較して、線状体が相互に干渉し合いながら運動するとき、その運動状態がどのように変わるかを調べた。また、初期位置での線状体の相対位置、初期角度、直径および線状体の本数が落下特性におよぼす影響を明らかにした。さらに、線状体が単一で運動するとき、その運動に伴って発生する流れ状態を観察した。

得られた結果を要約すると、つぎの通りである。

- (1) 線状体が単一で運動するとき、背後には軸方向に沿って発達する境界層と伴流が重なり合った流れの領域が発生し、さらに、後端から一對の自由渦が生ずる。また、 Ren が50程度を越えると、伴流は双子渦からカルマン渦へ変化し、流れ状態が大きく変わる。
- (2) 線状体が複数で運動する場合、前方の線状体の運動に伴って発生する流れの影響を受けて、後方の線状体が姿勢および速度を大きく変えながら近づき、衝突し、追い抜くというように相対位置を時々刻々変化させ、相互に干渉し合いながら運動を続ける。
- (3) 初期角度が大きいほど、線状体が相互に影響をおよぼし合う度合は強く、しかも、長時間にわたって続く。したがって、運動中の姿勢の変化および速度の変化は大きく、その運動状態は複雑になる。

(4) 初期位置での相対距離が大きい方が、落下開始直後の領域で後方の線状体が受ける前方の線状体の流れの影響は小さい。また、線状体の後端部が流れに入っている場合、落下開始直後の領域で、いったん相対距離は初期位置での場合より大きくなる。したがって、両場合ともに、最初の衝突までの時間は長く、前方の線状体のより先端に近い位置に衝突する傾向がある。

(5) 直径が大きい方が、後方の線状体の角速度および速度が急激に変化し、衝突からつぎの衝突までの時間は短い。これは、単一で運動する場合にも見られる直径が異なることによる落下特性の差ではなく、直径が大きい場合発生するカルマン渦の影響によるものである。

(6) 線状体の本数3の場合、本数の影響を受けるのは、初期位置でもっとも後方に位置する線状体であり、2本の線状体の後方に発生している流れの影響を同時に受けるため、その運動は、いっそう複雑になる。

(7) 線状体が複数で運動する場合、自由渦あるいはカルマン渦の影響を受けて θ が減少している領域では、 $\dot{\theta}$ は単一で運動する場合より小さく、逆に、 θ が増大している領域では大きくなる。いっぽう、 $\dot{\gamma}$ は流れの影響を受けている領域では、つねに大きい。また、両者の差は、 $\dot{\theta}$ 、 $\dot{\gamma}$ ともにカルマン渦の影響を受けている場合の方が大きい。

(8) 集団で運動する場合、線状体は、線状体群の後方に発生している流れの影響を受けるため、その平均的な運動状態は、単一で運動する場合と一致しない。また、初期角度が大きくなるにつれて最終落下位置での線状体の配向は良くなり、落下点分布は一様な分布に近づく。

第4章 矩形管内流れ中における線状体の運動

4.1 緒言

繊維工業の各種工程において繊維あるいは繊維集団を流体輸送する技術は広く応用されており，それに関する研究も，生産性，省力化ならびに製品品質と関連させて数多くおこなわれている。このように応用面で先行している繊維の流体輸送も，その基本的事項，たとえば管内流れ中で繊維がどのような姿勢でどのように運動するか，またその運動が繊維製品の品質にどのように影響するかなどほとんど不明である。

いっぽう，管内流れ中での繊維の運動に関する研究としては，オープンエンド精紡機のユーミングローラとロータ入口間の短いダフト中を空気輸送される繊維の速度を調べた Ripka³⁾の研究，縮小管を使用して流れ方向に繊維を配列させる方法に関する Edberg⁴⁾の研究，同じく縮小管の代わりに，主流を横断する空気ジェットを用いて繊維の配列化を計った Bangert⁵⁾の研究，さらに真直な管路中を気流によって運ばれる繊維の速度，姿勢など，その挙動に関する宇野⁶⁾の研究などがある。しかし，それらはいずれも現象論にとどまり，深く解析的に研究されたものは少ない。

本章では，繊維のもっとも簡単なモデルとして直線の線状体を考え，線状体が単一で低速の矩形管内流れ中を自由落下する場合について実験的研究をおこない，この現象の基本事項をは握し，あわせて第6章で解析的研究をおこなうための基礎データを得ようとするものである。

生産工程では，繊維は気流中および液中で運動する場合が大部分であるが，線状体の観察，実験は水中の方が容易であることから，水中で線状体の落下特性および諸要因の

影響を調べることにした。さらに、静止流体中での線状体の運動との比較もあわせておこなう。

4.2 矩形管内流れ中における線状体の落下実験装置

実験装置の概要を図4.1に示す。貯水タンク⑨に貯えられた水は、ポンプ⑪によりポンプ流量調節用バルブ⑫を経てヘッドタンク①へ導かれる。ヘッドタンクにはオーバーフロー装置が備わっており、位置水頭が一定に保たれる。ヘッドタンクを出た水は流量測定用オリフィス②を通り、流量調節用バルブ④を経て整流部⑤へ入る。整流部では整流格子⑬および整流用金網⑭により、下流側の整流用金網から流出した流れはほぼ一様な流れとなり、線状体が落下運動をおこなうテスト部⑥へ入る。テスト部を通過した流れは、流量調節用バルブ⑧を経て、ふたたび貯水タンクへ排出される。なお、ヘッドタンクでオーバーフローした水も、排水パイプ⑬を通り貯水タンクへ排出される。このように、本実験装置の流れは循環型になっている。

流量調節は流量調節用バルブ④および⑧でおこない、この流量に対応する貯水タンクからヘッドタンクへの送水量は、ポンプ用バルブ⑫により調節する。

流量調節は流量調節用バルブ④および⑧でおこない、この流量に対応する貯水タンクからヘッドタンクへの送水量は、ポンプ用バルブ⑫により調節する。

- | | |
|------------|-----------|
| ① ヘッドタンク | ⑨ 貯水タンク |
| ② オリフィス | ⑩ 循環用パイプ |
| ③ マノメータ | ⑪ ポンプ |
| ④ 流量調節用バルブ | ⑫ ポンプ用バルブ |
| ⑤ 整流部 | ⑬ 排水用パイプ |
| ⑥ テスト部 | ⑭ 案内月根 |
| ⑦ 線状体落下装置 | ⑮ 金網 |
| ⑧ 流量調節用バルブ | ⑯ 整流格子 |

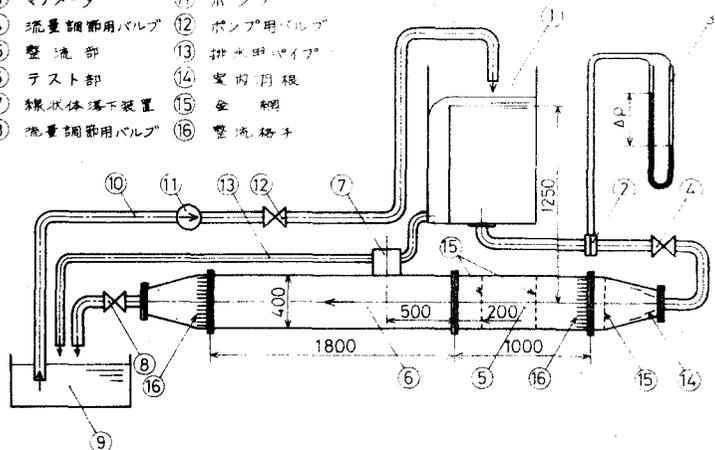


図4.1 実験装置概要

また、オリフィスの差圧は、四塩化炭素を用いたU字管マノメータ③で測定する。

テスト部は、断面内側寸法が幅100(mm)、高さ400(mm)で、厚さ10(mm)の透明アクリル板で製作した。また、4.3節“線状体の落下実験方法”で述べるように、線状体の運動を調べるためにマルチストロボ撮影をおこなうので、撮影の背景となる後面には、ストロボランプの光が反射して線状体の落下状態が不鮮明にならないよう、つや消し黒色塗装した。

線状体落下装置⑦は、テスト部上側に隣接しており、テスト部である矩形管内部の流路とは切り離されている。これは、流れを落下装置が乱さないようにするためである。線状体落下装置の底面とテスト部上面には、4×65(mm)のスリットが設けてあり、落下装置とテスト部はこのスリットでつながっているだけである。

4.3 矩形管内流れ特性

整流部を通過した流れはほぼ一様流になっているので、線状体が運動するテスト部では、流れが発達している(テスト部は流れの助走域である。)と考えられる。そこで、線状体の落下実験をおこなう前に、テスト部での流速分布を調べる必要がある。

4.3.1 矩形管内流れの流速分布測定方法

本実験では、矩形管内の平均流速は、最大80(mm/s)と低速であるため、ピトー管等による測定は困難であり、流速分布の測定はトレーサ法でおこなった。トレーサ粒子としてアルミ微粉末およびポリスチレンビーズを用い、一定の露出時間、一定の露出間隔でトレーサ粒子の描く軌跡を

流速分布の測定は、平均流速 $U = 20$ (mm/s) と 80 (mm/s) についておこなった。これは、線状体の落下実験を $U = 20, 40, 60, 80$ (mm/s) でおこなうため、その最小および最大の流速分布を知ること、その間の流速に関する予測できると判断したからである。なお、円板の回転数は $U = 20$ (mm/s) の場合、 $N = 60$ (r.p.m.)、 $U = 80$ (mm/s) の場合、 $N = 120$ (rpm) とした。

4.3.2 矩形管内流れの流速分布算出方法

トレーサ法で流速分布を測定した際に撮影されたトレーサ粒子の軌跡の一例を図4.3に示す。この図は、 $U = 20$ (mm/s)、測定位置はテスト部の上流側で、矩形管底面からの高さが 40 (mm) の場合である。この図で、短い線で写っているのが、トレーサ粒子の描く軌跡である。穴あき回転円板により光が断続的に当たるため、このような一直線上にならんだ短い線となって撮影されたのである。また、上下両端に直線で写っているのは、流路を構成しているアクリル板である。

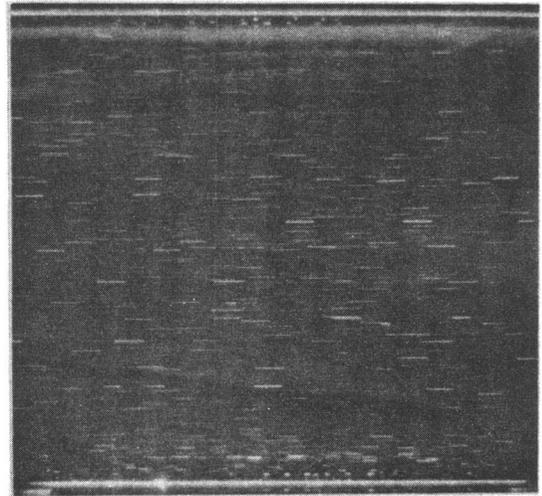


図4.3 矩形管内流速分布撮影例

つぎに、撮影されたトレーサ粒子の描く軌跡を用いて流速を求める方法について述べる。

図4.4にトレーサ粒子の軌跡の模式図を示す。 H は流路の幅であり、実際の長さは4.2節で述べたように 100 (mm) である。 L はトレーサ粒子が回転円板/回転当りに描く軌跡の長さである。なお、 L' はトレーサ粒子が光っている長

さて，回転円板の穴の中心角が 90° であるから， $\theta' = \theta/4$ となり， θ の代わりに θ' を用いても流速が計算できる。また， Z は壁面からトレーサ粒子の軌跡までの距離である。

H と θ （あるいは θ' ）を写真面上で測定すれば，次式から流速 U (mm/s) を求めることができる。

$$U = (5/3) \theta \cdot N / H \quad (4.1)$$

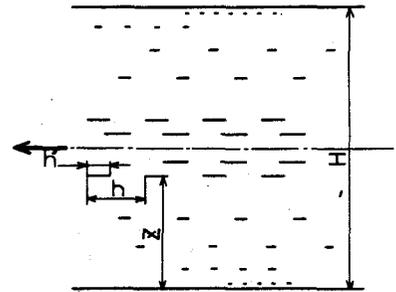


図4.4 トレーサ粒子軌跡の模式図

ただし， N は円板回転数 (rpm) であり， θ ， H の単位はmmである。

また，壁面からトレーサ粒子までの距離 Z は，次式から本実験装置で設定した Z 座標に換算できる。

$$Z = 100 z / H - 50 \quad (4.2)$$

以上のようにして， Z の位置での流速 U を $-50 \leq Z \leq 50$ (mm)の範囲で数十点求めることによって，その写真の位置における Z 方向の流速分布が得られる。そこで，図4.2に示した $-200 \leq Y \leq 200$ (mm)の範囲内の各測定位置で， Z 方向の流速分布を求めると，流速分布が3次元的に得られる。

4.3.3 矩形管内流れの流速分布測定結果

平均流速 $U = 80$ (mm/s) の場合の測定結果を図4.5, 4.6に示す。なお，各位置での流速は平均流速 U で無次元化し，位置 Y ， Z はそれぞれの最大値 ($Y_{max} = 200$ (mm), $Z_{max} = 50$ (mm)) で無次元化し，*の印を付けて表わす。

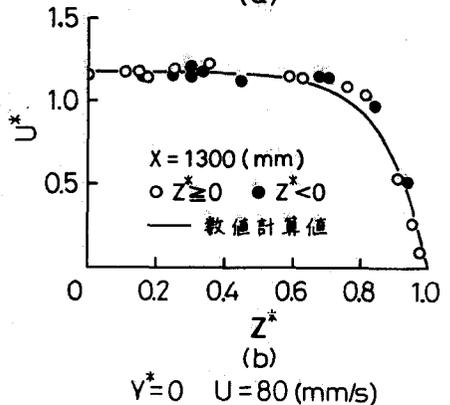
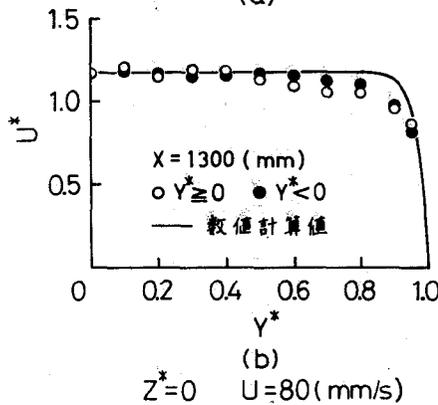
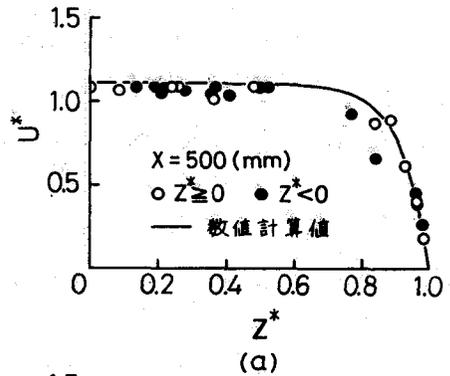
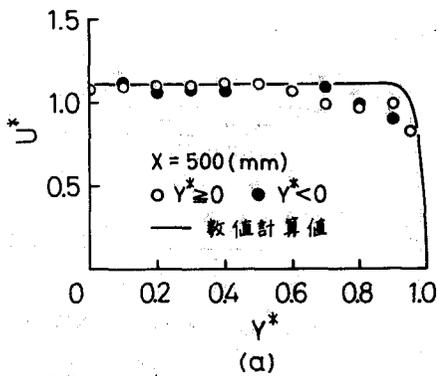


図4.5 矩形管幅方向流速分布

図4.6 矩形管高さ方向流速分布

図4.5は、矩形管高さ方向の中心 $Y^* = 0$ における幅方向の流速分布を示し、(a)は上流側の測定部、(b)は下流側の測定部での結果である。また、○印は $0 \leq Z^* \leq 1$ 、●印は $-1 \leq Z^* < 0$ における流速測定値である。

Y方向の各位置で、幅方向の流速分布が求まっているので、矩形管幅方向の中心 $Z^* = 0$ の位置の値だけ抜き出して、 $Z^* = 0$ における高さ方向の流速分布を作成した結果が図4.6である。(a)は上流側測定部、(b)は下流側測定部での結果である。

図4.5 および図4.6において，流速分布はXY面，XZ面に対してほぼ対称となり，上流側測定部では，流速は $-0.6 < Z^* < 0.6$ および $-0.6 < Y^* < 0.6$ の範囲でほぼ一様となり，下流側測定部では， $-0.4 < Z^* < 0.4$ および $-0.5 < Y^* < 0.5$ の範囲でほぼ一様になる。また，矩形管中心部の流速（最大流速）は，上流側で約1.08であり，下流側で約1.18となり，線状体が運動をおこなうテスト部で，わづかごがあるが流れが発達していることが分かる。なお，ここには記載しないが，平均流速 $U=20$ (mm/s)の場合，流速が小さいため境界層の発達が早く，最大流速は上流側で約1.15，下流側で約1.35となり， $U=80$ (mm/s)の場合に比べて大きい。

4.3.4 矩形管内流れの流速分布の数値計算

20

矩形管内の助走域での層流の理論解析に関しては， H_{2n} が境界層方程式の慣性項を線形化するという手法に基づいて計算している。第6章において，矩形管内の助走域での線状体の運動を数値計算する場合，流速分布が必要になるので，ここでは，この H_{2n} の方法について述べるとともに数値計算により流速分布を求め，測定結果と比較してこの計算式が十分使用できることを示しておく。

図4.7に示すように，矩形管断面中心を原点(0)とし，軸方向にx軸，高さ方向にy軸，幅方向にz軸を定め，矩形管の幅を $2b$ ，高さを $2a$ とする。

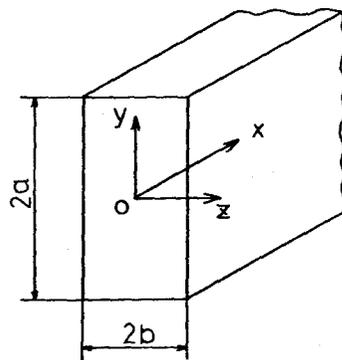


図4.7 座標系

ここで，流速を $v(u, v, w)$ とすると，流体の運動方程式はナビエ-ストークスの式で表わされる。

$$\left. \begin{aligned} \frac{\partial u}{\partial t} + u \frac{\partial u}{\partial x} + v \frac{\partial u}{\partial y} + w \frac{\partial u}{\partial z} \\ = -\frac{1}{\rho} \frac{\partial p}{\partial x} + \nu \Delta u \\ \frac{Dv}{Dt} = -\frac{1}{\rho} \frac{\partial p}{\partial y} + \nu \Delta v \\ \frac{Dw}{Dt} = -\frac{1}{\rho} \frac{\partial p}{\partial z} + \nu \Delta w \end{aligned} \right\} (4.3)$$

また，連続の式は

$$\operatorname{div} \boldsymbol{v} = 0 \quad (4.4)$$

となる。

そこで，(4.3)式を境界層内において簡単化するために，各項のオーダーを比較すると，定常境界層方程式がつぎのように求まる。

$$\left. \begin{aligned} u \frac{\partial u}{\partial x} + v \frac{\partial u}{\partial y} + w \frac{\partial u}{\partial z} \\ = -\frac{1}{\rho} \frac{\partial p}{\partial x} + \nu (\frac{\partial^2 u}{\partial y^2} + \frac{\partial^2 u}{\partial z^2}) \\ \frac{\partial p}{\partial y} = 0, \quad \frac{\partial p}{\partial z} = 0 \end{aligned} \right\} (4.5)$$

(4.4)式と(4.5)式の連立微分方程式を矩形管断面にわたって積分すると Kármán の運動量方程式が得られる。

$$\frac{\partial}{\partial x} \int_A u^2 dy dz = -\frac{1}{\rho} \frac{\partial p}{\partial x} \int_A dy dz + \nu \int_A (\Delta u) dy dz \quad (4.6)$$

ただし，ラプラスの演算子は $\Delta \equiv \frac{\partial^2}{\partial y^2} + \frac{\partial^2}{\partial z^2}$ であり，以下ではこのように用いる。

$$\int_A u dy dz = 4abU \quad (4.7)$$

(4.6)式の解は境界層方程式(4.5)の第1次近似解となる。この積分方程式の解は，流れを境界層とポテンシャル流れの領域に分割し，壁面で流速は0，両領域の境界で流速が

滑らかに接続するという条件の基で、Shiller および Sparrow によって得られている。しかし、平行平板間の流れおよび円管内の流れに対しては、境界層とポテンシャル流れの領域に分割することは容易であるが、他の断面形状を有する管路の場合、流れを2つの領域に分割することは困難である。そこで、この場合には、Langhaar がおこなった慣性項を $\beta^2 u$ で置き換えることによって、非線形方程式を線形化する手法が有効である。したがって、(4.5)式はつぎのようになる。

$$\partial^2 u / \partial y^2 + \partial^2 u / \partial z^2 = \beta^2 u + \frac{1}{\mu} dp/dx \quad (4.8)$$

ただし、 $\beta = \beta(x)$

この線形化の正当性は Langhaar によって検討されている。(4.8)式の解は、 $\beta=0$ のとき十分発達した流速分布を表わし、 $\beta=\infty$ のとき一様な流速分布を表わすことが分かる。また、(4.8)式を用いると助走域における境界層厚さを決める必要がないという点が有利となる。

(4.8)式を解くために、まず、 dp/dx および u をつぎのように書く。

$$\frac{1}{\rho} \frac{dp}{dx} = \left(\frac{16}{\pi^2}\right) \left(\frac{1}{\rho} \frac{dp}{dx}\right) \sum_{m,n=1,3,5,\dots}^{\infty} \left(\frac{1}{mn}\right) (-1)^{\frac{m+n}{2}-1} \times \cos\left(\frac{m\pi y}{2a}\right) \cos\left(\frac{n\pi z}{2b}\right) \quad (4.9)$$

ただし、 $|y| < a$, $|z| < b$

また、 u は次式のようにフーリエ級数に展開する。

$$u = \sum_{m,n=1,3,5,\dots}^{\infty} C_{mn} \cos(m\pi y/2a) \cos(n\pi z/2b) \quad (4.10)$$

この式は、境界条件 $|y|=a$, $|z|=b$ で $u=0$ を満足して

いる。(4.9)式と(4.10)式を(4.8)式へ代入すると C_{mn} が求まり、したがって、 u は次式となる。

$$u = -\left(\frac{16}{\pi^2}\right)\left(\frac{1}{\mu} \frac{dp}{dx}\right) \sum_{m,n=1,3,5,\dots}^{\infty} (-1)^{\frac{m+n-1}{2}} \cos\left(\frac{m\pi y}{2a}\right) \times \cos\left(\frac{n\pi z}{2b}\right) / mn \left[\left(\frac{m\pi}{2a}\right)^2 + \left(\frac{n\pi}{2b}\right)^2 + \beta^2 \right] \quad (4.11)$$

ここで、連続の式(4.7)を用いて圧力勾配 dp/dx を消去するために、 u を矩形管断面にわたって積分すると、平均流速 \bar{U} は

$$\bar{U} = -\left(\frac{16}{\pi^2}\right)\left(\frac{1}{\mu} \frac{dp}{dx}\right) \frac{4}{\pi^2} \sum_{m,n=1,3,5,\dots}^{\infty} \left[m^2 n^2 \left\{ \left(\frac{m\pi}{2a}\right)^2 + \left(\frac{n\pi}{2b}\right)^2 + \beta^2 \right\} \right]^{-1} \quad (4.12)$$

となり、 u/\bar{U} は次式で表わされる。

$$\frac{u}{\bar{U}} = \left(\frac{\pi^2}{4}\right) \left[\sum_{m,n=1,3,5,\dots}^{\infty} \frac{(-1)^{\frac{m+n-1}{2}} \cos(m\pi y/2a) \cos(n\pi z/2b)}{mn [m^2 + n^2 \gamma^2 + (2\beta a/\pi)^2]} \right] / \left[\sum_{m,n=1,3,5,\dots}^{\infty} \frac{1}{m^2 n^2 [m^2 + n^2 \gamma^2 + (2\beta a/\pi)^2]} \right] \quad (4.13)$$

ただし、 $\gamma = a/b$

(4.13)式で表わされる流速 u はつぎの条件を満足している。

- (a) 連続の式
- (b) 壁面上で流速は 0 である。
- (c) $\beta = \infty$ で一様な流速分布になる。
- (d) $\beta = 0$ で十分発達した流速分布になる。
- (e) (c) から (d) まで滑らかに遷移する。

つぎに， $\beta(x)$ を求める方法について考える。
 まず，入口部での条件は

$$x=0 ; \quad u/U=1 \quad \text{あるいは} \quad \beta=\infty \quad (4.14)$$

となり，十分発達した流れに対しては

$$x=\infty ; \quad u/U=(u/U)_{est} \quad \text{あるいは} \quad \beta=0 \quad (4.15)$$

ただし， $(u/U)_{est}$ は十分発達した場合の流速を表わす。

となる。

いっぽう，境界層方程式(4.5)は， $y=z=0$ (矩形管の断面中心線上で)

$$u_0 \partial u_0 / \partial x = -\frac{1}{\rho} dp/dx + \nu (\Delta u)_0 \quad (4.16)$$

u_0 ; 矩形管中心線上の流速

となり，断面にわたって積分すると次式が得られる。

$$\frac{\partial}{\partial x} \int_A (u_0^2/2) dy dz = -\frac{1}{\rho} \frac{dp}{dx} \int_A dy dz + \nu \int_A (\Delta u)_0 dy dz \quad (4.17)$$

(4.6)式から(4.17)式を辺々引くと

$$\frac{\partial}{\partial x} \int_A (u^2 - u_0^2/2) dy dz = \nu \int_A \{ \Delta u - (\Delta u)_0 \} dy dz \quad (4.18)$$

(4.18)式の積分は β のみの関数になる。したがって，それぞれ次式のようにおく。

$$I_1(\beta) = \int_A (u^2 - u_0^2/2) dy dz \quad (4.19)$$

$$I_2(\beta) = \left\{ \nu \int_A [\Delta u - (\Delta u)_0] d\gamma dZ \right\}^{-1} \quad (4.20)$$

(4.18)式 ~ (4.20)式から

$$\alpha = \int_{\beta=0}^{\beta} I_2 d(\beta) \quad (4.21)$$

となり, (4.21)式から α と β の関係が求まる。

また, (4.13)式の中の2重の総和($m, n=1, 3, 5 \dots \infty$)は単一の総和($n=1, 3, 5 \dots \infty$)の形に直すことができ, (4.13)式は次式となる。

$$u/\nu = F_1 / F_2 \quad (4.22)$$

ただし,

$$F_1 = \frac{1}{\beta^2 a^2} \left(\frac{\cosh \beta z}{\cosh \beta a} - 1 \right) + \sum_{n=1,3,5 \dots}^{\infty} \frac{16 (-1)^{\frac{n-1}{2}} \cos(n\pi z/2a)}{\pi^3 n [n^2 + (2\beta a/\pi)^2]} \times \frac{\cosh \left\{ (\pi/2r) [n^2 + (2\beta a/\pi)^2]^{1/2} z/b \right\}}{\cosh \left\{ (\pi/2r) [n^2 + (2\beta a/\pi)^2]^{1/2} \right\}} \quad (4.23)$$

$$F_2 = \frac{1}{\beta^2 a^2} \left(\frac{\tanh \beta a}{\beta a} - 1 \right) + \sum_{n=1,3,5 \dots}^{\infty} \frac{32}{\pi^4 n^2 [n^2 + (2\beta a/\pi)^2]} \times \frac{\tanh \left\{ (\pi/2r) [n^2 + (2\beta a/\pi)^2]^{1/2} \right\}}{(\pi/2r) [n^2 + (2\beta a/\pi)^2]^{1/2}} \quad (4.24)$$

したがって, (4.21)式から α と β の関係が求められるので, 矩形管軸方向の任意の位置 α に対応する β の値を用いて, (4.22)式 ~ (4.24)式で流速分布を計算すれば, その位置での流速分布が求められる。

つぎに、流速分布を数値計算する手順について述べる。

まず、矩形管の縦横比 $\gamma (=a/b)$ に対して、つぎに示す手順で数値計算をおこなう x と β の関係を求める。

(1) 無次元流速を表わす(4.22)式～(4.24)式の β に一連の数値を与える。

(2) (4.19)式、(4.20)式で積分 $I_1(\beta)$ と $I_2(\beta)$ を計算する。

(3) β をパラメータにして $I_1(\beta)$ と $I_2(\beta)$ の関係を図示する。

(4) (4.21)式から数値積分により x の値を求める。

すなわち、図4.8に示すように、 $\beta = \infty$ から β までの範囲内の $I_1(\beta)$ と $I_2(\beta)$ の関係を表わす曲線の下面積が、 β の値に対応する x の値を表わす。

以上のようにして、 x と β の関係を求め、(4.22)式～(4.24)式から任意の位置 x における流速分布を数値計算した。

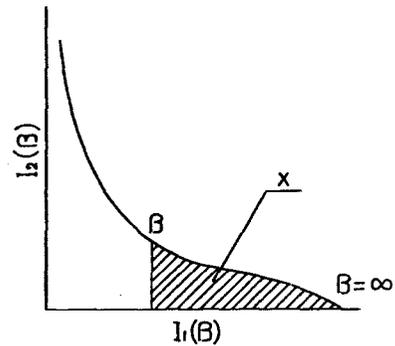


図4.8 x と β の関係

数値計算は、測定結果と比較するため、流速測定部の中心、すなわち線状体の初期位置から上流へ200(mm)の位置および下流へ600(mm)の位置に対しておこなった。(図4.2参照) その際、4.2節で述べたように、整流部の下流側の整流用金網から流出した流れはほぼ一様となっているので、この位置を矩形管の入口部(境界層が発達を始める位置)と考えた。したがって、数値計算をおこなった位置は、 $x=500$ (mm)および $x=1300$ (mm)である。(図4.1参照)

また、矩形管の縦横比は $\gamma=4.0$ 、水の動粘性係数は流速測定時の水温25(°C)に対する値 $\nu=0.893$ (mm²/s)とし、平均流速 $U=20, 40, 60, 80$ (mm/s)について数値計算をおこなった。

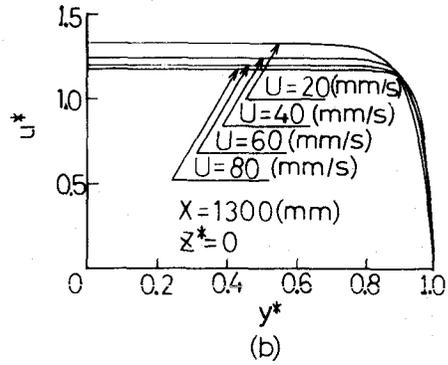
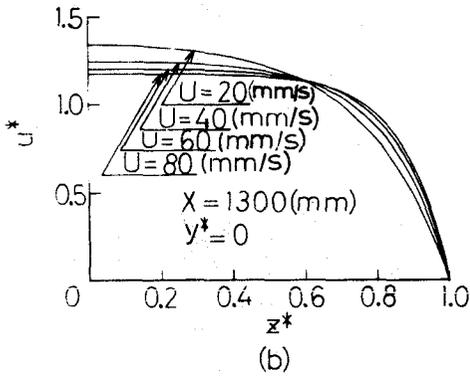
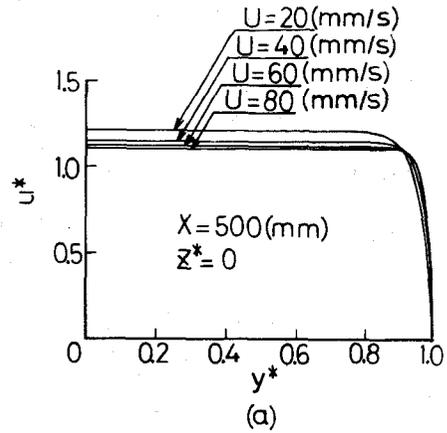
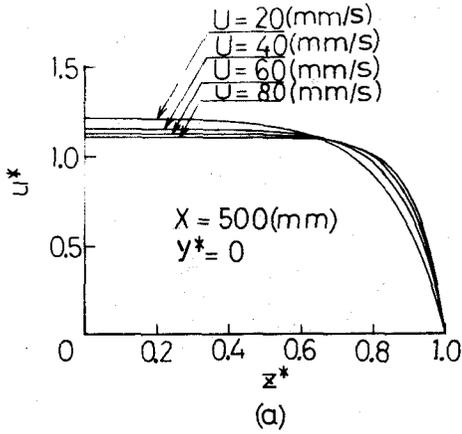


図4.9 矩形管幅方向
流速分布

図4.10 矩形管高さ方向
流速分布

計算結果を図4.9, 4.10に示す。なお, これらの図において, 流速およびその位置は無次元化し, *の印を付けて表わしている。図4.9は矩形管高さ方向の中心 $y^* = 0$ における幅方向の流速分布を示し, 図4.10は矩形管幅方向の中心 $z^* = 0$ における高さ方向の流速分布を示している。

平均流速が小さいほど, 境界層の発達が早く, 最大流速は, $U = 20 \text{ (mm/s)}$ の場合, $x = 500 \text{ (mm)}$ で1.22, $x = 1300 \text{ (mm)}$ で1.34, $U = 80 \text{ (mm/s)}$ の場合, 1.11および1.18となる。また, 矩形管の幅は高さに比べて小さいため, 境界層

の発達は幅方向の方が早いことが分かる。

ここで、計算結果と測定結果の比較をおこなう。すでに、4.3.3項に記載した図4.5、4.6に計算結果と測定結果が比較してある。これらの図において、実線が計算結果である。Sparrowの報告²⁾によると、Hanの方法は $(x/De)/Re$ (De ; 相当直径 $(=4ab/(a+b))$), Re ; レイノルズ数 $(=UDe/\nu)$)が小さい領域、すなわち流れがあまり発達していない領域で実験結果と良く一致することが確認されている。

$U=80$ (mm/s)は、4種類の平均流速の中で $(x/De)/Re$ がもっとも小さい場合である。図4.5から、矩形管幅方向の流速分布に関しては、計算結果と測定結果がほぼ一致している。いっぽう、図4.6において、高さ方向の流速分布に関しては、 Y^* が0.6程度までは両者はほぼ一致しているが、 Y^* が0.6以上になると測定結果の方が小さくなる。

以上のように、計算結果と測定結果はほぼ一致することが確認できたので、第6章において矩形管内の助走域での線状体の運動を数値計算する場合、流速分布はこの項で述べたHanの方法により計算する。

4.4 矩形管内流れ中における線状体の落下実験方法

線状体の落下特性として、重心の軌跡、速度および姿勢を考え、流速、線状体の比重量、長さ、直径および初期角度が落下特性におよぼす影響を調べた。

4.4.1 線状体の落下実験方法

テスト部における所要の流量は、オリフィスの差圧が所定の値になるように、2個の流量調節用バルブおよびポンプ用バルブを調節することによって得た。(図4.1参照)

なお、オリフィスは前もって重量法により検定をおこな

い，最小2乗法で流量とオリフィスの差圧の関係を求めた。また，所要の流量に対応する貯水タンクからヘッドタンクへの送水量をポンプ用バルブで調節し，ヘッドタンク内で適度なオーバーフローが得られるようにした。

上記の方法で流量を調節し，流れが定常状態になった後，線状体を落下させ，運動状態をマルチストロボ撮影した。

図4.11に撮影概要を示す。第2章で述べたように，直線の線状体は静止流体中でほぼ一平面内で運動するもので，矩形管内流れ中でも線状体はほぼ一平面内で運動することが予想されるが，それを確認する目的で管路上方からもNo.2カメラ⑥で撮影した。あなわち，管路側方（No.1カメラ⑤）と上方の直角2方向からのマルチストロボ撮影により2枚のフィルム面上に運動状態を記録した。

また，矩形管底面の外側に落下点測定用グラフを取付け，線状体の最終落下点位置を調べた。なお

，本実験装置の座標

系は，流速分布測定の場合と異なり，初期位置での線状体の重心を通る流れに垂直な鉛直面と矩形管上面の内側の幅方向の中心線の交点を原点(0)とし，水平方向流れの向きにX軸，鉛直下向きにY軸，管路幅方向にZ軸を定めた。

撮影では，実験室全体を暗室とし，線状体の落下時間を考慮して，運動状態が十分わかるような写真間隔を得るため，実験条件によりストロボ発光数を $S = 300 \sim 1020$ (cpm)の範囲で変化させた。

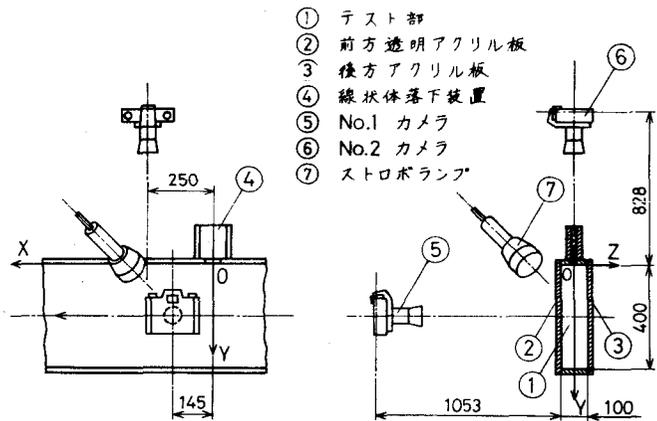


図4.11 線状体の撮影概要

線状体落下装置の概要を図4.12に示す。2枚の透明塩化ビニール板②の間には落下初期角度設定用円グラフ⑤が取付けられており、円グラフにより所要の初期角度 α に線状体⑩を設定し、ピンセット⑦で塩化ビニール板上の固定する。ピンセット押上げ用ネジ③を回してピンセットを押上げると、線状体が落下し始め、スリット②を通過しテスト部内へ落下する。塩化ビニール板は落下装置上方へスライド式に取りはずすことができ、線状体の取付けを容易にしている。

- ① テスト部
- ② 塩化ビニール板
- ③ ピンセット押上用ネジ
- ④ ピンセット取付用ネジ
- ⑤ 落下初期角度設定用円グラフ
- ⑥ 落下装置内押用箱
- ⑦ ピンセット
- ⑧ ガラス管
- ⑨ 線状体落下用スリット
- ⑩ 線状体

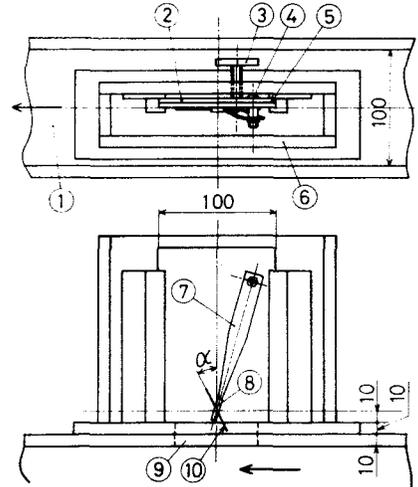


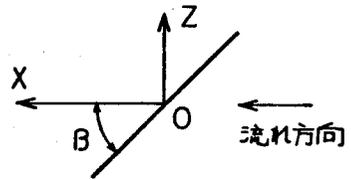
図4.12 線状体落下装置概要

実験には、比重量の影響を調べるため、鉛筆の芯(No.1試料)とピアノ線(No.2試料)の2種類の試料を用いた。それらの試料条件および実験条件を表4.1に示す。この実験では、平均流速 U 、線状体の比重量 ρ 、長さ l 、直径 d および初期角度 α がおよぼす影響について調べた。初期角度 α とは初期位置での線状体の軸方向と鉛直線とのなす角度であり、図4.12に示したように流れの向きと逆向きである。これは、線状体の先端が流れ中に入る瞬間に、流れによりその姿勢を大きく変えられるため、流れの向

表4.1 試料および実験条件

試料番号	試料名	線状体直径 d (mm)	線状体長さ l (mm)	線状体比重量 ρ (g/cm^3)	落下初期角度 α ($^\circ$)	平均流速 U (mm/s)
1	鉛筆芯	0.378	30 60	1.793	0	20
		0.569	15 30	1.627	2	40
			45 60		60	
		0.720	30 60	1.641	5	80
0.912		1.562				
2	ピアノ線	0.217	30 60	7.098	0	20
		0.322	15 30			40
			45 60			60
		0.428	30 60		2	60
						0.527

きに初期角度を設定すると，鉛直に近い姿勢での運動状態が把握できなくなるからである。以上の実験は，図4.13に示すように，初期位置における水平面内での線状体の軸方向と流れの方向のなす角度を β とすると，すべて $\beta=0^\circ$ でおこなった。



つぎに，初期位置において線状体が流れの方向に対して傾いている場合の運動状態を調べるため，

$d=0.569$ (mm), $l=30, 60$ (mm)

のNO.1試料と $d=0.322$ (mm), $l=30, 60$ (mm)のNO.2試料を用いて初期角度 $\alpha=90^\circ$, $\beta=45^\circ$ で実験をおこなった。

以上，2種類の実験では，線状体重心の初期位置は矩形管幅方向の中心(XY面上)である。

また，合わせて， $d=0.569$ (mm)のNO.1試料と $d=0.322$ (mm)のNO.2試料，いずれも $l=15, 30, 45, 60$ (mm)，を用いて $\alpha=0.5$ で静止流体中での実験をおこない，流れ中での場合と比較した。

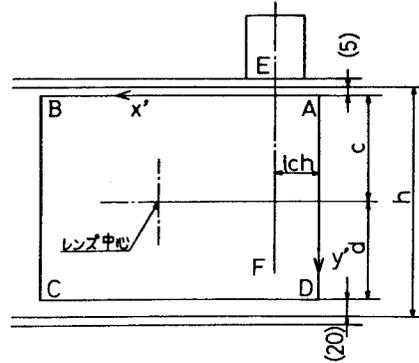
試料は，長さのバラツキを小さくする目的とその端面を軸に直角にある目的で端面を研磨布で仕上げた。また，長さ，直径，比重量はランダムに抽出した10本の試料に対して測定をし，その平均値をもってそれらの値とした。

実験では，各実験条件につき15本程度の線状体を落下させ，最終落下位置での線状体重心の水平方向移動距離の平均値を求め，その値に近い実験を2個ないし3個選び，それらの写真から線状体両端の座標を読取る。読取った座標は以下で述べる方法でX, Y座標に変換し，第2章の2.9.3項で述べた方法により落下特性を求め，それらを図示し，検討した後，その中の1つを実験データとして採用した。

4.4.2 写真面上から真の落下運動を求める方法

テスト部上方からの撮影により，線状体はほぼXY面内で運動することが確認できたので，静止流体中での場合のように被写体距離の変化に対する修正をおこなう必要はなかった。しかし，流れを乱すため，写真から線状体の運動を求めるために必要なX，Y座標を表わす目印をXY面内に設置することができない。そこで，図4.14に示すように，

テスト部前面のアクリル板上に長方形ABCDの目印を設けた。この目印のうち，Aを原点(O')，ABとADをZ'軸，Z''軸とし，写真から線状体両端の座標(x'_{i1} , z'_{i1}), (x'_{i2} , z'_{i2})を読取る。なお，図4.14



において，()内の数値は実際の長さである。 図4.14 写真上の基準位置

Z'Z''座標をXY座標に変換するためには，XY面とテスト部前面の被写体距離を考慮する必要がある。まず，写真面上でのZ'，Z''方向の補正值 l_{ch} ， l_{cv} について考える。XY面およびテスト部前面の被写体距離を L_1 ， L_2 とすると，レンズ中心は矩形管高さ方向の中心($Y=200(\text{mm})$)と一致しているので，鉛直方向補正值 l_{cv} は

$$l_{cv} = [195/375 - (200/375)(L_2/L_1)](c+d) \quad (4.25)$$

となり，写真から $(c+d)$ を読取れば， l_{cv} が求まる。

いっぽう，水平方向補正值 l_{ch} は，実験に際して，Y軸と一致させて設けた目印EFを $U=0$ の状態撮影しておき，その写真から読取る。

したがって、線状体両端の実際の座標は

$$A = 375 / \{ (L_2/L_1)(C+d) \} \quad (4.26)$$

とすると、

$$\left. \begin{aligned} X_{ij} &= A (x'_{ij} - l_{ch}) \\ Y_{ij} &= A (y'_{ij} - l_{cv}) \end{aligned} \right\} \quad (4.27)$$

となる。

そこで、この線状体両端の座標から、第2章の2.9.3項で述べた方法により落下特性を求めた。

以上、線状体の落下実験により、流速、線状体の比重量、長さ、直径および初期角度が重心の軌跡、速度および姿勢におよぼす影響を調べることができた。

以下ではその結果について報告する。その際、落下特性は第2章の静止流体中での場合と同じ表現方法とする。

- ① 軌跡は、重心の水平方向移動距離 X と鉛直方向移動距離 Y の関係で示す。
- ② 速度は、回転角 θ と重心の水平方向速度 \dot{X} および鉛直方向速度 \dot{Y} の関係で示す。
- ③ 姿勢は、落下時間 t と回転角 θ の関係で示す。

なお、表および図中の長さは公称長さで記載する。また、初期位置において線状体が流れの方向に対して傾いている場合 ($\alpha = 90^\circ$, $\beta = 45^\circ$) の結果は、5.11節でノズル内流れ中での結果と比較しながら報告する。

4.5 初期角度の影響

この節では、 $\alpha = 0^\circ, 2^\circ, 5^\circ$ 変化させたときの実験結果を基にして、初期角度が落下特性におよぼす影響について調べる。

4.5.1 線状体の落下軌跡

$d = 0.569 \text{ (mm)}$ 、 $l = 30 \text{ (mm)}$ の NO.1 試料を $U = 60 \text{ (mm/s)}$ の流れ中に、 $\alpha = 0^\circ, 2^\circ, 5^\circ$ で落下させたときの落下軌跡を図 4.15 に示す。この図において、線状体は $\alpha = 2^\circ$ の場合のみ描かれており、その時間間隔は $\Delta t = 1/3 \text{ (s)}$ である。また、 $\alpha = 0^\circ, 5^\circ$ の場合、線状体重心の落下軌跡のみを示している。

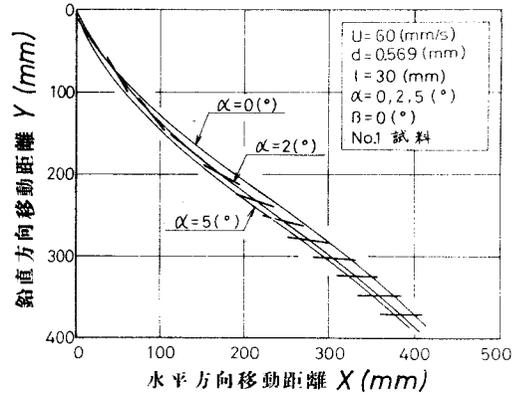


図 4.15 落下軌跡におよぼす初期角度の影響

線状体の初期位置は $Y = 0$ の上方 30 (mm) である (図 4.12 参照) ので、落下装置から流れ中に入るとき、線状体の先端部が流れ中に入り、後端部が落下装置内に残る状態が瞬時的に発生する。そのとき、先端部が流体から抗力を受けるため、線状体は急激に流れの向きに回転する。したがって、 $\alpha = 2^\circ$ の場合、線状体があぐら状態で流れ中に入ったときの鉛直方向に対する傾斜角 (回転角 θ) は約 20° になっている。その後、線状体は徐々に水平方向に姿勢を回転させながら落下し、最終的にその姿勢は水平方向に漸近し、しかも、線状体は水平方向には流速とほぼ同一速度で移動し、鉛直方向には一定速度で落下する。また、重心の落下軌跡は $\theta = 70^\circ$ 付近 ($Y = 230 \text{ (mm)}$ 付近) で変曲点を

もつ曲線となる。その後、線状体の姿勢は水平方向に近づき、しかも矩形管内の流速は壁面近くの約40(mm)の領域(境界層内)を除いてほぼ一様であるため、重心の軌跡の接線勾配はほとんど変化しなくなる。やがて、線状体が境界層内へ入ると流速が低下するため、線状体の水平方向速度も減少し、軌跡の接線勾配は増大する。

つぎに、図4.15において、 $\alpha=0^\circ, 2^\circ, 5^\circ$ の落下軌跡を比較すると、重心の軌跡の形は、落下直後の領域を除いてほとんど同じであり、X軸方向またはY軸方向に沿って平行移動すれば三者の曲線はほぼ重なることが分かる。また、重心の軌跡は、 $\alpha=0^\circ$ の場合がもっとも上方に位置し、 $\alpha=2^\circ, 5^\circ$ の順番に下方に位置する。この原因について考える。初期角度が大きいほど線状体がすべて流れ中に入ったときの回転角は小さく、すなわち、その姿勢が鉛直方向に近いいため、線状体の鉛直方向速度は大きく、水平方向速度は小さくなり、重心の軌跡は下方に位置する。ところが、本実験の場合、流れの発達はやるやかくであり、壁面近くの境界層内を除いて流速の場所的变化はわづかであるので、線状体が運動をおこなう位置が変わっても、重心の軌跡の形はほとんど変わらないと考えられる。

以上のことから、初期角度は、落下直後の領域を除き軌跡の形には影響せず、線状体が運動する位置に影響を与える。

4.5.2 線状体重心の速度

$U=60$ (mm/s), $d=0.569$ (mm)の θ と X の関係および θ と Y の関係を図4.16, 4.17に示す。図には、 $l=30, 60$ (mm)のデータをプロットしている。

X は $40^\circ < \theta < 45^\circ$ で最大値をもつ上に凸の滑らかな曲線になる。すなわち、線状体は $\theta=40^\circ \sim 45^\circ$ まで水平方向に

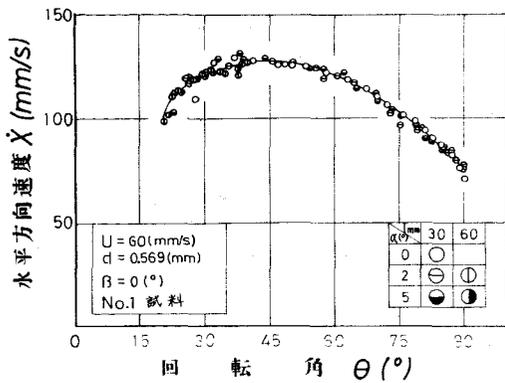


図 4.16 水平方向速度におよぼす初期角度の影響

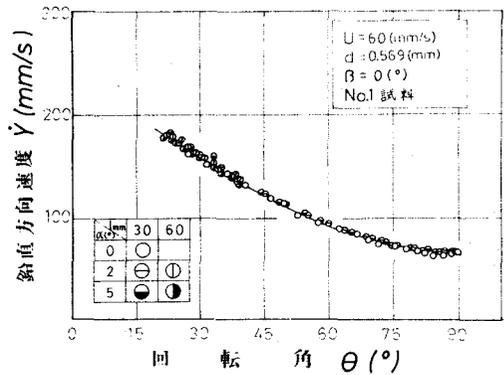


図 4.17 鉛直方向速度におよぼす初期角度の影響

加速されるが、その後は減速される。いっぽう、 \dot{Y} は θ の増加に伴ない単調に減少する。図4.17には、落下直後に線状体が鉛直方向に加速されているときのデータがないが、これは、線状体が流れ中に入った瞬間に、流体から抗力を受けて急激に流れの向きに回転するため、流れ中では線状体はつねに鉛直方向に減速されるからであると考えられる。

また、 $\alpha = 0^\circ, 2^\circ, 5^\circ$ の場合を比較すると、この実験条件の場合、 $l = 30, 60$ (mm)ともに θ と \dot{X} の関係および θ と \dot{Y} の関係は、 α にかかわらず同一曲線で表わされ、初期角度の影響は見られない。

ところが、図4.18, 4.19に示す $d = 0.912$ (mm)のNo.1試料に対する θ と重心の速度の関係を見ると、 \dot{X} に関しては、 $l = 60$ (mm)の場合、 $\theta < 30^\circ$ の領域では α によって差が生じ、 α が大きい方が同一回転角での \dot{X} の値は大きい。また、 \dot{Y} に関しては、 $l = 30, 60$ (mm)ともに $\theta < 35^\circ$ の領域では α によって差が生じ、 $l = 60$ (mm)の場合、 α が大きい方が \dot{Y} の最大値は大きく、そのときの θ の値は小さくなる。これは、 α が大きい方が線状体が流れ中に入ったときの姿勢がより鉛直方向に近いので、流体から水平方向に受ける抗

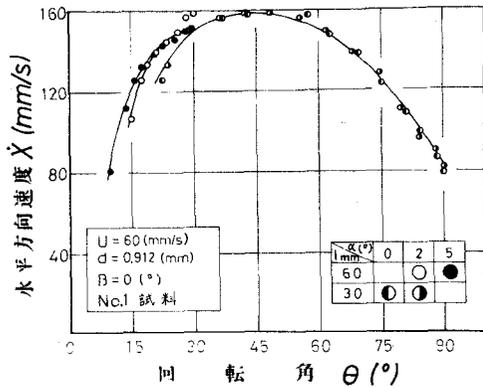


図4.18 水平方向速度におよぼす初期角度の影響

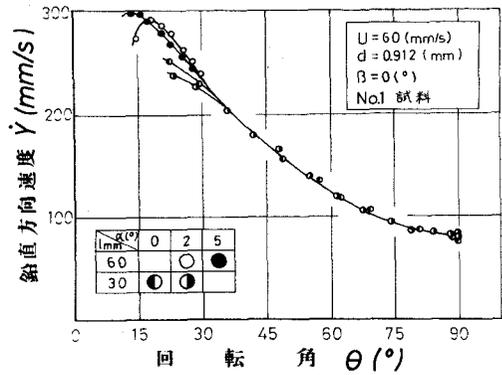


図4.19 鉛直方向速度におよぼす初期角度の影響

カが大きくなり、水平方向により大きく加速されるためであり、また、流体から鉛直方向に受ける抗力は小さく、鉛直方向により大きく加速されるためであると考えられる。 X 、 Y が α の影響を受けるこの領域は、図4.23から、落下直後の線状体が急激に回転する領域とその後のわずかな θ の領域である。この結果から、 X 、 Y は落下後のある θ の領域で α の影響を受けるが、 θ の増加に伴ない α の影響は見られなくなり、 α にかかわらず同一曲線で表わされる。

以上はNO.1試料に対する結果であるが、つぎに、 γ_0 が大きいNO.2試料に対する結果を図4.20, 4.21に示す。

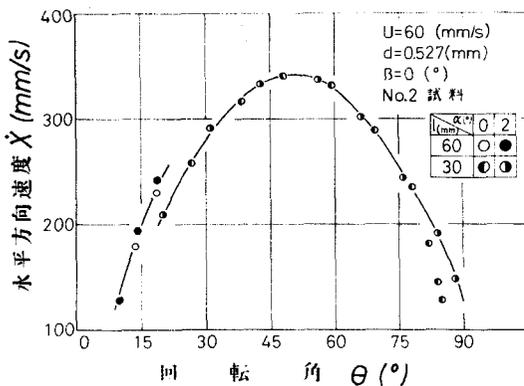


図4.20 水平方向速度におよぼす初期角度の影響

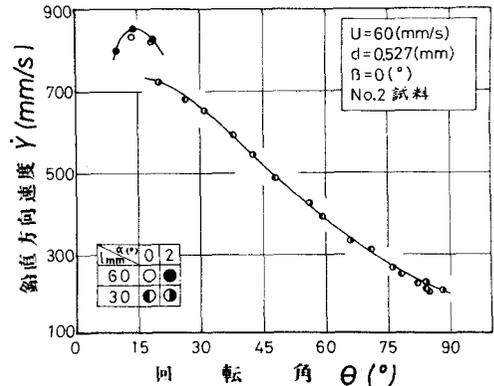


図4.21 鉛直方向速度におよぼす初期角度の影響

これらの図において、 \dot{X} , \dot{Y} ともに落下直後の領域で、 α の影響は受けず、もちろん θ の大きい領域でも α の影響は見られない。これはつぎの原因による。他の試料および実験条件がほぼ同じであるNO.1試料に対する結果(図4.17)と図4.21を比較すれば分かるように、NO.1試料の場合と比べて、NO.2試料の場合に \dot{Y} がはるかに大きいため、線状体が流れ中に入った瞬間に流体から急激な回転を受けるが、その回転を受ける時間が少ないからである。さらに、 θ が大きいため重心回りの慣性モーメントが大きく、急激な回転を受けにくいということもあり、この程度の初期角度の差の影響が、実験では明確に現われなかったと考えられる。

したがって、初期角度の影響は、 $\alpha=0.569(\text{mm})$ のNO.1試料のように落下直後の領域で急激な回転を受け易い場合にも、また、 $\alpha=0.527(\text{mm})$ のNO.2試料のように急激な回転を受けにくい場合にも、現われにくく、 $\alpha=0.912(\text{mm})$ のNO.7試料のように、前述の2つの場合の中間程度の回転を受ける場合に現われ易い。

4.5.3 線状体の姿勢

$U=60(\text{mm/s})$, $\alpha=0.569$
(mm), $l=30(\text{mm})$ のNO.1
試料の α と θ の関係を図4
22に示す。すでに述べたよ
うに、線状体が流れに入
った瞬間に流体から抗力を受
けるため、線状体は流れの
向きに急激に回転するが、
その後は徐々に回転し、 θ
= 90° に漸近し、もっとも

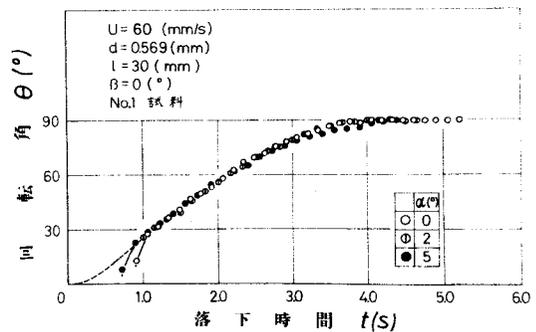


図4.22 姿勢におよぼす初期角度の影響

安定した姿勢になる。また、 α が小さい場合の曲線を横軸(落下時間軸)に沿って平行移動すると、流れ中に入った瞬間の急激な回転の領域を除き、 t と θ の関係は α にかかわらず同一曲線で表わされることが分かる。図4.22は平行移動した後の図である。したがって、 α の影響が現われるのは、落下直後の急激な回転の領域だけであり、 α が小さいほど、この急激な回転は大きくなる。また、図中の破線部は、静止流体中での線状体の姿勢の変化を基にして外挿した曲線であり、後に、流速の影響を示す4.9.3項で述べるが、落下直後の急激な回転の領域を除き、流速に関係なく線状体の姿勢はこの破線に基づいて変化する。

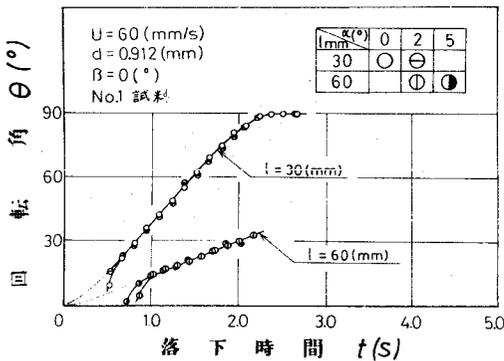


図4.23 姿勢におよぼす初期角度の影響

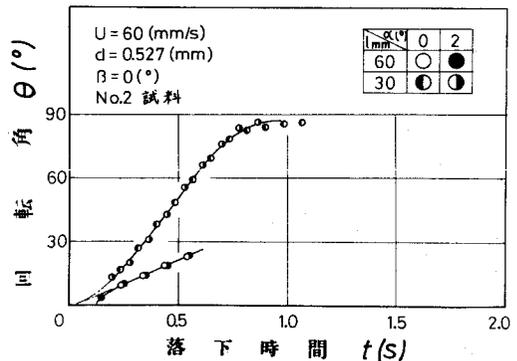


図4.24 姿勢におよぼす初期角度の影響

つぎに、線状体重心の速度が初期角度の影響を受けた $d=0.912$ (mm) の No.1 試料および d が大きい $d=0.527$ (mm) の No.2 試料の姿勢の変化を図4.23, 4.24に示す。図4.23において、 $d=0.912$ (mm) の場合にも、 $d=0.569$ (mm) の場合と同様に、 α の影響が現われるのは、落下直後の急激な回転の領域だけである。しかし、この急激な回転の領域は、 $l=30$ (mm) の場合、 $d=0.569$ (mm) では、 $\theta=25\sim30^\circ$ であ

り， $\alpha=0.912$ (mm) では $\theta=15\sim 20^\circ$ となり，直径が大きい方が小さい。線状体が流れ中に入った瞬間に，流体から受ける軸に直角な方向の抗力は α のオーダーであり，いっぽう，重心の回りの慣性モーメントは α^2 のオーダーであるので， α が小さい方が急激な回転は大きくなる。さらに， θ と $\dot{\gamma}$ の関係を表わす図 4.17 と図 4.19 を比較すると， $\alpha=0.912$ (mm) の方が $\dot{\gamma}$ の値は大きいので，急激な回転を受ける時間は少ない。したがって，上述のような結果になる。

また，図 4.24 において， α が大きい No.2 試料の場合，落下直後の線状体の急激な回転は小さく， $l=30$ (mm) の場合でも $\theta < 15^\circ$ である。この原因については前項で述べた通りである。

4.6 線状体長さの影響

この節では， $l=15, 30, 45, 60$ (mm) 変化させたときの実験結果を基にして，線状体長さが落下特性におよぼす影響について調べる。

4.6.1 線状体の落下軌跡

$U=60$ (mm/s)， $\alpha=0.569$ (mm)， $l=30$ と 60 (mm) の No.1 試料の落下軌跡を図 4.25 に示す。図中の線状体の時間間隔は $l=30, 60$ (mm) とともに $\Delta t=1/3$ (s) である。

$l=30$ (mm) の場合，落下直後の急激な回転の領域を過ぎると，線状体は除々に

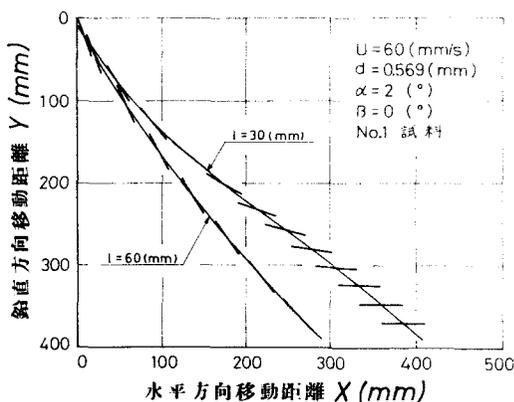


図 4.25 落下軌跡におよぼす長さの影響

水平方向に姿勢を回転させながら落下し，水平な姿勢になって回転が止まり，このもっとも安定した姿勢を保ったまま運動し続け矩形管底面に到達する。また，重心の軌跡は変曲点をもつ曲線になる。いっぽう， $l=60(mm)$ の場合， $l=30(mm)$ の場合と比べて角速度が小さいため， θ が約 40° で矩形管底面に到達する。したがって，重心の軌跡の接線勾配 dY/dX は減少し続けており，重心の軌跡には変曲点が見られない。

また，図4.25から，本実験の範囲内では，鉛直方向に同じ距離だけ移動した場合， l が小さい方が X の値は大きいことが分かる。さらに，線状体の状態を見れば，同一回転角に対する X ， Y の値は， l が大きい方が大きいことが分かる。 l が大きい方が角速度が小さく，姿勢の変化に要する時間が大きい。ところが， θ と重心の速度の関係（図4.26，4.27）から，ある回転角 θ に対する \dot{X} ， \dot{Y} の値は， l にかかわらずほぼ同じになる。したがって，速度は同じでも，その時間が， l が大きい方が大きいため，同一回転角に対する X ， Y の値は大きくなると考えられる。

4.6.2 線状体重心の速度

$U=60(mm/s)$ ， $d=0.569(mm)$ の θ と \dot{X} の関係および θ と \dot{Y} の関係を図4.26，4.27に示す。

線状体は $\theta=40^\circ\sim 45^\circ$ まで水平方向に加速されるが，その後は減速される。なお，図4.26において， $l=15(mm)$ の場合， $\theta=90^\circ$ の場合にも \dot{X} が減少する状態が見られるが，これは，線状体が水平な姿勢を保ったまま落下し続け矩形管底面に近づくが，壁面近傍では境界層の発達により流速が低下しているためである。

いっぽう， \dot{Y} は θ の増加に伴ない単調に減少する。図4.27には，落下直後に線状体が鉛直方向に加速されていると

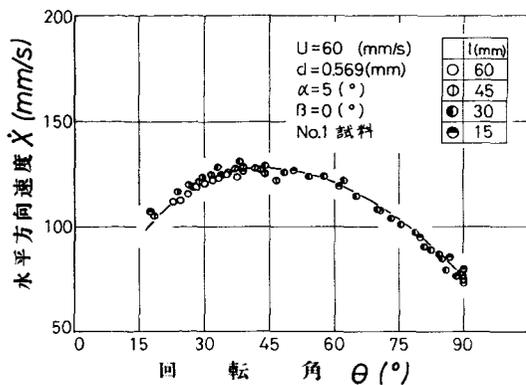


図 4.26 水平方向速度におよぼす長さの影響

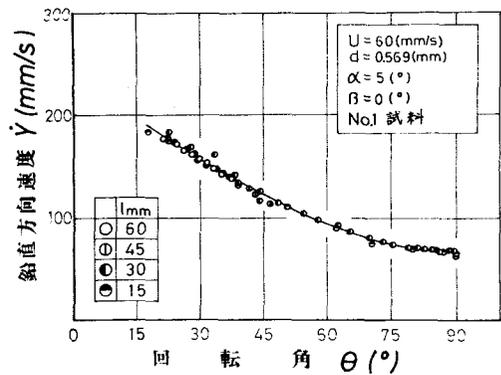


図 4.27 鉛直方向速度におよぼす長さの影響

きのデータがないが、これは、線状体が落下直後に急激に回転するため、流れ中ではつねに鉛直方向に減速されるからである。また、これらの図から、この実験条件の場合、 l の影響は見られず、 θ と \dot{X} の関係および θ と \dot{Y} の関係は、 l にかかわらず同一曲線で表わされる。

ところが、図 4.28、4.29 に示す $U = 20$ (mm/s)、 $d = 0.912$ (mm) の NO.1 試料に対する θ と重心の速度の関係を見ると、 θ が小さい領域で l の影響が現われ、 l が大きい方が同

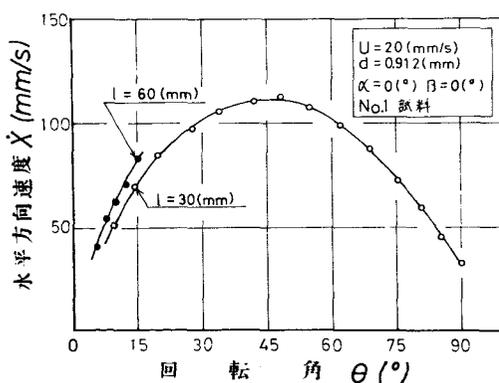


図 4.28 水平方向速度におよぼす長さの影響

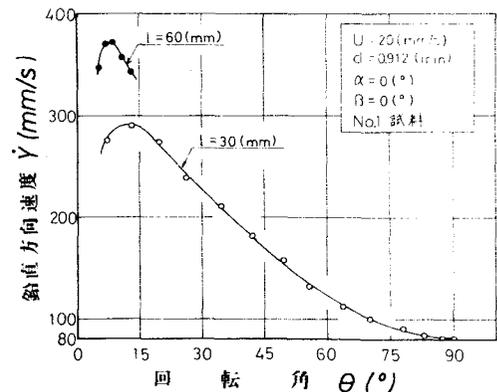


図 4.29 鉛直方向速度におよぼす長さの影響

一回転角に対する \dot{X} , \dot{Y} の値は大きく, \dot{Y} が最大になるときの θ の値は, $l=60(\text{mm})$ の場合, 約 8° , $l=30(\text{mm})$ の場合, 約 13° となり, l が大きい方が小さい。

$U=20(\text{mm/s})$, $d=0.912(\text{mm})$ の場合, $U=60(\text{mm/s})$, $d=0.569(\text{mm})$ の場合に比べて, 流速は小さく, 直径は大きいので, 落下直後の線状体の急激な回転が小さく, l の影響が明確に現われたと考えられる。また, l が大きい方が, 線状体が流れ中に入ったときの姿勢がより鉛直に近く, 流体から水平方向に受ける抗力は大きく, 鉛直方向に受ける抗力は小さいため, 水平方向および鉛直方向により大きく加速されるので, l が大きい方が \dot{X} , \dot{Y} は大きくなる。

図4.28, 4.29において, $l=60(\text{mm})$ の場合, θ が小さい間に線状体が矩形管の底面に到達するため, θ の大きい領域での l の影響は分からない。

そこで, θ の大きい領域での l の影響を調べるため, $U=60(\text{mm/s})$, $d=0.322(\text{mm})$ のNo.2試料の結果を図4.30, 4.31に示す。 l の影響は θ の小さい領域で現われ, l が大きいほど \dot{X} , \dot{Y} ともに大きくなる。しかし, θ の増加に伴わない l の影響は見られなくなり, θ と \dot{X} の関係および θ と

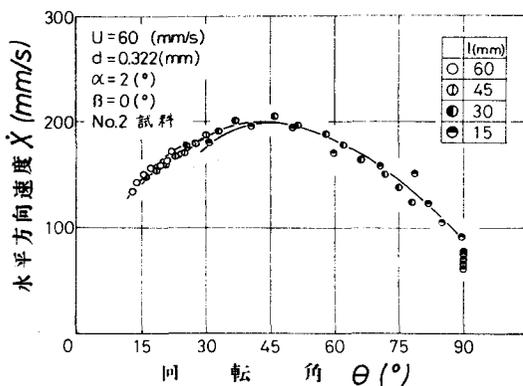


図4.30 水平方向速度におよぼす長さの影響

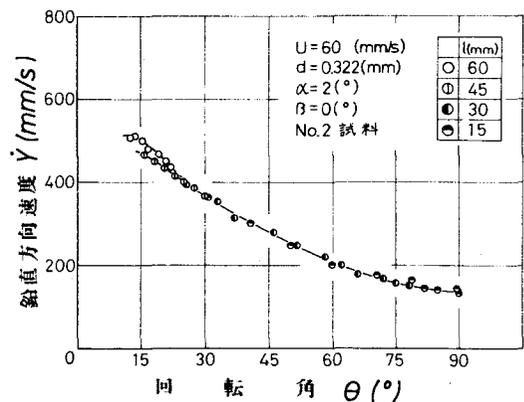


図4.31 鉛直方向速度におよぼす長さの影響

\dot{Y} の関係は同一曲線で表わされる。

つぎに、直径、比重量および流速が異なる場合に、 l が重心の速度におよぼす影響を調べる。直径の影響を示す 4.7.2 項に記載する図 4.34, 4.35 を見ると、 $U=60(\text{mm/s})$ の場合、 $d=0.569(\text{mm})$ 以下では \dot{X} , \dot{Y} とともに l の影響は見られず、これより大きい直径の場合、 l の影響が見られ、 $d=0.722(\text{mm})$ の場合より $d=0.912(\text{mm})$ の場合の方が顕著に現われている。しかも、 l の影響は前述した通り θ が小さい領域 ($\theta < 35^\circ$) でのみ現われており、 θ が増加すると $l=60(\text{mm})$ の曲線が、 $l=30(\text{mm})$ の曲線に漸近することも分かる。

以上のように、NO.1 試料の場合、 $d=0.569(\text{mm})$ 以下で l の影響は見られなかったが、同一流速の NO.2 試料の場合には、 $d=0.322(\text{mm})$ でも l の影響が見られた (図 4.30, 4.31) ことから、 d が大きい方が l の影響が現われやすいことが分かる。しかも、この場合、 \dot{X} および \dot{Y} 軸のスケールは、NO.1 試料の場合より大きいことを考えると l の影響は、明確に現われたといえてよい。

また、流速の影響を示す 4.9.2 項に記載する図 4.44, 4.45 ($d=0.569(\text{mm})$ の場合) および図 4.46, 4.47 ($d=0.912(\text{mm})$ の場合) を見ると、 $d=0.569(\text{mm})$ の場合、 $U=20(\text{mm/s})$ 以下では l の影響がわづかに見られるが、これ以上の流速の場合、 l の影響は見られない。しかし、 $d=0.912(\text{mm})$ の場合、本実験の範囲内のどの流速の場合でも、 l の影響が明確に現われている。しかも、 U が大きいほど $l=60(\text{mm})$ と $l=30(\text{mm})$ の \dot{X} の差は大きく、 U が小さいほど \dot{Y} の差は大きい。そして、 θ が増加すると $l=60(\text{mm})$ の曲線は、 $l=30(\text{mm})$ の曲線に漸近する。 U が小さいほど \dot{Y} の差が大きくなるのは、つぎの原因による。落下直後に線状体は流れにより急激にその姿勢を変えるが、この急激な姿勢の変化

は Γ が小さいほど小さく，このため， $\dot{\gamma}$ の最大値は Γ が小さいほど大きくなる。したがって， Γ が小さいほど， $l=60(\text{mm})$ と $l=30(\text{mm})$ の $\dot{\gamma}$ の差は大きくなると考えられる。

以上の結果をまとめると， $\dot{\gamma}$ ， $\dot{\gamma}$ とともに， l の影響は θ が小さい領域で現われ，この領域では同一回転角に対する $\dot{\gamma}$ ， $\dot{\gamma}$ の値は， l が大きいほど大きい。しかも， l の影響は，線状体が流れ中に入ったときの急激な姿勢の変化が小さいほど，すなわち， α ， β が大きいほど，また， Γ が小さいほど，明確に現われる。

4.6.3 線状体の姿勢

$\Gamma=60(\text{mm/s})$ ， $\alpha=0.569(\text{mm})$ の NO.1 試料の t と θ の関係を図 4.32 に示す。

すでに述べたように，落下直後の急激な回転の領域を除き， α にかかわらず t と θ の関係は同一曲線で表わされるので，この図には $\alpha=0^\circ, 2^\circ, 5^\circ$ の曲線が示されている。

線状体は流れ中に入ったとき急激に回転するが，角速度の増大に伴ない回転を押しやる向きに作用する回転モーメントが増大するため，この急激な回転の領域を過ぎると除々に回転し $\theta=90^\circ$ に漸近する。 t と θ の関係を表わす曲線の接線勾配は角速度を表わすので， l が小さいほど角速度は大きく，線状体が回転するのに要する時間は小さくなる。また，落下直後の急激な姿勢の変化は l が小さいほど大きいことが分かる。線状体が流れ中に入った瞬間に流体から受ける回転モーメント

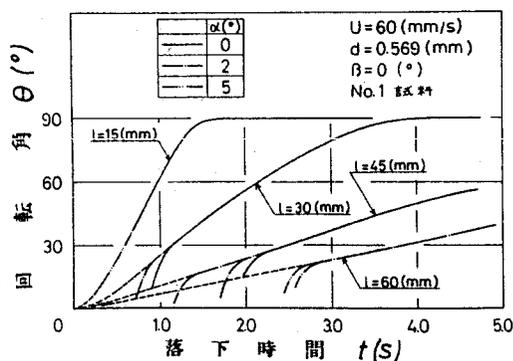


図 4.32 姿勢におよぼす長さの影響

は l のオーダーであり、いっぽう、重心回りの慣性モーメントは l^3 のオーダーであるので、 l が小さいほど急激な姿勢の変化は大きくなる。

以上述べた長さの影響は、直径、比重量および流速が異なる場合にも明確に現われる。

4.7 線状体直径の影響

この節では、No.1 試料および No.2 試料の直径を変化させたときの実験結果を基にして、線状体直径が落下特性におよぼす影響について調べる。

4.7.1 線状体の落下軌跡

$U = 60 \text{ (mm/s)}$, $l = 30 \text{ (mm)}$, $d = 0.569 \text{ (mm)}$ と $d = 0.912 \text{ (mm)}$ の No.1 試料の落下軌跡を図 4.33 に示す。図中の線状体の時間間隔は $d = 0.569 \text{ (mm)}$ の場合、 $\Delta t = 1/3 \text{ (s)}$, $d = 0.912 \text{ (mm)}$ の場合、 $\Delta t = 1/4 \text{ (s)}$ である。

この図において、もっとも原点に近い線状体の姿勢を比較すると、直径の小さい $d = 0.569 \text{ (mm)}$ の方が、より水平に近い姿勢になっており、落下直後の急激な姿勢の変化は d が小さい方が大きいことが分かる。この急激な回転の領域を過ぎると、線状体は徐々に姿勢を回転させながら、その重心が変曲点をもつような曲線を描いて運動する。

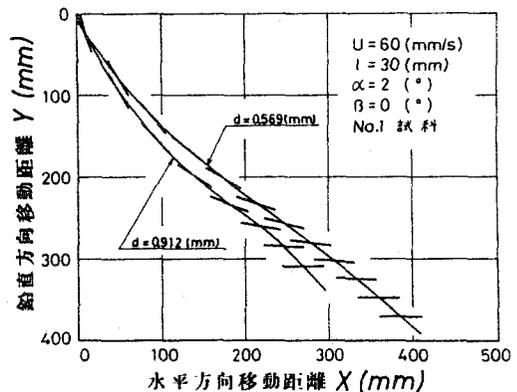


図 4.33 落下軌跡におよぼす直径の影響

4.5.1 項で述べたように、 $d = 0.569 \text{ (mm)}$ の軌跡は $\theta = 70^\circ$

付近 ($Y=230(\text{mm})$ 付近) で変曲点をもつが, $d=0.912(\text{mm})$ の軌跡は $\theta=65^\circ$ 付近 ($Y=230(\text{mm})$ 付近) で変曲点をもつ。また, 両者の重心の軌跡を比較すると, $d=0.912(\text{mm})$ の方が, 軌跡の接線勾配の変化が大きいことが分かる。 θ と重心の速度の関係を表わす図4.34, 4.35から, θ の変化に対する \dot{X} , \dot{Y} の変化は $d=0.912(\text{mm})$ の方が大きく, 軌跡の接線勾配は $dY/dX = \dot{Y}/\dot{X}$ となることから, dY/dX の変化は $d=0.912(\text{mm})$ の方が大きくなると考えられる。さらに, 鉛直方向に同じ距離だけ移動した場合, d が小さい方が X の値は大きいことが分かる。したがって, 同一長さの線状体を矩形管内流れ中で落下させれば, 直径により矩形管底面に到達したときの水平方向移動距離に差が生ずるため, 直径別に線状体を分類することができる。

4.7.2 線状体重心の速度

$U=60(\text{mm/s})$ のNo.1試料の θ と \dot{X} の関係および θ と \dot{Y} の関係を図4.34, 4.35に示す。これらの図には, $l=30, 60(\text{mm})$ の曲線が併記してある。

\dot{X} , \dot{Y} ともに, θ の全領域で d が大きいほど大きくなる。また, \dot{X} は $\theta=40^\circ\sim 45^\circ$ まで加速されるが, \dot{X} が最大になるときの θ の値は, d が大きいほど大きくなる傾向にある。

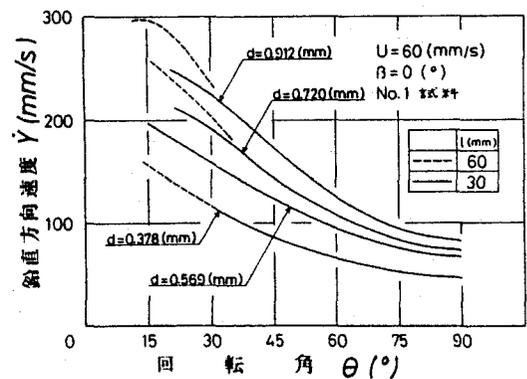
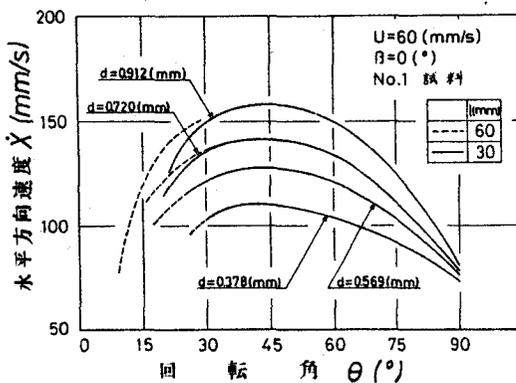


図4.34 水平方向速度におよぼす直径の影響 図4.35 鉛直方向速度におよぼす直径の影響

さらに、 $l=60(\text{mm})$ と $l=30(\text{mm})$ の速度の差は、 \dot{X} 、 \dot{Y} ともに α が大きいほど大きく、また、 α が大きいほど θ のより広い領域で長さの影響を受ける。

以上述べた直径の影響は、比重量が多いNo.2試料の場合の方が顕著に現われる。

No.2試料の $U=60(\text{mm/s})$ の結果を図4.36, 4.37に示す。図4.36において、線状体が水平方向に加速される領域が、 $\theta=40^\circ\sim 50^\circ$ までとなり、直径が大きいほどより水平に近い姿勢になるまで加速されることが、No.1試料の場合よりはるかに明確に現われる。また、 \dot{X} 、 \dot{Y} ともに直径が大きいほど、長さの影響を受け易いことも明確になる。さらに、図4.37において、落下直後の領域で線状体が鉛直方向に加速されている状態も見られ、 $l=60(\text{mm})$ の場合を見ると \dot{Y} は α が大きいほど、より水平に近い姿勢になるまで加速される傾向にあることも分かる。

なお、直径の影響は、流速が小さい方が顕著に現われることも分かった。

したがって、直径の影響は、線状体が流れ中に入ったときの急激な姿勢の変化が小さいほど、すなわち、比重量が

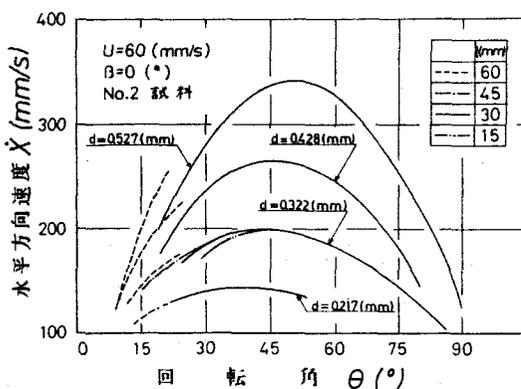


図4.36 水平方向速度におよぼす直径の影響

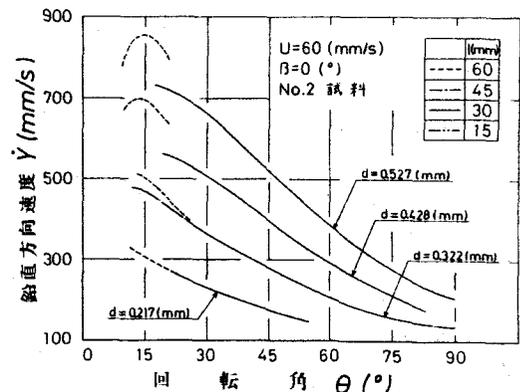


図4.37 鉛直方向速度におよぼす直径の影響

大きいほど、また、流速が小さいほど、明確に現われる。

4.7.3 線状体の姿勢

$U=60(\text{mm/s})$, $l=30(\text{mm})$ のNo.1試料の α と θ の関係を図4.38に示す。落下直後の急激な回転の領域を除き、 α にかかわらず α と θ の関係は同一曲線で表わされるので、この図には $\alpha=0^\circ, 2^\circ, 5^\circ$ の曲線が併記されている。

落下直後の急激な回転の領域を過ぎると、回転を押える向きに作用する回転モーメントの増大により、線状体は除々に回転し $\theta=90^\circ$ に漸近する。また、 α が大きいほど角速度は大きく、線状体が回転するのに要する時間は小さくなる。さらに、落下直後の急激な姿勢

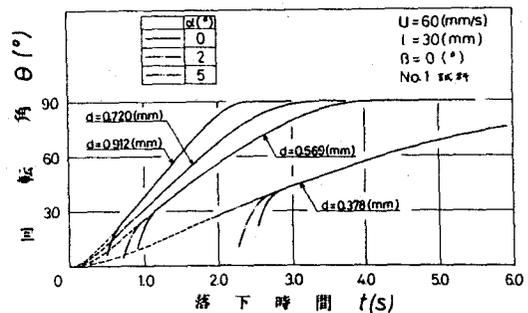


図4.38 姿勢におよぼす直径の影響

の変化は α が大きいほど小さいことが分かる。線状体が流れ中に入った瞬間に流体から受ける回転モーメントは α のオーダーであり、いっぽう、重心回りの慣性モーメントは α^2 のオーダーであるので、 α が大きいほど急激な姿勢の変化は小さくなる。さらに、 θ と $\dot{\gamma}$ の関係を表わす図4.35から、 α が大きいほど $\dot{\gamma}$ の値は大きいので、急激な回転を受ける時間は少ない。したがって、 α が大きいほど急激な姿勢の変化は小さくなる。

この直径の影響は、長さ、比重量および流速が異なる場合にも明確に現われる。

4.8 線状体比重量の影響

この節では， $d=0.569$ (mm)のNo.1試料と $d=0.527$ (mm)のNo.2試料に対する実験結果を基にして，線状体比重量が落下特性におよぼす影響について調べる。その際，No.1試料とNo.2試料では直径が異なるため，4.7節で述べた直径の影響の結果も考慮する必要がある。

4.8.1 線状体の落下軌跡

$U=60$ (mm/s)， $l=30$ (mm)のNo.1試料とNo.2試料の落下軌跡を図4.39に示す。図中の線状体の時間間隔は，No.1試料の場合， $\Delta t=1/3$ (s)，No.2試料の場合， $\Delta t=1/12$ (s)である。

両試料ともに落下直後の急激な回転の領域を過ぎると，除々に水平方向に姿勢を回転させながら落下し，その重心の軌跡は変曲点をもつような曲線を描く。No.1試料の軌跡は $\theta=75^\circ$ 付近 ($Y=230$ (mm)付近)で変曲点をもつが，No.2試料の軌跡は $\theta=70^\circ$ 付近 ($Y=290$ (mm)付近)で変曲点をもつ。

また，両者の重心の軌跡を比較すると，No.2試料の方が軌跡の接線勾配 dY/dX の変化が大きいことが分かる。 θ と重心の速度の関係を表わす図4.40，4.41から， θ の変化に対する \dot{X} ， \dot{Y} の変化はNo.2試料の方がはるかに大きく， $dY/dX = \dot{Y}/\dot{X}$ となることから， dY/dX の変化はNo.2試料の方が大きくなると考えられる。さらに，鉛直方向に同じ距離だけ移動した場合， y が小さい方が X の値は大きいことが分かる。これはつぎの原因による。落下直後の急激な姿勢の変化は y が小さい方が

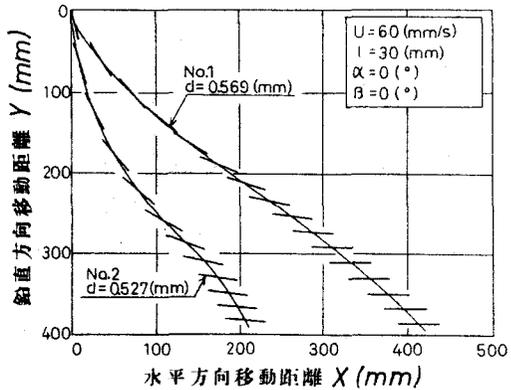


図4.39 落下軌跡におよぼす比重量の影響

大きいため、線状体がすべて流れ中に入ったときの姿勢はより水平に近い、さらに、 \dot{Y} は ρ が小さい方がはるかに小さくなるので、線状体が鉛直方向へ移動する距離が小さい。すなわち、鉛直方向へ移動するのにより長い時間を要する。したがって、 \dot{X} が小さいにもかかわらず、同一鉛直方向移動距離で比べると ρ が小さいNO.7試料の方が \dot{X} の値は大きくなる。

以上の結果から、矩形管内流れ中で比重量の異なる線状体を落下させれば、底面に到達したときの水平方向移動距離に差が生ずるので、比重量別に線状体を分類することができる。

4.8.2 線状体重心の速度

$U=60$ (mm/s) の \dot{X} と θ の関係および \dot{Y} と θ の関係を図4.40, 4.41に示す。図には、 $l=30, 60$ (mm) のデータをプロットしている。

θ の全領域で、 \dot{X} 、 \dot{Y} とともに、 ρ が大きいNO.2試料の方が大きくなる。また、NO.2試料の方がより水平に近い姿勢になるまで水平方向に加速されることが分かる。こ

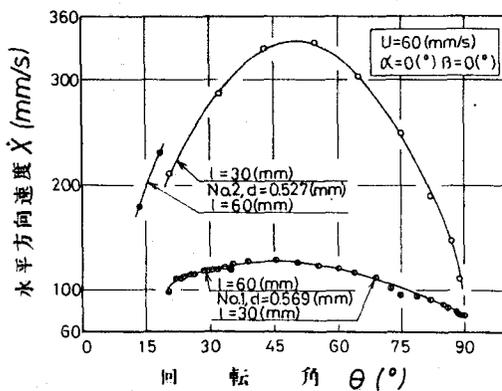


図4.40 水平方向速度におよぼす比重量の影響

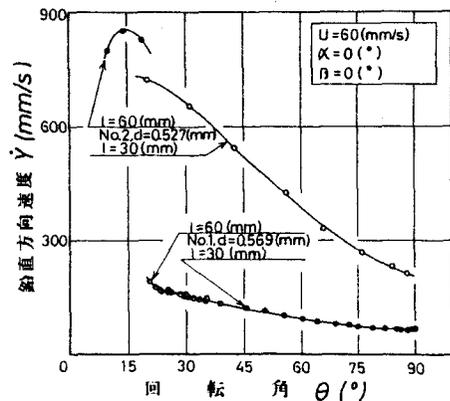


図4.41 鉛直方向速度におよぼす比重量の影響

で、直径が大きいほどより水平に近い姿勢になるまで加速されることを考慮すると、同一直径で重さが異なる場合、重い方がより水平に近い姿勢になるまで水平方向に加速される。さらに、 $l=60(\text{mm})$ と $l=30(\text{mm})$ の速度の差は、 X
 Y ともに γ_b が大きい方が大きく、また、 γ_b が大きい方が θ のより広い領域で長さの影響を受ける。

4.8.3 線状体の姿勢

$U=60(\text{mm/s})$ の γ と θ の関係を図4.42に示す。図には、 $l=30, 60(\text{mm})$ と $\alpha=0^\circ, 2^\circ, 5^\circ$ の曲線が併記されている。

γ_b が大きいNo.2試料の方が角速度は大きく、線状体が回転するのに要する時間が小さくなる。ここで、直径が大きいほど角速度は大きいことを考慮すると、同一直径で重さが異なる場合、角速度は重い方が大きくなる。これは、同一形状の場合、重い方が速度は大きく、線状体に対する流体の相対速度が大きくなり、したがって、線状体を回転させる向きに作用する回転モーメントが大きくなるためと考えられる。また、この図から、落下直後の急激な姿勢の変化は γ_b が大きい方が小さいことが分かる。同一形状であれば、線状体が流れに入った瞬間に流体から受ける回転モーメントは同じである。いっぽう、重心回りの慣性モーメントは γ_b が大きい方が大きい。さらに、 θ と $\dot{\gamma}$ の関係を表わす図4.41から、 γ_b が大きい方が $\dot{\gamma}$ の値は大きいので、急激な回転を受ける時間は少ない。したがって、 γ_b が大きい方

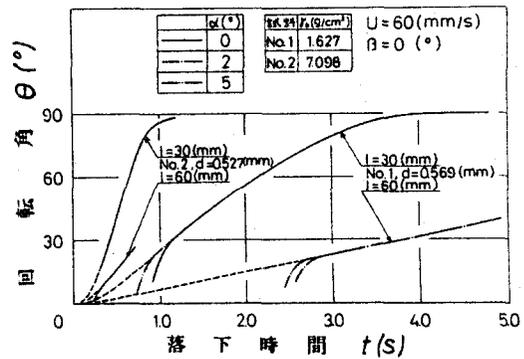


図4.42 姿勢におよぼす比重量の影響

が急激な姿勢の変化は小さい。

4.9 流速の影響

この節では、 $U=0, 20, 40, 60, 80$ (mm/s) 変化させたときの実験結果を基にして、流速が落下特性におよぼす影響について調べる。

4.9.1 線状体の落下軌跡

$d=0.569$ (mm), $l=30$ (mm), $U=0\sim 80$ (mm/s) の落下軌跡を図 4.43 に示す。初期角度および線状体の時間間隔は、 $U=0\sim 80$ (mm/s) の場合、それぞれ、 $\alpha=0.5^\circ, 0^\circ, 2^\circ, 2^\circ, 5^\circ, \Delta t=1/2, 2/5, 2/7, 1/3, 2/7$ (s) である。

この図において、原点にもっとも近い線状体の姿勢を比較すると、線状体が流れ中に入った瞬間に流体から受ける回転モーメントは、 U が大きいほど大きく、急激な姿勢の変化は大きいため、 U が大きいほどより水平に近い姿勢になることが分かる。この急激な回転の領域を過ぎると、線状体は除々に姿勢を変化させながら、その重心が変曲点をもつような曲線を描いて運動する。しかし、 $U=0$ (静止流体中) の場合、落下直後の急激な姿勢の変化が起らないため、 θ が約 40° で矩形管底面に到達し、その重心の軌跡には変曲点が見られない。また、 $U=80$ (mm/s) の場合、 $Y=300$ (mm) 付近で、姿勢はほとんど水平になり、しかも流速は壁面近

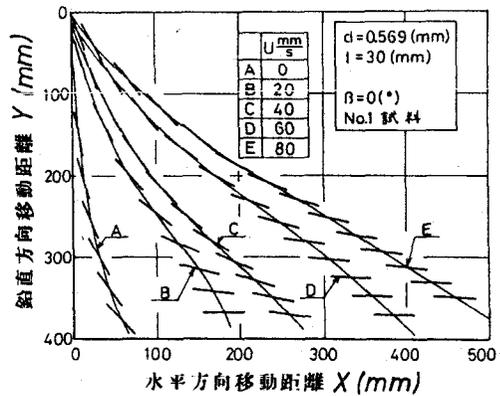


図 4.43 落下軌跡におよぼす流速の影響

くの領域(境界層内)を除いてほぼ同様であるため、重心の軌跡はほぼ直線状になる。ここで、重心の軌跡を比較すると、 U は \dot{Y} にはほとんど影響をおよぼさないが、 U が大きいほど \dot{X} が大きくなるため、軌跡の接線勾配は U が大きいほど小さくなる。また、変曲点までの鉛直方向移動距離は、 U が大きいほど小さくなる。

4.9.2 線状体重心の速度

$d=0.569$ (mm) の NO.1 試料の θ と \dot{X} の関係および θ と \dot{Y} の関係を図 4.44, 4.45 に示す。図には、 $l=30, 60$ (mm) の曲線が併記してある。

\dot{X} は θ の全領域で U が大きいほど大きくなる。また、線状体は、 $\theta=40^\circ\sim 50^\circ$ まで加速されるが、 U が大きいほどより水平に近い姿勢になるまで水平方向に加速されることが分かる。これは、 U が大きいほど、落下直後の急激な姿勢の変化が大きくなることに起因すると考えられる。いっぽう、図 4.45 において、 \dot{Y} は θ の小さい領域で U の影響を受け、 U が小さい方が、 \dot{Y} の最大値は大きく、そのときの θ の値は小さい傾向にある。しかし、 $d=0.569$ (mm) の場合、

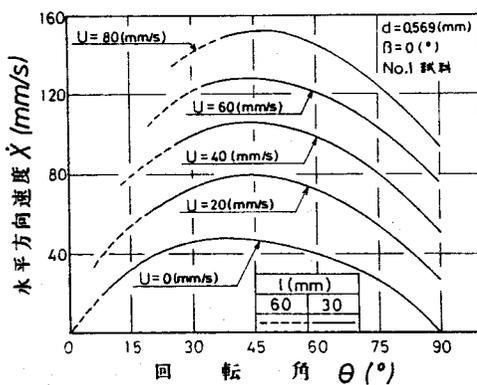


図 4.44 水平方向速度におよぼす
流速の影響

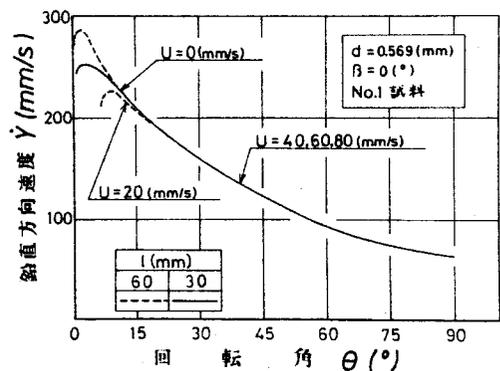


図 4.45 鉛直方向速度におよぼす
流速の影響

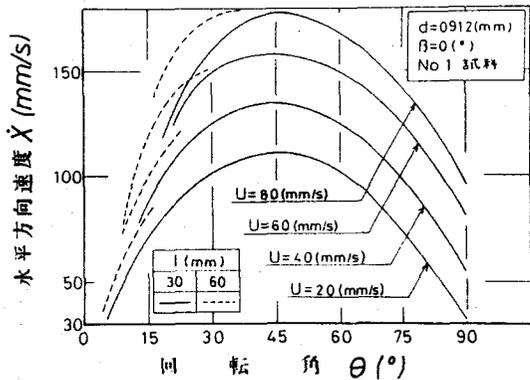


図 4.46 水平方向速度におよぼす流速の影響

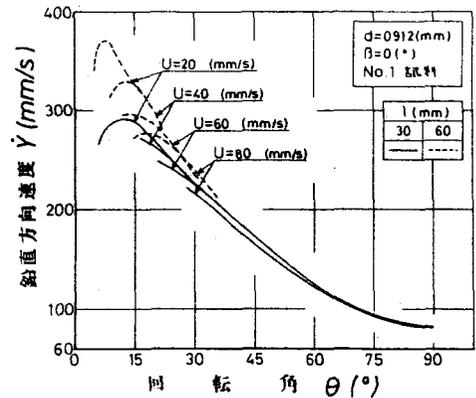


図 4.47 鉛直方向速度におよぼす流速の影響

落下直後の急激な姿勢の変化が大きいため、 $U \geq 40$ (mm/s) の場合、 U の影響は現われない。

そこで、 $d=0.569$ (mm) の場合に比べて落下直後の急激な姿勢の変化の小さい $d=0.912$ (mm) の結果を図 4.46, 4.47 に示す。

図 4.47 において、 \dot{Y} におよぼす U の影響が明確に現われ、 U が小さいほど \dot{Y} の最大値は大きく、そのときの θ の値は小さくなる。これは、 U が小さいほど、線状体が流れ中に入ったときの姿勢がより鉛直方向に近いため、流体から鉛直方向に受ける抗力は小さく、鉛直方向により大きく加速されるためであると考えられる。そして、 θ が増加すると U の影響は見られなくなり、 U にかかわらず θ と \dot{Y} の関係は同一曲線で表わされる。これは、流速が水平方向成分しか持たないからである。また、 $l=60$ (mm) と $l=30$ (mm) の \dot{Y} の差は、 U が小さいほど大きく、いっぽう、図 4.46 から、 \dot{X} の差は、 U が大きいほど大きいことが分かる。さらに、 \dot{Y} におよぼす U の影響は、 $l=60$ (mm) の方がより顕著に現われる。

以上は、No. 1 試料に対する結果であるが、つぎに、No.

が大きいNO.2試料に対する θ と $\dot{\gamma}$ の関係を図4.48に示す。

$\alpha=0.569(mm)$ のNO.1試料の場合、 $\dot{\gamma}$ が大きくなると $\dot{\gamma}$ におよぼす U の影響は見られなかったが、図4.48から、NO.2試料の場合、 $\alpha=0.322(mm)$ でも U の影響が顕著に現われている。

両者の直径を比べると

$\alpha=0.569(mm)$ の方が1.8倍大きい、比重量は $\alpha=0.322(mm)$ のNO.2試料の方が4.4倍大きく、したがって、落下直後の急激な姿勢の変化は、 $\alpha=0.322(mm)$ のNO.2試料の方が小さくなり、 U の影響が顕著に現われたと考えられる。なお、 $\alpha=0.322(mm)$ のNO.2試料の場合にも、 $\dot{\gamma}$ におよぼす U の影響が明確に現われた。

図4.44～図4.48にはデータがプロットされていないため分からないが、長さの影響を示す4.6.2項に記載する図4.26, 4.30の $l=15(mm)$ の場合を見れば分かるように、 $\theta=90^\circ$ の場合にも $\dot{\gamma}$ が減少する現象が見られる。この現象は、他の実験条件の場合にも現われている。これは、線状体が水平な姿勢を保ったまま、低速で矩形管底面近傍の境界層内へ入るために生ずる現象であり、姿勢が水平でない場合には、鉛直方向速度が大きいため、この現象は見られない。

以上の結果から、鉛直方向速度におよぼす流速の影響は、線状体が流れ中に入ったときの急激な姿勢の変化が小さいほど、すなわち、長さ、直径および比重量が大きいほど明確に現われる。また、水平方向速度に対する影響は、長

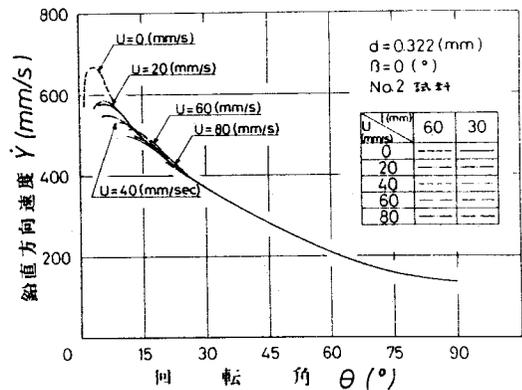


図4.48 鉛直方向速度におよぼす流速の影響

さ，直径および比重量に関係なく現われる。

4.9.3 線状体の姿勢

$d=0.569$ (mm), $l=30$ (mm) の NO.1 試料の α と θ の関係を図 4.49 に示す。

落下直後の急激な回転の領域を除き，線状体の姿勢の変化は， U に関係なく同一曲線で表わされる。本実験の場合，流れの発達はやるやかくであり，壁面近くの境界層内を除いて流速の場所的変化はわづかであるので， U は線状体の姿勢の変化にはほとんど影響をおよぼさない。

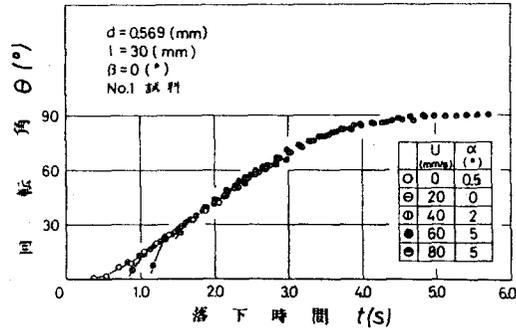


図 4.49 姿勢におよぼす流速の影響

したがって，姿勢の変化は静止流体中での場合とほぼ同じになる。さらに，この図において，落下直後の急激な姿勢の変化は， U が大きいほど α が大きいにもかかわらず大きくなること分かる。また， $l=30$ (mm) の場合，矩形管底面に到達したときの姿勢はほとんど水平であるため，底面近くの境界層の影響も見られない。

そこで，矩形管底面に到達したときの線状体の姿勢が鉛直に近い場合， $d=0.569$ (mm), $l=60$ (mm) の NO.1 試料の結果を図 4.50 に示す。

鉛直に近い姿勢で，底面に近づくと線状体の先端部が流速の小さい境界層内に入り，後端部は流速の大きいほぼ一様な流水中に入っている状態が発生し，先端部付近と後端部付近の流速の差により，線状体はその姿勢を鉛直に向ける方向に回転させられる現象が生ずると考えられる。しか

し，図4.50を見ると，このような現象は現われていない。また，他の実験条件の場合にもほとんど見られなかった。 $l=60$ (mm)の場合，先端部が境界層内，後端部がほぼ一様流れ中に入る状態が発生するが，底面近くでも $\dot{\gamma}$ は大きく，この状態は

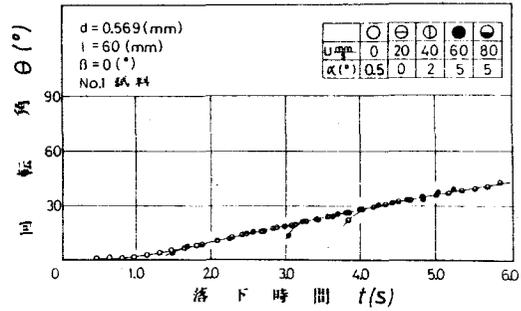


図4.50 姿勢におよぼす流速の影響

短時間のうちに終了し，上述のような姿勢の変化が見られなかったと考えられる。したがって，流れがもっと発達した領域で，線状体が運動する場合には，上述の現象が見られる可能性がある。

以上述べた流速の影響は，直径，比重量が異なる場合にも明確に現われる。

4.10 結 言

本章では，直線の線状体が単一で，矩形管内流れ中を自由落下する場合について実験的研究をおこない，落下軌跡，速度および姿勢などの落下特性をは握し，同時に，初期角度，長さ，直径，比重量および流速が落下特性におよぼす影響を調べた。

得られた結果を要約すると，つぎの通りである。

- (1) 線状体は，流れ中に入ったとき急激に回転するが，その後は，除々に水平方向に姿勢を回転させながら，その重心が変曲点をもつような曲線を描いて運動する。また，最終的にその姿勢は水平方向に漸近し，しかも，線状

体は水平方向には流速とほぼ同一速度で、鉛直方向には一定速度で移動する。

(2) 線状体は、 $\theta = 40^\circ \sim 50^\circ$ まで水平方向に加速されるが、その後には減速される。また、落下直後に、急激に鉛直方向に加速されるが、その後は θ の増加に伴ない単調に減速される。なお、落下直後の急激な姿勢の変化が大きい場合、流れ中で鉛直方向に加速される状態が見られない。

(3) 初期角度は、落下直後の領域を除き、軌跡の形には影響せず、線状体が運動する位置に影響を与える。いっぽう、長さ、直径、比重量および流速は軌跡の形に影響を与える。なお、初期角度、長さ、直径および比重量が小さいほど、また、流速が大きいほど、鉛直方向に同じ距離だけ移動したときの水平方向移動距離は大きくなる。

(4) 重心の速度におよぼす初期角度、長さの影響は、 θ の小さい領域で現われ、初期角度が大きいほど \dot{X} および \dot{Y} の最大値は大きくなり、長さが大きいほど \dot{X} 、 \dot{Y} は大きくなるが、 θ の増加に伴ないこれらの影響は見られなくなる。また、直径、比重量の影響は、 θ の全領域で現われ、直径、比重量が大きいほど \dot{X} 、 \dot{Y} は大きくなる。また、 \dot{X} は θ の全領域で、流速が大きいほど大きくなり、 \dot{Y} は θ の小さい領域で流速の影響を受け、流速が小さいほど大きくなるが、 θ の増加に伴ない流速の影響は見られなくなる。

以上述べた長さ、直径および流速の影響は、線状体が流れ中に入ったときの急激な姿勢の変化が小さいほど明確に現われる。

(5) 落下直後の急激な姿勢の変化の領域を除き，初期角度，流速は，姿勢の変化に影響をおよぼさない。また，長さが小さいほど，直径，比重量が大きいほど，角速度は大きく，線状体が回転するのに要する時間は小さくなる。なお，落下直後の急激な姿勢の変化は，初期角度，長さ，直径および比重量が大きいほど，また，流速が小さいほど小さい。

第5章 ノズル内流れ中における線状体の運動

5.1 緒言

繊維あるいは繊維集団を流体輸送する技術は、繊維工業の各種工程で広く応用されている。ここで研究対象としているノズル(縮小管)は、繊維の流体輸送工程のうち、とくに、繊維を流れの方向に配向させる目的、および流速の差を利用して繊維を引伸ばす目的で利用される場合が多い。たとえば、オープンエンド精紡機のコーミングローラとロータ入口間のダフトは縮小管で構成されている。

いっぽう、縮小管内での繊維の輸送を取扱った例としては、Edberg⁴⁾の研究があり、縮小管内の高速気流により繊維を流れ方向に配向させることができるという結果を得ているが、この場合にも、流れ中での繊維の運動状態およびどのように姿勢が変化して流れ方向に繊維が配向するかなど、この現象の基本的事項についてはほとんど検討されていない。このように実際には広く利用されているにもかかわらず、縮小管内流れ中における繊維の基本的運動特性についてはほとんど明らかにされていないのが現状である。

本章では、繊維のもっとも簡単なモデルとして直線の線状体を考え、線状体が単一で低速のノズル内流れ中を自由落下する場合について実験的研究をおこない、この現象の基本事項を把握し、あわせて第4章の矩形管内流れ中での線状体の運動との比較をおこない、ノズル内流れ中での落下特性を明らかにする。生産工程では、繊維は気流中および液中で運動するが、線状体の運動の観察、実験は水中の方が容易であることから、水中で線状体の落下特性および諸要因の影響について調べることにした。

5.2 ノズル内流れ中における線状体の落下実験装置

実験装置は、テスト部以外はすべて図4.1に示した矩形管内流れ中での線状体の落下実験装置と同じである。したがって、テスト部の概要を図5.1に示す。この図において、水は右側から矢印の向きに整流部②からテスト部①に入り、流量調節用バルブ④を経て排出される。

テスト部のノズルは、底面は収縮しておらず、上面だけが傾き $1/4$ （水平方向に対し 14° ）で収縮しており、流路幅は一定である。ノズル部の長さは 800 (mm)、入口部断面は 400 (mm)× 100 (mm)、出口部断面は 200 (mm)× 100 (mm)である。ノズル出口部には整流格子⑤があり、ノズルより下流の部分の影響が伝わらないようにしてある。このテスト部はすべて厚さ 10 (mm)の透明アクリル板で製作した。また、線状体の運動を調べるためにマルチストロボ撮影をおこなうので、撮影の背景となるテスト部後面にはストロボランプの光が反射して線状体の落下状態が不鮮明にならないよう、つや消し黒色塗装した。

線状体落下装置③はノズル入口部から 100 (mm)下流のノズル部上側に隣接しており、流路とは切り離されている。これは、流れを落下装置が乱さないようにするためである。線状体落下

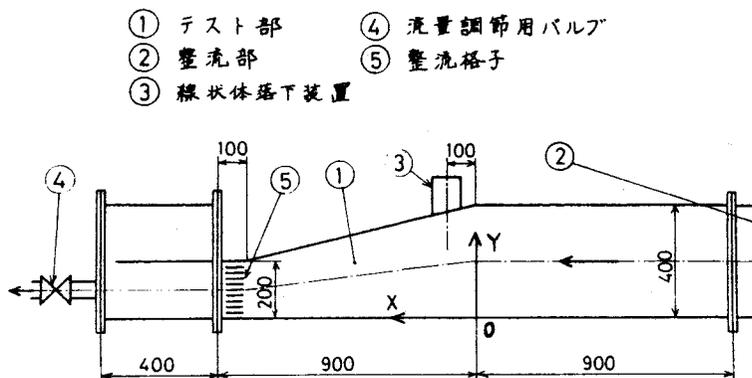


図5.1 ノズルテスト部概要

装置の底面とノズル部上面には， 4×65 (mm) のスリットが設けてあり，落下装置とノズル部は，このスリットでつながっているだけである。

5.3 ノズル内流れ特性

4.3節で述べたように，整流部を通過した流れはほぼ一様流れになっているので，テスト部の断面形状が変化しない領域（整流部からノズル入口部までの領域）では流れが発達している。ところが，線状体が運動するノズル内では加速する流れであるため，ふたたび一様流に近づくと考えられる。そこで，線状体の落下実験をおこなう前に，ノズル部での流速分布を調べる必要がある。

5.3.1 ノズル内流れの流速分布測定方法

ノズル入口部の平均流速は，最大 60 (mm/s) と低速であるため，矩形管内流れの場合と同様に，アルミ微粉末およびポリスチレンビーズを用いたトレーサ法により流速分布を測定した。

流速分布測定装置の概要を図 5.2 に示す。本実験装置の座標

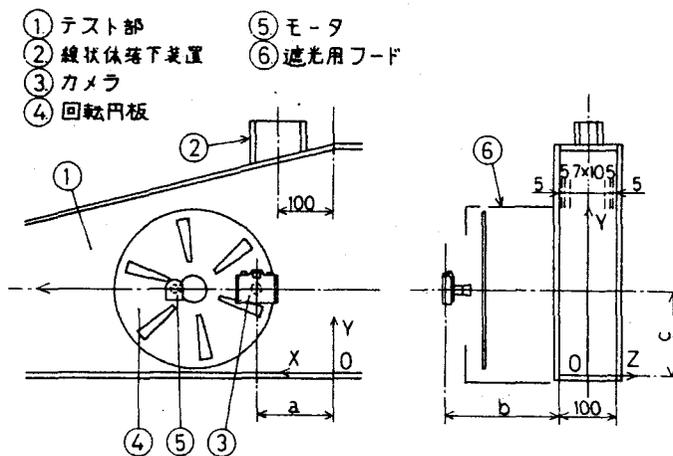


図 5.2 ノズル内流速分布測定装置概要

系としては、ノズル入口部底面の幅方向中心を原点(0)とし、鉛直上向きにY軸、水平方向流れの向きにX軸、水平面内でX軸と直角方向にZ軸を定めた。トレーサ法では、トレーサ粒子がスリット光の平面内で運動あることが必要であり、矩形管内流れの場合には、図4.2に示したXZ面およびXY面に平行な平面内でトレーサ粒子は運動あるので、XZ面に平行にスリット光を当てて測定をおこなった。しかし、ノズル内流れの場合には、XZ面に平行な面は流れと角度をもちており、トレーサ粒子はこの平面内では運動しないので、トレーサ粒子が運動するXY面に平行な面を測定面に選んだ。すなわち、図5.2には光源部は描かれていないが、後述するように、スリット光をXY面に平行に投入する。撮影では、実験室全体を暗室とし、ノズル部側方からカメラ③により、スリット光の当たる平面内のトレーサ粒子の軌跡を撮影する。その際、穴あき回転円板④をモータ⑤により、カメラのレンズ直前で回転させ、トレーサ粒子の描く軌跡が点々で撮影されるようにする。なお、円板の穴は、中心角が15°で6個設けてある。矩形管内流れの場合には、光を断続的にしゃ断したが、本実験の場合には、カメラのレンズを断続的にしゃ断することになる。したがって、円板の回転数を決めると露出間隔が決まるので、トレーサ粒子の軌跡の間隔から流速を求めることができる。

つぎに、流速測定に用いた光源部および測定位置について述べる。図5.3に示すように、ノズル部を6個のブロックに分割して撮影をおこなった。1~4のブロックでは、図5.4にその概要を示す光源部を用いた。光源④の光は反射鏡③で鉛直上向きになり、幅1(mm)の2重スリット②を通

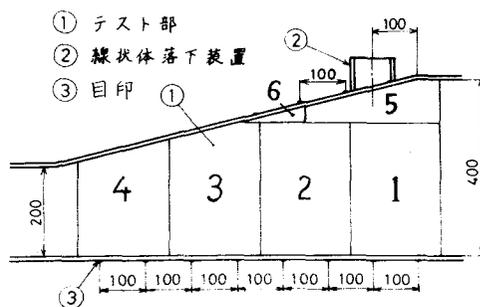


図5.3 流速分布撮影位置

て平行光線になり，ノズル部
 下方からXY面に平行に投入
 される。また，5と6のブロ
 ックでは，図5.5にその概要
 を示す光源部を用いた。光源
 ③の光を幅1(mm)の2重ス
 リット②により平行光線にし
 ，ノズル部上方からXY面に
 平行に投入する。図5.4，5.5
 に示すように，光源部をノズ
 ル幅方向（Z方向）に移動さ
 せ，壁面直傍5(mm)間隔，
 中央部10(mm)間隔，計11箇
 所の各位置におけるトレーサ
 粒子の軌跡を撮影した。これ
 によって，ノズル部の流速分
 布を3次元的に求めることが
 できた。

線状体の落下実験は，ノズ
 ル入口部の平均流速 $U=10, 20$
 $, 40, 60$ (mm/s)でおこなう
 ため，流速分布の測定も，こ
 れらすべての流速についてお
 こなった。なお，円板の回転
 数は， $U=10, 20, 40, 60$
 (mm/s)の場合，それぞれ $N=20, 30, 60, 60$ (rpm)である。

5.3.2 ノズル内流れの流速分布算出方法

ノズル内流れの流速分布測定は，ノズル部を6個のブロック
 に分割しておこなったが，図5.3に示したように，各ブロック

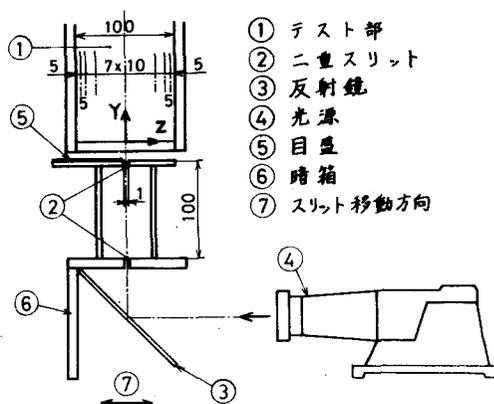


図5.4 光源部概要

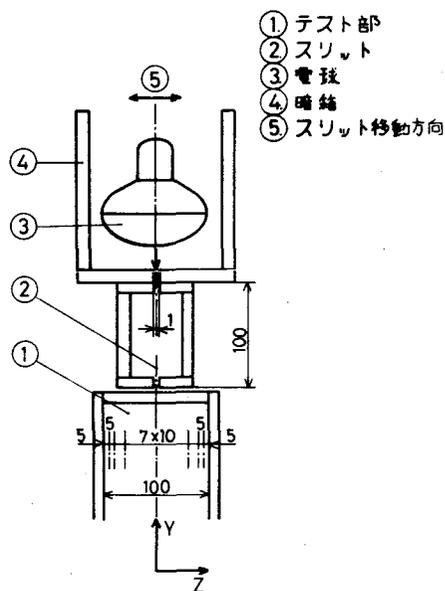


図5.5 光源部概要

に目印を2個づつ100 (mm)間隔で設けた。目印には、幅5 (mm)のアルミ薄板を用い、これを図5.6に示すように、流れに直角にノズル部の底面あるいは上面の外側にはりつける。これにスリット光を当てると目印の所だけ光が通らず、写真面上で目印の位置および目印間の距離が分かる。したがって、この目印が、写真面上から流速分布を求める際に位置および長さの基準になる。

図5.7に撮影されたトレーサ粒子の軌跡の一例を示す。この図は、 $U=20$ (mm/s)、ブロック番号4、 $Z=0$ (幅方向の中心)の位置の場合である。この図で、点々で写っているのがトレーサ粒子の描く軌跡であり、ノズル部の底面にはりつけた目印も撮影されている。

つぎに、撮影されたトレーサ粒子の軌跡から流速を求める方法について述べる。図5.8にトレーサ粒子の軌跡の模式図を示す。

l は目印間の距離、 ℓ はトレーサ粒子の点と点の距離、 η はノズル底面から、その点と点を結んだ線と直線ABとの交点Cまでの距離である。これらの値を写真面上で測定すれば、次式から η の実際の距離 Y (mm)の位置における流速 U (mm/s)が求められる。

- ① テスト部
- ② アルミ薄板
- ③ スリット光
- ④ アクリル板

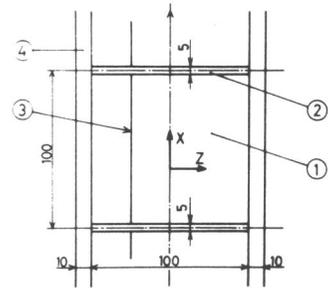


図5.6 目印の状態

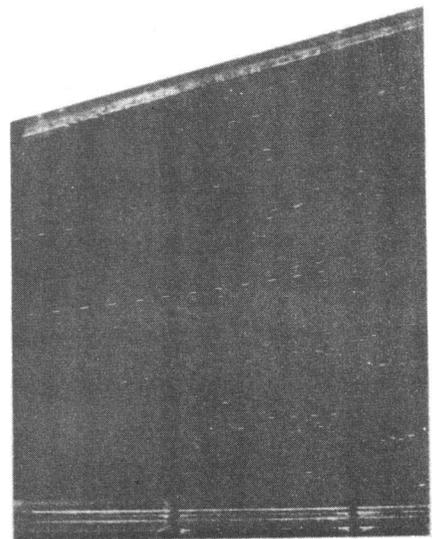


図5.7 ノズル内流速分布撮影例

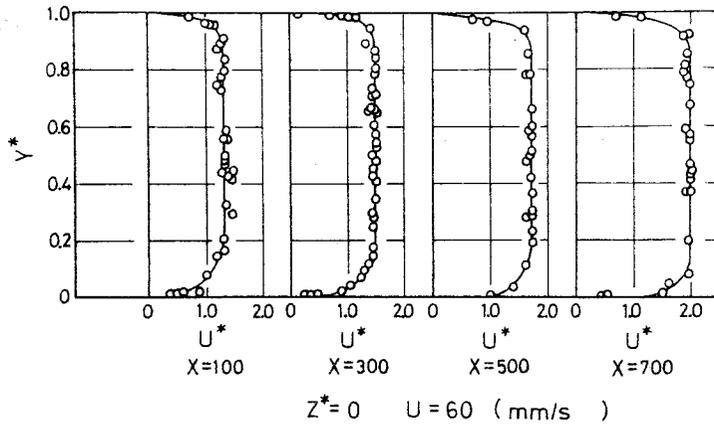


図5.9 ノズル高さ方向流速分布

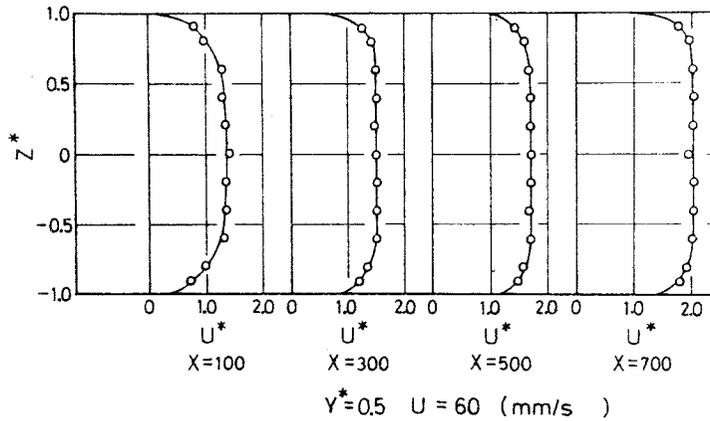


図5.10 ノズル幅方向流速分布

ける流速分布を作成した結果が図5.10である。

図5.9, 5.10において, ノズル入口部にもっとも近い $X=100$ (mm)の位置では, 流速は $0.2 < Y^* < 0.8$ および $-0.5 < Z^* < 0.5$ の範囲内でほぼ一様となり, $X=700$ (mm)の位置では, $0.7 < Y^* < 0.9$ および $-0.6 < Z^* < 0.6$ の範囲でほぼ一様になる。したがって, 整流部を通過してほぼ一様になった流れはノズル入口部までの領域で発達し, ノズル内へ入る。ところが, ノズル内では流れが加速されるため, X の増加に伴ない境界層の厚さ

は薄くなり，ふたたび一様流に近づく。また，各位置での流れの方向は， XY 面に平行で，ノズル部の底面と上面の交点 ($X = 1600 \text{ (mm)}$) とその位置を結ぶ線に一致する。

5.4 ノズル内流れ中における線状体の落下実験方法

線状体の落下特性として，重心の軌跡，速度および姿勢，角速度を考え，流速，線状体の比重量，長さ，直径および初期角度が落下特性におよぼす影響を調べた。

5.4.1 線状体の落下実験方法

すでに述べたように，実験装置は，テスト部以外はすべて矩形管内流れ中における場合と同じであり，したがって，線状体の落下実験方法も矩形管内流れ中における場合とまったく同じであるので，ここでは簡単に述べる。（詳細は4.4.1項参照のこと）

2個の流量調節用バルブおよびポンプ用バルブにより流量を調節し，流れが定常状態になった後，線状体を落下させ，運動状態をマルチストロボ撮影した。撮影は，ノズル部側方 (No.1カメラ) と上方 (No.2カメラ) の直角2方向からおこない，2枚のフィルム面上に運動状態を記録した。また，ノズル部底面の外側に落下点測定用グラフを取付け，線状体の最終落下点位置を調べた。なお，本実験装置の座標系は流速分布測定の場合と異なり，ノズル部入口から 100 (mm) 下流 (線状体重心の初期位置) のノズル部上面の内側の幅方向中心を原点 (O) とし，水平方向流れの向きに X 軸，鉛直下向きに Y 軸，幅方向に Z 軸を定めた。

撮影では，実験室全体を暗室とし，運動状態が十分わかるような写真間隔を得るため，実験条件によりストロボ発光数を $S = 480 \sim 1500 \text{ (cpm)}$ の範囲で変化させた。

線状体落下装置の概要を図5.11に示す。線状体を落下させる方法は矩形管流れ中での場合と同じで、ピンセット押上げ用ネジ③でピンセット⑦を押上げると、所要の初期角度 α で固定されている線状体⑩が落下し始め、スリット⑪を通してノズル内へ落下する。

実験には、比重量の影響を調べるため、鉛筆の芯(No.1試料)とピアノ線(No.2試料)の2種類の試料を用いた。そして、ノズル入口部平均流速は、 $U=10, 20, 40, 60$ (mm/s)の4種類とした。それらの試料条件および実験条件を表5.1～表5.3に示す。

表5.1は $U=60$ (mm/s)の場合であり、表5.2は $U=20, 40$ (mm/s)の場合で、試料条件を必要最小限にとどめた。表5.3は $U=10$ (mm/s)の場合であり、矩形管内流れ中、ノズル内流れ中の場合を通じて、これだけが層流域である。したがって、 $U=10$ (mm/s)の実験は乱流域と層流域で線状体の運動に相違があるかどうかを調べる目的も兼ねている。

なお、 $U=10, 20, 40$ (mm/s)の場合、初期角度はすべて $\alpha=0^\circ$ とした。

- ① テスト部
- ② 塩化ビニール板
- ③ ピンセット押上げ用ネジ
- ④ ピンセット取付用ネジ
- ⑤ 落下装置内押用棒
- ⑥ 落下初期角度設定用円アワフ
- ⑦ ピンセット
- ⑧ ガラス管
- ⑨ ガラス板
- ⑩ 線状体
- ⑪ 線状体落下用スリット

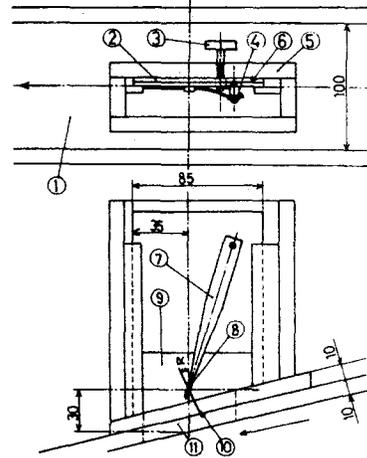


図5.11 線状体落下装置概要

表5.1 試料および実験条件 1

試料番号	試料名	線状体直径 d (mm)	線状体長さ l (mm)	線状体 比重量 γ (g/cm ³)	落下初期 角度 α (°)
1	鉛筆芯	0.378	30 60	1.793	0
		0.569	15 30 45 60	1.627	2
		0.720	30 60	1.641	5
		0.912		1.562	
2	ピアノ線	0.217	30 60	7.098	0
		0.322	15 30 45 60		2
		0.428	30 60		5
		0.527			

$U = 60$ (mm/s)

これらの実験では，流速 U ，線状体の比重量 γ ，長さ l ，直径 d および初期角度 α がおよぼす影響について調べた。

初期角度 α とは，初期位置での線状体の軸方向と鉛直線のなす角度であり，図 5.11 に示したように流れの向きとは逆向きである。

以上の実験は，初期位置における水平面内での線状体の軸方向と流れの方向のなす角度 $\beta = 0^\circ$ でおこなった。(図 4.13 参照)

つぎに，矩形管内流れ中での場合と同様に， β の影響を調べるため，表 5.4 に示す試料条件および実験条件で，初期角度 $\alpha = 90^\circ$ ， $\beta = 45^\circ$ で実験をおこなった。以上，2種類の実験では，線状体重心の初期位置はノズル幅方向の中心 ($X-Y$ 面上) である。

実験では，各実験条件につき15本程度の線状体を落下させ，最終落下位置での線状体重心の水平方向移動距離の平均値に近い実験を2個ないし3個選び，それらの写真から線状体両端の座標を読取る。この座標を以下で述べる方法で X ， Y 座標に変

表 5.2 試料および実験条件 2

試料番号	試料名	線状体寸法		線状体比重量 γ (g/cm ³)	平均流速 U (mm/s)
		d (mm)	l (mm)		
1	鉛筆芯	0.569	30 60	1.627	20
		0.912		1.562	40
2	ピアノ線	0.322	30 60	7.098	20
		0.527			40

表 5.3 試料および実験条件 3

試料番号	試料名	線状体寸法		線状体比重量 γ (g/cm ³)
		d (mm)	l (mm)	
1	鉛筆芯	0.378	30	1.793
		0.569		1.627
		0.720	60	1.641
		0.912		1.562
2	ピアノ線	0.217	30	7.098
		0.322		
		0.428	60	
		0.527		

$U = 10$ (mm/s)

表 5.4 $\beta = 45^\circ$ の試料および実験条件

試料番号	試料名	線状体寸法		線状体比重量 γ (g/cm ³)	流速 U (mm/s)
		d (mm)	l (mm)		
1	鉛筆芯	0.569	15 30	1.627	10
			45 60		20
		0.720	30 60	1.641	40
0.912	1.562	60			
2	ピアノ線	0.322	30 60	7.098	60
		0.527			

換し，2.9.3項で述べた方法により落下特性を求め，それらを図示し，検討した後，その中の1つを実験データとして採用した。

5.4.2 写真面上から真の落下運動を求めろ方法

ノズル部上方からの撮影により，線状体はほぼXY面内で運動することが確認できたので，矩形管内流れ中での場合と同じ方法で，写真面上の座標をX，Y座標に変換することができた。図5.12に示すように，ノズル部前面のアフリル板上に，X，Y座標を表わす目印ABCDを設けた。ABおよびCDはノズル部内壁に貼った位置に設けてある。

この目印のうち，Aを原点(0')，水平方向にx'軸，ADをy'軸とし，写真から線状体両端の座標 (x'_{i1}, y'_{i1}) ， (x'_{i2}, y'_{i2}) を読取る。なお，図5.12において，()内の数値は実際の長さである。x'，y'座標をX，Y座標に変換するためには，XY面とノズル前面の被写体距離 L_1 ， L_2 を考慮する必要がある。まず，写真面上でのx'，y'方向の補正值 l_{ch} ， l_{cv} について考える。

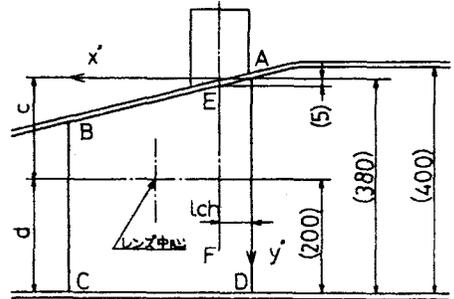


図5.12 写真上の基準位置

レンズ中心はノズル底面から200(mm)の位置にあるので，鉛直方向補正 l_{cv} は

$$l_{cv} = [180/380 - (175/380)(L_2/L_1)](c+d) \quad (5.3)$$

となり，写真から $(c+d)$ を読取れば， l_{cv} が求まる。

いっぽう，水平方向補正值 l_{ch} は，実験に際してY軸と一致させて設けた目印EFを $U=0$ の状態撮影しておき，その写

真から読取る。

したがって、線状体両端の実際の座標は

$$A = 380 / [(L_2/L_1)(C+d)] \quad (5.4)$$

とすると、

$$\left. \begin{aligned} X_{ij} &= A (Z'_{ij} - l_{ch}) \\ Y_{ij} &= A (Z'_{ij} - l_{cv}) \end{aligned} \right\} \quad (5.5)$$

(j=1, 2)

となる。

そこで、この線状体両端の座標から、2.9.3項で述べた方法により落下特性を求めた。

以上、線状体の落下実験により、流速、線状体の比重量、長さ、直径および初期角度が重心の軌跡、速度および姿勢、角速度におよぼす影響を調べることができた。

以下では、その結果について報告する。その際、落下特性は矩形管内流れ中での場合と同じ表現方法とする。

5.5 線状体の落下特性

この節では、以下で諸要因が落下特性におよぼす影響を述べる前に、線状体の落下特性の概要について説明する。

$U = 60 \text{ (mm/s)}$, $d = 0.569 \text{ (mm)}$
 $l = 30, 60 \text{ (mm)}$ と $d = 0.912 \text{ (mm)}$
 $l = 30 \text{ (mm)}$ の落下軌跡を図5.13に示す。

線状体の初期位置は、 $Y=0$ の上
 方 30 (mm) である (図5.11参照)

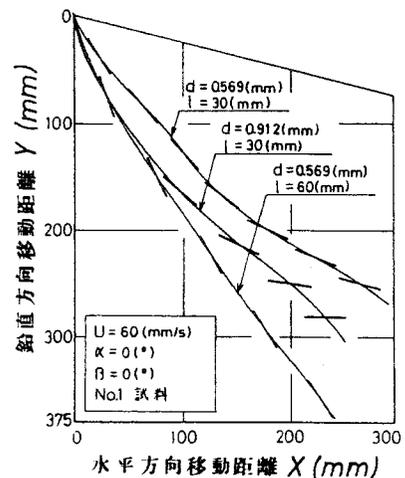


図5.13 線状体の落下軌跡

ので，線状体が落下装置から流れ中に入るとき，その先端部が流れ中に入り，後端部が落下装置内に残る状態が瞬間的に発生する。そのとき，先端部が流体から抗力を受けるため，線状体は急激に流れの向きに回転する。したがって， $d=0.569(mm)$ ， $l=30(mm)$ の場合，線状体がすべて流れ中に入ったときの鉛直方向に対する線状体の傾斜角（回転角 θ ）は約 25° となっている。その後，線状体は水平方向に姿勢を回転させながら落下し，最終的にその姿勢は水平方向に漸近する。しかし，姿勢の変化を示す図5.14を見れば分かるように，姿勢は矩形管内流れ中での場合のように滑らかに変化せず，曲線の接線勾配（これは角速度を表わしている。）が大きい所と小さい所が繰返し現われ，変動しながら水平方向に近づく。なお，この変動は減衰振動のように徐々に小さくなる。

また，重心の軌跡も，矩形管内流れ中での場合と異なり，いくつかの変曲点をもつ曲線となっている。

とくに， $d=0.569(mm)$ ， $l=30(mm)$ の場合，明確に現われ， $\theta=38^\circ$ ($Y=85(mm)$)， $\theta=42^\circ$ ($Y=130(mm)$)， $\theta=68^\circ$ ($Y=230(mm)$)付近の3点で，重心の軌跡は変曲点をもつ。 $\theta=38^\circ$ ， 68° 付近では，軌跡の接線勾配 dY/dX は極小となり， $\theta=42^\circ$ 付近では極大となる。図5.14から， dY/dX が極小になるときの θ の値は，角速度が小さくなる（ほとんど0）ときの θ の値とほぼ一致することが分かる。

つぎに，重心の速度の変化を調べるため， $d=0.569(mm)$ ， $l=30, 60(mm)$ の θ と X の関係および θ と Y の関係を図5.15，5.16に示す。図には，矩形管内流れ中での結果が一点鎖線で

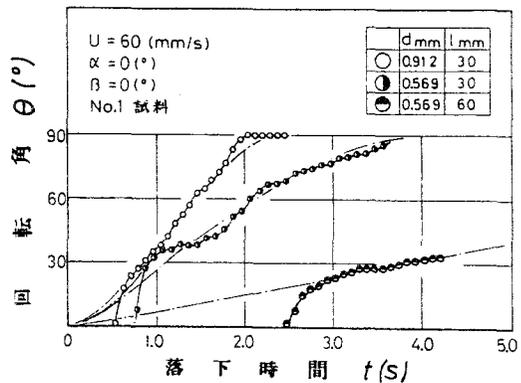


図5.14 線状体の姿勢の変化

併記されている。 θ の変化に対して、 \dot{X} 、 \dot{Y} は矩形管内流れ中での場合のように滑らかに変化せず、加速と減速を繰返す現象が見られる。すなわち、角速度が急激に減速されている領域では、速度も減速され、ふたたび角速度が加速され始めると、速度もふたたび加速される状態が見られる。

また、図5.15において、 $l=30(mm)$ の場合、 θ の小さい領域では、ノズル内流れ中での \dot{X} は矩形管内流れ中での \dot{X} の上下を変動しているが、 θ の大きい領域では、線状体は下流側の下方に位置し、しかもノズル内では流れが加速しているため、流速の水平方向成分は矩形管内流れ中での場合より大きくなり、したがって、ノズル内流れ中の方が \dot{X} は大きくなる。いっぽう、図5.16において、ノズル内では流速が鉛直方向成分を持っているため、 \dot{Y} は矩形管内流れ中での場合より大きくなる。しかし、 θ の増加に伴ない線状体はノズルの下方に位置するため、流れの方向はほとんど水平になるので、ノズル内流れ中での場合と矩形管内流れ中での場合の差は減少する。

以上のように、線状体がノズル内流れ中で運動する場合、姿勢および重心の速度の変化には、矩形管内流れ中での運動では見られなかった細かい変動が現われる。以下では、この変動の

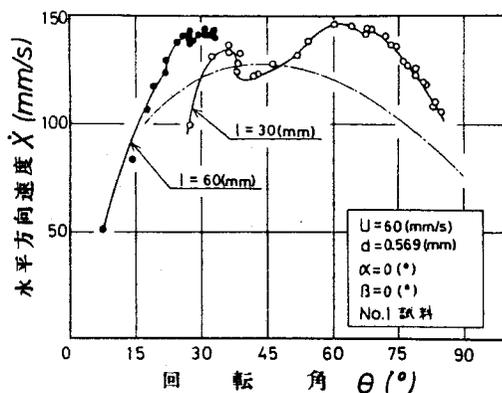


図5.15 水平方向速度の変化

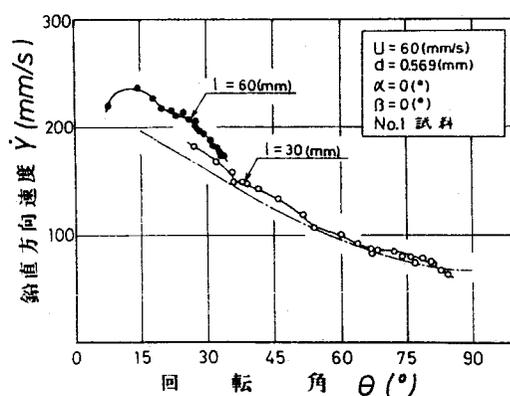


図5.16 鉛直方向速度の変化

原因について考える。

ノズル内流れは加速しており、線状体の先端部付近の流速は、後端部付近の流速より大きく、角速度が小さいときには、線状体に対する流体の軸に直角な方向の相対速度は先端部付近の方が大きくなり、線状体の姿勢を水平にする向きに回転モーメントが作用するため、角速度は加速される。ところが、角速度が大きくなると、線状体が流体から軸に直角方向に受ける抗力に基づく回転モーメントは、角速度の向きと逆向きに作用し始めるため、角速度は減速される。そして、ふたたび角速度が小さくなると、上述の原因で角速度が加速されるという変動を繰返す。したがって、角速度の加速が大きいほど減速も大きくなると考えられる。すなわち、変動の振幅は大きくなる。しかし、角速度には除々に変動が見られなくなる。線状体は、その角速度を変動させながら運動し続け除々にノズル底面に近づくと、流れの方向は底面に近いほど水平になり、しかも、線状体の姿勢は水平に近づくため、軸に直角な方向の流体の相対速度は、線状体の先端部付近と後端部付近でほとんど差がなくなり、角速度には除々に変動が見られなくなると考えられる。

いっぽう、図 5.15, 5.16 において、 $l = 30 (mm)$ の場合、 $\theta = 38^\circ$ と 68° 付近で \dot{X} は急激に減速され、 \dot{Y} もわずかに減速される現象が見られる。流れ中に入った線状体は、流体から受ける抗力により水平方向に加速され、鉛直方向に減速されるが、線状体の運動に伴ない \dot{X} は増大し、姿勢は水平方向に回転するため、線状体に対する流体の相対速度は小さくなり、流体から受ける水平方向の抗力が減少するため、線状体の水平方向加速度は減少する。したがって、加速度の方向は反時計回りに回転し、 \dot{X} が極大となる $\theta = 36^\circ$ 付近で鉛直上向きとなる。すなわち、 $\theta = 36^\circ$ 付近まで水平方向に加速される。このとき、重心の水平方向移動距離は約 $50 (mm)$ であるから、この断面での平均流速は約 $66 (mm/s)$ である。ここで、一点鎖線で表わされている

矩形管内流れ中での \dot{X} の最大値と $\theta=36^\circ$ 付近のノズル内流れ中での \dot{X} の極大値を比較すると、ノズル内流れ中での極大値の方が約6 (mm/s) 大きく、これは両者の流速の差と一致する。 θ が 36° を越えると水平方向加速度は負となり、 $\theta=38^\circ$ 付近で重心の運動方向と加速度の方向が一致し、重心の軌跡は変曲点をもつ。また、水平方向加速度が負となるため、 \dot{X} は減少する。いっぽう、線状体は約 38° の姿勢を保ったまま下方に運動するが、ノズル底面に近いほど流れの方向は水平となり、流体の線状体に対する軸方向の相対速度が大きくなるため、軸方向に作用する抗力が増大し \dot{Y} は減少する。しかし、線状体が約 38° の姿勢を保って下流方向へ運動し続けると、ノズル内流速は下流側ほど大きいため、ふたたび水平方向に加速され始める。そして、上述と同じ原因で $\theta=62^\circ$ 付近で \dot{X} は極大になり、 $\theta=68^\circ$ 付近でふたたび減少する。なお、 $\theta=62^\circ$ 付近の方が、線状体は下流側に位置するため、 \dot{X} の極大値は大きくなる。

以上述べた原因で、重心の速度は変動するため、姿勢の変化および線状体が運動する位置が異なると、速度の変動状態が変わる。

以上の結果をまとめると、重心の軌跡はいくつかの変曲点をもつ曲線となり、姿勢は減衰振動のように変動しながら水平方向に漸近し、重心の速度も変動する。このように、落下特性に変動が見られるのは、ノズル内流れが加速していることと、ノズル内では位置によって流れの方向が異なることが主な原因である。

5.6 初期角度の影響

この節では、 $\alpha=0^\circ, 5^\circ$ 変化させたときの実験結果から、初期角度が落下特性におよぼす影響を調べる。

5.6.1 線状体の落下軌跡

$d=0.569$ (mm), $l=30$ (mm) の No.1 試料を, ノズル入口平均流速 $U=60$ (mm/s) の流れ中に, $\alpha=0^\circ, 5^\circ$ で落下させたときの落下軌跡を図 5.17 に示す。図中の線状体の時間間隔は $\Delta t=0.3$ (s) である。

$\alpha=0^\circ, 5^\circ$ とともに, 重心の軌跡はいくつの変曲点をもつ曲線となるが, 矩形管内流れ中での場合と異なり, 両者の軌跡の形は少し異なっている。すなわち, $\alpha=0^\circ$ の軌跡の方が曲線の変動が大きい。これは, ノズル内流れが加速していることと, ノズル内では位置によって流れの方向が異なることなど, 位置によって流れの状態が異なるため, その影響が現われたと考えられる。

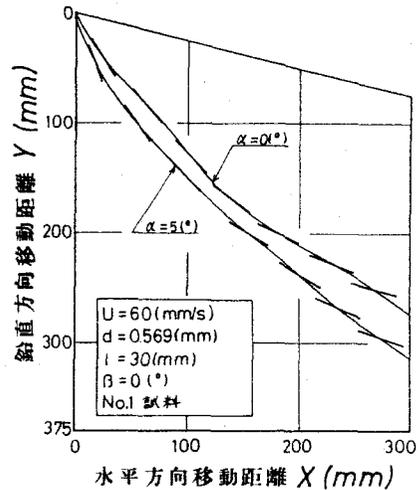


図 5.17 落下軌跡におよぼす初期角度の影響

図 5.17 において, $\alpha=5^\circ$ の軌跡の方が下方に位置している。初期角度が大きい方が, 線状体がすべて流れ中に入ったときの姿勢がより鉛直に近いので, 鉛直方向速度は大きく, 水平方向速度は小さくなり, 重心の軌跡は下方に位置する。

重心の軌跡が上方に位置すると, 流れが加速している影響を受け易くなり, 軌跡が大きく変動すると考えられる。

したがって, 初期角度は, 線状体が運動する位置に影響を与えるが, その結果, ノズル内の流れ特性により重心の軌跡の形も異なる。

5.6.2 線状体重心の速度

$U=60$ (mm/s), $d=0.569$ (mm) の θ と X の関係および θ と Y の関係を図 5.18, 5.19 に示す。図には, $l=30, 60$ (mm) の曲線

を併記している。

\dot{X} , \dot{Y} ともに加速と減速を繰返す現象が見られる。ノズルの形状から、流速の水平方向成分の方が鉛直方向成分より大きいいため、 \dot{X} と \dot{Y} の変動を比較すると、 \dot{X} の変動の方が大きい。また、姿勢の変化を表わす図5.22から、角速度が加速、減速されるときの θ の値と、重心の速度が加速、減速されるときの θ の値は一致することが分かる。

図5.18において、同一回転角に対する \dot{X} の値は α が大きい方が大きくなる。ただし、 $l=30(mm)$ の場合、 $\theta > 55^\circ$ の領域ではこの傾向は見られなくなる。

これは、つぎの原因による。 α が大きい方が、線状体が流れ中に入ったときの姿勢がより鉛直に近いいため、流体から水平方向に受ける抗力が大きくなり、水平方向へより大きく加速され、落下後の領域で \dot{X} は大きくなる。また、 α が大きい方が重心の軌跡は下方に位置し、ノズル底面に近いほど、流速の水平方向成分が大きいためであると考えられる。ところが、 θ が大きい領域というのは、線状体がノズルの下の方まで落下している領域であり、この領域では流れはほとんど水平方向を向いており、流速の水平方向成分の差が小さいため、 \dot{X} に対する α の影響が小さくなる。また、 $l=$

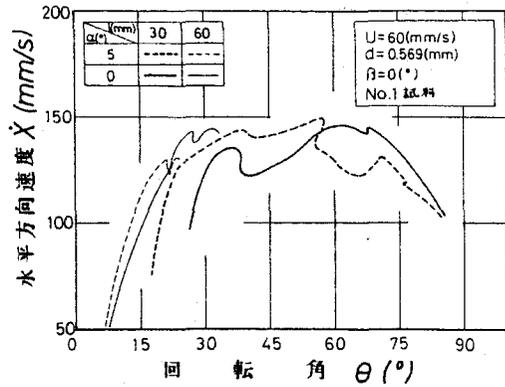


図5.18 水平方向速度におよぼす初期角度の影響

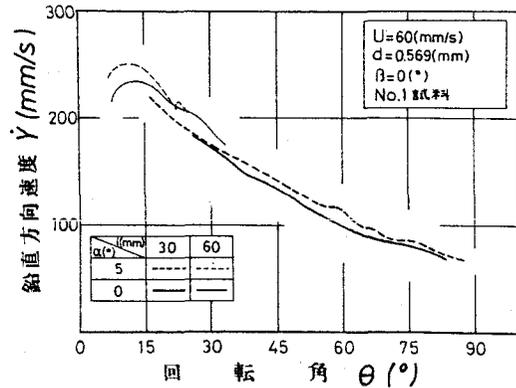


図5.19 鉛直方向速度におよぼす初期角度の影響

60 (mm) の場合， $\theta < 22^\circ$ の領域で $\alpha = 5^\circ$ の方が \dot{X} の値は大きくなる。これは， $\alpha = 5^\circ$ の方が，流れ中に入ったときの姿勢がより鉛直に近いことと，さらに，同一回転角に対する線状体の位置が下流側の下方であるため，流速の水平方向成分が大きくなることに起因する。しかし， $\alpha = 5^\circ$ の場合， $X = 180$ (mm) 付近でノズル底面に到達するが， $\alpha = 0^\circ$ で落下した線状体は，さらに下流側へ運動し続ける（図 5.13 参照）ため， \dot{X} は加速され， $\theta > 22^\circ$ の領域では $\alpha = 0^\circ$ の方が大きくなる。

いっぽう，図 5.19 において， $\ell = 60$ (mm) の場合，線状体が鉛直方向に加速されている状態が見られるが， $\ell = 30$ (mm) の場合，この状態が見られない。これは， $\ell = 30$ (mm) の方が，線状体が流れ中に入ったときの急激な姿勢の変化が大きく，流れ中ではつねに鉛直方向に減速されるからである。また， $\alpha = 0^\circ, 5^\circ$ の場合を比較すると， $\alpha = 5^\circ$ の方が同一回転角に対する \dot{Y} の値は大きく， \dot{Y} が最大になるときの θ の値は小さい。すでに述べたように， α が大きい方が，線状体が流れ中に入ったときの姿勢がより鉛直に近いいため，流体から鉛直方向に受ける抗力は小さく，鉛直方向により大きく加速されるからである。また， θ が大きくなると α の影響が小さくなるのは， \dot{X} の場合と同じ原因による。

ここで，矩形管内流れ中での結果と比較する。矩形管内流れ中での $U = 60$ (mm/s)， $d = 0.569$ (mm) の場合， θ と \dot{X} の関係および θ と \dot{Y} の関係には α の影響は見られなかった。（図 4.16，4.17 参照）いっぽう，ノズル内流れ中での場合， α の影響が明確に現われた。初期角度により線状体が運動する位置が異なることは，両者共通であるが，矩形管内流れの場合，流速の場所的变化はわづかであるのに対し，ノズル内流れでは，流速の場所的变化が大きいため， α の影響が異なると考えられる。

つぎに，矩形管内流れ中での場合にも， α の影響が θ の小さい領域で見られた $U = 60$ (mm/s)， $d = 0.912$ (mm) の No. 1 試料

の結果を図 5.20, 5.21 に示す。

この場合にも, X , Y が加速と減速を繰返す現象が見られるが, $d=0.569(mm)$ の場合と比較して変動の大きさは小さい。

図 5.20 において, 同一回転角に対する X の値は α が大きいほど大きく, $l=30(mm)$ の場合, θ のほとんど全領域でこの傾向が見られ, α の影響のおよぶ θ の領域は, $d=0.569(mm)$ の場合より大きくなる。いっぽう, 図 5.21 において, Y におよぶ α の影響は θ の小さい領域でのみ現われ, α が大きいほど同一回転角に対する Y の値は大きく, Y が最大になるときの θ の値は小さい。しかし, θ の増

加に伴ない変動を除いた Y の平均的な変化には α の影響は見られなくなり, α にかかわらずほぼ同一曲線で表わされる。 X に関しては, α の影響が θ のほとんど全領域で見られたのに対し, Y に関しては, θ の小さい領域でのみ現われたのは, ノズルの形状から, 流速の鉛直方向成分は水平方向成分に比べて小さいことと, $d=0.912(mm)$ の場合, 慣性が大きく流速の場所的变化の影響を受けにくいことに起因する。

ここで, $d=0.569(mm)$ の場合と $d=0.912(mm)$ の場合を比

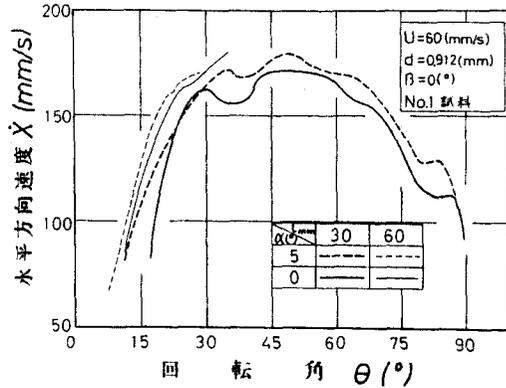


図 5.20 水平方向速度におよぶ初期角度の影響

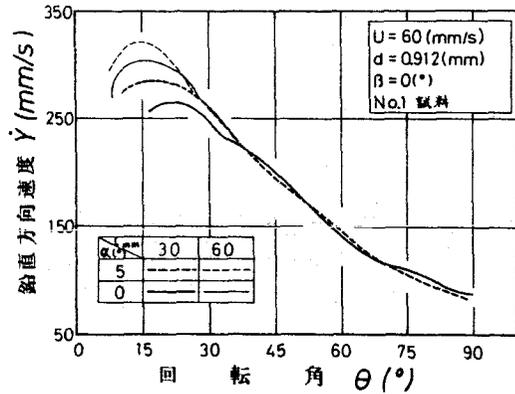


図 5.21 鉛直方向速度におよぶ初期角度の影響

較すると、 \dot{X} 、 \dot{Y} ともに直径の小さい $d=0.569(\text{mm})$ の方が α の影響を受け易いことが分かる。これは、直径が小さい方が慣性が小さく流れの影響を受け易いからである。なお、No.1試料の結果との比較から、 α が大きいNo.2試料の場合、重心の速度は α の影響を受けにくいことが分かった。

以上の結果から、初期角度は、線状体が運動する位置に影響を与え、位置による流速および流れの方向の違いが \dot{X} 、 \dot{Y} に初期角度の影響となって現われる。また、初期角度の影響は、線状体の慣性が小さいほど、すなわち、長さ、直径、比重量が小さいほど現われ易い。

5.6.3 線状体の姿勢

$U=60(\text{mm/s})$, $d=0.569$

(mm)のNo.1試料の ψ と θ の関係を図5.22に示す。図には、 $l=30, 60(\text{mm})$ のデータをプロットしている。

線状体は、流れ中に入った瞬間に流れの向きに急激に回転するが、その後は、角速度が加速される状態と減速される状態が交互に現われ、変動しながらその姿勢は水平方向に近づく。なお、この変動は減衰振動のように徐々に小さくなる。また、 α

により線状体が運動する位置が異なり、ノズル内流れでは流速の場所的变化が大きいため、姿勢の変動状態には差が生じ、 $\alpha=5^\circ$ の方が変動が多く見られる。これは、 $\alpha=0^\circ$ の場合と比較して、 $\alpha=5^\circ$ で落下した線状体の方がノズルのより下方で運動するため、場所により流れの方向が異なる影響を受け易いこと

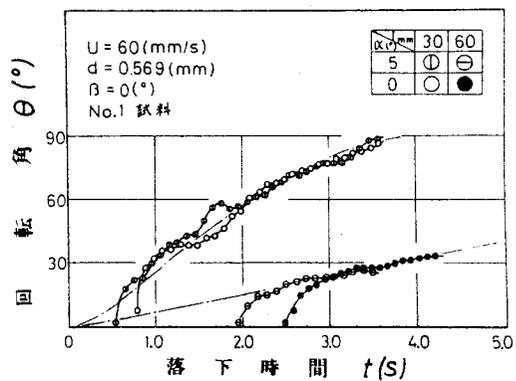


図5.22 姿勢におよぼす初期角度の影響

による。しかし、この変動を除いた平均的な姿勢の変化には、落下直後の急激な姿勢の変化の領域を除き、 α の影響はほとんど見られない。なお、落下直後の急激な姿勢の変化は α が小さい方が大きくなる。また、図中の一点鎖線は、静止流体中での線状体の姿勢の変化を表わす曲線であり、矩形管内流れ中での場合、落下直後の急激な姿勢の変化の領域を除き、流速に関係なく姿勢はこの曲線に基づいて変化する(4.9節参照)ことから、この曲線は矩形管内流れ中での姿勢の変化を表わしている。したがって、長さの影響を示す5.7.3項に記載する図5.29、5.30から、ノズル内流れ中での変動を除いた平均的な姿勢の変化は、 α にかかわらず矩形管内流れ中での姿勢の変化とほぼ一致することが分かる。

つぎに、 $\alpha=0.569(mm)$ の場合に比べて、重心の速度に対する α の影響が小さかった $\alpha=0.912(mm)$ のNo.1試料の姿勢の変化を図5.23に示す。

$\alpha=0.912(mm)$ の方が慣性モーメントが大きく、流速の場所的变化の影響を受けにくいため、姿勢の変動は $\alpha=0.569(mm)$ の場合より小さい。したがって、姿勢の変動状態におよぼす α の影響はほとんど見られない。

また、この変動を除いた平均的な姿勢の変化は、落下直後の急激な姿勢の変化の領域を除き、 α にかかわらず同一曲線で表わされる。なお、 α が大きいNo.2試料の場合、No.1試料に比べて姿勢の変動は小さく、変動におよぼす α の影響は現われなかった。

以上の結果から、初期角度は、線状体が運動する位置に影響

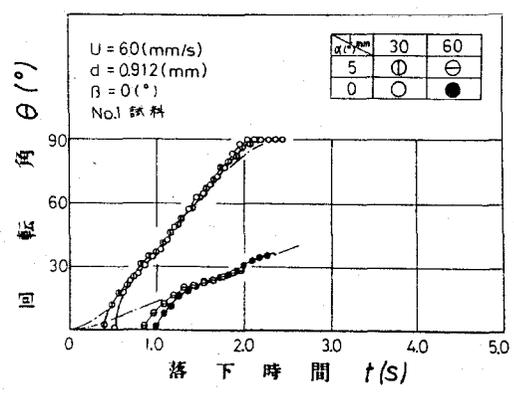


図5.23 姿勢におよぼす初期角度の影響

を与え、ノズル内の流れ特性が姿勢の変動に初期角度の影響となって現われる。しかし、平均的な姿勢の変化には、初期角度は影響をおよぼさない。また、初期角度の影響は線状体の慣性モーメントが小さいほど現われ易い。

5.7 線状体長さの影響

この節では、 $l=15, 30, 45, 60$ (mm) 変化させたときの実験結果から、線状体長さが落下特性におよぼす影響を調べる。

5.7.1 線状体の落下軌跡

$U=60$ (mm/s), $d=0.569$ (mm), $l=15\sim 60$ (mm) の No.1 試料の落下軌跡を図5.24に示す。線状体の時間間隔は、 $l=15\sim 60$ (mm) の場合、 $\Delta t=0.3, 0.3, 1/3, 4/11$ (s) である。

重心の軌跡は、いくつかの変曲点をもつ曲線となり、 l が小さいほど曲線の変動が大きい。これは、位置により流速および流れの方向が異なることが主な原因である。図5.24において、長さが小さい線状体ほど、すべて流れ中に入ったときの姿勢がより水平に近い。ため、鉛直方向速度は小さく、水平方向速度は大きくなり、ノズルの上方で運動する。ノズル上方で運動する場合、流れが加速している影響を受け易くなり、また、 l が小さいほど慣性が小さく、流れの影響を大きく受けるため、 l が小さいほど軌跡が大きく変動すると考えられる。また、線状体の状態を見れば、同一回転角

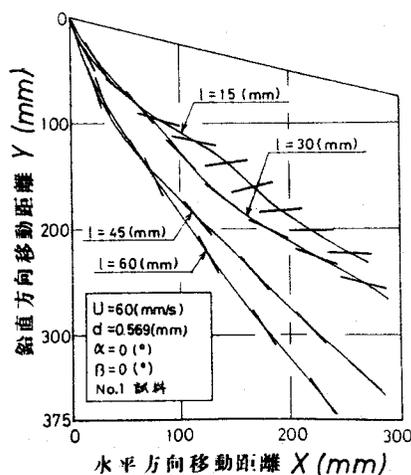


図5.24 落下軌跡におよぼす長さの影響

に対する水平方向と鉛直方向の移動距離は， l が大きいほど大きいことが分かる。 l が大きいほど角速度は小さく，姿勢の変化に要する時間が大きい。さらに， θ と重心の速度の関係（図5.25, 5.26）から，ある回転角に対する \dot{X} , \dot{Y} の値は， l が大きいほど大きくなる。したがって，同一回転角に対する X , Y の値は大きくなる。ここで，ノズル内流れ中での線状体の落下軌跡の特徴が顕著に現われている $l=15(mm)$ の場合について説明する。矩形管内流れ中では，落下直後の急激な回転の領域を過ぎると，線状体は除々に水平方向に姿勢を回転させながら落下し，水平な姿勢になって回転が止まり，このもっとも安定な姿勢を保ったまま運動し続け矩形管底面に到達する。ところが，図5.24の $l=15(mm)$ の場合，流れ中に入ったときの急激な姿勢の変化が大きく，また，角速度も大きいため， $Y=130(mm)$ 付近で姿勢は水平になるが， $\theta=75^\circ$ 付近から角速度は加速されており（図5.29参照），慣性モーメントが小さいことと，まだノズルの上方で運動しているため，流れの方向が水平方向に対して傾いているため，水平な姿勢になっても，角速度は減速されるが，回転は止まらず， $Y=160(mm)$ 付近で θ は最大（約 104° ）となる。その後も流れが加速しているため，線状体にはその姿勢を水平方向にもどす向きの回転モーメントが作用し続け，姿勢は水平に近づくが，この場合もまた， $\theta=90^\circ$ で回転は止まらず， $Y=210(mm)$ 付近で θ は極小（約 88° ）となる。以上のように， $l=15(mm)$ の場合，その姿勢は $\theta=90^\circ$ を中心にして振動し始める。しかし，線状体が運動し続けノズル底面に近づくとき，流れの方向はほとんど水平方向になるため，その振幅は小さくなり，線状体は水平な姿勢を保って底面に到達する。したがって， $l=15(mm)$ の場合のように，その姿勢がノズル上方で水平に近づく場合，姿勢は水平方向を中心にして減衰振動する。

5.7.2 線状体重心の速度

$U=60$ (mm/s), $d=0.569$ (mm) の θ と \dot{X} の関係および θ と \dot{Y} の関係を図 5.25, 5.26 に示す。

\dot{X} , \dot{Y} とともに加速と減速を繰返す現象が見られ, その変動は \dot{X} の方が大きい。また, 同一回転角に対する \dot{X} の値は, l が大きいほど大きく, この傾向は θ のほとんど全領域で見られる。これは, l が大きいほど, 線状体が流れ中に入ったときの姿勢がより鉛直に近い。そのため, 流体から水平方向に受ける抗力が大きくなり, 水平方向により大きく加速されることと, 回転角が同じになる位置は, l が大きいほどノズルの下流側の下方であるため, 流速の水平方向成分が大きいことに起因する。

いっぽう, 図 5.26 において, l が大きいほど, 線状体が流れ中に入ったときの姿勢がより鉛直に近い。そのため, 流体から鉛直方向に受ける抗力は小さく, 鉛直方向により大きく加速されるため, \dot{Y} の最大値は大きくそのときの θ の値は小さい。しかし, θ の増加に伴ない変動を除いた \dot{Y} の平均的な変化には l の影響が見られなくなり, θ と \dot{Y} の関係を表わす曲線は漸近

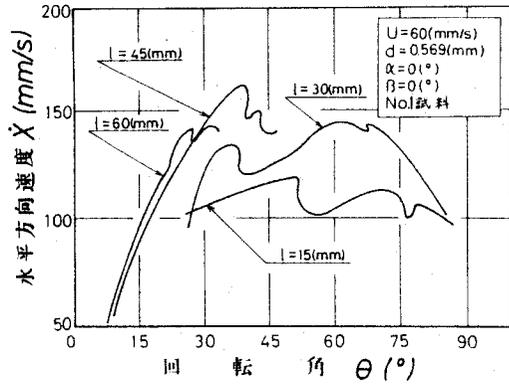


図 5.25 水平方向速度におよぼす長さの影響

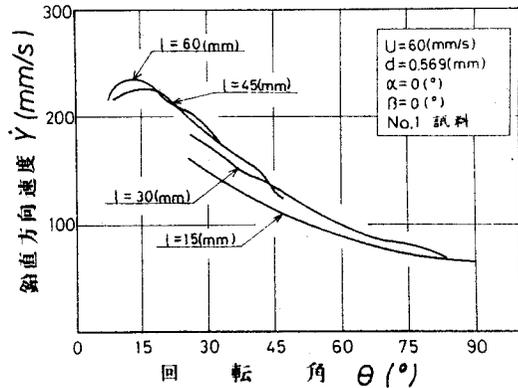


図 5.26 鉛直方向速度におよぼす長さの影響

し、ほぼ同一曲線で表わされる。また、 \dot{X} 、 \dot{Y} の変動におよぼす l の影響は、 l が小さいほど慣性が小さく流れの影響を受け易いが、線状体の軸方向に沿った流速および流れ方向の変化は、逆に l が大きいほど大きいため、さらに、 l が異なれば線状体が運動する位置が異なるため、明確に現われない。

ここで、矩形管内流れ中での結果と比較する。 $U=60(\text{mm/s})$ 、 $d=0.569(\text{mm})$ の場合、矩形管内流れ中では l の影響は見られなかった。(4.6節参照) いっぽう、ノズル内流れ中では l の影響が明確に現われた。これは、長さが大きいほど、線状体は管内の下方で運動することは両者共通であるが、矩形管内流れの場合、流速の場所的変化はわづかであるのに対し、ノズル内流れでは、流速の場所的変化が大きいためである。また、この実験条件の場合、矩形管内流れ中では、線状体が落下直後に鉛直方向に加速される状態が見られず、ノズル内流れ中で見られたのは、流れが鉛直方向成分を持つため、線状体が鉛直方向により大きく加速されるからである。

これまでは、 $U=60(\text{mm/s})$ 、 $d=0.569(\text{mm})$ のNO.1試料について、長さがおよぼす影響を調べたが、以下では、直径、比重量および流速が異なる場合、長さが重心の速度にどのような影響をおよぼすかを調べる。

$U=60(\text{mm/s})$ 、 $d=0.912(\text{mm})$ の結果を図5.27、5.28に示す。この場合にも、同一回転角に対する \dot{X} の値は、 l が大きいほど大きくなり、また、 l が大きいほど \dot{Y} の最大値は大きくそのときの θ の値は小さいが、 θ の増加に伴ない変動を除いた \dot{Y} の平均的な変化には l の影響が見られなくなり、 θ と \dot{Y} の関係はほぼ同一曲線で表わされる。なお、 $d=0.569(\text{mm})$ の場合と比べて、 \dot{Y} は θ のより小さい領域で l の影響を受ける。この結果は、矩形管内流れ中での場合、 d が大きいほど θ の広い領域で l の影響が現われるという結果と逆になる。しかし、4.7節に記載した矩形管内流れ中での結果、図4.35と図5.28を比較す

ると分かるように、 $\alpha=0.912$ (mm)の場合、 $l=60$ (mm)の方が大きい θ の領域は、ほぼ一致(約 35°)あることが分かる。したがって、直径が大きい場合、慣性が大きく流速の場所的变化の影響を受けにくいことが原因で、矩形管内流れ中での結果と逆の結果になったと考えられる。

つぎに、比重量の影響を示す5.9.2項に記載する図5.42, 5.43から、 ρ が大きいNo.2試料の方が \dot{X} , \dot{Y} ともにその変動は小さくなり、 l の影響が現われ易いことが分かる。すなわち、 $l=60$ (mm)と $l=30$ (mm)の \dot{X} および \dot{Y} の差は、 ρ が大きい方が大きくなる。

また、流速の影響を示す5.10.2項に記載する図5.46, 5.47を見ると、 \dot{X} の変動は U が大きいほど大きく、しかも、 U が大きいほど $l=60$ (mm)と $l=30$ (mm)の \dot{X} の差は大きくなる。いっぽう、 $l=60$ (mm)と $l=30$ (mm)の \dot{Y} の差には、 U の影響が矩形管内流れ中での場合ほど顕著には現われていないが、 U が小さいほど l の影響が現われ易い傾向にある。

以上の結果をまとめると、長さの影響は、 \dot{X} に関しては θ のほとんど全領域で現われ、 \dot{Y} に関しては θ の小さい領域で現わ

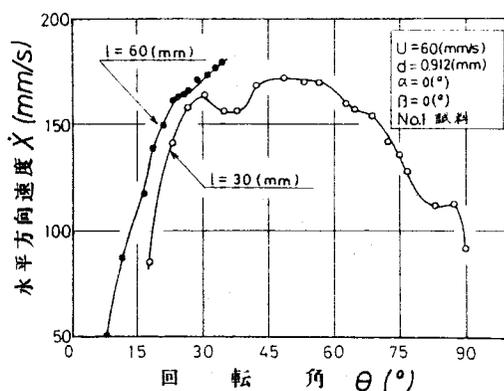


図5.27 水平方向速度におよぼす長さの影響

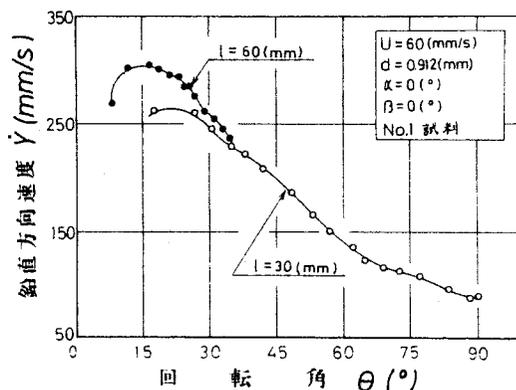


図5.28 鉛直方向速度におよぼす長さの影響

れ，同一回転角に対する \dot{X} ， \dot{Y} の値は l が大きいほど大きい。しかも，長さの影響は，線状体の慣性が大きいほど，また， \dot{X} に関しては U が大きいほど， \dot{Y} に関しては U が小さいほど明確に現われる。しかし， \dot{X} ， \dot{Y} の変動には長さの影響が明確に現われない。

5.7.3 線状体の姿勢

$U=60$ (mm/s)， $d=0.569$ (mm) の No.1 試料の θ と t の関係を図 5.29 に示す。落下直後の急激な姿勢の変化の領域を過ぎると，姿勢は減衰振動のように変動しながら水平方向に近づく。図中の一点鎖線は，矩形管内流れ中での姿勢の変化（ただし，落下直後の急激な姿勢の変化の領域は描かれていない。）であり，変動を除いた平均的な姿勢の変化は，矩形管内流れ中での姿勢の変動とほぼ一致する。したがって

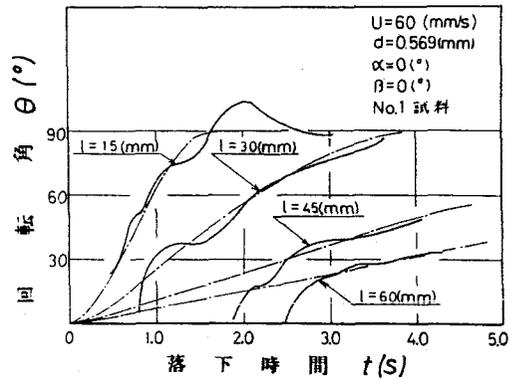


図 5.29 姿勢におよぼす長さの影響

，ノズル内流れ中での姿勢の変化は，矩形管内流れ中での姿勢の変化を中心に減衰振動することが分かる。また，平均的な姿勢の変化を比較すると， l が小さいほど角速度は大きく，線状体が回転するのに要する時間は小さい。いっぽう， l が小さいほど慣性モーメントが小さく，しかもノズル上方で運動するため，流速の場所的变化の影響を受け易く，姿勢の変動は大きくなる傾向にある。また， l が小さいほど長時間にわたって姿勢が変動する。

ここで，ノズル内流れ中での姿勢の変化が顕著に現われている $l=15$ (mm) の場合を見ると，姿勢が水平になっても回転が

止まらず，姿勢は水平方向を中心にして減衰振動することが分かる。これは，慣性モーメントが小さいことと，落下軌跡（図 5.24）を見れば分かるように，姿勢が水平方向に近づいたときの線状体の位置がまだノズル上方であるため，流れの方向が水平方向に対して傾いていることに起因する。また，減衰振動するのは，線状体が運動し続けて，ノズル底面に近づくにつれて流れの方向が水平になるためである。図 5.29 は $\alpha = 0^\circ$ の場合であったが，図 5.30 に示す $\alpha = 5^\circ$ の場合にも， $l = 15 (mm)$ の線状体の姿勢が水平方向を中心にして減衰振動する現象が見られる。ただし， α により線状体が運動する位置が異なるため，振動状態は変わる。また， d_b の大きい $d = 0.322 (mm)$ ， $l = 15 (mm)$ の No.2 試料が $U = 60 (mm/s)$ の流れ中で運動する場合， $Y = 150 (mm)$ 付近で姿勢は水平方向に近づくため，上述の減衰振動が見られた。

つぎに， $d = 0.912 (mm)$ の No.1 試料の姿勢の変化を図 5.31 に示す。 $d = 0.912 (mm)$ の方が慣性モーメントが大きいため，姿勢の変動は $d = 0.569 (mm)$ の場合より小さいが，姿勢の変化におよぼす長さの影響は $d = 0.569 (mm)$ の場合と同じである。ところが， $l = 30 (mm)$ の場合を見れば分かるように，水平な姿勢で回転が止まり，水平な姿勢を保ったまま運動し続ける。これ

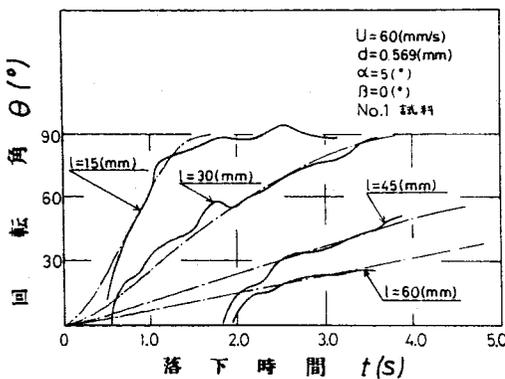


図 5.30 姿勢におよぼす長さの影響

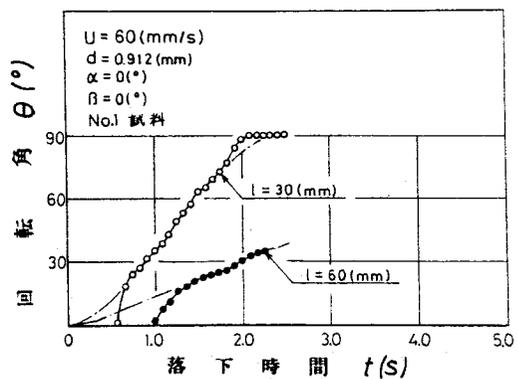


図 5.31 姿勢におよぼす長さの影響

は、 $d=0.912$ (mm) の場合、慣性モーメントが大きいことと、ノズルの下方 ($Y=270$ (mm) 付近) で水平な姿勢に近づくためであると考えられる。

したがって、その姿勢がノズルの上方で水平に近づく場合、姿勢は水平方向を中心にして減衰振動する。

5.8 線状体直径の影響

この節では、No.1 試料と No.2 試料の直径を変化させたときの実験結果から、線状体直径が落下特性におよぼす影響を調べる。

5.8.1 線状体の落下軌跡

$U=60$ (mm/s), $l=30$ (mm), $d=0.569, 0.720, 0.912$ (mm) の No.1 試料の落下軌跡を図 5.32 に示す。図中の線状体の時間間隔は、 $d=0.569$ (mm) の場合、 $\Delta t=0.3$ (s), $d=0.912$ (mm) の場合、 $\Delta t=0.25$ (s) である。なお、 $d=0.720$ (mm) の場合、重心の軌跡のみを示している。この図において、もっとも原点に近い線状体の姿勢を比較すると、直径が小さい $d=0.569$ (mm) の方がより水平に近く、落下直後の急激な姿勢の変化は、 d が小さい方が大きいことが分かる。また、重心の軌跡はいくつかの変曲点をもつ曲線となり、 d が小さいほど曲線の変動は大きい。 d が小さい線状体ほど、すべて流れ中に入ったときの姿勢がより

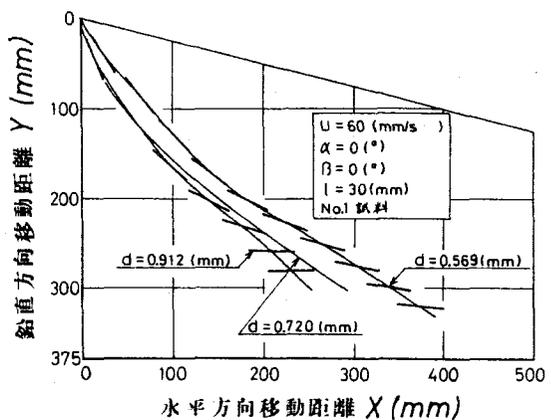


図 5.32 落下軌跡におよぼす直径の影響

水平に近いので、鉛直方向速度は小さく、水平方向速度は大きくなり、ノズルの上方で運動する。ノズル上方で運動する場合、流れが加速している影響を受け易くなり、また、 α が小さいほど慣性が小さく流れの影響を大きく受けるため、 α が小さいほど軌跡が大きく変動すると考えられる。また、線状体の状態を見れば、 θ が小さいときの領域を除き、同一回転角に対する水平方向と鉛直方向の移動距離は α が小さいほど大きいことが分かる。ある回転角に対する X 、 Y の値は α が小さいほど小さい(図5.33, 5.34参照)が、 α が小さいほど姿勢が変化するのに要する時間が大きい(図5.39参照)ため、同一回転角に対する X 、 Y の値は大きくなる。また、ノズル内流れ中での場合と同様に、直径により底面に到達したときの水平方向移動距離に差が生ずるため、直径別に線状体を分類することができる。なお、この差は、流れが加速しているので矩形管内流れ中での場合より大きい。

5.8.2 線状体重心の速度

$U=60$ (mm/s) の NO.1 試料の θ と X の関係および θ と Y の関係を図 5.33, 5.34 に示す。図には、 $l=30, 60$ (mm) のデータが

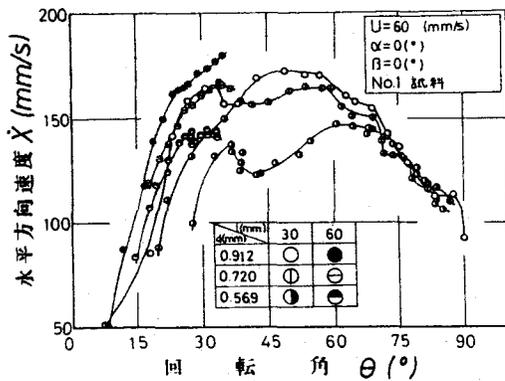


図 5.33 水平方向速度におよぼす直径の影響

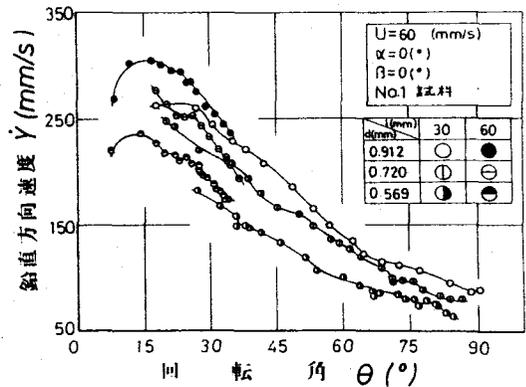


図 5.34 鉛直方向速度におよぼす直径の影響

プロットしてある。 \dot{X} 、 \dot{Y} ともに加速と減速を繰返す現象が見られ、この変動は α が小さいほど大きくなる傾向にある。これは、 α が小さいほど慣性が小さく流れの影響を受け易いことと、ノズルの上方で運動するため、流れが加速している影響を受け易いことに起因すると考えられる。また、これらの図から、同一回転角に対する \dot{X} 、 \dot{Y} の値は、 α が大きいほど大きく、 \dot{X} に関しては $\theta < 70^\circ$ の領域で見られ、 \dot{Y} に関しては θ の全領域で見られる。矩形管内流れ中での場合、 \dot{X} は θ の全領域で α が大きいほど大きいのにに対し、ノズル内流れ中では、 θ の大きい領域でこの傾向が見られないのはつぎの原因による。すでに述べたように、同一回転角に対する線状体の位置は、 α が小さいほど下流側の下方であり、しかも、 θ の増加に伴ない線状体の位置の差は大きくなる。また、流速の水平方向成分は下流側の下方ほど大きいため、 θ が大きくなると、 α が小さいほど \dot{X} は減速されにくくなり、直径の影響が見られなくなる。いっぽう、ノズル底面に近いほど流れの方向は水平方向となり、流速の鉛直方向成分は減少するため、姿勢が水平方向に近づいても \dot{Y} は α が大きいほど大きく、直径の影響は θ の全領域で見られる。

以上述べた直径の影響は、比重量が多いNO.2試料の方が

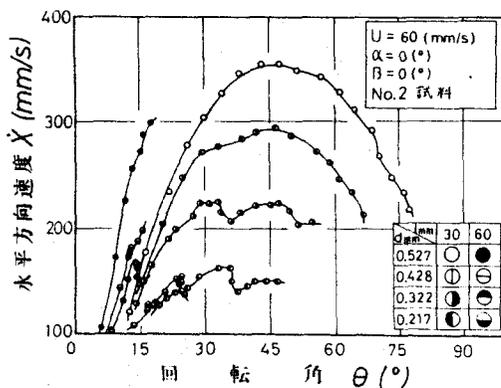


図 5.35 水平方向速度におよぼす直径の影響

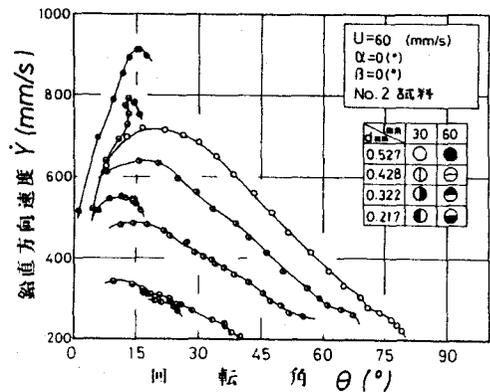


図 5.36 鉛直方向速度におよぼす直径の影響

顕著に現われる。

No.2 試料の $U = 60$ (mm/s) の結果を図 5.35, 5.36 に示す。No.1 試料と比べて, No.2 試料の方が重心の速度は大きく, しかも, 慣性が大きいいため, 流れの影響を受けにくく, \dot{X} , \dot{Y} の変動は小さい。したがって, α が小さいほどこの変動が大きくなるのが, No.1 試料の場合よりはるかに明確に現われる。また, \dot{X} , \dot{Y} とともに α が大きいほど大きい。ただし, θ が大きい領域でのデータがないため, この領域での結果は分からないが, 上述した理由で, \dot{X} の直径による差は小さくなると思われる。さらに, \dot{X} , \dot{Y} とともに $l = 60$ (mm) と $l = 30$ (mm) の差は α が大きいほど大きく, 直径が大きいほど長さの影響を受け易いことが分かる。また, 図 5.36 において, α が大きいほど線状体はより水平に近い姿勢になるまで鉛直方向に加速される傾向にあることも分かる。

つぎに, 流速が異なる場合の直径の影響を調べるため, $U = 10$ (mm/s) の結果を図 5.37, 5.38 に示す。 U が小さい方が位置による流速の差は小さく, しかも, 線状体が水平方向に移動する

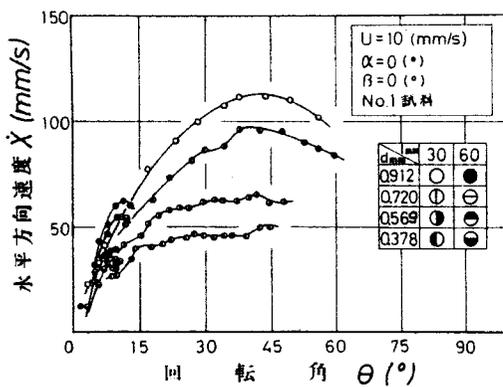


図 5.37 水平方向速度におよぼす直径の影響

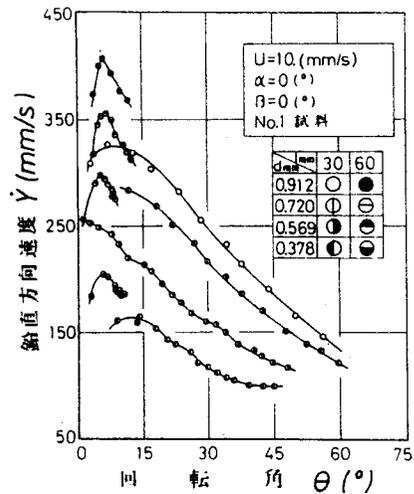


図 5.38 鉛直方向速度におよぼす直径の影響

距離も小さくなり、線状体を受ける流速の場所的変化の影響は減少し、 \dot{X} 、 \dot{Y} の変動は小さくなる。したがって、 $U=60$ (mm/s)の結果(図5.33, 5.34)と比較すれば分かるように、 α が小さいほどこの変動が大きくなることが、 $U=60$ (mm/s)の場合よりはるかに明確に現われる。また、その他の直径の影響も流速が小さい方が顕著に現われることが分かる。

以上の結果をまとめると、直径が大きいほど、 \dot{X} 、 \dot{Y} は大きくその変動は小さい。しかし、姿勢が水平方向に近づくにつれて \dot{X} におよぼす直径の影響は現われにくくなる。なお、直径の影響は、比重量が高いほど、また、流速が小さいほど、明確に現われる。

5.8.3 線状体の姿勢

$U=60$ (mm/s)のNo.1試料の α と θ の関係を図5.39に示す。図には、 $l=30, 60$ (mm)のデータがプロットしてある。すでに述べたように、変動を除いた平均的な姿勢の変化は、矩形管内流れ中での姿勢の変化(図中の一点鎖線)とほぼ一致し、ノズル内流れ中での姿勢は、矩形管内流れ中での姿勢の変化を中心に減衰振動しながら水平方向に近づく。また、平均的な姿勢の変化を比較すると、 α が大きいほど角速度は大きく、線状体が回転するのに要する時間は小さくなる。いっぽう、 α が大きいほど慣性モーメントが大きく、しかも、ノズルの下方で運動するため、流速の場所的変化の影響を受けにくく、姿勢の変動は小さく

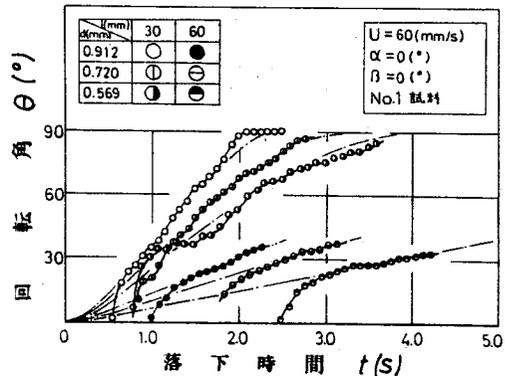


図5.39 姿勢の変化におよぼす直径の影響

なる傾向にある。

以上の結果は，比重量
 が大きいNO.2試料の場合にも見られ，図5.40
 から，NO.2試料の方が
 重心の速度は大きく，し
 かも，慣性モーメントが
 大きいため，流れの影響
 を受けにくく，姿勢の変
 動は小さくなり，ノズル
 内流れ中での姿勢の変化

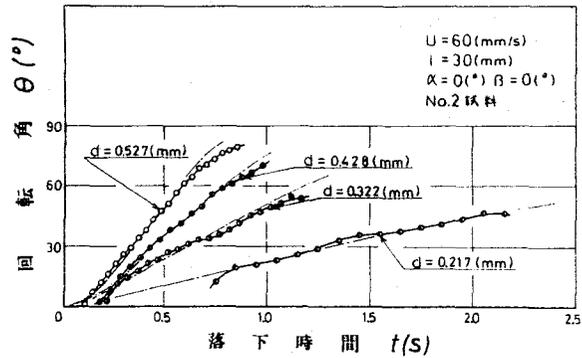


図5.40 姿勢におよぼす直径の
 影響

は，矩形管内流れ中での姿勢の変化を中心にして変動しながら
 水平方向に近づくことがいっそう明確になる。また，変動は直
 径が大きいほど小さいことも分かる。

なお，直径の影響は，流速が異なる場合にも明確に現われる。

5.9 線状体比重量の影響

この節では， $d=0.569$ (mm)のNO.1試料と $d=0.527$ (mm)の
 NO.2試料に対する実験結果から，線状体比重量が落下特性に
 およぼす影響を調べる。その際，NO.1試料とNO.2試料では
 直径が異なるため，5.8節で述べた直径の影響も考慮する必要
 がある。

5.9.1 線状体の落下軌跡

$U = 60$ (mm/s)のNO.1試料とNO.2試料の落下軌跡を図5.
 41に示す。図中の $l = 30, 60$ (mm)の線状体の時間間隔は，NO.
 1試料の場合， $\Delta t = 0.3, 2/11$ (s)，NO.2試料の場合， $\Delta t =$
 $0.07, 0.05$ (s)である。

この図において，もっとも原点に近い線状体の姿勢を比較す

ると、 ρ が小さいNO.1試料の方がより水平に近い姿勢であり、落下直後の急激な姿勢の変化は、 ρ が小さい方が大きいことが分かる。また、重心の軌跡はいくつかの変曲点をもつ曲線となり、 ρ が小さい方が曲線の変動は大きい。 ρ が小さい線状体の方が、すべて流れ中に入ったときの姿勢がより水平に近く、さらに、 Y は ρ が小さい方がはるかに小さくなるので、線状体が鉛直方向へ移動するのにより長い時間を要する。したがって、 X が小さいにもかかわらず、 ρ が小さいNO.1試料の方がノズルの上方で運動する。ノズルの上方で運動する場合、流れが加速している影響を受け易くなり、また、 ρ が小さい方が慣性が小さく流れの影響を大きく受けるため、軌跡が大きく変動すると考えられる。

ここで直径が小さいほど軌跡が大きく変動することを考慮すると、同一直径で重さが異なる場合、軽い方が軌跡は大きく変動する。

また、ノズル内流れ中でも、矩形管内流れ中での場合と同様に、比重量により底面に到達したときの水平方向移動距離に差が生ずるので、比重量別に線状体を分類することができる。なお、この差は、流れが加速しているため矩形管内流れ中の場合より大きい。

5.9.2 線状体重心の速度

$U = 60$ (mm/s) の θ と X の関係および θ と Y の関係を図 5.42、5.43 に示す。図には、 $l = 30, 60$ (mm) のデータをプロットし

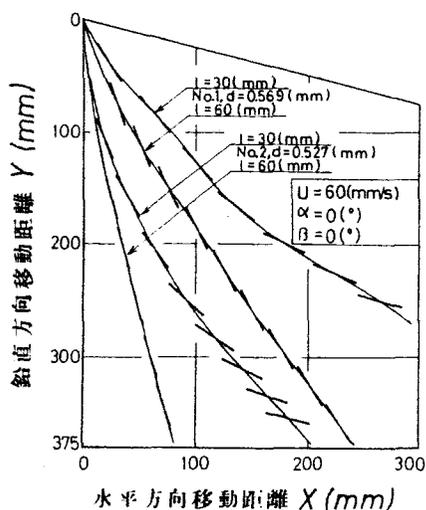


図 5.4 / 落下軌跡におよぼす比重量の影響

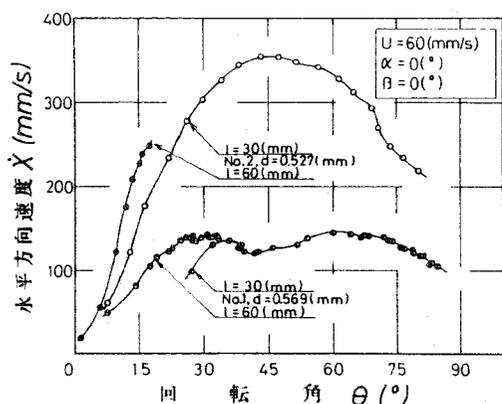


図5.42 水平方向速度におよぼす比重量の影響

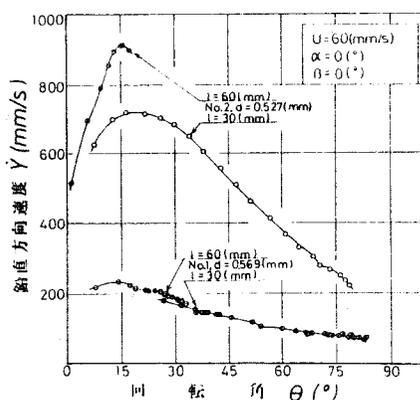


図5.43 鉛直方向速度におよぼす比重量の影響

ている。

ρ が小さいNO.1試料の場合、慣性が小さく、また、ノズルの上方で運動するため、流れが加速している影響を受け易く、 \dot{X} 、 \dot{Y} ともに加速と減速を繰返す現象が明確に見られるが、NO.2試料の場合、この変動はわずかである。また、 θ の全領域で \dot{X} 、 \dot{Y} ともに ρ が大きいNO.2試料の方が大きくなる。さらに、 $l=60$ (mm)と $l=30$ (mm)の速度差も、 \dot{X} 、 \dot{Y} ともに ρ が大きい方が大きくなる。ここで直径の影響を考慮すると、同一直径で重さが異なる場合、重い方が長さの影響が現われ易いことが分かる。

5.9.3 線状体の姿勢

$U=60$ (mm/s)の t と θ の関係を図5.44に示す。図には、 $l=30, 60$ (mm)の曲線が併記されている。

ノズル内流れ中での姿勢の変化は、矩形管内流れ中での姿勢の変化を中心にして減衰振動しながら水平方向に近づく。また、変動を除いた平均的な姿勢の変化を比較すると、 ρ が大きいNO.2試料の方が角速度は大きく、線状体が回転するのに要す

る時間は小さい。ここで直径が大きいほど角速度は大きいことを考慮すると、同一直径で重さが異なる場合、重い方が角速度は大きくなる。また、 ρ が大きい方が重心の速度は大きく、しかも、慣性モーメントが大きいため、流れの影響を受けにくく、姿勢の変動は小さくなる。

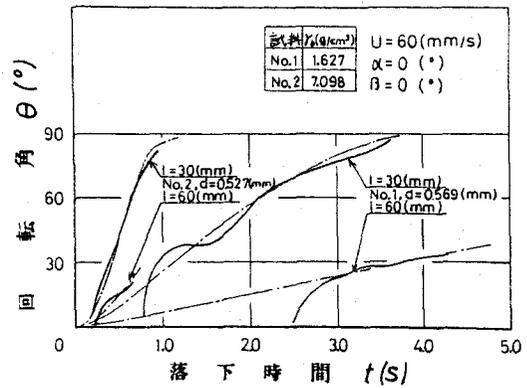


図5.44 姿勢におよぼす比重量の影響

5.10 流速の影響

この節では、 $U = 10, 20, 40, 60$ (mm/s) 変化させたときの実験結果から、流速が落下特性におよぼす影響を調べる。

5.10.1 線状体の落下軌跡

$d = 0.569$ (mm), $l = 30$ (mm) の NO.1 試料の $U = 10 \sim 60$ (mm/s) の落下軌跡を図5.45に示す。図中の線状体の時間間隔は、 $U = 10 \sim 60$ (mm/s) の場合、 $\Delta t = 0.3, 1/3, 0.3, 0.3$ (s) である。

$U = 60$ (mm/s) の場合、重心の軌跡はいくつかの変曲点をもつことが明確に分かるが、 U が小さくなると軌跡の変動も小さくなり、この図では、軌跡が変動していることがほとんど分からない。しかし、5.10.2 項に記載する θ と重

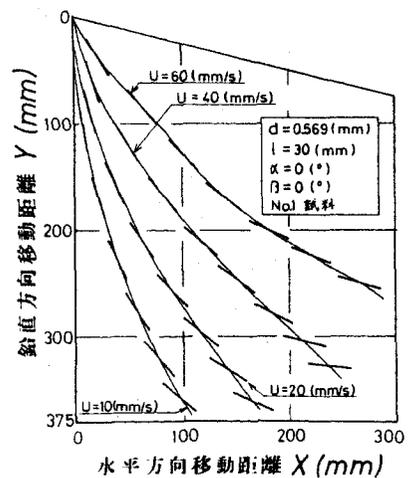


図5.45 落下軌跡におよぼす流速の影響

心の速度の関係(図5.46, 5.47)から, 姿勢の変化に対する重心の速度成分の変化は, U が小さい場合でも, その変動の大きさは小さいが, 加速と減速を繰返す現象が見られ, したがって, U が小さい場合でも重心の軌跡は変動していることが分かる。 U が小さい場合, 軌跡の変動が小さくなるのはつぎの原因による。

線状体が流れ中に入った瞬間に流体から受ける回転モーメントは, U が小さいほど小さく, 線状体がすべて流れ中に入ったときの姿勢はより鉛直に近いので, 鉛直方向速度は大きく, 水平方向速度は小さくなる。その後, θ の増加に伴ない同一回転角に対する \dot{Y} の値は U にかかわらずほぼ同じになるが, \dot{X} の値は U が小さいほど小さくなる。したがって, U が小さいほど線状体はノズルの下方で運動する。ノズル下方で運動する場合, 流れが加速している影響を受けにくく, さらに, U が小さいほど流速の場所的变化も小さいため, 軌跡の変動は小さくなる。

5.10.2 線状体重心の速度

$d=0.569$ (mm)のNO.1 試料の θ と \dot{X} の関係および θ と \dot{Y} の関係を図5.46, 5.47に示す。図には, $l=30, 60$ (mm)の曲線

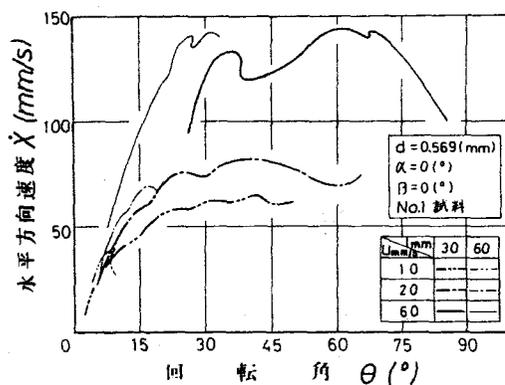


図 5.46 水平方向速度におよぼす流速の影響

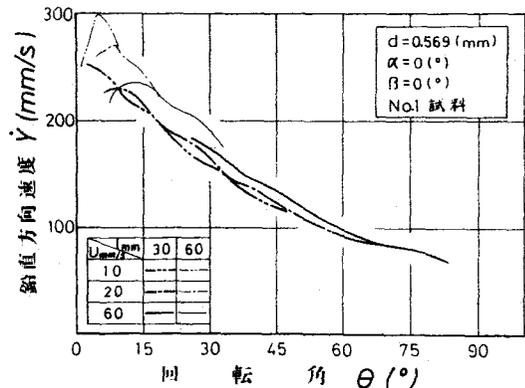


図 5.47 鉛直方向速度におよぼす流速の影響

が併記してある。

\dot{X} , \dot{Y} ともに加速と減速を繰返す現象が見られ、この変動は U が大きいほど大きくなる。この傾向は \dot{X} の方にとくに顕著に現われている。これは、 U が大きいほど、線状体はノズルの上方で運動するため、流れが加速している影響を受け易く、しかも、流速の場所的变化も大きいためである。また、ノズルの形状から、流速の鉛直方向成分は水平方向成分に比べて小さいため、 \dot{Y} の変動におよぼす流速の影響が明確に現われなかったと考えられる。

さらに、これらの図から、 \dot{X} は θ の全領域で U が大きいほど大きくなり、 $l=60(mm)$ の場合を見ると分かるように、 U が小さいほど \dot{Y} の最大値は大きく、そのときの θ の値は小さくなる。これは、 U が小さいほど、線状体が流れ中に入ったときの姿勢がより鉛直に近いため、流体から鉛直方向に受ける抗力は小さく、鉛直方向により大きく加速されるからである。しかし、 U が大きいほど、線状体はノズルの上方で運動するため、流速の鉛直方向成分は大きくなり、線状体は鉛直方向に減速されにくくなるので、 θ が増加すると同一回転角に対する \dot{Y} の値は、 U が大きいほど大きくなる。そして、姿勢が水平に近づくにつれて、線状体はノズルの下方に位置するため、流れの方向はほとんど水平方向になるので、 \dot{Y} には U の影響が見られなくなる。

また、図 5.46, 5.47 において、唯一の層流域である $U=10(mm/s)$ の場合にも、その大きさは小さいが重心の速度に変動が見られたことから、重心の軌跡、速度および姿勢が変動するのは、乱流の影響ではなくノズル内流れでは位置により流速および流れの方向が異なるためであるという結論が得られる。

つぎに、 $d=0.569(mm)$ に比べて重心の速度の変動が小さい $d=0.912(mm)$ の結果を図 5.48, 5.49 に示す。

$d=0.912(mm)$ の場合、慣性が大きく流れの影響を受けにく

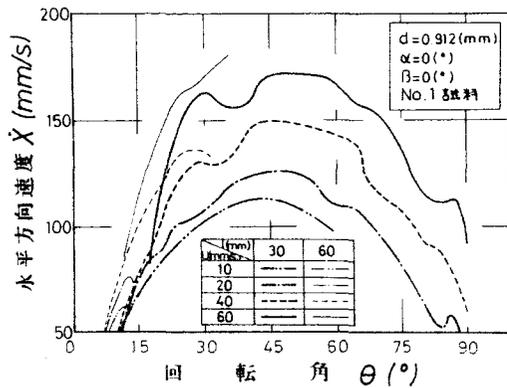


図 5.48 水平方向速度 \dot{X} におよぼす流速の影響

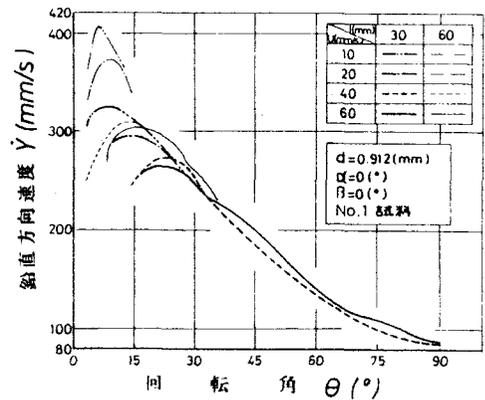


図 5.49 鉛直方向速度 \dot{Y} におよぼす流速の影響

いため、 $U=10$ (mm/s) の \dot{X} および $U \leq 40$ (mm/s) の \dot{Y} にはほとんど変動が見られず、 $U \leq 40$ (mm/s) の場合、 $\theta > 35^\circ$ の領域で \dot{Y} はほぼ一致する。なお、上述した U の影響は、この場合にも明確に現われている。さらに、 $l=60$ (mm) と $l=30$ (mm) の \dot{X} の差は U が大きいほど大きく、また、 \dot{Y} の差は U が小さいほど大きくなり、 $d=0.569$ (mm) の場合と比べて、 \dot{Y} は θ のより小さい領域で流速の影響を受ける。

以上述べた流速の影響は、 d が大きい NO.2 試料の場合にも明確に現われる。ただし、 d が大きい方が、 \dot{Y} におよぼす流速の影響が現われる θ の領域は小さくなる。

以上の結果をまとめると、 \dot{X} は U が大きいほど大きく、 U が小さいほど \dot{Y} の最大値は大きく、そのときの θ の値は小さい。また、 \dot{X} 、 \dot{Y} とともに変動は U が大きいほど大きくなる。さらに、線状体の慣性が大きいほど、 \dot{Y} におよぼす流速の影響が現われる θ の領域は小さくなる。

5.10.3 線状体の姿勢

$d=0.569$ (mm) の NO.1 試料の ψ と θ の関係を図 5.50 に示す。

図には、 $l=30, 60$ (mm)のデータがプロットしてある。

ノズル内流れ中では、姿勢は減衰振動のように変動しながら水平方向に近づく。また、 ψ は変動を除いた平均的な姿勢の変化にはほとんど影響をおよぼさない。しかし、 ψ が大きいほど、線状体はノズルの上方で運動するため、流れが加速

している影響を受け易く、しかも、流速の場所的变化も大きいため、姿勢の変動は大きくなる。

なお、水平方向に対してある角度をなしてノズル底面に近づくとき、線状体の先端部が流速の小さい境界層内へ入り、後端部が流速の大きい領域に入っている状態が発生し、線状体はその姿勢を鉛直に向ける方向に回転せられる現象が生ずると考えられる。しかし、ノズル内流れ中でも、矩形管内流れ中での場合と同様に、このような現象は見られない。以上述べた流速の影響は、直径、比重量が異なる場合にも明確に現われる。

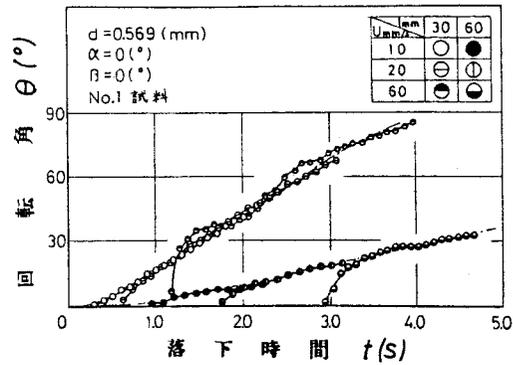


図5.50 姿勢におよぼす流速の影響

5.11 $\beta=45^\circ$ の場合の落下特性

5.5 ~ 5.10 節では、初期位置における水平面内での線状体の軸方向と流れの方向のなす角度が $\beta=0^\circ$ である場合の結果について述べた。この節では、 $\beta=45^\circ$ (ただし、 $\alpha=90^\circ$) でおこなった実験から得られた線状体の落下特性および諸要因の影響について述べる。なお、第4章で報告しなかった矩形管内流れ中での結果も合わせて報告し、ノズル内流れ中での場合と比較する。

図5.51に矩形管内流れ中での線状体の落下軌跡を示す。図

中の線状体の時間間隔は、 $\Delta t = 0.25$ (s) である。この図は、管路上方から見た落下軌跡であり、側方から見た落下軌跡はここには記載しないが、線状体はほぼ水平な姿勢を保ったまま運動し続ける。流速分布の測定結果から、線状体が運動する領域では、矩形管幅方向（Z方向）の流速分布は一様であり、しかも、流れはゆっくり発達しているため、X方向の流速の変化はわづかである。また、線状体は落下直後に、矩形管壁面近傍に発達している境界層内で除々に加速され、その速度は流速とほぼ同じになるため、線状体を回転させるためのモーメントはほとんど作用しない。したがって、図5.52に示すように、水平面内での線状体の軸方向と流れの方向のなす角度を φ とすると、図5.51から明らかのように、 φ はほとんど変化せず、線状体はほぼ一定の姿勢を保ったまま流速と同じ速度で運動し続ける。なお、この場合、最終落下位置（底面に落下したときの位置）での φ は約 36° である。以上の結果は、試料条件および実験条件に関係なく得られる。

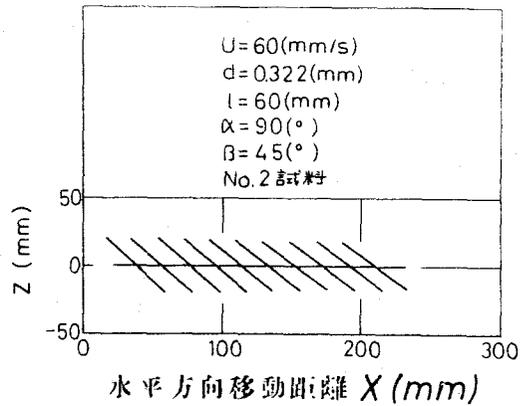


図5.51 矩形管内流れ中での落下軌跡

つぎに、 $U = 60$ (mm/s) のノズル内流れ中での $d = 0.569$ (mm), $l = 45$ (mm) の NO.1 試料の落下軌跡を図5.53に示す。(a)が管路上方から見た落下軌跡であり、(b)が管路側方から見た場合である。図中の線状体の時間間隔は、 $\Delta t = 0.2$ (s) である。

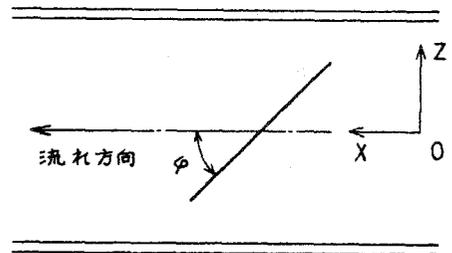


図5.52 φ の定義

矩形管内流れ中での場合と異なり、ノズル内流れ中では、 φ が減少する部分と φ がほとんど変化しない部分が繰返し現われ、水平面内での線状体の姿勢は流れの方向に近づく。いっぽう、図5.53(b)において、鉛直面内での姿勢は $\theta = 90^\circ$ を中心にして振動している。

線状体は水平な姿勢で運動し始めるが、その位置はノズルの上方であるので、流れの方向が水平方向に対して傾いているため、線状体にはその姿勢を鉛直方向に向ける回転モーメントが作用し、姿勢

は鉛直方向に回転するが、流れの方向を向いても回転は止まらず、 θ は減少する。しかし、 θ の減少に伴ない線状体にはその姿勢を水平方向にもどす向きの回転モーメントが作用するため、逆に姿勢は水平方向に回転し始める。そして、姿勢は水平に近づくが、この場合にも、 $\theta = 90^\circ$ で回転は止まらず、 θ は 90° 以上になり、ふたたび上述と同じ理由で姿勢は水平方向にもどされるという運動を繰返す。以上述べた線状体の姿勢の変化は

図5.54を見ればいっそう明らかになる。この図には、 θ と φ の変化が併記してある。 θ が減少している領域 ($t = 2.0 \sim 2.4$ (s) および $2.8 \sim 3.3$ (s) 程度の領域) では、 φ はほとんど変化しない状態が続き、 θ がほとんど変化

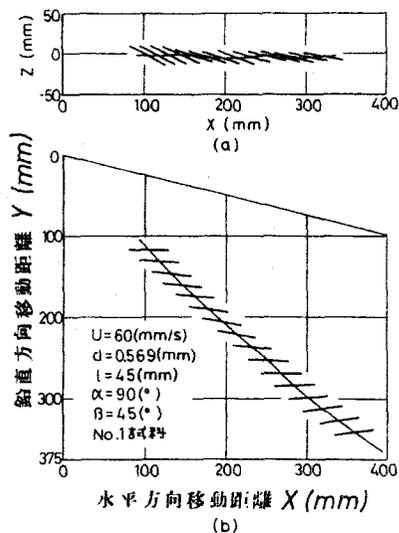


図5.53 ノズル内流れ中での落下軌跡

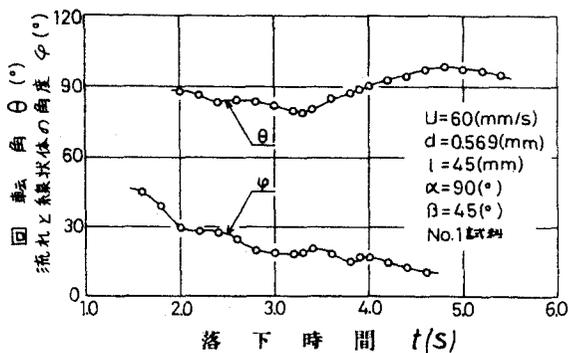


図5.54 線状体の姿勢の変化

しない領域 ($t = 2.4 \sim 2.8$ (s) 程度の領域) および θ が増加している領域 ($t = 3.3 \sim 4.8$ (s) 程度の領域) では, 線状体は水平面内で流れの方向に回転する。また, θ が極小の状態から増加し始めるとき ($t = 3.3 \sim 3.4$ (s)) および θ が 90° を越えるとき ($t = 3.8 \sim 3.9$ (s)), φ の値が衝撃的に増大する現象が見られる。ノズル内流れは加速しており, 水平面内での線状体に対する流体の軸に直角な方向の相対速度は, 先端部付近の方が大きくなり, 線状体の姿勢を流れの方向に回転させる向きに回転モーメントが作用するため, 角速度 $d\varphi/dt$ (< 0) の絶対値は増大する。ところが, θ が減少し始めると線状体の速度が増大し始めるため, 線状体に対する流体の相対速度が小さくなり, さらに, 角速度 $d\varphi/dt$ の絶対値が大きいため, 回転モーメントは角速度の向きと逆向きに作用し始める。このため, 角速度は減速され, φ がほとんど変化しない状態が続く。そして, θ の減少が終了すると, 線状体は同じ姿勢を保ったまま下流方向へ運動し続けるが, ノズル内流速は下流側ほど大きいため, 線状体に対する流体の相対速度は増大し始め, また, $d\varphi/dt$ はほとんど 0 であるので, ふたたび, 線状体の姿勢を流れ方向に回転させる向きの回転モーメントが作用し, φ は減少する。したがって, θ が減少あるいはほとんど変化しない領域では, θ と φ の減少が交互に現われる現象が見られる。

以上述べたように, ノズル内流れ中では, 位置により流速および流れの方向が異なるため, その姿勢は3次元的に変化する。以下では, 水平面内での姿勢の変化 (φ の変化) に注目して, 直径, 長さ, 比重量および流速がおよぼす影響を調べるが, 前述したように φ の変化は連続的ではなく, φ が減少する部分とほとんど一定の部分があるため, 最終落下位置での φ の値におよぼす d , l , ρ , V の影響について述べる。

表5.5に d , l および ρ の影響を示す。表中の値は10本の平均値である。この表から明らかのように, d の影響は見られず

、 l が大きいほど φ の値は小さくなる。

l が大きいほど φ が小さくなるのは、 l が大きいほど線状体の軸方向に沿った流速の変化は大きくなり、線状体を流れ方向に回転させる向きのモーメントが大きくなるためである。また、 ρ が小さい方が φ が小さいのは、慣性モーメントが小さいこと、 X は ρ にかかわらず同一であるのに対し、 Y は ρ が小さい方が小さくなり、線状体はノズルの上方で運動するため、流れが加速している影響を大きく受けることが原因である。

表5.5 φ におよぼす d, l, ρ の影響 ($U=60(\text{mm/s})$)

試料番号	d(mm)	l(mm)			
		15	30	45	60
1	0.912	—	26.7	—	16.7
	0.720	—	22.4	—	17.8
	0.569	27.0	24.1	16.7	16.0
2	0.527	—	26.0	—	25.0

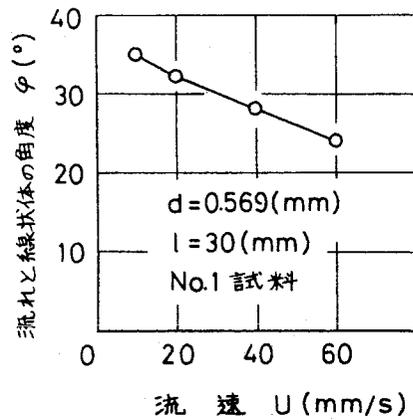


図5.55 φ におよぼす流速の影響

U の影響を図5.55に示す。 U が大きいほど、線状体の軸方向に沿った流速の変化が大きいため、 φ は小さくなる。

したがって、 $\theta=0^\circ$ および $\theta=45^\circ$ の結果から、ノズル内流れ中では、 θ の変化は矩形管内流れ中での θ の変化を中心にして変動し、 φ は減少とほぼ一定の状態を繰返しながら0に近づくため、ノズル内流れは、鉛直面内での姿勢の制御には有効ではないが、水平面内での姿勢を流れの方向に向けるには有効である。

5.12 結 言

本章では、直線の線状体が単一でノズル内流れ中を自由落下する場合について実験的研究をおこなない、落下軌跡、速度および姿勢などの落下特性を把握し、同時に、線状体の初期角度、長さ、直径、比重量および流速が落下特性におよぼす影響を調べた。得られた結果を要約すると、つぎの通りである。

- (1) 線状体は、流れに入ったとき急激に回転するが、その後、姿勢は矩形管内流れ中での姿勢の変化を中心にして減衰振動しながら水平方向に近づき、その重心はいくつかの変曲点をもつ曲線を描いて運動する。また、線状体がノズル上方で水平な姿勢に近づく場合、姿勢は水平方向を中心にして減衰振動する。
- (2) 重心の速度は、角速度が急激に減速される領域では減速され、ふたたび角速度が加速され始めると加速されるというように、加速と減速を繰り返す。なお、その変動は水平方向速度の方が大きい。
- (3) 初期角度、長さ、直径、比重量および流速は軌跡の形に影響を与え、初期角度、長さ、直径および比重量が小さいほど、また、流速が大きいほど、線状体はノズルのより上方で運動し、さらに軌跡の変動は大きくなる。
- (4) 初期角度は、線状体が運動をおこなう位置に影響を与え、その結果ノズル内の流れ特性が、 \dot{x} 、 \dot{y} に初期角度の影響となって現われ、初期角度が大きいほど \dot{x} 、 \dot{y} は大きくなる。長さの影響は、 \dot{x} に関しては θ の全領域で、 \dot{y} に関しては θ の小さい領域で現われ、長さが大きいほど大きくなる。また

、直径、比重量の影響は、 θ の全領域で現われ、直径、比重量が大きいほど \dot{X} 、 \dot{Y} は大きくなる。また、 \dot{X} は θ の全領域で、流速が大きいほど大きくなり、 \dot{Y} は θ の小さい領域で流速の影響を受け、流速が小さいほど大きくなる。なお、 θ の増加に伴ない初期角度、長さおよび流速の影響は見られなくなる。さらに、重心の速度の変動におよぼす初期角度、長さの影響は明確に現われないうが、直径、比重量が小さいほど、また、流速が大きいほど、変動は大きくなる。

(5) 変動を除いた平均的な姿勢の変化には、初期角度、流速は影響をおよぼさない。いっぽう、長さが小さいほど、また、直径、比重量が大きいほど、平均的な角速度は大きく、線状体が回転するのに要する時間は小さい。また、姿勢の変動は、初期角度、流速が大きいほど、慣性モーメントが小さいほど、大きくなる傾向にある。

(6) 水平面内で線状体を流れ方向に対して傾けて落下させると、その姿勢は、鉛直面内では水平方向を中心に振動し、水平面内では流れの方向に回転する現象とその姿勢を保ったまま運動する現象が繰返し現われ、除々に流れの方向に近づく。

(7) 落下特性に変動が見られるのは、ノズル内流れが加速していることと、ノズル内では位置により流れの方向が異なることが原因である。

第6章 管内流れ中における線状体の運動に関する理論 解析

6.1 緒言

繊維あるいは繊維集団を流体輸送する技術は、繊維工業の各種工程で広く応用されている基本技術の一つであり、また、生産性を向上させる目的および自動化、省力化を進めるためにも、有用な技術として応用されているものである。繊維が流体輸送される場合、繊維の速度および姿勢の変化などが製品の品質に影響をおよぼすので、ここでは、管内流れ中での繊維の運動特性を言明することにした。

3)~6)

管内流れ中での繊維の運動を取扱った研究はあるが、それはいずれも現象論にとどまり、繊維の運動状態に着目してその特性がどのようなになるかなど、この現象の基本的事項を詳細に検討したものはほとんどない。このように、実際には広く利用されているにもかかわらず管内流れ中での繊維の基本的運動特性についてはほとんど解明されていないのが現状である。

本章では、実験的研究に引き続いて、直線の線状体が単一で矩形管内流れ中およびノズル内流れ中を自由落下する場合について理論解析をおこなう。

第2章で述べた物体の運動に関する Lamb の解析結果は、静止流体中での場合であり、これを本章に直接適用することはできないが、その考え方を流れ中における物体の運動に拡張することにより、管内流れ中での線状体の運動を解析することが出来る。そして、実験結果とあわせて、実験と解析の両面から線状体の基本的運動特性を明らかにする。

6.2 流れ中における線状体の運動に関する理論

線状体の運動を理論的に考えるため、静止流体中での場合と同じ仮定を設ける。

- (1) 線状体は、長さ l と直径 d の比の大きいまっすぐな円柱物体とする。
- (2) 線状体の軸の回りの回転運動は考えない。
- (3) 線状体は、一平面内で運動する。

なお、初期位置が管路幅方向の中央で、しかも、初期位置における水平面内での線状体の軸方向と流れの方向のなす角度 θ (図4.13参照)が0の場合、線状体はほぼ一平面内で運動することが実験で確かめられている。また、静止流体中で線状体が運動する場合、線状体は軸の回りの回転運動をしないことが、線状体回りの流れ特性を調べた結果分かっている(3.2.2項参照)ので、上述の初期条件で運動する場合、管内流れ中においても線状体は軸の回りの回転運動をおこなわないと考えられる。

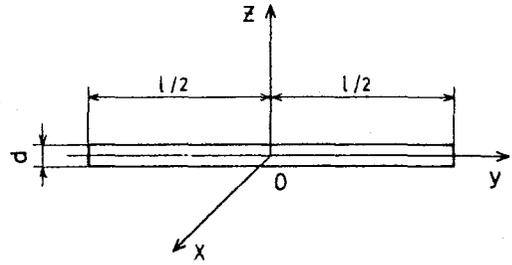
仮定(1)から、線状体は3つの対称面をもつので、線状体が運動することによって増加するこの運動系の全運動エネルギーは、(2.12)式のように x, y, z 方向の並進運動によるエネルギーと各軸回りの回転エネルギーの和の形で表わされる。

$$2T = AU^2 + BV^2 + CW^2 + P\rho^2 + Q\dot{\theta}^2 + R\dot{\gamma}^2$$

ここで、図6.7に示すように座標系を定めると、仮定(2)から $\dot{\theta} = 0$ 、線状体が運動をおこなう平面を xz 面と考えると仮定(3)から $W = 0, \rho = 0$ となるので、線状体の運動に伴って増加するこの運動系の全運動エネルギー T は、(2.13)式のよう

に x, y 方向の並進運動によるエネルギーと z 軸回りの回転エネルギーの和の形で表わされる。

$$2T = AU^2 + BV^2 + R\gamma^2$$



しかし、流れ中での場合、流 図6.1 線状体に固定した座標系
体は速度をもっているため、 T
は上式とまったく同じ式にはならない。すなわち、 T を糸状体が
流体に与える運動エネルギー T_1 と線状体の運動エネルギー T_2 に分
けると、 T_2 は、静止流体中での場合と同様に、

$$2T_2 = A_2U^2 + B_2V^2 + R_2\gamma^2 \quad (6.1)$$

$$\left. \begin{aligned} A_2 &= B_2 = \rho_b \pi a^2 l / 4 \\ R_2 &= \frac{l^2}{12} (\rho_b \pi a^2 l / 4) \end{aligned} \right\} \quad (6.2)$$

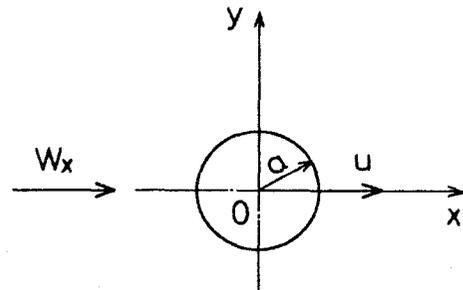
となる。

つぎに、 T_1 を x, y 方向の並進運動に関する項 T_{1x}, T_{1y} と
 z 軸回りの回転に関する項 T_{1z} に分けて計算する。

(a) T_{1x} の計算

半径 a 、長さ l の円柱が軸に
垂直な方向に速度 u で動くとき
の速度ポテンシャルは、

$$\phi = -(Ua^2/r) \cos \theta \quad (6.3)$$



流速 W_x で固定円柱をまぐる 図6.2 流速 W_x の流れ中を速度
流れの速度ポテンシャルは、 u で動く円柱

$$\phi = W_x (r + a^2/r) \cos \theta \quad (6.4)$$

となり、したがって、(6.3)式と(6.4)式を重ね合わせると、
 図6.2に示すような流速 W_x の流れ中を速度 U で動く円柱の回りの流れが、

$$\phi = W_x (r + a^2/r) \cos \theta - (Ua^2/r) \cos \theta \quad (6.5)$$

で表わされる。

この場合、流体に与えられる運動エネルギー T_{ix} は、

$$\begin{aligned} 2T_{ix} &= -\rho \iint \phi \frac{\partial \phi}{\partial n} ds \\ &= -\rho a^2 \int_{-l/2}^{l/2} \int_0^{2\pi} (2UW_x - U^2) \cos^2 \theta d\theta dy \\ &= \rho \pi a^2 l \left\{ U^2 - (2U/l) \int_{-l/2}^{l/2} W_x dy \right\} \end{aligned} \quad (6.6)$$

となり、ここで、静止流体中での場合の x 方向の並進運動によるエネルギーに関する係数 $A_1 (= \rho \pi a^2 l)$ を代入すると、

$$2T_{ix} = A_1 \left\{ U^2 - (2U/l) \int_{-l/2}^{l/2} W_x dy \right\} \quad (6.7)$$

となる。

(b) T_{iy} の計算

両端面付近の流速が W_{y1} , W_{y2} である流れ中を円柱が軸方向に速度 v で動くとき、流体に与えられるエネルギー T_{iy} は、静止流体中での場合と同様に、半径 a の円板が流速 W_{y1} の流れ中を面

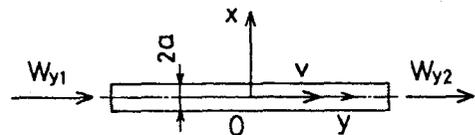


図6.3 流れ中を速度 v で動く円柱

に垂直な方向に速度 v で動く場合の片面に対するエネルギーと流速 w_{y2} の流れ中を動く場合の片面に対するエネルギーの和で表わされ、

$$\begin{aligned} 2T_{1y} &= 4/3 \cdot \rho a^3 \{ (v^2 - 2v w_{y1}) + (v^2 - 2v w_{y2}) \} \\ &= 8/3 \cdot \rho a^3 \{ v^2 - v(w_{y1} + w_{y2}) \} \quad (6.8) \end{aligned}$$

となり、ここで、静止流体中での場合の y 方向の並進運動によるエネルギーに関する係数 $B_1 (= 8/3 \cdot \rho a^3)$ を代入すると、

$$2T_{1y} = B_1 \{ v^2 - v(w_{y1} + w_{y2}) \} \quad (6.9)$$

となる。

(c) T_{1z} の計算

流速 w_x の流れ中で円柱が z 軸回りを角速度 γ で回転するとき、流体に与えられる運動エネルギー T_{1z} は、 T_{1x} の結果を利用して

$$\begin{aligned} 2T_{1z} &= \rho \pi a^2 \int_{-l/2}^{l/2} (\gamma^2 y^2 - 2\gamma y w_x) dy \\ &= \frac{\rho^2}{12} \rho \pi a^2 l \gamma^2 - 2\rho \pi a^2 \gamma \int_{-l/2}^{l/2} w_x y dy \quad (6.10) \end{aligned}$$

となり、ここで、静止流体中での場合の z 軸回りの回転エネルギーに関する係数 $R_1 (= \frac{\rho^2}{12} \rho \pi a^2 l)$ を代入すると、

$$2T_{1z} = R_1 \gamma^2 - 2R_1 (12/l^3) \gamma \int_{-l/2}^{l/2} w_x y dy \quad (6.11)$$

となる。

したがって、線状体の比質量 ρ_b 、流体の比質量 ρ 、直径 d 、

長さ l で決まる定数 A, B, R ((2.20)式) を考慮すると, (6.1)式, (6.7)式, (6.9)式, (6.11)式から, 線状体の運動に伴って増加するこの運動系の全運動エネルギーは,

$$\begin{aligned}
 2T &= AU^2 + BV^2 + R\gamma^2 \\
 &\quad - 2(A_1/l)U \int_{-l/2}^{l/2} \omega_x d\eta \\
 &\quad - B_1 v (\omega_{\eta 1} + \omega_{\eta 2}) \\
 &\quad - 2R_1 (I_2/l^3) \gamma \int_{-l/2}^{l/2} \omega_x \eta d\eta \quad (6.12)
 \end{aligned}$$

で表わされる。

いっぽう, 運動方程式は, 静止流体中での場合には (2.21)式で表わされるが, 流れ中での場合, 角運動量の釣合いを表わす (2.21)式の第3式で流体の角運動量に関する項は, U を $U - \frac{1}{l} \int_{-l/2}^{l/2} \omega_x d\eta$, v を $v - (\omega_{\eta 1} + \omega_{\eta 2})/2$ と置き換える必要がある。したがって, 流れ中での場合, 運動方程式は,

$$\left. \begin{aligned}
 \frac{d}{dt}(\partial T/\partial U) &= \gamma(\partial T/\partial v) - \delta(\partial T/\partial \omega) + X \\
 \frac{d}{dt}(\partial T/\partial v) &= \rho(\partial T/\partial \omega) - \gamma(\partial T/\partial U) + Y \\
 \frac{d}{dt}(\partial T/\partial \gamma) &= \left\{ v - (\omega_{\eta 1} + \omega_{\eta 2})/2 \right\} (\partial T_1/\partial U) \\
 &\quad - \left(U - \frac{1}{l} \int_{-l/2}^{l/2} \omega_x d\eta \right) (\partial T_1/\partial v) \\
 &\quad + v(\partial T_2/\partial U) - U(\partial T_2/\partial v) \\
 &\quad + \delta(\partial T/\partial \rho) - \rho(\partial T/\partial \delta) + N
 \end{aligned} \right\} (6.13)$$

と書ける。

ここで, X, Y は線状体に作用する外力の x, y 方向成分であり, N は回転モーメントである。

(6.13)式に (6.12)式を代入すると, 線状体の運動方程式

$$\begin{aligned}
 A \, du/dt &= \gamma B v - \gamma B_1 (W_{j1} + W_{j2})/2 \\
 &\quad + (A_1/l) \frac{d}{dt} \left(\int_{-l/2}^{l/2} W_x \, d\gamma \right) + X \\
 B \, dv/dt &= -\gamma A u + \gamma (A_1/l) \int_{-l/2}^{l/2} W_x \, d\gamma \\
 &\quad + (B_1/2) d(W_{j1} + W_{j2})/dt + Y \\
 R \, dr/dt &= (A_1 - B_1) \left(u - \frac{1}{l} \int_{-l/2}^{l/2} W_x \, d\gamma \right) \{ v - (W_{j1} + W_{j2})/2 \} \\
 &\quad + R_1 (I_2/l^3) \frac{d}{dt} \left(\int_{-l/2}^{l/2} W_x \gamma \, d\gamma \right) + N
 \end{aligned}
 \tag{6.14}$$

が得られる。

ここで，次式のような置き換えをおこなうと，

$$\begin{aligned}
 U_1 &= \frac{1}{l} \int_{-l/2}^{l/2} W_x \, d\gamma, \quad U_2 = (I_2/l^3) \int_{-l/2}^{l/2} W_x \gamma \, d\gamma \\
 V &= (W_{j1} + W_{j2})/2
 \end{aligned}
 \tag{6.15}$$

(6.14)式は，

$$\begin{aligned}
 A \, du/dt &= \gamma B v - \gamma B_1 V + A_1 dU_1/dt + X \\
 B \, dv/dt &= -\gamma A u + \gamma A_1 U_1 + B_1 dV/dt + Y \\
 R \, dr/dt &= (A_1 - B_1) (u - U_1) (v - V) \\
 &\quad + R_1 dU_2/dt + N
 \end{aligned}
 \tag{6.16}$$

となる。

なお， U_1 は γ 方向に沿って分布する流速の x 方向成分の平均値を表わし， U_2 の中の積分は，流速の x 方向成分の重心回りの一次モーメント，また， V は両端面での流速の γ 方向成分の平均値を表わしている。

また，図6.4に示すように線状体とともに運動する座標軸 Ox ， Oy の原点（線状体の重心）の座標を (X, Y) とし， x 軸と X 軸のなす角度を θ とすると，線状体重心の速度 \dot{X} ， \dot{Y}

および加速度 \ddot{X} , \ddot{Y} は, (2.23)式,
(2.24)式と同様に,

$$\left. \begin{aligned} \dot{X} &= u \cos \theta - v \sin \theta \\ \dot{Y} &= u \sin \theta + v \cos \theta \end{aligned} \right\} \quad (6.17)$$

$$\left. \begin{aligned} \ddot{X} &= (du/dt) \cos \theta - (dv/dt) \sin \theta \\ &\quad - (u \sin \theta + v \cos \theta) \dot{\theta} \\ \ddot{Y} &= (du/dt) \sin \theta + (dv/dt) \cos \theta \\ &\quad + (u \cos \theta - v \sin \theta) \dot{\theta} \end{aligned} \right\} \quad (6.18)$$

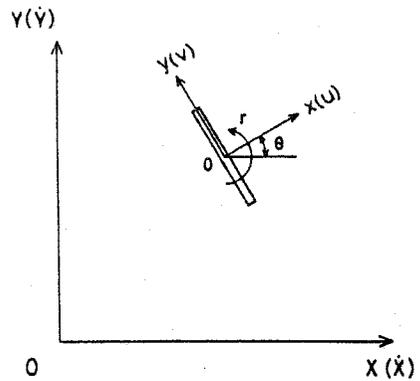


図6.4 座標系

となる。

6.3 管内流れ中における線状体の運動の数値計算

数値計算は, 一様流れ中, 矩形管内での十分に発達した流れ中, 矩形管内での助走域およびノズル内流れ中の4種類の場合についておこなうが, この節では, その際必要となる線状体に作用する外力および回転モーメントを計算する。さらに, 流速分布がある場合, 線状体の運動に伴なって(6.15)式で表わされる U_1 , U_2 , V は変化するので, 管内における流速分布の計算, 線状体の運動を数値計算する際の条件および方法について述べる。

6.3.1 線状体に作用する外力および回転モーメントの計算

外力および回転モーメントの計算は, 静止流体中での場合に詳細に述べている(2.2.3項参照)ので, ここでは, 静止流体中での場合と異なる点についてのみ詳細に述べ, その他の点については簡単に説明する。

まず, X軸, Y軸をそれぞれ水平方向, 鉛直方向に定める。

線状体端面に直角に働く抗力を D_d 、その端面以外の部分が流体から受ける抗力の x, y 方向成分を D_x, D_y 、また、重力と浮力の差による外力を F_G とする。図 6.5 に示すように線状体重心の速度を U とすると、外力 X, Y は次式で表わされる。

$$\left. \begin{aligned} X &= D_x - F_G \sin \theta \\ Y &= D_y + D_d - F_G \cos \theta \end{aligned} \right\} (6.19)$$

なお、

$$F_G = (\rho_b - \rho) g \pi d^2 l / 4 \quad (6.20)$$

となる。

ここで、線状体を n 個の微小要素に分け、その長さを Δl 、 i 番目の要素の重心の位置を y_i とすると、この点での x 方向速度は、図中の u の向きは負であるから、 $u_i = u - y_i r$ となり、 y_i における流速を w_i 、水平方向に対する角度を θ_{fi} とすると、線状体に対する流体の相対速度の x 方向成分 U_{ri} は、

$$U_{ri} = w_i \cos(\theta + \theta_{fi}) - (u - y_i r) \quad (6.21)$$

となる。

対象としている線状体は、長さ と 直径 の比が非常に大きいので、軸方向とある角度で運動する線状体回りの流れに対して独立の原理が適用できると仮定する。したがって、 D_x は、

$$D_x = \sum_{i=1}^n 1/2 \cdot \rho \cdot d \cdot \Delta l \cdot C_{di} \cdot U_{ri}^2 \quad (6.22)$$

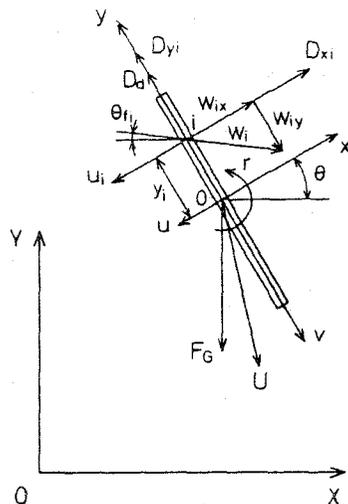


図 6.5 線状体に作用する外力

で表わされる。ただし，総和記号の中の各要素は， U_{ri} と同一の正負の符号をとる。

抗力係数 C_d は U_{ri} を代表速度とするレイノルズ数

$$Re = |U_{ri}| d / \nu \quad (6.23)$$

の関数であり，静止流体中での場合と同様に，ここでも Re の範囲に応じて(2.30a)～(2.30d)式を用いる。

いっぽう， γ_i の位置における線状体に対する流体の相対速度の γ 方向成分 V_{ri} は，図6.5での γ の向きは負であるから，

$$V_{ri} = -W_i \sin(\theta + \theta_{fi}) - v \quad (6.24)$$

となり，また， D_f は摩擦抗力のみであり，その軸方向が流れに傾いて置かれている柱状体回りの軸方向の流れを表わす式は，流れに直角に置かれている同一形状の柱状体回りのプラントル数 $Pr = 1$ の強制対流熱移動を表わす式と相似となるので，

$$D_f = \sum_{i=1}^N \pi \rho \nu V_{ri} \cdot \Delta l \cdot N_{ui} \quad (6.25)$$

で表わされる。

ヌセルト数 N_{ui} は Re の関数であり，ここでも，静止流体中での場合と同様に空気に対する実験式(2.32)式を用いる。ただし， Re は(6.23)式から求める。

また，線状体の先端($\gamma = -l/2$)および後端($\gamma = l/2$)における線状体に対する流体の相対速度の γ 方向成分を $V_{e1,r}$ ， $V_{e2,r}$ とする。したがって，各端面に働く抗力 $D_{\alpha,e1}$ ， $D_{\alpha,e2}$ は，抗力係数を1とした場合，

$$D_{d,e1} = \begin{cases} 1/2 \cdot \rho (\pi d^2/4) V_{e1,r}^2 & ; V_{e1,r} > 0 \\ 0 & ; V_{e1,r} \leq 0 \end{cases} \quad (6.26)$$

$$D_{d,e2} = \begin{cases} -1/2 \cdot \rho (\pi d^2/4) V_{e2,r}^2 & ; V_{e2,r} < 0 \\ 0 & ; V_{e2,r} \geq 0 \end{cases} \quad (6.27)$$

となるので、

$$D_d = D_{d,e1} + D_{d,e2} \quad (6.28)$$

で表わされる。

最後に、線状体に作用する回転モーメント N は、 x 方向の抗力にもとづくものであり、

$$N = - \sum_{i=1}^n 1/2 \cdot \rho d \cdot \Delta l \cdot C_{di} \cdot U_{ri}^2 \cdot y_i \quad (6.29)$$

となる。ただし、 U_{ri}^2 は U_{ri} と同一の正負の符号をとる。

6.3.2 流速分布の計算および数値計算の条件と方法

(1) 一様流れ中における場合

流れの方向が水平方向(x 方向)である一様流れ中における線状体の運動について考える。流速を W とすると、水平方向に対する流れの角度 θ は0であるので、(6.15)式から、

$$\left. \begin{aligned} U_1 &= W \cos \theta, & U_2 &= 0 \\ V &= -W \sin \theta \end{aligned} \right\} \quad (6.30)$$

となり、 dU_1/dt 、 dV/dt は、

$$\left. \begin{aligned} dU/dt &= -\gamma W \sin \theta \\ dV/dt &= -\gamma W \cos \theta \end{aligned} \right\} \quad (6.31)$$

であるから、一様流れ中における線状体の運動方程式は、(6.16)式から、

$$\left. \begin{aligned} A du/dt &= \gamma B v - \gamma (A_1 - B_1) W \sin \theta + X \\ B dv/dt &= -\gamma A u + \gamma (A_1 - B_1) W \cos \theta + Y \\ R dr/dt &= (A_1 - B_1)(u - W \cos \theta)(v + W \sin \theta) + N \end{aligned} \right\} \quad (6.32)$$

で表わされる。この式は、静止流体中における線状体の運動方程式(2.22)式において、 u, v の代りに流速に対する相対速度 $u - W \cos \theta, v + W \sin \theta$ を入れても求まる。

数値計算は、流体として水を考え、 $\alpha = 0.569$ (mm) の NO.1 試料 (実験に用いた鉛筆の芯に相当し、比重量は $\gamma_b = 1.627$ (g/cm³) である。) に対し、表 6.7 に示すように長さ l および流速を変化させておこなった。なお、初期角度 α は実験の場合と異なり流れの向きにとり、計算はすべて $\alpha = 1^\circ$ でおこなった。

また、あわせて $\alpha = 0.569$ (mm), $l = 15, 30, 45, 60$ (mm) の NO.1 試料に対し、表 6.7 と同一初期条件で静止流体中において数値計算をおこない、流れ中での場合と比較することにした。

表 6.7 試料条件および初期条件 (一様流れ中)

試料番号	線状体直径 d (mm)	線状体比重 γ_b (g/cm ³)	初期角度 α (°)	線状体長さ l (mm)	流速 W (mm/s)	初速度		初期角速度 r_0 (rad/s)
						u_0 (mm/s)	v_0 (mm/s)	
1	0.569	1.627	1	30	20 40 60 80	-1.0×10^{-2}	-1.0×10^{-2}	1.0×10^{-4}
				15	60			
				45				
				60				

(2) 矩形管内での十分に発達した流れ中における場合

(i) 流速分布の計算

線状体の運動を数値計算する際に必要となる矩形管内での十分に発達した流れの流速分布を計算する。この流速分布はすでに解析的に解かれており、以下ではその方法について簡単に述べる。

図6.6に示すように、矩形管の高さを a 、幅を b とし、流れの方向に x 軸をとると、流速ベクトルは $\mathbf{v}(u, 0, 0)$ で表わされる。

いま考えているのは定常な流れであるので、ナビエ-ストークスの式は、

$$\left. \begin{aligned} \mu \cdot \frac{\partial u}{\partial x} &= -\frac{1}{\rho} \frac{\partial p}{\partial x} + \nu \Delta u \\ \frac{\partial p}{\partial y} &= 0, \quad \frac{\partial p}{\partial z} = 0 \end{aligned} \right\} \quad (6.33)$$

となる。また、連続の式は、

$$\frac{\partial u}{\partial x} = 0 \quad (6.34)$$

となる。したがって、運動方程式は、

$$\frac{\partial^2 u}{\partial y^2} + \frac{\partial^2 u}{\partial z^2} = \frac{1}{\mu} \frac{dp}{dx} \quad (6.35)$$

で表わされる。

いっぽう、境界条件は、

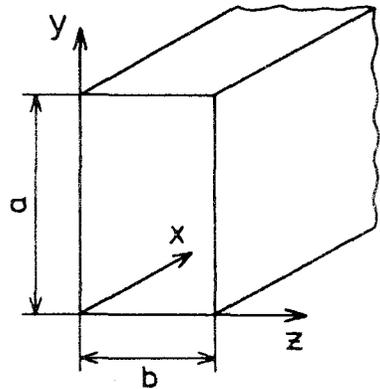


図6.6 座標系

$$\left. \begin{array}{l} y=0, y=a \\ z=0, z=b \end{array} \right\} \text{で } u=0 \quad (6.36)$$

である。

そこで、

$$u = \frac{1}{2\mu} \frac{d\rho}{dx} (y-a)y + \sum_{m=1}^{\infty} \sin \frac{m\pi y}{a} \left(A_m \cosh \frac{m\pi z}{a} + B_m \sinh \frac{m\pi z}{a} \right) \quad (6.37)$$

ただし、 m は整数である。

とおくと、(6.37)式は、運動方程式(6.35)式および $y=0$ 、 $y=a$ における境界条件を満足している。したがって、係数 A_m 、 B_m は $z=0$ 、 $z=b$ における境界条件によって定められる。

$z=0$ で $u=0$ を満足するためには

$$\frac{1}{2\mu} \frac{d\rho}{dx} (y-a)y + \sum_{m=1}^{\infty} A_m \sin \frac{m\pi y}{a} = 0 \quad (6.38)$$

であって、この関係から

$$\begin{aligned} A_m &= -\frac{1}{a\mu} \frac{d\rho}{dx} \int_0^a (y-a)y \sin \frac{m\pi y}{a} dy \\ &= -\frac{2a^2}{\mu m^3 \pi^3} \frac{d\rho}{dx} (\cos m\pi - 1) \end{aligned} \quad (6.39)$$

となる。

また、 $z=b=na$ で $u=0$ なる境界条件によると

$$\frac{1}{2\mu} \frac{d\rho}{dx} (y-a)y + \sum_{m=1}^{\infty} \sin \frac{m\pi y}{a} (A_m \cosh m\pi n + B_m \sinh m\pi n) = 0 \quad (6.40)$$

でなければならぬ。

したがって、(6.40)式と(6.38)式を比較すれば、

$$B_m = -A_m (\cosh m\pi\tau - 1) / \sinh m\pi\tau \quad (6.41)$$

となる。

なお、流速分布は上下、左右対称になるから、 $y = a/2$ で $\partial u / \partial y = 0$ 、 $z = b/2$ で $\partial u / \partial z = 0$ にならなければならない。(6.38)式を考慮すると(6.37)式はこの条件を満していることが分かる。

ここで、(6.39)式、(6.41)式を(6.37)式へ代入すると、流速 u は、

$$u = -\frac{a^2}{2\mu} \frac{dp}{dx} \left[\left(1 - \frac{y}{a}\right) \frac{y}{a} - \frac{8}{\pi^3} \sum_{m=1,3,5,\dots}^{\infty} \frac{\sin\left(m\pi \frac{y}{a}\right) \cosh \frac{m\pi\tau}{2} \left(1 - \frac{z}{na}\right)}{m^3 \cosh \frac{m\pi\tau}{2}} \right] \quad (6.42)$$

となり、平均流速 U は、

$$U = \int_0^a \int_0^{na} u \, dy \, dz / na^2 = -\frac{a^2}{12\mu} \frac{dp}{dx} \left(1 - \frac{192}{\pi^5} \sum_{m=1,3,5,\dots}^{\infty} \frac{\tanh \frac{m\pi\tau}{2}}{m^5} \right) \quad (6.43)$$

となる。したがって、

$$y^* = y/a, \quad z^* = z/na$$

なる無次元化をおこなうと、(6.42)式、(6.43)式から、無次元流速 u^* は、

$$\begin{aligned}
 u^* &= u/\sigma \\
 &= 6 \left[(1-\gamma^*) \gamma^* - \frac{8}{\pi^3} \sum_{m=1,3,5,\dots}^{\infty} \frac{\sin(m\pi\gamma^*) \cosh \frac{m\pi L}{2} (1-2\delta^*)}{m^3 \cosh \frac{m\pi L}{2}} \right] \\
 &\quad / \left(1 - \frac{192}{\pi^5} \sum_{m=1,3,5,\dots}^{\infty} \frac{\tanh \frac{m\pi L}{2}}{m^5} \right) \quad (6.44)
 \end{aligned}$$

で表わされる。

ここでは、線状体が矩形管の幅方向の中央 ($\delta^* = 0.5$) 面内で運動する場合を取扱っているので、 u^* に関しても $\delta^* = 0.5$ の位置での γ 方向の分布のみ計算すればよい。

$\delta^* = 0.5$ のとき、 $\cosh\{m\pi L(1-2\delta^*)/2\} = 1$ であるから、

$$\begin{aligned}
 u^* &= \frac{6 \left[(1-\gamma^*) \gamma^* - (8/\pi^3) \sum_{m=1,3,5,\dots}^{\infty} \frac{\sin(m\pi\gamma^*)}{m^3 \cosh \frac{m\pi L}{2}} \right]}{1 - (192/\pi^5) \sum_{m=1,3,5,\dots}^{\infty} \frac{\tanh \frac{m\pi L}{2}}{m^5}} \quad (6.45)
 \end{aligned}$$

となる。

また、数値計算は、実験に用いたものと同一形状 ($a = 400$ (mm), $b = 100$ (mm)) の矩形管に対しておこなうので、 $R = b/a = 0.25$ となり、(6.45) 式の分母の総和は $m = 39$ までの和でほとんど収束し、分母の値は 5.2653×10^{-2} となる。したがって、(6.45) 式は、

$$\begin{aligned}
 u^* &= 1.13955 \times 10^2 \left[(1-\gamma^*) \gamma^* \right. \\
 &\quad \left. - (8/\pi^3) \sum_{m=1,3,5,\dots}^{\infty} \frac{\sin(m\pi\gamma^*)}{m^3 \cosh \frac{m\pi L}{2}} \right] \quad (6.46)
 \end{aligned}$$

となる。

図 6.7 に (6.46) 式から数値計算した (ただし、総和は $m = 39$ までの和とした。), $b/a = 0.25$ の矩形管内の十分に発達した流れの幅方向中心における高さ方向の流速分布を示す。最大流速は 1.773 になる。

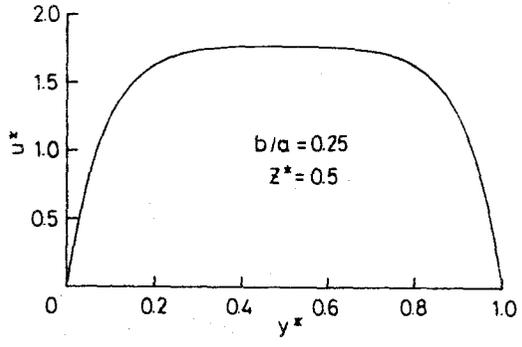


図6.7 幅方向中心における高さ方向の流速分布

(ii) 計算条件および方法

図6.8に示すように、初期位置 Y_0 を原点 (0) として、線状体重心の座標を X, Y で表わし、矩形管内での位置を x, y で表わし、流れの方向を水平方向 (x 方向) にとる。

線状体の任意の位置 i の高さ方向の座標を無次元化して表わすと、

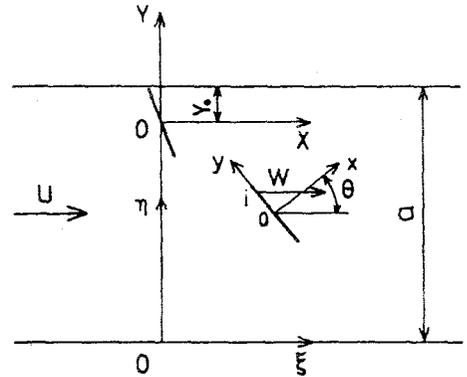


図6.8 座標系

$$\eta^* = \eta/a = 1 + (Y + y \cos \theta - Y_0)/a \quad (6.47)$$

となるので、 η^* を (6.46) 式の η^* の所へ代入すると u^* が求まり、この位置での流速 W は、

$$W = U u^* \quad (6.48)$$

から得られる。

また、水平方向に対する流れの角度は 0 であり、(6.15) 式で

表わされる U_1, V を計算するとき，前項で外力および回転モーメントを計算したときと同様に，糸線状体を n 個の微小要素に分け，次式から求める。

$$\left. \begin{aligned} U_1 &= \sum_{i=1}^n W_i \cos \theta \cdot \Delta l / l \\ V &= -(W_{e1} + W_{e2}) \sin \theta / 2 \end{aligned} \right\} \quad (6.49)$$

ただし， W_{e1}, W_{e2} は $y = -l/2, y = l/2$ における流速である。
つぎに， $dU_1/dt, dU_2/dt$ および dV/dt を計算する。
(6.15)式から，

$$\left. \begin{aligned} dU_1/dt &= \int_{-l/2}^{l/2} d(W \cos \theta) / dt \cdot dy / l \\ dU_2/dt &= (1/2 l^3) \int_{-l/2}^{l/2} d(W \cos \theta) / dt \cdot y \, dy \end{aligned} \right\} \quad (6.50)$$

であり， $d(W \cos \theta) / dt$ は (6.48)式および (6.47)式で表わされる η^* を (6.46)式の η^* の所へ代入して得られる U^* の式から，

$$\begin{aligned} d(W \cos \theta) / dt &= U (dU^* / dt \cdot \cos \theta - \gamma U^* \sin \theta) \\ &= 1.13955 \times 10^2 U \{ (1 - 2\eta^*) d\eta^* / dt \cdot \cos \theta \\ &\quad - (1 - \eta^*) \eta^* \gamma \sin \theta \\ &\quad - (8/\pi^3) \sum_{m=1,3,5,\dots}^{\infty} \{ m\pi \cos(m\pi\eta^*) (d\eta^* / dt) \cos \theta \\ &\quad - \gamma \sin(m\pi\eta^*) \sin \theta \} / (m^3 \cosh \frac{m\pi}{2}) \} \end{aligned} \quad (6.51)$$

となる。

ただし， $d\eta^* / dt$ は，(6.47)式および (6.17)式から，

$$\begin{aligned} d\eta^* / dt &= (dY/dt - \gamma r \sin \theta) / a \\ &= (U \sin \theta + v \cos \theta - \gamma r \sin \theta) / a \end{aligned} \quad (6.52)$$

である。

したがって、 dU_1/dt および dU_2/dt は線状体を n 個の微小要素に分け、(6.51)式、(6.52)式を用いて次式から計算する。

$$\left. \begin{aligned} dU_1/dt &= \sum_{i=1}^n d(w_i \cos \theta)/dt \cdot \Delta l / l \\ dU_2/dt &= (12/l^3) \sum_{i=1}^n d(w_i \cos \theta)/dt \cdot \gamma_i \cdot \Delta l \end{aligned} \right\} (6.53)$$

同様にして、

$$\begin{aligned} d(w \sin \theta)/dt &= 1.13955 \times 10^2 U \left\{ (1-2\eta^*) d\eta^*/dt \cdot \sin \theta \right. \\ &\quad + (1-\eta^*) \eta^* \gamma \cos \theta \\ &\quad \left. - (\delta/\pi^3) \sum_{m=1,3,5,\dots}^{\infty} \left[m\pi \cos(m\pi\eta^*) d\eta^*/dt \cdot \sin \theta \right. \right. \\ &\quad \left. \left. + \gamma \sin(m\pi\eta^*) \cos \theta \right] / (m^3 \cosh \frac{m\pi}{\delta}) \right\} \end{aligned} \quad (6.54)$$

いっぽう、(6.49)式から、

$$dV/dt = - \left\{ d(w_{e1} \sin \theta)/dt + d(w_{e2} \sin \theta)/dt \right\} / 2 \quad (6.55)$$

であるので、 dV/dt は(6.54)式を用いて計算できる。

以上のようにして、 U_1 、 V および dU_1/dt 、 dU_2/dt 、 dV/dt を求め、運動方程式(6.16)式と重心の速度を表わす(6.17)式を連立させて数値計算し、線状体の運動状態を求めた。

また、計算条件は表6.1に示した一様流れ中での場合と同一とし、長さ l および平均流速 U を変化させ、さらに、初期角度の影響を調べるため、 $U=60$ (mm/s)、 $l=45$ (mm) に対し $\alpha=10^\circ$ 、 20° で計算をおこなった。なお、初期位置 Y_0 は、 $l=60$ (mm) の場合にも線状体がすべて流れ中に入るようにするため、 $Y_0=30$ (mm) とした。

(3) 矩形管内での流れの助走域における場合

第4章で述べた矩形管内流れ中における線状体の落下実験は、流れが発達している領域、すなわち、流れの助走域でおこなった。ここでは、この流れの助走域における線状体の運動について考える。これは、前述した(1)一様流れ中における場合と(2)十分に発達した流れ中における場合の中間の領域における場合であり、この3種類の流れ中での線状体の運動を調べることにより、矩形管内でのすべての流れ状態における線状体の運動特性を把握することができる。

図6.9に示すように、初期位置 Y_0 を原点(0)とし、線状体重心の座標を X 、 Y で表わす。また、矩形管内での位置は、矩形管の入口部(境界層が発達し始める位置)の高さ方向および幅方向の中心を原点(0)とすると、 η 座標で表わし、流れの方向は水平方向(X 方向)にとる。さらに、矩形管の入口部から初期位置における線状体重心までの水平方向距離を X_0 とする。

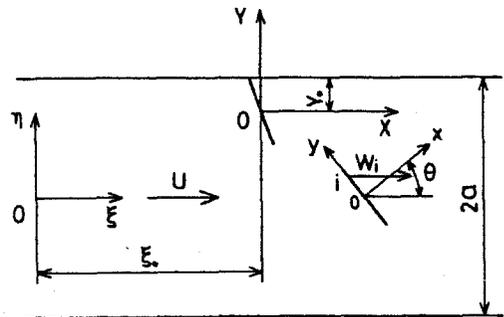


図6.9 座標系

4.2節で述べたように、整流部の下流側の整流用金網から流出した流れはほぼ一様となっているので、線状体の運動を数値計算する際にも、この位置を矩形管の入口部と考えて $X_0 = 700$ (mm)とした。(図4.1参照)

まず、矩形管内の助走域での流速分布の計算は、4.3.4項で述べたように Han の方法で計算した結果と測定結果はほぼ一致することが確かめられたので、ここでは、この Han の方法によりおこなう。なお、線状体が矩形管の幅方向の中央面内で運動する場合を取扱っているため、流速分布に関しても、(4.23)

式で $\delta = 0$ として z 方向の分布のみを計算すればよい。図 6.10 に、平均流速 $U = 60$ (mm/s) の場合の $650 \leq \xi \leq 1300$ (mm) の範囲内における 50 (mm) 間隔の各位置での高さ方向の流速分布を示す。この図において、流速および位置は無次元化し、* の印を付けて表わしている。したがって、たとえば $\xi = 1300$ (mm) の場合、 $U^* = 0$ は横軸の 6.5 の位置である。流れは除々に発達し、最大流速は、 $\xi = 650$ (mm) の場合、 1.16 、 $\xi = 1300$ (mm) で 1.22 となる。

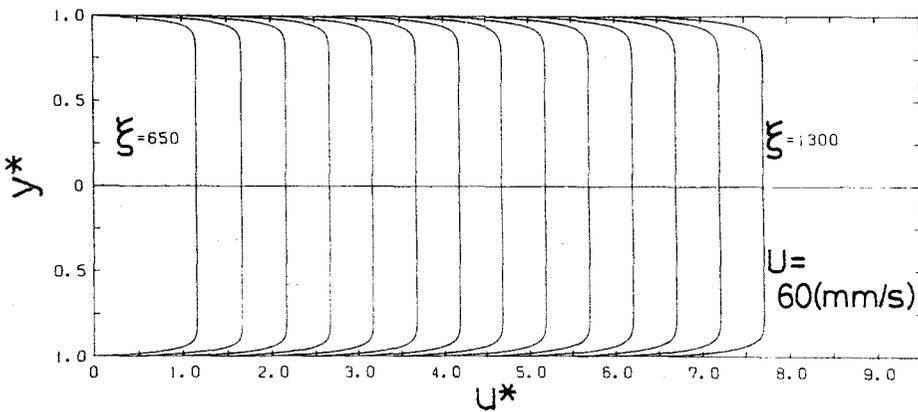


図 6.10 助走域での矩形管高さ方向の流速分布

つぎに、線状体の運動を数値計算する方法について述べる。

図 6.9 に示したように、線状体の任意の位置 i における流れ方向の座標および無次元化した高さ方向の座標は、

$$\left. \begin{aligned} \xi &= X - r \sin \theta + \xi_0 \\ \eta^* &= \eta/a = 1 + (Y + r \cos \theta - Y_0)/a \end{aligned} \right\} \quad (6.56)$$

となり、この点における流速 U_i が計算できる。しかし、線状体に作用する外力および回転モーメント、さらに、 U_i 、 V および dU_i/dt 、 dU_2/dt 、 dV/dt を計算する際、線状体を n 個の微小要素に分け、各要素に対する値の総和でこれらの値を求め

るが、各要素の重心における流速を逐一Hanの方法で計算すると計算時間が非常に長くなる。そこで、線状体の運動を数値計算する前に、線状体が運動すると予想される矩形管の領域、たとえば、 $U=60(\text{mm/s})$ の場合、 $690 \leq \xi \leq 1210(\text{mm})$ 、を直交格子で分割し、各格子点 (ξ_j, η_k^*) での流速 U_{jk} を1回だけ計算しておき、 w_i は U_{jk} から内挿する。

内挿の方法はつぎの通りである。流速分布を計算した結果、 ξ 方向の流速の変化は、 η 方向の変化に比べて小さいので、図

6.11に示すように、 $\xi_{j-1} \leq \xi_i \leq \xi_j$ および $\eta_{k-1}^* \leq \eta_i^* \leq \eta_k^*$ を満足する ξ 方向2列、 η 方向5列の計10箇所の格子点における流速 U_{jk} の値から、 η 方向の流速を4次式近似することにより (ξ_{j-1}, η_i^*) 、 (ξ_j, η_i^*) での流速 $U_{j-1,i}$ 、 $U_{j,i}$ を求め、その後、比例配分により w_i を計算する。

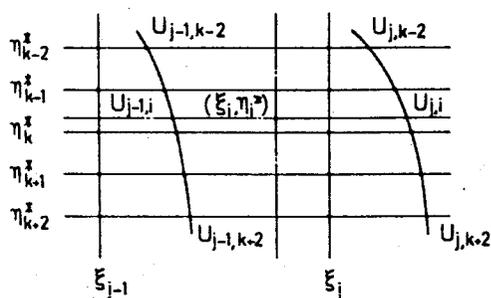


図6.11 w_i を内挿する方法

なお、格子の間隔は、 ξ 方向に対しては $U=20, 40(\text{mm/s})$ の場合、 $\Delta\xi=10(\text{mm})$ 、 $U=60, 80(\text{mm/s})$ の場合、 $\Delta\xi=20(\text{mm})$ とし、 η 方向に対しては、 $|\eta^*| \leq 0.7$ の場合、 $\Delta\eta^*=0.02$ ($\Delta\eta=4(\text{mm})$)、 $0.7 < |\eta^*| \leq 1.0$ の場合、 $\Delta\eta^*=0.01$ ($\Delta\eta=2(\text{mm})$)とした。

以上のようにして、任意の位置での流速 w_i が計算できるので、つぎに、 U_1, U および $dU_1/dt, dU_2/dt, dU/dt$ を計算する方法について説明する。

水平方向に対する流れの角度 θ_f は0であるので、 $m+1$ 番目の運動状態を計算する際必要となる m 番目の U_1, U は、(6.15)式を数値積分することにより次式から求める。

$$\left. \begin{aligned} U_{1,m} &= \sum_{i=1}^n W_{i,m} \cos \theta_m \cdot \Delta l / l \\ V_m &= - (W_{e1,m} + W_{e2,m}) \sin \theta_m / 2 \end{aligned} \right\} \quad (6.57)$$

また, (6.50)式から,

$$\left. \begin{aligned} dU_1/dt &= (\cos \theta \int_{-l/2}^{l/2} dW/dt \, d\gamma - \gamma \sin \theta \int_{-l/2}^{l/2} W \, d\gamma) / l \\ dU_2/dt &= (1/2/l^3) (\cos \theta \int_{-l/2}^{l/2} dW/dt \cdot \gamma \, d\gamma \\ &\quad - \gamma \sin \theta \int_{-l/2}^{l/2} W \gamma \, d\gamma) \end{aligned} \right\} \quad (6.58)$$

であり, m 番目の dW/dt は, $m-1$ 番目と m 番目の流速 $W_{i,m-1}$, $W_{i,m}$ を用いて,

$$(dW/dt)_{i,m} = (W_{i,m} - W_{i,m-1}) / \Delta t \quad (6.59)$$

から求める。ただし, Δt は $m-1$ 番目から m 番目までの時間である。したがって, m 番目の dU_1/dt , dU_2/dt は,

$$\left. \begin{aligned} (dU_1/dt)_m &= \left[\sum_{i=1}^n (W_{i,m} - W_{i,m-1}) \cdot \Delta l / \Delta t \right] \cos \theta_m / l \\ &\quad - \gamma_m \sin \theta_m \sum_{i=1}^n W_{i,m} \cdot \Delta l / l \\ (dU_2/dt)_m &= (1/2/l^3) \left[\sum_{i=1}^n (W_{i,m} - W_{i,m-1}) \cdot \gamma_i \cdot \Delta l / \Delta t \right] \cos \theta_m \\ &\quad - (1/2/l^3) \gamma_m \sin \theta_m \sum_{i=1}^n W_{i,m} \cdot \gamma_i \cdot \Delta l \end{aligned} \right\} \quad (6.60)$$

から計算する。

同様にして, m 番目の dV/dt は,

$$\begin{aligned} (dV/dt)_m &= - \left[(W_{e1,m} + W_{e2,m}) - (W_{e1,m-1} + W_{e2,m-1}) \right] \sin \theta_m / 2 \cdot \Delta t \\ &\quad - \gamma_m \cos \theta_m (W_{e1,m} + W_{e2,m}) / 2 \end{aligned} \quad (6.61)$$

から求める。

なお、初期状態から2番目の運動状態を計算する際には、(6.60)式、(6.61)式の第1項を0とした。

このようにして、 U_1, V および $dU_1/dt, dU_2/dt, dV/dt$ を求め、運動方程式(6.16)式と重心の速度を表わす(6.17)式を連立させて線状体の運動状態を数値計算した。

助走域での流れは、一様流れと十分に発達した流れの中間の領域における流れであるので、計算条件は表6.7に示した条件より少なくし、 $\ell=30(\text{mm})$ に対して $U=20, 40, 60, 80(\text{mm/s})$ 、 $\ell=60(\text{mm})$ に対して $U=60(\text{mm/s})$ の5種類とした。また、矩形管の形状は実験に用いたものと同じ(高さ $2a=400(\text{mm})$ 、幅 $2b=100(\text{mm})$)とし、初期位置は $Y_0=30(\text{mm})$ 、初期条件は表6.7と同一である。

(4) ノズル内流れ中における場合

図6.12に示すように、上面だけが傾き θ ($=400/\overline{AB}$) で収縮しているノズルに対し、ノズル内での流速 W がノズルの交点(A)を中心とする円周上で一様であるような流れを考え、この流れ中における線状体の運動を取扱う。なお、ノズル入口部の高さは、第5章で述べた線状体の落下実験で用いたノズルの高さと同じ、 $400(\text{mm})$ とする。また、初期位置を原点(0)とし、線状体重心の座標を X, Y で表わし、ノズル内での位置は入口部の

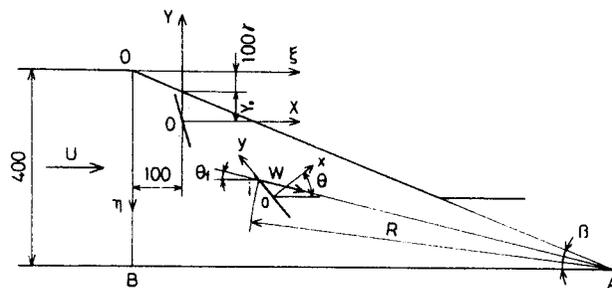


図6.12 座標系

上面を原点(0)とするとき、 η 座標で表わし、 ξ 方向は水平方向にとる。初期位置の水平方向座標は、実験の場合と一致させ、 $\xi = 100$ (mm)とした。

したがって、ノズル上面と底面のなす角度 β は、

$$\beta = \tan^{-1} \gamma \quad (6.62)$$

となり、流れの方向はA点を向いているので、線状体の任意の位置 i における流速 W および流れの方向 θ_f は、この位置とA点の距離を R 、ノズル入口部の平均流速を U とすると、

$$\left. \begin{aligned} W &= 400U / \beta R \\ \theta_f &= \tan^{-1} [(400 - \eta) / (400/\gamma - \xi)] \end{aligned} \right\} \quad (6.63)$$

となる。

いっぽう、任意の位置 i の座標は、

$$\left. \begin{aligned} \xi &= X - \eta \sin \theta + 100 \\ \eta &= -(Y + \gamma \cos \theta) + Y_0 + 100\gamma \end{aligned} \right\} \quad (6.64)$$

となり、 R は(6.64)式の関係を考慮すると、

$$R = \left[(400/\gamma - 100 - X + \eta \sin \theta)^2 + (400 - Y_0 - 100\gamma + Y + \gamma \cos \theta)^2 \right]^{1/2} \quad (6.65)$$

となる。

以上のようにして、任意の位置での流速 W が計算できるので、つぎに、 U_1 、 V および dU_1/dt 、 dU_2/dt 、 dV/dt を計算する方法について述べる。

U_1 、 V は、線状体を n 個の微小要素に分け、(6.15)式を数値

積分することにより次式から求める。

$$\left. \begin{aligned} U_1 &= \sum_{i=1}^n W_i \cos(\theta + \theta_{fi}) \Delta l / l \\ V &= - [W_{e1} \sin(\theta + \theta_{fe1}) + W_{e2} \sin(\theta + \theta_{fe2})] / 2 \end{aligned} \right\} (6.66)$$

ただし、 θ_{fe1} 、 θ_{fe2} は、 $Y = -l/2$ 、 $Y = l/2$ における流れの方向である。

また、(6.15)式から、

$$\left. \begin{aligned} dU_1/dt &= \int_{-l/2}^{l/2} \left[dW/dt \cdot \cos(\theta + \theta_f) \right. \\ &\quad \left. - (\gamma + d\theta_f/dt) W \sin(\theta + \theta_f) \right] dY / l \\ dU_2/dt &= (12/l^3) \int_{-l/2}^{l/2} \left[dW/dt \cdot \cos(\theta + \theta_f) \right. \\ &\quad \left. - (\gamma + d\theta_f/dt) W \sin(\theta + \theta_f) \right] Y dY \end{aligned} \right\} (6.67)$$

であり、(6.63)式、(6.65)式から

$$\left. \begin{aligned} dW_i/dt &= -400U(dR_i/dt) / \beta R_i^2 \\ d\theta_{fi}/dt &= \left[(U \sin \theta + V \cos \theta - \gamma J_i \sin \theta)(400/\gamma - 100 - X + J_i \sin \theta) \right. \\ &\quad \left. + (U \cos \theta - V \sin \theta - \gamma J_i \cos \theta)(400 - Y_0 - 100\gamma + Y + J_i \cos \theta) \right] \\ &\quad \cdot \cos^2 \theta_{fi} / (400/\gamma - 100 - X + J_i \sin \theta)^2 \\ dR_i/dt &= - \left[(U \cos \theta - V \sin \theta - \gamma J_i \cos \theta)(400/\gamma - 100 - X + J_i \sin \theta) \right. \\ &\quad \left. - (U \sin \theta + V \cos \theta - \gamma J_i \sin \theta)(400 - Y_0 - 100\gamma + Y + J_i \cos \theta) \right] \\ &\quad / R_i \end{aligned} \right\} (6.68)$$

となる。ただし、(6.68)式は(6.17)式の関係を用いて求めた。

したがって、(6.67)式で表わされる dU_1/dt 、 dU_2/dt は U_1 、 V を計算するときと同じく、線状体を n 個の微小要素に分け、次式から求める。

$$\left. \begin{aligned}
 dU_1/dt &= \sum_{i=1}^n \left[dW_i/dt \cdot \cos(\theta + \theta_{fi}) \right. \\
 &\quad \left. - (\gamma + d\theta_i/dt) W_i \sin(\theta + \theta_{fi}) \right] \cdot \Delta l / l \\
 dU_2/dt &= (1/2l^3) \sum_{i=1}^n \left[dW_i/dt \cdot \cos(\theta + \theta_{fi}) \right. \\
 &\quad \left. - (\gamma + d\theta_i/dt) W_i \sin(\theta + \theta_{fi}) \right] J_i \cdot \Delta l
 \end{aligned} \right\} (6.69)$$

同様にして, dV/dt は,

$$\begin{aligned}
 dV/dt &= - \left[dW_{e1}/dt \cdot \sin(\theta + \theta_{fe1}) + dW_{e2}/dt \cdot \sin(\theta + \theta_{fe2}) \right. \\
 &\quad + (\gamma + d\theta_{e1}/dt) W_{e1} \cdot \cos(\theta + \theta_{fe1}) \\
 &\quad \left. + (\gamma + d\theta_{e2}/dt) W_{e2} \cdot \cos(\theta + \theta_{fe2}) \right] / 2
 \end{aligned} \quad (6.70)$$

から求める。

このようにして, U_1, V および $dU_1/dt, dU_2/dt, dV/dt$ を求め, 運動方程式(6.16)式と重心の速度を表わす(6.17)式を連立させて線状体の運動状態を数値計算した。

計算条件を表6.2に示す。試料はすべて $d=0.569$ (mm) の NO. 1 試料とし, まず, ノズルの傾き $\gamma=1/3$, 初期角度 $\alpha=1^\circ$ で長さ l およびノズル入口部平均流速 U を変化させて計算をおこなった。つぎに, 線状体の落下実験から, 矩形管内流れ中での場合に比べて初期角度が運動特性に大きな影響をおよぼすという結果が得られているので, これを調べるため $U=60$ (mm/s),

表6.2 試料条件および初期条件(ノズル内流れ中)

試料 番号	線状体直径 d (mm)	線状体比重 ρ_s (g/cm ³)	線状体 長さ l (mm)	流速 U (mm/s)	ノズル の傾き γ	初期角度 α (°)	初速度		
							u_s (mm/s)	v_s (mm/s)	r_s (rad/s)
1	0.569	1.627	30	20 40	1/3	1	-1.0×10^{-2}	-1.0×10^{-2}	1.0×10^{-4}
				60 80					
			15	60		90			
			60	60		30			
1/4									
1/2									

$\delta = 1/3$, $l = 30$ (mm) に対し, $\alpha = 10^\circ, 20^\circ, 30^\circ$ で計算をおこない, また, 矩形管内流れのように流れの方向が水平方向である場合, 姿勢が水平になった後では, 線状体は水平な姿勢を保ったまま運動を続けるが, ノズル内流れのように流れの方向が水平方向に対し傾いている場合, 水平な姿勢を保つことができず姿勢は変化すると考えられるので, これを確かめるため, $U = 60$ (mm/s), $\delta = 1/3$, $l = 15, 30, 45, 60$ (mm) に対し, $\alpha = 90^\circ$ で計算をおこなった。

さらに, 実験では調べることができなかったノズルの傾きの影響を調べるため, $U = 60$ (mm/s), $l = 30$ (mm) に対し, $\delta = 1/4, 1/2$ で計算し, $\delta = 1/3$ の結果とあわせてノズル傾きの影響を考察する。ただし, この場合 $\alpha = 1^\circ$ である。なお, 初期位置での線状体重心とノズル上面の鉛直方向距離は, $l = 60$ (mm) の場合にも線状体がすべて流れ中に入るように $Y_0 = 30$ (mm) にした。

以上, 6.3.1 項で述べた方法で X , Y および N を求め, 本項の (1)~(4) の方法に従い, Runge-Kutta-Gill の方法で数値計算をおこない, 4 種類の流れ中における線状体の運動特性を調べることができた。なお, 数値計算の際必要になる水の物性値は, 実験時の平均水温 18 ($^\circ\text{C}$) に対する値 $\rho = 1.018 \times 10^{-7}$ (g^2/mm^4), $\nu = 1.058$ (mm^2/s) を採用した。

以下では, 計算結果について報告するが, その際, 第4章, 第5章の実験結果とあわせて考察をおこない, 重心の軌跡, 速度, 加速度および姿勢, 角速度などの運動特性を明らかにする。なお, 数値計算では Y , \dot{Y} は負となるが, 鉛直方向下向きを正の向きとして図示するもので, 図中では正の値になる。

6.4 一様流れ中における線状体の運動

この節では、流速 $W = 60$ (mm/s), 長さ $l = 15, 30, 45, 60$ (mm) および $l = 30$ (mm), $W = 20, 40, 60, 80$ (mm/s) に対する計算結果について述べると同時に、静止流体中 ($W = 0$) での計算結果と比較し、一様流れ中での線状体の運動特性を明らかにする。

6.4.1 線状体の落下軌跡

図6.13に $l = 30$ (mm), $W = 0 \sim 80$ (mm/s) の落下軌跡を示す。図中の線状体の時間間隔は、 $\Delta t = 0.4$ (s) である。

静止流体中での場合、落下開始直後の領域では水平方向の加速は鉛直方向への加速に比べて非常に小さく、線状体はほとんど鉛直方向に運動し始めるが、姿勢が徐々に水平方向に回転するにつれて、水平方向速度 X も徐々に増大し始める。そして、重心の軌跡は変曲点をもつ ($X = 83$ (mm), $Y = 353$ (mm) 付近) 曲線となり、最終的に、姿勢は水平方向に漸近し、しかも、線状体は水平方向にはほとんど移動しなくなり、鉛直方向に一定速度で落下する。

これに対し、一様流れ中での場合、線状体は運動を開始すると同時に水平方向にも流体から抗力を受けるため、水平方向にも急激に加速される。したがって、静止流体中での場合と異なり、鉛直方向に対してある角度をもって運動し始める。流速が大きいほど、水平方向の急激な加速は大きく、鉛直方向の急激な加速は小さいので、この角度は大きくなる。

重心の軌跡は、 $d^2Y/dX^2 = 0$, ちなわち、

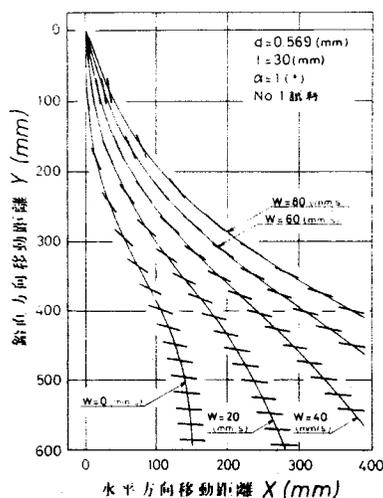


図6.13 落下軌跡におよぼす流速の影響

$$\dot{Y}/\dot{X} = \ddot{Y}/\ddot{X}$$

(6.77)

が成立するとき変曲点をもつ。したがって、軌跡の変曲点は、重心の運動方向と加速度の方向が一致する点である。

一様流れ中での場合、線状体は鉛直方向に対してある角度をもつて運動し始めるが、運動開始直後の領域では、水平方向加速度 \dot{X} の減少に比べて鉛直方向加速度 \dot{Y} の減少の方が小さいので、加速度の方向はいったん時計回りに回転し始め、運動方向の回転に比べて加速度の方向の回転の方が早いので運動方向も鉛直方向に近づく。しかし、 \dot{Y} は同程度の割合でしばらく減少するのに対し、運動開始後間もなく \dot{X} の減少の割合は徐々に低下する(図6.22, 6.23参照)ので、加速度の方向は反時計回りに回転し、運動方向と一致する。この場合、方向のみならず両者の向きも一致するため、軌跡の接線勾配 dY/dX は極大になる。

この変曲点の生ずる位置は、流速が大きいほど大きいが、 $U = 80$ (mm/s) の場合でも $Y = 30$ (mm) 付近である。

その後、 \dot{X} の減少の割合は急激に低下するので、加速度の方向は急激に反時計回りに回転し、 dY/dX は減少する。さらに、 \dot{Y} は減少して負の値になるので、加速度の方向は反時計回りに回転し続け、 dY/dX は減少し続けるが、やがて、 \dot{X} も減少して負の値になり、重心の運動方向と加速度の方向が一致する。ただし、この変曲点では、前回の場合と異なり両者の向きは逆になるので、 dY/dX は最小になる。その後も、加速度の方向は回転し続け、線状体の姿勢が水平方向に漸近するにつれて、水平方向に近づく。また、加速度の値は0に近づく。したがって、最終的に、線状体は鉛直方向には静止流体中での場合と同一の一定速度で落下し、水平方向には流速と同一速度で移動する。

ここで、 dY/dX の最小値およびそのときの姿勢 θ と位置 X, Y におよぼす流速と長さの影響を調べるため表6.3にこれらの値を示す。

静止流体中での場合、 $\theta=60^\circ$ 程度で dY/dX は最小になり、

そのときの θ の値および dY/dX の値は、長さが小さいほど大きい傾向にあるが、その差はあつかである。 θ と X の関係 (図 6.20) および θ と Y の関係 (図 6.21) から、 X 、 Y におよぼす長さの影響は θ の増加に伴ない小さくなり、 X に関しては θ が約 65° 以上の領域、 Y に関しては約 60° 以上の領域

では長さの影響をほとんど受けないことが分かり、したがって、 $\theta > 60^\circ$ 程度の領域では、姿勢が同じであれば長さにかかわらず重心の運動方向はほとんど一致することからも、 dY/dX の最小値およびそのときの θ の値におよぼす長さの影響があつかであることが分かる。しかし、長さが大きいほど、線状体が回転するのにかかる時間は長くなるので、変曲点をもつまでに X 方向および Y 方向に移動する距離は大きくなる。

以上のことは、一様流れ中での場合 ($W=60$ (mm/s)) にも現われているが、静止流体中での場合と比べて dY/dX および θ の値におよぼす長さの影響は、いっそう小さくなる。これは、変曲点をもつときの θ の値が静止流体中での場合より大きいので、 X 、 Y におよぼす長さの影響がいっそう小さくなることと、さらに、 X には長さが異なるとあつかな差が見られるが、この差は静止流体中での場合と同じであるが、 X の値は一様流れ中での場合の方が大きいので、この差の影響は小さいことの2つの原因によると考えられる。

いっぽう、流れの方向は水平方向であるので、 $W=0$ と $W=80$ (mm/s) のときの Y の変化を比較すると、 θ が約 15° 以下の領域

表 6.3 軌跡の変曲点における接線勾配、姿勢とその位置

線状体長さ l (mm)	流速 W (mm/s)	接線勾配		X (mm)	Y (mm)
		dX/dY	θ ($^\circ$)		
15	0	1.934	61.6	20.4	101.8
	60	0.738	73.8	74.7	98.0
30	0	1.908	60.2	82.9	352.8
	20	1.288	65.6	143.5	358.4
	40	0.948	69.9	213.7	373.5
	60	0.739	73.3	291.7	388.2
	80	0.600	75.9	376.9	401.8
45	0	1.894	59.9	188.4	764.9
	60	0.739	73.1	650.5	874.9
60	0	1.885	59.9	337.4	1337.3
	60	0.739	73.1	1151.1	1558.2

d=0.569 (mm), No.1 試料

で差が見られるだけであり、これ以上の領域では流速の影響は見られない。(図6.17参照)ところが、 \dot{X} は θ の全領域で流速が大きいかほど大きくなる。(図6.16参照)したがって、流速が大きいかほど、同一姿勢に対する重心の運動方向はより水平に近くなる。さらに、 θ と \dot{X} の関係(図6.22)および θ と \dot{Y} の関係(図6.23)から、 \dot{X} 、 \dot{Y} ともに流速の影響が見られるのは θ が約 15° 以下の領域だけである(ただし、これらの図には流速の影響が見られる領域しか示していない。)ので、これ以上の領域では、同一姿勢に対する加速度の方向は流速にかかわらず一致することが分かる。また、前述したように、加速度の方向は θ の増加に伴ない反時計回りに回転する。以上のことから、運動方向と加速度の方向が一致するときの θ の値は、流速が大きいかほど大きくなり、変曲点での dY/dX の値は小さくなる。

また、図6.24から、姿勢の変化におよぼす流速の影響はわかかであるので、変曲点をもつときの θ の値および重心の速度におよぼす流速の影響を考慮すると、変曲点をもつまでに X 方向および Y 方向に移動する距離は、流速が大きいかほど大きく、さらに、流速による差は X 方向の移動距離の方が大きくなることが分かる。

つぎに、図6.13において、線状体の姿勢と重心の運動方向に着目すると、静止流体中での場合、運動方向と鉛直線のなす角度は、つねに θ より小さく、線状体に対する相対的な流れにより θ を増加させる向きに回転モーメントが作用している。いっぽう、一様流れ中での場合、運動開始と同時に水平方向にも加速されるため、しばらくの間、運動方向と鉛直線のなす角度は θ より大きくなる。また、この状態は流速が大きいかほど長時間にわたって続く。しかし、この状態においても線状体に対する相対的な流れの方向と鉛直線のなす角度は θ より小さく、線状体には θ を増大させる向きに回転モーメントが作用する。なお、運動方向が姿勢と一致するとき、すなわち、重心速度の線状体の

軸に直角な方向の成分 U の値が正から負に変わるときの θ の値は、 $W=20, 40, 60, 80$ (mm/s) に対し、 $\theta=11.6^\circ, 28.9^\circ, 43.2^\circ, 52.9^\circ$ である。

つぎに、姿勢の変化に対して重心の移動距離がどのように変化するかを調べるため、 $l=30$ (mm)、 $W=0\sim 80$ (mm/s)の θ と X の関係および θ と Y の関係を図6.14、6.15に示す。

図6.14において、静止流体中での場合、線状体はほとんど鉛直方向に運動し始めるので、 θ と X の関係は下に凸の曲線で始まり、 X は θ の増加に伴ない単調に増大する。そして、 θ が 90° に近づくと X および角速度 γ はともに0に近づき、しかも、0に近づくと割合が同程度であるため、 θ と X の関係はほぼ直線となる。

これに対し、一様流れ中での場合、線状体は運動開始と同時に X 方向へも急激に加速されるので、 θ と X の関係は上に凸の曲線で始まり、 $\theta < 10^\circ$ の領域で変曲点をもち、その後、下に凸の曲線になって、 X は θ の増加に伴ない単調に増大する。なお、流速が大きいほど運動開始直後の X 方向への加速が大きいため、変曲点をもつときの θ の値は大きくなる。また、 θ が 90° に

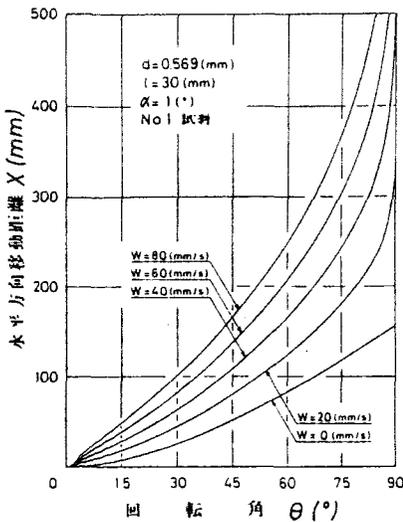


図6.14 水平方向移動距離に
およぼす流速の影響

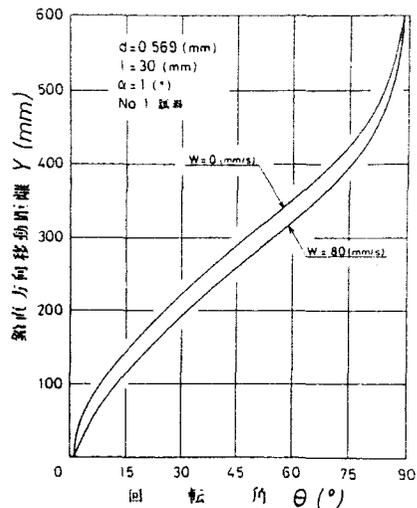


図6.15 鉛直方向移動距離に
およぼす流速の影響

近づくと γ は0に近づくと、 X は流速に近づくとため、曲線の接線勾配 $dx/d\theta$ を表わす(6.72)式を考慮すると、 X は $\theta=90^\circ$ の線に漸近することが分かる。

いっぽう、図6.15において、静止流体中および一様流れ中にかかわらず θ と γ の関係は上に凸の曲線で始まり、 $\theta=51^\circ$ 程度で変曲点をもち、その後下に凸の曲線になり、 θ が 90° に近づくと γ は0に近づくと、 γ は一定値に近づくとため、 γ は $\theta=90^\circ$ の線に漸近する。なお、この図には $W=0$ と $W=80$ (mm/s)の曲線しか示していないが、 $W=20, 40, 60$ (mm/s)の曲線は、 $W=0$ と $W=80$ (mm/s)の曲線の間順番に並ぶ。

接線勾配 $dx/d\theta, dy/d\theta$ は、

$$\left. \begin{aligned} dx/d\theta &= \dot{X}/r \\ dy/d\theta &= \dot{Y}/r \end{aligned} \right\} \quad (6.72)$$

となる。

\dot{Y} の変化を表わす図6.17および γ の変化を表わす図6.25から、 \dot{Y} および γ に流速の影響が現われるのは $\theta < 15^\circ$ 程度の領域であり、これ以上の領域では、 \dot{Y} および γ の変化は流速にかかわらず同一曲線で表わされる。したがって、(6.72)式を考慮すると $dy/d\theta$ が流速の影響を受けるのは $\theta < 15^\circ$ の領域だけであることが分かる。すなわち、 θ と γ の関係を表わす曲線を縦軸に沿って平行移動すると、 $\theta > 15^\circ$ 程度の領域では、流速にかかわらず静止流体中での曲線に重なる。

また、図6.14, 6.15から、線状体が回転するのに要する水平方向の移動距離は、流速が大きいほど大きく、鉛直方向の移動距離は逆に、流速が大きいほど小さいことが分かる。

6.4.2 線状体重心の速度および加速度

流速が重心の速度の変化におよぼす影響を表わす図6.16, 6.17において, 静止流体中での場合, 線状体は運動開始後, 水平方向に除々に加速され, この加速状態は $\theta = 43^\circ$ 程度まで続き, その後, 減速されて姿勢が水平方向に近づくとき線状体には水平方向の外力は作用しなくなり, $\theta = 90^\circ$ で \dot{X} は 0 となる。

これに対し, 一様流れ中での場合, 運動開始と同時に線状体は水平方向にも流体から抗力を受けるため, 水平方向にも急激に加速され, その後, 除々に加速される状態が $\theta = 43^\circ$ 程度まで続く。そして, 減速されて姿勢が水平方向に近づくとき線状体には水平方向の外力は作用しなくなり, $\theta = 90^\circ$ で \dot{X} は W と一致する。また, 静止流体中での重心の水平方向速度を \dot{X}_s で表わすと, 一様流れ中での水平方向速度は, $\theta > 15^\circ$ 程度の領域では,

$$\dot{X} = \dot{X}_s + W \quad (6.73)$$

で表わされることが分かる。

これは, \dot{X} および γ の変化を表わす図6.22, 6.25 から, $\theta > 15^\circ$ 程度の領域では, θ と \dot{X} の関係および θ と γ の関係は流速

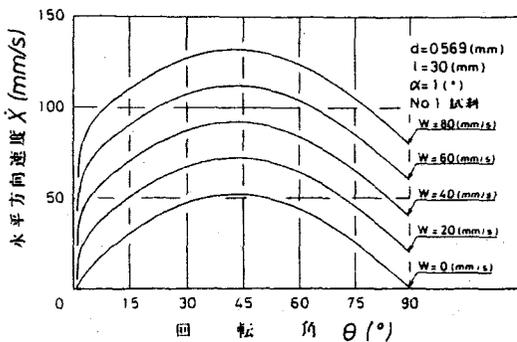


図6.16 水平方向速度におよぼす流速の影響

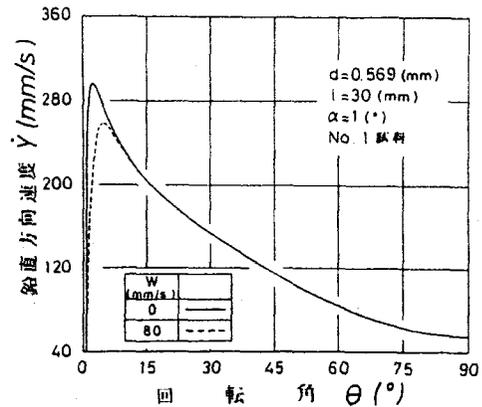


図6.17 鉛直方向速度におよぼす流速の影響

にかかわらず同一曲線で表わされ、 $dX/d\theta = \dot{X}/r$ を考慮すると、一様流れ中での \dot{X} に対し(6.73)式が成立することが分かる。逆にいえば、一様流れ中で線状体が運動する場合、流体に対する線状体の水平方向の相対速度が、静止流体中での水平方向速度に等しくなるまでの領域では、(6.73)式が成立しない。したがって、 \dot{X} 、 \dot{Y} の最大値とそのときの θ の値を示す表6.4から、流速にかかわらず θ の値は一致し、 \dot{X} の最大値は(6.73)式の関係で表わされることが分かる。

いっぽう、線状体は運動開始と同時に、重力と浮力の差による外力の作用を受けて鉛直方向に急激に加速される。

図6.17に示す $l=30(\text{mm})$ の場合、 $W \leq 80(\text{mm/s})$ の範囲内では、線状体が鉛直方向に加速される領域は $\theta < 5^\circ$ 程度であり、その後、抗力が増大するため、 θ の増加に伴ない \dot{Y} は単調に減少する。そして、姿勢が水平方向に近づくにつれて鉛直方向の外力は釣合うので、 \dot{Y} は一定値となる。なお、図6.17には $W=0$ と $W=80(\text{mm/s})$ の曲線しか示していないが、この曲線の間には $W=20, 40, 60(\text{mm/s})$ の曲線は順番に並ぶ。

また、 \dot{Y} の変化を表わす図6.23から、 θ と \dot{Y} の関係は、 $\theta < 15^\circ$ 程度の領域では流速の影響を受けるが、これ以上の領域では流速にかかわらず同一曲線で表わされ、さらに、上述したように、 θ と \dot{Y} の関係にも同様のことがいえるので、 $d\dot{Y}/d\theta = \ddot{Y}/r$ を考慮すると、 θ と \dot{Y} の関係に流速の影響が現われる領域は $\theta < 15^\circ$ 程度であり、これ以上の領域では、流速にかかわらず θ と \dot{Y} の関係は同一曲線で表わされる。そして、流速の影響は、

表6.4 重心速度の最大値とそのときの回転角の値

線状体長さ l (mm)	流速 W (mm/s)	水平方向速度の最大値		鉛直方向速度の最大値	
		\dot{X}_{max} (mm/s)	θ ($^\circ$)	\dot{Y}_{max} (mm/s)	θ ($^\circ$)
15	0	49.49	44.9	242.3	3.32
	60	109.48	45.3	198.6	9.64
	80	52.14	43.1	297.0	2.36
30	0	72.14	42.9	272.1	3.62
	40	92.14	43.0	264.8	4.27
	60	112.14	43.0	261.0	4.51
	80	132.14	43.1	258.6	4.66
45	0	53.32	42.4	329.4	1.88
	60	113.32	42.2	301.0	3.06
60	0	53.99	41.9	351.6	1.67
	60	113.99	41.8	329.3	2.33

$d=0.569(\text{mm})$, No.1 試験機

流速が大きいほど \dot{Y} の値は小さく、また、表6.4から姿勢がより水平に近い状態になるまで加速されるという点である。

ここで、流速の影響が現われる $\theta < 15^\circ$ 程度の領域での線状体の運動について考える。

流速にかかわらず線状体の軸に直角な方向の速度 u および軸方向速度 v が同じである状態を考えると、(6.24)式で表わされる線状体に対する流体の相対速度の軸方向成分 V_r は、 v の値が負であるので W が大きいほど小さい。いっぽう、(6.21)式で表わされる相対速度の軸に直角な方向成分 V_t は、 W が大きいほど大きい。また、運動開始後の θ の小さい領域では、流速の軸方向成分 $W \sin \theta$ は軸に直角な方向成分 $W \cos \theta$ に比べて小さいので、流速が異なることによる V_r の差は、 V_t の差に比べて小さくなる。したがって、流速が大きいほど、 V_r を代表速度とする Re (6.23式)を用いて計算される Nu が大きく、さらに、流速による Nu の差は V_r の差より大きくなるので、 V_r が小さいにもかかわらず(6.25)式で表わされる線状体の端面以外の部分が流体から軸方向に受ける抗力 D_y は大きくなる。 D_y の向きは正であり、線状体の軸方向に作用する外力 Y (6.19式)は負であるので、流速が大きいほど軸方向の負の向きの加速度の絶対値は小さくなるため、同一時間経過後の v の絶対値は小さくなる。

いっぽう、流速が大きいほど V_t は大きく、線状体が流体から軸に直角な方向に受ける抗力 D_x は大きい。しかも、 D_x は正の向きに作用するので、軸に直角な方向の加速度は流速が大きいほど大きくなるため、同一時間経過後の u の値は大きくなる。

したがって、流速が大きいほど $u (> 0)$ は大きく、 $v (< 0)$ の絶対値は小さいので、 \dot{X} 、 \dot{Y} を表わす(6.17)式を考慮すると、 $\dot{X} (> 0)$ は大きく、 $\dot{Y} (< 0)$ の絶対値は小さいことが分かる。

つぎに、長さが重心の速度におよぼす影響を表わす図6.18、6.19 (一様流れ中、 $W = 60 \text{ (mm/s)}$)と図6.20、6.21 (静止流体中)において、一様流れ中での場合にも、静止流体中での場

合にも、 $\theta < 65^\circ$ 程度の領域では \dot{X} は長さの大きいほど大きいが、これ以上の領域では長さの小さい方がわずかに大きくなる。しかし、長さの影響は、 $\theta < 65^\circ$ 程度の領域での場合と比較して無視しうるほど小さい。いっぽう、 \dot{Y} は $\theta < 60^\circ$ 程度の領域では長さの大きいほど大きいが、これ以上の領域では長さの影響を受けない。

また、表6.4から、長さの小さいほど、姿勢がより水平に近い状態になるまで線状体は水平方向および鉛直方向に加速されることが分かる。

ここで、静止流体中での場合と一様流れ中での場合を比較すると、表6.4から、両場合の \dot{Y} の最大値およびそのときの θ の値の差は、長さの小さいほど大きいことが分かり、図6.18～図6.21から、 \dot{X} に関しては(6.73)式の関係が成立つまでの θ の領域、 \dot{Y} に関しては流速の影響が現われる θ の領域はともに長さの小さいほど広いことが分かる。すなわち、長さの小さいほど流速の影響を受け易い。

最後に、重心の加速度がどのように変化するかを調べる。流速の影響を表わす図6.22、6.23には、影響をより明確に表わすため、影響が現われる領域における \dot{X} 、 \dot{Y} の変化状態を示

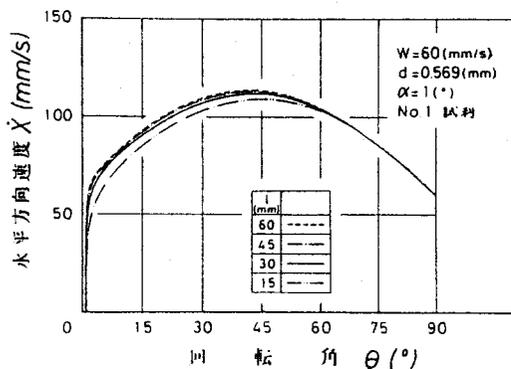


図6.18 水平方向速度におよぼす長さの影響

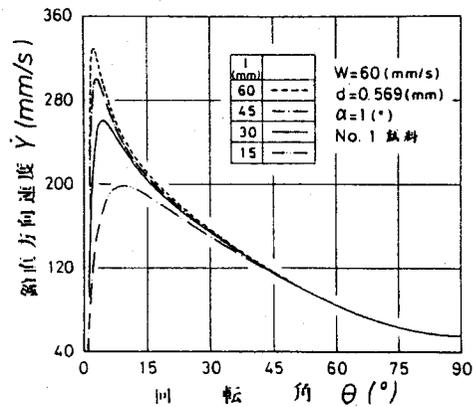


図6.19 鉛直方向速度におよぼす長さの影響

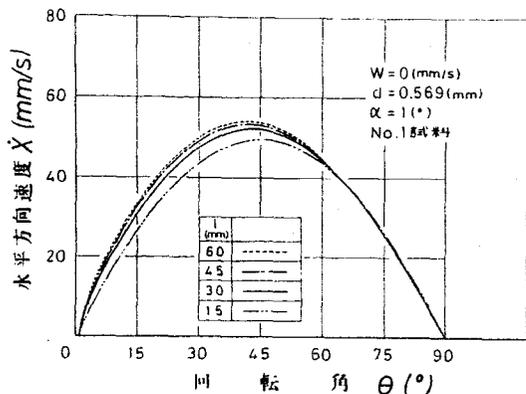


図6.20 水平方向速度におよぼす長さの影響

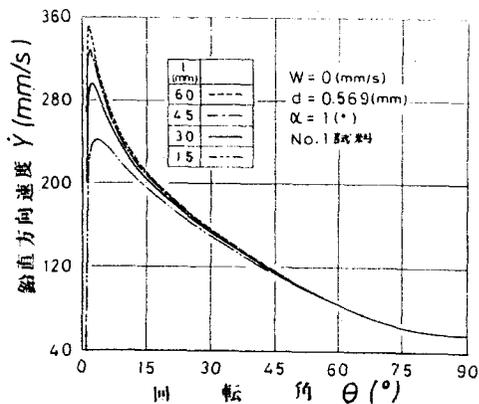


図6.21 鉛直方向速度におよぼす長さの影響

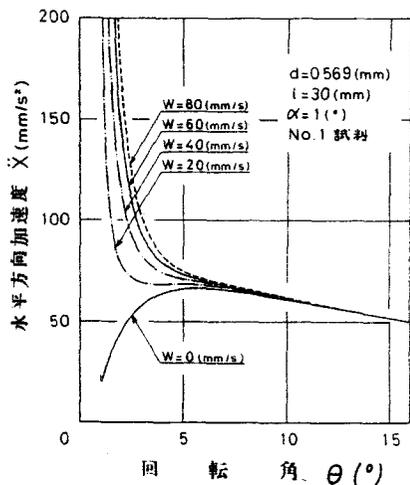


図6.22 水平方向加速度におよぼす流速の影響

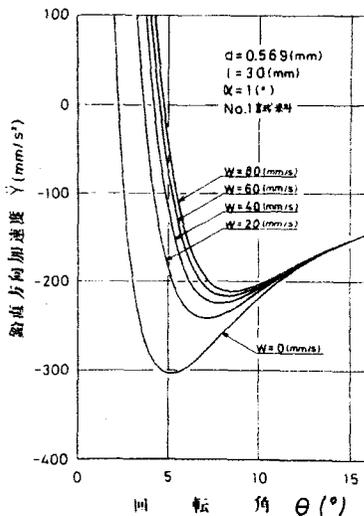


図6.23 鉛直方向加速度におよぼす流速の影響

している。

静止流体中での場合，線状体は鉛直方向に対して 7° 傾いているので，運動開始時に主に重力と浮力の差にもとづく外力により，水平方向に約 $23 \text{ (mm/s}^2\text{)}$ の加速度をもち， \ddot{X} はいったん減少し，その後，増大して $\theta=6^\circ$ 程度で最大となる。そして，ふたたび減少して $\theta=43^\circ$ 程度で， \ddot{X} は正の値から負の値へ移

り ($\ddot{X}=0$ のときの θ の値は、 \dot{X} が最大になるときの θ の値である。), $\theta=65^\circ$ 程度で最小となり $\theta=90^\circ$ でふたたび0になる。

これに対し、一様流れ中での場合、運動開始と同時に線状体は水平方向にも流体から抗力を受けるため、水平方向にも急激に加速される。このため、相対速度の軸に直角な方向成分 U_r は急激に小さくなり、軸に直角な方向の加速度 du/dt は急激に減少する。また、軸方向の速度 v の絶対値も急激に増大するため、軸方向の加速度 dv/dt (<0)の絶対値も急激に減少する。したがって、加速度を表わす(6.18)式を考慮すると、 \ddot{X} は運動開始時から急激に減少することが分かる。やがて、上出した値はゆっくり変化するようになるので、 \ddot{X} も除々に減少して静止流体中での曲線に漸近し、 $\theta > 15^\circ$ 程度の領域では、流速にかかわらず \ddot{X} の変化は同一曲線で表わされる。なお、 $W \leq 40$ (mm/s)の場合、 \ddot{X} は運動開始時から減少し続けて静止流体中での曲線に近づくが、 $W=20$ (mm/s)の場合、急激に減少した後 \ddot{X} はいったん極大値をもち、その後減少して $W=0$ の曲線に近づく現象が見られる。

いっぽう、 \ddot{Y} も、 \ddot{X} に関して述べたと同じ原因により、運動開始時から急激に減少して、 $\theta < 5^\circ$ の領域で正の値から負の値へ移り ($\ddot{Y}=0$ のときの θ の値は、 \dot{Y} が最大になるときの θ の値である。), 最小値をもち、増大して $\theta=90^\circ$ でふたたび0になる。また、 θ の小さい領域では、 \ddot{Y} の値は流速により異なるけれども、その変化の様子は流速にかかわらず同じになり、 θ が増加するにつれて一様流れ中での曲線は、静止流体中での曲線に漸近し、 $\theta > 15^\circ$ 程度の領域では、流速にかかわらず \ddot{Y} の変化は同一曲線で表わされる。なお、図6.22, 6.23から、流速が小さいほど、 θ のより小さい領域で $W=0$ の曲線に近づくことが分かる。

ここで、表6.5に \ddot{X} , \ddot{Y} の最小値およびそのときの θ の値を示す。

上述の結果からも分かるように、 \ddot{X} の最小値およびそのときの θ の値は、流速にかかわらず一致し、 \ddot{Y} の最小値の絶対値は流速が大きいのほど小さく、 θ の値は大きくなる。また、長さが小さいほど、 \ddot{X} 、 \ddot{Y} の最小値の絶対値および θ の値は大きい。すなわち、長さが小さいほど加速および減速が大きい。

表6.5 重心加速度の最小値とそのときの回転角の値

線状体長さ l (mm)	流速 W (mm/s)	水平方向加速度の最小値 \ddot{X}_{min} (mm/s ²)	θ (°)	鉛直方向加速度の最小値 \ddot{Y}_{min} (mm/s ²)	θ (°)
15	0	-72.53	67.8	-525.2	11.74
	60	-72.24	67.9	-365.6	20.56
30	0	-19.05	65.5	-303.9	5.29
	20	-19.03	65.4	-241.3	6.94
	40	-19.03	65.5	-224.6	7.75
	60	-19.03	65.6	-216.1	8.02
	80	-19.03	65.5	-211.3	8.51
45	0	-8.71	64.8	-208.5	3.60
	60	-8.71	64.7	-163.2	5.04
60	0	-4.99	64.5	-153.5	2.61
	60	-4.99	64.6	-128.2	3.65

$d=0.569$ (mm), No. 1 鋼材

6.4.3 線状体の姿勢および角速度

流速が線状体の姿勢の変化におよぼす影響を表わす図6.24, 6.25において、一様流れ中での場合にも、静止流体中での場合にも、 θ の変化は、下に凸の曲線で始まり $\theta=16^\circ$ 程度で変曲点をもち、 $\theta=90^\circ$ に漸近するような曲線になる。すなわち、角速度とは、 $\theta=16^\circ$ 程度まで加速されるが、 γ の増大に伴ない線状体の回転を押える向きに作用する回転モーメント N が増大するため、これ以上の領域では減速され、最終的に、線状体の姿勢は

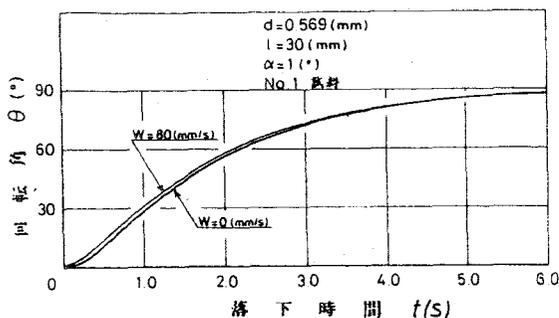


図6.24 姿勢におよぼす流速の影響

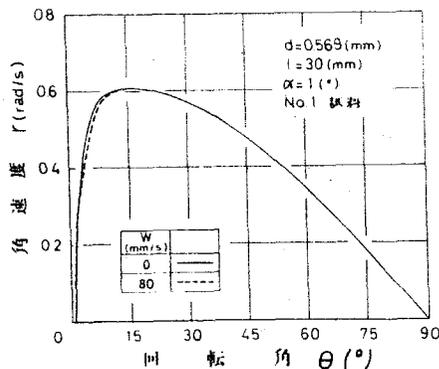


図6.25 角速度におよぼす流速の影響

水平方向に漸近する。姿勢が水平方向に近づくと線状体に作用する外力は釣合うようになり、流体に対する線状体の相対速度の軸方向成分 $v + W \sin \theta$ および回転モーメント N は 0 に近づくので、運動方程式 (6.32) 式の第3式を考慮すると、線状体は回転運動しなくなり、もっとも安定した水平な姿勢を保ち続ける。なお、図 6.24, 6.25 には $W=0$ と $W=80$ (mm/s) の曲線しか示していないが、この曲線の間には $W=20, 40, 60$ (mm/s) の曲線は順番に並ぶ。

ここで、一様流れ中での場合と静止流体中での場合を比較すると、とくに運動開始直後の領域における γ の変化に差が現われている。図 6.25 において、静止流体中での場合、線状体の軸に直角な方向の速度 u (< 0) の絶対値は除々に増大し続け、軸方向速度 v (< 0) の絶対値は急激に増大するので、この領域では γ は単調に増大する。いっぽう、一様流れ中での場合、運動開始と同時に水平方向にも急激に加速され、 $W=80$ (mm/s) のとき u (> 0) は $\theta=2.5^\circ$ 程度で最大となり、その後減少する。したがって、運動方程式 (6.32) 式において、流体に対する線状体の相対速度の軸に直角な方向成分 $u - W \cos \theta$ (< 0) の絶対値は、運動開始と同時に急激に減少して $\theta=2.5^\circ$ 程度で最小となり、その後増大し、また、相対速度の軸方向成分 $v + W \sin \theta$ (< 0) の絶対値は、静止流体中での場合と同様に、急激に増大するので、 γ は単調に増大することなく、 $\theta=2.5^\circ$ 程度で変曲点をもつ。

運動開始時においては、 $W=80$ (mm/s) での $u - W \cos \theta$ の絶対値は、 $W=0$ での u の絶対値より大きい。そのため、 γ の値は $W=80$ (mm/s) の方が大きい。しかし、上述したように $u - W \cos \theta$ の絶対値は急激に減少するので、角加速度 $d\gamma/dt$ は減少し、 $\theta > 2.5^\circ$ 程度の領域では、 $W=0$ の方が γ の値は大きくなる。しかし、その後 $u - W \cos \theta$ の絶対値は増大するので、 $W=80$ (mm/s) の θ と γ の関係を表わす曲線は、 $W=0$ の曲線に近づき、 $\theta > 15^\circ$

程度の領域では、 θ と γ の関係は同一曲線で表わされる。

$\theta > 15^\circ$ 程度の領域における線状体の回転運動が流速にかかわらず同じになることについてはつぎのように考えればよい。

前項で述べたように、 $\theta > 15^\circ$ 程度の領域では、 \dot{X} に関しては(6.73)式の関係が成立し、 \dot{Y} は流速の影響を受けない。したがって、重心の速度を表わす(6.17)式から、

$$\left. \begin{aligned} u &= (\dot{X}_s + W) \cos \theta + \dot{Y}_s \sin \theta \\ v &= -(\dot{X}_s + W) \sin \theta + \dot{Y}_s \cos \theta \end{aligned} \right\} \quad (6.74)$$

となり、したがって、

$$\left. \begin{aligned} u - W \cos \theta &= \dot{X}_s \cos \theta + \dot{Y}_s \sin \theta \\ v + W \sin \theta &= -\dot{X}_s \sin \theta + \dot{Y}_s \cos \theta \end{aligned} \right\} \quad (6.75)$$

となる。(6.75)式の右辺はそれぞれ静止流体中での u 、 v である。また、(6.75)式の第1式から、流体の線状体に対する相対速度の軸に直角な方向成分は、流速にかかわらず等しいので、線状体に作用する回転モーメント M も等しくなる。したがって、運動方程式(6.32)式を考慮すると、角加速度 $d\dot{\theta}/dt$ は流速にかかわらず等しいことが分かる。すなわち、流れに対する線状体の相対的な並進運動が流速にかかわらず同じになるので、線状体の回転運動も流速の影響を受けない。

以上のことから、図6.24において、同一落下時間での θ の値が $W=80$ (mm/s)の方が大きくなるのは、運動開始直後の角速度の差によって生じたものであり、 $W=80$ (mm/s)の曲線を横軸(落下時間軸)に沿って平行移動すると、 $\theta > 15^\circ$ 程度の領域では $W=0$ の曲線に重なる。

つぎに、長さか線状体の姿勢の変化におよぼす影響を表わす図6.26(一様流れ中、 $W=60$ (mm/s))と図6.27(静止流

体中)において、一様流れ中での場合にも、静止流体中での場合にも、長さが小さいほど角速度は大きく、線状体が回転するために要する時間は短い。

また、静止流体中での場合と一様流れ中での場合を比較すると、同一落下時間における両場合の θ の値の差は、長さが小さいほど大きく、角速度の変化に流速の影響が現われる θ の領域は、長さが小さいほど広い。さらに、 γ の最大値とそのときの θ の値を示す表6.6から、長さが小さいほど姿勢がより水平に近い状態になるまで、角速度は加速される傾向にあり、両場合の γ の最大値および θ の値の差は大きいことが分かる。すなわち、長さが小さいほど、姿勢の変化は流速の影響を受け易い。

以上の結果をまとめると、線状体が一様流れ中で運動する場合、運動特性に流速の影響が現われるのは $\theta < 15^\circ$ 程度の領域(ただし、 $l=30(\text{mm})$ の場合)だけであり、これ以上の領域では流れに対する線状体の相対

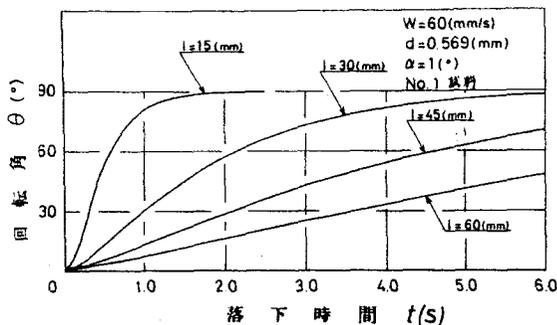


図6.26 姿勢におよぼす長さの影響

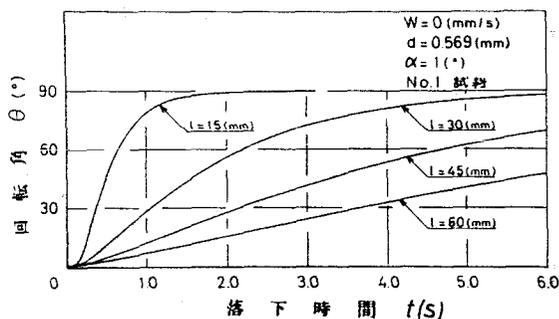


図6.27 姿勢におよぼす長さの影響

表6.6 角速度の最大値とそのときの回転角の値

線状体長さ l (mm)	流速		角速度の最大値	
	W (mm/s)	r (rad/s)	θ ($^\circ$)	
15	0	2.3887	19.7	
	60	2.3151	23.2	
30	0	0.6080	16.0	
	20	0.6074	16.1	
	40	0.6074	16.3	
	60	0.6074	16.2	
45	0	0.6073	16.4	
	60	0.2745	16.1	
60	0	0.2744	16.0	
	60	0.1562	16.0	
		0.1562	15.9	

$d=0.569(\text{mm})$, No.1 紙粉

的な運動は、流速にかかわらず同じになる。このように、相対的な運動が流速の影響を受けないのは、流速が場所的に変化しないことが原因している。また、流速の影響は、長さが小さいほど顕著に現われる。

6.5 矩形管内での十分に発達した流れ中における線状体の運動

この節では、管内平均流速 $U=60$ (mm/s) で長さ $l=15, 30, 45, 60$ (mm), $l=30$ (mm) で $U=20, 40, 60, 80$ (mm/s) および $U=60$ (mm/s), $l=45$ (mm) で初期角度 $\alpha=1^\circ, 10^\circ, 20^\circ$ に対する計算結果について述べると同時に、前節の一樣流れ中での結果と比較し、流速が場所的に変化する（この場合、流速は鉛直方向に沿って変化する。）流れ中で線状体が運動する場合、その運動特性がどのようなようになるかを明らかにする。また、長さ、流速および初期角度が運動特性におよぼす影響を調べる。

6.5.1 線状体の落下軌跡

図6.28に $l=30$ (mm), $U=20\sim 80$ (mm/s) の落下軌跡を示す。図中の線状体の時間間隔は $\Delta t=0.2$ (s) であり、線状体の軸方向に沿って流速が変化するわけで、線状体長さは X, Y 座標のスケールに従って縮小した寸法で表わしてある。なお、鉛直方向の座標は管路の上面を原点にとっているため、初期位置は $Y=30$ (mm) である。また、この図には一点鎖線で流速分布が示してあり、流速の変化に伴って線状体の運動が変化する場合をいっそう分かり易くした。

一樣流れ中での場合と同様に、線状体は運動開始と同時に水平方向にも流体から抗力を受けるため、水平方向にも急激に加速され、鉛直方向に対してある角度をもって運動し始める。また、 U が大きいほど、水平方向の加速は大きく、鉛直方向の加

速は小さいので、この角度は大きくなる。しかし、十分に発達した流れ中での場合、初期位置 ($Y=30(\text{mm})$) での流速は $U^*(=U/U)=1.06$ であり、ほぼ平均流速に等しいが、軸方向に沿って流速が分布し先端部ほど大きいので、運動開始時に線状体に作用する回転モーメント

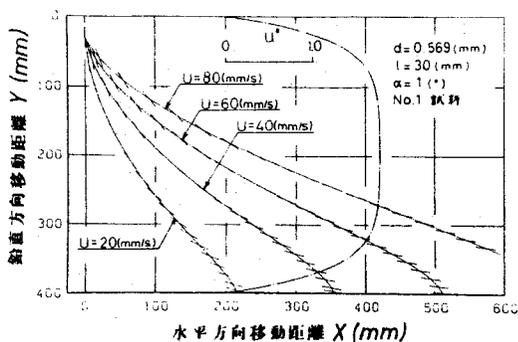


図6.28 落下軌跡におよぼす流速の影響

ト N は、姿勢を水平方向に回転させる向きに働き(図6.50参照)、姿勢の変化は一樣流れ中での場合より大きい。このため、加速度の方向と運動方向およびそれらの向きが一致して軌跡の接線勾配 dY/dX が極大になる点における dY/dX の値およびそれまでに重心が鉛直方向に移動する距離は、十分に発達した流れ中での場合の方が小さく、 $U=80(\text{mm/s})$ の場合でも移動距離は約 $8(\text{mm})$ である。

その後も、加速度の方向は反時計回りに回転し続けるため、運動方向も反時計回りに回転し、 dY/dX は減少する。そして、 \ddot{Y} に引続いて \ddot{X} も負の値になり、ふたたび、重心の運動方向と加速度の方向が一致する。この点では、両者の向きは逆になるので dY/dX は最小になる。その後も、加速度の方向は回転し続け、線状体の姿勢が水平方向に近づくにつれて、線状体に作用する抗力の鉛直方向成分と、重力と浮力の差にもとづく外力が除々に釣合うようになるため、 \ddot{Y} は 0 に近づく。一樣流れ中での場合、姿勢が水平方向に漸近するにつれて、 \ddot{X} も 0 に近づいたが、十分に発達した流れ中での場合、線状体が水平方向に回転しながら管路の底面に近づくとき、流速は底面に近いほど小さいため、 $\ddot{X} (< 0)$ の絶対値は急激に増大し、線状体は水平方向に急激に減速される。したがって、底面に近づくとき線状体の運

動方向は急激に鉛直方向に近づく。

ここで、 dY/dX の最小値およびそのときの姿勢 θ とそれまでに線状体が水平方向および鉛直方向に移動する距離 X, Y を表6.7に示す。

流れの方向は水平方向であるので、 $U=20\sim 80$ (mm/s)の \dot{Y} の変化を比較すると、図6.33から、 θ が約 35° 以下の領域で差が見られるが、これ以上の領域では流速の影響は見られない。ところが、図6.31から、 \dot{X} は θ の全領域で流速が大きいほど大きくなる。したがって、流速が大きいほど、同一姿勢に対する運動方向はより水平に近くなる。さらに、 θ と \ddot{X} の関係(図6.35)において、 $\theta=50^\circ$ 程度から線状体が管路底面に近づいて \ddot{X} が急激に減少し始めるまでの領域(この領域で dY/dX は最小になる。)では、流速が大きいほど \ddot{X} の絶対値は小さい。また、 θ と \ddot{Y} の関係(図6.36)から、 $\theta > 50^\circ$ 程度の領域では \ddot{Y} の絶対値は流速が大きいほどわずかに大きくなる傾向が見られる。したがって、 dY/dX が最小になる付近の領域では、同一姿勢に対する加速度の方向は流速が大きいほど鉛直に近いことが分かる。また、前述したように、加速度の方向は θ の増加に伴ない反時計回りに回転する。以上のことから、一様流れ中での場合と同様に運動方向と加速度の方向が一致するときの θ の値は、流速が大きいほど大きくなり、この点での dY/dX の値は小さくなる。

ところが、一様流れ中での結果(表6.3)と比較すると、十分に発達した流れ中での場合の方が、 dY/dX の値は小さく、そのときの θ の値も小さい傾向にある。

表6.7 軌跡の変曲点における接線の勾配、姿勢とその位置

初期角度 $\alpha(^{\circ})$	線状体の長さ l (mm)	流速 U (mm/s)	接線の勾配 dX/dY	$\theta(^{\circ})$	水平方向の移動距離 X (mm)	鉛直方向の移動距離 Y (mm)
1	15	60	0.488	79.6	103.3	82.6
		20	1.080	62.6	157.3	294.6
	30	40	0.696	68.4	249.3	278.3
		60	0.499	73.0	349.2	266.4
		80	0.383	76.3	449.7	254.0
	45	60	0.813	41.2	256.3	276.9
60		60	1.038	29.4	202.3	256.4
10	45	60	0.652	52.8	324.3	276.7
20			0.554	62.7	384.2	270.7

$d=0.569$ (mm), No.1 鋼球

両場合の \dot{Y} の変化(図6.17, 6.33)を比較すると, 流れの方向が水平方向であるため, θ と \dot{Y} の関係は, $\theta > 35^\circ$ 程度の領域では同一曲線で表わされる。これに対し, 十分に発達した流れ中での最大流速は $U^* = 1.773$ であるので, \dot{X} の変化(図6.16, 6.37)を比較すると分かるように, dY/dX が最小になる付近の領域での \dot{X} の値は十分に発達した流れ中での場合の方が大きい。したがって, dY/dX の値は十分に発達した流れ中での場合の方が小さくなる。また, θ の値が小さくなる傾向にあるのは, 管路底面に近いほど流速が小さいため, 線状体が底面に近づくとき \dot{X} は急激に減速されるが, この現象が生ずる以前の領域で dY/dX が最小になるからであると考えられる。さらに, 十分に発達した流れ中での場合, 一様流れ中での場合と異なり, 姿勢の変化におよぼす流速の影響は大きく, 流速が大きいほど線状体が回転するのに要する時間は短くなり(図6.47参照), また, 図6.33から $\theta < 35^\circ$ 程度の領域では, \dot{Y} は流速が大きいほど小さいため, dY/dX が最小になるときの θ の値が大きいにもかかわらず, それまでに Y 方向に移動する距離は流速が大きいほど小さく, 一様流れ中での場合と逆の傾向を示す。いっぽう, X 方向に移動する距離は, 一様流れ中での場合と同様に流速が大きいほど大きくなる。

つぎに, 図6.28において, 線状体の姿勢と運動方向に着目すると, 運動開始後しばらくの間運動方向と鉛直線のなす角度は θ より大きく, また, この状態は流速が大きいほど長時間続き, 一様流れ中での場合と同じ傾向を示す。しかし, 運動方向は十分に発達した流れ中での場合の方が水平方向に近いので, 運動方向が姿勢と一致するときの θ の値は, $U = 20, 40, 60, 80$ (mm/s)に対し, $\theta = 25.2^\circ, 49.0^\circ, 61.1^\circ, 67.9^\circ$ と一様流れ中での場合より大きい。

以上の結果から, 十分に発達した流れ中で線状体が運動する場合, 管路中央部では流速の変化がわづかであるので, 数値的

には異なるが、流速が線状体の落下軌跡におよぼす影響の傾向は一樣流れ中での場合と一致するが、流速の変化が大きい壁面近くの領域、とくに底面近くの領域での落下軌跡は、一樣流れ中での場合とはまったく異なるものになる。

この底面近くの領域での落下軌跡の違いは、長さが落下軌跡におよぼす影響を表わす図6.29において、 $l=45$ (mm) および 60 (mm) の落下軌跡を見るといっそう明確に分かる。なお、図中の線状体の時間間隔は、 $l=30\sim 60$ (mm) の場合、 $\Delta t=0.2$ (s)、 $l=15$ (mm) の場合、 $t \leq 2.0$ (s) で $\Delta t=0.2$ (s)、 $t > 2.0$ (s) で $\Delta t=0.4$ (s) である。

流速が落下軌跡におよぼす影響を表わす図6.28の場合、 $l=30$ (mm) であったため流速の変化が大きい底面近くの領域での姿勢はほとんど水平であり、軸方向に沿っての流速の変化はほとんどなく、運動方向が急激に鉛直方向に近づく現象は見られたが、線状体が鉛直方向に回転する現象は見られなかった。これに対し、

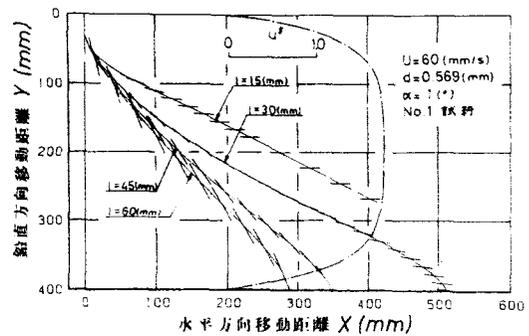


図6.29 落下軌跡におよぼす長さの影響

し、図6.29において、 $l=45, 60$ (mm) の落下軌跡を見ると、底面近くの領域では運動方向が鉛直方向に近づく現象と線状体が鉛直方向に回転する現象が現われている。

これは、長さが大きい場合、線状体が回転するために要する時間が長くなるため、底面近くの領域での θ の値は小さく ($l=60$ (mm) の場合、 $\theta=30^\circ$ 、 $l=45$ (mm) の場合、 $\theta=42^\circ$ 程度)、軸方向に沿って流速が大きく変化し、しかも、先端部ほど小さいので、線状体に作用する回転モーメント N が姿勢を鉛直方向に回転させる向きに働くからである。したがって、 $l=45, 60$ (mm) の

場合、線状体が底面に到達するまで運動方向と鉛直線のなす角度が θ より大きい状態が続く。

また、一様流れ中での場合、 dY/dX の最小値およびそのときの姿勢には長さの影響がほとんど見られなかったが、表6.7から十分に発達した流れ中での場合、これらの値におよぼす長さの影響が明確に現われ、長さが大きいほど、重心の軌跡の変曲点における運動方向および姿勢はより鉛直に近いことが分かる。さらに、軌跡が変曲点をもつまでにX方向に移動する距離は、 $l=30$ (mm)の場合が最大になり、Y方向に移動する距離は、 $l=45$ (mm)の場合が最大になり、一様流れ中での場合と異なる傾向を示す。

以上のことは、長さが大きいほど短時間のうちに底面近くの流速の変化が大きい領域に到達し、しかも、そのときの姿勢がより鉛直に近いいため、流速分布の影響を大きく受けることが原因していると考えられる。したがって、今より管路の高さを大きくして計算をおこなう場合、 $l=45, 60$ (mm)の dY/dX の最小値は小さくなり、そのときの θ の値は大きくなる。また、逆に $l=15$ (mm)の dY/dX の最小値は大きくなり、 θ の値は小さくなるので、長さの影響が現われにくくなると考えられる。

つぎに、初期角度の影響を調べるため、図6.30に $l=45$ (mm)、 $\alpha=1^\circ, 10^\circ, 20^\circ$ の落下軌跡を示す。線状体の時間間隔は $\Delta t=0.2$ (s)である。

線状体は、運動開始と同時に水平方向にも鉛直方向にも急激に加速されるが、初期角度が大きいほど水平方向の加速は大きく、鉛直方向の加速は小さいので、運動方向はより水平に近くなる。その後、加速度の方向と運動方向およびそれらの向きが一致して軌跡の接線勾配 dY/dX が極大になる点を経て、加速度の方向が反時計回りに回転しているため、運動方向は除々に水平方向に近づき、ふたたび、運動方向と加速度の方向が一致して dY/dX は最小になる。そして、運動方向は除々に鉛直方

向に近づきながら流速の変化が大きい底面近くの領域に到達する。

これまでの領域では，運動開始直後の流速の変化が大きい管路上面近くの領域を除き，線状体は除々に水平方向に回転し続ける。ところが，底面近くの領域では，流速分布の影響で運動

方向および姿勢は急激に鉛直方向に近づく。また，初期角度が小さいほど，この領域での姿勢が鉛直に近いため，軸方向に沿って流速が大きく変化し，運動方向および姿勢が急激に鉛直方向に近づく現象が顕著に現われる。したがって， $\alpha = 1^\circ$ の場合，線状体が底面に到達するまで運動方向と鉛直線のなす角度が θ より大きい状態が続き， $\alpha = 10^\circ$ の場合，底面近くの θ が減少している領域で運動方向が姿勢と一致し， $\alpha = 20^\circ$ の場合， θ が増加している領域で両者が一致する。また，表6.7から， dY/dX が最小になる点での運動方向および姿勢は，初期角度が大きいほど水平方向に近くなること分かる。

ここで，重心の軌跡の形におよぼす初期角度の影響について考える。

一様流れ中での場合，初期角度を変化させておこなった計算はないが，前節の結果から， $\theta > 15^\circ$ 程度の領域では，姿勢の変化および姿勢の変化に対する Y の変化は流速の影響を受けず，さらに，流速に対する線状体の水平方向の相対速度， $\dot{X} - U$ ，の変化は静止流体中での水平方向速度の変化と一致した。また，静止流体中での場合，運動開始直後の急激な加速領域（ θ にして約 5° の領域）を除き，重心の速度の変化および姿勢の変化は，初期角度の影響を受けず，軌跡を X, Y 軸に沿って θ が等

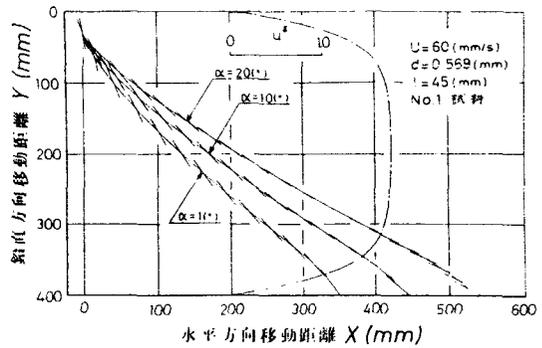


図6.30 落下軌跡におよぼす初期角度の影響

しくなる位置まで平行移動すると、急激な加速の領域を除き、軌跡は初期角度にかかわらず一致するという結果が得られた。(2.5節参照)以上2つの結果から、一様流れ中での場合にも、 X, Y 軸に沿って θ が等しくなる位置まで平行移動すると、急激な加速の領域を除き、軌跡は初期角度にかかわらず一致すると考えられる。

ところが、十分に発達した流れ中での場合、図6.45から、流れの方向が水平方向であるので、運動開始後しばらくすると姿勢の変化に対する Y の変化は、初期角度にかかわらず同一曲線で表わされるが、初期角度が異なると姿勢が同じになるときの線状体の位置が異なる(同一姿勢に対する位置は、 α が小さいほど管路底面に近くなる。)ため、流速に差が生ずる。このため、姿勢の変化および姿勢の変化に対する X の変化は、初期角度の影響を受ける。したがって、静止流体中あるいは一様流れ中での場合と異なり、軌跡を X, Y 軸に沿って θ が等しくなる位置まで平行移動しても、初期角度にかかわらず一致することはなく、流速が場所的に変化するため、線状体が運動をおこなう位置のみならず、軌跡の形にも初期角度の影響が現われる。

6.5.2 線状体重心の速度および加速度

図6.7に示した流速分布を見れば分かるように、管路上面近くの領域では、上面から離れるに従い流速は急激に増大する。したがって、流速が X の変化におよぼす影響を表わす図6.31において、線状体は上面近くの領域で運動を開始するため水平方向に急激に加速される。そして、線状体が上面から離れるにつれて流速が増大する割合も減少し、しかも、姿勢が水平方向に回転するため、水平方向への加速は徐々に減少する。 $l=30(mm)$ の場合、水平方向への加速状態は $\theta=42^\circ\sim 47^\circ$ まで続き、 X が最大になる位置は管路中央部の流速の変化が小さい領域である。その後減速されて、線状体が管路底面に近づくと、底面近くの

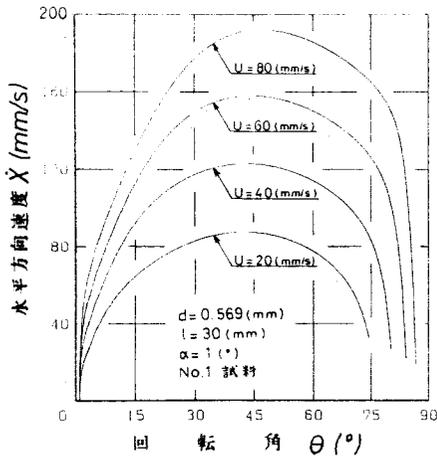


図 6.31 水平方向速度におよぼす流速の影響

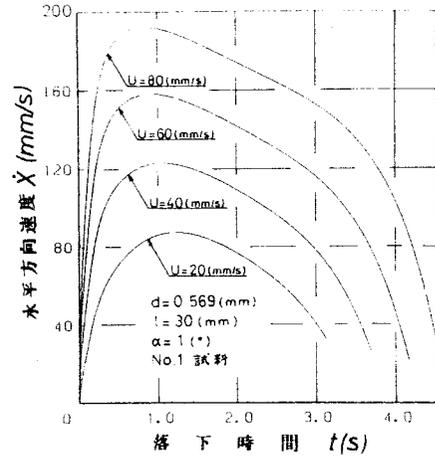


図 6.32 水平方向速度におよぼす流速の影響

領域では流速の変化が大きく、しかも底面に近いほど流速が小さいため、 \dot{X} は急激に減速される。図 6.7 から、 $U^* = 1.7$ になる位置は $\gamma^* = 0.25, 0.75$ ($Y = 100, 300$ (mm)) であり、 $0 \leq \gamma^* < 0.25$, $0.75 < \gamma^* \leq 1.0$ の領域では流速の変化が大きく、 $0.25 < \gamma^* < 0.75$ の領域では流速の変化はわづかである。また、 $U = 80$ (mm/s) の場合、 $Y = 100$ および 300 (mm) の位置 (鉛直方向移動距離が 70 および 270 (mm)) における姿勢は $\theta = 35^\circ$ および 79° 程度であり、 $\theta < 35^\circ$ および $\theta > 79^\circ$ の領域で \dot{X} が急激に変化することが分かる。なお、 $\theta > 79^\circ$ の領域の方が曲線がより急激に変化するのには、 $\theta < 35^\circ$ の領域に比べて姿勢の変化が小さいからである。また、流速が小さいほど、 \dot{X} が急激に減少し始めるときの θ の値が小さくなるのは、 $Y = 300$ (mm) の位置における θ の値が小さいからである。以上は、姿勢の変化に対する \dot{X} の変化を調べたが、つぎに、落下時間に伴って \dot{X} がどのように変化するかを調べる。

図 6.32 において、運動開始と同時に線状体は急激に水平方向に加速され、 $t = 0.8 \sim 1.2$ (s) で \dot{X} は最大となり、その後、 \dot{X} はほぼ直線的に減少し (水平方向加速度 \ddot{X} がほぼ一定になる。),

線状体が管路底面に近づくと \dot{X} は急激に減速される。流速が大きいほど線状体が水平方向に加速される時間が短くなるのは、図6.47を見れば分かるように流速が大きいほど姿勢の変化が大きいからである。また、水平方向に減速され始めてから \dot{X} がほとんど変化しない状態は流速が大きいほど長時間続く。この現象は管路中央部の流速の変化が小さい領域で生じており($U=80(\text{mm/s})$ の場合、 $100 < Y < 300(\text{mm})$ の範囲に線状体が位置するのは、 $0.45 < t < 2.85(\text{s})$ である。)、流速が大きいほど \dot{X} が減速され始める位置が管路中央部のより上方であり、流速の変化が小さい領域で長時間運動するからである。なお、この現象は静止流体中での場合にも見られ(図3.19参照)、この場合には \dot{X} が減速され始めてから \dot{X} がほとんど変化しない状態が続いた後、姿勢が水平方向に漸進すると \dot{X} は0になるため、 t と \dot{X} の関係は $\dot{X}=0$ に漸進する曲線で表わされる。

表6.8に \dot{X} 、 \dot{Y} の最大値およびそのときの θ と t の値を示す。流速が大きいほど姿勢の変化が大きいため、線状体は姿勢がより水平に近い状態になるまで水平方向に加速される。しかし、加速される時間は短い。また、 \dot{X} が最大になるときの線状体の位置は、流速の変化が小さい管路中央部であるので、 \dot{X} の最大値 \dot{X}_{max} に対し、そのときの θ に対する静止流体中での水平方

表6.8 重心速度の最大値とそのときの姿勢，落下時間

初期角度 $\alpha(^{\circ})$	線状体長さ $l(\text{mm})$	流速 $U(\text{mm/s})$	水平方向速度の最大値			鉛直方向速度の最大値		
			$\dot{X}_{\text{max}}(\text{mm/s})$	$\theta(^{\circ})$	$t(\text{s})$	$\dot{Y}_{\text{max}}(\text{mm/s})$	$\theta(^{\circ})$	$t(\text{s})$
1	15	60	145.06	51.7	0.38	168.6	14.90	0.12
		20	87.52	42.5	1.22	234.0	6.74	0.18
	30	40	123.08	43.0	1.05	209.6	10.20	0.17
		60	158.19	44.4	0.92	193.8	13.12	0.16
		80	192.44	46.8	0.83	181.6	15.67	0.15
	45	60	158.26	36.7	1.36	203.4	12.31	0.17
	60	60	154.29	28.2	1.27	208.6	12.42	0.18
10	45	60	159.71	42.5	1.19	174.6	20.41	0.16
20			158.21	47.5	0.97	149.7	28.94	0.15

$d=0.569(\text{mm})$, No.1 試料

向速度を \dot{X}_s , そのときの重心での流速を W_c とすると,

$$\dot{X}_{max} = \dot{X}_s + W_c \quad (6.76)$$

なる関係がほぼ成立する。この式は (6.73) 式と同じものであり、一様流れ中での場合、 $\theta > 15^\circ$ 程度の領域でこの関係が成立したが、十分に発達した流れ中での場合、流速が小さいほど流速の場所による差は小さいので、 \dot{X} に対し (6.76) 式の関係が成り立つ θ の領域は広くなる傾向にあるが、一様流れ中での場合比べて狭く、 $U = 20$ (mm/s) の場合、 $\theta = 20^\circ \sim 65^\circ$ 、 $U = 80$ (mm/s) の場合、 $\theta = 45^\circ \sim 75^\circ$ 程度である。また、流速の変化が小さい領域に到達したときの姿勢は、流速が大きいほど水平方向に近いので、この θ の領域は値の大きい方へつれる傾向にある。なお、流速の変化が大きい壁面近くの領域では、慣性のため、線状体が加速される場合(上面近くの領域)、 $\dot{X} < \dot{X}_s + W_c$ であり、減速される場合(底面近くの領域)、 $\dot{X} > \dot{X}_s + W_c$ となる。また、十分に発達した流れ中での流速は、壁面近くの約 28 (mm) の領域を除き、一様流れ中での場合より大きいので、図 6.16 と図 6.37 を比較すれば分かるように、壁面近くで \dot{X} が急激に加速あるいは減速される領域の一部を除き、 θ のほとんどの領域で \dot{X} は十分に発達した流れ中での場合の方が大きくなる。

いっぽう、流速が \dot{Y} の変化におよぼす影響を表わす図 6.33 において、一様流れ中での場合と同様に、線状体は運動開始と同時に重力と浮力の差にもとづく外力の作用を受けて鉛直方向に急激に加速される。 $l = 30$ (mm) の場合、 $U \leq 80$ (mm/s) の範囲内では、線状体が鉛直方向に加速される領域は $\theta < 16^\circ$ 程度であり、その後抗力が増大するため、 θ の増加に伴ない単調に減少する。そして、姿勢が水平方向に近づくと鉛直方向の外力は徐々に釣合うので、 \dot{Y} は一定値となる。また、一様流れ中で

の場合のように流速が姿勢の変化におよぼす影響がわづかである場合にも、 $\theta < 15^\circ$ 程度の領域では流速が大きいほど \dot{Y} の値は小さくなった。(6.4.2項参照)十分に発達した流れ中での場合、流速が大きいほど姿勢の変化が大きくなり、同一落下時間における姿勢はより水平に近くなる。このため、線状体に作用する抗力の鉛直方向成分は大きく、いっそう鉛直方向に加速されにくくなるので、運動開始後しばらくの間流速が大きいほど \dot{Y} の値は小さくなる。しかし、 θ の増加に伴ない流速の影響は見られなくなり、 $\theta > 35^\circ$ 程度の領域では θ と \dot{Y} の関係は同一曲線で表わされる。

づきに、落下時間に伴って \dot{Y} が変化する状態を表わす図6.34において、線状体が鉛直方向に急激に加速される時間は0.2(s)以内であり、その後 \dot{Y} は減速される。 $l = 30(\text{mm})$ の場合、流速の変化が大きい底面近くの領域においても、姿勢が水平に近いので、線状体が鉛直方向に回転する現象は生じないので、 \dot{Y} は落下時間に伴ない一定値(約56.5(mm/s))に漸近する。また、同一落下時間における姿勢は流速が大きいほど水平に近くなるので、上述の θ と \dot{Y} の関係におよぼす流速の影響を考慮すると、流速が大きいほどつねに \dot{Y} は小さいことが分かる。

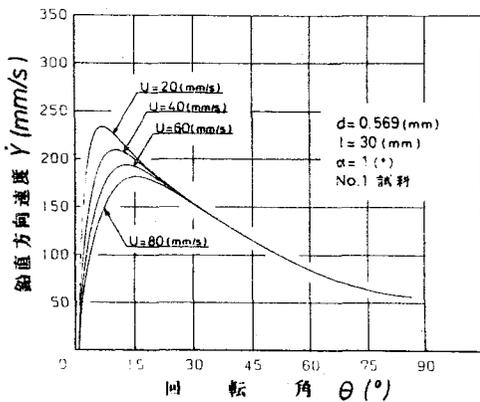


図 6.33 鉛直方向速度におよぼす流速の影響

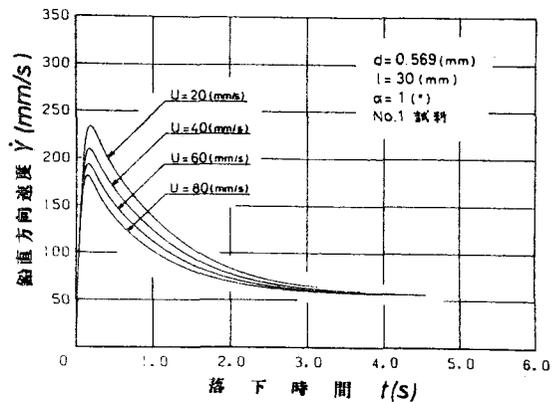


図 6.34 鉛直方向速度におよぼす流速の影響

表6.8 から，線状体が鉛直方向に加速される時間は流速が大きいかほど短くなる傾向にあり，これは一様流れ中での場合と異なるが，流速による差はわづかであり，姿勢の変化は流速が大きいかほど大きいため，より水平に近い姿勢になるまで加速される。この流速の影響は一様流れ中での場合と一致するが，表6.4と表6.8を比較すれば分かるように，十分に発達した流れ中での場合，流速分布の影響で一様流れ中での場合より姿勢の変化が大きくなり，しかも，姿勢の変化は流速の影響を大きく受けるので，より水平に近い姿勢になるまで鉛直方向に加速され，流速による $\dot{\gamma}$ の最大値の差は，たとえば， $U=20(\text{mm/s})$ と $U=80(\text{mm/s})$ の差は，一様流れ中での場合， $13.5(\text{mm/s})$ ，十分に発達した流れ中での場合， $52.4(\text{mm/s})$ のように，大きくなる。しかし，図6.17と図6.33を比較すると， $\dot{\gamma}$ は運動開始後しばらくの間，十分に発達した流れ中での場合の方が小さいが， α が θ の増加に伴ない流れ状態の影響は見られなくなり， θ と $\dot{\gamma}$ の関係は一様流れ中での曲線と一致する。このときの θ の値は流速が大きいかほど大きくなるが， $U=80(\text{mm/s})$ の場合でも約 35° である。

つぎに，流速が重心の加速度におよぼす影響を調べる。

図6.35において，運動開始と同時に線状体は水平方向にも流体から抗力を受けるため水平方向にも急激に加速される。このため，線状体に対する流体の相対速度の軸に直角な方向成分 U_r は小さくなるが，十分に発達した流れ中での場合，線状体が運動を開始して管路上面から遠ざかるにつれて線状体回りの流速は増大するので，一様流れ中での場合にくらべて U_r の減少は小さく，軸に直角な方向の加速度 du/dt の急激な減少は押えられる。また，軸方向速度 $v(<0)$ の絶対値の急激な増大および加速度 $dv/dt(<0)$ の絶対値の急激な減少も小さくなる。したがって，加速度を表わす(6.18)式を考慮すると， $\dot{\alpha}$ が運動開始時から急激に減少する割合は十分に発達した流れ中での場合の

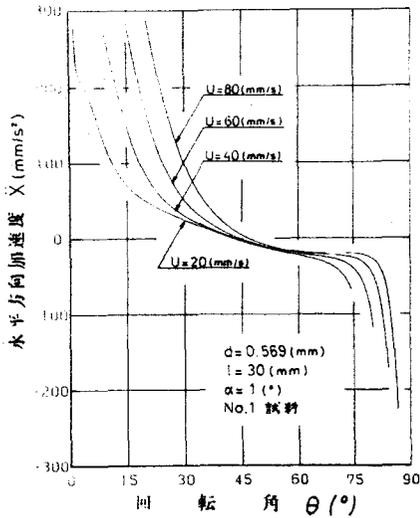


図6.35 水平方向加速度におよぼす
流速の影響

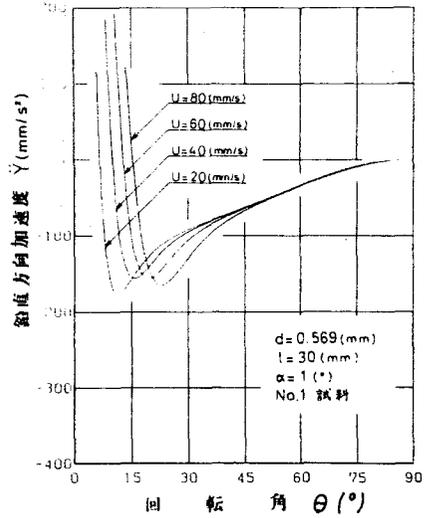


図6.36 鉛直方向加速度におよぼす
流速の影響

方が小さくなること分かる。その後線状体が流速の変化が小さい管路中央部で運動するようになると、流速の影響が除々に見られなくなり $U=20\sim 80$ (mm/s) の曲線は漸近し、流速による差はわづかとなる。しかし、同じ姿勢における位置は流速により異なるため、曲線が一致することはない。やがて、流速の変化が大きい管路底面近くの領域に線状体が入ると \ddot{X} は急激に減少する。この領域に入るときの姿勢は、流速が小さいほどより鉛直に近いので、流速が小さい順番に θ の値の小さい領域で他の曲線から離れていく。また、流速が大きいほど流速の場所による差が大きいため、 \ddot{X} はより大きく減少する。したがって、静止流体中あるいは一様流れ中で見られた \ddot{X} が最小になる現象は、十分に発達した流れ中での場合生じない。しかし、今より管路の高さを大きくして計算をおこなう場合、流速の変化が小さい領域が広くなるので、 \ddot{X} が極小になる現象が現われる可能性がある。

いっぽう、図6.36において、 \ddot{Y} も運動開始時から急激に減少するが、 \ddot{X} に関して述べたと同じ原因により、一様流れ中での

場合に比べて十分に発達した流れ中での場合の方が急激な減少は小さくなる。また、 $\ddot{\gamma}$ が減少して最小になるときの θ の値は、一様流れ中での場合と同様に流速が大きいほど大きい。また、 $\ddot{\gamma}$ の最小値は流速に対して一定の傾向を示さず、これは一様流れ中での結果と異なる。一様流れ中での場合、姿勢の変化によぼす流速の影響はわづかであったのに対し、十分に発達した流れ中での場合、流速の影響は大きく同一落下時間における姿勢は流速が大きいほどより水平に近くなる。このため、流速が大きいほど一様流れ中での場合に比べて線状体に作用する抗力の鉛直方向成分が大きくなり、流速に対して $\ddot{\gamma}$ の最小値に一定の傾向が現われないと考えられる。以上のように、 $\ddot{\gamma}$ の変化によぼす流速の影響は一様流れ中での場合と異なるけれども、 $\ell = 30$ (mm) の場合、底面近くの領域においても線状体が鉛直方向に回転する現象は生じないので、 $\ddot{\gamma}$ の変化の様子は一様流れ中での場合と同じになり、 $\ddot{\gamma}$ は最小になった後増大して姿勢が水平方向に近づくと 0 に近づく。また、 $\ddot{\gamma}$ が増大し始めた後、線状体が流速の変化が小さい領域で運動するようになると、流速の影響は除々に見られなくなり $U = 20 \sim 80$ (mm/s) の曲線は漸近し、流速による差はわづかとなる。やがて、線状体は流速の変化が大きい底面近くの領域に入るが、姿勢が水平に近いたため流速の影響をほとんど受けない。

表6.9に $\ddot{\gamma}$ の最小値およびそのときの θ の値を示す。一様流れ中での結果(表6.5)と比較して、 $\ddot{\gamma}$ の最小値の絶対値は小さく、そのときの θ の値は大きい。これは、流速分布の影響を受けて一様流れ中での場合に比べて姿勢が大きく変化することが主な原因であると考えられる。

表6.9 鉛直方向加速度の最小値とそのときの姿勢

初期角度 α (°)	線状体長さ l (mm)	流速 U (mm/s)	鉛直方向加速度の最小値	
			$\ddot{\gamma}_{min}$ (mm/s ²)	θ (°)
1	15	60	-338.1	29.76
		20	-177.4	11.30
	30	40	-156.7	15.68
		60	-157.1	19.32
		80	-165.5	22.40
		60	-107.9	16.74
10	45	60	-92.8	15.81
		60	-94.1	24.88
20			-83.5	33.61

$d = 0.569$ (mm), No.1 試料

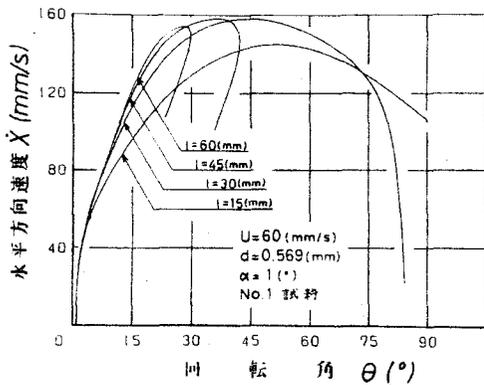


図6.37 水平方向速度におよぼす長さの影響

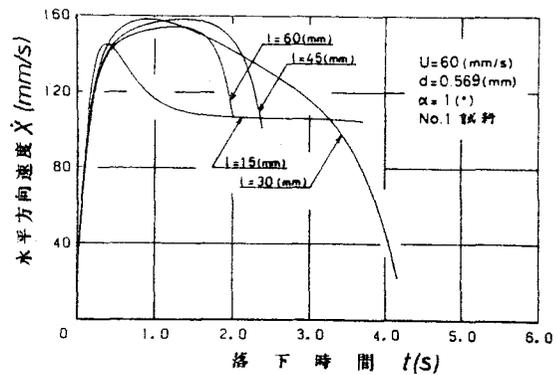


図6.38 水平方向速度におよぼす長さの影響

前項で述べたように、 $l=45, 60$ (mm) の場合、流速の変化が大きい底面近くの領域で線状体が鉛直方向に回転する現象が見られ、 $l=15, 30$ (mm) の場合、この現象は生じなかった。そこで、長さが異なると重心の速度の変化にどのような差が現われるかを調べる。

長さにより姿勢の変化状態は大きく異なり、長さが小さいほど線状体が回転するのに要する時間は短い。したがって、姿勢が同じでも線状体回りの流速は長さにより大きく異なる。このため、図6.37において、姿勢の変化に対する X の変化には長さにより大きな差が現われている。 $l=15$ (mm) の場合、姿勢がほとんど水平 ($\theta=89^\circ$) になるまでに鉛直方向に移動する距離は約 127 (mm) ($Y=157$ (mm)) であり、流速の変化が小さい領域ですでに水平な姿勢になっている。したがって、水平な姿勢を保ったまま、底面近くの領域に入るので、 X は $\theta=90^\circ$ の線に沿って 0 に近づく。また、 $l=15$ (mm) の場合、水平方向に加速されている領域は管路上面近くの $Y \leq 79$ (mm) 程度の領域であるため、 $l=30 \sim 60$ (mm) の線状体が加速される領域での流速に比べて小さい。このため、加速領域での X の値は $l=30 \sim 60$ (mm) の X の値に比べていっそう小さくなる。

これに対し、 $\ell=45, 60$ (mm)の場合、角速度が小さくより鉛直に近い姿勢で線状体が底面近くの領域に入るため、じゅうぶんに水平方向に加速されないうちに急激に減速され、しかも、姿勢が鉛直方向に回転するので、図に示すような曲線になる。しかし、加速領域では一様流れ中での場合と同様に、 \dot{X} は長さが大きいほど大きくなり、さらに、一様流れ中での結果(図6.18)と比較して、長さによる \dot{X} の差は十分に発達した流れ中での場合の方が大きいことが分かる。なお、 \dot{X} におよぼす長さの影響を考察する場合、管路の高さを考慮する必要があり、今より高さを大きくして計算をおこなうと、 $\ell=45, 60$ (mm)の場合でもじゅうぶんに水平方向に加速され、また、 $\ell=15$ (mm)の場合、今より流速の小さい領域で加速されることになるため \dot{X} はさらに小さくなり、長さの影響はより顕著に現われると考えられる。

つぎに、落下時間に伴って \dot{X} が変化する様子を表わす図6.38において、運動開始と同時に線状体は急激に水平方向に加速され、この急激な加速領域では、同一落下時間における \dot{X} の値は長さが小さいほど大きくなる傾向が見られる。また、長さにより姿勢の変化状態は大きく異なるので、流速の変化が小さい管路中央部での \dot{X} の変化に長さによる違いが顕著に現われている。 $\ell=15$ (mm)の場合、管路中央部ではすでに姿勢はほとんど水平になっているため、 \dot{X} はほとんど変化しない。また、 $\ell=30$ (mm)の場合、この領域では加速と減速の現象が生じており、静止流体中での場合にも見られた減速し始めてから \dot{X} がほとんど変化しない状態が見られる。これに対し、 $\ell=45, 60$ (mm)の場合、管路中央部では線状体はまだ加速されているが、流速の変化が小さいため \dot{X} の増大は急激に低下している。このような長さによる \dot{X} の変化の違いは一様流れ中での場合現われなかったが、一様流れ中での場合と同様に線状体が水平方向に加速される時間は、長さが大きいほど長い。ただし、 $\ell=45, 60$

(mm)の場合、じゅうぶんに加速されないうちに底面近くの領域に入るため、 $l=45$ (mm)の方が加速時間が長くなっているが、 $l=60$ (mm)の場合でもじゅうぶんに加速されるように管路の高さを大きくして計算すると、 $l=60$ (mm)の方が加速時間は長くなる。

いっぽう、図6.39において、一樣流れ中での場合と同様に、 $\dot{\gamma}$ は $\theta < 60^\circ$ 程度の領域では長さが大きいほど大きいが、これ以上の領域では長さの影響を受けない。また、表6.8から、長さが小さいほど姿勢がより水平に近い状態になるまで鉛直方向に加速されることが分かる。この傾向は一樣流れ中での場合と一致するが、十分に発達した流れ中での場合、長さが大きいほど流速分布の影響を大きく受け、軸方向に沿っての流速の変化が大きいため、運動開始直後の領域での角速度を一樣流れ中での場合と比較すると、長さが大きいほど十分に発達した流れ中での場合の方が大きくなることが分かる。したがって、表6.4と表6.8を比較すると分かるように、長さによる $\dot{\gamma}$ の最大値およびそのときの θ の値の差は、たとえば $l=15$ (mm)と $l=60$ (mm)の差は一樣流れ中での場合、 130.7 (mm/s)、 7.3° 、十分に発達した流れ中での場合、 40.0 (mm/s)、 2.5° のように、十分に発達した流れ中での場合の方が小さい。しかし、図6.19と図6.39を比較すると、 $\dot{\gamma}$ は運動開始後しばらくの間、十分に発達した流れ中での場合の方が小さいが、やがて θ の増加に伴ない流れ状態の影響は見られなくなり、 θ と $\dot{\gamma}$ の関係は一樣流れ中での曲線と一致する。このときの θ の値は、長さが小さいほど θ の広い領域で流速分布の影響を受

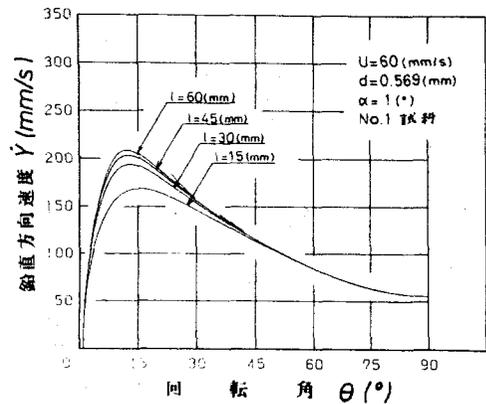


図6.39 鉛直方向速度におよぼす長さの影響

けるため、大きくなる。

また、 $l=45, 60$ (mm) のように底面近くの領域で線状体が鉛直方向に回転する場合、この領域における流速は管路中央部の同一姿勢の位置における流速より小さく、線状体の軸に直角な方向の速度 $u (>0)$ および軸方向速度 $v (<0)$ の絶対値はともに底面近くの領域での方が小さいが、 u の方が大きく減少するため、重心の速度を表わす (6.17) 式から同一姿勢での $\dot{Y} (<0)$ の絶対値はこの領域での方が大きくなる。したがって、図 6.39 に示すように線状体が鉛直方向に回転し始めてからの \dot{Y} の変化は、それまでの曲線の上方に位置する。

この領域での \dot{Y} の変化におよぼす長さの影響は、 \dot{v} と \dot{Y} の関係を表わす図 6.40 を見れば明瞭に分かる。長さが大きいほど流速分布の影響を大きく受けるため、 \dot{Y} は急激に変化する。また、線状体が鉛直方向に加速される時間は、長さが大きいほど長くなる傾向にあるが差はわづかであり、加速状態もほとんど長さの影響を受けない。

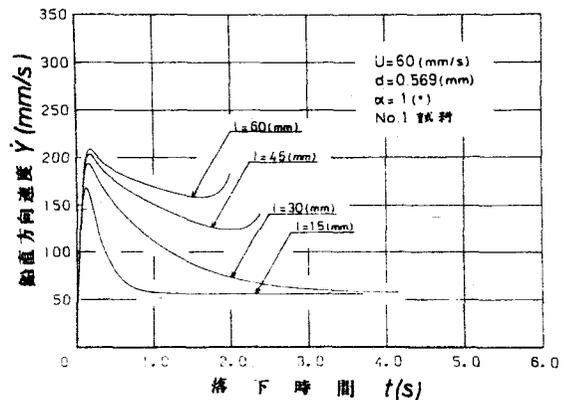


図 6.40 鉛直方向速度におよぼす長さの影響

つぎに、重心の加速度の変化を表わす図 6.41, 6.42 において、姿勢の変化状態および姿勢が同じでも線状体回りの流速は長さにより大きく異なるため、姿勢の変化に対する \ddot{X} および \ddot{Y} の変化には大きな差が現われている。 $l=15$ (mm) の場合、管路中央部であつてに水平な姿勢になるので、 $\theta=90^{\circ}$ でいったん $\ddot{X}=0$ となり、水平な姿勢を保ったまま底面近くの領域に入るので、 \ddot{X} は $\theta=90^{\circ}$ の線に沿って減少する。また、 \dot{Y} も最小になっ

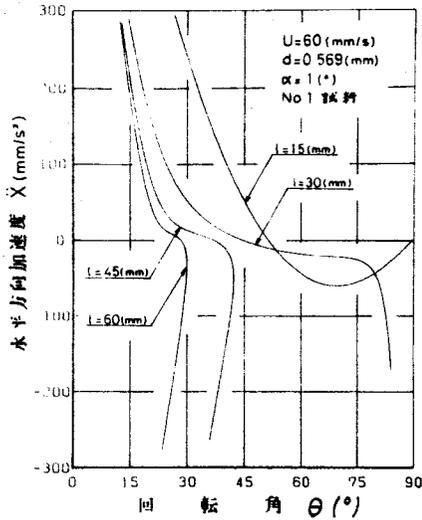


図6.41 水平方向加速度におよぼす長さの影響

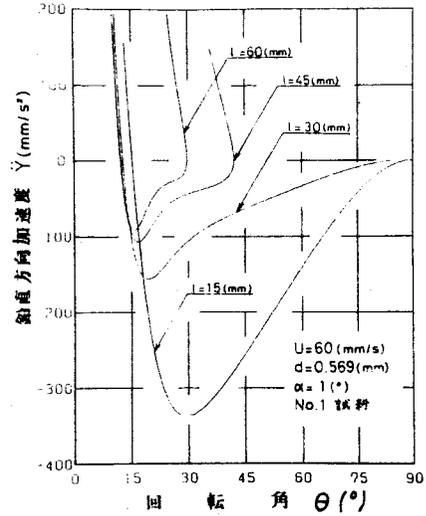


図6.42 鉛直方向加速度におよぼす長さの影響

その後増大して姿勢が水平方向に近づくにつれて0に近づき、 $\theta = 90^\circ$ で0になる。

これに対し、 $l=45, 60$ (mm)の場合、 \ddot{X} は急激に減少した後、姿勢は水平方向に回転し、しかも、流速の変化が小さい領域に入るため、 \ddot{X} の減少割合はいったん低下するが、間もなく流速の変化が大きい底面近くの領域で運動し始めるため、 \ddot{X} はふたたび急激に減少する。しかも、線状体は鉛直方向に回転するので、 θ と \ddot{X} の関係は図に示すような曲線で表わされる。また、 \ddot{Y} は最小になった後増大し、線状体が管路中央部に入るようになるると \ddot{Y} の増大割合も低下するが、間もなく底面近くの領域で運動し始めるため、 \ddot{Y} は急激に増大する。しかし、表6.9から一樣流れ中での場合と同様に、長さが小さいほど \ddot{Y} の最小値の絶対値およびそのときの θ の値は大きくなる。

最後に、初期角度が重心の速度におよぼす影響を調べる。

一樣流れ中での場合、初期角度を変化させておこなった計算はないが、前節の結果および静止流体中での初期角度の影響を調べた結果(2.5節参照)から、一樣流れ中での場合、姿勢の変

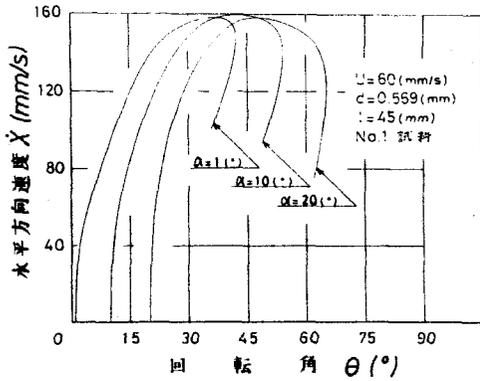


図6.43 水平方向速度におよぼす初期角度の影響

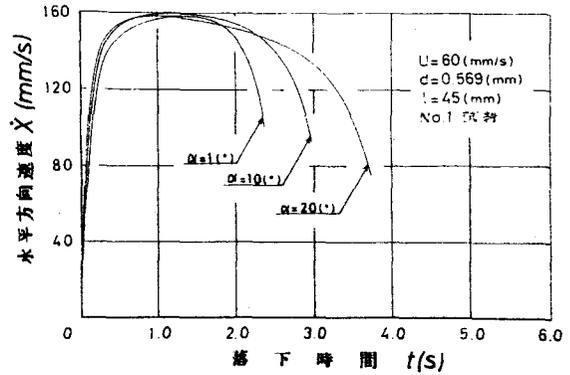


図6.44 水平方向速度におよぼす初期角度の影響

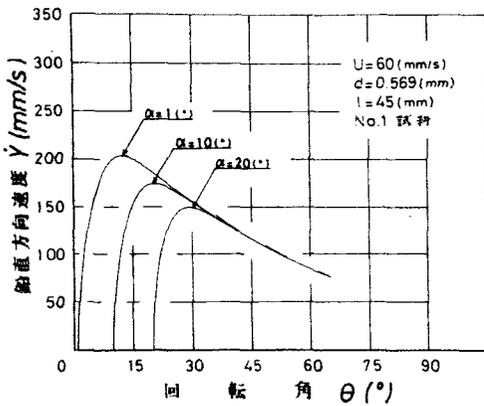


図6.45 鉛直方向速度におよぼす初期角度の影響

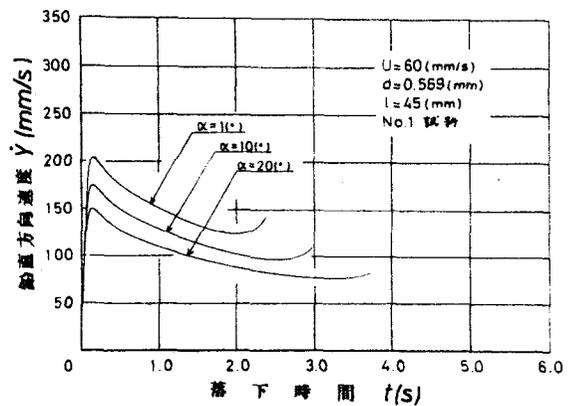


図6.46 鉛直方向速度におよぼす初期角度の影響

化に対する速度の変化は，運動開始直後の急激な加速領域を除き，初期角度にかかわらず同一曲線で表わされると考えられる。

ところが，十分に発達した流れ中での場合，図6.45から，流れの方向が水平方向であるので，運動開始後しばらくすると，姿勢の変化に対する \dot{Y} の変化は，初期角度にかかわらず同一曲線で表わされるが，初期角度が異なると姿勢が同じになるときの線状体の位置が異なるため，流速に差が生ずる。このため，図6.43において，姿勢の変化に対する \dot{X} の変化は初期角度の影響

響を受け、 \dot{Y} の場合と異なり、運動開始後の領域と \dot{X} が急激に減少する領域を除いた領域でも \dot{X} の変化は初期角度にかかわらず同一曲線で表わされることはない。線状体が水平方向に加速されている間に鉛直方向に移動する距離は、 $\alpha = 1^\circ, 10^\circ, 20^\circ$ の場合、約221, 169, 121(mm) (管内での位置は、 $Y = 251, 199, 151$ (mm)である。)であり、3者ともに流速の変化が小さい管路中央部で \dot{X} は最大になるが、 $\alpha = 10^\circ$ の場合、管路のほぼ中心で最大になるため、 \dot{X} は他の場合と比べてわずかに大きい。なお、 $\alpha = 1^\circ$ と 20° の場合、管路の中心に対しほぼ対象な位置で \dot{X} は最大になり、両者の最大値はほぼ一致する。

また、落下時間に伴って変化する \dot{X} の状態を表わす図6.44において、運動開始直後の急激な加速領域では、同一落下時間における \dot{X} の値は、初期角度が大きいほど大きくなる傾向が見られる。また、水平方向に加速される時間は、初期角度が小さいほど長くなり、 $\alpha = 1^\circ$ の場合、管路中央部のほとんどの領域で線状体は加速されているため、つぎのような現象は見られないが、 $\alpha = 10^\circ, 20^\circ$ の場合、線状体が水平方向に減速し始めてから \dot{X} がわずかに変化しない現象が生じており、 $\alpha = 20^\circ$ の方が \dot{X} が最大になる時の位置が管路の上方であるので、この現象は長時間にわたってより顕著に見られる。やがて、線状体が底面近くの領域に入ると、そのときの姿勢は初期角度が小さいほど鉛直に近く、しかも \dot{X} は大きいので、線状体は急激に減速される。

いっぽう、図6.46において、線状体が鉛直方向に加速される時間は、初期角度が小さいほど長くなる傾向にあるが、差はわずかである。また、初期角度が小さいほど、線状体が底面近くの領域に入るときの姿勢が鉛直に近く、流速分布の影響を受けて姿勢が大きく変化するため、この領域での急激な加速は大きくなる。

なお、初期角度が \dot{X} の変化におよぼす影響を考察する場合、

管路の高さを考慮する必要があり、今より高さを大きくして計算すると、 θ と γ の関係がほぼ同一曲線で表わされる領域が存在する可能性がある。

6.5.3 線状体の姿勢および角速度

線状体が運動を開始する管路上面近くの領域では、上面から離れるに従い流速は急激に増大する。このため、線状体の軸方向において流速が分布し、しかも、先端部に近いほど“大きいので”、運動開始時に線状体に作用する回転モーメント M は姿勢を水平方向に回転させる向きに働き、さらに、軸方向に沿っての流速の差は流速が大きいほど“大きいので”、 M の値は大きくなる。(図6.50参照)また、(6.15)式で表わされる軸方向に沿って分布する流速の軸に直角な方向成分の平均値 $U_1 (>0)$ および重心回りの一次モーメントの時間的变化率 $dU_2/dt (>0)$ 、両端面での流速の軸方向成分の平均値 $V (<0)$ の絶対値は増大するが、線状体の軸に直角な方向の速度 $u (>0)$ および軸方向速度 $v (<0)$ も運動開始と同時に急激に増大するため、線状体の相対速度 $u-U_1 (<0)$ の絶対値はいったん減少し始める。しかし、 $v-V (<0)$ の絶対値が急激に増大するので、両者の積 $(u-U_1)(v-V)$ は運動開始と同時に増大する。さらに、 $(u-U_1)(v-V)$ および dU_2/dt は流速が大きいほど大きくなる。したがって、運動方程式(6.16)式の第3式を考慮すると、流速が大きいほど運動開始直後の角速度 γ は大きく、姿勢は急激に変化することが分かる。

姿勢の変化におよぼす流速の影響を表わす図6.47, 6.48において、 γ は $\theta=8^\circ$ 程度まで加速されるが、 γ の増大に伴ない線状体の回転を押える向きに作用する回転モーメント M が増大し、また、 $(u-U_1)(v-V)$ はしばらくの間($U=80$ (mm/s)の場合、 $t \leq 0.35$ (s))増大するが、 dU_2/dt は減少するため、これ以上の領域では急激に減速される。そして、 γ が減少するので

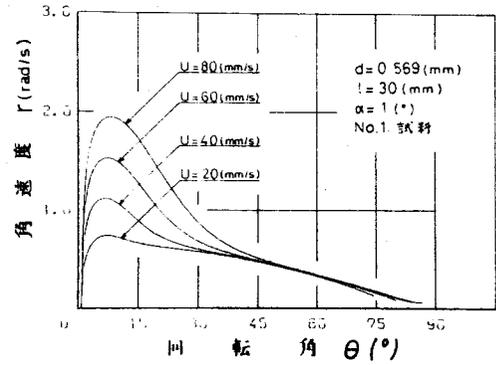
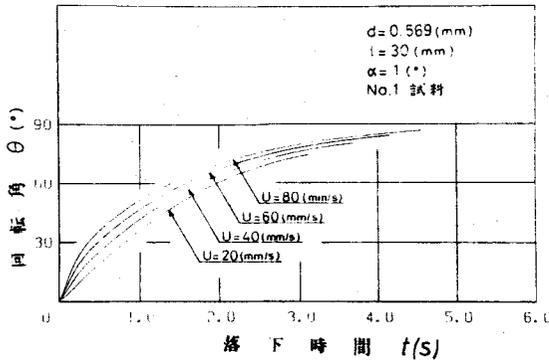


図6.47 姿勢におよぼす流速の影響

図6.48 角速度におよぼす流速の影響

線状体の回転を押える向きに作用する回転モーメント N も減少し、やがて流速の変化が小さい管路中央部に線状体が入るようになる。すると、 N 、 $(U-U_1) \cdot (v-v)$ および dU_2/dt の変化は除々に低下する。 $l=30$ (mm) の場合、流速の変化が大きい底面近くの領域での姿勢は水平に近いので、流速分布の影響を受けて鉛直方向に回転する現象は生じない。また、姿勢が水平方向に近づくと、回転モーメント N 、相対速度の軸方向成分 $v-v$ および dU_2/dt が0に近づくので、 γ は減少し姿勢は水平方向に漸近する。

角速度が急激に加速あるいは減速されている領域では、姿勢が同じ場合、流速が大きいほど γ の値は大きい。が、 θ の増加に伴って γ が減少し、しかも、線状体が流速の変化が小さい管路中央部で運動するようになると、流速の影響は除々に見られなくなり、 $U=20 \sim 80$ (mm/s) の曲線は漸近し、流速による差はわづかとなる。しかし、流速が異なると姿勢が同じになるときの位置が異なるので、軸方向に沿っての流速の分布状態に差が生じ、曲線が一致することはない。やがて、線状体が底面近くの領域に入ると、流速分布の影響を受けてふたたび曲線が離れていく状態が見られる。なお、この領域に入るときの姿勢は、流速が小さいほど鉛直に近い。ため、流速が小さい順番に θ

の値の小さい領域で他の曲線から離れていく。しかし、 $l=30$ (mm) の場合、姿勢は水平に近いので、この領域での流速の影響はわづかである。

つぎに、角速度 γ および回転モーメント N が落下時間に伴って変化する様子を表わす図6.49, 6.50において、運動開始と同時に γ は急激に加速され、 N は急激に減少して負の値(線状体の回転を押える向きに作用する。)になる。 $l=30$ (mm), $U=20\sim 80$ (mm/s) の場合、 γ が加速される時間は0.2(s)以内であり、流速が大きいほど加速時間は短い。また、 γ が減速され

ている領域で N は最小となり、流速が大きいほどそのときの γ の値が大きいため、その絶対値は大きくなる。その後、 γ が急激に減速されて、線状体が管路中央部で運動するようになると、上述したように、 $U=20\sim 80$ (mm/s) の θ と γ の関係を表わす曲線は漸近し、流速による差はわづかとなるが、同一落下時間における θ の値は流速が小さいほど小さく、また、 θ の増加に伴い γ は減少するので、この領域では同一落下時間における γ の値は、流速が小さいほど大きくなり、これに伴い N の絶対値も大きくなる。そして、姿勢が水平方向に近づくにつれて γ , N はともに0に近づく。

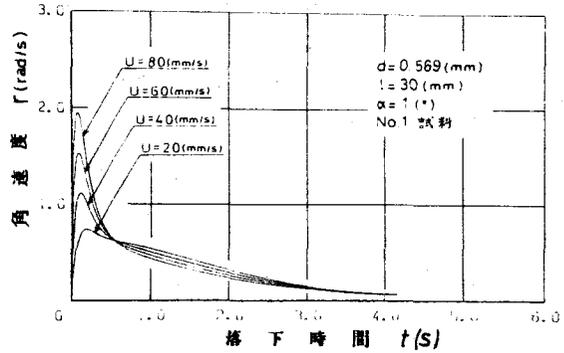


図6.49 角速度におよぼす流速の影響

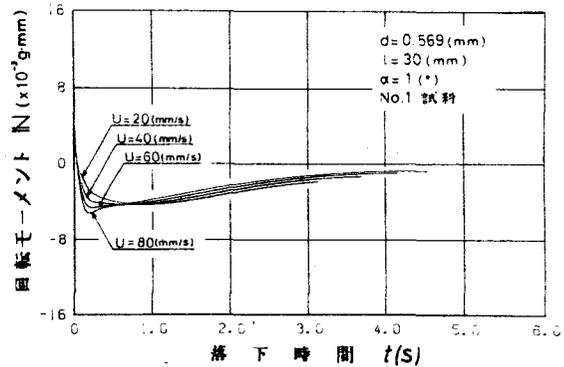


図6.50 回転モーメントにおよぼす流速の影響

ここで、一様流れ中での結果と比較する。表6.6と表6.10から、十分に発達した流れ中での場合、管路上面近くの領域で流速分布の影響を大きく受けるため、 γ の最大値は一様流れ中での場合より大きく、また、両場合ともに、 γ は流速が大きいほど姿勢がより水平に近い状態になるまで

加速される傾向にあるが、流速による差はわずかである。しかし、一様流れ中での場合の方がより水平に近い姿勢になるまで加速され、しかも加速時間が長い。また、姿勢の変化に対する角速度の変化、図6.25と図6.48、を比較すると、十分に発達した流れ中での場合、線状体が管路中心付近の流速の変化が非常に小さい領域で運動しているときの角速度の変化は、一様流れ中での場合とほぼ一致することが分かる。この領域は、たとえば $U=80$ (mm/s) の場合、 $55^\circ < \theta < 65^\circ$ ($180 < \gamma < 220$ (mm)) 程度であり、この他の領域では流速分布の影響を受けるため、これより小さい領域では、十分に発達した流れ中での場合の方が γ の値は大きく、これより大きい領域では逆に小さくなる。

これまでは $\ell=30$ (mm) と比較的長さが小さく、管路底面近くの領域に線状体が入る時の姿勢は水平に近いため、この領域で流速分布が姿勢の変化におよぼす影響はわずかに見られる程度であった。ところが、この領域での流速分布の影響は、長さが姿勢の変化におよぼす影響を表わす図6.51, 6.52の $\ell=45, 60$ (mm) の場合、顕著に現われている。

角速度は運動開始と同時に急激に加速されるが、 γ の増加に伴ない線状体の回転を押える向きに作用する回転モーメントが増大することが主な原因となって、 $\theta > 6^\circ$ 程度の領域では急

表6.10 角速度の最大値とそのときの姿勢、落下時間

初期角度 α (°)	線状体長さ l (mm)	流速 U (mm/s)	角速度の最大値		
			r (rad/s)	θ (°)	t (s)
1	15	60	2.9408	19.9	0.15
		20	0.7369	7.2	0.19
	30	40	1.1131	7.2	0.12
		60	1.5264	7.2	0.09
		80	1.9479	8.3	0.08
		45	60	1.3596	6.0
60	60	1.3234	5.8	0.08	
10	45	60	1.3323	14.1	0.07
20			1.2213	23.8	0.07

$d=0.569$ (mm), No.1 試料

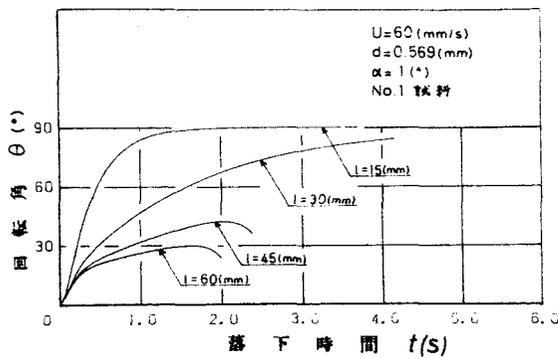


図6.51 姿勢におよぼす長さの影響

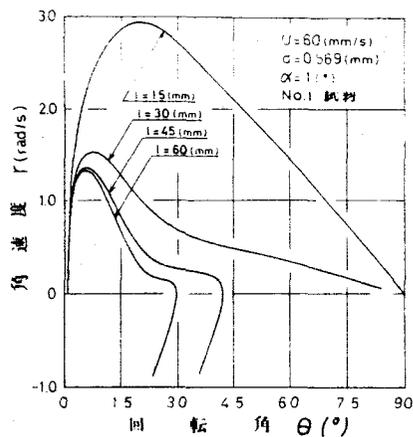


図6.52 角速度におよぼす長さの影響

激に減速される。やがて、流速の変化が小さい管路中央部に線状体が入るようになるので、 N 、 $(u-U_1) \cdot (v-V)$ および dU_2/dt の変化は除々に低下し、角加速度 $d\omega/dt$ (< 0) の絶対値が小さくなるので γ はゆっくり減少する。そして、線状体の先端部が流速の変化が大きい管路底面近くの領域に入り始めると、姿勢がまだ鉛直に近いので、軸方向に沿って流速が大きく変化し、しかも先端部に近いほど小さいので、姿勢を鉛直方向に回転させる向きに作用する回転モーメント N は急激に増大し、また、 $(u-U_1) \cdot (v-V)$ は除々に減少し続けているが、 dU_2/dt は急激に増大する。しかし、 N の値の方が大きいため、 γ は急激に減少して、 $l=60$ (mm) の場合、 $\theta=30^\circ$ 程度、 $l=45$ (mm) の場合、 $\theta=42^\circ$ 程度で負の値となり、線状体は鉛直方向に回転する。なお、 $l=60$ (mm) の方が、長さが大きくしかも姿勢が鉛直に近いので、流速分布の影響を大きく受け、鉛直方向に急激に回転する。

これに対し、 $l=15$ (mm) の場合、角速度が大きく管路中央部ですでに姿勢はほとんど水平になっているので、底面近くの領域でも、このもっとも安定した水平な姿勢を保って運動を続けると考えられる。

このような、長さが異なることによる角速度の変化の違いは、

γ が落下時間に伴って変化する様子を表わす図6.53を見ると、 $l=45, 60$ (mm)の場合、運動開始と同時に γ は急激に加速され、そして急激に減速された後、角加速度 $d\gamma/dt$ の絶対値は小さくなり、 γ が除々に減少する状態がしばらく続くが、線状体が底面近くの領域で運動するようになると γ は急激に減少して、 $l=60$ (mm)の場合、約1.6(s)、 $l=45$ (mm)の場合、約2.0(s)で

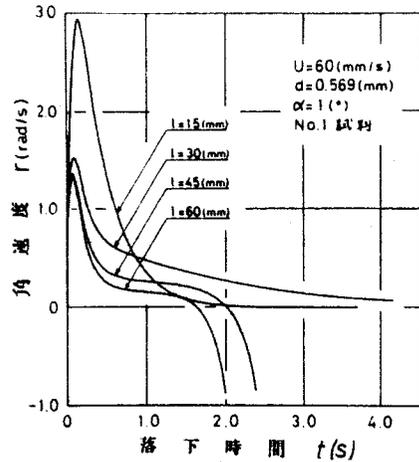


図6.53 角速度におよぼす長さの影響

負の値になり、線状体は鉛直方向に回転し始める。これに対し、 $l=15$ (mm)の場合、 γ は急激に減速された後、姿勢が水平方向に近づくにつれて $d\gamma/dt$ は小さくなり、 γ は0に漸近する。

また、表6.10から、長さが小さいほど、角速度はより水平に近い姿勢になるまで加速され、また、加速時間も長くなる。一様流れ中での場合(表6.6)にも、長さが小さいほどより水平に近い姿勢になるまで加速される傾向にあったが、加速時間は長さが大きいほど長くなるという結果が得られている。さらに、 γ の最大値を比較すると、 $l=15, 30, 45, 60$ (mm)に対し十分に発達した流れ中での場合の方が、約0.63, 0.92, 1.09, 1.17(rad/s)大きいことが分かる。これは、運動開始直後の領域で長さが大きいほど、軸方向に沿って分布する流速の差が大きく、流速分布の影響を大きく受けるためである。なお、一様流れ中での場合と同様に、十分に発達した流れ中での場合にも長さが小さいほど線状体が回転するのに要する時間は短い。

以上のように、十分に発達した流れ中での場合、長さが大きいほど流速分布の影響を大きく受けて、姿勢の変化状態は一様流れ中での場合と大きく異なる。また、姿勢の変化におよぼす

長さの影響を考察する場合、管路の高さを考慮する必要があり、今より高さを大きくして計算をおこなう場合、 $\ell=45, 60$ (mm)の場合でも底面近くの領域で線状体が鉛直方向に回転しない状態が生ずる可能性がある。

最後に、初期角度が姿勢の変化におよぼす影響を調べる。

一様流れ中での場合、初期角度を変化させておこなった計算はないが、前節の結果および静止流体中での初期角度の影響を調べた結果(2.5節参照)から、一様流れ中での場合、姿勢の変化に対する角速度の変化は、運動開始直後の急激な加速領域を除き、初期角度にかかわらず同一曲線で表わされると考えられる。したがって、 α と θ の関係を表わす曲線を落下時間軸に沿って平行移動すると、急激な加速領域を除き初期角度にかかわらず重なる。

ところが、十分に発達した流れ中での場合、初期角度が異なると姿勢が同じになるときの線状体の位置が異なるため、軸方向に沿って分布する流速の状態に差が生ずる。このため、図6.55において、姿勢の変化に対する角速度の変化の様子は、数値的には異なるが初期角度にかかわらず同じになり、 θ のどの領域においても θ と γ の関係は同一曲線で表わされることはない。すなわち、初期角度にかかわらず、管路上面近くの領域で

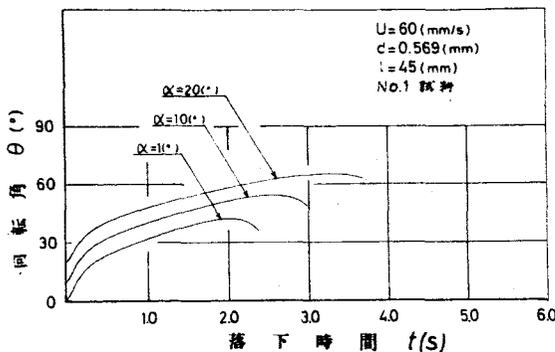


図6.54 姿勢におよぼす初期角度の影響

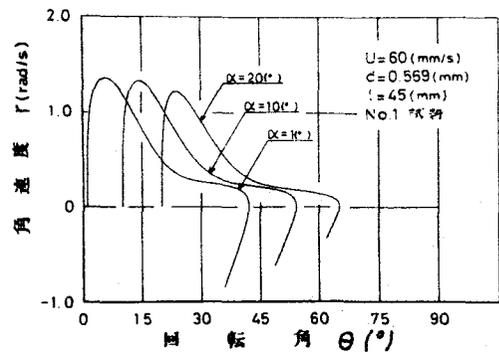


図6.55 角速度におよぼす初期角度の影響

γ は急激に加速および減速され、中央部では除々に減少し、そして底面近くの領域でふたたび急激に減速されて負の値になる。したがって、図6.54において、曲線を落下時間軸に沿って平行移動しても、重なることはない。

また、落下時間に伴って変化する角速度の様子を表わす図6.56において、初期角度が大きいほど、軸方向に沿って分布する流速の差は小さいので、運動開始直後の領域で姿勢を水平方向に回転させる向きに働く回転モーメント N は小さくなる。このため、 γ の最大値は初期角度が大きいほど小さい。なお、表6.10から、 γ が加速される時間は初期角度の影響をほとんど受けないが、加速されている間に線状体が回転する角度は、初期角度が小さいほど大きい。その後、 γ は急激に減速され、線状体が流速の変化が小さい管路中央部に入るようになると角加速度 $d\gamma/dt$ の絶対値は小さくなり、 γ はゆっくり減少し始める。そして、この領域では初期角度による γ の差はわづかとなる。また、 γ が除々に減少し始める時間は初期角度にかかわらずほぼ同じになるので、初期角度が γ の変化におよぼす影響を考慮すると、初期角度が大きいほど、この位置は管路中央部の上方であることが分かり、流速の変化が小さい領域で長時間運動する。したがって、 γ が除々に減少する時間は初期角度が大きいほど長くなる。やがて、底面近くの領域に入ると、このときの姿勢は初期角度が小さいほど鉛直に近いので、流速分布の影響を大きく受け γ は急激に減少して負の値になり、線状体は鉛直方向に回転し始める。なお、鉛直方向に回転し始めるときの姿勢および時間は、

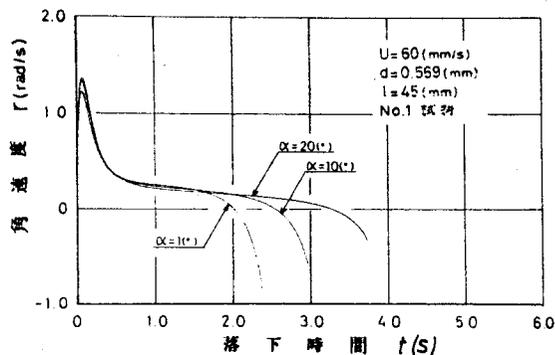


図6.56 角速度におよぼす初期角度の影響

$\alpha = 7^\circ, 10^\circ, 20^\circ$ の場合, $\theta = 42^\circ, 54^\circ, 62^\circ$, $t = 2.0, 2.55, 3.3$ (s) 程度である。

このように, 姿勢の変化は初期角度の影響を受けるが, この影響を考察する場合, 管路の高さを考慮する必要がある。今より高さを大きくして計算をおこなう場合, 流速の変化が小さい領域で運動する時間が長くなるので, θ と t の関係を表わす曲線が初期角度にかかわらず同一曲線で表わされる領域が存在する可能性がある。

以上の結果をまとめると, 線状体が十分に発達した流れ中で運動する場合, 流速が大きく変化する壁面近くの領域における運動特性が一樣流れ中での場合とはまったく異なるものになる。なお, 流れ方向が水平方向であるため, 運動特性の中でもとくに水平方向速度および姿勢の変化に大きな差が見られる。また, 諸要因が運動特性におよぼす影響は, 一樣流れ中での場合と比べて顕著に現われるが, 要因の影響を考察する場合, 矩形管路の高さを考慮する必要がある。

6.6 矩形管内での助走域における線状体の運動

この節では、管内平均流速 $U=60$ (mm/s), 長さ $l=30, 60$ (mm) および $l=30$ (mm), $U=20, 40, 60, 80$ (mm/s) に対する計算結果について説明し, 6.4節, 6.5節の一樣流れ中および十分に発達した流れ中での結果と比較して, 流速が鉛直, 水平両方向に沿って変化する流れ中で線状体が運動する場合, その運動特性がどのようなようになるかを明らかにする。なお, 運動特性を調べるとき, 第4章で述べた実験結果もあわせて実験と計算の両面から考察する。

6.6.1 線状体の落下軌跡

図6.57に $l=30$ (mm), $U=20\sim 80$ (mm/s) の落下軌跡を示す。図中の線状体の時間間隔は $\Delta t=0.2$ (s) であり, 軸方向に沿って流速が変化するのを, 線状体長さは X, Y 座標のスケールに従って縮小した寸法で表わしてある。なお, 鉛直方向の座標は管路の上面を原点にとっているため, 初期位置は $Y=30$ (mm) である。

他の流れ中での場合と同様に, 線状体は運動開始すると同時に水平方向にも流体から抗力を受けるため, 水平方向にも急激に加速され, 鉛直方向に対してある角度をもって運動し始める。流速が大きければ, 水平方向の加速は大きく, 鉛直方向の加速は小さいので, この角度は大きくなる。

助走域では, 管内平均流速により流れが発達する速度が異なり, 流速が小さい

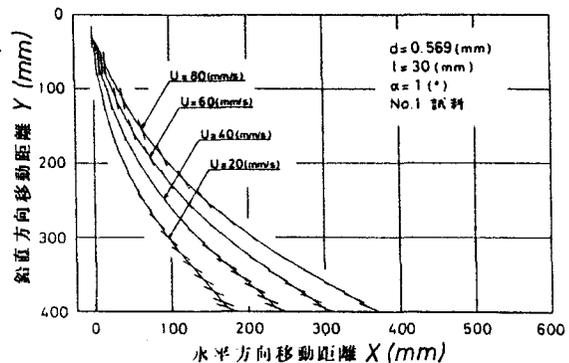


図6.57 落下軌跡におよぼす流速の影響

ほど発達があるので，初期位置 ($Y=30(\text{mm})$) での流速は， $U = 20 \sim 80 (\text{mm/s})$ に対し $u^* (= u/U) = 1.22 \sim 1.14$ 程度である。また，壁面近くの領域では流速が大きく分布しているため，軸方向に沿って流速が変化し，しかも先端部ほど大きいため，運動開始時に回転モーメント M は姿勢を水平方向に回転させる向きに作用する。(図 6.74 参照) しかし，壁面近くの領域での流速の変化は十分に発達した流れに比べて小さいので，運動開始時の M の値は助走域での場合の方が小さく，姿勢の変化は一樣流れ中での場合よりわずかに大きい，十分に発達した流れ中での場合よりはるかに小さい。このため，加速度の方向と運動方向およびそれらの向きが一致して軌跡の接線勾配 dY/dX が極大になる点における dY/dX の値およびそのときの姿勢とそれまでに鉛直方向に移動した距離は，一樣流れ中での値と十分に発達した流れ中での値の中間の前者に近い値になる。その後も，加速度の方向は反時計回りに回転し続け， dY/dX は減少する。そして， \ddot{Y} に引続いて \ddot{X} も負の値となり，ふたたび加速度の方向と運動方向が一致する。この点では，両者の向きは逆になるので dY/dX は最小になる。その後も，加速度の方向は回転し続け，線状体の姿勢は除々に水平方向に近づく。

十分に発達した流れ中での場合，線状体が水平方向に回転しながら管路底面近くの領域に入ると，流速は底面に近いほど小さいため，水平方向には急激に減速されたが，この領域に入るときの姿勢は水平に近かったため， \ddot{Y} は流速分布の影響をほとんど受けず，水平な姿勢に近づくにつれて 0 に近づいた。ところが，助走域での場合，十分に発達した流れ中での場合と比べて，流速の場所的变化が小さいので，姿勢の変化が小さく，流速の変化が大きい底面近くの領域に入るときの姿勢はより鉛直に近い。たとえば， $U = 80 (\text{mm/s})$ の場合， \ddot{X} が急激に減少し始めるときの姿勢および位置は，十分に発達した流れ中での場合， $\theta = 79^\circ$ ， $Y = 300 (\text{mm})$ ，助走域での場合， $\theta = 65^\circ$ ， $Y = 365$

(mm)程度である。このため、十分に発達した流れ中での $\ell=45$,
60(mm)の場合見られたような, $\dot{\gamma}$ が急激に増大する現象が
助走域での場合, $\ell=30$ (mm)でも見られる。したがって、線状
体の運動方向は急激に鉛直方向に近づく。さらに, $U \geq 40$ (mm/s)
の場合、線状体は鉛直方向に回転し始める。 $U=20$ (mm/s)の
場合、鉛直方向に回転する現象が生じないのは、底面近くの領
域に入るときの姿勢は流速が小さいほどわずかに鉛直に近いが
、軸方向に沿って分布する流速の差が小さいからである。

ここで、助走域と十分に発達した流れ中での場合の底面近く
の流速が大きく変化する領域における運動状態を比較する。

図6.28, 6.57において、流速が大きく変化する領域は十分に
発達した流れ中の方が広く、しかもその変化が大きいので、運
動方向が急激に鉛直方向に近づく現象が顕著に現われ、また
、この現象は管路のより上方から始まる。さらに、十分に発達
した流れ中での場合、流速が大きいほど、この現象が顕著に現
われ、この現象が生ずる以前の領域での運動方向がより水平で
あったにもかかわらず、底面に到達するときの運動方向は鉛直
に近くなる。これに対し、助走域での場合、この領域での線状
体回りの流れは、流速が小さいほど入口部(初期位置の上流
700(mm)の位置)からの距離は短いから、発達する速度が早
いので、流速が小さいほど大きく発達している。いっぽう、流
速が大きいほど X は大きいので、この現象は現われ易い。しか
し、十分に発達した流れに比べて、この領域は狭く、しかも流
速の変化が小さいので、流速による差は明確に現われず、底
面に到達するときの運動方向も、これ以前の領域での場合と同
様に流速が小さいほど鉛直に近い。

表6.11に dY/dX の最小値およびそのときの姿勢とそれまでに
線状体が水平方向および鉛直方向に移動する距離 X, Y を示す。

流れ方向が水平方向であるので、 $U=20 \sim 80$ (mm/s)の $\dot{\gamma}$ の
変化を比較すると、図6.61から $\theta < 10^\circ$ 程度の領域で差が見

られるが、これ以上の領域では流速の影響は見られない。ところが、図6.59から、 \dot{X} は θ の全領域で流速が大きいかほど大きくなる。したがって、流速が大きいかほど、姿勢が同じであるときの運動方向はより水平に近くなる。また、上述したように、助走域での場合、

線状体が流速の変化が大きい底面近くの領域に入ると、流速分布の影響を受けて \dot{X} が急激に減少するばかりでなく、 \dot{Y} も急激に増大して負の値から正の値（鉛直下向き）へ移る現象が生ずる。したがって、加速度の方向は急激に回転し、水平方向でとどまらない。さらに、十分に発達した流れ中での場合と比べて姿勢の変化が小さく、底面近くの領域に入るときの姿勢はより鉛直に近い。このため、十分に発達した流れ中での場合と異なり、この領域に入るまでに運動方向と加速度の方向が一致することはなく、線状体が底面近くの領域に入り、加速度の方向が急激に回転し始めた直後に両者が一致する。 \dot{X} 、 \dot{Y} の変化を表わす図6.63、6.64から、底面近くの領域では \dot{X} の絶対値は流速が大きいかほど小さく、 \dot{Y} の絶対値はわづかに大きくなる傾向が見られ、同一姿勢に対する加速度の方向は流速が大きいかほど鉛直に近いことが分かる。また、加速度の方向は反時計回りに回転する。以上のことから、他の流れ中での場合と同様に、運動方向と加速度の方向が一致するときの θ の値は、流速が大きいかほど大きくなり、この点での dY/dX の値は小さくなる。

ここで、他の流れ中での結果(表6.3, 6.7)と比較すると、 dY/dX の値は一様流れ中での値と十分に発達した流れ中での値の中間の前者に近い値になり、そのときの θ の値は助走

表6.11 軌跡の変曲点における接線勾配、姿勢とその位置

線状体長さ l (mm)	流速 U (mm/s)	接線勾配		水 移 距 離 X (mm)	鉛 直 距 離 Y (mm)
		dX/dY	θ (°)		
30	20	1.190	63.2	146.8	334.2
	40	0.871	65.5	208.8	339.9
	60	0.687	66.5	269.9	343.0
	80	0.567	67.1	326.6	345.4
60	60	2.082	14.7	124.0	329.5

d=0.569 (mm), No.1 試料

域での場合がもっとも小さく、また、流速による θ の値の差も他の流れ中での場合より小さいことが分かる。3種類の流れ中での \dot{Y} の変化(図6.17, 6.33, 6.61)を比較すると、流れ方向が水平方向であるため、 θ と \dot{Y} の関係は θ の増加に伴ない漸近し同一曲線で表わされる。いっぽう、ここで用いた計算条件のもとでは、助走域での流れはあまり発達しておらず、もっとも発達している $U=20$ (mm/s)の場合でも最大流速は $U^*=1.3$ 程度であり、 \dot{X} の変化(図6.16, 6.37, 6.59)を比較すると分かるように dY/dX が最小になる付近では、 \dot{X} の値は一樣流れ中での値と十分に発達した流れ中での値の中間の前者に近い値になる。また、助走域での場合、線状体が底面近くの領域に入って加速度の方向が急激に回転し始めた直後に dY/dX は最小になる。すなわち、線状体がじゅうぶんに回転しないうちに底面近くの領域に入り、流速分布の影響で dY/dX が最小になる。このため、 dY/dX が最小になるときの θ の値は、助走域での場合がもっとも小さくなると考えられる。また、図6.71から姿勢の変化におよぼす流速の影響はほとんど見られず、さらに、図6.61から \dot{Y} は $\theta < 10^\circ$ 程度でわずかに流速による差が見られるだけである。したがって、 dY/dX が最小になるまでに線状体が鉛直方向に移動する距離は、一樣流れ中での場合と同様に流速が大きいほど大きくなる。しかし、流速による差は非常に小さい。いっぽう、水平方向に移動する距離も流速が大きいほど大きい。

つぎに、図6.57において、線状体の姿勢と運動方向に着目すると、運動開始後しばらくの間運動方向と鉛直線のなす角度は θ より大きく、また、この状態は流速が大きいほど長時間続き、他の流れ中での場合と同じ傾向を示す。なお、助走域での場合、運動方向は一樣流れ中での場合と十分に発達した流れ中での場合の中間にあるので、運動方向が姿勢と一致するときの θ の値は、 $U=20, 40, 60, 80$ (mm/s)に対し、 $\theta=16.6^\circ, 35.6^\circ$

、 49.0° 、 57.6° と両者の中間の一樣流れ中での値に近くなる。また、3種類の流れ中での落下軌跡(図6.13, 6.28, 6.57)を比較すると、十分に発達した流れ中、助走域、一樣流れ中の順番に下流側に位置する。

以上の結果から、助走域での流れは一樣流れと十分に発達した流れの中間の状態であるので、助走域で線状体が運動する場合、落下軌跡は一樣流れ中と十分に発達した流れ中での落下軌跡を合わせたような形になる。また、流速が落下軌跡におよぼす影響も両場合の中間的なものになる。なお、助走域での場合、 $l=30$ (mm)でも底面近くの領域で $\dot{\gamma}$ が急激に増大し線状体が鉛直方向に回転する現象が見られたが、これは管路高さに関連があり、今より高さを大きくして計算をおこなう場合、この領域に到達するときの姿勢がより水平に近くなるため、この現象は生じないと考えられる。

助走域での場合と十分に発達した流れ中での場合の底面近くの領域における落下軌跡の違いは、図6.58に示す $U=60$ (mm/s)、 $l=60$ (mm)の場合にも見られる。この図には一点鎖線で発達している流れの流速分布が示してあり、流速の変化に伴って線状体の運動が変化する様子をいっそう分かり易くした。

すでに述べたように、 $l=30$ (mm)の場合、底面近くの領域では運動方向が急激に鉛直方向に近づく現象と線状体が鉛直方向に回転する現象が見られた。これに対し、 $l=60$ (mm)の場合、運動方向が急激に鉛直方向に近づく現象はわづかに生じているが、線状体が鉛直方向に回転する現象は見られない。図6.67から、線状体がこの

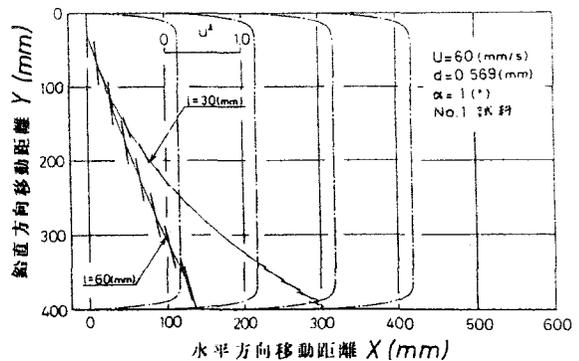


図6.58 落下軌跡におよぼす長さの影響

領域に入るときの \dot{Y} の値は、 $l=60(mm)$ の方が姿勢が鉛直に近い
ため、 $l=60(mm)$ の場合、約 $214(mm/s)$ 、 $l=30(mm)$ の場合、
約 $75(mm/s)$ と大きい。また、十分に発達した流れ中での場合
(約 $163(mm/s)$)と比べても大きいことが分かる。しかも、
この領域に入るときの水平方向移動距離は $l=30(mm)$ の場合
より小さいので、流れの発達程度は小さく、この領域はいっそ
う狭く、流速の変化も小さい。したがって、 $l=60(mm)$ の場合、
短時間のうちに底面に到達してしまい、図6.76を見れば分か
るように角速度 θ は急激に減少し始めるが、負の値にはならな
い。また、運動方向が急激に鉛直方向に近づくことも、 \dot{X} 、 \dot{Y} の
変化を表わす図6.65および図6.67から、 \dot{X} は急激に減少し、
 \dot{Y} が増大する傾向を示すことから推察できる程度であり、十
分に発達した流れ中での場合のように明確には現われない。
なお、 $l=60(mm)$ の場合、運動方向と鉛直線のなる角度が θ
より大きい状態が底面に到達するまで続く。さらに、表6.3、
6.7、6.11の比較から、線状体がじゅうぶんに回転しないうち
に底面近くの領域に入り、流速分布の影響で dY/dX が最小にな
るため、そのときの θ の値は助走域での場合がもっとも小さく
なるばかりでなく、 dY/dX の最小値はもっとも大きくなり、 l
 $=30(mm)$ の場合と異なる傾向を示す。しかし、長さの影響を
考察するとき、十分に発達した流れ中での場合と同様に、管路
の高さを考慮する必要がある。

ここで、第4章の実験結果と比較する。

実験では、管内の流れを乱さないようにするため、落下装置
を管路上面に隣接して取付けているので、線状体が落下装置か
ら流れ中に入るとき、急激に流れの向きに回転する現象が生じ、
すべて流れ中に入ったときの姿勢は、たとえば図4.25に示
す $l=30(mm)$ の場合約 20° になる。したがって、計算の場合
とは初期条件が異なることに注意する必要がある。このため
図4.25と図6.58を比較すれば分かるように、鉛直方向に同じ

距離移動したときの姿勢は、実験結果の方が水平に近い状態になっており、また、そのときの水平方向移動距離も実験結果の方が大きくなる。しかし、同一鉛直方向移動距離に対する X の値は長さが小さい方が大きいことおよび同一姿勢に対する X 、 Y の値は長さが大きい方が大きいことなど、長さが落下軌跡におよぼす影響は実験結果と計算結果で一致する。

また、流速が落下軌跡におよぼす影響を表わす図4.43において、実験では、 dY/dX が最小になるまでに鉛直方向に移動する距離は、流速が大きいほど小さいという結果が得られているが、計算では、流速による差は小さいけれども流速が大きいほどこの距離は大きくなった。これは、実験では、線状体が流れ中に入るとき流速が大きいほど急激に回転することが原因している。すなわち、計算の場合と初期条件が異なるからであり、線状体がすべて流れ中に入るように初期位置を設定し、しかも流れを乱さないようにして実験をおこなえば計算の場合と同じ結果が得られると考えられる。

図4.25, 4.43では、底面近くの境界層内で、運動方向が急激に鉛直方向に近づく現象および線状体が鉛直方向に回転する現象は見られない。この現象は、計算でも図6.57, 6.58に示す程度しか現われておらず、実験で確かめることは非常に困難である。計算によると十分に発達した流れ中での場合の方がこの現象は顕著に現われており、したがって、実験的に確かめるには、もっと発達した流れ中で実験をおこなう必要がある。

6.6.2 線状体重心の速度および加速度

管路上面近くの領域では、上面から離れるに従い流速は急激に増大する。したがって、流速が X の変化におよぼす影響を表わす図6.59において、線状体は上面近くの領域で運動を開始するため水平方向に急激に加速される。図6.10 ($U=60$ (mm/s)の場合)に示した流速分布を見れば分かるように、上面から離

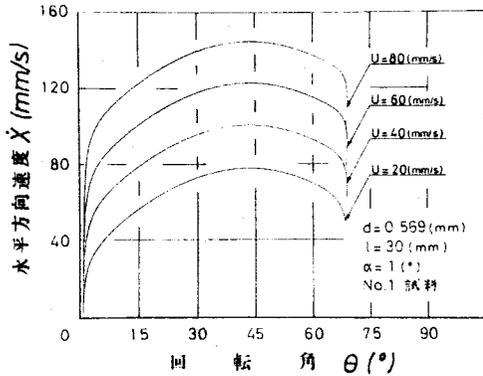


図6.59 水平方向速度におよぼす
流速の影響

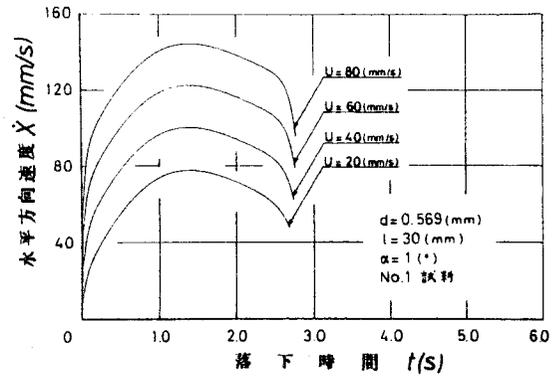


図6.60 水平方向速度におよぼす
流速の影響

れるにつれて流速はほぼ一様になり，しかも，姿勢が水平方向に回転するため，水平方向への加速は除々に減少する。 $l=30$ (mm) の場合， $\theta=43^\circ$ 程度まで水平方向に加速され， \dot{X} が最大になる位置は管路中央部の流速がほぼ一様な領域である。その後，減速されて，線状体が管路底面に近づくと，底面近くの境界層内では流速の変化が大きく，しかも底面に近いほど流速が小さいため， \dot{X} は急激に減速される。なお， $U \geq 40$ (mm/s) の場合，この領域で線状体が鉛直方向に回転するので，姿勢の変化に対する \dot{X} の変化は図に示すような曲線になる。

助走域では流れが発達しているので，線状体が運動をおこなう管路上面および底面近傍の流速の変化が大きい領域は， $U=60$ (mm/s) の場合，それぞれ約 25, 30 (mm) であり， $25 < Y < 370$ (mm) の領域では流速はほぼ一様である。したがって，ほぼ一様な流れの領域に線状体がすべて入るまでの時間は短く（約 0.1 (s)），また，姿勢の変化は一様流れ中での場合とほとんど同じであるので，他の流れ中での結果（図 6.16, 6.31）と比較すると，数値的には異なるけれども，姿勢の変化に対する \dot{X} の変化の様子は一様流れ中での場合とよく一致する。なお， $U=60$ (mm/s) の場合， $Y=370$ (mm) の位置（鉛直方向移動

距離が340(mm)における姿勢は $\theta = 66^\circ$ 程度であり、 $\theta > 66^\circ$ の領域で \dot{X} が急激に変化することが分かる。

つぎに、落下時間に伴って変化する \dot{X} の様子を表わす図6.60において、運動開始と同時に線状体は急激に水平方向に加速され、 $t = 1.4$ (s)程度で \dot{X} は最大となり、その後 \dot{X} はほぼ直線的に減少し(水平方向加速度 \ddot{X} がほぼ一定になる。)、線状体が管路底面に近づくと \dot{X} は急激に減速される。図6.71から流速が姿勢の変化におよぼす影響はわづかであるので、線状体が水平方向に加速される時間および減速され始めてから \dot{X} がほとんど変化しない時間は流速にかかわらずほぼ同じになる。また、 $U = 60$ (mm/s)の場合、 $t = 2.4$ (s)程度で線状体の重心が底面近傍の境界層内に入るため、 $t > 2.4$ (s)で \dot{X} が急激に変化することが分かる。

表6.12に \dot{X} 、 \dot{Y} の最大値およびそのときの θ と t の値を示す。流速が姿勢の変化におよぼす影響はわづかであるので、流速が大きいほど姿勢がより水平に近い状態になるまで水平方向に加速される傾向が見られるが、流速による差はわづかである。ここで、他の流れ中での結果(表6.4, 6.8)と比較すると、助走域での場合、運動開始直後の領域を除き水平方向に加速されている領域では、ほぼ一樣な流れ中で運動をおこなうため、 \dot{X} が最大になるときの姿勢および加速時間は一樣流れ中での結果に近い値となり、姿勢はわづかに水平に近く、加速時間はわづ

表6.12 重心速度の最大値とそのときの姿勢，
落下時間

線状体長さ l (mm)	流速 U (mm/s)	水平方向速度の最大値			鉛直方向速度の最大値		
		\dot{X}_{max} (mm/s)	$\theta (^{\circ})$	t (s)	\dot{Y}_{max} (mm/s)	$\theta (^{\circ})$	t (s)
30	20	77.88	43.0	1.39	259.5	4.75	0.21
	40	100.58	43.3	1.39	254.3	5.06	0.21
	60	122.76	43.4	1.39	252.4	5.41	0.22
	80	144.69	43.4	1.39	251.5	5.41	0.22
60	60	102.70	14.5	1.37	279.1	5.15	0.29

d = 0.569 (mm), No.1 試料

かに短くなる。また、 \dot{X} の最大値の一樣流れ中での場合との差は、流速が大きいほど大きいが、流速が小さいほど流れの発達が進むため、平均流速に対する \dot{X} の最大値の増大割合は、 $U=20$ (mm/s)の場合、約29(%)、 $U=80$ (mm/s)の場合、約16(%)と大きくなる。

また、ここで用いた計算条件のもとでは助走域での流れはあまり発達しておらず、もっとも発達している $U=20$ (mm/s)の場合でも最大流速は $U^*=1.3$ 程度であり、壁面近くの領域を除き助走域での流速は、一樣流れと十分に発達した流れの中間の前者に近い値になるため、 \dot{X} の変化(図6.16, 6.37, 6.59)を比較すれば分かるように、壁面近くで \dot{X} が急激に加速あるいは減速される領域の一部を除き、同一姿勢に対する \dot{X} の値は一樣流れ中での値と十分に発達した流れ中での値の中間の前者に近い値になる。さらに、他の流れ中での場合と同様に、静止流体中での水平方向速度を \dot{X}_0 、重心での流速を Wc とすると、助走域での水平方向速度が、

$$\dot{X} = \dot{X}_0 + Wc \quad (6.77)$$

なる関係で表わされる θ の領域が存在する。この領域は $15^\circ < \theta < 65^\circ$ 程度であり、下限の値は一樣流れ中での場合とほぼ一致し、線状体が底面近傍の境界層内に入るようになるまでの領域で(6.77)式の関係が成立する。また、流速が小さいほど、線状体の水平方向移動距離が小さいため、入口部からの距離は短いから、流れが発達する速度が早いので、線状体が境界層内に入り始める位置における境界層厚さは大きくなる。このため、 θ の上限値は流速が小さいほど小さくなる傾向が見られる。なお、慣性のため、線状体が急激に加速される場合、 $\dot{X} < \dot{X}_0 + Wc$ であり、急激に減速される場合、 $\dot{X} > \dot{X}_0 + Wc$ となる。

いっぽう、流速が \dot{X} の変化におよぼす影響を表わす図6.67

において、他の流れ中での場合と同様に、線状体は運動開始と同時に重力と浮力の差にもとづく外力の作用を受けて鉛直方向に急激に加速される。 $l=30(\text{mm})$ の場合、 $U \leq 80(\text{mm/s})$ の範囲内では、線状体が鉛直方向に加速される領域は $\theta < 6^\circ$ 程度であり、その後抗力が増大するため、 θ の増加に伴ない \dot{Y} は単調に減少する。そして、線状体が底面近傍の境界層内へ入ると、十分に発達した流れ中での場合と比べて姿勢が鉛直に近いたため、助走域での場合、 $l=30(\text{mm})$ でも線状体が鉛直方向に回転し($U \geq 40(\text{mm/s})$ のとき)、 \dot{Y} が増大する現象が見られる。この領域での流速は、管路中央部のほぼ一様な流れ中での同一姿勢の位置における流速より小さく、線状体の軸に直角な方向の速度 u (< 0)の絶対値は境界層内でのの方が大きく、軸方向速度 v (< 0)の絶対値は小さい。ところが、姿勢が水平に近い場合の重心の速度を表わす(6.17)式を考慮すると、 \dot{Y} に寄与する割合は u の方が大きく、同一姿勢での \dot{Y} (< 0)の絶対値は境界層内でのの方が大きくなる。したがって、図6.61に示すように線状体が鉛直方向に回転し始めてからの \dot{Y} の変化はそれまでの曲線の上方に位置する。

また、一様流れ中での場合と比べて、姿勢の変化があつかに

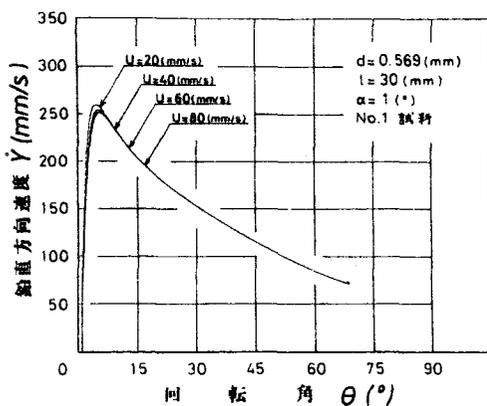


図6.61 鉛直方向速度におよぼす流速の影響

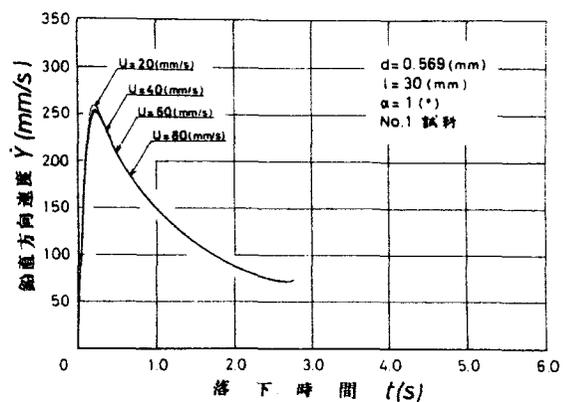


図6.62 鉛直方向速度におよぼす流速の影響

大きくなるため、線状体に作用する抗力の鉛直方向成分がわずかに大きく、鉛直方向に加速されにくくなるが、助走域での場合、流速により流れの発達程度が異なるため、表6.4と表6.12を比較すれば分かるように、一様流れ中での場合との \dot{Y} の最大値の差は流速が小さいほど大きくなる。すなわち、十分に発達した流れ中での場合、鉛直方向に加速されにくくなるという結果から考えて、流れの発達程度が大きい（流速が小さい）ほど鉛直方向に加速されにくくなり、助走域での場合、流速による \dot{Y} の最大値の差は、たとえば、 $U=20(\text{mm/s})$ と $U=80(\text{mm/s})$ の差は、一様流れ中での場合、 $13.5(\text{mm/s})$ 、助走域での場合、 $8.0(\text{mm/s})$ のように小さくなる。したがって、流速の影響が見られる領域は、 $\theta < 10^\circ$ 程度と一様流れ中での場合より狭くなり、この領域では流速が大きいほど \dot{Y} の値は小さい。

つぎに、落下時間に伴って \dot{Y} が変化する状態を表わす図6.62において、線状体が鉛直方向に加速される時間は $0.2(\text{s})$ 程度であり、その後減速される。また、助走域での場合、十分に発達した流れ中での場合と異なり、流速が姿勢の変化におよぼす影響はわずかであるので、加速領域とその後の減速領域の一部を除き、 θ と \dot{Y} の関係は流速にかかわらずほぼ同一曲線で表わされる。なお、 $l=30(\text{mm})$ の場合でも、底面近傍の境界層内で \dot{Y} がふたたび加速される現象がわずかな時間であるが見られる。また、表6.12から、流速が大きいほど加速時間は長くなる傾向にあり、より水平に近い姿勢になるまで加速される。この流速の影響は一様流れ中での場合と一致し、 \dot{Y} が最大になるときの θ の値は、助走域での場合の方が大きい。しかし、図6.17と図6.61を比較すると、 $\theta < 15^\circ$ 程度の領域では、 \dot{Y} は助走域での場合の方が小さいが、これ以上の領域では流れ状態の影響は見られなくなり、 θ と \dot{Y} の関係は一様流れ中での曲線と一致する。なお、この θ の領域におよぼす流速の影響は明確には現われない。ここで、一様流れ中での場合と十分に発達した流れ

中での場合を比較した結果を考慮すると、助走域では \dot{Y} は両者の中間の一樣流れ中での値に近い値になり、流れの発達程度が大きいほど流速分布の影響を大きく受けて、運動開始後の θ のより広い領域で \dot{Y} は一樣流れ中での場合より小さくなることが分かる。しかし、 θ の増加に伴ない流れ状態の影響は見られなくなり、 θ と \dot{Y} の関係は一樣流れ中での曲線と一致する。

つぎに、流速が重心の加速度の変化におよぼす影響を調べる。図6.63において、他の流れ中での場合と同様に、運動開始と同時に線状体は水平方向に加速される。このため、線状体に対する流体の相対速度の軸に直角な方向成分 U_r は小さくなるが、助走域での場合、上面近傍の境界層の領域は狭いけれども、線状体が運動を開始して管路上面から遠ざかるにつれて流速は増大するので、一樣流れ中での場合に比べて U_r の減少はあつがではあるが小さく、軸に直角な方向の加速度 du/dt の急激な減少は押えられる。また、軸方向速度 v (< 0)の絶対値の急激な増大および加速度 dv/dt (< 0)の絶対値の急激な減少も小さくなる。したがって、加速度を表わす(6.18)式を考慮すると \ddot{X} が運

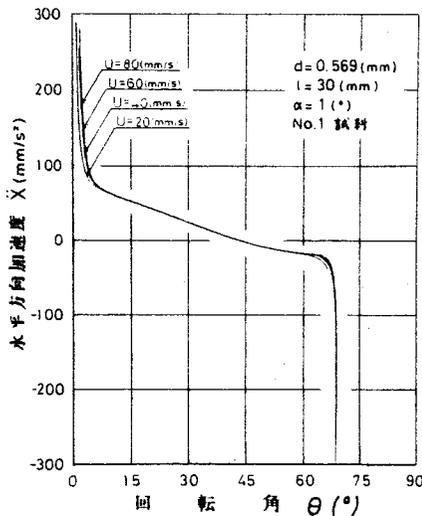


図6.63 水平方向加速度におよぼす流速の影響

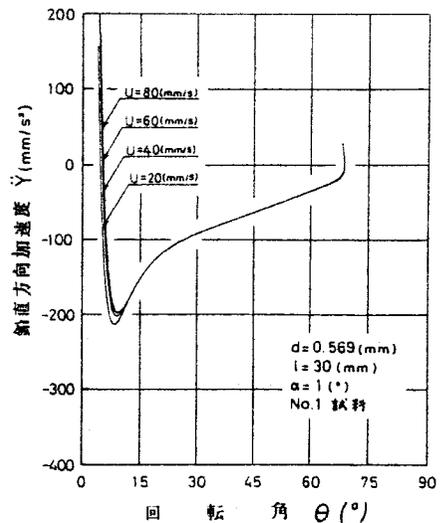


図6.64 鉛直方向加速度におよぼす流速の影響

運動開始時から急激に減少する割合は助走域での場合の方がわずかに小さくなること分かる。しかし、流速の変化が大きい管路上面近くの領域は、十分に発達した流れの場合の方が広く、また、この領域での流速の変化も大きいので、助走域での $\ddot{\alpha}$ の急激な減少は十分に発達した流れ中での場合より大きくなる。すなわち、図6.22, 6.35, 6.63を比較すれば分かるように、助走域での $\ddot{\alpha}$ の変化を表わす曲線は、一様流れ中での曲線と十分に発達した流れ中での曲線の間の前者に近い側に位置する。上面近傍の境界層の領域は狭く、しかも、初期位置が $Y=30(mm)$ であるので、運動開始後短時間のうちに線状体は境界層内から抜け出し、ほぼ一様な流れ中で運動するようになるため、 $\theta < 10^\circ$ 程度の領域では流速の影響が見られるが、これ以上の領域では $U=20\sim 80(mm/s)$ の曲線は一致する。やがて、底面近傍の境界層内へ線状体が入ると $\ddot{\alpha}$ は急激に減少する。姿勢の変化におよぼす流速の影響はわずかであるが、流速が小さいほど流れの発達が早く、境界層の領域が広くなるので、流速が小さい順番に θ の値の小さい領域で他の曲線から離れていく。また、流速が大きいほど流速の場所による差が大きいため、 $\ddot{\alpha}$ はより大きく減少する。したがって、十分に発達した流れ中での場合と同様に、助走域での場合にも、静止流体中あるいは一様流れ中で見られた $\ddot{\alpha}$ が最小になる現象は生じない。しかし、今より管路の高さを大きくして計算する場合、ほぼ一様な流れの領域が広くなるので、 $\ddot{\alpha}$ が極小になる現象が現われる可能性がある。

ここで、他の流れ中での結果(図6.22, 6.35)と比較すると、流れの発達程度が大きいほど、姿勢の変化は流速の影響を大きく受け同じ位置における姿勢は流速により異なる。さらに、流速の変化も流れの発達程度が大きいほど大きい。このため、流れの発達程度が大きくなるにつれて、 $\ddot{\alpha}$ の変化に流速の影響が現われる θ の領域は広くなり、一様流れ中での場合との差は

大きくなる。すなわち、助走域での場合、 $\ddot{\alpha}$ の変化を表わす曲線は一樣流れ中での曲線と十分に発達した流れ中での曲線の上に位置するが、流れの発達程度が大きくなるにつれて、十分に発達した流れ中での曲線に近づく。したがって、流速が小さいほど流れの発達程度が大きく、十分に発達した流れ中での曲線によりいっそう近づくので、運動開始直後の領域で流速の影響が現われる θ の領域が、助走域での場合 ($\theta < 10^\circ$ 程度) の方が一樣流れ中での場合 ($\theta < 15^\circ$ 程度) より小さくなったと考えられる。なお、その他にも、ここで用いた計算条件のもとでは助走域での流れの発達程度が比較的小さいことも原因として考えられる。

いっぽう、図 6.64 において、 $\ddot{\gamma}$ も運動開始時から急激に減少するが、 $\ddot{\alpha}$ に関して述べたと同じ原因により、 $\ddot{\gamma}$ の急激な減少は一樣流れ中での場合よりわずかに小さいが、十分に発達した流れ中での場合よりは大きくなる。すなわち、図 6.23, 6.36, 6.64 を比較すれば分かるように、助走域での $\ddot{\gamma}$ の変化を表わす曲線は、 $\ddot{\alpha}$ の場合と同様に、一樣流れ中での曲線と十分に発達した流れ中での曲線との前者に近い側に位置する。また、上面近傍の境界層の領域は狭く、運動開始後短時間のうちに線状体は境界層内から抜け出し、ほぼ一樣な流れ中で運動するようになることおよび流速が姿勢の変化におよぼす影響はわずかであるので、一樣流れ中での場合と同様に、流速が大きいほど $\ddot{\gamma}$ の最小値の絶対値は小さく、そのときの θ の値は大きくなる。しかし、 $\ddot{\gamma}$ が増大し始めると $U = 20 \sim 80$ (mm/s) の曲線は漸進し、 $\theta > 15^\circ$ 程度の領域では流速の影響は見られなくなり、曲線は一致する。そして、姿勢が水平方向に近づくにつれて $\ddot{\gamma}$ は 0 に近づくが、やがて、底面近傍の境界層内へ線状体が入るようになること、そのときの姿勢が比較的鉛直に近いこと、 $l = 30$ (mm) の場合でも線状体が鉛直方向に回転する現象が生じ、 $\ddot{\gamma}$ は急激に増大する。なお、流速が小さいほど境界層の領域が広く

なるので、流速が小さい順番に θ の値の小さい領域で他の曲線から離れていく。また、角速度の変化を表わす図6.72から、流速が大きいほどこの領域で姿勢が大きく変化するため、 $\ddot{\gamma}$ はより大きく増大する。

ここで、他の流れ中での結果(図6.23, 6.36)と比較すると、 $\ddot{\gamma}$ に関して述べたと同じ原因により、流れの発達程度が大きくなるにつれて、 $\ddot{\gamma}$ の変化に流速の影響が現われる θ の領域は広くなり、一様流れ中での場合との差は大きくなる。ただし、流れの方向が水平方向であるので、この θ の領域および一様流れ中での場合との差は $\ddot{\gamma}$ の場合より小さい。したがって、助走域での場合、 $\ddot{\gamma}$ の変化を表わす曲線は一様流れ中での曲線と十分に発達した流れ中での曲線の間位置するが、流れの発達程度が大きくなるにつれて、十分に発達した流れ中での曲線に近づく。すなわち、流れの発達程度が大きくなるにつれて、 $\ddot{\gamma}$ の最小値の絶対値は小さく、そのときの θ の値は大きくなる。ここで、助走域での場合、流速が小さいほど流れの発達程度が大きいことを考慮すると、流速が小さいほど、一様流れ中での場合より $\ddot{\gamma}$ の最小値の絶対値はいっそう小さく、そのときの θ の値はいっそう大きくなり、これらの値の流速による差は一様流れ中での場合より小さくなることが分かる。助走域での結果、表6.13と一様流れ中での結果、表6.5を比較すると、両者の $\ddot{\gamma}$ の最小値の絶対値およびそのときの θ の値の差は、たとえば、 $U=20$ (mm/s) の場合、 27.6 (mm/s²)、 3.7° 、 $U=80$ (mm/s) の場合、 14.4 (mm/s²)、 0.9° のように流速が小さいほど大きくなり、これらの値の流速による差は助走域での場合の方が小さいことが明確に分かる。

表6.13 鉛直方向加速度の最小値とそのときの姿勢

線状体長さ l (mm)	流速 U (mm/s)	鉛直方向加速度の最小値	
		$\ddot{\gamma}_{\min}$ (mm/s ²)	θ (°)
30	20	-213.7	8.35
	40	-202.6	9.00
	60	-198.6	9.07
	80	-196.9	9.41
60	60	-81.6	6.76

d=0.569 (mm), No.1 試料

つぎに、長さが異なると重心の速度の変化にどのような差が現われるかを調べる。 \dot{X} の変化を表わす図6.65, 6.66において、線状体が運動を開始する上面近傍の境界層の領域は狭く($U=60$ (mm/s)の場合, 25 (mm)程度), $l=30$ (mm)の場合, $\theta=2.5^\circ$, $t=0.7$ (s)程度で線状体がすべてほぼ一樣な流れ中に入るが, $l=60$ (mm)の場合, $\theta=4.0^\circ$, $t=0.16$ (s)程度でこの領域に入る。すなわち、長さが大きい方が流速の小さい領域で運動する時間が長くなる。このため運動開始直後の領域では、同一姿勢に対する \dot{X} の値は長さが大きい方が小さくなる。この現象は一樣流れ中での場合(図6.18)見られなかったが、十分に発達した流れ中での場合(図6.37)現われており、この場合にも長さにかかわらず初期位置が同じであるので、軸方向に沿って分布する流速の平均値は長さが小さいほど大きいことも原因していると考えられる。その後、 $l=60$ (mm)の線状体がほぼ一樣な流れ中で運動するようになると、一樣流れ中での場合と同様に同一姿勢における \dot{X} の値は長さが大きい方が大きくなる。また、線状体がすべてほぼ一樣な流れ中に入った後 \dot{X} の増大が急激に減少する様子は、長さが大きい方が姿勢の変化が小さいため顕著に現われる。やがて、線状体が底面近傍の境界層内へ

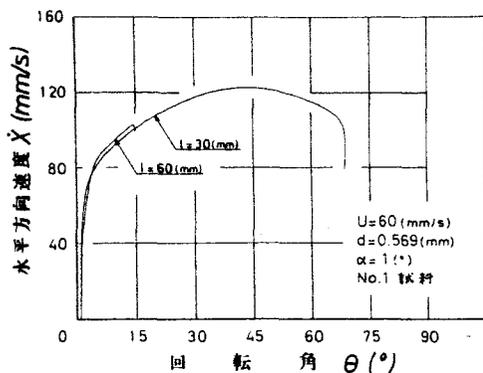


図6.65 水平方向速度におよぼす長さの影響

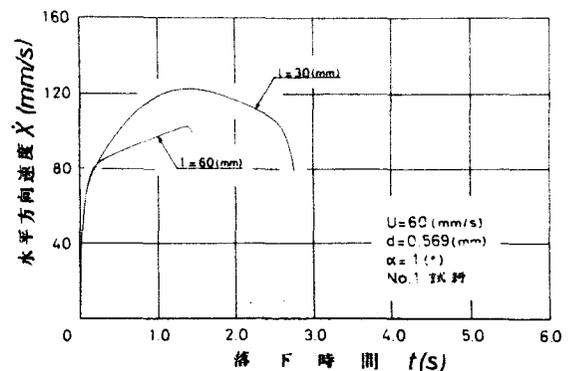


図6.66 水平方向速度におよぼす長さの影響

入り始めると $\dot{\gamma}$ は急激に減速される。このときの姿勢は、長さが大きいほど姿勢の変化が小さいため、より鉛直に近く、図6.67から $\dot{\gamma}$ の値は、 $l=60(\text{mm})$ の方が非常に大きく、しかも境界層内へ入るときの水平方向移動距離は $l=30(\text{mm})$ の場合より小さいのでこの領域はいっそう狭い。したがって、 $l=60(\text{mm})$ の場合、 $\dot{\gamma}$ の急激な減少はわづかな時間見られるだけである。

いっぽう、 $\dot{\gamma}$ の変化を表わす図6.67, 6.68において、他の流れ中での場合と異なり、運動開始直後の θ の小さい領域($\theta < 3.5^\circ$ 程度)で同一姿勢に対する $\dot{\gamma}$ の値は長さが小さい方が大きくなる。図6.68を見れば分かるように、線状体が鉛直方向に急激に加速されている領域では、同一落下時間における $\dot{\gamma}$ の値は長さが大きい方がわづかに大きいが、姿勢の変化を表わす図6.75から、運動開始直後の領域では長さが大きい方が線状体の軸方向に沿って分布する流速の差が大きいため、角速度が大きくなり、 $\theta < 4^\circ$ 程度の領域では同一落下時間での θ の値は大きい。このため、 θ の小さい領域で上述のような結果が生じたのである。これに対し、一様流れ中での場合にも、十分に発達した流れ中での場合にも、つねに同一落下時間における θ の値は長さが大きいほど小さいので、この現象は生じない。

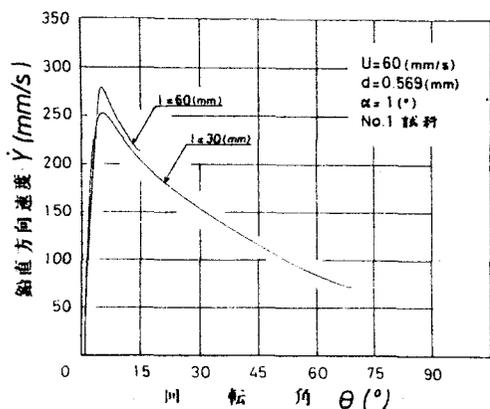


図6.67 鉛直方向速度におよぼす長さの影響

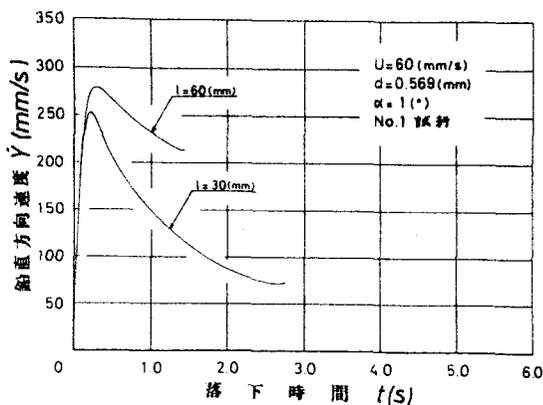


図6.68 鉛直方向速度におよぼす長さの影響

また、 $\theta < 4^\circ$ 程度の領域で長さが大きい方が姿勢の変化が大きいことが、運動開始直後の領域で長さが大きい方が同一姿勢に対する $\dot{\alpha}$ の値が小さくなる原因の一つであると考えられる。

しかし、 $\theta > 3.5^\circ$ 程度の領域では、他の流れ中での場合と同様に長さが大きい方が $\dot{\gamma}$ の値は大きくなる。その後、抗力が増大するため、 θ の増加に伴ない $\dot{\gamma}$ は単調に減少し、線状体が底面近傍の境界層内へ入ると $\dot{\gamma}$ は加速され始める。境界層内での $\dot{\gamma}$ の変化は長さにより異なり、 $l = 30(\text{mm})$ の場合、 $\dot{\gamma}$ は加速され続けるが、 $l = 60(\text{mm})$ の場合、 $\dot{\gamma}$ はいったん加速されることがすぐに減速されて管路底面に到達する。この様子は $\dot{\gamma}$ の変化を表わす図6.70を見ればいっそう明確に分かる。しかし、 $l = 60(\text{mm})$ の場合、境界層内へ入るときの $\dot{\gamma}$ の値は大きく($l = 60(\text{mm})$ の場合、約 $214(\text{mm/s})$ 、 $l = 30(\text{mm})$ の場合、約 $75(\text{mm/s})$)、しかも境界層の領域は狭いため、この領域で運動する時間は非常に短い。

助走域での場合、姿勢の変化に対する $\dot{\gamma}$ の変化は、一樣流れ中での曲線と十分に発達した流れ中での曲線の間に位置する曲線で表わされることから、他の流れ中での場合と同様に $\theta > 60^\circ$ 程度の領域では長さの影響を受けないと考えられる。

また、表6.4, 6.8, 6.12を比較すると、助走域での場合、運動開始直後の領域で長さが大きい方が姿勢の変化が大きい。ため、 $\dot{\gamma}$ が最大になるときの θ の値の長さによる差は、3者のうちでもっとも小さく、 $\dot{\gamma}$ の最大値の長さによる差は一樣流れ中での場合がもっとも大きく、十分に発達した流れ中での場合がもっとも小さくなる。

つぎに、重心の加速度の変化を表わす図6.69, 6.70において、 $\ddot{\alpha}$ は運動開始時から急激に減少するが、 $\theta < 4^\circ$ 程度の領域では同一姿勢に対する $\ddot{\alpha}$ の値は長さが大きい方が大きくなる。これは、運動開始直後の領域では長さが大きい方が流速分布の影響を大きく受けるため、姿勢の変化が大きいことが主な原

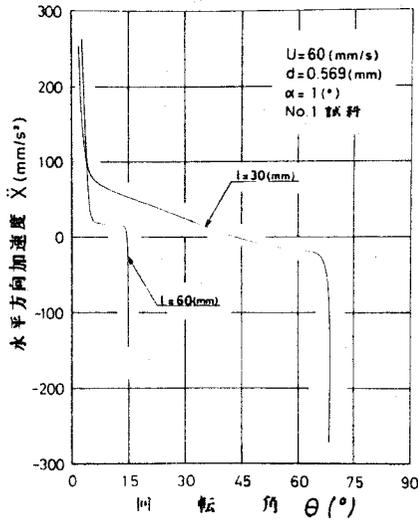


図6.69 水平方向加速度におよぼす長さの影響

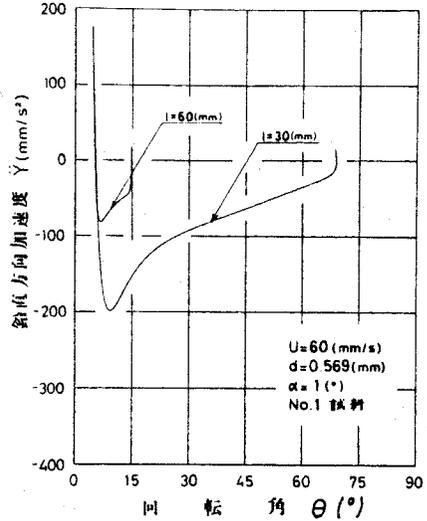


図6.70 鉛直方向加速度におよぼす長さの影響

因である。

助走域での場合，上面近傍の境界層の領域は狭く，短時間のうちに線状体はほぼ一様な流れ中に入り， \ddot{X} の減少割合は急激に低下する。この様子は長さが大きい方が姿勢の変化が小さいため顕著に現われる。なお， $l=60$ (mm)の場合， \ddot{X} はほとんど一定となる。これは，図6.66に示す \dot{X} と \ddot{X} の関係で \ddot{X} がほぼ直線的に変化することからも分かる。やがて，線状体が底面近傍の境界層内へ入り始めると，この領域では底面に向けて流速が急激に低下しているので， \ddot{X} は急激に減少する。また， $l=30$ (mm)の場合，線状体が水平方向へ減速されている領域で \ddot{X} は急激に減少するが， $l=60$ (mm)の場合，まだじゅうぶんに水平方向に加速されないうちに，急激に減速される。

いっぽう， \ddot{Y} の変化におよぼす長さの影響は，とくに底面近傍の境界層内で顕著に現われている。

線状体が底面近傍の境界層内へ入り始めると，境界層内では底面に向けて流速が急激に低下しているので，軸に直角な方向の加速度 du/dt (<0)の絶対値は急激に増大し，したがって，軸

に直角な方向の速度 u は減少する。なお、落下軌跡を示す図6.58を見れば分かるように、 $l=30(\text{mm})$ の場合、 $u < 0$ であるが、 $l=60(\text{mm})$ の場合、姿勢が鉛直に近く $u > 0$ ，すなわち、運動方向と鉛直線のなす角度が θ より大きい。いっぽう、軸方向正の向きに作用する抗力が減少するため、軸方向加速度 $dv/dt (> 0)$ は減少し、軸方向速度 $v (< 0)$ の絶対値の減少割合は低下する。したがって、重心の加速度を表わす(6.18)式を考慮すると、 $\ddot{\gamma} (> 0)$ が急激に減少し始め、 $\ddot{\gamma} (< 0)$ の絶対値の減少割合は低下する。ただし、図6.70では、今までと同様に鉛直方向は下向きを正の向きとして $\ddot{\gamma}$ の変化を示しているので、図の符号とここで述べている $\ddot{\gamma}$ の符号は正負逆である。

その後も du/dt の絶対値は増大し、 u は減少し続けるが、流速が急激に低下しているため、線状体に対する流体の相対速度の軸方向成分 $V_r (> 0)$ は増大し、軸方向に作用する抗力が増大する。したがって、 dv/dt は増大し始め、 v の絶対値の減少割合は増大する。 $l=30(\text{mm})$ の場合、姿勢が比較的水平に近いため、(6.18)式から $\ddot{\gamma}$ の変化に対して du/dt の変化が支配的であるので、 $\ddot{\gamma} (> 0)$ が減少して正の値から負の値へ移り、線状体は鉛直下向きに加速されて管路底面に到達する。これに対し、 $l=60(\text{mm})$ の場合、姿勢が鉛直に近いため、 $\ddot{\gamma}$ の変化に対して dv/dt の変化が支配的になるので、 $\ddot{\gamma}$ が減少していったん正の値から負の値へ移った後ふたたび正の値へもどる。すなわち、線状体はいったん鉛直方向に加速され始めるがふたたび減速されて管路底面に到達する。以上のように、助走域での場合、境界層の領域が狭く、しかも姿勢の変化が小さいため、底面近くの領域における $\ddot{\gamma}$ の変化の様子は、十分に発達した流れ中での場合と異なり、長さにより違ったものになる。しかし、表6.13から他の流れ中での場合と同様に、長さが小さい方が $\ddot{\gamma}$ の最小値の絶対値およびそのときの θ の値は大きくなる。

以上の結果をまとめると、助走域での流れ状態は、一様流れ

から十分に発達した流れへ移行する途中の段階であるので、重心の速度および加速度の変化状態も一様流れ中での場合と十分に発達した流れ中での場合の間に位置する。そして、流れの発達程度が大きくなるにつれて十分に発達した流れ中での場合に近づく。ここで用いた計算条件のもとでは流れの発達程度が比較的小さいため、一様流れ中での場合に近い側に位置する結果になった。また、平均流速により流れの発達程度が異なるため、この影響が流速の影響に含まれ、流速の影響は他の流れ中での場合より現われにくくなった。

最後に、第4章の実験結果と比較する。計算と同じ試料条件の結果、図4.26, 4.27を見ると、実験では線状体が流れに入ったとき急激に回転する現象が生ずるため、 $\dot{\gamma}$ に長さの影響がもっとも顕著に現われる運動開始直後の領域($\dot{\gamma}$ が加速された後減速され始める領域)でのデータがないので、長さの影響が見られない。また、 $\dot{\alpha}$ に関しては、計算結果(図6.65)を見れば分かるように、長さによる差は小さいので、実験では明確に現われなかったと考えられる。

しかし、比較的急激な回転が小さい場合の実験結果、図4.28~4.37において、長さの影響が明確に現われ、同一姿勢に対する $\dot{\alpha}$, $\dot{\gamma}$ の値は長さが大きいほど大きく、また、長さが小さいほどより水平に近い姿勢になるまで鉛直方向に加速される。これらの傾向は計算結果と一致するが、図4.29において、 $\dot{\gamma}$ が最大になるときの θ の値には運動開始直後の急激な回転の影響、すなわち長さが小さい方がこの急激な回転は大きい、が含まれているため、長さによる差が大きくなっているが、線状体がすべて流れ中に入った状態から運動を開始する場合、この差はもっと小さくなると考えられる。さらに、姿勢が水平方向に近づくにつれて $\dot{\alpha}$, $\dot{\gamma}$ には長さの影響が除々に見られなくなることは、計算結果、図6.65, 6.67, から直接には分かりにくいから、助走域での場合と一様流れ中での場合の比較から推察できる。

また、実験では、流速が小さいほど長さが $\dot{\gamma}$ におよぼす影響が明確に現われるという結果が得られた。一様流れ中での結果(図6.19)と静止流体中での結果(図6.21)を比較すると、長さによる $\dot{\gamma}$ の差は一様流れ中での方が大きくなり、助走域での結果(図6.67)と静止流体中での結果を比較すると、後者の方がこの差は大きくなることから、長さが大きいほど上面近傍の境界層内の流速分布の影響を大きく受けて、静止流体中での場合と比べて姿勢の変化がもっと大きくなるのが原因で、流速が大きい方が長さによる $\dot{\gamma}$ の差が小さくなると考えられる。ちなみに、運動開始直後の領域で姿勢の変化が大きいほどこの差は小さくなる。これは、十分に発達した流れ中での結果(図6.39)と助走域での結果を比較すればもっと明確になる。したがって、実験の場合、流速が大きいほど線状体が流れ中に入ったときの急激な姿勢の変化が大きいことが原因となって、長さによる $\dot{\gamma}$ の差が小さくなったと考えられる。

また、流速が重心の速度におよぼす影響を表わす図4.44, 4.45において、流速が大きいほど、より水平に近い姿勢になるまで水平方向に加速されるという結果が得られているが、これは4.9.2項で述べたように、実験では流速が大きいほど運動開始直後の急激な姿勢の変化が大きいことに起因すると考えられる。なお、この影響で計算結果(図6.59)に比べて実験では曲線が θ の値の大きい側へ寄る傾向が見られる。さらに、 $d=0.569$ (mm)の場合、 $\dot{\gamma}$ には流速の影響が見られない。これは、急激に姿勢が変化することと、計算結果によると、流速の影響が現われる θ の領域は $\theta < 10^\circ$ 程度であり、しかも流速による差はわづかであることが原因である。しかし、図4.47, 4.48に示すように比較的急激な姿勢の変化が小さい場合、実験でも流速の影響が明確に現われ、流速が大きいほど $\dot{\gamma}$ の値は小さいが、やがて、姿勢が水平方向に近づくとつれて流速の影響は見られなくなる。この傾向は計算結果と一致する。しかし、実験の場合、

$\dot{\gamma}$ の変化は流速が大きいほど運動開始直後の急激な姿勢の変化が大きくなる影響を受けるので、流速による $\dot{\gamma}$ の差は計算結果より大きい。流速が大きいほど $\dot{\gamma}$ の値が小さくなるのは、運動開始直後の領域では、線状体に対する流体の相対速度の軸に直角な方向成分 U_1 は流速が大きいほど大きく、軸方向および軸に直角方向に作用する抗力が大きいから、軸方向速度 $v (< 0)$ の絶対値が小さく、軸に直角な方向速度 $u (> 0)$ が大きくなるからである。ところが、実験の場合、これも 1 つの原因になるが、これより流速が大きいほど運動開始直後に姿勢が大きく変化することの方が支配的であると考えられる。

6.6.3 線状体の姿勢および角速度

管路上面近傍の境界層内では壁面から離れるにつれて流速は急激に増大する。このため、線状体の軸方向に沿って流速が分布し、しかも先端部に近いほど大きいので運動開始時に線状体に作用する回転モーメント N は姿勢を水平方向に回転させる向きに働く。助走域での場合、流速が小さいほど流れの発達早いので、十分に発達した流れ中での場合と異なり、 N の値は流速が小さいほど大きくなる。しかし、境界層の領域は狭く、流速の変化も小さいので、 N の変化を表わす図 6.50 と図 6.74 を比較すれば分かるように、 N の値は十分に発達した流れ中での場合比べて小さく、また、流速による差もわづかである。したがって、運動開始直後の領域では、角速度は十分に発達した流れ中での場合より小さいが、 N の値が正であることから、一樣流れ中での場合より大きくなる。

いっぽう、運動開始直後の領域では、流体に対する線状体の相対速度の軸に直角な方向成分、 $u - U_1 (< 0)$ 、と軸方向成分、 $v - V (< 0)$ 、の積は、流速が大きいほど $u - U_1$ の絶対値が大きいため大きく、さらに、(6.15) 式で表わされる流速の軸に直角な方向成分の重心回りの一次モーメントの時間的変化率 $d\tau_2/dt$

(>0) も流速が大きいほど大きい。したがって、 N は小さいけれども $(u-U_1) \cdot (v-U)$ および dU_2/dt が大きいので、運動方程式(6.16)式の第3式を考慮すると、運動開始直後の領域では流速が大きいほど角速度 γ が大きいことが分かる。しかし、図6.73を見れば分かるように、流速による γ の差はわずかである。とくに、 $U \geq 40$ (mm/s) では流速の影響はほとんど見られない。そして、 γ の増大に伴ない回転モーメント N は線状体の回転を押える向きに作用し始める。また、 dU_2/dt が減少し始め、流れの発達程度が小さい場合 ($U \geq 40$ (mm/s) の場合)、 $(u-U_1) \cdot (v-U)$ は運動開始時から減少し、 $t=0.1$ (s) 程度で極小となりふたたび増大する。このため、 $U \geq 40$ (mm/s) の場合、角加速度 $d\gamma/dt$ は $t=0.1$ (s) 程度で極小となる。これに対し、 $U=20$ (mm/s) の場合、 $(u-U_1) \cdot (v-U)$ は運動開始時からしばらくの間増大するため、 $U \geq 40$ (mm/s) の場合ほど $d\gamma/dt$ は小さくならないが、やはり $t=0.1$ (s) 程度で極小となる。なお、 $d\gamma/dt$ の極小値は流れの発達程度が小さいほど(流速が大きいほど)小さくなる。 γ が加速されている領域で、 $d\gamma/dt$ が極小になる現象は一様流れ中での場合(図6.25)見られたが、十分に発達した流れ中での場合(図6.48)生じなかったことをあわせて考えると、流れの発達程度が小さいほど現われ易いことが分かる。したがって、図6.72, 6.73において、 γ が加速されている領域で γ の変化には変曲点が見られる。

その後、線状体がほぼ一様な流れ中で運動するようになると流速の影響は見られなくなり、 γ の変化は流速にかかわらず同一曲線で表わされる。前項で述べたように、 $15^\circ < \theta < 65^\circ$ 程度の領域で $\dot{\gamma}$ に対して(6.77)式の関係が成立することおよび $\theta > 10^\circ$ 程度の領域では $\dot{\gamma}$ は流速にかかわらず同一曲線で表わされること、さらに、流れが発達しているのではほぼ一様な流れ中でも dU_2/dt は0にはならないが、小さい値であるため角加速度の変化にはほとんど寄与しないことから、 $15^\circ < \theta < 60^\circ$ 程

度の領域では、一様流れ中での場合述べたように、流れに対する線状体の相対的な並進運動が流速にかかわらず同じになるので、線状体の回転運動も流速の影響をほとんど受けない。(6.4.3 項参照)

これは、発達程度が比較的小さい流れ中で計算をおこなっているため成立つことであり、一様流れ中での結果と十分に発達した流れ中での結果を考慮すれば分かるように、流れの発達程度が大きくなるにつれて、姿勢の変化におよぼす流速の影響は大きくなる。

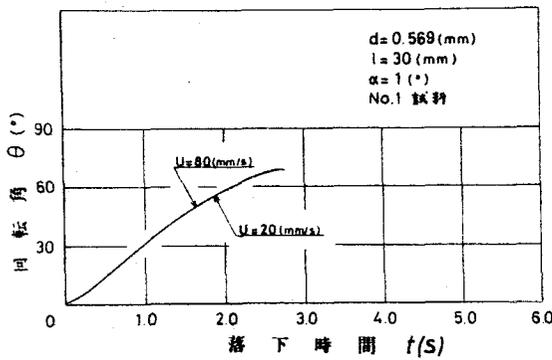


図 6.71 姿勢におよぼす流速の影響

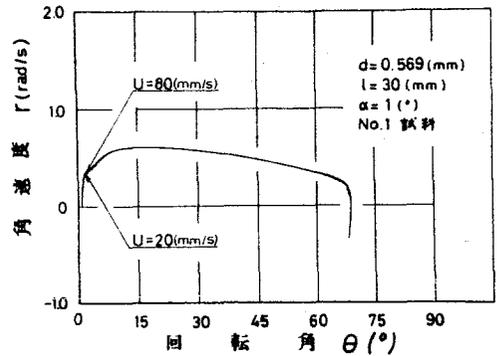


図 6.72 角速度におよぼす流速の影響

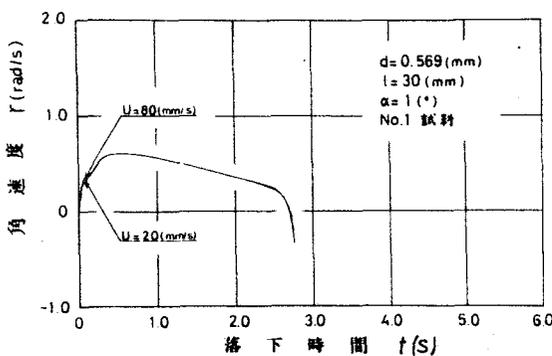


図 6.73 角速度におよぼす流速の影響

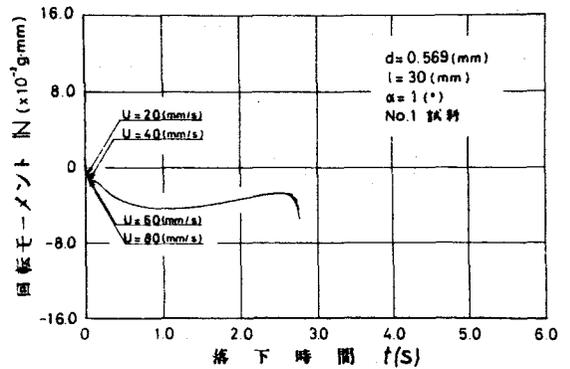


図 6.74 回転モーメントにおよぼす流速の影響

やがて、線状体が底面近傍の境界層内へ入るようになると、この領域では壁面に向けて流速が急激に減少しているので、姿勢を鉛直方向に回転させる向きに作用する回転モーメント M が急激に増大し、 γ は急激に減少する。なお、場所による流速の差は流速が大きいほど大きいので線状体に作用する回転モーメント M は大きくなり、 γ は流速が大きいほどいっそう急激に減少し、 $U \geq 40$ (mm/s) の場合、 γ は負の値になる。すなわち、線状体は鉛直方向に回転し始める。また、流速が小さいほど境界層の領域は広いので、流速の小さい順番に θ および α の値の小さい領域でこの現象が現われる。助走域での場合、姿勢の変化が小さく、境界層内へ入るときの姿勢が十分に発達した流れ中での場合と比べて鉛直に近いので、 $\ell = 30$ (mm) の場合でも線状体が鉛直方向に回転する現象が見られたと考えられる。

以上のように、角速度の変化に流速の影響が見られるのは、運動開始直後の領域と底面近傍の境界層内で線状体が運動するときであり、前者の領域では流速による γ の差はわずかであるので、図6.71において、姿勢の変化におよぼす流速の影響はほとんど見られない。しかし、計算によると、運動開始直後の領域で流速が大きいほど角速度が大きくなるため、同一落下時間における θ の値は大きいことが分かる。また、線状体がほぼ一様な流れ中に入った後しばらくの間 γ は加速されるので、表6.14を見れば分かるように、 γ の最大値およびそのときの θ と α の値には流速はほとんど影響をおよぼさない。

ここで、他の流れ中での場合と比較する。表6.6, 6.10, 6.14から、流れの発達程度が大きい(十分に発達した流れ

表6.14 角速度の最大値とそのときの姿勢, 落下時間

線状体長さ l (mm)	流速 U (mm/s)	角速度の最大値		
		r (rad/s)	θ (°)	t (s)
30	20	0.6083	16.2	0.56
	40	0.6086	16.6	0.56
	60	0.6089	16.3	0.55
	80	0.6092	16.7	0.56
60	60	0.4597	2.0	0.05

$d = 0.569$ (mm), No.1 試料

状態に近い)ほど、流速分布の影響を大きく受けて加速時間は短いけれども γ の最大値は大きくなる。また、一様流れ中での結果(図6.25)と図6.72を比較すると、助走域での場合、 γ の変化に流速の影響がほとんど見られない $15^\circ < \theta < 60^\circ$ 程度の領域での角速度の変化は、一様流れ中での場合と一致することが分かる。そして、その他の領域では、流速分布の影響を受けるため、これより小さい領域では助走域での方が γ の値は大きく、これ以上の領域では逆に小さくなる。したがって、一様流れ中での場合と十分に発達した流れ中での場合を比較した結果を考慮すると、助走域での場合、線状体が底面近傍の領域に入り γ が急激に減少する領域を除き、 γ の変化を表わす曲線は一様流れ中での曲線と十分に発達した流れ中での曲線の間位置し、流れの発達程度が大きくなるにつれて、十分に発達した流れ中での曲線に近づく。また、流れの発達程度が大きくなるにつれて γ の変化に流速の影響が現われる θ の領域は広くなり、一様流れ中での場合との差は大きくなる。さらに、十分に発達した流れ中での結果から、発達程度が同じであれば流速が大きいほど一様流れ中での場合との差が大きいことが分かり、助走域での場合、流速により流れの発達程度が異なる影響で、角速度の変化におよぼす流速の影響がわづかしか現われなかったと考えられる。

これまでは、 $\ell = 30(\text{mm})$ と比較的長さが小さい場合であったが、十分に発達した流れ中での場合(図6.52)、長さが大きいほど、運動開始直後の領域で流速分布の影響を大きく受けるため、一様流れ中での場合と比べて角速度はより大きく加速されるという結果が得られており、助走域での場合にもこの現象が現われると考えられる。

落下時間に伴って変化する角速度の様子を表わす図6.77において、 $\ell = 60(\text{mm})$ の場合、 γ は急激に加速され $t = 0.05(\text{s})$ で最大となり、その後急激に減速され、 $t = 0.16(\text{s})$ 程度で線

状体があべてほぼ一様な流れ中に入る。運動開始直後の領域では、 γ は $l=30$ (mm)の場合より大きくなる。これは、初期位置付近の境界層の領域が約25(mm)と狭いことと、初期位置が $Y=30$ (mm)であるため、糸状体の軸方向に沿って分布する流速の差は $l=60$ (mm)の方が非常に大きく、図6.78を見れば分かるように姿勢を水平方向に回転させる向きに作用する回転モーメント N が大きくなり、しかも $l=60$ (mm)と $l=30$ (mm)の N の比は両者の慣性モーメントの比よりはるかに大きくなるからである。このように γ が大きくなるため、図6.75において

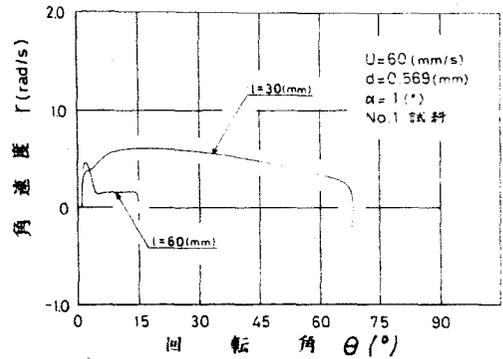
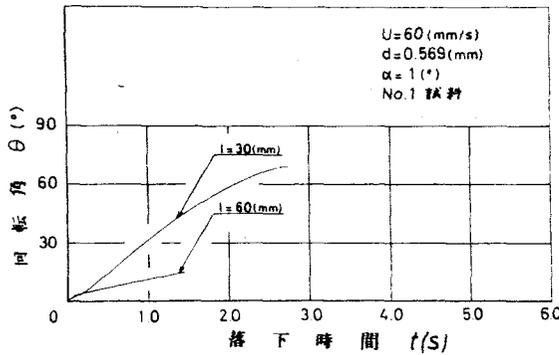


図6.75 姿勢におよぼす長さの影響

図6.76 角速度におよぼす長さの影響

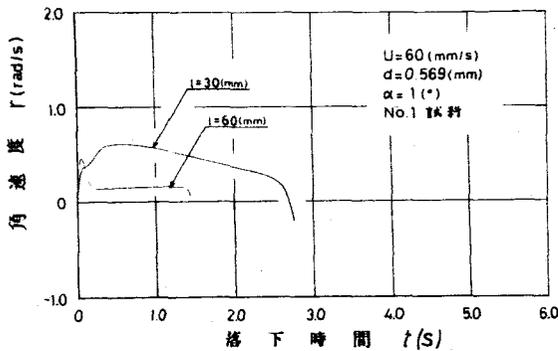


図6.77 角速度におよぼす長さの影響

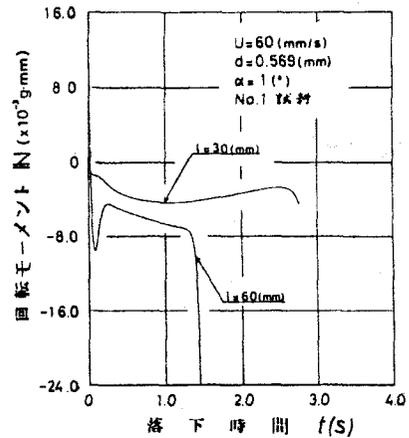


図6.78 回転モーメントにおよぼす長さの影響

$\theta < 4^\circ$ 程度の領域では、 $l = 60$ (mm) の方が同一落下時間における θ の値は大きくなる。この現象は他の流れ中での場合には見られなかったことから、この現象には境界層の領域の大きさ、初期位置および長さの3者が関係していると考えられる。すなわち、境界層の領域がもっと広い場合あるいは、 $l = 30$ (mm) と $l = 60$ (mm) の線状体の後端の位置が同じになるように初期位置を変更する場合、この現象が現われな可能性はある。

$l = 60$ (mm) の場合、線状体がほぼ一様な流れ中に入った後も γ はしばらくの間減少し続けるが、 γ の減少に伴ない線状体の回転を押える向きに作用する回転モーメント N は減少し、 $d\Omega/dt$ は小さい値になるので角加速度 $d\gamma/dt$ の変化にはほとんど寄与しなくなり、姿勢がまだ鉛直に近く流体に対する線状体の相対速度の積 $(u - U_1)(v - V)$ は増大し続けているため、 $t = 0.27$ (s) ($\theta = 5^\circ$ 程度) で γ は極小となり、その後徐々に増大する。 γ が極小になった後ふたたび加速される現象は、 $l = 30$ (mm) の場合、 γ の変化に変曲点が現われることに対応する。この場合、 $l = 60$ (mm) の場合と比べて流速分布の影響が小さいため、運動開始直後の領域で γ の急激な増大が小さく、変曲点が現われるにとどまったと考えられる。 γ がふたたび加速され始めてからしばらくすると γ の変化は一様流れ中での場合とほぼ一致するようになる。なお、このときの時間および姿勢は約 0.5 (s)、 7° である。

やがて、線状体が底面近傍の境界層内へ入り始めると、流速分布の影響を受けて γ は急激に減速されるが、 $l = 60$ (mm) の場合、短時間のうちに底面に到達するため、負の値にはならない。すなわち、線状体が鉛直方向に回転することはない。なお、運動開始後の領域を除き、他の流れ中での場合と同様に、長さが小さい方が角速度は大きく線状体が回転するのに要する時間は短い。

以上の結果をまとめると、助走域での場合、角速度の変化状

態も一様流れ中での場合と十分に発達した流れ中での場合の間に位置し、流れ状態が異なる影響が現われるのは壁面近傍の境界層の領域であり、線状体がほぼ一様な流れ中で運動しているときには、一様流れ中での場合とほぼ一致する。また、流速により流れの発達程度が異なるため、流速の影響はわずかに現われない。さらに、ここで用いた計算条件のもとでは流れの発達程度が比較的小さいため、運動開始直後の領域で長さが大きい方が角速度が大きくなるという現象が見られた。

最後に、実験結果と比較する。図4.32において、実験では線状体が流れ中に入ったとき急激に流れの向きに回転させられるため、計算結果で見られた運動開始直後の領域で長さが大きい方が角速度が大きくなるという現象は現われない。また、この急激な姿勢の変化のため、長さが小さい場合、壁面近傍の境界層内に入るときの姿勢がほとんど水平であるので、線状体が鉛直方向に回転する現象は見られず、長さが大きい場合、姿勢は水平になっていないけれども、鉛直方向速度が大きく短時間のうちに底面に到達するため、この現象は見られない。計算によると、十分に発達した流れ中で長さの大きい線状体が運動する場合、この現象が顕著に現われたことから、もっと発達程度の大きい流れ中で実験をおこなえば、実験でもこの現象が見られると考えられる。なお、長さが大きいほど角速度が大きくなり、線状体が回転するのに要する時間が短いことは、実験でも計算でも確かめられた。

流速の影響を表わす図4.49, 4.50から、流速は姿勢の変化にはほとんど影響をおよぼさず、静止流体中での場合とほぼ同じになるという結果が得られている。計算では、壁面近傍の境界層の領域で流速の影響が認められたが、その他の領域で線状体が運動する場合、流速の影響は見られず、これは実験結果と一致する。実験と計算では初期条件が異なるため、上面近傍の境界層の領域での姿勢の変化を直接比較することはできないが

、たとえ線状体がすべて流れ中に入るように初期位置を設定して実験をおこなったとしても、計算によると流速の影響はわずかであるので、確かめることは非常に困難である。流速の影響を実験的に確かめるにはもっと発達した流れ中で実験をおこなう必要があると考えられる。

6.7 ノズル内流れ中における線状体の運動

この節では、ノズル入口部平均流速 $U = 20, 40, 60, 80 \text{ (mm/s)}$ 、長さ $l = 15, 30, 45, 60 \text{ (mm)}$ 、初期角度 $\alpha = 1^\circ, 10^\circ, 20^\circ, 30^\circ, 90^\circ$ およびノズルの傾き $\gamma = 1/4, 1/3, 1/2$ に対する計算結果について説明し、6.4~6.6節の一樣流れ中および矩形管内流れ中での結果（計算は、流速がノズルの交点を中心とする円周上で一樣であるような流れを考えておこなっているので、とくに一樣流れ中での結果）と比較して、流速のみならず流れの方向が場所的に変化する流れ中で線状体が運動する場合、その運動特性がどのようなになるか、また、運動特性に諸要因がいかなる影響をおよぼすかを明らかにする。なお、運動特性および要因の影響を調べる時、第5章の実験結果もあわせて実験と計算の両面から考察する。

6.7.1 線状体の落下軌跡

図 6.79 に傾き $\gamma = 1/3$ のノズル内流れ中における $l = 30 \text{ (mm)}$ 、 $U = 20 \sim 80 \text{ (mm/s)}$ の落下軌跡を示す。図中の線状体の時間間隔は $\Delta t = 0.2 \text{ (s)}$ であり、線状体の軸方向に沿って流速および流れの方向が変化するので、線状体長さは X, Y 座標のスケールに従って縮小した寸法で表わしてある。なお、ノズル入口部上面を原点にとっているため、初期位置は $X = 100 \text{ (mm)}$ 、 $Y = 100\gamma + Y_0$ で、この場合 $Y = 66.3 \text{ (mm)}$ である。また、この項に記載する落下軌跡はすべて、線状体の時間間隔、長さ

および初期位置に関しては図6.79と同一の表現方法で図示してある。

他の流れ中での場合と同様に、線状体は運動開始すると同時に水平方向にも流体から抗力を受けるため、水平方向にも急激に加速され、鉛直方向に対してある角度をもって運動し始める。

ノズル内では流れ方向が水平方向に対して傾いているので、流速は鉛直方向成分をもっている。このため、他の流れ中での場合流速が大きいほど鉛直方向の加速は小さかったが、ノズル内流れ中での場合、流速による差はほとんど見られない。しかし、流速が大きいほど水平方向の加速は大きいので、運動方向は水平に近い。運動開始時における運動方向を一樣流れ中での場合と比較すると、ノズル内流れでは、初期位置の流速は、水平方向成分が $u^* (=u/U) = 1.03$ 、鉛直方向成分が $v^* (=v/U) = 0.32$ 程度であり、水平方向あるいは鉛直方向の加速はノズル内流れ中での場合の方が大きい。水平方向の加速の増加割合の方が大きいので、運動方向はノズル内流れ中での場合の方が水平に近い。

しかし、ノズル内流れは鉛直方向成分をもち、しかも、この値は入口部平均流速にほぼ比例するので流速が大きいほど鉛直方向加速度 \ddot{Y} の減少割合は一樣流れ中での場合より小さく、加速度の方向と運動方向およびそれらの向きが一致して軌跡の接線勾配 dY/dX が極大になる点における dY/dX の値は、 $U \geq 60$ (mm/s) の場合ノズル内流れ中での場合の方がわずかに大きくなる。その後も、加速度の方向は反時計回りに回転し続けるので dY/dX は減少する。そして、 \ddot{Y} に引続いて \ddot{X} も負の値になり、

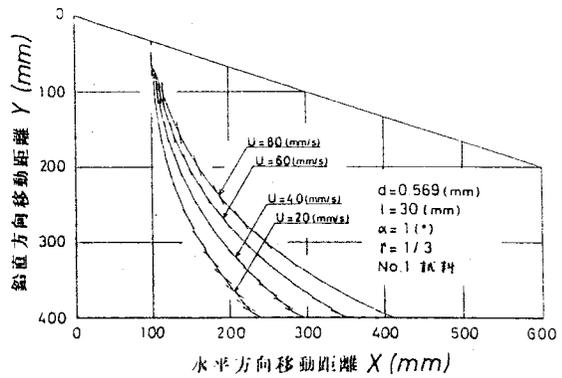


図6.79 落下軌跡におよぼす流速の影響

線状体の姿勢が水平方向に近づくにつれて、線状体に作用する抗力の鉛直方向成分と重力と浮力の差にもとづく外力が除々に釣合うようになるため、 \ddot{Y} は0に近づく。一様流れ中での場合、姿勢が水平方向に漸進するにつれて、 \dot{X} も負の値を保ちながら0に近づいた。ノズル内流れ中での場合、流れが加速しているため、線状体は下流方向に運動するにつれて線状体回りの流速の水平方向成分は除々に増大する。このため、一様流れ中での場合に比べて水平方向の減速は小さく、図6.88を見れば分かるように $U=80(\text{mm/s})$ の場合、 $\theta=58^\circ$ 程度から水平方向に減速され始めるが、減速状態は $\theta=71^\circ$ 程度で終了する。なお、流速が小さいほど線状体の水平方向移動距離は小さいので、水平方向に減速される θ の領域は広くなる。したがって、他の流れ中で見られたような加速度の方向と運動方向が一致し（両者の向きは逆）、 dY/dX が最小になる現象は見られず、運動方向はつねに水平方向に近づきながら線状体は管路底面に到達する。ただし、計算に用いた流れは壁面近傍の境界層の領域を考慮していないため、上述の結果になったのであり、実際の流れには流速が急激に低下する境界層が存在するので、他の流れ中での場合見られたような dY/dX が最小になった後、運動方向が鉛直方向に近づく現象が現われると考えられる。

ここで、運動方向が水平方向に近づき始めた後の領域における落下軌跡を一様流れ中での結果（図6.13）と比較すると、流速が大きいほど水平方向移動距離は大きいので、流れが加速している影響を大きく受け、同一鉛直方向移動距離に対する水平方向移動距離はノズル内流れ中での場合の方が大きく、また、両者の差は流速が大きいほど大きい。さらに、運動方向と姿勢が一致するときの θ の値は、ノズル内流れ中での場合 $U=20, 40, 60, 80(\text{mm/s})$ に対し $\theta=12.3^\circ, 31.7^\circ, 49.2^\circ, 61.8^\circ$ となり、一様流れ中での場合との差は流速が大きいほど大きくなる。これも、流速が大きいほど流れが加速している影響を大

きく受けることが原因である。

$l = 30$ (mm) の場合, $U = 80$ (mm/s) のときでも底面に到達したときの姿勢は約 69° であり, 線状体が水平に近い姿勢になったときの落下軌跡を知ることができない。そこで, 姿勢がさらに水平に近づいた場合, 落下軌跡がどのようなようになるかを調べるために, 長さの影響を表わす図 6.80 をつぎに示す。

この図において, $l \geq 30$ (mm) の場合, 運動開始直後に運動方向が鉛直方向に近づき, dY/dX が極大になった後の領域では, 運動方向をつねに水平方向に変えながら線状体は管路底面に到達する。すなわち, 重心の軌跡には変曲点が 1 つ見られるだけである。これに対し, $l = 15$ (mm) の場合, 比較的管路の上方で姿勢がほぼ水平になるため, その軌跡にはいくつかの変曲点が見られる。運動開始直後の領域, $Y = 76$ (mm), $\theta = 4.8^\circ$ で dY/dX は極大 (約 3.07) となり, 運動方向が水平方向に近づき始める。そして, 姿勢が水平に近づくとつれて水平方向に減速され始め, 他の流れ中での場合と同様に加速度の方向と運動方向が一致し, 両者の向きが逆であるので, $Y = 175$ (mm), $\theta = 74.8^\circ$ で dY/dX は極小 (約 0.23) となる。その後も, 加速度の方向は除々に反時計回りに回転し続けるため, 運動方向はゆっくり鉛直方向に近づく。ここまでの軌跡の変化の様子は他の流れ中での場合と同じであるが, ノズル内では流れが加速しているため, 一樣流れ中での場合と比べて水平方向の減速は小さく, $\ddot{X} (< 0)$ の絶対値はより急激に減少し, 加速度の方向は時計回りに回転して運動方向と一致する。この場合, 両者の向きは逆であ

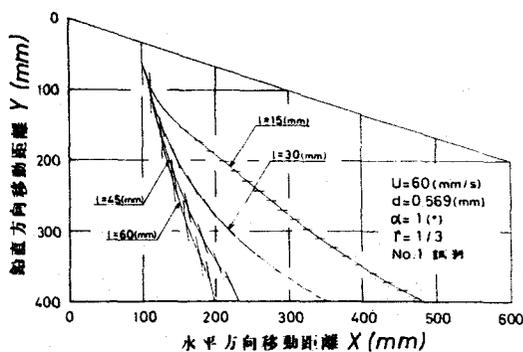


図 6.80 落下軌跡におよぼす長さの影響

るが、加速度の方向が時計回りに回転して運動方向と一致するので、 $Y=220(mm)$ 、 $\theta=87.3^\circ$ で $\alpha Y/\alpha X$ は極大(約0.88)になる。線状体の位置はまだ管路中央部であり、その後も下流方向へ運動し続けるので、加速している流れの影響を受けて線状体はふたたび水平方向に加速され始める。そして、管路の下方に近づくにつれて、流れの方向が徐々に水平方向になるので流速の鉛直方向成分が減少し、線状体に作用する抗力の鉛直方向成分が増大するため、線状体は鉛直方向によりいっそう減速される。したがって、管路底面に到達するまでの領域では運動方向はいっそう水平方向に近づく。

また、 $\ell=15\sim60(mm)$ の軌跡を比較すると、長さが小さいほど姿勢の変化が大きいため、水平方向には大きく加速されるが鉛直方向には加速されにくく、落下時間に伴って重心の速度が変化する様子を表わす図6.91、6.93を見れば分かるように、運動開始後しばらくの間 X は大きく、 Y はつねに小さくなり、同一鉛直方向移動距離における運動方向は、長さが小さいほど水平に近い。さらに、長さが小さいほど線状体はノズルの上方で運動する。この長さの影響は他の流れ中での場合と同じである。

$\ell=15(mm)$ の場合、姿勢がほぼ水平になり、その軌跡にはいくつかの変曲点が見られた。初期角度の影響を表わす図6.87において、 $\alpha=30^\circ$ の場合、線状体は水平近くまで(底面到達時の姿勢は約 87° である。)回転している。そこで、 $\ell=15(mm)$ 、 $\alpha=1^\circ$ の軌跡と $\ell=30(mm)$ 、 $\alpha=30^\circ$ の軌跡を比較して、軌跡にいくつかの変曲点が現われる原因について考えてみる。

$\alpha=30^\circ$ の場合、他の初期角度の場合と同様に、その軌跡には運動開始直後の領域で変曲点($\alpha Y/\alpha X$ が極大)が見られるだけであり、その後の領域では運動方向をつねに水平方向に変えながら線状体は管路底面に到達する。ここで、両者の姿勢の変化に対する水平方向移動距離を比べると、 $\ell=15(mm)$ の場合

、姿勢が 1° から 87° まで変化ある間に線状体が水平方向に移動する距離は約133 (mm)であり、これに対し $\alpha=30^\circ$ の場合、 $\theta=30^\circ\sim 87^\circ$ 変化する間の移動距離は約430 (mm)である。したがって、 $\alpha=30^\circ$ の場合の方が流れが加速している影響を大きく受けることになり、

線状体が水平方向に減速される領域は、 $50^\circ < \theta < 80^\circ$ 程度と $l=15$ (mm)の場合、 $47^\circ < \theta < 88^\circ$ 程度、に比べて狭い。さらに、水平方向への減速は、一様流れ中での場合にも長さの大きいほど小さく、 $l=15$ (mm)と $l=30$ (mm)の水平方向加速度の最小値 \ddot{x}_{min} の絶対値の差は 53.2 (mm/s^2) (一様流れ中での場合、 \ddot{x} の変化は運動開始直後に急激に減少する領域を除き、初期角度の影響を受けないので、表6.5に示した $\alpha=1^\circ$ の値と比較した。)であり、ノズル内流れ中での場合 54.6 (mm/s^2)となり、両者の差はわずかに大きくなる。すなわち、 $\alpha=30^\circ$ の場合の方が、流れが加速している影響を大きく受けて水平方向に減速されにくくなる。このため、加速度の方向は反時計回りに回転するが、運動方向と一致するまで回転することはなくふたたび時計回りに回転し始めるので、運動方向は水平方向に変化し続ける。

以上のことから、流れが加速している影響を大きく受けないうちに、姿勢が水平方向に近づきその後加速している影響を大きく受ける場合、すなわち姿勢が水平方向に近くなるまでに線状体が水平方向および鉛直方向に移動する距離が小さい場合、その軌跡にはいくつかの変曲点が現われる。なお、上述の説明では鉛直方向移動距離に関しては述べなかったが、鉛

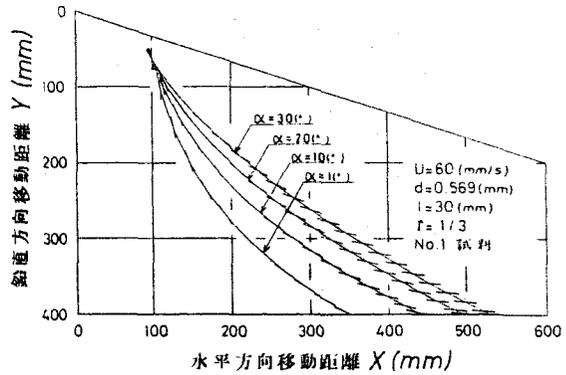


図6.81 落下軌跡におよぼす初期角度の影響

直方向速度が非常に大きい場合，水平方向にあまり移動しないうちに底面に到達し流れが加速している影響を受けにくくなるので，鉛直方向移動距離が小さいという条件も付け加えた。したがって，長さが小さいほどこの条件に適合し，変曲点が顕著に現われると考えられる。

ここで，重心の軌跡におよぼす初期角度の影響を調べる。6.5.1項で述べたように，一様流れ中での場合，X，Y軸に沿って姿勢が同じになる位置まで平行移動すると，運動開始直後の急激な加速の領域を除き軌跡は初期角度にかかわらず一致する。

ところが，ノズル内流れ中での場合，流速のみならず流れの方向も場所的に変化するもので，同一姿勢の線状体回りの流速および流れの方向は初期角度により異なる。このため，姿勢の変化に対する重心速度の変化は初期角度の影響を受ける。(図6.96, 6.97参照) すなわち，同一姿勢に対する線状体の位置は初期角度が小さいほど下流側の下方であるため， X は大きく Y は小さくなる。したがって，運動方向は初期角度が小さいほど水平に近く，軌跡をX，Y軸に沿って姿勢が同じになる位置まで平行移動しても，初期角度にかかわらず一致することはない。ここで，矩形管内の十分に発達した流れ中での結果とあわせて考えると，場所的に変化する流れ中で線状体が運動する場合，位置のみならず軌跡の形にも初期角度の影響が現われることが分かる。

つぎに，ノズルの傾きが落下軌跡におよぼす影響を調べるために， $\gamma = 1/4, 1/3, 1/2$ の落下軌跡を図6.82に示す。この図のノズル形状は $\gamma = 1/3$ の場合であり，初期位置の鉛直方向座標はノズルの傾きにより異なり， $\gamma = 1/4, 1/3, 1/2$ に対して $Y = 55, 63.3, 80$ (mm)である。

流れの方向はノズルの傾きが大きいほど鉛直方向に近いので，初期位置における流速の水平方向成分は傾きが大きいほど小

さく、鉛直方向成分は大きい。このため、水平方向の加速は小さく、鉛直方向の加速は大きくなり、運動開始時における運動方向はノズルの傾きが大きいほど鉛直に近くなる。そして、傾きが大きいほどノズルの断面積が小さく、ノズル上面と底面の交点からの距離が

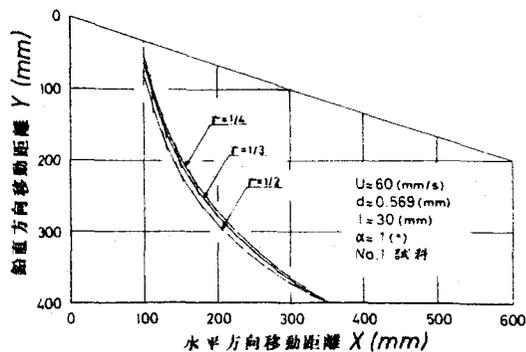


図6.82 落下軌跡におよぼすノズルの傾きの影響

同一の位置での流速は大きくなるので、加速度の方向と運動方向およびそれらの向きが一致して軌跡の接線勾配 dY/dX が極小になる直前に X 、 Y とともに傾きが大きいほど大きくなる。しかし、 dY/dX が極小になる点では、傾きによる差は \dot{Y} の方が大きいため、運動方向はまだ傾きが大きいほど鉛直に近い。

その後もこの状態がしばらく続くが、線状体が下流側の下方へ運動し続けるにつれて、傾きが大きいほど流れが大きく加速する影響を受けて、傾きによる X の差は除々に増大し、 Y の差は流れの方向が水平方向に近づくため減少する。このため、運動方向はノズルの傾きが大きいほど大きく変化して水平に近くなる。 $\alpha = 1/4$ と $1/2$ の運動方向を比較すると、 $Y > 310$ (mm) 程度の領域で $\alpha = 1/2$ の方が水平に近い状態になる。

このように、ノズルの傾きが大きいほど、運動開始直後の領域では、流速の鉛直方向成分が大きい影響を受け、やがて、線状体が下流側の下方に位置するようになると流れが大きく加速している影響を強く受けて、運動方向がより大きく変化する。なお、線状体が運動する位置はノズルの傾きにより異なるが、底面に到達したときの水平方向移動距離は傾きにかかわらずほぼ同一になる。

つぎに、線状体が水平な姿勢から運動を開始する場合、軌跡

がどのように変化するかを調べるために、 $l=60$ (mm) の落下軌跡を図 6.83 に示す。運動開始直後に線状体は急激に加速されるが、その後下流側の下方へ運動し続けるにつれて、流れが加速している影響を受けて水平方向には除々に加速される。

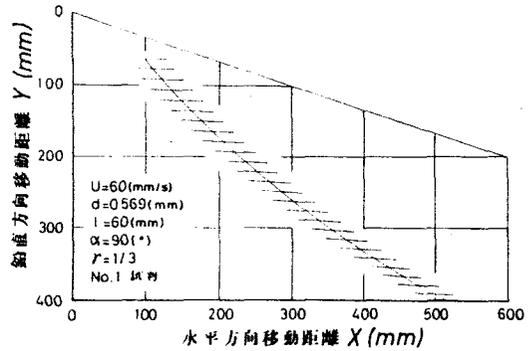


図 6.83 $\alpha=90^\circ$ の場合の落下軌跡

しかし、流れの方向が水平方向に近づくため、鉛直方向にはわづかずつ減速される。したがって、運動方向は除々に水平方向に近づき、その軌跡には変曲点は見られない。なお、姿勢は流れが水平方向に対して傾いている影響を受け、運動開始時からゆっくり鉛直方向に回転し始めるが、線状体がノズル内の下方で運動するようになるにつれて、流れの方向が水平方向に近づくので、姿勢もふたたび水平方向に回転し始める。また、落下時間に伴って変化する重心の速度を表わす図 6.104, 6.105 から、 \dot{Y} は長さの影響を受けないが、 \dot{X} にはわづかに長さの影響が見られ、運動開始直後の領域を除き長さが大きいほど \dot{X} は大きいことが分かる。これは、長さにかかわらず姿勢がほぼ水平であるので、長さが大きいほど流れが加速している影響を大きく受けるからである。したがって、同一鉛直方向移動距離における運動方向は長さが大きいほど水平に近い。しかし、その差はわづかである。

以上の結果をまとめると、線状体がノズル内流れ中で運動する場合、運動開始直後に運動方向がいったん鉛直方向に近づくが、その後の領域では、流れが加速している影響を受けて底面に到達するまで運動方向は水平方向に近づく。しかし、姿勢が水平方向に近くなるまでに線状体が水平方向および鉛直方向に移動する距離が小さい場合、その軌跡にはいくつかの変

曲点が現われる。この現象は長さが小さいほど顕著に現われ、長さにより軌跡の様子が異なる。また、流れが加速しているため流速の影響は一様流れ中での場合より顕著に現われ、さらに、流れの方向も場所的に変化するもので、初期角度およびノズルの傾きも落下軌跡に影響をおよぼす。なお、 $\alpha = 90^\circ$ の場合、長さが軌跡におよぼす影響はわづかである。

ここで、第5章の実験結果と比較する。実験では、管内の流れを乱さないようにするため、落下装置を管路上面に隣接して取付けているので、線状体が落下装置から流れ中に入るとき、急激に流れの向きに回転する現象が生じ、すべて流れ中に入ったときの姿勢は、たとえば図5.24に示す $\ell = 30$ (mm)の場合約 25° になる。また、そのときの角速度は非常に大きく、さらに、線状体はある速度をもっている。したがって、計算の場合とは初期条件が異なる。また、計算では、管路壁面近傍に存在する流速変化が大きい境界層の領域を考慮していないことおよびノズルの傾きが実験の場合 $\gamma = 1/4$ であるのに対し、計算では $\gamma = 1/3$ で諸要因の影響を調べたことなど、実験と計算では条件が異なることに注意する必要がある。

流速の影響を表わす図5.25と図6.79を比較すると、実験結果と計算結果の違いは、実験では軌跡に変動が見られるのに対し、計算では軌跡に変動が現われず、運動開始直後の領域を除き、運動方向は水平方向に近づくという点である。

軌跡が変動する現象は矩形管内流れ中での実験では現われず、ノズル内流れ中での実験で現われたことおよび唯一の層流域である $U = 10$ (mm/s)の場合にも、その大きさは小さいがこの現象が見られたことから、軌跡が変動するのは乱流の影響ではなく、ノズル内流れは加速しており、しかも流れの方向が場所的に変化するためであるという結果が得られた。

実験と同じように、初期位置が静止流体中にあり、この状態から線状体が運動を開始して除々に流れ中へ入るといった条件

のもとで計算をおこなえば、線状体が流れ中に入り始めると角速度は急激に増大し、したがって回転を押える向きに作用する回転モーメントが増大するため、角速度が減少し始め、角速度が小さくなると流れが加速している影響を受けてふたたび増大し始めるという現象がノズルの上方で現われ、その姿勢の変動に伴って軌跡が変動すると考えられる。また、底面近傍の境界層の領域を考慮すれば、他の流れ中での場合見られたような dY/dX が極小になった後運動方向が鉛直方向に近づく現象が現われると考えられる。しかし、実験で見られたような管路中央部で軌跡が変動する現象が上述の条件のもとでここで用いた計算方法により確かめられるかどうか分からない。

したがって、軌跡の変動におよぼす流速の影響について実験結果と計算結果を比較することはできないので、ここでは変動を除いた軌跡に対し両者の結果を比較する。

実験、計算ともに流速が大きいかほど、同一鉛直方向移動距離における運動方向は水平に近く、線状体はノズルの上方で運動するという結果が得られた。ただし、実験では流速が大きいかほど線状体が流れ中に入ったときの急激な回転が大きいかほどが原因となって、流速の影響が計算結果より顕著に現われている。また、実験結果でも運動開始してしばらくの間、運動方向は姿勢より水平に近いが、やがて一致し、その後姿勢の方が水平に近くなる現象が見られ、両者が一致するときの姿勢は流速が大きいかほど水平に近く、この傾向は計算結果と一致する。

つぎに、長さの影響を表わす図5.24において、実験では長さが小さいほど軌跡の変動が大きくなった。実験結果と比較して変曲点の数は少なく、変動の大きさも小さいけれども、この結果は計算でも得られた。したがって、姿勢が水平に近くなるまでに線状体が水平方向および鉛直方向に移動する距離が小さい場合、軌跡の変動が大きくなることが実験と計算の両面から確かめられた。さらに、同一鉛直方向移動距離における運動

方向は長さが小さいほど水平に近く，線状体はノズル内の上方で運動することおよび同一姿勢に対する水平方向および鉛直方向移動距離は長さが大きいほど大きいことも，実験結果と計算結果で一致する。ただし，後者の結果は，長さが小さいほど急激な回転が大きいため実験の場合の方が顕著に現われる。

最後に，初期角度の影響を比較する。図5.17において，実験では初期角度が大きい（初期角度は流れの向きと逆向きに設定しているため，計算の場合と向きが異なる。）方が，線状体がすべて流れ中に入ったときの姿勢が鉛直に近いので， \dot{Y} は大きく， \dot{X} は小さくなり，軌跡はノズル内の下方に位置する。これは計算結果と一致する。さらに，初期角度は，線状体が運動する位置に影響を与えるが，その結果ノズル内の流れ特性により軌跡の形も異なることが，実験と計算の両面から確かめられた。

6.7.2 線状体重心の速度および加速度

流速が水平方向速度におよぼす影響を表わす図6.84, 6.85において，他の流れ中での場合と同様に運動開始と同時に線状体は水平方向にも抗力を受けるため，水平方向にも急激に加速され， \dot{X} の増大に伴ない線状体に作用する抗力の水平方向成分が減少するため，その後 \dot{X} の増大は徐々に低下する。しかし，ノズル内流れは加速しているので，線状体が下流方向へ運動を続けるにつれて線状体回りの流速は増大する。したがって，図6.85と助走域での結果，図6.60，を比較すれば分かるように，水平方向加速度はノズル内流れ中での場合の方が大きい。また，図6.79から，同一姿勢，同一落下時間における水平方向移動距離は流速が大きいほど大きいことが分かり，このため流速が大きいほど流れが加速している影響を大きく受ける。したがって， $U \leq 80$ (mm/s) の場合，加速状態は $\theta = 44^\circ \sim 58^\circ$ ， $t = 1.4 \sim 1.7$ (s) 程度まで続くが，流速が大きいほど加速時

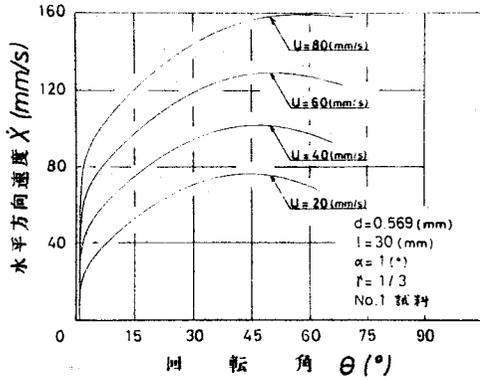


図6.84 水平方向速度におよぼす流速の影響

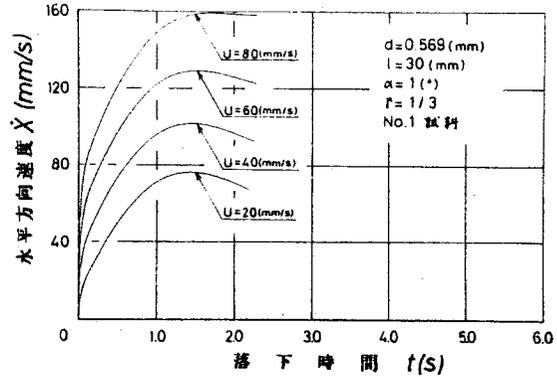


図6.85 水平方向速度におよぼす流速の影響

間は長く、より水平に近い姿勢になるまで加速される。さらに、流速による水平方向移動距離の差は落下時間に伴って徐々に増大するため、流速による X の差は徐々に広がる。これは、流れが加速していることが原因しており、一様流れ中での場合、 $\theta > 15^\circ$ 程度の領域で(6.73)式の関係が成立し、流速による X の差は流速に等しいという結果が得られた。

やがて、線状体は水平方向に減速され始め、 $U \leq 60$ (mm/s)の場合、そのまま底面に到達する。ところが、 $U = 80$ (mm/s)の場合、 X が減少し始めるときの位置はノズルのより下流側であるため、他の場合に比べて線状体回りの流速は、いっそう大きく、いったん水平方向に減速され始めるが、減速は小さく、ふたたび加速される傾向にあることが分かる。このように、ノズル内流れ中での X の変化の特徴は、いったん減少し始めるが、ノズル内の流れ特性によりふたたび加速されることであり、この現象は他の流れ中での場合には見られなかった。

ここで、ノズル内流れ中での結果、表6.15、と一様流れ中での結果、表6.4、を比較すると、一様流れ中での場合、 X が最大になるときの姿勢および加速時間は流速の影響を受けないのに対し、ノズル内流れ中での場合、流速の影響が明確に現

われている。また、一樣流れ中での場合との \dot{X} の最大値の差は、 $U=20$ (mm/s)の場合、4.2 (mm/s)、 $U=80$ (mm/s)の場合、27.2 (mm/s)のように、流速が大きいほど大きいことが分かる。この

結果は、最大値のみならず θ の全領域で成立つことが、図6.16と図6.84の比較から分かる。これらはすべてノズル内の流れが加速していることに起因する。

つぎに、他の流れ中での場合と同様に、ノズル内流れ中での場合にも、水平方向速度が静止流体中での水平方向速度と重心での流速の水平方向成分 W_{cx} の和(6.77式)で表わされる領域が存在するかどうかを調べる。

流速が小さい場合、線状体が水平方向に移動する距離は小さいので、流速の変化は小さく、 $U=20$ (mm/s)の場合、 $\theta > 10^\circ$ 程度の領域で(6.77)式の関係がほぼ成立するか、流速が大きくなるにつれて、線状体はより下流側で運動するようになるので、流速の変化が大きくなり、 $U=80$ (mm/s)の場合、 θ の全領域で $\dot{X} < \dot{X}_s + W_{cx}$ となる。矩形管内の助走域あるいは十分に発達した流れ中での場合にも、流速の変化が大きい上面近くの領域で急激に加速されるとき、慣性のため $\dot{X} < \dot{X}_s + W_{cx}$ であったこともあわせて考えると、流速の水平方向成分の増大が急激なほど、慣性のため $\dot{X}_s + W_{cx}$ と \dot{X} の差は大きくなることが分かる。

いっぽう、線状体は運動開始と同時に、重力と浮力の差にもとづく外力の作用を受けて鉛直方向に急激に加速される。図6.86、6.87において、鉛直方向に加速される領域は $\theta < 5^\circ$ 程度であり、加速時間は約0.2 (s)である。その後抗力が増大するため、姿勢が水平方向に近づくにつれて \dot{Y} は単調に減少する。

表6.15 重心速度の最大値とそのときの姿勢、落下時間

線状体長さ l (mm)	流速 U (mm/s)	水平方向速度の最大値			鉛直方向速度の最大値		
		\dot{X}_{max} (mm/s)	θ ($^\circ$)	t (s)	\dot{Y}_{max} (mm/s)	θ ($^\circ$)	t (s)
15	60	115.40	46.8	0.45	217.1	9.16	0.15
	20	76.29	44.2	1.43	275.8	3.73	0.21
	40	101.84	46.6	1.45	272.9	4.21	0.21
30	60	129.19	50.4	1.52	273.6	4.51	0.21
	80	159.27	57.6	1.71	275.7	5.03	0.22
45	60	—	—	—	306.8	3.31	0.26
50	60	—	—	—	328.3	2.70	0.29

$d=0.569$ (mm), $\alpha=1$ ($^\circ$), $r=1/3$, No. 1 鋼球

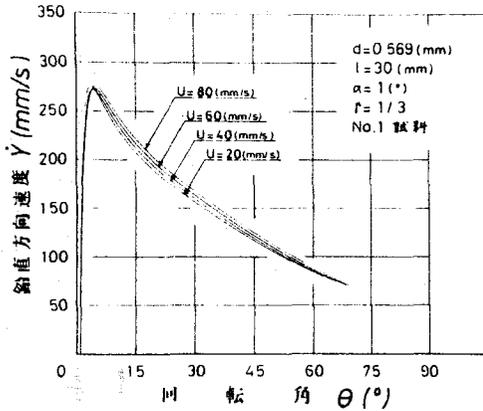


図6.86 鉛直方向速度におよぼす流速の影響

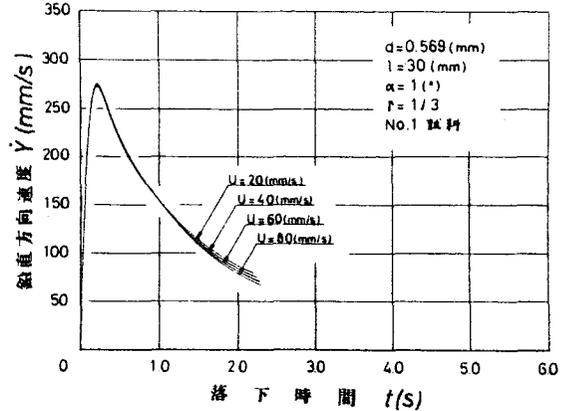


図6.87 鉛直方向速度におよぼす流速の影響

このように、 \dot{Y} の変化の様子は他の流れ中での場合と同じになる。しかし、ノズル内流れは水平方向に対して傾いているため、流速は鉛直方向成分をもち、流れの方向が水平である他の流れ中での場合と流速が \dot{Y} におよぼす影響が異なる。すなわち、他の流れ中での場合、姿勢の変化に対する \dot{Y} の変化には運動開始後しばらくの間流速の影響が見られ、流速が小さいほど \dot{Y} は大きい。ところが、ノズル内流れ中での場合、減速領域では流速が大きいほど \dot{Y} は大きくなり、線状体が表面に近づくにつれて、流速の鉛直方向成分が 0 に近づくため、曲線は漸近するけれども一致することはない。

ここで、このような現象が生ずる原因について考えてみる。まず、運動開始直後の急激な加速領域では、姿勢の変化を表わす図 6.107 を見れば分かるように流速が大きいほど姿勢の変化は大きい。その差はわずかである。これに対し、流速の鉛直方向成分は、流速による水平方向移動距離の差がまだ比較的小さいので、ほぼ流速に比例すると考えてよい。したがって、姿勢の変化の差より流速の鉛直方向成分の差の方が鉛直方向への加速に対して大きく寄与する。その結果、流れの方向が水平で

ある一様流れ中での場合に比べて、流速が大きいほど加速は大きくなり、表6.4と表6.15を比較すると両者の $\dot{\gamma}$ の最大値の差は流速が大きいほど大きく、ノズル内流れ中での場合、 $\dot{\gamma}$ の最大値は流速に対して一定の傾向を示さず、流速による差も小さくなる。

そして、運動開始時からノズル入口部平均流速 U による水平方向移動距離および姿勢の差は徐々に広がるが、上述のように鉛直方向に加速されている領域では、 U による $\dot{\gamma}$ の差はわづかであるので、同一落下時間における鉛直方向移動距離にはほとんど差がない。したがって、鉛直方向に減速される領域では、同一落下時間における線状体回りの流速 W は、流れが加速しているため、 U が大きいほどいっそう大きくなり、 U による W の差は運動に伴って徐々に増大する。また、流れの方向 ϕ_f (図6.5参照)も U が大きいほど鉛直に近く、姿勢は水平に近い。したがって、線状体に対する流体の相対速度の軸方向成分 U_r は小さくなる。いっぽう、相対速度の軸に直角な方向成分 U_θ は U が大きいほどわづかに大きくなるため、 U_r を代表速度とする Re ((6.23)式)を用いて計算される Nu が大きくなる。しかし、 U による U_r の差の方が Nu の差より大きいので、(6.25)式で表わされる軸方向に作用する摩擦抗力 D_y は、 U が大きいほど小さい。このように、抗力が小さくなることが主な原因で軸方向速度 v (<0)の絶対値は U が大きいほど大きくなる。いっぽう、軸に直角な方向速度 u (>0)は U が大きいほど大きい。また、同一落下時間における θ の値は U が大きいほど大きい。したがって、重心の速度を表わす(6.17)式を考慮すると、 θ の値の小さい領域では v の方が $\dot{\gamma}$ に大きく寄与するため、 U が大きいほど同一落下時間における $\dot{\gamma}$ (<0)の絶対値は大きくなる。しかし、 u および θ の値も U が大きいほど大きいので、 U による $\dot{\gamma}$ の差はわづかである。

ところが、姿勢が水平方向に回転するにつれて、重力と浮力

の差にもとづく外力の軸に直角な方向成分が増大するので ω は減少し、正の値から負の値へ移る。 U が小さいほど軸に直角な方向の加速が小さかったため、 $\omega > 0$ の状態は短時間のうちに終了する。たとえば、 $U = 20$ (mm/s)の場合、約0.5 (s)、 $U = 80$ (mm/s)の場合、約1.9 (s)である。なお、 θ の増加に伴ない $\dot{\theta}$ (< 0)の絶対値も減少するが、引続き U が大きいほどこの値は大きい。したがって、(6.17)式を考慮すると、 θ の値が大きくなるにつれて ω の方が $\dot{\theta}$ に大きく寄与するため、 $\omega < 0$ の状態になった後しばらくすると U が小さいほど同一落下時間における $\dot{\theta}$ (< 0)の絶対値は大きくなる。

これまでは、落下時間に伴って $\dot{\theta}$ が変化する状態について述べたが、つぎに、姿勢の変化に対する $\dot{\theta}$ の変化について考える。姿勢の変化は U が大きいほど大きく、同じ姿勢になるまでに要する時間は U が大きいほど短い。また、 U による差は運動に伴ない除々に増大する。したがって、 U が大きいほど同一落下時間における $\dot{\theta}$ の値が小さい領域でも、同一姿勢で比較すると U が大きいほど大きくなる。すなわち、図6.86に示すように線状体が鉛直方向に減速される全領域で同一姿勢に対する $\dot{\theta}$ の値は U が大きいほど大きくなる。

以上述べた $\dot{\theta}$ の変化におよぼす流速の影響を現象論的に説明するとつぎのようになる。

姿勢が水平に近いほど鉛直方向の抗力は大きい。いっぽう、流れの方向が水平方向に対して傾いているために存在する流速の鉛直方向成分の向きが下向きであるので、これが大きいほど鉛直方向の抗力は小さくなる。また、 U が大きいほど、姿勢の変化は大きく、線状体回りの流速の鉛直方向成分は大きい。したがって、姿勢による抗力の増大と流速の鉛直方向成分による抗力の減少の大小関係に U がいかなる影響をおよぼすかを調べればよい。

減速され始めてからしばらくの領域では、 U による姿勢の差

は比較的小さいのに対し，流速の鉛直方向成分の差は大きいので， Γ が大きいほど抗力は小さくなる。したがって，鉛直方向への減速は小さく，この領域では $\dot{\gamma}$ の値は大きい。ところが，線状体がノズルの下流側の下方へ移動するにつれて，線状体周りの流速は増大するけれども，流れの方向が水平方向に近づくため，流速の鉛直方向成分は除々に減少する。このため， Γ による差は除々に小さくなる。いっぽう，姿勢は水平方向に近づき，しかも Γ による差は増大する。したがって，姿勢による抗力の増大の方が支配的になり， Γ が大きいほど抗力は大きくなるので，鉛直方向に大きく減速されやがて $\dot{\gamma}$ の値は小さくなる。そして， Γ による $\dot{\gamma}$ の差は，線状体が底面に近づくにつれて除々に増大する。

また，同一姿勢に対する線状体の位置は， Γ が大きいほど下流側の上方であるので，流速の鉛直方向成分は大きい。したがって， θ の値の小さい領域では，流速の鉛直方向成分による抗力の減少の方が支配的であるため， $\dot{\gamma}$ が減少し始める直後から同一姿勢に対する $\dot{\gamma}$ の値は Γ が大きいほど大きくなる。いっぽう， $\dot{\gamma}$ の変化を表わす図6.89から， $\theta > 10^\circ$ 程度の領域では Γ が大きいほど $\dot{\gamma} (< 0)$ の絶対値は大きくなる。ところが，角速度 θ の変化を表わす図6.108から，同一姿勢に対する θ の値は Γ が大きいほど大きいので， θ がある値からある値になるまでの時間は短い。このため， θ と $\dot{\gamma}$ の関係を表わす曲線において， $\dot{\gamma}$ の減少割合は Γ にかかわらずほぼ同程度になり， Γ が大きいほど同一姿勢に対する $\dot{\gamma}$ の値が大きい状態が続く。

つぎに，一様流れ中での結果，図6.17，と比較すると，ノズル内流れは鉛直方向成分をもつため， θ の全領域でノズル内流れ中での場合の方が $\dot{\gamma}$ は大きい。また， Γ が大きいほど流速の鉛直方向成分が大きいため，一様流れ中での場合との差は大きくなる。線状体が底面に近づくにつれて，流れの方向が水平に近づくので，両者の差は除々に減少する。

ここで、流速の鉛直方向成分の影響を調べるため水平方向速度に対しておこなったように、静止流体中での鉛直方向速度を \dot{Y}_s 、重心での流速の鉛直方向成分を W_{cy} とすると、ノズル内流れ中での鉛直方向速度が

$$\dot{Y} = \dot{Y}_s + W_{cy} \quad (6.78)$$

なる関係で表わされる θ の領域が存在するかどうかを調べた。その結果、 W_{cy} は運動開始時から徐々に減少することおよび U が大きいほど大きいこと、さらに、 $U \leq 80$ (mm/s)の範囲では W_{cy} は最大約26 (mm/s)であり、 \dot{Y} に比べて小さいので、 $U = 20$ (mm/s)の場合、 $\theta > 10^\circ$ 程度の領域、 $U = 80$ (mm/s)の場合、 $\theta > 15^\circ$ 程度の領域で(6.78)式で表わされる関係が成立し、 U が大きいほどこの関係が成立しない θ の領域が広くなることが分かった。一様流れ中での場合、 $\theta > 15^\circ$ 程度の領域で流速の影響が見られなくなり、 θ と \dot{Y} の関係が静止流体中での曲線と一致することから、(6.78)式の関係が成立しない θ の領域はノズル内流れ中での場合の方が狭くなる傾向にあることが分かる。なお、(6.78)式の関係が成立しない領域では $\dot{Y} < \dot{Y}_s + W_{cy}$ となる。

以上のように、重心の速度の変化におよぼす流速の影響は他の流れ中での場合とはかなり異なるものになった。そこで、重心の加速度の変化におよぼす流速の影響を調べる。

図6.88、6.89において、他の流れ中での場合と大きく異なる点は、 \ddot{X} に関しては、運動開始直後に急激に減少した後、 \ddot{X} の減少が低下する領域では、たとえば助走域での場合(図6.63)、 $\theta > 10^\circ$ 程度では流速の影響が見られなくなり θ と \ddot{X} の関係は同一曲線で表わされたのに対し、ノズル内流れ中での場合、 θ の全領域で流速が大きいほど \ddot{X} の値は大きくなる。また、 \dot{Y} に関しても、同じような現象が見られ、他の流れ中での場合、

\dot{Y} が増大し始めると（助走域での場合，図6.64， $\theta > 15^\circ$ 程度の領域），流速の影響が除々に見られなくなるのに対し，ノズル内流れ中での場合，この領域では（ $\theta > 10^\circ$ 程度の領域）流速が大きいほど \dot{Y} （ < 0 ）の絶対値は大きくなる。

同じ姿勢になるまでに線状体が水平方向に移動する距離は， U が大きいほど大きく，しかも流れが加速しているため，同一姿勢に対する線状体回りの流速は U の差以上に大きくなる。たとえば， $\theta = 40^\circ$ 程度のとき重心での流速の水平方向成分 W_{cx} は， $U = 20$ (mm/s) の場合，約24 (mm/s)， $U = 80$ (mm/s) の場合，約102 (mm/s)である。すなわち，ノズル内流れ中での場合，入口部平均流速が大きいほど流速がより大きく増大する流れ中で線状体が運動することになる。矩形管内の十分に発達した流れ中での結果，図6.35，から管路上面近くの領域で線状体が運動する場合， \dot{X} には平均流速の影響が見られ同一姿勢における \dot{X} の値は U が大きいほど大きくなり，やがて，管路中央部の比較的流速の変化が小さい領域へ入るようになると，除々に平均流速の影響は見られなくなる。いっぽう，図6.36から， \dot{Y}

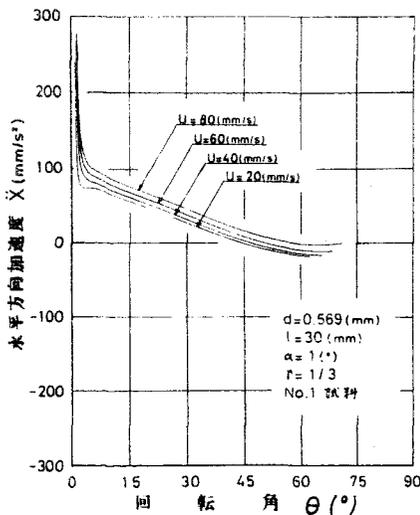


図6.88 水平方向加速度におよぼす流速の影響

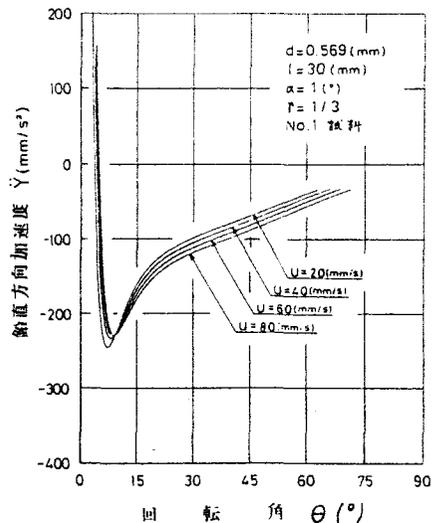


図6.89 鉛直方向加速度におよぼす流速の影響

が増大し始めてから後の領域では，同一姿勢における $\dot{\gamma}$ の値は Γ が大きいほど小さくなり， $\dot{\alpha}$ の場合と同様に管路中央部へ入るようになると，除々に平均流速の影響が見られなくなる。この上面近くの領域では壁面から遠ざかるにつれて流速は増大している。また， Γ が大きいほど場所による流速の差が大きい。したがって，流速がより大きく増大する流れ中で線状体が運動をおこなう場合ほど，同一姿勢における $\dot{\alpha}$ の値は大きく， $\dot{\gamma}$ の値は小さいという結果が得られる。

この結果を考慮すると，ノズル内流れ中での場合，上述の結果になることが分かる。さらに， $\Gamma=80$ (mm/s)の場合，流れが加速している影響を大きく受けるため， $\dot{\alpha}$ は $\theta=58^\circ$ 程度で負になるが水平方向への減速は $\theta=71^\circ$ 程度で終了し，ふたたび加速される傾向にあることが分かる。また，線状体が水平方向に減速される θ の領域は， Γ が大きいほど狭くなる。

一樣流れ中での場合，いったん水平方向へ減速され始めると水平な姿勢になるまで $\dot{\alpha}<0$ の状態が続き， $\theta=90^\circ$ で 0 になった。したがって，ノズル内流れ中での場合，いったん水平方向に減速され始めるが，水平な姿勢になる前にふたたび加速され始めることが特徴である。いっぽう，流速の鉛直方向成分は底面に近づくにつれて除々に 0 に近づくため，一樣流れ中での場合と同様に $\dot{\gamma}$ は θ の増加に伴って増大し， θ が 90° に近づくにつれて 0 に近づく傾向にあることが分かる。

ここで，助走域での結果(図6.63, 6.64)と比較すると， $\dot{\alpha}$ の減少が低下する領域および $\dot{\gamma}$ が増大し始めてからの領域(これらの領域では助走域での $\dot{\alpha}$, $\dot{\gamma}$ の変化は一樣流れ中での場合とほぼ一致する。)において，流れが加速しているため， $\dot{\alpha}$ はノズル内流れ中での方が大きくなり， $\dot{\gamma}$ は小さくなる。なお，両者の差は $\dot{\alpha}$, $\dot{\gamma}$ ともに Γ が大きいほど大きい。また，ノズル内流れ中での結果，表6.16，と一樣流れ中での結果，表6.5を比較すると， $\dot{\gamma}$ の最小値の絶対値およびそのときの θ の値

はノズル内流れ中での場合の方が大きく、両者の $\dot{\gamma}$ の最小値の差は Γ が大きいほど大きいことが分かる。流れの方向が水平である他の流れ中での結果の比較から、姿勢の変化が大きいほど、すなわち平均流速が同じ場合流れの発達程度が大きい(十分に発達した流れ状態に近い)流れ中での場合ほど $\dot{\gamma}$ の最小値の絶対値は小さいという

結果が得られている。したがって、ノズル内流れ中での場合の方が一様流れ中での場合より姿勢の変化が大きいにもかかわらず $\dot{\gamma}$ の最小値の絶対値が大きくなる原因としては、流れが鉛直方向成分をもつため、姿勢の変化が大きいにもかかわらず鉛直方向へより大きく加速され(表6.4, 6.15参照)、その結果抗力の鉛直方向成分が一様流れ中での場合より大きくなるからである。また、 Γ が大きいほど両者の差が大きくなることも、線状体回りの流速の鉛直方向成分が大きいことに起因すると考えられる。

以上のように、流速の変化が大きい矩形管内での十分に発達した流れ中およびノズル内流れ中での場合と流速が変化しないあるいは変化が比較的小さい一様流れ中および助走域での場合を比較して、流れの加速の程度が大きいほど、 $\ddot{\alpha}$ の減少が低下する領域では同一姿勢における $\ddot{\alpha}$ の値は大きく、また $\dot{\gamma}$ が増大し始めてから後の領域では $\dot{\gamma}$ の値は小さい(鉛直方向の減速が大きい)という結果が得られた。そこで、この原因について考えてみる。

まず、考え易くするために、各断面における流速が一様で水平方向に加速している流れ中での場合と一様流れ中での場合を比較する。重心での流速を U とすると、運動方程式(6.16)式

表6.16 鉛直方向加速度の最小値とそのときの姿勢

線状体長さ l (mm)	流速 U (mm/s)	鉛直方向加速度の最小値 $\ddot{\gamma}_{min}$ (mm/s ²)	θ (°)
15	60	-380.3	21.61
30	20	-245.2	7.18
	40	-233.4	8.21
	60	-229.8	8.68
	80	-228.9	9.06
45	60	-179.4	5.54
60	60	-149.2	4.31

$d=0.569$ (mm), $\alpha=1$ (°),
 $\Gamma=1/3$, No.1 試料

から,

$$\left. \begin{aligned} Adu/dt &= \gamma Bv - \gamma(A_1 - B_1)W \sin \theta + A_1 dw/dt \cos \theta + X \\ Bdv/dt &= -\gamma Au + \gamma(A_1 - B_1)W \cos \theta - B_1 dw/dt \sin \theta + Y \end{aligned} \right\} \quad (6.79)$$

となり, 一様流れ中での運動方程式 (6.32) 式と比較すると分かるように, 流れが加速している影響は, $A_1 dw/dt \cos \theta$ と $-B_1 dw/dt \sin \theta$ の項で表わされる。したがって, 加速している流れ中での場合の方が重心の軸に直角な方向の加速度 du/dt は大きく, 軸方向の加速度 dv/dt は小さいことが分かる。いっぽう, \ddot{X} , \ddot{Y} は (6.17) 式を (6.18) 式に代入して,

$$\left. \begin{aligned} \ddot{X} &= du/dt \cos \theta - dv/dt \sin \theta - \gamma \ddot{Y} \\ \ddot{Y} &= du/dt \sin \theta + dv/dt \cos \theta + \gamma \ddot{X} \end{aligned} \right\} \quad (6.80)$$

となる。

また, 加速している流れ中での場合の方が, 同一姿勢における \ddot{X} の値は大きく, \ddot{Y} (< 0) の絶対値は小さいが, ニニで考えている θ の領域では θ の増加に伴ない一様流れ中での場合との差は除々に小さくなる。したがって, 加速している流れ中での場合の方が, 同一姿勢における \ddot{X} , \ddot{Y} の値は大きいことが分かる。ただし, (6.80) 式では鉛直方向は上向きを正の向きとして計算しており, 線状体は鉛直方向には下向きの運動するので, \ddot{Y} の値が大きいということは減速が大きいことを意味する。

つぎに, ノズル内流れのように流れが加速しており, しかもその方向が水平方向に対して傾いている場合 (ただし, 流速の水平方向成分の方が大きい場合), その角度を θ_f とすると流れが加速している影響を表わす各項は $A_1 dw/dt \cos(\theta + \theta_f)$, $-B_1 dw/dt \sin(\theta + \theta_f)$ となるので, 流れの方向が水平である場合に

比べて du/dt , dv/dt は小さくなる。したがって、流れが加速し、しかもその方向が水平方向に対して傾いている場合、流れが加速していることによる $\dot{\gamma}$ の増大は、流れが傾いていることにより軽減されるが、流れが傾いている場合 $\dot{\gamma} (< 0)$ の絶対値は大きくなるので、 $\ddot{\chi}$ に関しては軽減されるかどうか分からない。たとえ軽減されるにしても、その大きさは $\dot{\gamma}$ に比べて小さい。図 6.89 において、 U が大きいほど流速の鉛直方向成分は大きいため、 $\dot{\gamma} (< 0)$ の絶対値の増大はよりいっそう軽減されており、この場合の加速と同程度でしかもその方向が水平であるような流れ中での場合、 U による $\dot{\gamma}$ の差はさらに大きくなると考えられる。

ノズル内流れ中での χ の変化の特徴として、いったん減速され始めるが流れが加速している影響を受けて、水平な姿勢になる前にふたたび加速され始めるということをおでに述べた。この現象は、長さ l が χ の変化におよぼす影響を表わす図 6.90, 6.91 において、 $l = 15$ (mm) の場合明確に現われている。

$l = 15$ (mm) の場合、長さ l が小さいので姿勢の変化が大きく、水平に近い姿勢になるまでに水平方向に移動する距離は小さい。このため、流れが加速している影響を受けにくく、水平方向に比較的大きく減速された後、 $\theta = 88^\circ$, $t = 1.6$ (s) 程度 (水平方向移動距離、約 145 (mm)) からふたたび加速され始める。線状体が水平方向に加速され始めると、軸に直角な方向の加速度 du/dt および軸方向の加速度 $dv/dt (< 0)$ の絶対値は増大する。したがって、(6.80) 式を考慮すると、 θ がほぼ 90° に近いいため dv/dt は $\dot{\gamma}$ の変化には寄与しないで、 du/dt および χ が増大することから $\dot{\gamma}$ は増大することが分かる。すなわち、線状体は鉛直方向により大きく減速される。この現象は $\dot{\gamma}$ の変化を表わす図 6.92, 6.93 に明確に現われている。一様流れ中での場合、 $\dot{\gamma}$ は姿勢が水平方向に並ぶにつれて一定値に近づいたことから考えて、ノズル内流れ中での重心速度の変化の特徴は

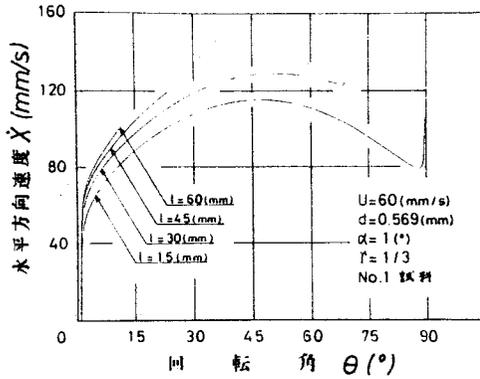


図6.90 水平方向速度におよぼす長さの影響

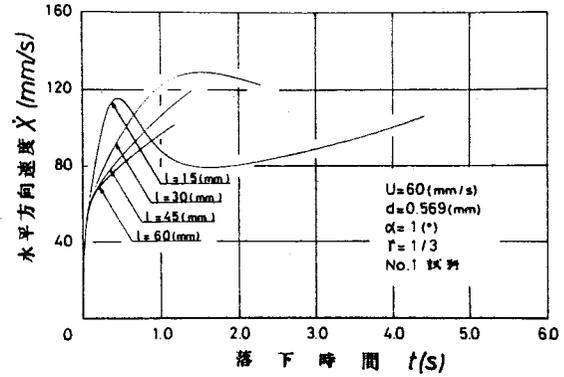


図6.91 水平方向速度におよぼす長さの影響

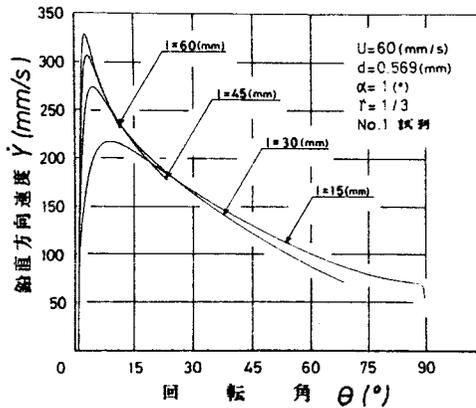


図6.92 鉛直方向速度におよぼす長さの影響

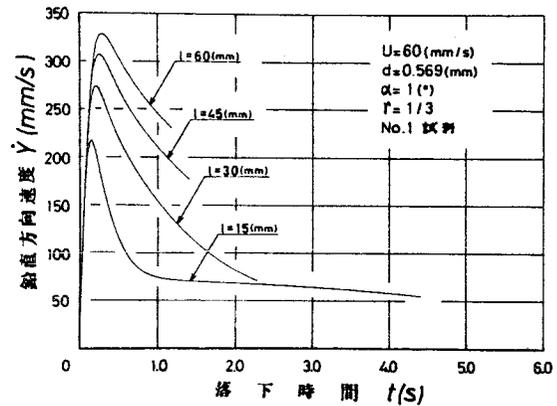


図6.93 鉛直方向速度におよぼす長さの影響

、水平方向にいったん減速され始めるがふたたび加速されることおよび鉛直方向の減速がふたたび増大することである。

ここで、長さが重心の速度の変化におよぼす影響を調べる。他の流れ中での場合と同様に、長さが小さいほど線状体が回転するのに要する時間は短い。したがって、姿勢が同じでも線状体回りの流速は長さにより大きく異なる。同一姿勢に対する水平方向および鉛直方向移動距離は長さが大きいほど大きいので、姿勢が同一のとき、線状体回りの流速は長さが大きい

ほど大きくなる。このため、他の流れ中での場合と同様に同一姿勢に対する $\dot{\alpha}$ の値は長さの大きいほど大きくなるが、流速が変化しないあるいは変化が比較的小さい一様流れ中および助走域での場合(図6.18, 6.65)と比較して、長さによる $\dot{\alpha}$ の差はノズル内流れ中での場合の方が大きいことが分かる。また、一様流れ中での場合、 $\theta < 65^\circ$ 程度の領域でこの現象が見られたのに対し、ノズル内流れ中での場合、 θ の全領域でこの現象が現われ、しかも、同一姿勢に対する糸線状体の移動距離の差は θ の増加に伴って大きくなるため、長さによる $\dot{\alpha}$ の差も θ の増加に伴ない除々に広がる傾向にある。さらに、表6.15から、長さの大きい方がより水平に近い姿勢になるまで水平方向に加速され、この結果は他の流れ中での場合と異なる。これは、流れが加速し続けているためである。したがって、十分に発達した流れ中での結果とあわせて考えると、流れが水平方向に加速される程度が大きいほど、姿勢の変化に対する $\dot{\alpha}$ の変化に長さの影響がより顕著に現われることが分かる。

つぎに、同一落下時間における $\dot{\alpha}$ の値を比較すると、他の流れ中での場合と同様に、加速領域では長さの小さいほど大きくなり、加速時間は長さの大きい方が姿勢の変化が小さいため大きくなることが分かる。ここで、十分に発達した流れ中での結果、図6.38, と比較すると、両者ともに同一落下時間における水平方向移動距離は長さの大きいほど小さく、鉛直方向移動距離は大きい。十分に発達した流れは鉛直方向に流速が分布しているのに対し、ノズル内流れは水平方向に加速しているため、同一落下時間における線状体回りの流速は、前者の場合、長さの大きいほど大きいが、後者の場合、長さの大きいほどわずかに小さくなる。したがって、ノズル内流れ中での場合の方が長さによる $\dot{\alpha}$ の差は大きい。

いっぽう、姿勢の変化に対する $\dot{\alpha}$ の変化におよぼす長さの影響は他の流れ中での場合と異なる。他の流れ中での場合、 θ の増

加に伴ない長さの影響は除々に見られなくなり、 $\theta < 60^\circ$ 程度の領域では $\dot{\gamma}$ は長さの大きいほど“大きい”が、これ以上の領域では長さの影響を受けない。これに対し、ノズル内流れ中での場合、 $\dot{\gamma}$ が長さの影響を受けない θ の領域は存在しない。ある θ の領域までは長さの大きい方が $\dot{\gamma}$ の値は大きい、線状体が管路底面に近づくると逆に小さくなる。他の流れの場合、流れの方向は水平方向であるのに対し、ノズル内流れは水平方向に対して傾いているので、流速は鉛直方向成分をもつが、流れ方向は底面に近づくにつれて水平方向に近づくため、流速の鉛直方向成分は0に近づく。また、同一姿勢における線状体の鉛直方向移動距離は長さの大きいほど“大きい”ので、線状体回りの流速の鉛直方向成分が小さくなり、このため、線状体が底面に近づくると長さの大きい方が $\dot{\gamma}$ の値が小さくなる現象が生ずる。すなわち、一様流れ中での結果、図6.19、と比較すれば分かるように、同一姿勢での $\dot{\gamma}$ の値はノズル内流れ中での場合の方が大きい、線状体が底面に近づくにつれてノズル内流れ中での曲線は一様流れ中での曲線に近づく。そして、底面に近づくときの姿勢は長さの大きいほど鉛直に近いので上述の現象が生ずる。なお、 $l = 15 \text{ (mm)}$ の場合、ほぼ水平な姿勢になる位置は管路中央部である(たとえば、 θ が約 88° になる位置は $Y = 230 \text{ (mm)}$ 程度である。)ので、線状体が底面に近づくにつれて $\dot{\gamma}$ が減少する状態が他の長さの場合より顕著に現われている。

また、一様流れ中での結果、表6.4と表6.15を比較すると、 $\dot{\gamma}$ の最大値は、ノズル内流れ中での場合の方がほぼ等しいかあるいは大きくなり、長さの小さいほど両者の差は大きいことが分かる。ノズル内流れは加速しているので、ノズル内流れ中での場合の方が姿勢の変化は大きく、角速度の増大する割合は長さの大きいほど“大きい”。このため、一様流れ中での場合に比べて長さの大きいほど鉛直方向に加速されにくくなる。いっぽう、同一姿勢における流速の鉛直方向成分は、長さの大きいほど

小さいので、一様流れ中での場合に比べて鉛直方向速度が増大する割合は小さくなる。したがって、上述の結果になり、長さによる \dot{Y} の最大値の差はノズル内流れ中での場合の方が小さい。また、ノズル内流れ中での場合にも、加速時間は長さが大いほど長くなる傾向にあり、 \dot{Y} が最大になるときの姿勢は鉛直に近い。

つぎに、重心の加速度の変化を表わす図6.94, 6.95において、姿勢の変化は長さがいほど大きく、また、姿勢が同じでも線状体回りの流速は長さにより異なるため、姿勢の変化に対する \ddot{X} , \ddot{Y} の変化には長さの影響が大きく現われている。この長さの影響は数値的には異なるけれども、その概要は他の流れ中、たとえば十分に発達した流れ中での結果、図6.41, 6.42(ただし、底面近くの領域で \ddot{X} , \ddot{Y} が急激に変化する領域は除く)、と同じである。また、 $l=15(\text{mm})$ の場合、ノズル内流れ中での重心加速度の変化の特徴を表わす、 \ddot{X} がいったん負の値になるが水平な姿勢になる前にふたたび正の値へ移ることおよびこれに伴ない増大していた \dot{Y} がふたたび減少するという現象

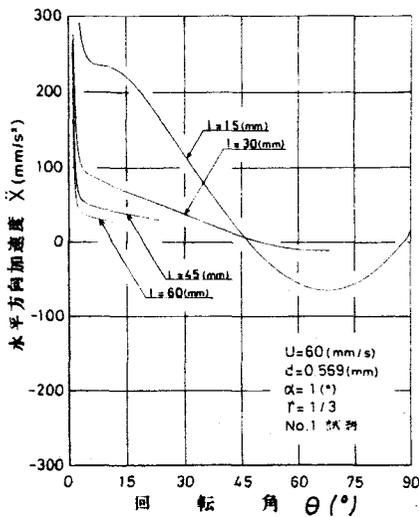


図6.94 水平方向加速度におよぼす長さの影響

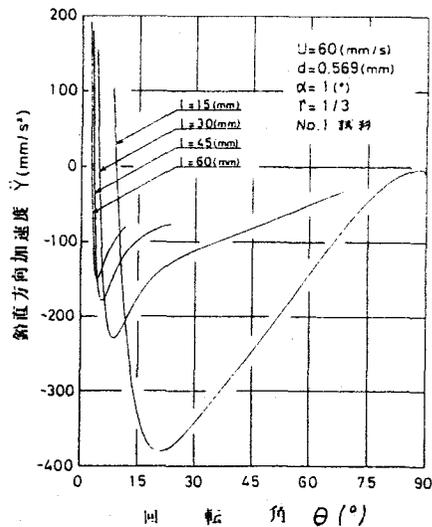


図6.95 鉛直方向加速度におよぼす長さの影響

が現われている。

すでに述べたように、 \ddot{X} の減少が低下する領域および \ddot{Y} が増大し始めてからの領域では、流れの加速程度が大きいほど同一姿勢における \ddot{X} の値は大きく、 \ddot{Y} の値は小さい。したがって、十分に発達した流れ中および助走域での結果(図6.69, 6.70)と比較すれば分かるように、長さにかかわらずノズル内流れ中の曲線は両者の中間に位置する。ただし、途中から \ddot{X} に関しては、ノズル内流れ中での場合がもっとも大きくなり、 \ddot{Y} に関してはもっとも小さくなるのは、ノズル内の流れは加速し続けているのに対し、十分に発達した流れの場合、上面近くの領域では流れは急激に加速し、その加速程度はノズル内流れの場合より大きい、管路中央部に移るにつれて流れの加速は減少しノズル内流れより小さくなるからである。

また、一様流れ中での結果、表6.5と表6.16を比較すると、 \ddot{Y} の最小値の絶対値およびそのときの θ の値はノズル内流れ中での場合の方が大きいことが分かる。これは、流速の影響の所で述べたように、流れが鉛直方向成分をもつため、姿勢の変化が大きいにもかかわらず鉛直方向へより大きく加速され、その結果抗力の鉛直方向成分が一様流れ中での場合より大きくなるからである。なお、両者の差は、流速に対しては一定の傾向を示したが、長さに対し一定の傾向を示さないのは、運動開始直後に鉛直方向に急激に加速される時、長さが大きいほど流速の鉛直方向成分の影響が小さいからである。

ノズル内流れ中での重心速度の変化の特徴、水平方向にいったん減速されるかふたたび加速されることおよびこれに伴ない鉛直方向の減速が増大する現象は、初期角が重心の速度の変化におよぼす影響を表わす図6.96, 6.97において、 $\alpha=20^\circ$, 30° の場合にも見られる。 \ddot{X} がふたたび増大し始めるときの姿勢は約 80° であり、その位置(X, Y)は $\alpha=20^\circ$ の場合、(410, 355), $\alpha=30^\circ$ の場合、(380, 315)程度と後者の方がノズル

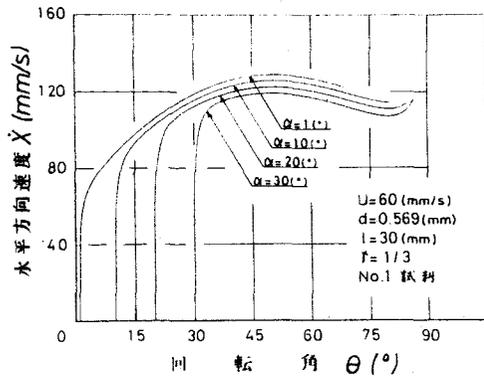


図6.96 水平方向速度におよぼす初期角度の影響

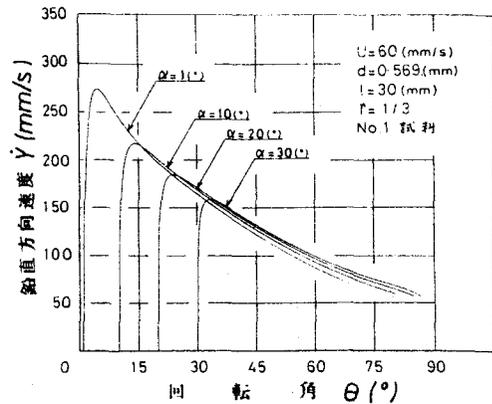


図6.97 鉛直方向速度におよぼす初期角度の影響

ルのより上方であるので、 \dot{X} が増大する現象が顕著に現われる。また、鉛直方向の減速が増大する現象は、 \dot{X} が増大し始めた後しばらくして（この場合約 84° ）生ずる。

一様流れ中での場合、水平な姿勢に近づくにつれて、軸に直角な方向の加速度 $d\dot{u}/dt$ は負の値を保ちながら0に近づき、軸方向の加速度 $d\dot{v}/dt$ は正の値を保って0に近づく。すなわち、線状体は軸に直角な方向には加速され、軸方向には減速されながら、水平な姿勢に近づき一定速度になる。これに対し、ノズル内流れ中での場合、流れが加速しているので、 \dot{X} が減少し始めると、一様流れ中での場合より短時間のうちに $d\dot{u}/dt$ 、 $d\dot{v}/dt$ は0に近づく。とくに姿勢が水平に近い場合 $d\dot{v}/dt$ の方が早く0に近づく。したがって、(6.80)式を考慮すると \dot{X} の方が短時間のうちに正の値になり、 \dot{X} が増大し始めることが分かる。その後、 $d\dot{v}/dt$ は負の値になり（軸方向に加速され始める。）、しばらくして \dot{Y} の絶対値が増大し始め（鉛直方向の減速が増大し始める。）、やがて $d\dot{u}/dt$ の値は正になる。

ここで、初期角度の影響を調べる。一様流れ中での場合、姿勢の変化に対する速度の変化は、運動開始直後の急激な加速領域を除き、初期角度にかかわらず同一曲線で表わされる。いっ

ぼう、十分に発達した流れ中での場合、運動開始後しばらくすると、姿勢の変化に対する \dot{Y} の変化は初期角度にかかわらず同一曲線で表わされるが、 \dot{X} の変化は初期角度の影響を受け同一曲線で表わされることはない。ところが、ノズル内流れ中での場合、 \dot{X} 、 \dot{Y} ともに初期角度の影響を受け、同一姿勢に対する \dot{X} の値は初期角度が小さいほど大きく、運動開始直後の急激な加速領域を過ぎると \dot{Y} の値は初期角度が大きいほど大きくなる。これはつぎの原因による。同一姿勢における水平方向および鉛直方向移動距離は初期角度が小さいほど大きく、また、流れは加速しておりしかも水平方向に対して傾いている。このため、姿勢が同一のとき線状体回りの流速の水平方向成分は、初期角度が小さいほど大きく、鉛直方向成分は小さくなるからである。

また、運動開始直後の急激な加速領域を過ぎると、姿勢がある角度からある角度まで変化する間に線状体が水平方向に移動する距離は初期角度が小さいほど大きく、逆に鉛直方向に移動する距離は小さい。したがって、 θ の増加に伴ない初期角度による水平方向移動距離の差は増大し、鉛直方向移動距離の差は減少する。このため、初期角度が小さいほど線状体回りの流速の増大割合は大きく、流れ方向 θ_f の減少割合は小さく、初期角度による重心での流速の水平方向成分 $w_{cx} (= w_c \cos \theta_f)$ の差は θ に関係なくほぼ一定になる。ところが、流速の鉛直方向成分 $w_{cy} (= w_c \sin \theta_f)$ の差は θ の増加に伴ない増大する。すでに述べたように、入口部平均流速 U が小さい場合、静止流体中での水平方向速度を \dot{X}_s とすると、 $\dot{X} = \dot{X}_s + w_{cx}$ の関係がほぼ成立する(たとえば $U = 20 \text{ (mm/s)}$ の場合、 $\theta > 10^\circ$ 程度の領域)が、 U が大きくなるにつれて $\dot{X} < \dot{X}_s + w_{cx}$ となる。しかし、運動開始後の小さい領域を除き、 $\dot{X}_s + w_{cx}$ と \dot{X} の差はほぼ一定になる。また、 \dot{Y} に関して、 $\dot{Y} = \dot{Y}_s + w_{cy}$ の関係が成立する。ただし、 U が大きくなるにつれてこの関係が成立しない θ

の領域は広がる傾向にある。以上の関係は初期角度に関係なく成立すると考えられるので、上述の結果を考慮すると、運動開始直後の急激な加速領域を過ぎてしばらくすると、初期角度による \dot{X} の差は θ に関係なくほぼ一定となり、 \dot{Y} の差は θ の増加に伴ない増大することが分かる。

これは、図6.96, 6.97および表6.17に明確に現われており、 \dot{X} が最大になるときの θ の値は初期角度の影響をほとんど受けず、 $\alpha=1^\circ$ と $\alpha=30^\circ$ の \dot{X} の最大値の差は約10(mm/s)である。一様流れ中での場合には初期角度にかかわらず θ と \dot{X} の関係は同一曲線で表わされたが、ノズル内流れ中

表6.17 重心速度の最大値とそのときの姿勢、落下時間

初期角度 α (°)	水平方向速度の最大値			鉛直方向速度の最大値		
	\dot{X}_{max} (mm/s)	θ (°)	t (s)	\dot{Y}_{max} (mm/s)	θ (°)	t (s)
1	129.19	50.4	1.52	273.6	4.51	0.21
10	126.02	50.4	1.24	217.2	14.01	0.19
20	122.71	50.3	0.97	184.3	23.91	0.18
30	119.43	49.9	0.69	158.4	33.42	0.17

$d=0.569$ (mm), $l=30$ (mm), $U=60$ (mm/s), $r=1/3$, No. 1 試料

での場合、初期角度による差が θ に関係なくほぼ一定になることが特徴である。すなわち、同一姿勢における曲線の接線勾配 $d\dot{X}/d\theta$ は初期角度にかかわらずほぼ同一になる。これに対し、 θ と \dot{Y} の関係を表わす曲線の接線勾配 $d\dot{Y}/d\theta$ (<0)の絶対値は初期角度が小さいほど大きいことが分かる。

いっぽう、角速度 γ の変化を表わす図6.116から、運動開始直後の急激な加速領域を過ぎると同一姿勢における γ の値は初期角度にかかわらずほぼ同一になるが、 θ の増加に伴ない初期角度による差は広がる傾向にある。しかし、その差はわづかである。

重心の加速度 \ddot{X} , \ddot{Y} は

$$\left. \begin{aligned} \ddot{X} &= r d\dot{X}/d\theta \\ \ddot{Y} &= r d\dot{Y}/d\theta \end{aligned} \right\} \quad (6.81)$$

となる。したがって、運動開始直後の急激な加速領域を過

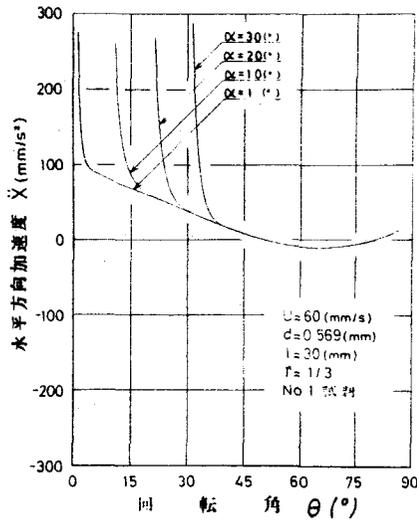


図6.98 水平方向加速度におよぼす初期角度の影響

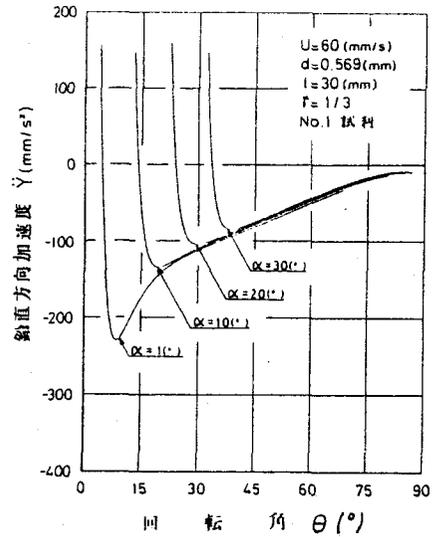


図6.99 鉛直方向加速度におよぼす初期角度の影響

ざてしばらくすると、 θ と \ddot{x} の関係は初期角度にかかわらずほぼ同一曲線で表わされ、同一姿勢における \ddot{y} (<0)の絶対値は初期角度が小さいほど大きくなる。

姿勢の変化に対する \ddot{x} 、 \ddot{y} の変化の様子は図6.98、6.99を見ればいっそう明確に分かる。 $\alpha=10^\circ\sim 30^\circ$ の \ddot{x} の曲線は運動開始時から急激に減少して $\alpha=1^\circ$ の曲線に近づき一致するが、 \ddot{y} の曲線は $\alpha=1^\circ$ の曲線に近づくけれども一致しない。したがって、表6.18に示すように、 \ddot{x} の最小値およびそのときの θ の値はほとんど初期角度の影響を受けない。なお、 θ が増加すると \ddot{x} に初期角度による差がわずかに現われ始めるのは、 θ の増加に伴ない初期角度による \ddot{y} の差が広がる傾向を示すからである。

これまでは、ノズルの傾き γ が1/3の場合であったが、つぎに、ノズルの傾きが重心の速度の変化におよぼす影響を調べる。

表6.18 重心加速度の最小値とそのときの姿勢

初期角度 α (°)	水平方向加速度の最小値		鉛直方向加速度の最小値	
	\ddot{x}_{min} (mm/s ²)	θ (°)	\ddot{y}_{min} (mm/s ²)	θ (°)
1	—	—	-229.8	8.68
10	-10.54	65.6	-134.2	19.54
20	-10.33	65.4	-100.4	29.72
30	-10.49	65.0	-84.9	38.47

$d=0.569$ (mm), $l=30$ (mm), $U=60$ (mm/s),
 $\Gamma=1/3$, No.1 試料

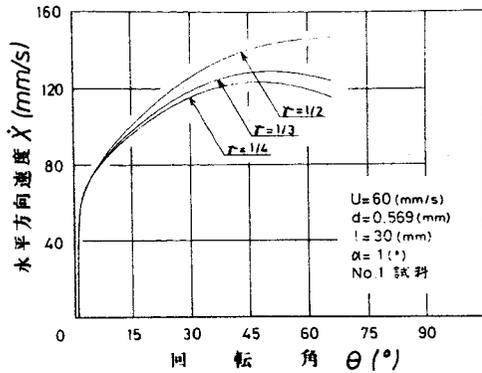


図6.100 水平方向速度におよぼすノズル傾きの影響

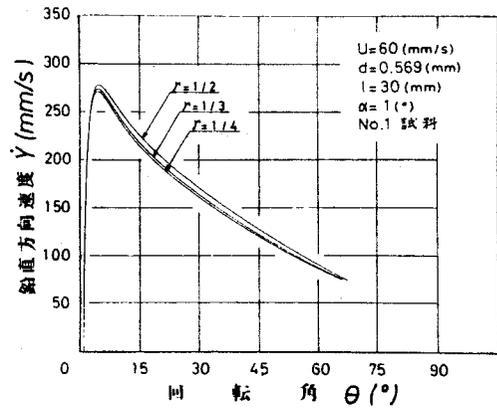


図6.101 鉛直方向速度におよぼすノズル傾きの影響

$\gamma = 1/3$ の場合，水平方向にふたたび加速される以前の領域でいったん減速される現象が見られたが，図6.100において， $\gamma = 1/2$ の場合を見ると，水平方向にいったん減速されることなく $\theta = 64^\circ$ 程度から \dot{X} の増大割合が大きくなることが分かる。この様子は， \ddot{X} の変化を表わす図6.102において， \ddot{X} は θ の増加に伴ない減少するが， $\gamma = 1/2$ の場合，負の値にはならず $\theta = 64^\circ$ 程度で最小，約 $4 \text{ (mm/s}^2\text{)}$ ，となりふたたび増大し始めることからいっそう明確になる。

姿勢の変化を表わす図6.117から，ノズルの傾きが大きいほど姿勢の変化が大きいため，同じ姿勢になるまでに線状体が水平方向および鉛直方向に移動する距離は小さいけれども，初期位置がノズル内のより下方であるため，同一姿勢における Y の値は大きい。ところが，ノズルの傾きが大きいほど流れの加速程度および水平方向に対する流れの傾きは大きいため，姿勢が同一のとき線状体回りの流速の水平方向成分および鉛直方向成分は大きくなる。このため，同一姿勢における \dot{X} ， \dot{Y} の値はノズルの傾きが大きいほど大きい。

また，ノズルの傾きが重心の加速度の変化におよぼす影響を表わす図6.102，6.103において，ノズルの傾きが大きいほど，

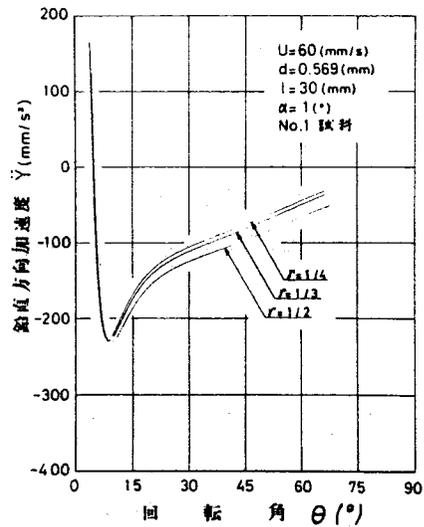
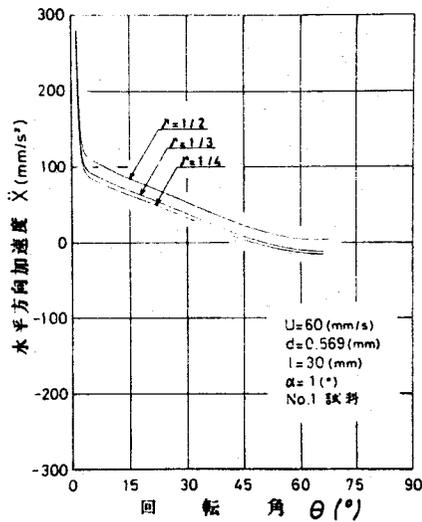


図 6.102 水平方向加速度におよぼす ノズル傾きの影響 図 6.103 鉛直方向加速度におよぼす ノズル傾きの影響

\ddot{x} の減少が低下する領域では同一姿勢における \ddot{x} の値は大きく、また、 \ddot{y} が増大し始めてから後の領域では $\ddot{y} (< 0)$ の絶対値も大きい。これは、ノズルの傾きが大きいほど流れの加速程度が大きいことから考えて、これまでの結果と一致する。さらに、ノズルの傾きが大きいほど流速の鉛直方向成分は大きいので、 $\ddot{y} (< 0)$ の絶対値の増大はよりいっそう軽減されており、 $\gamma = 1/4 \sim 1/2$ と同程度加速し、しかもその方向が水平であるような流れ中での場合、加速の程度の違いによる \ddot{y} の差はさらに大きくなる。なお、 $\gamma = 1/2$ の場合、 \ddot{y} の絶対値がふたたび増大する現象が見られないのは、他の γ の場合と比べて短時間のうちに du/dt および dv/dt は 0 に近づき \ddot{x} はふたたび増大し始めるが、その位置は $Y = 385$ (mm) 程度であり dv/dt が負になる前に線状体が底面に到達するからである。

最後に、線状体が水平な姿勢から運動を始める場合、重心の速度がどのように変化するかを調べる。図 6.104, 6.105 において、運動開始直後に線状体は急激に加速されるが、その後下流側の下方へ運動し続けるにつれて流れが加速している影響を

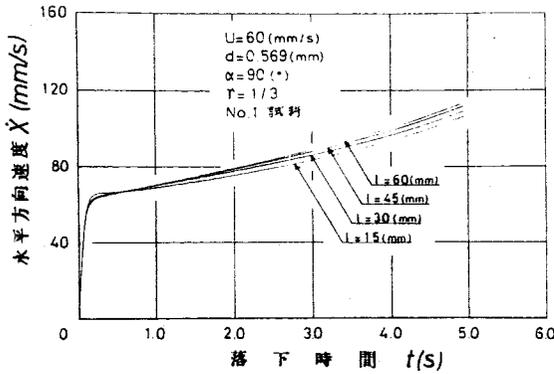


図6.104 $\alpha=90^\circ$ の場合の水平方向速度の変化

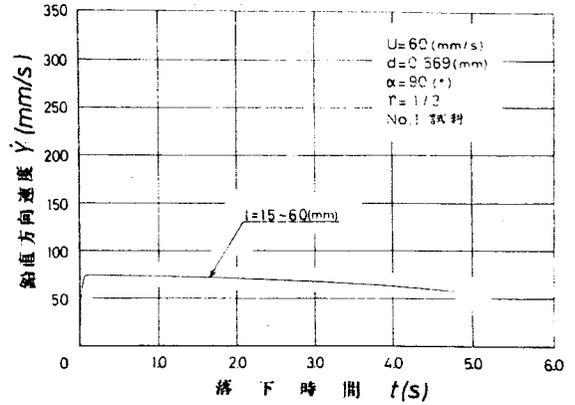


図6.105 $\alpha=90^\circ$ の場合の鉛直方向速度の変化

受けて、水平方向には除々に加速されるが、流速の鉛直方向成分は除々に減少しているため、鉛直方向にはおつかつ減速される。また、 \dot{Y} は長さの影響を受けないが、 \dot{X} は長さの影響を受ける。姿勢の変化を表わす図6.120から、流れが水平方向に対して傾いている影響を受け、 $l=15$ (mm)の場合、運動開始後短時間のうちに鉛直方向にわづかに ($\theta=88^\circ$ 程度)傾きふたたび水平方向に除々に近づくが、 $l=30\sim 60$ (mm)の場合、ゆっくり鉛直方向に回転する。なお、長さが大きいほど流れが傾いている影響を大きく受けるため、運動開始後間もなく同一落下時間における θ の値は長さが大きいほど小さくなる。したがって、運動開始直後の水平方向加速度は $l=15$ (mm)の場合がもっとも大きく、 $l=30\sim 60$ (mm)ではほとんど差が見られない。やがて、長さが大きいほど θ の値が小さくなり、しかも流れが加速している影響をより大きく受けるため、水平方向加速度は大きくなり、同一落下時間における \dot{X} の値が大きい状態が底面に到達するまで続く。

以上の結果をまとめると、ノズル内流れ中での重心速度の変化の特徴は、水平方向にいったん減速されるが水平な姿勢になる前にふたたび加速されることおよびこの現象に伴ない鉛直方

向の減速がふたたび増大することである。なお、流れの加速程度が大きい場合、水平方向にいったん減速されることなく水平方向加速度が増大し始める現象が生ずる。また、4種類の流れ中での結果を総合して、流れの加速程度が大きいほど、 \dot{X} の減少が低下する領域では同一姿勢における \dot{X} の値は大きく、 \ddot{Y} が増大し始めてから後の領域では \ddot{Y} の値は小さい。さらに、ノズル内では流れが加速し続けていることおよびその方向が水平方向に対して傾いているため、重心の速度および加速度の変化におよぼす流速、長さ、初期角度の影響が他の流れ中での場合より顕著に現われる。

ここで、第5章の実験結果と比較する。前項で述べたように、実験結果と計算結果の違いは、実験では軌跡に変動が見られたのに対し、計算では $l=15(mm)$ の場合わずかに変動が見られるだけであり、しかも変曲点の数は少なく変動の大きさも小さい。したがって、姿勢の変化に対する重心速度の変化にもこの違いが現われており、たとえば実験結果、図5.15, 5.16, において、 \dot{X} , \dot{Y} は矩形管内流れ中での場合のように滑らかに変化せず、加速と減速を繰返す現象が見られるのに対し、計算では水平方向にいったん減速されるがふたたび加速される現象およびこれに伴ない鉛直方向の減速が増大する現象が見られるだけである。なお、前項で述べたように、実験と同じ初期条件（静止流体中から運動を始めて流れ中へ入る。）のもとで計算をおこなえば、ノズルの上方で姿勢が変動するため、これに伴ない重心の速度が変動する現象が現われる可能性があり、また、底面近傍の境界層を考慮すれば、水平方向にふたたび加速された後この領域へ入って急激に減速される現象が見られると考えられる。しかし、実験で見られたような管路中央部で運動する際重心の速度が変動する現象が、ここで用いた計算方法により確かめられるかどうか分からない。

しかし、実験、計算ともに、同一姿勢における \dot{X} , \dot{Y} の値は

矩形管内の助走域での場合より大きく（ただし，実験では速度が変動するため， \dot{X} に関しては一部の領域で助走域での場合の方が大きくなる。），また，線状体が底面に近づくにつれて（ θ の増加に伴なって），流れの方向が水平方向に近づくので，両者の \dot{Y} の差は減少するという結果が得られた。

実験では，角速度が急激に減速されてほとんど0となり，ふたたび加速され始めるという現象が見られ，この角速度の変動に伴ない重心の速度も加速と減速を繰返した。そこで，ここで用いた理論式により重心の速度が変動する状態を調べる。

図6.106に $U=60$ (mm/s)， $d=0.569$ (mm)， $l=30$ (mm)のNo.1試料に対する実験結果を示す。この図は落下時間に伴って θ ， \dot{X} および \dot{Y} が変化する様子を表わしており，姿勢の変動に伴ない \dot{X} ， \dot{Y} が変動する状態が明確に分かるように3者を併記した。なお，この場合の姿勢の変化に対する \dot{X} ， \dot{Y} の変化は図5.15，5.16に示してある。

図6.106において，角速度（ θ の変化を表わす曲線の接線勾配）が，急激に減速され始めると，水平方向加速度は減少して \dot{X} は最大となり，その後水平方向に減速され始める。この減速状態は θ がほとんど一定（約38°）の状態を経て角速度がふたたび加速され始める直後まで続き，やがて水平方向にふたたび加速される。これに対し，角速度が急激に減速され始めても鉛直方向加速度（ \dot{Y} ）は徐々に増大し（減速が徐々に小さくなる。）， θ がほとんど一定の状態に近づくと急激に増大してほぼ0となる。そして，姿勢が変化しない間，鉛直方向加速度が0の状態が続き，角速度が加速さ

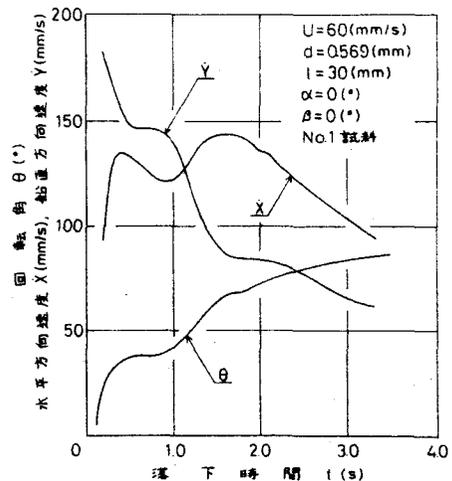


図6.106 姿勢および重心速度の変動状態

れ始めると鉛直方向にふたたび減速される。なお、角速度が急激に減速されている領域で $\dot{\gamma}$ の変化を表わす曲線が下に凸になるのに対し、図5.16において、この領域で姿勢の変化に対する $\dot{\gamma}$ の変化を表わす曲線が上に凸になるのは、 θ の値が小さい領域ほど線状体が回転するのに要する時間が短いからである。

運動方程式(6.79)式から、軸に直角な方向速度 u および軸方向速度 v が負であるので、 γ が急激に減少すると、加速度 du/dt (<0)は増大し dv/dt (>0)は減少する。また、重心の加速度を表わす(6.80)式において、 \ddot{X} は正、 \ddot{Y} は負(計算では、鉛直方向は上向きを正の向きに定めているので $\ddot{Y} < 0$ となる。)であるので、上述の結果を考慮すると、 γ の急激な減少に伴ない \ddot{X} 、 \ddot{Y} はともに減少する。 \ddot{Y} が減少するということは鉛直方向の減速が減少することを意味している。ところが、 du/dt は増大し、 dv/dt は減少するけれども、以前として $du/dt < 0$ 、 $dv/dt > 0$ の状態を保っているので、 \ddot{Y} に比べて \ddot{X} の減少の方が大きく \ddot{X} は γ が0になる前に負の値になるのに対し、 \ddot{Y} は γ がほぼ0になるとき高々0になるだけであり、負にはならない。すなわち、鉛直方向にふたたび加速されることはない。そして、 γ が増大し始めると同時に \ddot{X} 、 \ddot{Y} も増大し始める。しかし、 \ddot{Y} の最小値は高々0であるのに対し \ddot{X} の最小値は負の値であることから、 \ddot{Y} はすぐに減速され始めるが、 \ddot{X} は γ が増大し始めてしばらくして加速され始める。以上のように、角速度の変動に伴ない重心の速度が変動する状態を理論式を用いて調べた結果、その変動状態は実験結果と一致した。

しかし、ここで用いた計算方法では姿勢が変動する現象は見られず、したがって、重心の速度が変動する現象もほとんど見られないので、以下では諸要因が変動を除いた重心の速度の変化におよぼす影響について実験結果と計算結果を比較する。

まず、流速の影響を比較する。実験結果、図5.46、計算結果、図6.84、ともに \ddot{X} は θ の全領域で流速が大きいほど大き

い。いっぽう、実験結果、図5.47では、 \dot{Y} の最大値およびそのときの θ の値に流速の影響が顕著に現われ、流速が大きいほど \dot{Y} の最大値は小さくそのときの θ の値は大きい。これに対し、計算結果、図6.86では、 \dot{Y} が最大になるときの θ の値は流速が大きいほど大きくなる傾向を示すが実験ほど明確ではなく、 \dot{Y} の最大値は流速に対して一定の傾向を示さない。この違いは両者の初期条件が異なることによる。すなわち、実験では、流速が大きいほど線状体が流れ中に入ったときの急激な回転が大きいことおよびこのため、線状体がすべて流れ中に入ったとき鉛直方向に受ける抗力が大きくなることの2つの原因による。しかし、 \dot{Y} が減少し始める直後から同一姿勢に対する \dot{Y} の値は流速が大きいほど大きくなり、線状体が底面に近づくとつれて流速の鉛直方向成分が減少するため、流速による差は徐々に減少するという結果は実験、計算の両面から確かめられた。なお、この原因はすでに述べたように、線状体が鉛直方向に減速される割合および姿勢の変化はともに流速が大きいほど大きいので、 θ と \dot{Y} の関係を表わす曲線において \dot{Y} が減少する割合が流速にかかわらず同程度になるからである。

つぎに、長さの影響を表わす図5.25において、実験では同一姿勢に対する \dot{Y} の値は長さが大きいほど大きく、しかもこの現象は θ の全領域で見られた。この結果は計算でも得られており(図6.90)、さらに、計算では長さによる \dot{Y} の差は θ の増加に伴ない徐々に広がる傾向を示した。ただし、実験では線状体が流れ中に入ったときの急激な回転は長さの影響を受けるので、同一姿勢に対する線状体回りの流速の長さによる差は計算の場合より大きくなると思われる。したがって、 \dot{Y} におよぼす長さの影響は実験の場合の方が顕著に現われる。

いっぽう、実験では、長さが大きいほど \dot{Y} の最大値は大きく、そのときの θ の値は小さいことおよび θ の増加に伴ない変動を除いた \dot{Y} の平均的な変化には長さの影響が見られなくなり、

ほぼ同一曲線で表わされるという結果が得られた。(図5.26参照)これに対し,計算では, \dot{Y} の最大値およびそのときの θ の値に対する長さの影響は実験結果と一致するが,線状体が底面に近づくにつれて流速の鉛直方向成分は0に近づくことおよびそのときの姿勢は長さが多いほど鉛直に近いため,ある θ の領域までは長さが多い方が \dot{Y} の値は大きい,これ以上の領域では逆に小さくなり \dot{Y} が長さの影響を受けない領域は存在しない。(図6.92参照)実験でもこの現象は見られないことはないが重心の速度が変動しているので計算結果ほど明確には分からない。

最後に初期角度の影響を比較する。図5.18, 5.19において,実験では初期角度が大きい(初期角度は流れの向きと逆向きに設定している)ので,計算の場合と向きが異なる。)方が同一姿勢に対する \dot{X} , \dot{Y} の値は大きくなる。これに対し,計算結果,図6.96, 6.97, から,同一姿勢に対する \dot{X} の値は初期角度が小さいほど大きく,この結果は実験結果と一致するが,運動開始直後の急激な加速領域を過ぎると \dot{Y} の値は初期角度が大きいほど大きくなり,この結果は実験結果と逆である。実験でも線状体がすべて流れ中に入ったときの姿勢が鉛直に近い方が同一姿勢における水平方向および鉛直方向移動距離は大きいという結果が得られており,姿勢が同一のとき糸状体回りの流速の鉛直方向成分は初期角度が大きい方が小さいので, \dot{Y} の値は小さくなると考えられる。しかし,結果は逆になっており,この原因は分からない。なお,初期角度は,線状体が運動をする位置に影響を与え,位置による流速および流れ方向の違いが \dot{X} , \dot{Y} に初期角度の影響となって現われることが,実験と計算の両面から確かめられた。

また,実験と計算よりノズル内流れ中での結果と矩形管内助走域での結果を比較して,重心の速度の変化におよぼす流速,長さ,初期角度の影響は,ノズル内流れ中での場合の方が顕著

に現われることが分かった。

6.7.3 線状体の姿勢および角速度

線状体の軸方向に沿って分布する流速は先端部に近いほど大きく、しかも、流れの方向は先端部に近いほど水平方向に近いので運動開始時に線状体に作用する回転モーメント N は、姿勢を水平方向に回転させる向きに働く。さらに、軸方向に沿って分布する流速の差は U が大きいほど大きいので、十分に発達した流れ中での場合と同様に U が大きいほど N の値は大きくなる。いっぽう、助走域での場合、流速が小さいほど流れの発達が早いので、 N の値は流速が小さいほど大きくなった。また、ノズル内流れでは壁面近傍の境界層の領域を考慮していないため、 $U=80$ (mm/s) の場合、 N の値は助走域での場合より大きい。が、 $U \leq 60$ (mm/s) の場合、逆に小さくなり、さらに(6.15)式で表わされる流速の軸に直角な方向成分の重心回りの一次モーメントの時間的変化率 dU_z/dt (>0) は、助走域での場合より非常に小さく（一様流れ中での場合、 $dU_z/dt=0$ であることから、ノズル内流れ中での dU_z/dt の値が非常に小さくなることが推察できる。）、角加速度 $d\gamma/dt$ の変化にはほとんど寄与しない。いっぽう、流体に対する線状体の相対速度の軸に直角な方向成分、 $u-U$ (<0) と軸方向成分、 $v-U$ (<0) の積は助走域での場合の方が明らかに大きい。

したがって、助走域での結果、図6.73とノズル内での結果、図6.109を比較すれば分かるように、運動開始後しばらくの間同一落下時間における角速度 γ の値は、助走域での場合の方が大きくなる。しかし、 γ の増加に伴ない線状体の回転を押える向きに作用する回転モーメント N は、ノズル内流れ中での場合流れが加速し続けているので助走域での場合より小さい。したがって、 $U=80$ (mm/s) の場合、 $t=0.14$ (s) 程度からノズル内流れ中での場合の方が γ の値は大きくなる。そして、 γ の値が

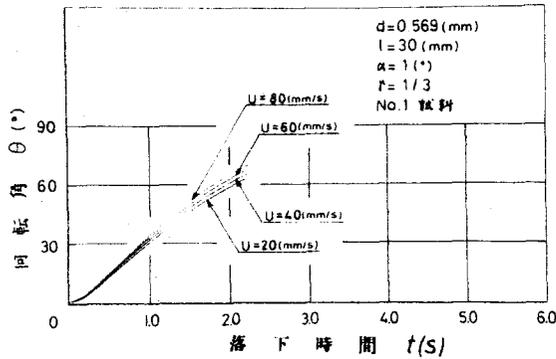


図6.107 姿勢におよぼす流速の影響

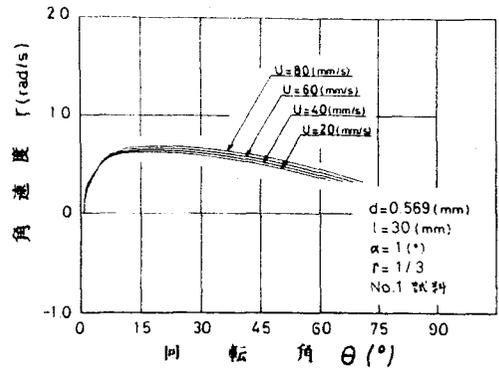


図6.108 角速度におよぼす流速の影響

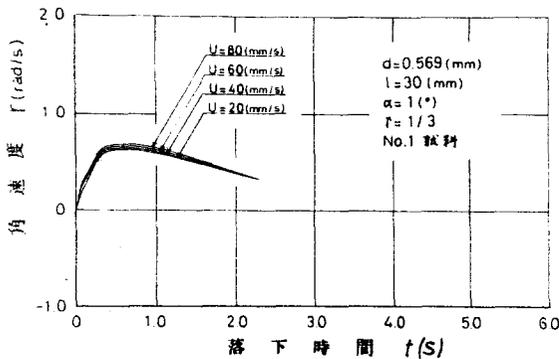


図6.109 角速度におよぼす流速の影響

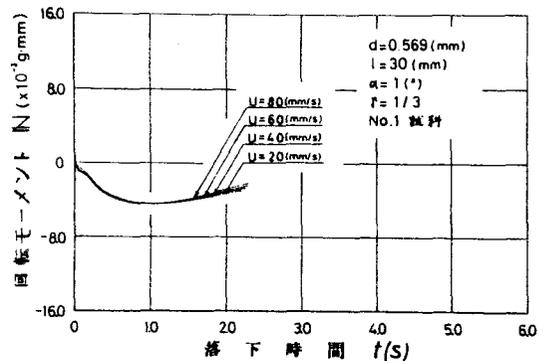


図6.110 回転モーメントにおよぼす流速の影響

大きくなるため、間もなくノズル内流れ中での場合の方が N の値は大きくなるが、この状態になる直前から $(U-U_1)(v-U)$ の値は助走域での場合より大きくなるため、 $t \geq 0.14$ (s)程度の領域ではノズル内流れ中での場合の方が同一落下時間における γ の値が大きい状態が続く。なお、流速が小さいほど長い時間にわたって助走域での場合の方が γ の値が大きい状態が続く。また、ノズル内流れにおいても壁面近傍の境界層を考慮する場合には、運動開始時から γ の値はノズル内流れ中での場合の方が大きくなると考えられる。

さて、ノズル内流れ中での場合、図6.109, 6.110において、運動開始時に線状体に作用する回転モーメント N は流速が大きいほど大きく、しかも $U-U_1$ の絶対値が大きいので $(U-U_1) \cdot (v-U)$ も大きくなる。したがって、運動方程式(6.16)式の第3式を考慮すると、運動開始直後の領域で流速が大きいほど γ が大きいことが分かる。そして、 γ の増大に伴ない線状体の回転を押える向きに作用する回転モーメント N は流速が大きいほど大きくなる。また、 $U=80$ (mm/s)の場合、 $(U-U_1)(v-U)$ は運動開始後短時間のうちに減少し始めて $t=0.1$ (s)程度で極小となりふたたび増大する。このため、角加速度 dr/dt は $t=0.1$ (s)程度で極小になる。これに対し、 $U \leq 60$ (mm/s)の場合、 $(U-U_1)(v-U)$ は運動開始時からしばらく増大するため、 $U=80$ (mm/s)の場合ほど dr/dt は小さくならないが、やはり $t=0.1$ (s)程度で極小になる。なお、 dr/dt の極小値は流速が大きいほど小さくなる。 γ が加速されている領域で dr/dt が極小になる現象は、一様流れ中での場合(図6.25)および助走域での場合(図6.73)にも見られ、両者ともに流速が大きいほど dr/dt の極小値は小さく、ノズル内流れ中での場合と一致する。したがって、 γ の変化を表わす曲線には変曲点が見られ、しかも流速が大きいほど顕著である。

その後、 γ は $t=0.6$ (s)程度から減速され始めるが、 γ はつねに流速が大きいほど大きいため、図6.107を見れば分かるように、流速による θ の値の差は落下時間に伴ない除々に増大し続ける。また、同一落下時間における線状体の鉛直方向移動距離はほとんど流速の影響を受けないが、水平方向移動距離は流速が大きいほど大きく、しかも落下時間に伴ないその差は広がる。したがって、軸方向に沿って分布する流速の軸に直角な方向成分の差は U が大きいほど大きくなるので、やがて γ が大きいにもかかわらず回転を押える向きに作用する回転モーメント N は U が大きいほど小さくなる。しかし、軸方向の相対速度

$\psi - \psi' (< 0)$ の絶対値は U が大きいほど小さくなるため、 $(\psi - \psi')$ ・ $(\psi - \psi')$ は小さくなる。結局、角加速度 $d\gamma/dt (< 0)$ の絶対値は U が大きいほど大きくなるので、線状体が底面に近づくと γ の変化には流速の影響が見られなくなり、 $U = 20 \sim 80$ (mm/s) の ψ と γ の関係を表わす曲線は漸近する。

以上は、落下時間に伴って角速度が変化ある様子について述べたが、姿勢の変化を表わす図 6.107 から、同一落下時間における θ の値は U が大きいほど大きく、しかもその差は除々に広がることを考慮すると、図 6.108 に示すように、姿勢の変化に対する角速度の変化を表わす曲線は、線状体が底面に近づいても漸近することはなく、流速の影響が明確に現われることが分かる。

すでに述べたように、運動開始直後の領域を除き、同一落下時間あるいは同一姿勢における γ の値は助走域での場合より大きくなり、また、十分に発達した流れ中での場合 (図 6.48, 6.49)、流速の変化が大きい上面近くの領域で角速度が急激に変化し、線状体が流速の変化が小さい管路中央部で運動するようになると角速度の変化は一様流れ中での場合とほぼ一致する。したがって、角速度が急激に減少した後の領域では、ノズル内流れ中での場合の方が角速度は大きくなる。さらに、表 6.19 に示す γ の最大値とそのときの θ と t の値を他の流れ中での結果 (表 6.6, 6.10, 6.14) と比較すると、ノズル内流れ中での場合、加速時間がかっとも長くしかもより水平に近い姿勢になるまで加速されることが分かる。

以上の結果から、ノズル内では流れが加速していることおよびその方向が場所的に変化することが原因になって、他の流れ中での場合と異なり角速度の変

表 6.19 角速度の最大値とそのときの姿勢、落下時間

線状体長さ l (mm)	流速 U (mm/s)	角速度の最大値		
		γ (rad/s)	θ (°)	t (s)
15	60	2.377	23.0	0.26
	20	0.6249	17.0	0.61
30	40	0.6435	17.6	0.60
	60	0.6633	18.8	0.61
	80	0.6843	19.9	0.62

$d = 0.569$ (mm), $\alpha = 1$ (°), $r = 1/3$, No. 1 試料

化におよぼす流速の影響が θ の全領域で現われたと考えられる。

これまでは、 $l=30$ (mm)と比較的長さが小さい場合であったが、十分に発達した流れ中での場合(図6.53)および助走域での場合(図6.77)、長さが大きいほど運動開始直後の領域で流速分布の影響を大きく受けるため、一様流れ中での場合と比べて角速度がより大きく加速されるという結果が得られている。とくに、助走域での場合境界層の領域が狭いことあって、この領域で長さが大きい方が角速度は大きくなった。

ところが、ノズル内流れ中での場合、図6.113を見れば分か

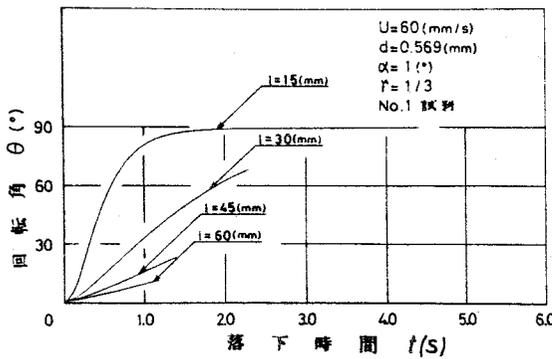


図6.111 姿勢におよぼす長さの影響

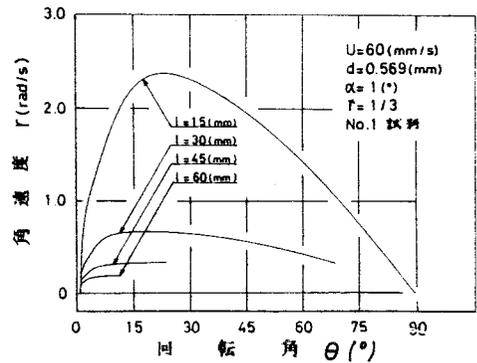


図6.112 角速度におよぼす長さの影響

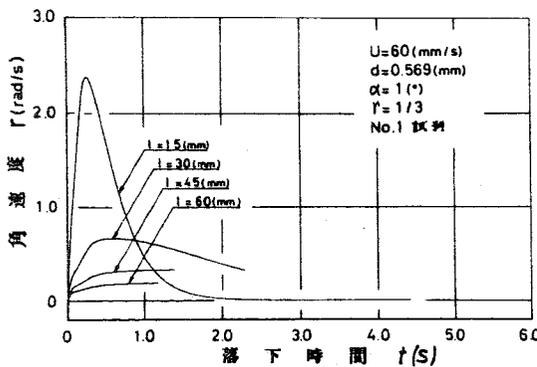


図6.113 角速度におよぼす長さの影響

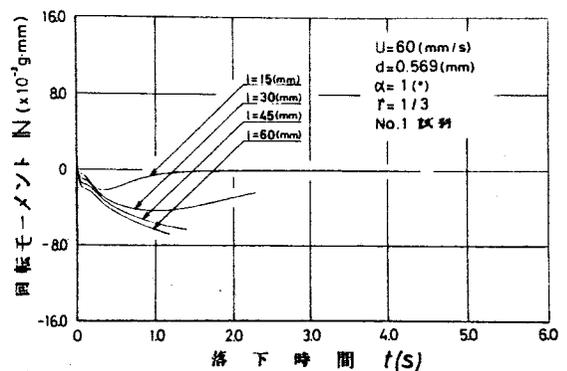


図6.114 回転モーメントにおよぼす長さの影響

るように、このような現象は生じない。これは、表6.19と一様流れ中での結果、表6.6を比較すると両者の γ の最大値の差は $\ell=15$ (mm)の方がわずかに大きいことから分かる。図6.114から、他の流れ中での場合と同様に、運動開始時に姿勢を水平方向に回転させる向きに作用する回転モーメント M は、長さが大きいほど大きいが、たとえば助走域での結果(図6.78)と比較して長さによる M の差は非常に小さく、各長さの慣性モーメントの比率と同程度である。いっぽう、 $(u-v)(\psi-\psi')$ の値は長さにかかわらずほぼ同じであり、 $d\Omega_2/dt$ は角加速度 dr/dt の変化にはほとんど寄与しないほど小さい。したがって、角加速度を表わす(6.16)式の第3式を考慮すると、長さが小さいほど dr/dt は大きいことが分かる。以上のように他の流れ中での結果と異なるのは、ノズル内流れでは壁面近傍の境界層を考慮していないことが原因であると考えられ、この領域を考慮する場合、他の流れ中での場合と同様な結果が得られるはずである。

前項で述べたように、 $\ell=15$ (mm)の場合、水平方向にいったん減速された後ふたたび加速される現象およびこれに伴ない鉛直方向の減速が増大する現象が生ずる。そこで、この現象に伴なって角速度がどのように変化するかを調べる。

γ がふたたび加速され始めた後、軸方向速度 v は加速され始める。そして、しばらくして $\dot{\gamma}$ の減速が増大し始め、軸に直角な方向速度 u が減少し始める。いっぽう、 $\ell=15$ (mm)の場合、姿勢の変化が大きく、ほぼ水平な姿勢になる位置は管路中央部である(たとえば、 θ が約 88° になる位置は $Y=230$ (mm)程度である。)ので、流速の軸に直角な方向成分の向きは u の向きと同じであり($\theta+\theta_f > 90^\circ$)、その値は減少しており、しかも減少割合は u の場合より大きいので $u-v$ (<0)の絶対値は増大している。また、流速の軸方向成分の向きも v の向きと同じであり、 v の場合より大きい割合で増大しているので、 $\psi-\psi'$ (<0)の絶対値は減少している。なお、 $u-v$ の絶対値の増大割合よ

り $\psi-V$ の絶対値の減少割合の方が大きいので $(U-U_1)(\psi-V)$ は減少する。ところが、ノズル内流れは加速しているので $\psi-V$ の絶対値の減少割合は一様流れ中での場合より小さくなり、 $(U-U_1)(\psi-V)$ の減少割合はノズル内流れ中での場合の方が小さい。このため、一様流れ中での場合、回転を押える向きに作用する回転モーメント N の減少は $(U-U_1)(\psi-V)$ の減少と同程度の割合であるのに対し、ノズル内流れ中での場合、 N の減少割合の方がわずかに大きくなる。なお、 dU_2/dt の値は非常に小さく角速度の変化には寄与しない。したがって、 $\dot{\chi}$ がふたたび加速され始めてから($\theta=88^\circ$, $t=1.6$ (s)程度)長い時間を経た後、 $\theta=89.5^\circ$, $t=3.7$ (s)程度から角速度はふたたび加速され始め、この状態は線状体が底面に到達するまで続く。

一様流れ中での場合、水平な姿勢に近づくにつれて角速度が0に近づいたことから考えて、ノズル内流れ中での場合、水平な姿勢になる前に角速度がふたたび加速され始める現象が現われることが特徴である。しかし、角加速度の値は非常に小さいので、図6.112, 6.113において、この現象は明確には分からない。

ここで、十分に発達した流れ中での結果(図6.52)と比較すると、 $l=30$ (mm)の場合すでに述べた、角速度が急激に減少した後の領域ではノズル内流れ中での場合の方が角速度は大きいという結果は、長さにかかわらず成立つことが分かる。また、助走域での場合(図6.76)、 θ の値の小さい領域で $l=60$ (mm)の角速度の変化に極小になった後ふたたび加速される現象が見られたが、ノズル内流れでは壁面近傍の境界層を考慮していないため、この現象は見られず、長さが大きい場合にも角速度の変化に変曲点が現われるにとどまったと考えられる。なお、図6.111, 6.112から他の流れ中での場合と同様に、長さが小さいほど角速度は大きく線状体が回転するのに要する時間は短い。

ノズル内流れ中での重心速度の変化の特徴，水平方向にいったん減速され始めるがふたたび加速される現象およびこれに伴ない鉛直方向の減速がふたたび増大する現象は， $l=30(mm)$ ， $\alpha=20^\circ, 30^\circ$ の場合にも見られることを前項で述べたが，この場合， X がふたたび加速され始める位置が $\alpha=30^\circ$ の場合でも $Y=3/5(mm)$ 程度と上述の $l=15(mm)$ の場合に比べてノズルの下方であり，しかもこの現象が生じ始めてから長い時間を経た後でないとい角速度がふたたび加速され始める現象は生じないので， $\alpha=20^\circ, 30^\circ$ の場合，図6.116を見れば分かるように，角速度がふたたび加速され始める前に線状体が底面に到達する。

一樣流れ中での場合，姿勢の変化に対する角速度の変化は，運動開始直後の急激な加速の領域を除き初期角度にかかわらず同一曲線で表わされる。いっぽう，十分に発達した流れ中での場合， θ のどの領域においても θ と $\dot{\theta}$ の関係は同一曲線で表わされることはない。

図6.116において，ノズル内流れ中での場合，運動開始直後の急激な加速領域を過ぎると姿勢の変化に対する角速度の変化は，初期角度にかかわらずほぼ同一曲線で表わされ，線状体が底面に近づくにつれて他の曲線から離れていく化傾向にある。

これはつぎのように説明できる。前項で述べたように，ノズ

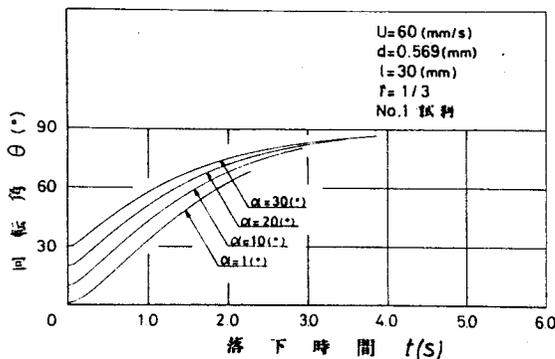


図6.115 姿勢におよぼす初期角度の影響

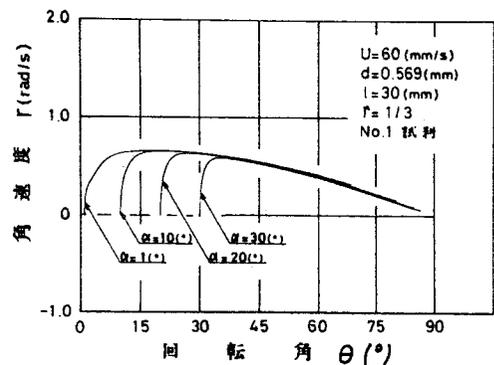


図6.116 角速度におよぼす初期角度の影響

ル内流れは加速し続けているので， θ の全領域で $\dot{X} < \dot{X}_s + W_{cx}$ となるが，この差 ΔX は運動開始後の小さい領域を除き初期角度に関係なくほぼ一定になる。いっぽう， \dot{Y} に関しては運動開始後の小さい領域を除き初期角度に関係なく $\dot{Y} = \dot{Y}_s + W_{cy}$ が成立する。したがって，重心の速度を表わす(6.17)式から

$$\left. \begin{aligned} U &= (\dot{X}_s + W_{cx} - \Delta X) \cos \theta + (\dot{Y}_s + W_{cy}) \sin \theta \\ v &= -(\dot{X}_s + W_{cx} - \Delta X) \sin \theta + (\dot{Y}_s + W_{cy}) \cos \theta \end{aligned} \right\} \quad (6.82)$$

となり，(6.15)式で表わされる U_1 ， V は，重心での流速の水平方向成分 W_{cx} および鉛直方向成分 W_{cy} を用いてほぼ次式で表わされる。

$$\left. \begin{aligned} U_1 &= W_{cx} \cos \theta + W_{cy} \sin \theta \\ V &= -W_{cx} \sin \theta + W_{cy} \cos \theta \end{aligned} \right\} \quad (6.83)$$

したがって，(6.82)式，(6.83)式から

$$\left. \begin{aligned} U - U_1 &= (\dot{X}_s - \Delta X) \cos \theta + \dot{Y}_s \sin \theta \\ v - V &= -(\dot{X}_s - \Delta X) \sin \theta + \dot{Y}_s \cos \theta \end{aligned} \right\} \quad (6.84)$$

となり，姿勢が同じであれば初期角度にかかわらず $U - U_1$ ， $v - V$ は同一である。また，(6.84)式の第1式から，流体の線状体に対する相対速度の軸に直角な方向成分は初期角度にかかわらず等しいので線状体に作用する回転モーメント M も等しくなる。なお， dU_1/dt は小さく角加速度 $d\theta/dt$ の変化にはほとんど寄与しない。したがって，角加速度を表わす(6.16)式の第3式を考慮すると，同一姿勢における $d\theta/dt$ の値は初期角度に関係なく等しいことが分かり，運動開始直後に急激に加速されて，いったん θ の値が一致した後の領域では， θ と γ の

関係は同一曲線で表わされる。

すなわち、一様流れ中での場合と同様に、流れに対する線状体の相対的な並進運動が初期角度にかかわらず同じになるため、線状体の回転運動も初期角度の影響を受けない。ただし、初期角度による差がわずかに見られるのは、流速が軸方向に沿って分布し、しかも流れの方向が異なるため、(6.83)式の関係が完全には成立しないからであると考えられる。

回転運動が初期角度の影響をほとんど受けないという結果から、図6.115において ψ と θ の関係を表わす曲線を落下時間軸に沿って平行移動すると、運動開始直後の急激な加速領域を除き初期角度にかかわらずほぼ重なることが分かる。

これまでは、ノズルの傾きが $\gamma = 1/3$ の場合であったが、つぎに、ノズルの傾きが姿勢の変化におよぼす影響を調べる。

図6.119において、ノズルの傾きが大きいほど初期位置での流速の鉛直方向成分が大きいため、 $\psi - \psi_0 (< 0)$ の絶対値は小さくなる。したがって、 $(\psi - \psi_0)(\psi - \psi_0)$ の値は小さいが、流れの加速程度はノズルの傾きが大きいほど大きいので、運動開始時に姿勢を水平方向に回転させる向きに働く回転モーメント M は大きくなり、運動開始直後の領域で γ は大きくなる。 $\gamma = 1/4$ の場合、 $(\psi - \psi_0)(\psi - \psi_0)$ は運動開始後短時間のうちに減少し

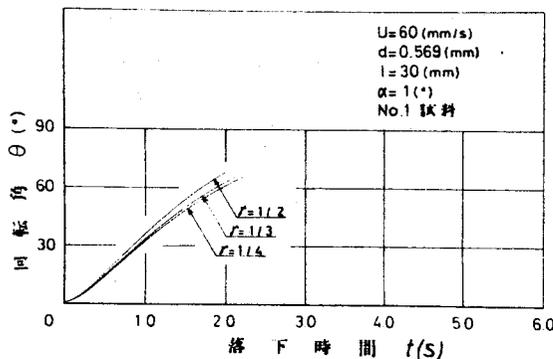


図6.117 姿勢におよぼすノズル傾きの影響

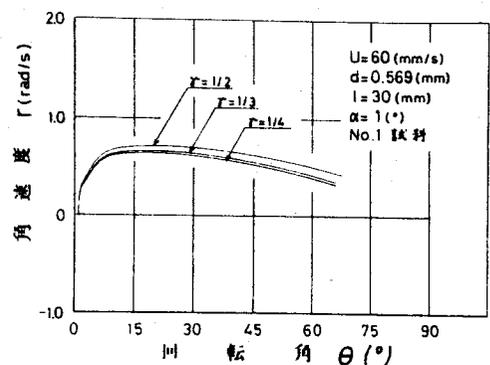


図6.118 角速度におよぼすノズル傾きの影響

始めて $t = 0.7$ (s) 程度で極小となりふたたび増大する。このため、角加速度 $d\gamma/dt$ は $t = 0.7$ (s) 程度で極小になる。これに対し $\gamma = 1/3, 1/2$ の場合、 $(u-v)$ ($w-v$) は運動開始時からしばらく増大するため、 $\gamma = 1/4$ の場合ほど $d\gamma/dt$ は小さくなる

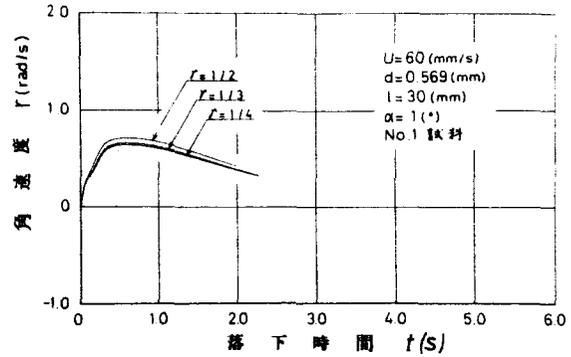


図6.119 角速度におよぼすノズル傾きの影響

ないか、やはり $t = 0.7$ (s) 程度で極小になる。したがって、 γ の変化を表わす曲線には変曲点が見られ、しかもノズルの傾きが小さいほど顕著である。この結果から、一樣流れ中での場合 (図6.25) の方が変曲点がいほど顕著に現われると考えられる。

γ の増大に伴ない回転を押える向きに作用する回転モーメント M はノズルの傾きが大きいほど大きくなるが、この状態が生ずる直前から、軸方向速度 v の増大に伴ない $(u-v)$ ($w-v$) はノズルの傾きが大きいほど大きくなるので、 $d\gamma/dt$ が大きい状態が $t = 0.25$ (s) 程度まで続き、その後の領域ではノズルの傾きが小さいほど $d\gamma/dt$ は大きくなる。そして、 γ は $t = 0.6$ (s) 程度から減速され始め、線状体が底面に近づくにつれてノズルの傾きによる差は除々に小さくなり、 $\gamma = 1/4 \sim 1/2$ の t と γ の関係を表わす曲線は漸近する。

ノズルの傾きは、流れの加速程度に影響を与えるので、ノズルの傾きが姿勢の変化におよぼす影響は流速の影響と同じになる。すなわち、ノズルの傾きが大きいことは流速が大きいことに対応し、同一落下時間における γ の値はノズルの傾きが大きいほど大きくなる。したがって、図6.117 から線状体が回転するのに要する時間は小さく、しかもノズルの傾きによる姿勢の差は落下時間に伴ない広がる。以上の結果を考慮すると、

図 6.118 において 姿勢の変化に対する角速度の変化を表わす曲線は、線状体が底面に近づいても漸近することではなく、ノズルの傾きの影響が明確に現われることが分かる。また、表 6.20 から γ が加速される時間はノズルの傾きにかかわらず同じであり、傾きが大きいほどより水平に近い姿勢になるまで加速されることが分かる。

最後に、線状体が水平な姿勢から運動を始める場合、姿勢がどのように変化するかを調べる。流れ方向が水平である場合、線状体は水平な姿勢を保ったまま運動し続けると考えられるが、ノズル内流れのようにその方向が水平方向に対して傾いている場合、図 6.120, 6.121 に示すように姿勢および角速度は変化する。

線状体の軸方向に沿って分布する流速の軸に直角な方向成分は先端部（下流側）ほど大きく、しかもその向きは運動方向と同じであるので、運動開始時に糸状体に作用する回転モーメント M は姿勢を鉛直方向に回転させる向きに働く。さ

表 6.20 角速度の最大値とそのときの姿勢, 落下時間

ノズルの傾き γ	角速度の最大値		
	r (rad/s)	θ ($^\circ$)	t (s)
1/2	0.7136	20.3	0.61
1/3	0.6633	18.8	0.61
1/4	0.6438	18.2	0.61

$d=0.569$ (mm), $l=30$ (mm),
 $U=60$ (mm/s), $\alpha=1$ ($^\circ$), No.1 試料

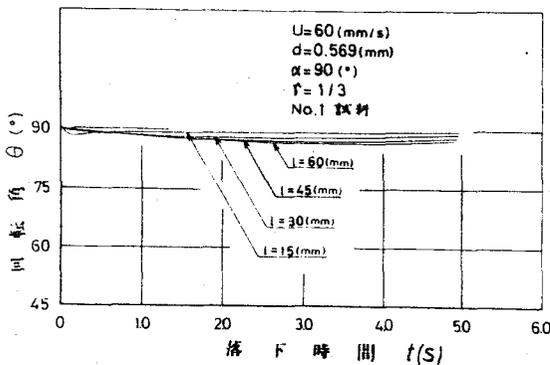


図 6.120 $\alpha=90^\circ$ の場合の姿勢の変化

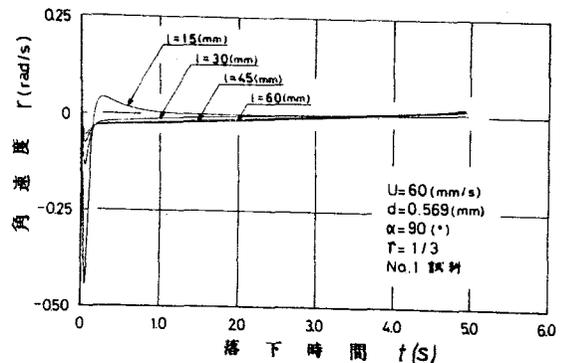


図 6.121 $\alpha=90^\circ$ の場合の角速度の変化

に、軸方向に沿って分布する流速の差は長さの大きいほど大きいので、 N の値は大きくなるが、この N の比率は各長さの慣性モーメントの比率より小さい。いっぽう、 $(u-U_1)(v-V)$ の値は負となり、長さにかかわらずほぼ同じであり、 dU_2/dt は dr/dt の変化にはほとんど寄与しないので、 dr/dt (<0)の絶対値は長さの小さいほど大きく、 γ は急激に減少し線状体はわずかに鉛直方向に傾く。そして、長さの小さいほど慣性が小さいので軸方向に急激に加速されて $v-V$ が負になるので $(u-U_1)(v-V)$ は正の値になり、 $l=15$ (mm)の場合、 γ は急激に増大して、 $t=0.16$ (s)程度で正の値になる。 $l \geq 30$ (mm)の場合、 γ が急激に増大しても正の値にはならず、その後 dr/dt が急激に減少して γ は除々に増大する。 γ が正の値(姿勢が水平方向に回転し始める)になるまでに要する時間は長さの大きいほど長く、このため線状体はより鉛直方向に傾く。その後線状体は水平方向にゆっくり回転し始める。そして、長さの大きいほど θ の値は小さく、しかも流れが加速している影響をより大きく受けるため、同一落下時間における θ の値は大きくなり、この状態が底面に到達するまで続く。

以上の結果をまとめると、 $l=15$ (mm)の場合のように水平な姿勢になる前に X がふたたび加速され始める位置がノズルの上方である場合、水平な姿勢になる前に角速度がふたたび加速され始める現象が現われることがノズル内流れ中での特徴である。また、流速の影響とノズルの傾きの影響は同じになり、角速度の変化におよぼす影響は θ の全領域で現われる。さらに、運動開始直後の急激な加速領域を過ぎると、姿勢の変化に対する角速度の変化は初期角度の影響をほとんど受けない。なお、水平な姿勢から運動を開始する場合、線状体はわずかに鉛直方向に傾きやがて水平方向に漸近する現象が見られる。

ここで、第5章の実験結果と比較する。実験では、角速度が急激に減速されてほとんど0となり、ふたたび加速され始め

るというように、加速と減速が繰返し現われ、姿勢は変動しながら水平方向に近づく。これに対し、計算では $l=15(mm)$ の場合、水平な姿勢になる前にふたたび角速度が加速される現象が見られるだけであり、しかもその加速は非常に小さい。なお、実験と同じ初期条件（静止流体中から運動を始めて流れ中へ入る。）のもとで計算をおこなえば、糸状体が流れ中に入ったとき急激に回転させられるため、ノズルの上方で姿勢が変動する現象が現われると考えられる。しかし、管路中央部で運動する際実験で見られたような姿勢が変動する現象が、ここで用いた計算方法で確かめられるかどうか分からない。

したがって、以下では諸要因が変動を除いた平均的な姿勢の変化におよぼす影響について実験結果と計算結果を比較する。なお、実験ではノズル内流れ中での姿勢の変化は、矩形管内の助走域での姿勢の変化を中心にして減衰振動するという結果が得られている。

まず、流速の影響を比較する。計算結果、図6.107、では流速が大きいほど姿勢の変化は大きくなるのに対し、実験結果、図5.50、では流速が大きいほど姿勢の変動は大きいが、平均的な姿勢の変化は流速の影響をほとんど受けない。実験はノズルの傾き $\theta=1/4$ でおこない、計算は $\theta=1/3$ でおこなった。計算からノズルの傾きが大きいほど姿勢の変化は大きくなるという結果が得られており、ノズルの傾きが小さいほど流速の影響は現われにくくなる。さらに、実験では姿勢が変動するわけで流速による姿勢の変化の差を明確には握ることができなかった。図6.107から、流速による姿勢の変化の差は小さい。したがって、流速の影響を実験的に確かめるにはもっと傾きの大きいノズルを用いて実験をおこなう必要がある、ノズルの傾きが大きい場合、平均的な姿勢の変化は計算結果と同様に、矩形管内の助走域での場合より大きくなると思われる。

つぎに、長さの影響として、実験結果、図5.29、計算結果、

図6.111,ともに長さが小さいほど角速度は大きく線状体が回転するのに要する時間は短いという結果が得られた。また,実験では $l=15$ (mm) の場合,姿勢が水平方向に近づいたときの線状体の位置がまだノズルの上方であるため,姿勢は水平方向を中心にして減衰振動するのに対し,計算では水平な姿勢になる前にふたたび角速度が加速され始めるが,角加速度は小さく姿勢が水平方向に漸近する現象が見られるだけである。

最後に,初期角度の影響を比較する。図5.22において,実験では初期角度が大きい方が変動が多く見られるが,線状体が流れ中に入ったときの急激な姿勢の変化の領域を除き,平均的な姿勢の変化には初期角度の影響はほとんど見られない。この結果は計算でも確かめられており,図6.115において姿勢の変化を表わす曲線を落下時間軸に沿って平行移動すると,運動開始直後の急激な加速領域を除き初期角度にかかわらずほぼ重なる。初期角度は,線状体が運動する位置に影響を与え,位置による流速および流れ方向の違いが重心の速度に初期角度の影響となって現われるが,流れに対する線状体の相対的な並進運動が初期角度にかかわらずほぼ同じになるので,線状体の回転運動も初期角度の影響をほとんど受けない。

6.8 結 言

本章では、直線の線状体が単一で流れ中を自由落下する場合について理論解析をおこなった。そして、一様流れ中、矩形管内での十分に発達した流れ中、矩形管内での助走域およびノズル内流れ中の4種類の場合に対して数値計算をおこない、実験結果とあわせて、実験と計算の両面から線状体の基本的運動特性を明らかにした。また、同時に流速、線状体長さ、初期角度およびノズルの傾きなどの要因が運動特性におよぼす影響を調べた。

得られた結果を要約すると、つぎの通りである。

(1) 一様流れ中での場合

(i) 線状体は、鉛直方向に対してある角度をもって運動し始め、すぐに重心の軌跡の接線勾配は極大になる。その後、運動方向は除々に水平方向に近づくが、やがて、軌跡はふたたび変曲点をもち、運動方向は鉛直方向に回転し始める。そして、最終的に姿勢は水平方向に漸近し、線状体はもともと安定な水平姿勢を保ったまま鉛直方向には静止流体中での場合と同一の一定速度で落下し、水平方向には流速と同一速度で移動する。

(ii) 運動特性に流速の影響が現われるのは、運動開始後の θ の小さい領域 ($l=30(\text{mm})$ の場合、 $\theta < 15^\circ$ 程度の領域) だけであり、これ以上の領域では流れに対する線状体の相対的な並進運動は流速にかかわらず同じになる。このため、線状体の回転運動も流速の影響を受けない。これは、流速が場所的に変化しないことが原因している。また、流速の影響は長さが小さいほど顕著に現われる。

(2) 矩形管内の十分に発達した流れ中での場合

(i) 管路中央部では流速の変化がわづかであるので、落下軌跡の変化状態は一様流れ中での場合と一致するが、流速の変化が大きい壁面近くの領域、とくに底面近くの領域では運動方向が急激に鉛直方向に近づく現象が見られる。さらに、長さが大きい場合、線状体は鉛直方向に回転する。また、初期角度は、線状体が運動をおこなう位置のみならず軌跡の形にも影響をおよぼす。

(ii) 線状体が壁面近くの領域で運動するとき、その運動特性、その中でもとくに水平方向速度および姿勢の変化は、一様流れ中での場合と異なる。また、諸要因の影響は一様流れ中での場合より顕著に現われるが、要因の影響を考察する場合、管路の高さを考慮する必要がある。

(3) 矩形管内の助走域での場合

(i) 助走域での流れ状態は、一様流れから十分に発達した流れへ移行する途中の段階であるので、落下軌跡は両者の落下軌跡を合わせたような形になる。また、流速の影響も両場合の中間的なものになる。なお、底面近くの領域で線状体が鉛直方向に回転する現象が、 $l=30(mm)$ の場合見られ、 $l=60(mm)$ の場合現われず、十分に発達した流れ中での結果と逆になったが、これは管路高さとの関連によるものである。

(ii) 重心の速度および姿勢の変化状態も、一様流れ中での場合と十分に発達した流れ中での場合の間に位置する。そして、流れの発達程度が大きくなるにつれて十分に発達した流れ中での場合へ近づく。また、平均流速により流れの発達程度が異なり、その影響が流速の影響に含まれるため、他の流れ中での場合より流速の影響が現われにくい。ここで用いた計算条件のも

とでは流れの発達程度が比較的小さいため、運動開始直後の領域で長さが大きい方が角速度が大きくなる現象が見られる。

(iii) 実験と計算では初期条件が異なるので、この違いを考慮すると、助走域での運動特性および流速、長さの影響は、実験結果と計算結果で一致する。

(4) ノズル内流れ中での場合

(i) 運動開始直後に運動方向がいったん鉛直方向に近づくと、その後の領域では流れが加速している影響を受け、底面に到達するまで運動方向は水平方向に近づく。しかし、線状体が水平な姿勢になるまでに移動する距離が小さい場合、その軌跡にはいくつかの変曲点が現われる。この現象は長さが小さいほど現われ易い。また、流速の影響は一様流れ中での場合より顕著に現われ、初期角度およびノズルの傾きも落下軌跡に影響をおよぼす。

(ii) 重心速度の変化の特徴は、水平方向にいったん減速されるが水平な姿勢になる前にふたたび加速されることおよびこの現象に伴ない鉛直方向の減速がふたたび増大することである。また、流速、長さ、初期角度の影響は他の流れ中での場合より顕著に現われ、ノズルの傾きも影響をおよぼす。さらに、4種類の流れ中での結果を総合して、流れの加速程度が大きいほど、 \dot{x} の減少が低下する領域では同一姿勢における \dot{x} の値は大きく、 \ddot{y} が増大し始めてから後の領域では \ddot{y} の値は小さい。

(iii) ノズルの上方で線状体が水平方向にふたたび加速される場合、水平な姿勢になる前に角速度がふたたび加速されることがノズル内流れ中での特徴である。また、流速の影響とノズルの傾きの影響は同じであり、 θ の全領域で現われる。さら

に、流れに対する線状体の相対的な並進運動が初期角度にかかわらずほぼ同じになるので、姿勢の変化に対する角速度の変化は初期角度の影響をほとんど受けない。

(iv) 線状体が水平に近くなるまでに移動する距離が小さい場合、軌跡の変動が大きくなることおよび重心の速度の変化におよぼす流速、長さ、初期角度の影響は、矩形管内の助走域での場合より顕著に現われることが実験、計算の両面から確かめられた。また、角速度の変動に伴ない重心の速度が変動する状態を理論式を用いて調べた結果、実験結果と一致した。さらに、変動を除いた平均的な運動特性におよぼす諸要因の影響は実験結果と計算結果で一致する。両者の違いは、実験では、重心の軌跡、速度および姿勢に変動が見られるのに対し、計算では、これらの変化にほとんど変動が現われないことである。

(v) ノズル内流れ中での運動特性が他の流れ中での場合と異なるのは、流れが加速していることおよびその方向が場所的に変化することに起因する。

第7章 回転流体中における線状体の運動

7.1 緒言

繊維あるいは繊維集団は、回転する流体中を遠心力の作用を受けながら運動することがある。この場合、繊維が直管内流れ中で運動する場合と比較して繊維の各部分に作用する外力が異なり、繊維の軌跡および姿勢の変化に大きな影響をおよぼすと考えられる。

繊維が回転流体中で運動するもっとも典型的な例としては、ロータ方式オープンエンド精紡機のロータ内における繊維の運動がある。この場合、コーミングローラにより1本1本に分繊された繊維は高速で回転するロータ内に入り、飛走してロータ内面の滑壁上に達するが、この間回転流体中で運動をおこなう。そして、繊維の運動状態が糸質に大きな影響をおよぼす。

いっぽう、回転流体中における繊維の運動を取扱った研究は少なく、強制渦流内における線状体の2次元運動を理論解析し、曲管内を空気輸送される線状体の運動状態を実験により求め、両者を比較した塩見⁹⁾の研究および繊維を非常に軽い粒子と考へて、吸い込みのある渦流や、分岐管中での繊維の軌跡を求めたFeldman⁸⁾の研究が見られる程度である。しかし、前者は重力および浮力の影響を無視し2次元的に運動を取扱っており、後者の場合、粒子と繊維は本質的に形態が異なるので、得られた結果の妥当性について問題が残る。

そこで、本章では、繊維のもっとも簡単なモデルとして直線の線状体を考へ、線状体が単一で水をみたした低速回転する円筒中を自由落下する場合について実験的研究をおこない、静止流体中での単一の線状体の運動と比較して、回転流体中で線状体が運動する場合の基本的運動特性を明らかにする。

7.2 回転流体中における線状体の落下実験装置

実験装置の概要を図7.1に示す。回転円筒⑦は外径200(mm)、内径190(mm)、高さ450(mm)の透明アクリル製であり、時計回りに回転する。線状体の落下実験は円筒回転数 $N=30\sim 120$ (rpm)の範囲でおこなうため、誘導電動機①の回転数を下げる必要があり、Vプーリ③、かさ歯車④および平歯車⑤で大きく減速した。そして、無段変速機②を用いて円筒の回転数を所要の値にした。回転数の設定は2種類の方法でおこなった。まず、円筒の上端面に目印を

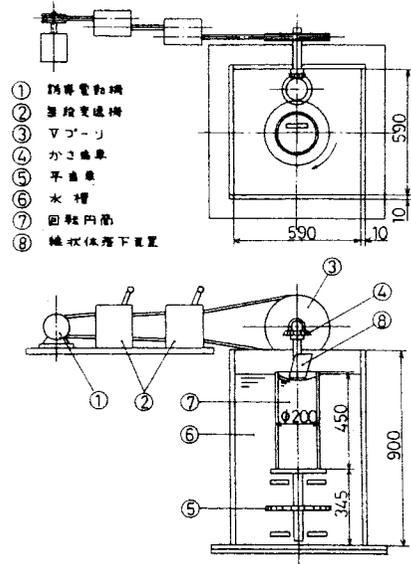


図7.1 実験装置概要

1個設け、所要の回転数の2倍の発光数でストロボランプを発光させ、この目印が2個静止して見えるように無段変速機を調節して円筒の回転数を設定した。さらに、回転数が小さい場合には、かさ歯車と平歯車の減速比が合計6であるから、タコメータとストップウォッチを使ってVプーリの回転数が円筒の所要回転数の6倍になるように無段変速機で調節した。

なお、回転容器が円筒であるため、円筒に水を入れて空気中から直接見ると歪が生ずる。したがって、空気中から直接線状体の運動状態を撮影すると、後でこの写真から落下特性を求めるときに、この歪の修正をおこなう必要がある。そこで、この歪を無くする目的で、第2章の静止流体中での線状体の落下実験に用いた水槽⑥の中に回転円筒を入れ、円筒内および円筒周辺に水をみたした。その結果、上述の歪は見られなくなり、歪の修正をおこなう必要はなくなった。

7.3 回転円筒中の流れ特性

回転円筒中での線状体の運動を論ずる場合、回転円筒中の流れ特性を知らなければならぬ。そこで、線状体の落下実験をおこなう前に、流れ特性を実験により調べた。

本実験の場合、流速は最大1194 (mm/s)であり、第4章、第5章の矩形管内流れおよびノズル内流れの場合と比較してかなり大きい。円筒の中心に向うにつれて流速は減少するため、ピトー管等による測定は困難となる。そこで、矩形管内流れおよびノズル内流れの場合と同様に、ポリスチレンビーズを用いたトレーサ法により流速分布を測定した。

回転円筒中でトレーサ粒子が運動する場合、トレーサ粒子には遠心力が作用し、粒子は円筒の半径方向にも運動するため、ある半径における粒子の円周方向速度を求めることが困難になる。そこで、トレーサ粒子を回転流体の自由表面に浮かべて、遠心力と重力と浮力の差にもとづく外力の、自由表面方向の成分が釣り合った状態、すなわち、トレーサ粒子が半径方向に移動しない状態のもとで実験をおこなった。

実験では、実験室全体を暗室とし、回転円筒上方からトレーサ粒子の運動状態をマルチストロボ撮影した。撮影は円筒の回転数 $N=30, 60, 90, 120$ (rpm) についておこない、つぎに述べる方法によりそれぞれの半径における流速を求めた。

図7.2に示すように、撮影された半径 R (mm) の位置にあるトレーサ粒子1と2のなす中心角を $\Delta\theta$ (rad)、ストロボ露光数を S (cpm) とすると、定常状態ではトレーサ粒子の速度と流速は一致しているため、半径 R の位置における円周方向の流速 v (mm/s) は、

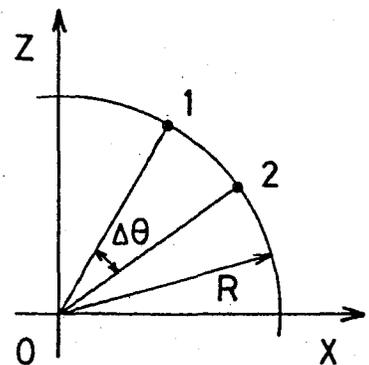


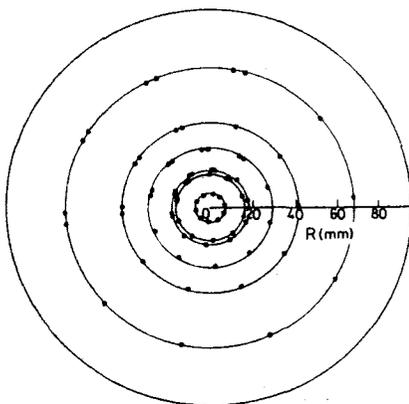
図7.2 トレーサ粒子軌跡の模式図

$$v = R \cdot \Delta\theta \cdot S / 60 \quad (7.1)$$

となる。

図7.3に回転数 $N=60$ (rpm), ストロボ発光数 $S=600$ (cpm)の場合のトレーサ粒子の運動状態を示す。また, この図から(7.1)式により求めた半径方向距離 R と円周方向の流速 v の関係を図7.4に示す。なお, 図7.4では, 半径方向距離は円筒の内側半径(95 mm)で無次元化し, 円周方向流速は円筒内面の周速(597 mm/s)で無次元化し, *の印を付けて表わしている。

R^* と v^* の関係は原点を通る直線で表わされる。すなわち, 回転円筒中の流れは一様渦度をもつ流れであることが分かる。また, トレーサ粒子の運動状態を示す図7.3を見れば分かるように, 回転円筒と流体が相対的静止状態にある場合と比較して, 流体の角速度はわずかに(1.5%程度)小さくなっているが, これは実験誤差として無視できる程度のものである。したがって, 流体の角速度と円筒の角速度は一致していると考えて, 線状体の落下特性は円筒の回転数で整理する。



$N=60$ (rpm), $S=600$ (cpm)

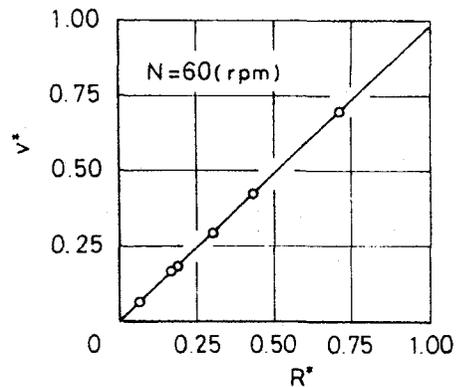


図7.3 トレーサ粒子の運動状態

図7.4 円周方向流速測定結果

7.4 回転流体中における線状体の落下実験方法

線状体の落下特性として，重心の軌跡，重心の角速度，運動中の姿勢および線状体の配向を考え，線状体の比重量，長さ，直径，初期角度，初期位置および円筒の回転数が落下特性におよぼす影響を調べた。

7.4.1 線状体の落下実験方法

無段変速機を調節して円筒の回転数を所要の値に設定し，流れが定常になった後，線状体を落下させ，運動状態をマルチストロボ撮影した。図7.5に撮影概要を示す。第2章で述べたように，静止流体中での線状体の運動状態の撮影も水槽の正面と側面の直角2方向からおこなったが，この場合，側面から撮影した目的は，線状体がほぼ一平面内で運動しているかどうかを確かめるためであったが，本実験では，線状体は3次元運動をおこなうので，少なくとも2方向から撮影あることが必要である。そこで，静止流体中での場合と同様に，透明アクリル板で製作してある水槽⑥のZ面を利用して，直角2方向からNo.1カメラ③とNo.2カメラ④の2枚のフィルム面上に運動状態を記録した。なお，本実験装置の座標系としては，初期位置での線状体重心と同一高さ（円筒底面から428(mm)）の円筒中心軸上の点を原点(0)とし，水平面内No.2カメラの向きにX軸，No.1カメラの向きにZ軸，鉛直下向き（円筒中心軸方向）にY軸を定めた。

撮影では，実験室全体を暗室とし，

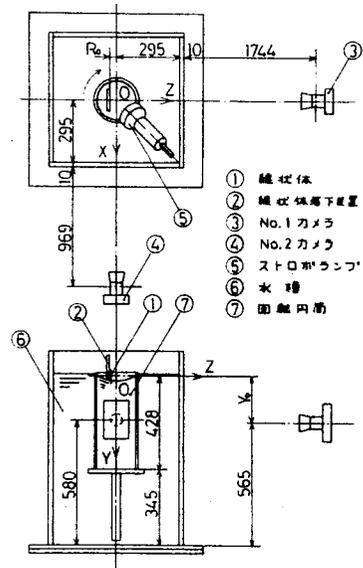


図7.5 線状体撮影概要

線状体のカメラ側の面が良く光るようにストロボランプ⑤を円筒の斜め上方に固定し，運動状態が十分わかるような写真間隔を得るため，実験条件によりストロボ発光数を $S=400\sim 1200$ (CPM)の範囲で変化させた。

本実験に用いた線状体落下装置の概要を図7.6に示す。ストロボランプを円筒の斜め上方に固定したため，落下装置全体を傾斜させ，線状体を取付ける際に，落下装置を枠からスライド式に取りはずすことができるようにしてある。その他の部分は，静止流体中での線状体の落下実験に用いたものとまったく同じであり，2枚の塩化ビニール板⑥の間に取付けられている初期角度設定用円グラフ③により，所要の初期角度 α に線状体⑦を設定し，ピンセット④で設定面⑤上に固定する。つぎに，ピンセット押上げ用ネジ②を回し，ピンセットを押上げて線状体を落下させた。

- ① ピンセット取付用ネジ
- ② ピンセット押上げ用ネジ
- ③ 初期角度設定用円グラフ
- ④ ピンセット
- ⑤ 線状体固定面
- ⑥ 塩化ビニール板
- ⑦ 線状体

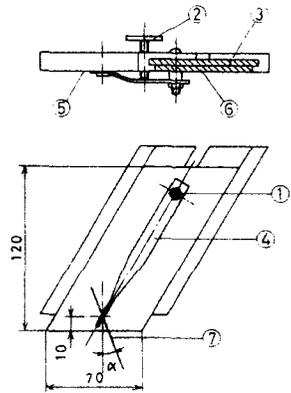


図7.6 線状体落下装置概要

なお，落下装置が流れ中へ入ると流れを乱すので，流れ中に入らないように注意し，回転数により円筒内の水の自由表面の形状が異なるため，水の量を調節して，線状体の先端部が流れに入るようにし，その状態から線状体を落下させた。しかし，長さが小さい線状体の場合および回転数が大きい場合には，先端部が流れ中に入らないことがある。そのときには，落下装置が流れ中に入らない程度にできるだけ円筒内に水を入れ，空気中から回転流体中へ線状体を落下させた。

実験には，比重量の影響を調べるため，鉛筆の芯 (No.1 試料) とピアノ線 (No.2 試料) を用いた。それらの試料条件および実験条件を表7.1に示す。なお，本実験の場合，直角2方向か

ら撮影したが、両方向とも鮮明な写真を得る必要があるため、ストロボランプの光を良く反射するように線状体に薄く白色塗装した。このため、直径が第2章の静止流体中での場合より少し大きくなっている。

表7.1 試料条件および実験条件

試料番号	試料名	初期位置 R_0 (mm)	線状体直径 d (mm)	線状体長さ l (mm)	線状体比重量 ρ (g/cm ³)	初期角度 α (°)	円筒回転数 N (rpm)
1	鉛筆芯	0	0.425	60	1.624	0	30
				30			60
			0.608	45	1.692		75
				60			90
			0.745	60	1.657		105
		0.938	60	1.988	120		
	25	0.608	30	1.692	0	30 60	
			60			90 120	
2	No.1線	0		15 30	7.506	0	30 60
			0.653	45 60			75 90
		25		30	90	30 60	
		50		60		90 120	

表7.1に示す実験では、線状体の比重量 ρ 、長さ l 、直径 d 、初期角度 α 、初期位置 R_0 および円筒回転数 N がおよぼす影響について調べた。初期角度 α とは、初期位置での線状体の軸方向と鉛直線のなす角度である。また、初期位置 R_0 とは、図7.5に示すように、線状体設定面がつねに X 軸に平行で、しかも線状体重心が Z 軸上に位置するように落下装置を Z 軸の負の方向へ移動させたときの座標の原点と線状体重心の距離値であり、 $R_0=5, 25, 50$ (mm) の3種類変化させた。

また、同時に、 $d=0.745$ (mm)、 $l=60$ (mm) のNo.1試料を用いて、 $\alpha=0.5^\circ$ で静止流体中での実験をおこない、回転流体中での結果と比較した。

試料は、長さのばらつきを小さくする目的とその端面を軸に直角にする目的で端面を研磨布で仕上げた。また、長さ、直径、比重量はランダムに抽出した10本の試料に対して測定し、その平均値をもってそれらの値とした。

実験では、各実験条件につき15本程度の線状体を落下させた。そして、マルチストロボ撮影した写真を参考にして、その実験条件を代表すると考えられる実験を2個ないし3個選び、それらの写真から線状体両端の座標を読取り、以下で述べる方法で被写体距離の変化に対する修正をおこなった後の両端の座標から落下特性を求め、それらを図示し、検討した後その

中の1つを実験データとして採用した。以下では、被写体距離の変化に対する修正の方法および落下特性を求める方法について述べる。

7.4.2 写真面上から真の落下運動を求める方法

回転流体中では、糸状体は3次元運動するのでつねに被写体距離が変化している。したがって、写真を真の運動の正射影と考えることはできず、被写体距離の変化に対する修正をおこなう必要がある。

そこで、図7.7に示すように、No.1カメラで撮影された写真を(a)、No.2カメラで撮影された写真を(b)とし、No.1カメラのレンズ中心(円筒の中心軸上、底面から実際の距離220(mm)の点)を原点

(O')とする座標系(x', y', z')を定め、糸状体両端の座標を讀取る。その際、 z' と y' の値は写真(a)から、 x' の値は写真(b)から讀取り、それぞれ z'_{ij} , y'_{ij} , x'_{ij} ($j=1, 2$)とする。

そして、糸状体両端の真の位置を X と Y に関しては XY 面上に、 Z に関しては YZ 面上に引き直して求める。

被写体距離が異なるとフィルム面上の像の大きさに差が生ずる。すなわち、基準面(XY 面あるいは YZ 面)および糸状体の端の被写体距離を L_1 , L とすると、同一高さ H のフィルム面上での像の高さはそれぞれ h_1 , h となり、つぎの関係で表わされる。

$$h_1/h = L/L_1 \quad (7.2)$$

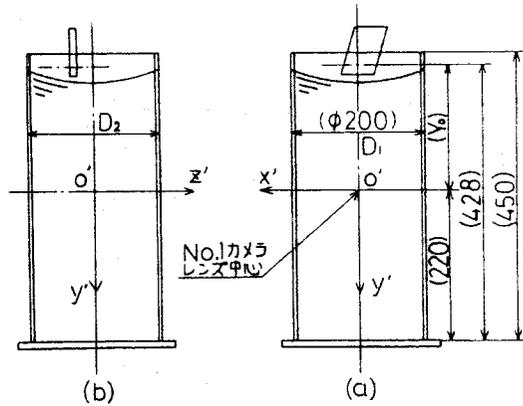


図7.7 写真面上の基準位置

いっぽう、 x'_{ij} , y'_{ij} , z'_{ij} は写真面上での座標であり、写真 (a), (b) 上での円筒外径をそれぞれ D_1 , D_2 (mm) とすると、写真の倍率は $D_1/200$ および $D_2/200$ となるので、この倍率を考慮すると、被写体距離の変化に対する修正をおこなう前の両端の座標 (X'_{ij} , Y'_{ij} , Z'_{ij}) は、

$$\left. \begin{aligned} X'_{ij} &= (200/D_1) x'_{ij} \\ Y'_{ij} &= (200/D_1) y'_{ij} \\ Z'_{ij} &= (200/D_2) z'_{ij} \end{aligned} \right\} \quad (7.3)$$

となる。

したがって、水の空気に対する屈折率 n を考慮した YZ 面および XY 面の被写体距離を L_{1x} , L_{1z} とすると、(7.2) 式から被写体距離の変化に対する修正をおこなった後の線状体両端の X , Z 座標は、

$$\left. \begin{aligned} X_{ij} &= \frac{L_{1x} \cdot L_{1z} - (L_{1x}/n) Z'_{ij}}{L_{1x} \cdot L_{1z} - X'_{ij} Z'_{ij}/n^2} X'_{ij} \\ Z_{ij} &= \frac{L_{1x} \cdot L_{1z} - (L_{1z}/n) X'_{ij}}{L_{1x} \cdot L_{1z} - X'_{ij} Z'_{ij}/n^2} Z'_{ij} \end{aligned} \right\} \quad (7.4)$$

($j=1, 2$)

で表わされる。

また、初期位置と No. 1 カメラのレンズ中心の鉛直方向距離を Y_0 ($=208$ (mm)) とすると、(7.2) 式から線状体両端の Y 座標は、

$$Y_{ij} = Y_0 + (L_{1z} - Z_{ij}/n) Y'_{ij} / L_{1z} \quad (7.5)$$

($j=1, 2$)

となる。

7.4.3 線状体の落下特性を求める方法

前項で述べた方法により，被写体距離の変化に対する修正をおこなった後の線状体両端の座標 (X_{ij}, Y_{ij}, Z_{ij}) ($j=1, 2$) から，線状体の落下特性を求めた。

(1) 線状体重心の座標

重心の座標 (X_i, Y_i, Z_i) は，重心の軌跡，重心の半径方向移動距離，重心の回転角を知る上で必要であり，次式から求まる。

$$\left. \begin{aligned} X_i &= (X_{i1} + X_{i2}) / 2 \\ Y_i &= (Y_{i1} + Y_{i2}) / 2 \\ Z_i &= (Z_{i1} + Z_{i2}) / 2 \end{aligned} \right\} \quad (7.6)$$

なお，線状体の落下軌跡は， XZ 面， XY 面への正射影で表わす。すなわち，回転円筒上方から見た落下軌跡を (X, Z) 座標で，また， $NO.1$ カメラに正対して見た落下軌跡を (X, Y) 座標で示し，直角2方向からの図により落下軌跡を3次元で表現する。

(2) 重心の半径方向移動距離

半径方向移動距離 R (円筒の中心軸と重心の距離) は，

$$R_i = (X_i^2 + Z_i^2)^{1/2} \quad (7.7)$$

で求まり， R と鉛直方向移動距離 Y の関係および落下時間 t と R の関係で表現する。

(3) 重心の回転角

線状体は円筒の中心軸回りで回転運動するので，その状態を調べるため，図7.8に示すように， Y 軸を含み7番目にマルチストロボ撮影された線状体重心を通る平面から時計回りに測った， i 番目の線状体重心を通る Y 軸を含む面までの角度を φ_i

とし，落下時間 t と重心の回転角 φ の関係で表現する。

なお， φ は次式から求まる。

$$\varphi_i = \tan^{-1}(Z_{i1}/X_{i1}) - \tan^{-1}(Z_i/X_i) \quad (7.8)$$

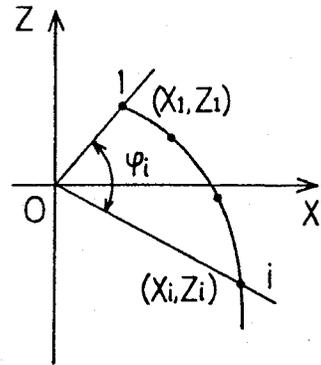


図 7.8 重心の回転角 φ

(4) 線状体の姿勢

3次元運動している線状体の姿勢を表わすためには，少なくとも2方向から見た姿勢で表現しなければならない。そこで，図 7.9 (a) に示すように，線状体の軸方向と鉛直線のなす角度を第1回転角 θ_1 とし，また，(b) に示すように，1番目に撮影された線状体を含む鉛直面から時計回りに測った， i 番目に撮影された線状体を含む鉛直面までの角度を第2回転角 θ_2 とする。

θ_{1i} ， θ_{2i} は，それぞれ

$$\theta_{1i} = \tan^{-1} \left\{ \frac{\{(X_{i1} - X_{i2})^2 + (Z_{i1} - Z_{i2})^2\}^{1/2}}{(Y_{i2} - Y_{i1})} \right\}$$

$$\theta_{2i} = \tan^{-1} \left\{ \frac{(Z_{i1} - Z_{i2}) / (X_{i1} - X_{i2})}{-\tan^{-1} \left\{ \frac{(Z_{i1} - Z_{i2}) / (X_{i1} - X_{i2})}{(X_{i1} - X_{i2})} \right\}} \right\} \quad (7.9)$$

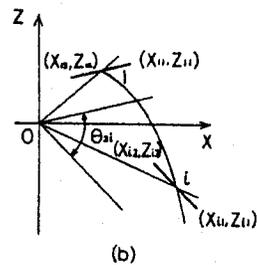
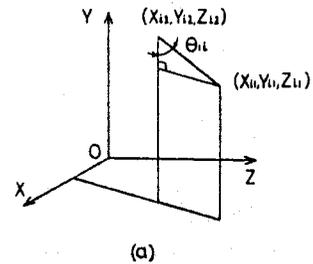


図 7.9 第1回転角 θ_1 と第2回転角 θ_2

で求まり，落下時間 t と第1回転角 θ_1 の関係および t と第2回転角 θ_2 の関係で姿勢の変化を表わす。

(5) 線状体の配向

図7.10に示すように，回転流体中における線状体の配向には，大別して円周方向に配向する場合（線状体A）と半径方向に配向する場合（線状体B）の2通りが考えられる。

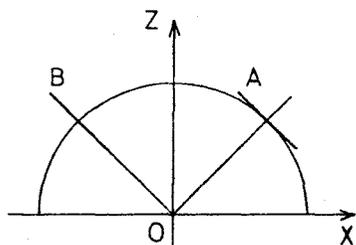


図7.10 線状体の配向

オープンエンド精紡機のロータ内の回転気流中においてもっとも望ましい状態は，繊維が円周方向に配向し，しかも，その姿勢が水平（ $\theta_i = 90^\circ$ ）になることである。そこで，円周方向に配向している場合を配向度1，半径方向に配向している場合を配向度0とする。

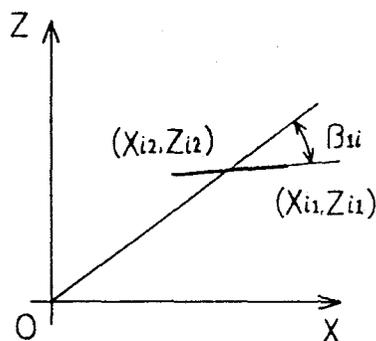


図7.11 線状体の配向角

図7.11に示すように，Y軸を含み線状体重心を通る平面から時計回りに測った，線状体を含む鉛直面までの角度を配向角 β_i とすると，

$$\beta_{ii} = \tan^{-1} \left[\frac{(Z_{i1} + Z_{i2}) / (X_{i1} + X_{i2})}{- \tan^{-1} \left[\frac{(Z_{i1} - Z_{i2}) / (X_{i1} - X_{i2})}{\right]} \right] \quad (7.10)$$

となり，線状体の配向度 β は次式で表わされる。

$$\beta_i = 2 \beta_{ii} / \pi \quad (7.11)$$

なお，配向度の変化は，落下時間 t と配向度 β の関係で表現する。

以上，線状体の落下実験により，諸要因が落下特性におよぼす影響を調べることができた。以下ではその結果について報告

する。なお、表および図中の長さは公称長さで記載する。また、線状体の一端あるいは両端が円筒側面に到達する場合、図中に二点鎖線を描いてその位置および時間を明示する。

7.5 線状体長さの影響

この節では、 $d=0.608$ (mm), $l=30, 45, 60$ (mm) の NO.1 試料および $d=0.653$ (mm), $l=15, 30, 45, 60$ (mm) の NO.2 試料を用いて、 $\alpha=0^\circ$, $R_0=5$ (mm) でおこなった実験結果から、線状体長さが落下特性におよぼす影響を調べる。

7.5.1 線状体の落下軌跡

$N=90$ (rpm), $l=15$ (mm) と $l=60$ (mm) の NO.2 試料の落下軌跡を図 7.12, 7.13 に示す。図中の線状体の時間間隔は、 $l=15, 60$ (mm) とともに $\Delta t=0.12$ (s) である。

回転流体の中心付近に落下した線状体は、流体から抗力を受けるため流線に沿って運動を開始するが、重心の角速度が

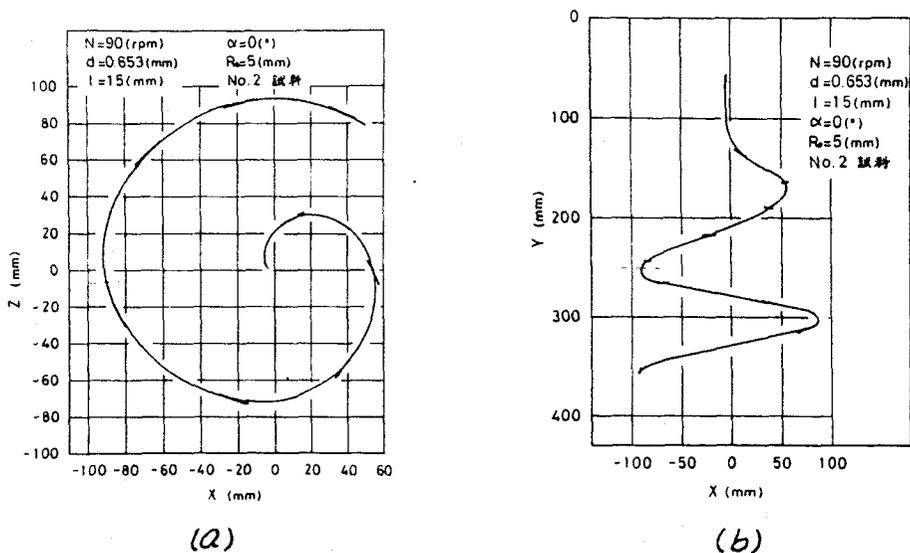
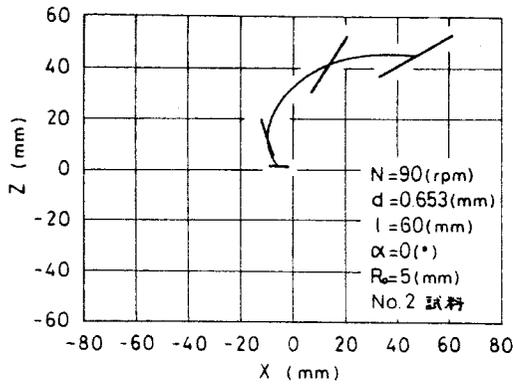
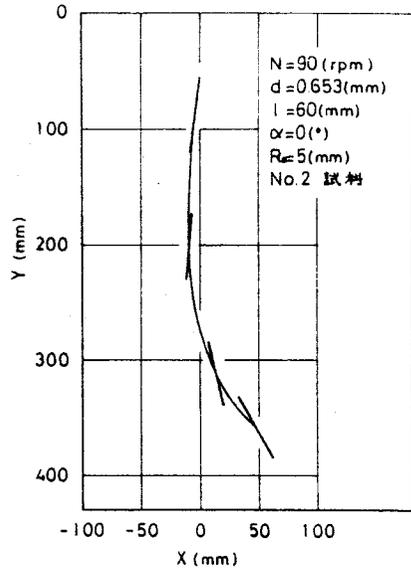


図 7.12 線状体の落下軌跡



(a)



(b)

図 7.13 線状体の落下軌跡

加速されるにつれて線状体に作用する遠心力が徐々に増大するため、回転流体の半径方向へも運動し始める。すなわち、線状体は、回転流体の中心軸回りの回転運動と半径方向への運動をおこないつつ落下し、円筒側面あるいは底面に到達する。また、運動中の鉛直面内での線状体の姿勢（第1回転角 θ_1 ）は、静止流体中での場合と同様に水平方向に近づく。これは、円筒上方から見た落下軌跡図(a)において、線状体のXZ面への正射影長さが徐々に増大していることから分かる。

いっぽう、図7.12と図7.13を比較すると、 \angle が小さい方が同一落下時間での回転流体の中心軸回りの線状体重心の回転は大きく、しかも、半径方向移動距離も大きい傾向にあることが分かる。

そこで、長さが半径方向移動距離におよぼす影響を調べるために、 z と r の関係を図7.14, 7.15に示す。 z と r の関係を表わす曲線は、接線勾配がほとんど0で始まり、すなわち、この曲線の接線勾配は重心の半径方向速度を表わるので、線状体

は落下開始直後の領域では、回転流体の中心軸回りの回転運動のみをおこなない、その後、鉛直面内での姿勢が水平方向に回転し始めると、静止流体中での場合と同様に流体から受ける抗力により線状体は水平方向にも運動し始めるので半径方向速度も徐々に増大する。

さらに、回転流体の中心軸回りの回転運動に伴ない線状体には遠心力が作用するため、半径方向速度はいっそう加速される。

$N=30$ (rpm) の NO.1 試料の結果 (図 7.14) から、同一落下時間で比較すると、 ℓ が小さいほど R および半径方向速度 V_r は大きいことが

分かる。ところが、 $N=90$ (rpm) の NO.2 試料の結果 (図 7.15) を見ると、 R の値は、落下開始後しばらくの間、長さの小さい $\ell=15$ (mm) がもっとも大きくなるが、 $t > 0.3$ (s) 程度の領域では、 $\ell=45$ (mm) の方が大きくなり、さらに、落下開始から約 0.45 (s) 経過すると、 $\ell=60$ (mm) の方が大きくなることが分かる。また、 $\ell=15$ (mm) の場合、線状体は、 $t=0.15$ (s) 程度まで半径方向に加速されるが、その後減速され、 $t=0.5$ (s) 程度から小たたび加速される現象が見られる。ただし、 $t > 0.5$ (s) の領域での加速は、 $t < 0.15$ (s) の領域での加速に比べて小さい。

これは、つぎの原因による。7.5.2 項に記載する t と θ の関

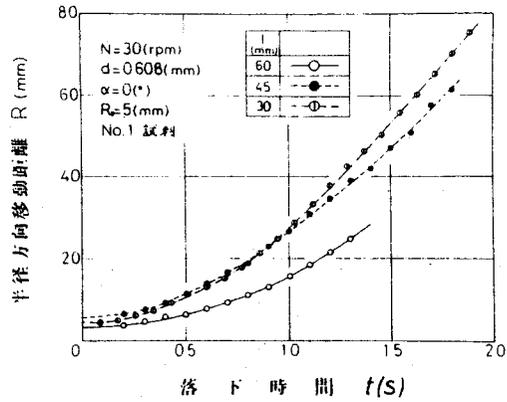


図 7.14 半径方向移動距離におよぼす長さの影響

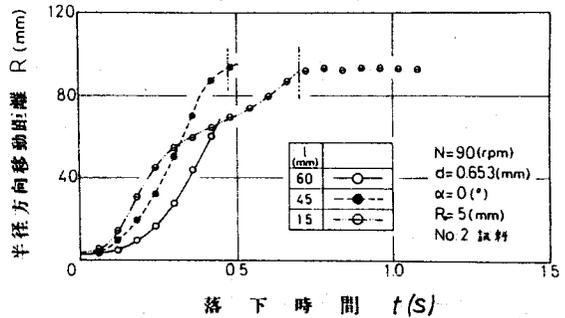


図 7.15 半径方向移動距離におよぼす長さの影響

係(図7.20)から,鉛直面内での線状体の姿勢 θ は, $t=0.15$ (s)程度で約 50° となり, $t=0.5$ (s)程度で 90° ,すなわち,水平な姿勢になる。第2章で述べたように,静止流体中では,線状体は鉛直方向に対する線状体の軸方向の傾斜角 θ (本章の θ に相当する角度)が 40° から 50° の範囲までは水平方向に加速されるが,その後減速される。回転流体中での線状体の運動は,静止流体中での運動に遠心力にもとづく運動が加わった形になるため,線状体を含む鉛直面内での水平方向速度の変化に伴ない半径方向速度に加速および減速の現象が現われたと考えられる。

また,静止流体中での場合,線状体が水平方向に加速されている領域では,同一回転角に対する λ は λ が大きいほど大きくなるが,その差はわずかであり,姿勢の変化は λ が小さいほど大きく,同一落下時間での θ の値は大きくなる。(2.10.2,2.10.3項参照)したがって,同一落下時間で比較すると,この加速領域では λ が小さいほど λ の値は大きくなる。いっぽう,回転流体中での場合にも,図7.20から,鉛直面内での姿勢の変化は, λ が小さいほど大きく,同一落下時間での θ の値は大きくなる。したがって,落下開始後しばらくの間,鉛直面内での水平方向速度は, λ が小さいほど大きくなるため,この水平方向速度の半径方向成分も大きくなる。さらに,線状体がすべて流れ中に入るまでの時間は, λ が小さいほど短いので,回転流体の中心軸回りの重心の角速度 $d\varphi/dt$ は,落下開始直後の領域では λ が小さいほど大きい。このため,線状体に作用する単位長さ当りの遠心力は大きくなる。以上2つの原因により,落下開始後の領域で, λ が小さいほど半径方向速度 v_r は大きくなると考えられる。すなわち,この領域では,長さにより姿勢および重心の角速度が異なるため,半径方向速度に差が生ずる。

ところが,回転流体の中心軸回りの重心の回転状態を表わす t と φ の関係,図7.16から,この曲線の接線勾配で表わされ

る重心の角速度 $d\varphi/dt$ は、落下開始直後の領域を除き、 ℓ にかかわらず回転流体の角速度（この場合、 $540(^\circ/s)$ ）にほぼ等しくなる。いっぽう、 ℓ が小さいほど鉛直面内で線状体が回転するのに要する時間は小さく、短時間のうちに水平方向に近づくため、 R は減少し、やがて、同一落下時間での R の値は、 ℓ が大きい方が大きくなる。

以上のように、重心の半径方向移動距離におよぼす長さの影響を考察する場合、重心の角速度の変化のみならず、線状体の姿勢の変化を考慮する必要がある。 $N=90$ (rpm) の No. 2 試料の結果（図 7.15）から、長さが大きい線状体の姿勢が水平になるのに十分な領域で運動をおこなう場合を考えると、最終的には長さが大きいほど半径方向移動距離は大きくなる。 R は、静止流体中での水平方向移動距離 X に対応する値であり、回転流体中での結果と静止流体中での結果は一致する。（2.10.1 項参照）

つぎに、長さが R と Y の関係におよぼす影響を調べるため、図 7.14, 7.15 と同一条件の R と Y の関係を図 7.17, 7.18 に示す。

図 7.18 において、 $\ell=15$ (mm) の場合を見ると分かるように、 R と Y の関係は、 $Y=135$ (mm) および 220 (mm) 程度の 2 箇所に変曲点をもつ曲線になる。なお、変曲点をもつときの θ_1 の値は約 65° , 90° である。 $\theta_1=65^\circ$ 程度で変曲点をもつ現象は、静止流体中での重心の軌跡にも見られたが、回転流体中での場合、水平な姿勢になった後、遠心力の作用により線状体はふたたび半径方向に加速される。

回転流体中で線状体が運動する場合、遠心力が作用するため、

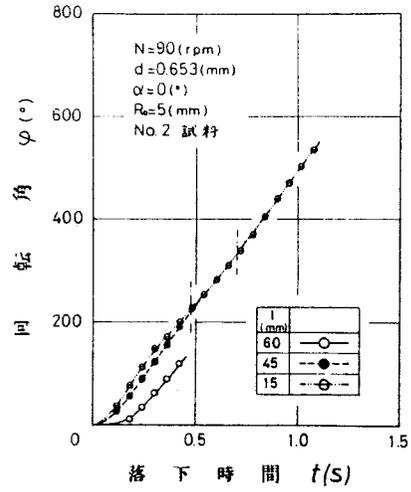


図 7.16 重心の回転角におよぼす長さの影響

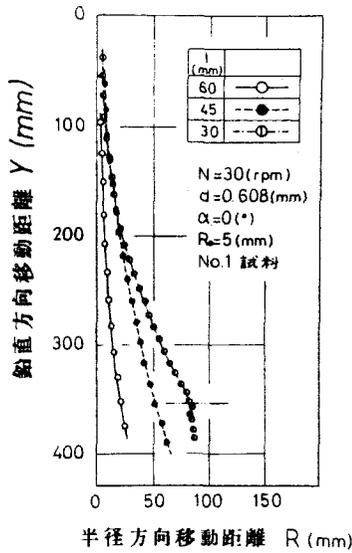


図 7.17 半径方向移動距離におよぼす長さの影響

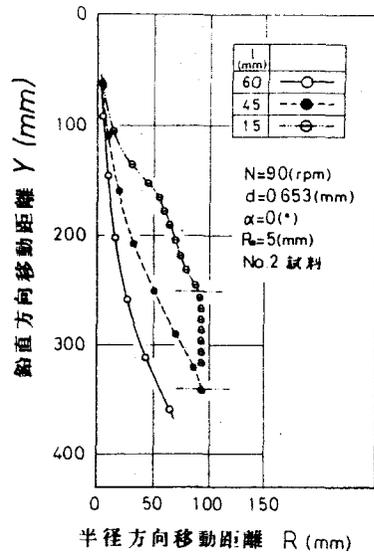


図 7.18 半径方向移動距離におよぼす長さの影響

線状体を含む鉛直面内での水平方向速度の値は、静止流体中での場合と異なるので、鉛直方向速度 \dot{Y} の値も両場合で差が生ずるが、長さ l が θ_1 の関係におよぼす影響の傾向は変わらないことから、長さ l が \dot{Y} におよぼす影響も、回転流体中と静止流体中では変わらないと考えられる。2.10.2項の静止流体中での結果から、 \dot{Y} は落下開始直後の領域では急激に加速されるが、その後 θ の増加に伴ない単調に減少し、 θ が約 50° 以下の領域では、長さ l が大きいほど大きい、これ以上の領域では長さの影響を受けない。また、回転流体中での場合にも、 l が小さいほど鉛直面内で線状体が回転するのに要する時間は短い。したがって、同一落下時間で比較すると、 l が小さいほど \dot{Y} の値は小さくなる。いっぽう、前述したように、同一落下時間での R の値は、線状体の姿勢によって異なるけれども、傾向としては l が小さいほど大きくなる。これは、本実験の範囲内でいえることであり、 θ_1 が 90° に近づくにつれて R は減少

することから、長さの大きい線状体の姿勢が水平になるのに十分な領域で運動する場合、同一鉛直方向移動距離における尺の値は、 θ が大きいほど大きくなる領域が存在すると考えられる。したがって、長さの小さい線状体の姿勢が水平になるまでの範囲内では、長さが小さいほど半径方向移動距離は大きくなる。

7.5.2 線状体の姿勢

$N=30$ (rpm) の No.1 試料および $N=90$ (rpm) の No.2 試料に対する θ と t の関係を図 7.19, 7.20 に示す。

比重量の小さい No.1 試料の結果、図 7.19 において、線状体の先端部が流れ中に入った瞬間に流体から抗力を受けるため、 θ を増大させる向きに回転モーメントが作用し、線状体は水平方向に回転する。このため、落下開始直後の領域での θ の値は 0 にならないのである。しかし、初期位置が回転流体の中心近くであり、しかも、回転数が小さいので、急激な姿勢の変化はあつかである。なお、No.2 試料の場合、比重量が大きく、したがって、慣性モーメントが大きい

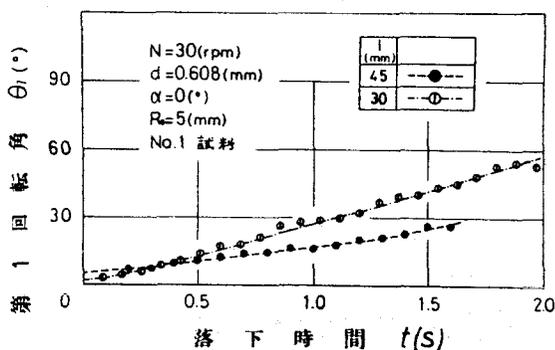


図 7.19 姿勢におよぼす長さの影響

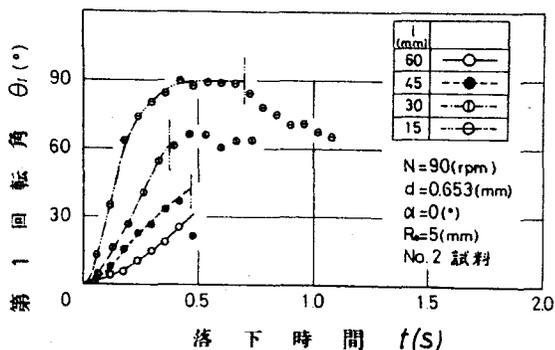


図 7.20 姿勢におよぼす長さの影響

ため、この急激な姿勢の変化はほとんど見られない。

線状体がすべて流れ中に入った後の領域では、静止流体中で

の場合と同様に線状体は除々に水平方向に回転する。回転流体中では線状体に遠心力が作用するが、その姿勢から考えて先端部に作用する遠心力の方が大きいため、遠心力による θ_1 を増大させる向きの回転モーメントも作用するので、静止流体中での場合より角速度 $d\theta_1/dt$ は大きくなると考えられる。 $d\theta_1/dt$ の増大に伴ない流体から受ける抗力にもとづく線状体の回転を抑える向きの回転モーメントが増大するため、 $d\theta_1/dt$ は減速され、最終的に姿勢は水平方向に漸進し、もっとも安定した姿勢になる。また、これらの図から、 l が小さいほど $d\theta_1/dt$ は大きく、線状体が回転するのに要する時間は小さくなる。第1回転角 θ_1 は、静止流体中での回転角 θ に相当する値であり、鉛直面内での姿勢の変化におよぼす長さの影響は、静止流体中での場合と一致する。

つぎに、線状体を含む鉛直面の変化を表わす θ_2 と θ_1 の関係を図7.21に示す。

θ_2 は、その定義から、 i 番目に撮影された線状体の配向角 β_{1i} と1番目に撮影された線状体の配向角 β_{11} の差と重心の回転角 φ の和で表わされる。すなわち、

$$\theta_2 = \varphi + \beta_{1i} - \beta_{11} \quad (7.12)$$

となる。

鉛直面内で線状体が水平方向に回転し始めると、静止流体中での場合と同様に流体から受ける抗力により水平方向にも運動する。いっぽう、線状体を含む鉛直面は、円周方向とある角度をなしているので、この水平方向速度の円周方向成分が回転流体の抗力にもとづく円周方

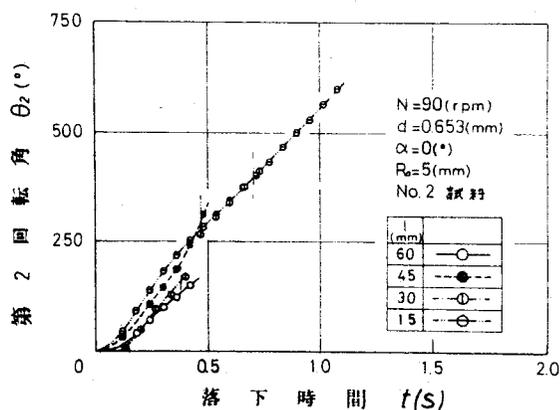


図7.21 姿勢におよぼす長さの影響

向速度に加わり，図 7.16 の $l=15$ (mm) の場合を見れば分かるように，落下開始後の小さい領域で $d\varphi/dt$ の値は，流体の角速度より大きくなる。しかし，姿勢が水平に近づくにつれてこの水平方向速度は減少し，線状体に作用する $d\varphi/dt$ を減少させる向きに抗力が增大するため， $d\varphi/dt$ は減少し，回転流体の角速度にほぼ等しくなる。したがって， t と φ の関係は， $d\varphi/dt$ が流体の角速度に等しくなるまでの領域で上に凸の曲線になる。このため，図 7.21 において， $l=15$ (mm) の t と θ_2 の関係を表わす曲線は，前述の領域で上に凸の曲線になる。ただし，この場合，線状体の配向の変化を表わす図 7.22 から，配向角 β_1 は増大しているので，この影響が加わり曲線が凸になる度合は， t と φ の関係を表わす曲線の場合より強調される。しかし，この領域を過ぎると， β_1 は 90° ($\beta=7$ に相当) に漸近するので， $d\theta_2/dt$ も徐々に $d\varphi/dt$ の値に近づき，線状体が円筒側面に到達する ($t=0.7$ (s) 程度) 直前には回転流体の角速度 (540 (°/s)) にほぼ等しくなる。

いっぽう， $l=45$ (mm) および 60 (mm) の場合，鉛直面内での姿勢の変化は $l=15$ (mm) の場合にくらべて小さいため，図 7.16 から， $d\varphi/dt$ は徐々に増大して回転流体の角速度に近づく。しかし，図 7.22 から， $l=45$ (mm) の場合，配向角 β_1 は増大し，急激に 90° に近づくため， θ_2 は急激に増大する。また， $l=60$ (mm) の場合， β_1 は負の状態から急激に増大し，その後減少してほぼ一定となるため， t と θ_2 の関係を表わす曲線は下に凸になる。

以上のように，線状体重心の角速度は，落下開始直後の領域を除き長さにかかわらず回転流体の角速度にほぼ等しくなるが，長さが異なると線状体が回転流体から軸に直角な方向に受ける抗力の軸方向の分布状態が異なるため，配向角の変化に差が生じ，線状体を含む鉛直面の変化におよぼす長さの影響は明確に現われない。

7.5.3 線状体の配向

$N = 90$ (rpm)におけるNo.2試料の配向の変化を図7.22に示す。

$l = 60$ (mm)の場合、円筒上方から見た落下軌跡、図7.13(a)を見れば分かるように、1番目に撮影された線状体の配向角 β は負となっている。すなわち、線状体の先端部が、Y軸を含み重心を通る鉛直面から反時計回りの方向に位置している。落下開始直後の領域で

あるので、重心の角速度 $d\varphi/dt$ は回転流体の角速度より小さく、したがって、線状体が流体から軸に直角な方向に受ける抗力は先端部の方が大きくなり、線状体は β を増大させる向きに急激に回転し、配向度 β は最大(約0.2)となる。その後わずかに減少してほぼ一定値、約0.15になる。

図7.16から、 β がほぼ一定になっているときの $d\varphi/dt$ の値は回転流体の角速度とほぼ等しい。しかも、 β は変化しないので、線状体全体が回転流体と同じ角速度で回転しており、線状体には軸に直角な方向の抗力は作用しない。したがって、このとき、線状体に作用する遠心力の軸に直角な方向成分の分布状態は一樣であり、線状体には β を変化させる回転モーメントが作用しないと考えられる。これを確かめるために、線状体の両端に作用する遠心力の軸に直角な方向成分を計算する。

図7.23に示すように、両端に作用する遠心力を F_{c1}, F_{c2} 、半径方向の距離を r_1, r_2 、線状体の軸方向と回転流体の半径方向のなす角度を β_{c1}, β_{c2} とすると、

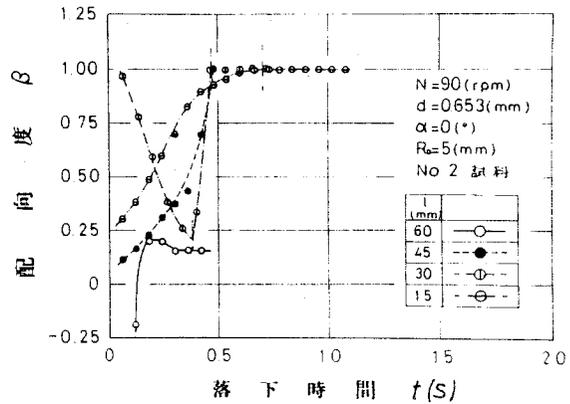


図7.22 配向におよぼす長さの影響

$$\left. \begin{aligned} F_{c1} &= M_b R_1 \omega_b^2 \\ F_{c2} &= M_b R_2 \omega_b^2 \end{aligned} \right\} \quad (7.13)$$

ただし, M_b ; 単位長さ当たりの線状体の質量
 ω_b ; 線状体の角速度

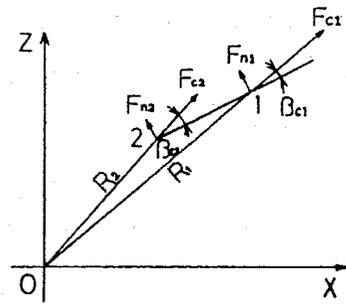


図 7.23 線状体に作用する遠心力

となり, 遠心力の軸に直角な方向の成分 F_{n1} , F_{n2} は,

$$F_{n1} = F_{c1} \sin \beta_{c1}, \quad F_{n2} = F_{c2} \sin \beta_{c2} \quad (7.14)$$

であるから, F_{n1}/F_{n2} は,

$$F_{n1}/F_{n2} = (R_1/R_2) (\sin \beta_{c1}/\sin \beta_{c2}) \quad (7.15)$$

となる。

ここで, 線状体の両端 1, 2 および座標の原点 (0) によって作られる三角形について正弦公式を適用すると,

$$R_1/R_2 = \sin \beta_{c2}/\sin \beta_{c1} \quad (7.16)$$

となるので, (7.15) 式から, $F_{n1}/F_{n2} = 1$ であることが分かる。以上のように, $d\varphi/dt$ が回転流体の角速度と等しく, しかも, 重心の半径方向速度 \dot{r} および鉛直面内での等勢の変化が比較的小さい場合には, 一定の配向角を保ったまま線状体が運動をおこなう場合がある。

また, $\ell = 15$ (mm) および 45 (mm) の場合, 1 番目に撮影された線状体の配向角は, それぞれ約 27° ($\beta = 0.3$ 程度), 約 10° ($\beta = 0.11$ 程度) であり, 落下開始直後の領域では, $d\varphi/dt$ は

回転流体の角速度より小さく、線状体が流体から軸に直角な方向に受ける抗力は先端部の方が大きくなり、線状体は β_1 を増大させる向きに急激に回転し、 $l=45(mm)$ の場合、 β が1に近づくにつれて線状体に作用する遠心力の軸に直角な方向の分布は、一様状態に近づくが、抗力の分布は長さが大きいいため先端部の方が大きく、角速度 $d\beta_1/dt$ は減速することなく、 β が1を少し越えた状態で円筒側面に到達する。これに対し、 $l=15(mm)$ の場合、長さが小さく β が1に近づくにつれて遠心力、抗力ともに β_1 の増大を抑える向きに作用し始めるため、 $d\beta_1/dt$ は減速し、 β は1に漸近し、円筒側面に線状体の両端がほとんど同時に到達する。

いっぽう、 $l=30(mm)$ の場合、1番目に撮影された線状体の配向角は、約 87° ($\beta=0.97$ 程度)であり、線状体はほぼ円周方向に配向している。しかし、先端部の方が回転流体の中心からの距離がわずかに大きいいため、遠心力により線状体は β_1 を減少させる向きに回転し始める。 β_1 の減少に伴ない回転流体の中心からの距離は、先端部の方が除々に大きくなるため、遠心力にもとづく β_1 を減少させる向きの回転モーメントは増大し、 β_1 は急激に減少して $\beta=0.2$ 付近で円筒側面に到達する。その後、後端が側面に到達するまで、 β は1に向かって急激に増大する。

以上のように、落下開始直後の配向角の状態および長さにより、その後の配向角の変化の様子は異なる。オープンエンド紡織機のロータ内では、繊維糸の姿勢が水平で、しかも、両端が同時に滑壁に到達するのがもっとも望ましい状態であり、上述の $l=15\sim 60(mm)$ の結果から、 $l=15(mm)$ の場合、線状体は理想的な状態で円筒側面に到達している。

7.6 線状体直径の影響

この節では、 $l=60(\text{mm})$ 、 $d=0.425, 0.608, 0.745, 0.938(\text{mm})$ のNo.1試料を用いて、 $\alpha=0^\circ$ 、 $R_0=5(\text{mm})$ でおこなった実験結果から、線状体直径が落下特性におよぼす影響を調べる。

7.6.1 線状体の落下軌跡

$N=60(\text{rpm})$ 、 $d=0.745(\text{mm})$ と $d=0.938(\text{mm})$ の落下軌跡を図7.24、7.25に示す。図中の線状体の時間間隔は、 $d=0.745(\text{mm})$ の場合、 $\Delta t=0.2(\text{s})$ 、 $d=0.938(\text{mm})$ の場合、 $\Delta t=4/30(\text{s})$ である。

流れ中に入った線状体は、流体から抗力を受け回転流体の中心軸回りの回転運動を始めるが、重心の角速度が加速されるにつれて、線状体に作用する遠心力が増大するため、回転流体の半径方向へも運動し始める。また、線状体を含む鉛直面内において、その姿勢は除々に水平方向に近づく。すなわち、線状体

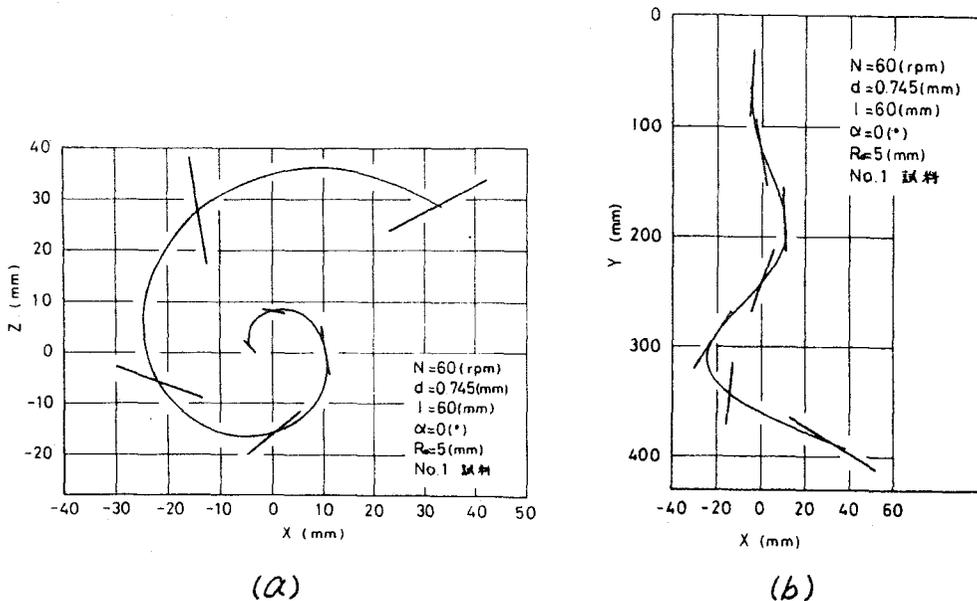
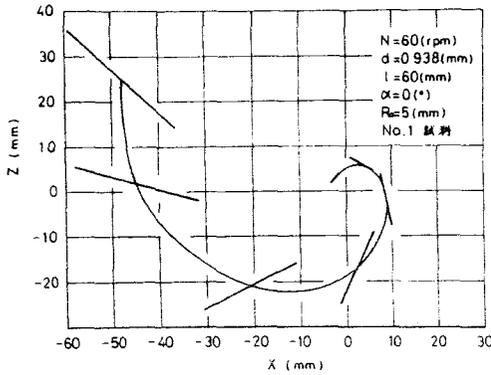
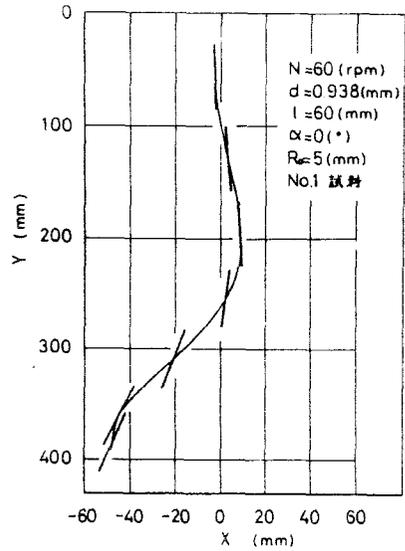


図7.24 線状体の落下軌跡



(a)



(b)

図 7.25 線状体の落下軌跡

は姿勢を徐々に変化させ、半径方向へ運動しながら、その重心がらせん状の曲線を描いて落下する。ここで、図 7.24 と図 7.25 を比較すると、直径が大きい方が、同一落下時間での回転流体の中心軸回りの線状体重心の回転は大きく、しかも、半径方向移動距離も大きい傾向にあることが分かる。

これは、 $N=60$ (rpm) のときの ψ と R の関係、図 7.26、および ψ と φ の関係、図 7.28 を見ると明確に分かる。また、図 7.27 および図 7.29 に $N=90$ (rpm) の結果を示す。

これらの図から、円筒回転数にかかわらず、同一落下時間で比較すると、直径が大きいほど R および半径方向速度 R ともに φ は大きいことが分かる。なお、落下開始直後の小さい領域で α が小さいほど R が大きくなるのはつぎの原因による。線状体が流れに入った瞬間に流体から受ける抗力にもとづく回転モーメントは α のオーダーであり、いっぽう、重心回りの慣性モーメントは α^2 のオーダーであるので、 α が小さいほど、落下開始直後の鉛直面内での急激な姿勢の変化は大きくなる。さらに、静止流

体中での場合と同様に重心の鉛直方向速度 \dot{Y} は α が小さいほど小さく、急激な回転を受ける時間は長い。したがって、 α が小さいほど急激な姿勢の変化は大きくなる。このため、Z軸上で落下を開始した線状体は、 α が小さいほど、落下開始直後の領域でX軸にほぼ平行に移動する距離が大きくなり、したがって、 R の値が大きくなると思われる。

上述したように、 α が大きいほど、線状体がすべて流れ中に入るまでの時間は短いので、短時間のうちに線状体全体が流体から抗力を受けるようになる。また

、鉛直面内で線状体が水平方向に回転し始めると、水平方向速度が除々に増大し始める。静止流体中での場合と同様に、鉛直面内での同一姿勢に対する水平方向速度は、 α が大きいほど大きく(2.11.2項参照)、したがって、この水平方向速度の円周方向成分は α が大きいほど大きくなる。以上2つの原因により、落下開始後しばらくの間、 α が大きいほど重心の角速度 $d\varphi/dt$ は大きくなる。しかし、やがて、 α が小さい線状体の $d\varphi/dt$ も加速され、 α にかかわらず $d\varphi/dt$ は回転流体の角速度にほぼ等しくなる。なお、直径の大きい $\alpha=0.938(mm)$ の場合、鉛直面内での姿勢の変化が大きいため、7.5.2項で述べた $l=15(mm)$ の場合と同じ原因により、 $d\varphi/dt$ が回転流体の角速度に等しく

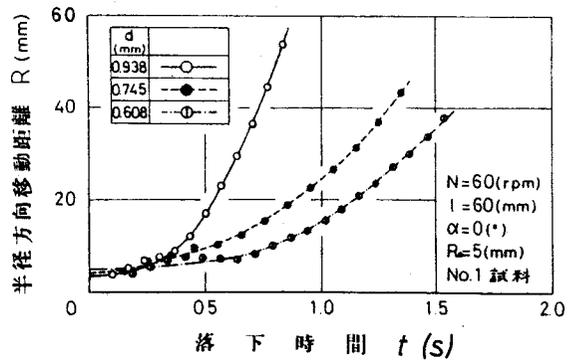


図 7.26 半径方向移動距離におよぼす直径の影響

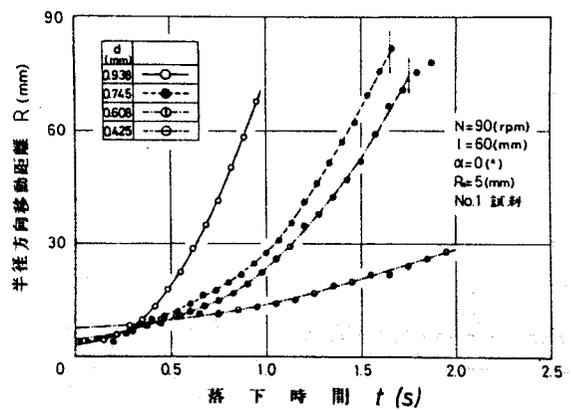


図 7.27 半径方向移動距離におよぼす直径の影響

なるまでの領域で、 ψ と φ の関係は上に凸の曲線になる。

落下開始直後の領域では、 α が小さいほど急激な姿勢の変化が大きく、その影響で r の値は大きい。が、 $d\varphi/dt$ は α が大きいほど大きく、したがって、線状体に作用する単位質量当りの遠心力が大きくなるため、 r はより大きく加速され、落下開始直後の領域を過ぎると α が大きいほど、同一落下時間での r および \dot{r} の値は大きくなる。また、 r が大きくなると遠心力がもっとも大きくなるので、直径による r および \dot{r} の差は除々に増大する。なお、 r が大きくなるのは、この他に、鉛直面内での水平方向速度は α が大きいほど大きく、その半径方向成分が大きいことも原因になっている。

しかし、鉛直面内での姿勢の変化を表わす ψ と θ の関係(図7.32)から、この実験の範囲内では、 θ は高々 42° 程度であり、鉛直面内での水平方向速度は加速状態にあるので、どの直径の場合にも、図7.15の $l=15(mm)$ の場合見られたような r の減速状態は現われない。

以上は、重心の角速度に差がある領域での場合を考えたが、

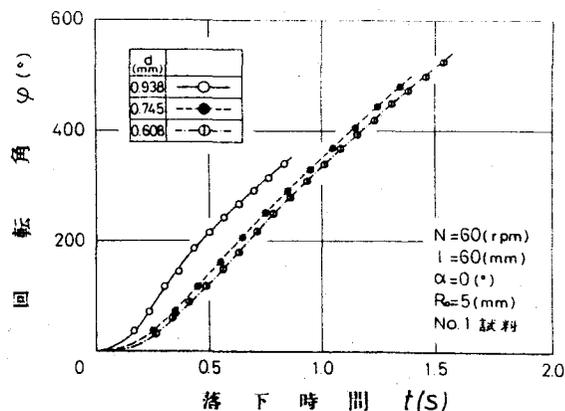


図7.28 重心の回転角におよぼす直径の影響

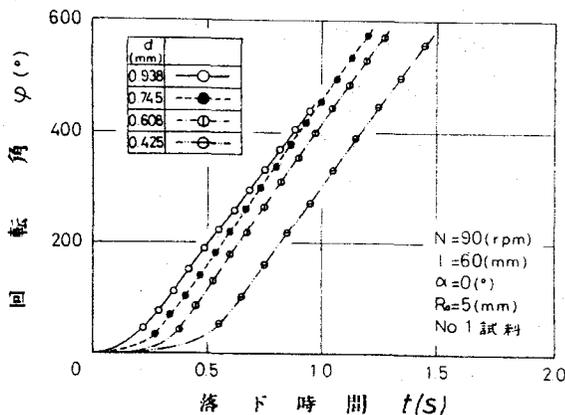


図7.29 重心の回転角におよぼす直径の影響

つぎに、 $d\varphi/dt$ が回転流体の角速度にほぼ等しくなった後の領域で線状体の運動を考える。

まず、重心の位置 R 、速度 \dot{R} および姿勢 θ_1 と β_1 (θ_2 の代りに配向角 β_1 を考える。)が、直径にかかわらず同一である瞬間を考えると、線状体に作用する遠心力は α^2 のみに比例し、いっぽう、 \dot{R} を減速させる向きに作用する抗力は α のみに比例する。したがって、単位質量当りに作用する遠心力は、 α にかかわらず等しいが、抗力は $1/\alpha$ のオーダーになり、 α が小さいほど大きい。このため、半径方向加速度 \ddot{R} は α が大きいほど大きくなる。このように、直径による \dot{R} の差が最小になる条件のもとで線状体の運動を考える場合でも、 \dot{R} は α が大きいほど大きくなる。したがって、 \dot{R} および鉛直面内での水平方向速度の影響が加わった場合、同一落下時間における \dot{R} の値は、直径が大きいほどいっそう大きくなる。

つぎに、直径が R と Y の関係におよぼす影響を調べるため、 $N=60, 90$ (rpm)の結果を図7.30, 7.31に示す。

鉛直方向速度 \dot{Y} は、落下開始直後の加速領域を過ぎると、鉛直面内での姿勢が水平方向に近づくにつれて単調に減少し、 \dot{R} は、この実験の範囲内では加速され続けるので、 R と Y の関係を表わす曲線の接線勾配 $dY/dR (= \dot{Y}/\dot{R})$ は単調に減少する。

図7.30, 7.31において、 R と Y の関係は直径に対して一定の傾向を示さない。回転流体中で線状体が運動する場合、鉛直面内での水平方向速度の値は、静止流体中での場合と異なるため、 \dot{Y} の値も両場合で異なるが、直径が \dot{Y} におよぼす影響、すな

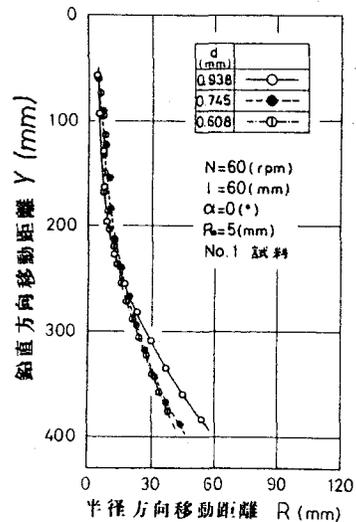


図7.30 半径方向移動距離におよぼす直径の影響

わち、同一姿勢における \dot{Y} の値は直径が大きいかほど大きい、は変わらないと考えられる。

とと θ の関係を表わす図7.32から、 θ の値は高々 42° 程度であり、それ程大きくないので、この実験の範囲内では、同一落下時間における \dot{Y} および \dot{Y}/R は α が大きいかほど大きい。また、前述したように、 R および \dot{Y} も α が大きいかほど大きくなり、したがって、 R と \dot{Y} の関係におよぼす直径の影響は、直径が姿勢の変化および \dot{Y}/R におよぼす影響により変わるため、一定の傾向を示さないのであると考えられる。

しかし、直径の小さい線状体の姿勢が水平になるのに十分な領域で運動する場合、 α が大きいかほど短時間のうちに姿勢は水平に近づくので、 \dot{Y} および \dot{Y}/R は短時間のうちに減速される。したがって、同一鉛直方向移動距離における R の値は、直径が小さいほど大きい領域が存在すると考えられる。

7.6.2 線状体の姿勢

$N=90$ (rpm)における鉛直面内での姿勢の変化を図7.32に示す。

前項で述べたように、線状体が流れに入った瞬間に流体から受ける抗力により、水平方向に回転するが、この姿勢の変化は α が小さいほど大き

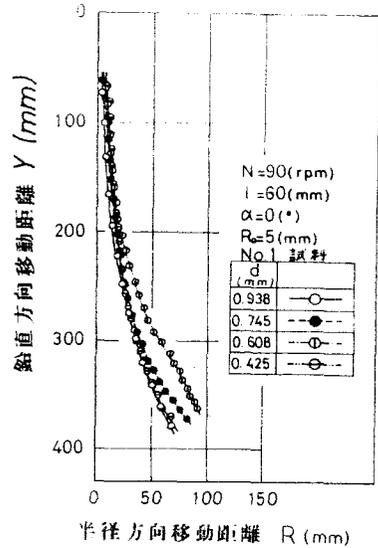


図 7.31 半径方向移動距離におよぼす直径の影響

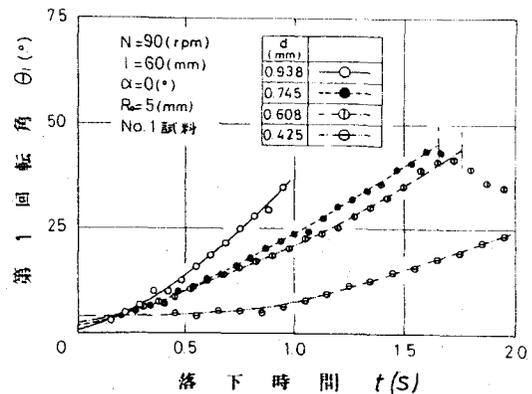


図 7.32 姿勢におよぼす直径の影響

い。しかし、初期位置が回転流体の中心近くであり、しかも、長さが大きいので、姿勢の変化はわづかである。

線状体がすべて流れ中に入った後の領域では、線状体は除々に水平方向に回転するが、 d が大きいほど $d\theta_1/dt$ は大きく、線状体が回転するのに要する時間は短い。したがって、鉛直面内での姿勢の変化におよぼす直径の影響は、静止流体中での場合と一致する。ただし、回転流体中では、線状体に遠心力が作用し、その姿勢から考えて先端部に近いほど大きいため、 θ_1 を増大させる向きの回転モーメントが作用し、静止流体中での場合より $d\theta_1/dt$ は大きくなると考えられる。

つぎに、線状体を含む鉛直面の変化を表わす ψ と θ_2 の関係を図7.33に示す。 θ_2 はその定義から、(7.12)式で表わされる。この式の両辺を t で微分すると

$$d\theta_2/dt = d\psi/dt + d(\beta_{1i} - \beta_{1f})/dt \quad (7.17)$$

となる。

ここで、 $d=0.745$ (mm)の場合について考える。線状体重心の回転状態を表わす図7.29において、鉛直面内で線状体が水平方向に回転し始めると、線状体は水平方向速度をもつようになり、この水平方向速度の円周方向成分の影響で、落下開始後しばらくすると $d\psi/dt$ は回転流体の角速度より

わづかに大きくなり、やがて、流体から受ける抗力により

$d\psi/dt$ は減速され回転流体の角速度にほぼ等しくなる。ところが、線状体の配向度の変化を表わす図7.34から、 $d=0.745$ (mm)

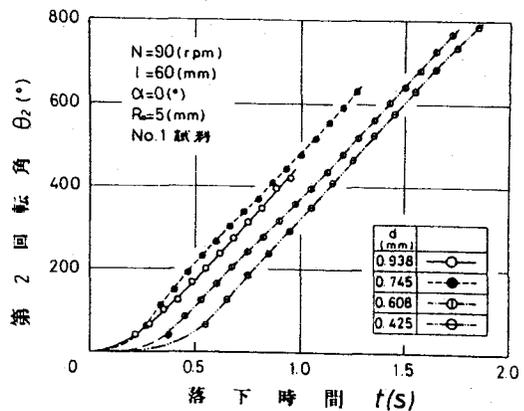


図7.33 姿勢におよぼす直径の影響

の場合、配向角 β は落下開始後増大し（半径方向から円周方向に配向するようになる。）、 $t=0.45$ (s)程度で最大となり、その後減少する。したがって、(7.17)式を考慮すれば、 $\alpha\theta_2/dt$ は落下直後の領域を過ぎると急激に増大し、 $t=0.45$ (s)程度で最大となり、その後減少することが明らかとなる。すなわち、 t と θ_2 の関係を表わす曲線には上に凸の領域が存在する。このため、同一落下時間における θ_2 の値は、 $d=0.745$ (mm)の方が $d=0.938$ (mm)の場合より大きくなる。しかし、時間が経過するにつれて $d\varphi/dt$ は回転流体の角速度にほぼ等しくなり、配向角 β の変化は、落下開始直後の領域での場合より小さくなるため、 $\alpha\theta_2/dt$ は回転流体の角速度にほぼ等しくなる傾向にある。

また、重心の角速度 $d\varphi/dt$ は直径にかかわらず回転流体の角速度に等しくなるが、直径が異なると、線状体の位置および鉛直面内での姿勢の変化に差が生じ、配向角 β を変化させる原因となる線状体の軸に直角な方向に作用する抗力の分布状態が異なるため、線状体を含む鉛直面の変化におよぼす直径の影響は明確に現われない。しかし、同一落下時間における φ の値は、直径が大きいほど大きく、 φ の変化に比べて β の変化が小さいため、傾向としては、同一落下時間における θ_2 の値は直径が大きいほど大きい。

7.6.3 線状体の配向

$N=90$ (rpm)における配向の変化を図7.34に示す。どの直径の場合にも、落下開始直後の領域では、 $d\varphi/dt$ は回転流体の角速度より小さく、線状体が軸に直角な方向に受ける抗力は先端部の方が大きい。そのため、線状体は β を増大させる向きに回転する。しかし、鉛直面内で線状体は水平方向速度をもつようになり、この影響で落下開始後しばらくすると、 $d\varphi/dt$ は回転流体の角速度よりあつかに大きくなる。したがって、流体から受ける抗力は、流体の回転方向と逆向きに作用し始める。しかも、そ

の姿勢から考えて先端部に近いほど，線状体の軸に直角な方向に作用する抗力が大きいいため， β_1 を減少させる向きに回転モーメントが作用し，角速度 $d\beta_1/dt$ は除々に減速され， β は最大となる。その後も， $d\varphi/dt$ が回転流体の角速度に等しくなるまで β は減少する。すなわち，線状体はいったん円周方向に配向し始めるが，ふたたび半径方向へ配向し始める。なお， β の最大値は， α が大きいほど小さい傾向にある。

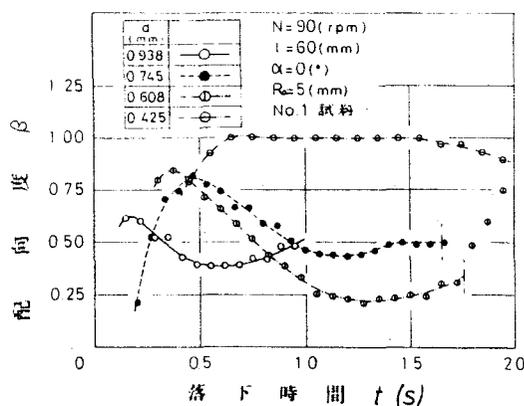


図 7.34 配向におよぼす直径の影響

これは， $d\varphi/dt$ が回転流体の角速度より大きい領域において，両者の差は α が大きいほど大きく，しかも，鉛直面内での姿勢がより水平に近いため， β_1 を減少させる向きに作用する回転モーメントが大きいことが原因していると考えられる。

$\alpha=0.425$ (mm) の場合， $\beta=1$ の状態（円周方向に配向している状態）をしばらく保っているが，やがて除々に減少していく。 $\alpha=0.608$ (mm) の場合，最大値は約 0.8 で， β は減少してほぼ一定値，約 0.22，となり，ゆっくり増大して $\beta=0.27$ 程度で線状体の先端が円筒側面に到達する。 $\alpha=0.745$ (mm) の場合，最大値は約 0.8 で， β は減少してほぼ一定値，約 0.44，となり，除々に増大して $\beta=0.5$ 程度で先端が円筒側面に到達する。 $\alpha=0.938$ (mm) の場合も同様に，約 0.6 から減少してほぼ一定値，約 0.39，となり，その後増大し始める。なお，線状体が一定の配向角を保ったまま運動し続ける時間は， α が小さいほど長いことが分かる。

線状体を含む鉛直面は，回転流体の半径方向に対して一定の角度を保っているが，この鉛直面は半径方向に移動しており，

また、この面内で線状体は水平方向に回転している。したがって、 $d\varphi/dt$ が回転流体の角速度に等しくなった後の領域では、その姿勢から考えて半径方向への移動速度は、線状体の先端部に近いほど大きいので、線状体に対する流体の円周方向の相対速度は、先端部に近いほど大きくなる。このため、流体から受ける抗力にもとづく回転モーメントは、 β を増大させる向きに作用し、 β は小たたび増大する。また、半径方向速度 v および鉛直面内での姿勢の変化は、 α が小さいほど小さいので、一定の配向角を保ったまま線状体が運動し続ける時間が長くなると考えられる。

以上のように、直径が異なると、重心の角速度、半径方向速度および鉛直面内での姿勢の変化に差が生じ、これが配向角の変化におよぼす直径の影響となって現われる。上述の $\alpha=0.425 \sim 0.938$ (mm)の結果から、 $\alpha=0.425$ (mm)の場合を除いて、 $\beta < 1$ であるため、つねに線状体の先端が先に円筒側面に到達し、繊維がオープンエンド精紡機のロータ内の滑壁に到達するときの状態としては望ましくない。したがって、傾向としては、直径が小さい方がより望ましい状態で円筒側面に到達する。

7.7 線状体比重量の影響

この節では、 $d=0.745$ (mm), $l=60$ (mm) の NO.1 試料および $d=0.653$ (mm), $l=60$ (mm) の NO.2 試料に対する $\alpha=0^\circ$, $R_0=5$ (mm) の実験結果から、線状体の比重量が落下特性におよぼす影響を調べる。なお、NO.1 試料と NO.2 試料では直径も異なるため、前節で述べた直径の影響の結果も考慮する必要がある。

7.7.1 線状体の落下軌跡

$N=90$ (rpm) における重心の半径方向移動距離 R および回転角 ψ の変化を図 7.35, 7.36 に示す。これらの図から、同一落下時間で比較すると、 ψ の値はほとんど同じであるが、 R および半径方向速度 \dot{R} は、 ρ の大きい NO.2 試料の方が大きいことが分かる。

静止流体中での場合と同様に、鉛直方向速度 \dot{Y} は ρ が大きい方が大きく、線状体がすべて流れ中に入るまでの時間は短い。したがって、 ρ が大きい方が短時間のうちに線状体全体が流体から抗力を受けるようになる。さらに、線状体を含む鉛直面内の同一姿勢に対する水平方向速度は、 ρ が大きい方が大きく

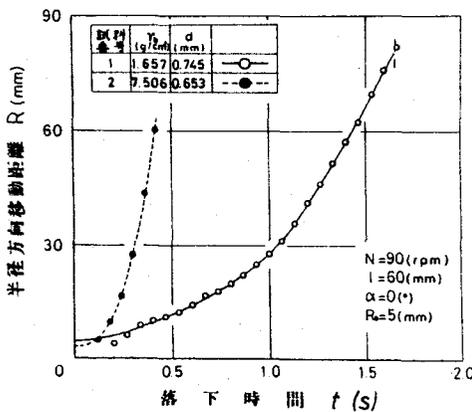


図 7.35 半径方向移動距離におよぼす比重量の影響

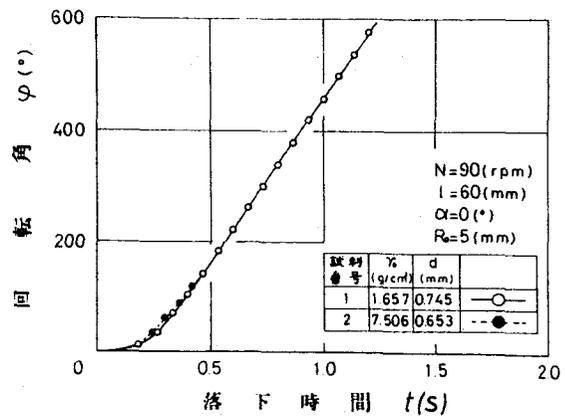


図 7.36 重心の回転角におよぼす比重量の影響

(2.13.2項参照), この水平方向速度の円周方向成分は r が大きい方が大きくなる。いっぽう, 線状体の形状および姿勢が同じであれば, 線状体を回転流体の中心軸の回りに回転させる向きに作用する抗力は同じになるが, r が大きい方が慣性が大きいので, 角加速度 $d\dot{\varphi}/dt^2$ は小さくなる。したがって, これら3つの原因に, さらに, 本実験の場合, NO.1試料とNO.2試料では形状が異なる(NO.2試料の方が直径が小さい)影響が加わるため, φ の変化におよぼす r の影響が明確に現われなかったと考えられる。ここで, 直径の影響を考慮すると, 同一形状で重さが異なる場合, 重い方が落下開始直後の領域において, $d\varphi/dt$ はより大きく加速されるので, 同一落下時間での φ の値は大きくなる。ただし, これはNO.2試料とNO.1試料程度の比重量の差を有する線状体に対していえることであり, 比重量の差がもっと大きい場合にはどのようなようになるか分からない。

つぎに, r が大きい方が r および \dot{r} が大きくなる原因について考える。落下開始直後の領域では, r が小さい方が鉛直面内での急激な姿勢の変化が大きく, このため, 線状体が X 軸にほぼ平行に移動する距離は大きくなり, したがって, r の値は大きい。この領域を過ぎると r が大きい方が r の値は大きくなる。まず, 重心の位置 r , 速度 \dot{r} および姿勢が同一である瞬間を考えると, 本実験の場合, 重心の角速度は試料にかかわらずほぼ等しいので, 線状体に作用する単位質量当りの遠心力は r にかかわらず等しいが, \dot{r} を減速させる向きに作用する抗力は, 線状体が同一形状であれば等しいため, 単位質量当りの抗力は r が大きい方が小さい。したがって, 半径方向加速度 \dot{r} は r が大きい方が大きくなる。このように, r による \dot{r} の差が最小になる条件のもとで線状体の運動を考える場合でも, \dot{r} は r が大きい方が大きくなり, これに鉛直面内での水平方向速度の影響が加わった場合, \dot{r} の値は r が大きい方がいっそう大きくなる。

ここで、直径の影響を考慮すると、同一形状で重さが異なる場合、同一落下時間で比較すると、重い方が R および \dot{Y} の値は大きくなる。

つぎに、 ρ が R と \dot{Y} の関係におよぼす影響を調べるため、 $N=90$ (rpm) の結果を図 7.37 に示す。

同一鉛直方向移動距離に対する R の値はほとんど同じになる。鉛直方向速度 \dot{Y} の値は、回転流体中と静止流体中で異なるが、 ρ が \dot{Y} におよぼす影響、すなわち、同一姿勢における \dot{Y} の値は ρ が大きい方が大きい、は回転流体中で線状体が運動する場合にも変わらないと考えられる。これは、図 7.37 において、プロットした点と点の時間間隔は、No.1 試料の場合、 $\Delta t = 2/3$ (s)、No.2 試料の場合、 $\Delta t = 0.6$ (s) であり、点と点の鉛直方向移動距離 Y の差は、No.2 試料の方が大きいことから明らかである。

鉛直面内での姿勢の変化を表わす図 7.38 から、No.2 試料の場合、 θ_1 の値は高々 25° 程度であり、この実験の範囲内では、同一落下時間における \dot{Y} および \dot{Y} は、 ρ が大きい方が大きい。また、前述したように、 R および \dot{R} も ρ が大きい方が大きくなり、したがって、 R と \dot{Y} の関係におよぼす比重量の影響は、比重量が線状体の姿勢および \dot{Y}/R におよぼす影響により変わるため明確に現われない。また、円筒回転数が異なると、姿勢の変化および \dot{Y} 、 \dot{R} の値が異なるため、同一鉛直方向移動距離に対する R の値は、 $N=30, 120$ (rpm) の場合、No.1 試料の方が大きく、 $N=60$ (rpm) の場合、No.2 試料の方が大きいというように、回転数 N により比重量の影響が異なることも分

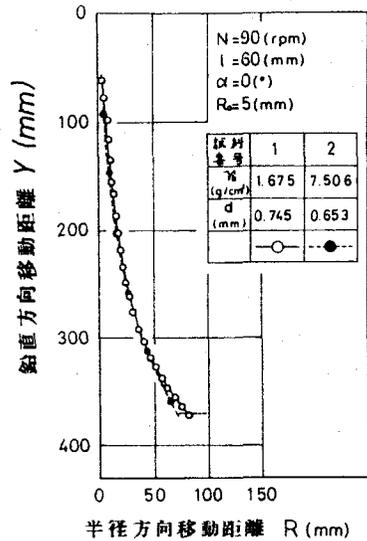


図 7.37 半径方向移動距離におよぼす比重量の影響

かった。

7.7.2 線状体の姿勢

$N = 90$ (rpm)における鉛直面内での姿勢の変化を図7.38に示す。

線状体が流れに入った瞬間に流体から受ける抗力により、線状体は水平方向に回転するが、 ρ が大きい方が鉛直方向速度 Y は大きく、急激な回転を受ける時間は短く、さらに、重心回りの慣性モーメントが大きいいため、この姿勢の変化は小さい。また、線状体がすべて流れ中に入った後の領域では、線状体は徐々に水平方向に回転するが、 ρ が大きい方が $d\theta_1/dt$ は大きく、線状体が回転するのに要する時間は短い。

ここで、直径が大きいほど $d\theta_1/dt$ が大きいことを考慮すると、同一形状で重さが異なる場合、重い方が $d\theta_1/dt$ は大きくなる。これは、重い方が速度が大きく、線状体に対する流体の相対速度が大きくなり、したがって、線状体を水平方向に回転させる向きに作用するモーメントが大きいためであると考えられる。以上のように、鉛直面内での姿勢の変化におよぼす比重の影響は、静止流体中での場合と一致する。ただし、回転流体中では、線状体に遠心力が作用するので角速度は静止流体中での場合より大きい。

つぎに、線状体を含む鉛直面の変化を表わす α と θ_2 の関係を図7.39に示す。

前項で述べたように、 φ の変化はNO.1試料とNO.2試料でほとんど差がないが、 ρ が異なると、線状体の位置および鉛直

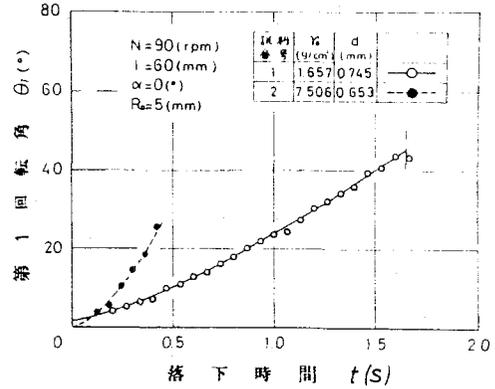


図7.38 姿勢におよぼす比重の影響

面内での姿勢の変化に差が生じ、配向角 θ_2 を変化させる原因となる線状体の軸に直角な方向に作用する抗力の分布状態が異なる。このため、線状体の配向度の変化を表わす図7.40において、両試料ともに落下開始後 θ_2 は増大し、最大値をもち、その後減少するが、 θ_2 の値は両試料で異なる。

したがって、(7.17)式を考慮すれば、 $\alpha\theta_2/dt$ は、 γ の大きいNo.2試料の方が短時間のうちに最大となることが分かる。

ここで、直径が大きいほど同一落下時間における θ_2 の値は大きくなる傾向にあることを考慮すると、同一形状で重さが異なる場合、重い方が θ_2 の値は大きくなる。

7.7.3 線状体の配向

$N=90$ (rpm)における配向の変化を図7.40に示す。落下開始直後の領域では、 $d\varphi/dt$ は回転流体の角速度より小さく、流体から受ける抗力により線状体は配向角 θ_2 を増大させる向きに回転するが、鉛直面内で線状体が水平方向速度をもつようになるため、しばらくすると $d\varphi/dt$ は回転流体の角速度よりわずかに大きくなる。したがって、抗力は流体の回転方向と逆向きに作用し始める。しかも、抗力は先端部に近いほど大きく、抗力にもとづく回転モ

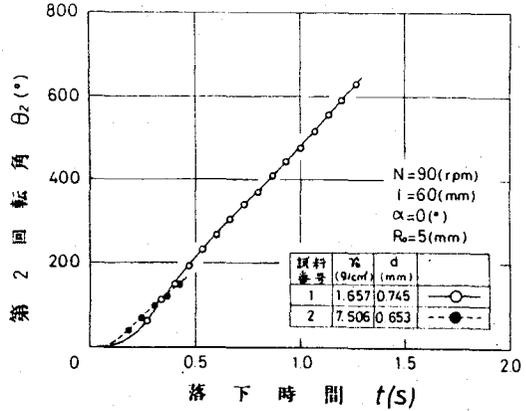


図7.39 姿勢におよぼす比重量の影響

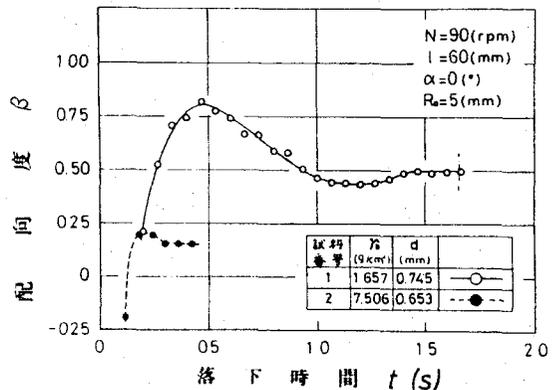


図7.40 配向におよぼす比重量の影響

ーメントは β を減少させる向きに作用するため、角速度 $d\beta/dt$ は除々に減速され、 β は最大となる。 $d\varphi/dt$ が回転流体の角速度より大きい領域において、両者の差は β が大きい方がわずかに大きく、しかも、鉛直面内での姿勢がより水平に近いので、 β を減少させる向きに作用する回転モーメントが大きくなる。このため、 β の最大値は β が大きい方が小さくなると考えられる。

β が最大になった後も、 $d\varphi/dt$ が回転流体の角速度に等しくなるまで β は減少し、やがて、ほぼ一定となり、この状態を保ったまま運動を続ける。線状体を含む鉛直面は、回転流体の半径方向に対して一定の角度を保っているが、この鉛直面は半径方向へ移動しており、また、この面内で線状体は回転している。このため、先端部に近いほど半径方向への移動速度は大きいので、線状体に対する流体の円周方向の相対速度は大きくなり、流体が受ける抗力にもとづく回転モーメントは β を増大させる向きに作用し、 β はふたたび増大する。すでに述べたように、半径方向速度 v_r および鉛直面内での姿勢の変化は、 β が大きいほど大きいので、一定の配向角を保ったまま線状体が運動し続ける時間は短いと考えられる。

また、図 7.40 において、 β の値は β が大きい方がつねに小さく、円筒側面に到達するときの配向角はより鋭角であるため、繊維がオープンエンド精紡機²⁾のロータ内の滑壁に到達するときの状態としては望ましくない。

したがって、7.5.3項、7.6.3項およびこの項で得られた結果から、オープンエンド精紡機では、比重量、直径および長さが小さい繊維、すなわち、繊度および長さが小さい繊維ほど理想に近い状態でロータ内の滑壁に到達すると考えられる。

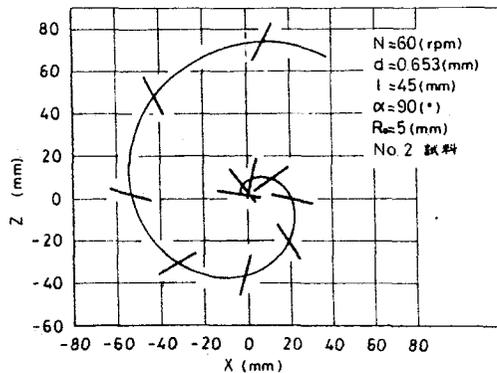
7.8 初期角度の影響

この節では、 $d=0.653$ (mm) の No. 2 試料を用いて、 $R_0=5$ (mm) でおこなった実験から得られた $\alpha=0^\circ$ の結果と $\alpha=90^\circ$ の結果を比較し、初期角度が落下特性におよぼす影響を調べる。

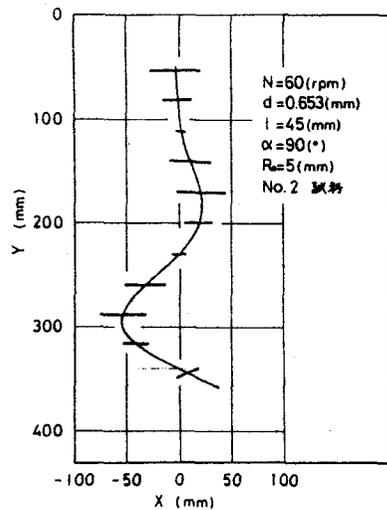
7.8.1 線状体の落下軌跡

$N=60$ (rpm), $l=45$ (mm), $\alpha=90^\circ$ の落下軌跡を図 7.41 に示す。図中の線状体の時間間隔は、 $\Delta t=4/30$ (s) である。

流れに入った線状体は、流体から抗力を受け回転流体の中心軸回りの回転運動を始めるが、重心の角速度の加速に伴ない線状体に作用する遠心力が増大するため、回転流体の半径方向へも運動し始める。また、図 (b) から、線状体は水平な姿勢を保ったままほぼ一定速度で鉛直方向へ運動し続け、円筒側面に到達することが分かる。



(a)



(b)

図 7.41 線状体の落下軌跡

ここで、重心の半径方向移動距離 R および回転角 φ の変化を図 7.42, 7.43 に示す。図には、 $l=30$ (mm) と 45 (mm) のデータを

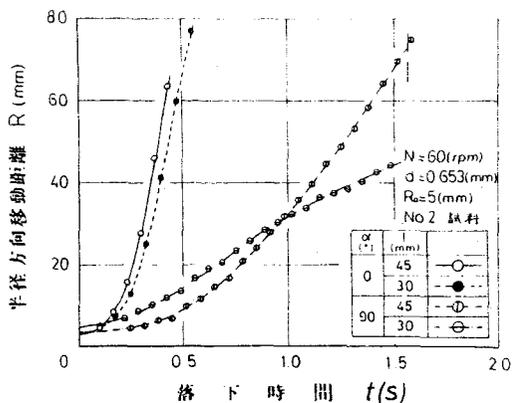


図 7.42 半径方向移動距離におよぼす初期角度の影響

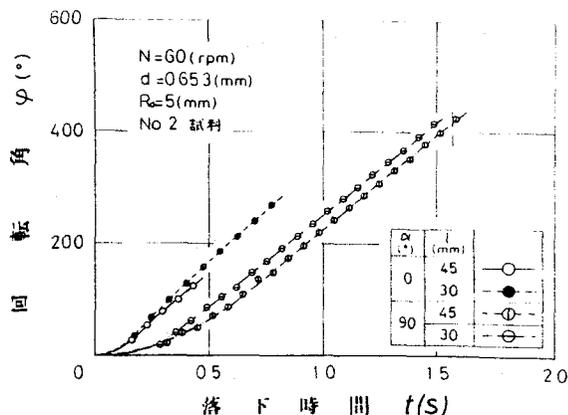


図 7.43 重心の回転角におよぼす初期角度の影響

プロットしている。これらの図から、同一落下時間で比較すると、 R および半径方向速度 V_r ともに $\alpha = 0^\circ$ の方が大きいことが分かる。

鉛直方向速度 V_z は、鉛直面内での姿勢が水平方向に近づくにつれて単調に減少するので、線状体がすべて流れ中に入るまでの時間は、 $\alpha = 0^\circ$ の方が短い。したがって、 $\alpha = 0^\circ$ の方が短時間のうちに線状体全体が流体から抗力を受けるようになる。また、 $\alpha = 90^\circ$ の場合、線状体は回転流体の円周方向に向いた状態から運動を始めるため、落下開始直後の領域では、線状体が流体から受ける抗力は $\alpha = 0^\circ$ の方が大きい。さらに、 $\alpha = 0^\circ$ の場合、鉛直面内で線状体が水平方向に回転し始めると、線状体は水平方向速度をもつようになり、この水平方向速度の円周方向成分が流体から受ける抗力にもとづく円周方向速度に加わる。しかし、 $\alpha = 90^\circ$ の場合、この水平方向速度は 0 である。以上述べた原因により、落下開始後しばらくの間、重心の角速度 $d\varphi/dt$ は $\alpha = 0^\circ$ の方が大きくなると考えられる。

また、 $\alpha = 0^\circ$ の場合、鉛直面内で線状体が水平方向速度をもつため、 t と φ の関係を表わす曲線には上に凸の領域、すなわち、 $d\varphi/dt$ がいったん回転流体の角速度より大きくなり、その

後減速されて回転流体の角速度とほぼ等しくなる領域，が存在するが， $\alpha = 90^\circ$ の場合，この現象は見られず， $d\varphi/dt$ は除々に加速されて回転流体の角速度に近づく。

以上のように，落下開始後しばらくの間， $d\varphi/dt$ は $\alpha = 0^\circ$ の方が大きいので，糸状体に作用する単位質量当りの遠心力が大きくなり， \dot{r} は $\alpha = 0^\circ$ の方がより大きく加速され，同一落下時間における r および \dot{r} の値は大きくなる。 \dot{r} が大きくなるのは，この他に， $\alpha = 0^\circ$ の場合，鉛直面内で糸状体が水平方向速度をもち，その半径方向成分が遠心力にもとづく半径方向速度に加わることも原因になっている。この水平方向速度は，鉛直面内での姿勢が 40° から 50° の範囲になるまで加速され，その後減速されて水平な姿勢で 0 となる。このため，図7.15の $l = 15$ (mm)の場合見られたように，水平な姿勢に近づくにつれて \dot{r} は除々に減速した。 $\alpha = 90^\circ$ の場合，水平な姿勢を保ったまま運動するので，この水平方向速度の影響が加わらず遠心力のみによって半径方向に加速されるため， \dot{r} は $\alpha = 0^\circ$ の場合より小さくなる。また，図7.42には $l = 15$ (mm)と 60 (mm)のデータがプロットされていないが， $l = 15 \sim 60$ (mm)の結果から， $\alpha = 90^\circ$ の場合，図7.15($\alpha = 0^\circ$ の場合)で見られた，落下開始後しばらくの間，長さが小さいほど \dot{r} は大きくなるが，時間が経過するにつれて長さが大きいほど \dot{r} は大きくなるという現象は現われないことが分かった。この現象は，7.5.1項ですでに説明したように，鉛直面内で糸状体が水平方向速度をもつことと，この面内での姿勢の変化状態が長さにより異なることが主な原因である。 $\alpha = 90^\circ$ の場合，この水平方向速度をもたないため，この現象は現われず， l が大きいほど \dot{r} は大きくなる。ただし，図7.42において，落下開始直後の領域で $l = 30$ (mm)の方が \dot{r} が大きいのは，図7.43を見れば分かるように，この領域では $d\varphi/dt$ が大きいからである。

つぎに，初期角度が r と γ の関係におよぼす影響を調べた

めに、 $l=30, 45$ (mm) の結果を図 7.44, 7.45 に示す。 $l=30$ (mm) の場合、 $Y < 240$ (mm) 程度の領域では、同一鉛直方向移動距離における R の値は、 $\alpha=90^\circ$ の方が大きい。この領域を過ぎると $\alpha=0^\circ$ の方が大きくなる。いっぽう、 $l=45$ (mm) の場合、つねに $\alpha=90^\circ$ の方が大きくなる。

Y は、鉛直面内での姿勢が水平方向に近づくにつれて単調に減少するので、水平な姿勢のとき最小になる。なお、そのときの値は長さにかかわらず一定である。 $\alpha=90^\circ$ の場合、水平な姿勢を保ったまま運動を続けるので、同一落下時間における Y の値は $\alpha=0^\circ$ の場合より小さく、また、長さにかかわらず同じになる。前述したように、 $\alpha=90^\circ$ の場合、 R は l が大きいほど大きく、同一鉛直方向移動距離における R の値は l が大きいほど大きくなる。いっぽう、 $\alpha=0^\circ$ の場合、本実験の範囲内では、同一鉛直方向移動距離における R の値は l が大きいほど小さくなる。したがって、長さが異なると初期角度が R と Y の関係におよぼす影響が異なり、同一鉛直方向移動距離で比較すると、 R の値は長さの大きいほど $\alpha=90^\circ$ の方が大きくなる。

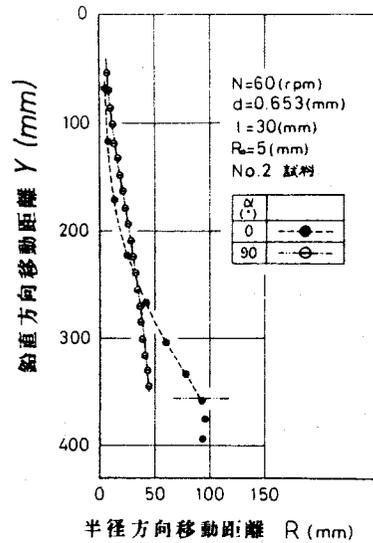


図 7.44 半径方向移動距離におよぼす初期角度の影響

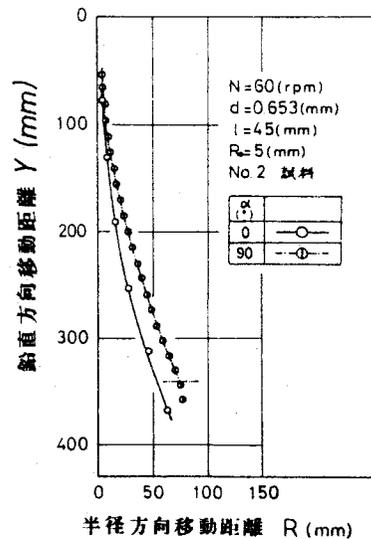


図 7.45 半径方向移動距離におよぼす初期角度の影響

7.8.2 線状体の姿勢

$\alpha = 90^\circ$ で線状体を落下させた場合、線状体はほぼ水平な姿勢を保ったまま運動を続ける。いっぽう、線状体を含む鉛直面の変化を調べると、 $\alpha = 90^\circ$ の場合、重心の角速度 $d\varphi/dt$ は除々に加速され回転流体の角速度に近づき、また、線状体の配向度の変化を表わす図7.46から、配向角 β は負の値から増大してほぼ一定値になる。したがって、(7.17)式を考慮すれば、 $d\beta/dt$ は落下開始直後に急激に増大し、回転流体の角速度に近づくことが分かる。

7.8.3 線状体の配向

$l = 45(\text{mm})$ 、 $\alpha = 90^\circ$ の配向の変化を図7.46に示す。

線状体は、回転流体の円周方向を向いた状態から運動を始めるため、落下開始直後の領域では、軸に直角方向に受ける抗力はわづかであり、ほとんどX軸に平行な姿勢を保ったまま回転流体の中心軸回りの回転運動をおこなうため、1着目に撮影された線状体の配向角は負になる。

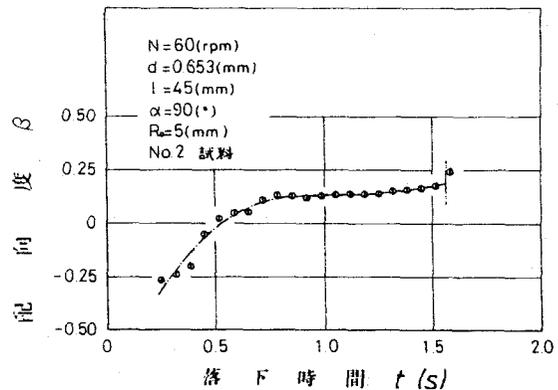


図7.46 配向におよぼす初期角度の影響

$d\varphi/dt$ は回転流体の角速度より小さく、やがて、軸に直角な方向に作用する抗力により、線状体は β を増大させる向きに回転する。 $\alpha = 90^\circ$ の場合、 $d\varphi/dt$ は回転流体の角速度より大きくなることはなく、除々にこの値に近づくため、 β はゆっくり増大してほぼ一定となり、しばらくこの状態が続く。すなわち、線状体全体が回転流体の角速度とほぼ等しい角速度で運動する。この状態においても線状体は回転流体の半径方向に移

動しているが、 $\alpha=0^\circ$ の場合に比べてその速度は小さく、また、水平な姿勢を保っているので、流体から受ける抗力にもとづく ω を増大させる向きに作用する回転モーメントは小さく、一定の配向角を保ったまま運動を続けた後、わづかづつ ω は増大し始める。

7.9 初期位置の影響

この節では、 $d=0.653(\text{mm})$ のNo.2試料を用いて、 $\alpha=0^\circ$ で $R_0=5, 25, 50(\text{mm})$ 変化させておこなった実験結果から、初期位置が落下特性におよぼす影響を調べる。

7.9.1 線状体の落下軌跡

重心の半径方向移動距離 R および回転角 φ の変化を図7.47、7.48に示す。これらの図には、 $N=30(\text{rpm})$ 、 $l=60(\text{mm})$ のデータと $N=60(\text{rpm})$ 、 $l=30(\text{mm})$ のデータがプロットされている。

図7.48において、 $N=60(\text{rpm})$ 、 $l=30(\text{mm})$ の場合、同一落下時間で比較すると、 φ の値は $R_0=25(\text{mm})$ の場合がもっとも大きく、 $R_0=50(\text{mm})$ の場合がもっとも小さい。この場合、長さが30

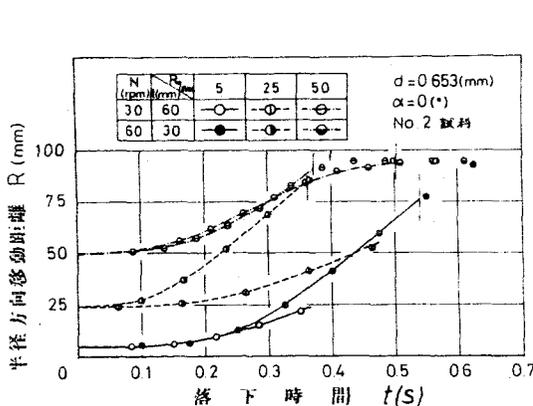


図 7.47 半径方向移動距離におよぼす初期位置の影響

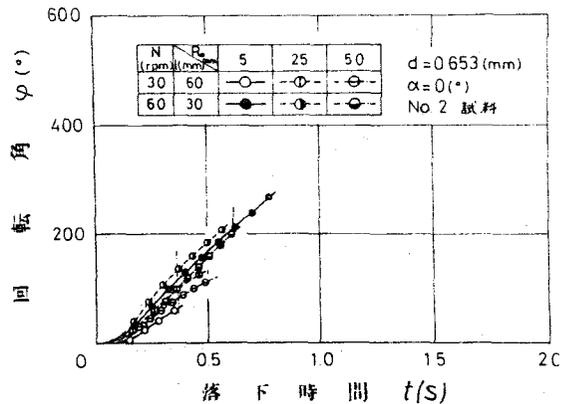


図 7.48 重心の回転角におよぼす初期位置の影響

(mm)と比較的小さいため、線状体が流れ中に入ったときの急激な姿勢の変化は大きく、図7.51を見れば分かるように、線状体があるべて流れ中に入ったときの姿勢は、 $R_0=50(\text{mm})$ の場合、約 58° 、 $R_0=25(\text{mm})$ の場合、約 34° になる。鉛直面内で線状体が傾いている場合、線状体は水平方向速度をもつが、この水平方向速度は $\theta_1=40^\circ\sim 50^\circ$ で最大となる。このため、 $R_0=50(\text{mm})$ の場合、水平方向速度はつねに減速状態にあり、 $R_0=25(\text{mm})$ の場合、加速され短時間のうちに水平方向速度は最大となる。したがって、この水平方向速度の円周方向成分は、 $R_0=25(\text{mm})$ の場合もっとも大きくなるため、落下開始後しばらくの間、重心の角速度 $d\varphi/dt$ は $R_0=25(\text{mm})$ の場合が最大となる。しかし、やがて、流体から受ける抗力により、 $d\varphi/dt$ は減速され、 R_0 にかかわらず回転流体の角速度に等しくなる。

いっぽう、図7.47において、上述した落下開始直後の急激な姿勢の変化の影響が、 $N=60(\text{rpm})$ 、 $l=30(\text{mm})$ の場合の r の変化状態にも現われている。 $R_0=50(\text{mm})$ の場合、落下開始後しばらくの間、 $d\varphi/dt$ は $R_0=25(\text{mm})$ の場合に比べて小さいが、回転流体の中心からの距離は大きいので、遠心力が角速度の二乗および距離に比例することを考慮すると、両者の場合同程度の遠心力が作用していると考えられる。ところが、 r は、 $R_0=25(\text{mm})$ の方がより大きく加速され、同一落下時間における r の値は大きいことが分かる。これは、上述したように、鉛直面内での水平方向速度は、 $R_0=50(\text{mm})$ の方が小さく、その半径方向成分が小さいことが原因している。また、 $R_0=50(\text{mm})$ の場合、 $\alpha=0.3(\text{s})$ 程度(θ_1 が約 65°)から r は減速される状態が見られるが、その他の R_0 の場合、 θ_1 がこれ程大きくならないため、 r の減速は見られない。

これまでは、 $N=60(\text{rpm})$ 、 $l=30(\text{mm})$ の場合であったが、 $N=30(\text{rpm})$ 、 $l=60(\text{mm})$ の場合、円筒回転数が小さく、長さが大きいので、落下開始直後の急激な姿勢の変化は小さく、 $R_0=$

50(mm)の場合でも、この実験の範囲内では θ は高々 30° 程度しかならず、同一落下時間における \dot{r} の値は、 $R_0=50$ (mm)の場合最大になり、 $R_0=5$ (mm)と 25 (mm)の場合ほぼ同じになる。

以上のように、初期位置 R_0 は、線状体が流れに入った瞬間における急激な姿勢の変化に影響をおよぼし、この姿勢の変化がその後の線状体の運動状態に影響するため、円筒回転数、長さなどにより、初期位置の影響が異なるものと考えられる。したがって、線状体全体が流れに入った状態から運動し始める場合を考えると、 R_0 が大きいほど、線状体に対する流体の相対速度が大きく、運動開始直後の領域で $d\psi/dt$ はより大きく加速され、しかも、回転流体の中心からの距離が大きいので、同一落下時間における \dot{r} の値は大きくなる。

つぎに、初期位置が R と Y の関係におよぼす影響を図7.49、7.50に示す。

鉛直方向速度 \dot{Y} は、姿勢が水平に近づくにつれて単調に減少するので、 R_0 が大きいほど、線状体が鉛直方向に移動するのに

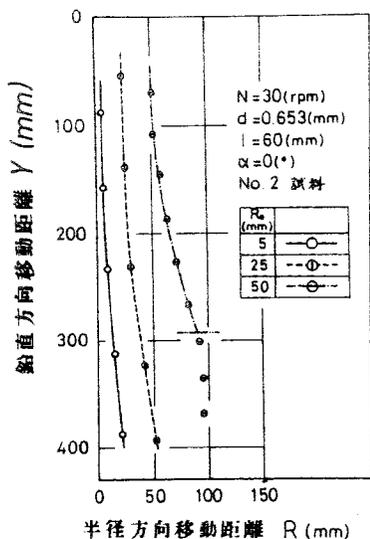


図7.49 半径方向移動距離
におよぼす初期位置の影響

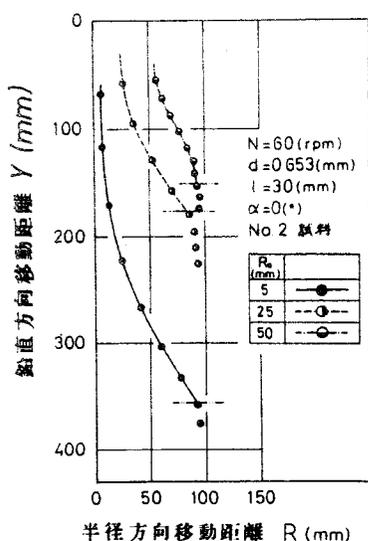


図7.50 半径方向移動距離
におよぼす初期位置の影響

要する時間は長くなり、同一落下時間での γ および $\dot{\gamma}$ の値は小さい。また、 $N=30$ (rpm), $l=60$ (mm) の場合、この実験の範囲内では R は増大し続け、しかも、同一落下時間での R の値は R_0 が大きいほど大きい。したがって、同一鉛直方向移動距離における接線勾配 $d\gamma/dR (= \dot{\gamma}/R)$ は R_0 が大きいほど小さくなる。すなわち、線状体の重心が初期位置から回転流体の半径方向へ移動する距離、 $R-R_0$ を同一鉛直方向移動距離で比較すると R_0 が大きいほど大きくなる。ところが、 $N=60$ (rpm), $l=30$ (mm) の場合、同一落下時間での R の値は、 R_0 が大きいほど大きくはならないため、上述の結果は得られない。

7.9.2 線状体の姿勢

鉛直面内での姿勢の変化を表わす図 7.57 において、線状体が流れ中に入った瞬間に流体から受ける抗力は、 R_0 が大きいほど線状体に対する流体の相対速度が大きいため大きくなる。したがって、落下開始直後の急激な姿勢の変化は、 R_0 が大きいほど大きい。

線状体がすべて流れ中に入った後の領域では、線状体は除々に水平方向に回転する。回転流体中で線状体が運動する場合、遠心力が作用し、その姿勢から考えて先端部に近いほど大きい。ため、線状体には θ を増大させる向きの回転モーメントが働く。この回転モーメントに寄与する遠心力の成分は、線状体を含む鉛直面内の軸に直角な方向の成分であるから、線状体重心の角速度および回転流体の中心からの距離が同じであっても、配向角 θ および鉛直

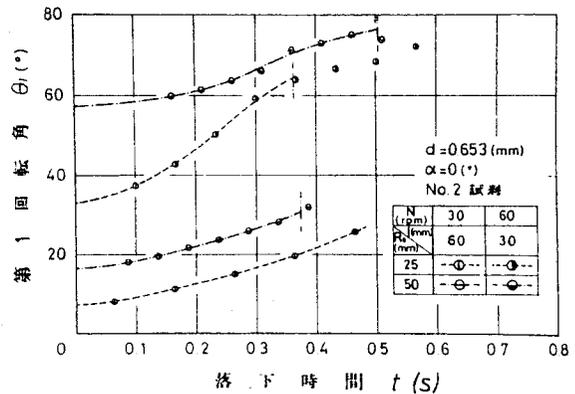


図 7.57 姿勢におよぼす初期位置の影響

面内での姿勢 θ_1 により差が生じる。したがって、 R_0 が θ_1 の変化におよぼす影響を調べるためには、 $d\varphi/dt$ 、 R の変化のみならず θ_1 の変化状態をも考慮する必要がある。

7.10 円筒回転数の影響

この節では、 $\alpha=0.745(mm)$ 、 $l=60(mm)$ のNo.1試料を用いて、 $\alpha=0^\circ$ 、 $R_0=5(mm)$ で、 $N=30\sim 120(rpm)$ の範囲で円筒回転数を変化させておこなった実験結果から、円筒回転数が落下特性におよぼす影響を調べる。さらに、回転流体中での実験と同時にこなされた静止流体中での実験から得られた結果と比較し、重心の半径方向移動距離 R (静止流体中での場合、水平方向移動距離 X に相当する。)の変化、 R と Y の関係(X と Y の関係)および鉛直面内での姿勢 θ_1 (回転角 θ)の変化が、両者の場合どのように異なるかを明らかにする。

7.10.1 線状体の落下軌跡

重心の半径方向移動距離 R および回転角 φ の変化を図7.52、7.53に示す。

鉛直面内で線状体が水平方向に回転し始めると、線状体は水平方向速度をもつようになり、この水平方向速度の円周方向成分が原因となって、落下開始後短時間のうちに、重心の角速度 $d\varphi/dt$ は回転流体の角速度より大きくなり、やがて、流体から受ける抗力により $d\varphi/dt$ は減速して回転流体の角速度に等しくなる。本実験の場合、試料条件は同一であるので、鉛直面内での姿勢が同一であれば、水平方向速度は等しくなる。姿勢の変化を示す図7.55から、同一落下時間における θ_1 の値は、 N が大きいほど大きく、実験の範囲内では $N=120(rpm)$ の場合でも θ_1 は高々 50° であり、水平方向速度は加速状態にあり、同一落下時間における水平方向速度は、 N が大きいほど大きい。

その差は N の違いによる回転流体の円周方向速度の差に比べて小さい。この水平方向速度の最大値は、静止流体中での場合、 $80\sim 100$ (mm/s)程度であり、回転流体の円周方向速度は、たとえば、 $R=10$ (mm)の位置では $N=120$ (rpm)の場合、約 126 (mm/s)、 $N=30$ (rpm)の場合、約 37 (mm/s)であるので、 N が小さいほど $d\varphi/dt$ は水平方向速度の影響を受け易いことが分かる。また、 N が小さいほど R は小さく、同一落下時間における R の値は小さいため、長時間にわたって水平方向速度の影響を受ける。以上述べたことは、図7.53において、 N が小さいほど φ と t の関係を表わす曲線に、上に凸の領域が広く、しかも、より顕著に現われていることも分かる。

いっぽう、図7.52において、同一落下時間における R および R の値は、 N が大きいかほど大きくなる。これは、 N が大きいかほど $d\varphi/dt$ は大きく、線状体に作用する遠心力が大きくなるためである。また、鉛直面内での姿勢は高々 50° 程度であるので、 R は加速状態にあり、遠心力は R に比例するので、時間が経過するにつれて N による R の差は徐々に増大する。

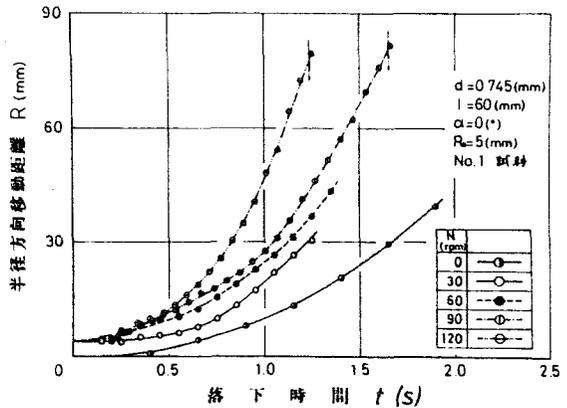


図 7.52 半径方向移動距離におよぼす円筒回転数の影響

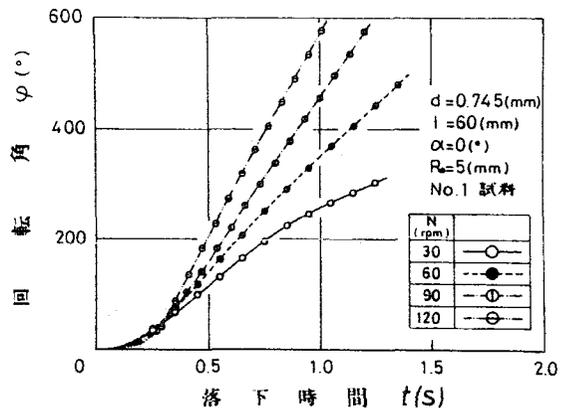


図 7.53 重心の回転角におよぼす円筒回転数の影響

なお、この図には、静止流体中での結果 ($N=0$) がプロットされている。静止流体中では、線状体には重力と浮力の差にもとづく外力および流体から受ける抗力のみが作用し、遠心力は働かないので、重心の水平方向速度 (回転流体中では R に相当する。) は、姿勢が除々に水平方向に回転しているため、ゆっくり加速されるが、回転流体中での場合と比較して非常に小さい。

つぎに、円筒回転数が R と Y の関係におよぼす影響を示す図 7.54 において、同一鉛直方向移動距離における R の値は、 N が大きいほど大きくなるのが分かる。図 7.55 から、同一落下時間における θ は、 N が大きいほど大きく、ここで、鉛直方向速度 \dot{Y} は落下開始直後の加速領域を除き、 θ が 90° に近づくにつれて単調に減少することを考慮すると、 N が大きいほど線状体が鉛直方向に移動するのに要する時間は長くなる。いっぽう、同一落下時間における R の値は、 N が大きいほど大きい。したがって、上述の結果になる。

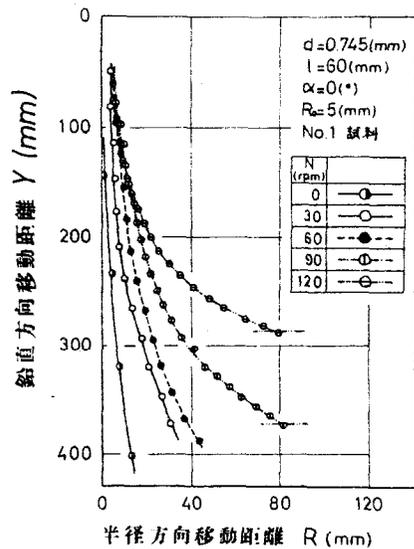


図 7.54 半径方向移動距離におよぼす円筒回転数の影響

また、静止流体中での場合、回転流体中で見られるような落下開始直後の急激な姿勢の変化はなく、姿勢は除々に水平方向に回転するため、鉛直方向により大きく加速され、 \dot{Y} は大きくなる。しかも、水平方向速度は小さいので、この曲線の接線勾配 dY/dR は、回転流体中での場合と比較して非常に大きい。

7.10.2 線状体の姿勢

鉛直面内での姿勢の変化を表わす図 7.55 において、線状体が

流れ中に入った瞬間に流体から受ける抗力は、 N が大きいほど線状体に対する流体の相対速度が大きいため大きくなる。したがって、落下開始直後の急激な姿勢の変化は、 N が大きいほど大きい。また、線状体がすべて流れ中に入った後の領域では、角速度 $d\theta/dt$ は N が大きいほど大きく、線状体が回転するのに要する時間は小さい。回転流体中では、線状体に遠心力にもとづく θ を増大させる向きの回転モーメントが働く。この回転モーメントに寄与する遠心力の成分は、遠心力の大きさが同じであっても、配向角 β および姿勢 θ により異なるため、遠心力が大きいからといって、かならずしも回転モーメントが大きいとは限らない。しかし、 N が大きいほど、線状体の重心の角速度および回転流体の中心からの距離が大きいため、円筒回転数の違いによる遠心力の差は非常に大きくなり、 β の違いがこの回転モーメントにおよぼす影響より大きくなり、その結果 $d\theta/dt$ は、 N が大きいほど大きくなったと考えられる。

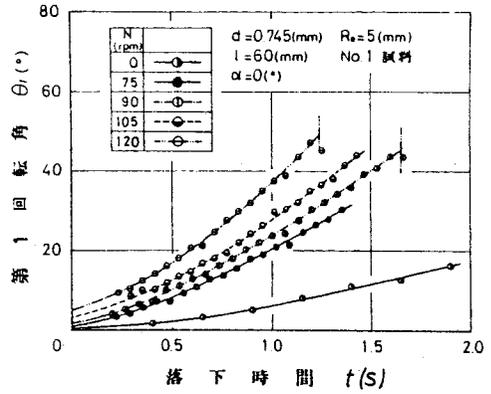


図7.55 姿勢におよぼす円筒回転数の影響

7.11 結 言

本章では，直線の線状体が単一で，回転流体中を自由落下する場合について実験的研究をおこない，落下軌跡，姿勢および配向の変化などの基本的運動特性を明らかにし，同時に，線状体の比重量，長さ，直径，初期角度，初期位置および円筒回転数が運動特性におよぼす影響を調べた。

得られた結果を要約すると，つぎの通りである。

- (1) 線状体は，流線に沿って運動を開始するが，その後，回転流体の半径方向へも運動し始める。したがって，線状体は，回転流体の中心軸回りの回転運動と半径方向への運動をおこないつつ落下する。また，鉛直面内での姿勢は徐々に水平方向に近づく。
- (2) 重心の半径方向速度は，落下開始後しばらくの間加速されるが，鉛直面内での姿勢が水平方向に近づくにつれて減速される。そして，水平な姿勢を保ったまま運動を続ける場合，ふたたび加速されるが，加速度は， θ_0 が小さい領域での場合より小さい。
- (3) 重心の角速度は， $\alpha=0^\circ$ の場合，落下開始後短時間のうちに回転流体の角速度より大きくなり，やがて，減速して回転流体の角速度とほぼ等しくなる。いっぽう， $\alpha=90^\circ$ の場合，徐々に加速されて回転流体の角速度に近づく。
- (4) 重心の半径方向移動距離 R および半径方向速度 V_r は，同一落下時間で比較すると，直径，比重量および円筒回転数が大きいほど大きくなる。また， $\alpha=0^\circ$ と $\alpha=90^\circ$ の場合を比べると， $\alpha=0^\circ$ の方が大きい。いっぽう，長さの影響を考察する場

合、鉛直面内での姿勢の変化におよぼす長さの影響を考慮する必要があるが、傾向としては、長さの小さい線状体の姿勢が水平になるまでの領域では、長さが小さいほど R は大きくなり、長さの小さい線状体が半径方向に加速されている領域では、長さが小さいほど R は大きくなる。また、初期位置が異なると、落下開始直後の急激な姿勢の変化に差が生ずるため、円筒回転数、長さなどにより、 R におよぼす初期位置の影響が異なる。

(5) 重心の角速度 $d\varphi/dt$ は、落下開始後しばらくの間、長さが小さいほど、また、直径が大きいくほど大きくなる。いっぽう、比重量の影響はほとんど見られず、初期位置の影響は、円筒回転数、長さなどにより異なる。また、円筒回転数が大きいほど、 $d\varphi/dt$ は大きい。が、 $d\varphi/dt$ が回転流体の角速度より大きい領域において、両者の差は、円筒回転数が小さいほど大きく、しかも、より長い時間にわたってこの状態が続く。

(6) 同一鉛直方向移動距離における R の値は、円筒回転数が大きいほど大きく、また、長さが小さい線状体の姿勢が水平になるまでの領域では、長さが小さいほど大きくなる。いっぽう、 $\alpha=0^\circ$ と $\alpha=90^\circ$ の場合を比較すると、長さにより初期角度の影響が異なり、 $\alpha=90^\circ$ の方が R の値が大きくなる領域は、長さが大きくなるにつれて増大する。また、初期位置の影響は、円筒回転数、長さなどにより異なり、円筒回転数が小さく、しかも、長さが大きい場合には、初期位置が大きいほど $R-R_0$ の値は大きい。なお、直径および比重量の影響は明確に現われない。

(7) 鉛直面内での姿勢の変化には、初期位置の影響は明確に現われない。いっぽう、長さが小さいほど、直径、比重量およ

び円筒回転数が大きいほど，角速度は大きく，線状体が回転するのにかかる時間は短い。

(8) 線状体は，落下開始後円周方向に配向し始めるが， $d\varphi/dt$ が回転流体の角速度より大きくなるため，角速度 $d\beta_1/dt$ は徐々に減速され，配向角 β_1 は最大となる。その後も， $d\varphi/dt$ が回転流体の角速度に等しくなるまで β_1 は減少し，一定の配向角を保ったまま線状体はしばらく運動を続ける。そして，ふたたび円周方向へ配向し始める。ただし， $\alpha=90^\circ$ の場合， β_1 の減少は見られない。なお，線状体がいったん円周方向に配向した場合には，長時間にわたってこの状態が続く。線状体が一定の配向角を保ったまま運動を続ける時間は，直径，比重量が小さいほど長い。また，長さ，直径および比重量が小さいほど線状体は円周方向に配向し易い。

したがって，オープンエンド精紡機では，繊度および長さが小さい繊維ほど理想に近い状態でロータ内の滑壁に到達すると考えられる。

(9) 回転流体中で線状体が運動する場合，重心の半径方向速度および鉛直面内での姿勢の変化は，静止流体中での場合より大きい。

第8章 結 論

本論文は、繊維維のように細長比の大きい線状体の流体中における運動を理論的および実験的に明らかにし、線状体の流体力学的処理に対する指針を得るためにおこなった研究である。

本論文では、(1) 静止流体中、一様流れ中、矩形管内での十分に発達した流れ中、矩形管内での助走域、ノズル内流れ中および回転流体中を線状体が単一で運動する場合、(2) 静止流体中を線状体が複数あるいは集団で相互に干渉し合いながら運動する場合に対して、線状体の軌跡、速度および姿勢の変化などの基本的運動特性を明らかにし、あわせて諸要因の影響を調べた。

つぎに、本研究によって得られた結果を要約すると、

(1) 静止流体中を線状体が単一で落下する場合、水中では、線状体はほとんど鉛直方向に運動し始めるが、姿勢が徐々に水平方向に回転するにつれて、水平方向にも運動し始める。そして、鉛直方向に対する傾斜角が 40° から 50° の範囲内まで水平方向に加速され、その後、減速される。いっぽう、落下開始直後急激に鉛直方向に加速されるが、姿勢が水平方向に回転するにつれて減速される。このため、重心の軌跡は、鉛直方向に対する傾斜角が 60° から 65° の範囲内で変曲点をもつ曲線となり、最終的に姿勢は水平方向に漸近し、しかも、線状体は水平方向にはほとんど移動しなくなり、もっとも安定な水平姿勢を保ったまま鉛直方向に一定速度で落下する。なお、角速度は、鉛直方向に対する傾斜角が 10° から 20° の範囲内まで加速される。

線状体の比重量、長さ、直径および流体の温度は、軌跡の形、重心の速度および姿勢の変化に影響をおよぼし、初期角度の影響は、落下開始直後の急激な加速領域で見られるだけであ

り、その後の領域では、姿勢が同じであれば初期角度に関係なく運動状態は同一になる。

重心の速度におよぼす長さの影響は、鉛直方向に対する傾斜角が約 65° 以下の領域で現われ、水平方向速度、鉛直方向速度ともに長さが大きいほど大きく、比重量、直径および流体の温度の影響は、全領域で現われ、これらの値が大きいほど速度は大きくなる。さらに、長さが小さいほど、比重量、直径および流体の温度が大きいほど角速度は大きく、線状体が回転するのに要する時間は短いことが分かった。

線状体が空気中で運動する場合、姿勢が水平方向を中心にして減衰振動するので、水平方向の運動の向きが変わり、水平方向速度は0を中心にして減衰振動する。いっぽう、鉛直方向速度も変動しながら一定値に漸近する。したがって、重心の軌跡が減衰振動する。また、初期角度は、姿勢および重心の速度の変動周期には影響をおよぼさず、振幅に影響を与え、長さおよび直径は、周期と振幅の両方に影響をおよぼす。なお、空気中での場合、その比重量が小さいため、線状体に作用する抗力が小さいことが原因でこの現象が生じたと考えられる。すなわち、水中での場合、姿勢の変化は、減衰振動の中で抵抗力が大きい場合に相当し、空気中での場合、抵抗力が小さい場合に相当する。したがって、両者の姿勢の変化状態は異なり、水中では、振動することなくもっとも安定な水平姿勢に漸近するのに対し、空気中では、水平な姿勢を中心に振動しながら漸近する。

また、直線の線状体は、静止流体中では一平面内で運動すると考えて差支えなく、計算で得られた落下特性の傾向および諸要因の影響は実験結果とかなり一致した。

(2) 糸状体が単一で静止流体中を運動するとき、背後には軸方向に沿って発達する境界層と伴流が重なり合った流れの領域が発生し、さらに、後端から一對の自由渦が生ずる。また、重

心速度の軸に直角な方向成分を代表速度，直径を代表長さとするレイノルズ数が50程度を越えると，伴流は双子渦からカルマン渦へ変化し，流れ状態が大きく変わる。

線状体が複数で静止流体中を運動する場合，前方の線状体の運動に伴って発生する流れの影響を受けて，後方の線状体が姿勢および速度を大きく変えながら近づき，衝突し，差し抜くというように相対位置を時々刻々変化させ，相互に干渉し合いながら運動を続ける。また，初期角度が大きいほど，線状体が相互に影響をおよぼし合う度合が強くなり，しかも，長時間続き，初期位置での相対距離が大きい方が，落下開始直後の領域で後方の線状体を受ける前方の線状体の流れの影響が小さいため，最初の衝突までの時間は長く，前方の線状体のより先端に近い位置に衝突する傾向がある。この傾向は，初期位置で線状体の後端部が流れに入る場合にも見られる。また，直径が大きい方が，後方の線状体の角速度および速度が急激に変化し，衝突から衝突までの時間は短い。これは，直径が大きい場合発生するカルマン渦の影響によるものである。線状体本数3の場合，初期位置でもっとも後方に位置する線状体は，2本の線状体の後方に発生している流れの影響を同時に受けるときがあり，その運動はいっそう複雑になる。さらに，複数で運動する場合，流れの影響を受けて姿勢が鉛直方向に回転している領域では，水平方向速度は単一で運動する場合より小さく，逆に姿勢が水平方向に回転している領域では大きくなる。いっほう，鉛直方向速度は，流れの影響を受けている領域ではつねに大きいことが分かった。

線状体が100本程度集団で連続的に自由落下する場合，線状体は線状体群の後方に発生している流れの影響を受けるため，その平均的な運動状態は，単一で運動する場合と一致しない。また，初期角度が大きくなるにつれて，最終落下位置での線状体の配向は良くなる。

(3) 線状体が単一で一様流れ中を運動する場合、線状体は、鉛直方向に対してある角度をもって運動し始め、すぐに重心の軌跡は極大になる。その後、運動方向は徐々に水平方向に近づくが、やがて、軌跡はふたたび変曲点をもち、運動方向は鉛直方向に回転し始める。そして、最終的に姿勢は水平方向に漸近し、線状体はもっとも安定な水平姿勢を保ったまま、鉛直方向には静止流体中での場合と同一の一定速度で落下し、水平方向には流速と同一速度で移動する。

また、運動特性に流速の影響が現われるのは、運動開始直後の鉛直方向に対する傾斜角の小さい領域（長さ30(mm)の場合、 15° 以下の領域）だけであり、これ以上の領域では、流れに対する線状体の相対的な並進運動は流速に関係なく同じになる。このため、線状体の回転運動も流速の影響を受けない。これは、流速が場所的に変化しないことが原因している。さらに、流速の影響は長さが小さいほど顕著に現われる。

(4) 線状体が単一で矩形管内での十分に発達した流れ中を運動する場合、管路中央部では流速の変化がわづかであるので、落下軌跡の変化状態は一様流れ中での場合と一致するが、流速の変化が大きい壁面近くの領域、とくに底面近くの領域では運動方向が急激に鉛直方向に近づく現象が見られる。さらに、長さが大きい場合、線状体は鉛直方向に回転する。また、初期角度は、線状体が運動をおこなう位置のみならず軌跡の形にも影響をおよぼす。

線状体が壁面近くの領域で運動するとき、その運動特性、とくに水平方向速度および姿勢の変化は、一様流れ中での場合と異なる。諸要因の影響は、一様流れ中での場合より顕著に現われるが、管路の高さが異なると流速の変化が大きい底面近くの領域に到達したときの線状体の姿勢が異なるので、要因の影響を考察する場合、管路の高さを考慮する必要がある。

(5) 線状体が単一で矩形管内での助走域を運動する場合、助走域での流れ状態は、一様流れから十分に発達した流れへ移行する途中の段階であるので、落下軌跡は両者の落下軌跡を合わせたような形になる。また、流速の影響も両者の中間的なものになる。なお、底面近くの領域で線状体が鉛直方向に回転する現象が、長さ30(mm)の場合見られ、60(mm)の場合現われず、十分に発達した流れ中での結果と逆になったが、これは管路高さとの関連によるものである。

また、重心の速度および姿勢の変化状態も、一様流れ中での場合と十分に発達した流れ中での場合の間に位置し、流れの発達程度が大きくなるにつれて十分に発達した流れ中での場合へ近づく。さらに、平均流速により流れの発達程度が異なり、その影響が流速の影響に含まれるため、他の流れ中での場合より流速の影響が現われにくい。なお、ここで用いた計算条件のもとでは、流れの発達程度が比較的小さいため、運動開始直後の領域で長さが大きい方が角速度が大きくなる現象が見られた。

実験では、管内の流れを乱さないようにするため、落下装置を管路上面に隣接して取付けているので、線状体が落下装置から流れ中に入るとき、急激に流れの向きに回転する。これに対し、計算では、線状体がすべて流れ中に入る位置に初期位置を設定した。したがって、実験と計算で初期条件が異なることを考慮すると、助走域での運動特性および諸要因の影響は実験結果と計算結果で一致した。

(6) 線状体が単一でノズル内流れ中を運動する場合、運動開始直後に運動方向がいったん鉛直方向に近づくが、その後の領域では流れが加速している影響を受け、底面に到達するまで運動方向は水平方向に近づく。しかし、線状体が水平な姿勢に近くなるまでに移動する距離が小さい場合、その軌跡にはいくつかの変曲点が見られる。この現象は長さが小さいほど現われ易

い。また、流速の影響は一様流れ中での場合より顕著に現われ、初期角度およびノズルの傾きも落下軌跡に影響をおよぼす。

ノズル内流れ中での重心速度の変化の特徴は、水平方向にいったん減速されるが水平な姿勢になる前にふたたび加速されることおよびこの現象に伴ない鉛直方向の減速がふたたび増大することであり、流速、長さ、初期角度の影響は他の流れ中での場合より顕著に現われ、ノズルの傾きも影響をおよぼす。さらに、4種類の流れ中での結果を総合して、流れの加速程度が大きいほど、水平方向加速度の減少が低下する領域では同一姿勢における水平方向加速度の値は大きく、鉛直方向加速度が増大し始めてから後の領域ではこの値は小さいことが分かった。

ノズルの上方で線状体が水平方向にふたたび加速される場合、水平になる前に角速度がふたたび加速されることがノズル内流れ中での特徴である。ノズルの傾きは流れの加速程度に影響を与えるので、これが姿勢の変化におよぼす影響は流速の影響と同じになる。また、流れに対する線状体の相対的な並進運動が初期角度にかかわらずほぼ同じになるので、線状体の回転運動も初期角度の影響をほとんど受けない。

線状体が水平な姿勢に近くなるまでに移動する距離が小さい場合、軌跡の変動が大きくなることおよび重心の速度におよぼす流速、長さ、初期角度の影響は、矩形管内の助走域での場合より顕著に現われることが実験と計算の両面から確かめられた。また、角速度の変動に伴ない重心の速度が変動する状態を理論式を用いて調べた結果、その変動状態は実験結果と一致した。さらに、変動を除いた平均的な運動特性におよぼす諸要因の影響は両者で一致した。実験結果と計算結果の違いは、実験では、姿勢は矩形管内流れ中での姿勢の変化を中心に、減衰振動しながら水平方向に近づき、また、姿勢の変化に応じて重心の速度も変動するため、軌跡にはいくつかの変曲点が見られ、さらに、ノズル上方で線状体が水平な姿勢に近づく場合、姿

勢は水平方向を中心にして減衰振動するのに対し、計算では、これらの変化にほとんど変動が現われないことである。なお、実験で、線状体を流れの方向に対して傾け水平な姿勢で落下させた場合、その姿勢は、鉛直面内では水平方向を中心に振動し、水平面内では流れの方向へ回転する現象と一定の姿勢を保ったまま運動する現象が交互に現われ、除々に流れの方向へ近づくことが分かった。

以上のように、ノズル内流れ中での運動特性が他の流れ中での場合と異なるのは、流れが加速し続けていることおよびその方向が場所的に変化することに起因する。

(7) 線状体が単一で回転流体中を運動する場合、線状体は、流線に沿って運動を開始するが、その後、回転流体の半径方向へも運動し始める。そして、姿勢を徐々に水平方向に変化させ、回転流体の中心軸回りの回転運動と半径方向への運動をおこないつつながら、その重心はらせん状の曲線を描いて落下する。また、重心の半径方向速度は運動開始後しばらくの間加速されるが、姿勢が水平方向に近づくにつれて減速され、水平な姿勢を保ったまま運動を続ける場合、ふたたび加速される。しかし、加速度は、鉛直方向に対する傾斜角が小さい領域での場合より小さい。いっぽう、重心の角速度は、初期角度が 0° の場合、運動開始後短時間のうちに回転流体の角速度より大きくなり、やがて、減速して回転流体の角速度にほぼ等しくなる。これに対し、初期角度が 90° の場合、除々に加速され回転流体の角速度に近づくことが分かった。

重心の半径方向移動距離および半径方向速度は、同一落下時間で比較すると、直径、比重量および円筒回転数が大きいほど大きく、初期角度 0° の方が 90° の場合より大きい。いっぽう、長さの小さい線状体の姿勢が水平になるまでの領域では、長さが小さいほど半径方向移動距離は大きくなり、半径方向に加速

されている領域では、長さが小さいほど半径方向速度は大きくなる。重心の角速度は、運動開始後しばらくの間、長さが小さいほど、直径が大きいくほど大きくなり、比重量の影響はほとんど見られない。いっぽう、重心の角速度が回転流体の角速度より大きい領域において、両者の差は円筒回転数が小さいほど大きく、しかも、より長い時間この状態が続く。さらに、長さが小さいほど、直径、比重量および円筒回転数が大きいほど鉛直面内での姿勢の変化は大きくなる。運動特性におよぼす初期位置の影響は明確に現われない。

線状体は、運動開始後円周方向に配向し始めるが、重心の角速度が回転流体の角速度より大きくなるため、配向の速度は減速され、やがて、半径方向へ配向し始める。この状態は、重心の角速度が回転流体の角速度に等しくなるまで続き、その後、一定の配向角を保ったまま線状体はしばらく運動を続け、ふたたび円周方向へ配向し始める。線状体がいったん円周方向へ配向した場合、長時間この状態が続く。また、長さ、直径および比重量が小さいほど線状体は円周方向に配向し易い。

回転流体中で線状体が運動する場合、線状体には遠心力が作用するので、重心の半径方向速度および鉛直面内での姿勢の変化は、静止流体中での場合より大きい。

参 考 文 献

1. 守野, 塩見, 柳川, 繊維機械学会論文集, 28, T591 (1965)
2. 守野, 塩見, 柳川, 繊維機械学会論文集, 18, T596 (1965)
3. J. Ripka, 海外繊維技術文献集, 19, 448 (1969)
4. B. Edberg, "Studies in Modern Yarn Production", P96, Textile Institute (1968)
5. L. Bangert, P. Sagdeo, *Textil. Res. J.*, __, 773 (1977)
6. 守野, 塩見, 繊維機械学会第29回年次大会講演論文集, P3 (昭51)
7. 塩見, 博士論文, "気流による線状体の分離・輸送に関する研究", P119 (昭51)
8. L. Feldman, *Textil. Res. J.*, 36, 809 (1966)
9. 福田, 繊維工学, 20, P856 (1967)
10. 黒崎, 近田, 伊藤, 繊維学会誌, 25, P133 (1969)
11. 美馬, 中村, 日本複合材料学会誌, 2, 80 (1976)
12. 鈴木, 小林, 繊維機械学会論文集, 21, T1 (1968)
13. H. Lamb, *Hydrodynamics*, 6th ed., P160, Cambridge University Press (1932)
14. H. Lamb, *Hydrodynamics*, 6th ed., P614, Cambridge University Press, (1932)
15. 今井, 科学, 28, P110 (1958)
16. S. Goldstein, *Modern Developments in Fluid Dynamics*, Vol. II, P425 (1965)
17. Y. Choo, M. Caserella, *J. Hydronautics*, 5, 126 (1971)
18. H. Squire, *Modern Developments in Fluid Dynamics*, High Speed Flow, Vol. II, P795, Oxford University Press, (1953)
19. 今井, 流体力学(前編), P2, 裳華房
20. L. Han, *J. Appl. Mech.*, 27, 403 (1960)

21. E. Sparrow, *J. Basic Engng.*, 89, 116 (1967)
22. H. Rouse, *Advanced Mechanics of Fluids*, P211 (1959)

記 号

- A : x 方向の並進運動に関する全エネルギーの係数
 A_1 : x 方向の並進運動に関する流体のエネルギーの係数
 A_2 : x 方向の並進運動に関する物体自身のエネルギーの係数
 a : 渦の間隔, 円柱の半径
 B : y 方向の並進運動に関する全エネルギーの係数
 B_1 : y 方向の並進運動に関する流体のエネルギーの係数
 B_2 : y 方向の並進運動に関する物体自身のエネルギーの係数
 b : 渦の幅
 C_d : 抗力係数
 D_d : 線状体端面に作用する抗力
 $D_{d,e1}$: 線状体先端面に作用する抗力
 $D_{d,e2}$: 線状体後端面に作用する抗力
 d : 線状体の直径
 F_g : 重力と浮力の差による外力
 g : 重力加速度
 H_0 : 長さの基準になる目印の間隔
 i : ストロボ撮影された線状体の順番, 要素に付けた番号
 j : 線状体の両端を表わす添字
 L : 線状体端点の被写体距離, 線状体の後端部から渦方向に沿って測った距離
 L_0 : 初期位置での相対距離
 L_1 : 初期平面の被写体距離
 l : 線状体の長さ
 l_1 : 物体の表面における外向き法線の x 方向の方向余弦
 l_{cx} : 写真面上での x 方向補正值
 l_{cy} : 写真面上での y 方向補正值
 m : 物体の質量
 m_1 : 物体の表面における外向き法線の y 方向の方向余弦
 N : 円筒回転数
 N : 線状体に作用する回転モーメント

- Nu : ヌッセルト数
 n : 物体の表面における外向き法線 , 流体の空気に対する屈折率
 n_x : 物体の表面における外向き法線の x 方向の方向余弦
 P_r : プラントル数
 ρ : z 軸回りの角速度
 ϕ : y 軸回りの角速度
 R : z 軸回りの回転運動に関する全エネルギーの係数 , 線状体の任意の位置とノズル交点の距離 , 重心の半径方向移動距離
 \dot{R} : 重心の半径方向速度
 R_0 : 回転流体中における初期位置
 R_1 : z 軸回りの回転運動に関する流体のエネルギーの係数
 R_2 : z 軸回りの回転運動に関する物体自身のエネルギーの係数
 Re : レイノルズ数
 Re_n : 線状体の軸に直角な方向のレイノルズ数
 Re_t : 線状体の軸方向のレイノルズ数
 γ : x 軸回りの角速度
 S : ストロボ発光数
 T : 全運動エネルギー
 T_1 : 流体の運動エネルギー
 T_2 : 物体自身の運動エネルギー
 T_{1z} : 線状体が z 方向に運動することにより流体に与える運動エネルギー
 T_{1y} : 線状体が y 方向に運動することにより流体に与える運動エネルギー
 T_{1z} : 線状体が z 軸回りに回転運動することにより流体に与える運動エネルギー
 T_w : 水温
 t : 落下時間

- U : 重心の速度 , 管内平均流速
 U_1 : 軸方向に沿って分布する流速の軸に直角な方向成分の
平均値
 U_2 : 流速の軸に直角な方向成分の重心回りの一次モーメント
 U_r : 線状体に対する流体の相対速度の軸に直角な方向成分
 u : 座標系原点の並進速度の x 方向成分 , 管内流速
 u_i : i 番目の要素の重心の軸に直角な方向速度
 \bar{U} : 両端面での流速の軸方向成分の平均値
 \bar{U}_r : 線状体に対する流体の相対速度の軸方向成分
 v : 座標系原点の並進速度の y 方向成分 , 回転円筒中での
円周方向の流速
 w : 線状体の任意の位置での流速 , 一様流れの流速
 w : 座標系原点の並進速度の z 方向成分
 X : 重心の水平方向移動距離
 \dot{X} : 重心の水平方向速度
 \ddot{X} : 重心の水平方向加速度
 X : 線状体に作用する外力の x 方向成分
 \bar{X} : 重心の水平方向移動距離の平均値
 x : 物体に固定した運動座標系 , 実験装置に設定した座標系
 x_{co} : 最終落下位置での重心の座標
 Y : 重心の鉛直方向移動距離
 \dot{Y} : 重心の鉛直方向速度
 \ddot{Y} : 重心の鉛直方向加速度
 Y : 線状体に作用する外力の y 方向成分
 Y_0 : 管内流れ中における初期位置
 z : 物体に固定した運動座標系 , 実験装置に設定した座標系
 z_i : i 番目の要素の重心位置
 Z : 管路幅方向の座標
 z : 物体に固定した運動座標系 , 実験装置に設定した座標系
 z_{co} : 最終落下位置での重心の位置

- D_x : 軸に直角な方向に作用する抗力
 D_z : 軸方向に作用する摩擦抗力
 x' : 写真面上の読取り座標系
 y' : 写真面上の読取り座標系
 α : 初期角度
 β : 配向角, 線状体の運動方向, 初期位置における水平面内での線状体の軸方向と流れ方向のなす角度, ノズル上面と底面のなす角度, 配向度
 $\bar{\beta}$: 配向角の平均値
 β_1 : 配向角
 β_f : 自由渦の方向
 γ : 矩形管の縦横比, ノズルの傾き
 γ_b : 線状体の比重量
 Δl : 微小要素の長さ
 Δt : 落下軌跡における線状体の時間間隔
 η : 管内での鉛直方向の位置を表わす座標
 θ : 回転角
 θ_1 : 第1回転角
 θ_2 : 第2回転角
 θ_f : 流れ方向の水平方向に対する角度
 ξ : 管内での水平方向の位置を表わす座標
 ρ : 流体の比質量
 ρ_b : 線状体の比質量
 ν : 動粘性係数
 σ_x : 重心の水平方向移動距離の標準偏差
 σ_β : 配向角の標準偏差
 ϕ : 速度ポテンシャル
 φ : 水平面内での線状体の軸方向と流れ方向のなす角度, 回転流体中心軸回りの重心の回転角

謝

辞

本研究は、大阪大学工学部機械工学教室においておこなわれたものである。

本研究を遂行するにあたり、終始御懇篤なる御指導と御鞭撻を賜わった大阪大学 堀川 明教授，ならびに御校閲いただいた大阪大学 村田 暹教授，森川敬信教授に厚く御礼申し上げます。

また，しばしば有益な御助言を賜わりました大阪大学 中村喜代次助手，山田国広助手，矢井田修助手をはじめとする堀川研究室一同の方々に深く感謝いたします。

さらに，本研究をおこなうにあたり協力くださった当時大阪大学工学部の学生であった，景山隆義，飯塚勉，柴田豊，山路克彦，西谷憲三，高見昌夫，高田直人，高橋直樹，藤下政克ならびに東洋紡の研究生であった，上島徹の諸氏に感謝いたします。